

# 奇譚クラブ

● 新しい風俗文獻誌



昭和四十五年八月二十日印刷 昭和四十五年九月一日発行 九月分（第二十四巻第十号）毎月一回 日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大島特別郵便承認証第二〇号



作 鬼 六 団



決 定 版



● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

|| 客号「花決定版」 || 定価一、〇〇〇円 (送50円) ||

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発行となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

／＼内容主要見出し／＼

第一章 発端 第二章 恐ろしい探偵 第三章 美人の脱走 第四章 華麗な来客 第五章 救済者の失 第六章 餓魔の好 第七章 悪魔の地下 第八章 恐怖の地 第九章 淫蛇の執 第十章 美姉妹の危 第十一章 色事子の受 第十二章 美津子の教 第十三章 落室の秘密 第十四章 脱走の失 第十五章 華やかな宴 第十六章 地獄屋敷へ 第十七章 翻弄される 第十八章 千万円の身代金

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すさまじいショーの展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい儀の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。〒558 暁出版株式会社宛







# THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisynpan

Osaka Japan



9月号 ¥350



# ☆北欧系の金髪碧眼の美女を緊縛する

六月号誌上にて、うら若き白人の女性を「純日本式縛り」にて縛り上げたルポ入金髪碧眼の美女を縛るVを発売しました。鮮明な写真に、紙に焼付けた極めの要望に、たえらるため、特にシアの嬢の許しを得て分譲することにしました。文獻的に見ても非常に珍しい資料だと思ひます。お打ちに珍しき資料中、お早い目にお申し込み下さい。お申込は大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛前金にて願います。

## 首縄高手 小手縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいきV  
生れて初めて縛られる首縄高手。小手縛りの全裸の肢体を言われるままに動かし、床の間の飾り物のように白い肌を晒すのだった。

## 縄の痛さに耐える

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいめV  
ぎゅうぎゅうと力まかせに締めつける縄は柔肌に驚くほど喰い込んでは、その苦痛に耐えようとする彼女の表情に一段と迫力を増す。

## 股間縛は凄く締る

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいあV  
きびしい高小手縛りに加えて首縄、更に埋れるような股間縛りで肌を割り不自然な姿態を強要すれば美しい顔面が忽ち紅潮する。

## 卓上の裸身は躍る

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいてV  
テーブルの固い板の上に正座させられた白人の美女が縦横に縄を掛けられて二つ折りになっているのを正面側面背面から狙った。

## 両手吊りの全裸像

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいたV  
シーラ嬢の美しい容貌とすらりと伸びた肢体とが両手を吊られて拘束されることよって諦めきった被虐美を最高に発揮している。

## 投げだした被縛体

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいまV  
縛られた彼女の心の中にマゾの芽が芽ばえているかどうかかわからないが、全裸で縛られたこのポーズの中に諦めきった相が見える。

## 麻縄は女体を裂く

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいゆV  
ドス黒い麻縄は情容赦なく白肌に埋まり青い目を曇らせて、この異様な緊縛に耐えようとする。

## 縛られるのはいや

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいせV  
つづらな青いひとみを見開いて何をするといいと言いたげに責手を見る目には可憐な拒否がある。

## 私の裸を見ないで

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいしV  
多分彼女は今まで人前で裸の肌を晒したことがないだろうに、今は後手に縛られて前をかくすべさえなく喘ぎ悶えるだけである。

## 日本式縛りの痛さ

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいそV  
すらりと伸びた長い脚、しかし今は徒らな足掻きを見せるに過ぎない。日本式縛りの厳しさが今こそ彼女の骨身にこたえるのだ。

## 白人をいたぶる手

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいやV  
責めのイケニエとなった哀れな彼女は悪魔の触手によって身動きも出来ない縛られの肢体をさんざんに、いたぶられるのであった。

## 金髪美女も台なし

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいもV  
房々とした金髪、格好のよい高い鼻、平常は男性を尻目に高慢だったか知らないが、このように縛られると裸を羞らう哀れな女だ。

## 被虐の表情を狙う

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいむV  
高小手乳房縛り首縄に責めあげたシーラを様々にいじめて其の表情をアップで狙いをつけた。

## 美しき緊縛の姿

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいけV  
彼女の顔の美しさと肢体の美しさを縄を用いることによって、このように最大限にまで高めることが出来たのは大成功であると思う。

## 逆エビ責めの外人

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいひV  
長い足を逆に折り曲げてエビ縛りにすれば流石にスタイルの良さを誇るだけあって、まことに優美な肢体を輝くばかりに開陳した。

## 雁字搦目で椅子に

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいえV  
あるだけの縄を使ってシーラの白い肌に狂ったように掛けた結末が、このよう余りにも日本的な縛りとポーズになっってしまった。

## 落花狼藉のしとね

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号AいうV  
ビール瓶、コップ、食べ散らかした寿司の器、その中で麻縄で縛られた彼女は疲れきった全裸体を長々とびたように横たえた。



## 徹底の肅自誌本

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で  
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
 として編集しておりますが、青少年の保護  
 育成に関する条例には抵触しないよう、十  
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減  
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの  
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
 めの努力はいたしません。



## 奇譚クラブ

△第二四巻 第十号・通刊第二七〇号▽

(昭和四十五年) 九月号 目次

△本 文▽

扉で一言『なぜにあなたは?』……………越間えつ子……………(9)

緊縛モデルの素顔『据膳喰うは男の恥』……………塚本 鉄三……………(10)

私の部分的「ストリップ小屋左右前後」……………松原 干次……………(22)

懸賞入選創作「山の怪・犬」……………山台 次郎……………(24)

告白「白い肌への劣等感」……………清水 民子……………(34)

創作『恥(ちじょく)辱』……………林 たけし……………(36)

女責め図絵の系譜 煙管と女に想う……………南 彦造……………(44)

連載小説『大噴火』(第二十四回)……………千葉 青鬼……………(46)

運転手は語る「或る日突然に」……………大場玄一郎……………(54)

薔薇と鎖の日々「悪魔退治」……………渋谷 俊彦……………(59)

連載・Mの傾斜「壺中の園」(5)……………真砂十四郎……………(62)

男マソ映画の夢想「SMフィルム小案」……………松山 壮吉……………(72)

被虐の旅シリーズ 求める人……………由利美千子……………(76)

鈴川露子さんへ 紫のスカーフ……………舟山 和夫……………(87)



# 奇クサロン

(232)

一盗二婢三妾四妻

武部 要

夫婦生活に於けるSM願望と期待

東京ET生

サロン楽我記 第七十五回

辻村 隆

イメージ画『恍惚境』

宮城 昌子

提案小説『花と蛇』を中心として

忍頂寺 譲

イメージ画『芳香』

出門 順

読後感『読ませた』8月号

丸鬼好太郎

プレイ・レポやったぜセニョーリー

阪東 太郎

編集部だより

編集部

妊婦マニアの皆様へ

千部 好夫

読者投稿 覆面のなかの痴態

石田 好司

アア、またも失敗「口説き」

青井 松造

最近の縛り映画

嵯峨美也子

妊婦腹を晒したい私

佐野みさ子

我が主観 縛りの美学 (三)

ロマン派生

イメージ画『お座敷リンゲのライバル』

室井亜砂路

イメージ画『女肌の激突』

椿 寿郎

ゴムマントの舞

梅川 幸子

体験記 注腸の記録

間 長太

拷問場面の思い出

早木 夢二

イメージ画『垂涎の獲物』

岡 たかし

演劇通信『奴隷』の迫真演技

和田 平助

イメージ画『初夏の幻想』

小川 茂正

連載・アブ紳士行状記「M派交友録」(9) 鬼山 絢策 (90)

サディズムは「S小説へ一言」 前原 浩一 (100)

SMカメラ・ハント 谷山久美子の巻

「マゾヒスチック・アニマル」 辻村 隆 (102)

告白「緊縛人生」 早木 夢二 (135)

アパートの檻(後)「美囚の反撃」 保藤 久人 (136)

懸賞入選小説「奇病結婚」 牧 麗子 (150)

連載・青春の陥穽 客ならぬ客 芳野 眉美 (166)

妻は相撲う 好敵手発見 椿 寿郎 (172)

連載小説「花と蛇」 統篇第六十六回 団 鬼六 (176)

セミ告白 パンティ・マスク 座頭 孝司 (188)

空想派の見たSM感 隅田 潔 (190)

蒐集ものがたり「珍画」「珍本」「珍写真」 斎藤 夜居 (192)

創作Ⅱ丸木氏の女 大江 草子 (202)

観劇レポ 残虐地獄絵ショー 柴 利好 (207)

愛飲派小説「処刑の部屋」 浅羽やすし (210)

体験告白「あなる・せつくす」 長谷田亀治 (224)

我が性の開花「黒い幻影」 麒麟 欧二 (226)

読者通信 編集部選 (252)

読者ギャラリー「倒錯の情痴」岡 たかし・「いぬ」春川ナミオ

「誘惑」室井亜砂路

目次カット「衣替え」京 伊木留・扉カット「衣裳簞笥」室井亜砂路



△強烈な被虐女性▽

川路むら子子の狂態

本誌二月号のカメラハントで辻村氏もあつと驚いた典型的なM女性川路むら子さんの要望によって彼女のあらゆる被虐の狂態を再び刻明に描写し、ここにファンの手に元に提供することにします。

股間縛りにうめく

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

一糸もまとわぬ裸身に只悪魔のような執拗な縄目だけが柔肌をじわじわと痛めつけてやまない。

羞恥責めに泣く女

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

如何に被虐を求めているとはいへ余りのことに泣き叫ぶのか、それとも悦びに泣いているのか？

妖気溢れる開股責

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

ねっとり脂肪を浮かした素足に縄をからませて、左右に引き開けば忽ち妖気が充満してくる。

全裸縛りの引廻し

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

縄尻をとられて追いついては、うしろも責め手の意のままに、ど

臀部晒し浣腸責め

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

後手に縛られたまま、臀部を高く持ち上げて肛門を晒せば恐ろしい浣腸器が近々と迫ってくる。

露出した全裸肢体

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

諦めきつた表情で若々しい肢体をマニアの眼前にあらわした。

両足挙げ羞恥責め

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

自分の顔面より上に両足を開いて挙げさせられた姿態をかくすべもなく身悶えして耐える。

壯絶臀部責の妙技

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

ありきたりのM女性であつたものの、このような責めは許容しないものであるが彼女はやはり違つた。

悶悦海老縛り地獄

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

身体が二つ折りになった苦痛もさることながら羞恥の個所があからさまになる無防備感はいどい

片足吊りの全裸像

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

不安定な片足吊りで全身を舐めるように見られる羞しい苦痛。

再びむら子子の狂態

本誌五月号で塚本鉄三のペンで八片えくぼのマリアで再登場した川路むら子は耐え難い被虐の妄想に馳せられて三度、四度、鮮鋭なレズの前で、その緊縛の裸身を晒したものであつた。お申込みは代金同封の上、大阪市阿倍野局私書箱第14号、天星社宛へ、どうぞ。

開股責と強烈縛り

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

横臥に膝を棒に開股縛りにしたり、裸縛りなどむら子好みの責め。

緊縛と鼻責め悦楽

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

身動き出来ぬまで縛られたむら子の鼻を煙草、ドライバ、手指などに徹底的にいじめぬく。

トイレの排泄縛り

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

全裸で後手に縛られたむら子をトイレに追い込んで無理矢理排泄させるところをスナップする。

逆エビ責にあえぐ

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

縄を用いて逆エビ縛り責め、抜けば流石のむら子も「痛い」と悲鳴を上げて泣く。

棒責めの全裸女体

椅子責でいためる

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

豆絞りの猿轡以外、一糸もまとわぬ女体に厳しい縄縛り、棒を使つて強烈に責めて激しく悶えさす。

柱に縛る全裸女体

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

椅子を使つたグルグル巻きで乱れた髪を縛られ転落の恐怖に激しく悲鳴を放つむら子の妖しい顔。

後手縛り顔面玩弄

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

部屋中央にある柱に全裸のままの視線を全身に浴びるのだ。

両手挙げ縛り媚態

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

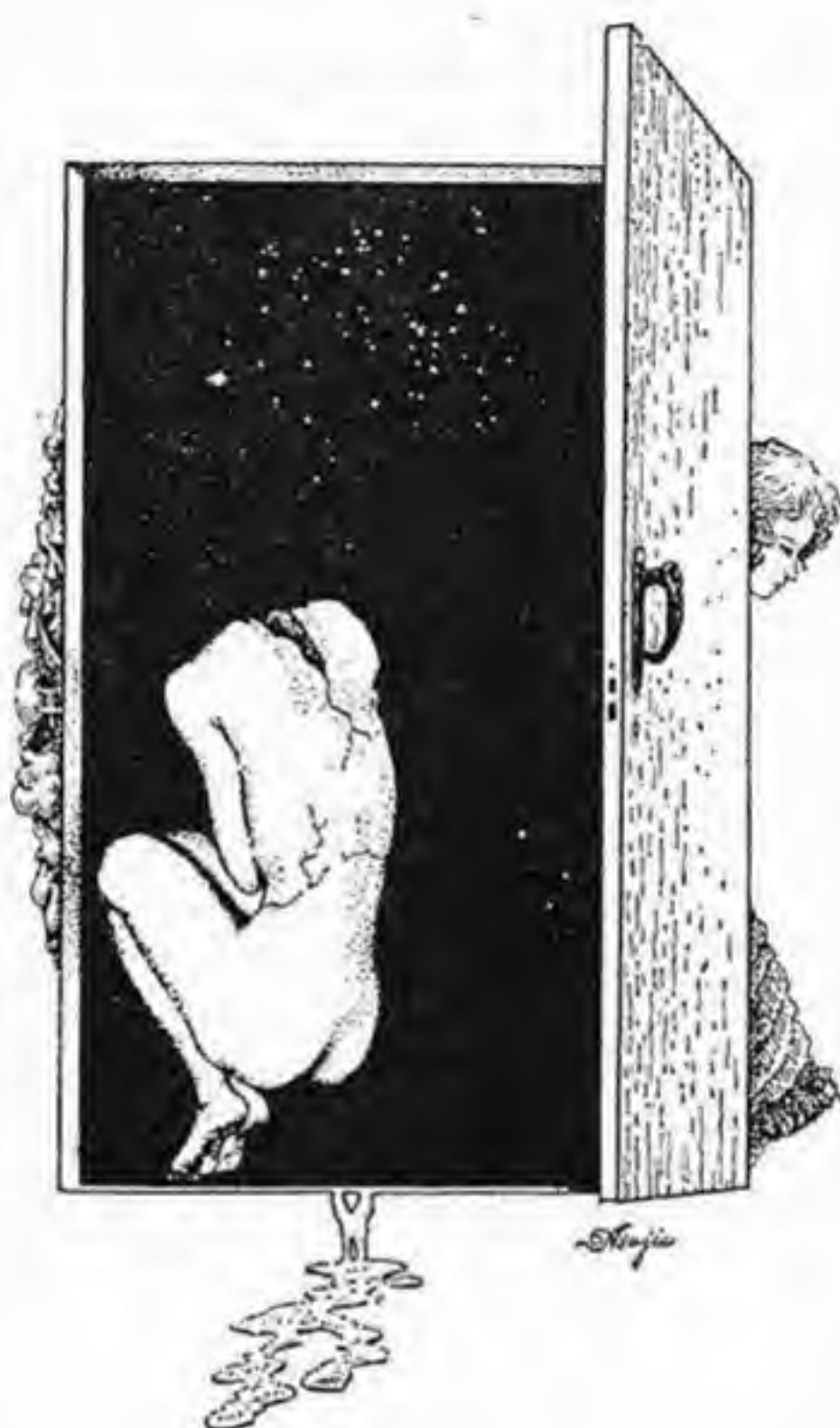
境をさしよつて悦として悦楽の擱んでいたぶり続ける悪魔の触手

悦楽責めアツプ集

大手札三枚一組 略号△〇〇円  
川路むら子 略号△〇〇円

柱と棒利用の開股責めを初め、など柱縛り棒責め、両手挙げ責め





室井亜砂路・画

なぜに、あなたは？

なぜにあなたは、私を縛るの。私が可愛いから縛るのだと言っておられた、あなたの言葉って、ほんとうかしら。

私は縛られるのって、いや。だって縛られると、私ははじめになるのだから。ほんとうに私が可愛かったら、縛らないで、お願い。もしもあなたが、私を縛らなければ、あなたはいい人だって思うわ。ね、お願い、私を縛らないで。

なぜにあなたは、私を縛るの。私が美しいから縛るのだって言うておられたあなたの言葉って、ほんとうかしら。

もしも、私が縛られることによって、一層美しくなるのだったら、私は進んであなたに縛られてみてもいいのよ。

痛いのも、はじめな気持ちになるのも辛抱して、私はあなたに喜んで縛られてみようかしら。へんな私――。

一本の縄が、こんなに私の気持をかき乱すなんて、ほんとうに不思議だわ。あなたって、とうとう一本の縄で、こ

んなに私の心を握ってしまったのネ。ね、お願い、私を思いつき縛って。

私はあなたのおっしゃる通り、縛られた美しい身体を、あなたの目の前にさらしてみせるワ。ねエ、いいでしょう？ 私をやさしく縛って。お願い。

(京都・越間えつ子)





△緊縛モデルの素顔▽ . . . . .

# 据<sup>すえ</sup>膳<sup>ぜん</sup>喰<sup>く</sup>うは男<sup>おとこ</sup>の恥<sup>はじ</sup>

塚<sup>つか</sup> 本<sup>もと</sup> 鉄<sup>てつ</sup> 三<sup>ぞう</sup>

私が新聞社のカメラマンをしていた頃、偶然知り合った友人に広告代理店のセールスをやっている沼田健児という男がある。

バックにエヤーブラッシをかけた写真の製版効果を見るため、私は製版部を訪れていたのだが、製版工場のツンと鼻を刺す酸っぱい臭いに耐えかねて、ベランダへ出ていた。

鉄製のベンチに腰を下ろして、ぼやっと霞んだ様なスモッグの街並みを眺めていた時、「やあ、貴方もお待ちですか」

人なつこく言葉を掛けてきた男が沼田健児

であった。

「私はこういう者ですが——」

抜目なく差し出した名刺には、アサヒ広告株式会社営業部と書かれてあった。新聞広告の凸版の紙型を貰いに来たのだが、しまったところかわからないので探して貰っているのだと言った。

私も彼につられて名刺を交換したのだが、彼の話し上手についベンチに並んで腰かけたまま話し込んでしまった。

彼が言うのには、この世の中で一番ボロイ

のは新興宗教だというのだ。信者を集めさえすれば、喜んで金を寄進してくるし、第一、宗教法人だと税金が一銭もかからないのだから、こんなボロイ商売はない。私は大分以前から新興宗教を研究しているが、といって、サクラを使つての信者集めの方法など面白おかしく説明するのであった。

新聞社の方だったら、宣伝がうまいから、是非一緒に新興宗教をやってみたいと思つていたので一度私の家へ来てくれないかと初対面の私に対して、妙に馴々しくさえある。私



が返事をためらっていると、私はアパートの一人暮らしだから遠慮はいりませんよと盛んに誘いかけてくるのだ。

そんな沼田健児の熱心さに負けて、私は彼のアパートを訪ねる破目になったのだが、彼の部屋には、宗教に関係した本や雑誌に混って奇譚クラブのバックナンバーが幾冊も置かれていたのは驚いた。聞けば、彼はもう大分以前からの奇クノ愛読者で、私が時々誌上に写真入りのルポルタージュを書いていると聞いたら、今までの新興宗教の話はそっちのけにして、それだったら、よいモデルを紹介しようといふ大いに乗気になってきた。

それ以来、私は沼田健児と馬が合うという

のか、とにかく親しくつき合うようになったのである。

広告外交員というのは歩合制のため腕の立つセールスは驚くほど収入があるらしく、沼田も普通の会社員など馬鹿らしてやっておれないとよく言っていた。その頃、私はしがな給料生活者だったので、彼に奢ってもらってバーやアルサロへ繁々行ったものだ。

私は商売柄、いつもカメラとフラッシュは放さなかったもので、そんな時、彼の馴染の女を写真に撮ってやったことがある。翌日、その写真を仕上げて持っていくところ、私も私もと希望者が現れて、果てはフロアーショーの写真までサービスで撮ってやる始末となつたが、そのせいか沼田は、そのアルサロの新聞広告を一手に獲得してしまつた。

沼田が広告取りに行ったストリップ劇場でカメラマンのアルバイトを求めているが、やってみないかと私

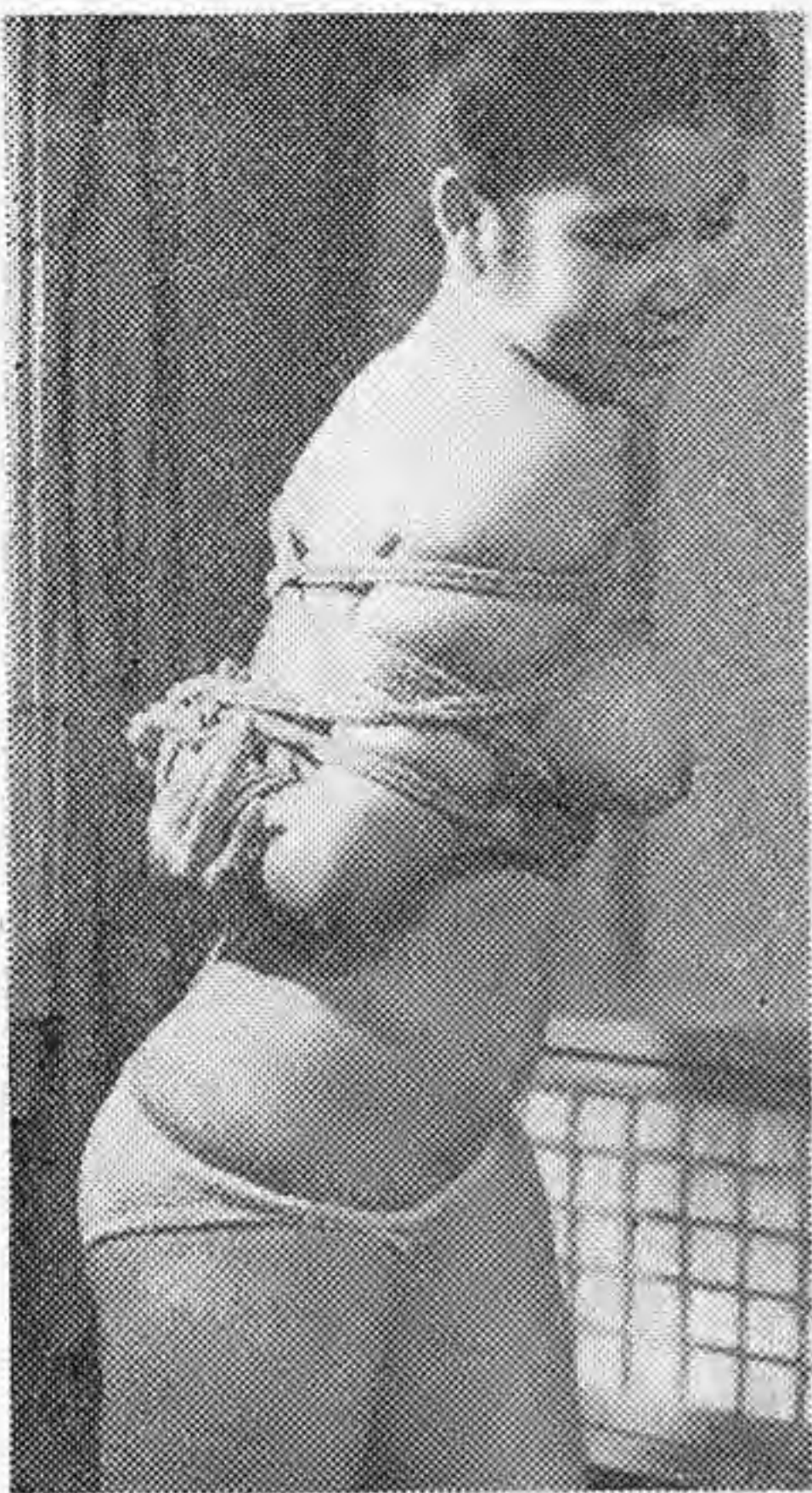
に言ってきた。その劇場は当時、大阪では二と言われる大きさで、意欲的なショーを上演していて人気があり、新聞広告も継続的に出していた。

五日乃至七日の替り目替り目に新しいストリップパー達が来るのだが、各自の宣伝用スチールを持ってくる者は殆どない。そこで彼女達の宣伝用の写真を撮影して八ツ切り乃至四ツ切り位に引伸して、表のウィンドーに飾りつけるというわけである。

人数にして十人からせいぜい二十人どまりである。謝礼は一回につき一万円ということだったが、二時間か三時間ぐらいですむ筈だから悪くはないと考えて引き受けた。

金を払ってストリップを見るのではなくてこちらの好きなポーズをストリップパーにとらして写真を撮影するのだから、これは面白い仕事だと思った。

舞台の幕を降した前で彼女達にポーズをとらせ、私は観客席の椅子の上に立ってカメラを構える。若くて美しい女の時はロングやアップでカメラアングルを変えて念入りに撮影した。始めのうちは珍しさも手伝って、替り目替り目には必ず劇場に出向いて、熱心に写っていたが、やがて、倦いてきたのと、スト





リップー達が遅く乗り込んできたりして、時には徹夜で写真を仕上げねばならなくなったので、とうとう断ってしまった。

そのうち新聞社のカメラマンをやめて、フリーで気分に注文の写真だけを撮るようになってからは身体にも自由が出来たので、沼田の広告取りの外交に、私は依頼されたルポの写真撮影に一緒に行動することがあった。

一緒に行動するといっても行く先々も別であるし仕事の内容も別なのだから、初め沼田



の広告取りに私がついて行き、弁舌さわやかに彼が訪問先で喋っている間、私は同伴者のような恰好で傍に立っているのである。交渉がうまく成立して、「ああ、これで手数料が何万円か入る」ということになる、次は私の仕事に彼がついてくるのである。

出張撮影の時などは沼田は俄か仕込みのアシスタントで助手を勤めたり即席のライトマンになったりした。そんな時、私にしても助手代りに使えるのだから、沼田は重宝な友人であった。

八月の或る暑い日、沼田は坂町の行きつけのバーのママが私に是非逢いたいと言っているが一緒に行かないかと誘った。

二八につばちといつて、二月と八月は殊の外、客足が遠のくので一人でも客を増やそうと思つて、そんなことを言っているのだらう。第一私はそのママムを知らないじゃないかと気乗り薄でいると、沼田は、そうじゃないんだ。ママムは奇クの愛読者だし、君のことは

よく知ってるんだよ、と執拗に喰い下る。

それでも客寄せの一種さ、と冷淡だった私も沼田の次の言葉には触手を動かした。

「あのママムはね、なかなかアブのところがあつて、場合によっちゃ、縛りのモデルになつてもいいつて、言ってるんだよ。齡は、三十つて言つてたが、若作りしてるから、どう見たつて、二十二、三とところかな。君の書いた関谷さんとのルポ記事を読んでるつて言うから、彼は僕の親友だつて話すと、是非逢いたいから、来て貰つて呉れと頼むんだよ。塚本君、行ってやれよ、あんな美人に誘われるなんて、男冥利に尽きるよ……」

沼田は、そのあとも、べらべらと何か喋っていたが、私の耳には入らなかつた。

私の耳に残っている彼の言葉。八縛りのモデルになつてもいいVという数語。カメラで写せる——そう思うと、現金なようだが、私は途端にママムに逢いたと思った。

数日して、私はミナミで仕事を持った。ユニバースに出演する芸人に頼まれたもので、記念にするのでスナップを撮ってほしいという注文である。

午後九時、私は車をユニバース脇の薄暗い路地に置いて、舞台、客席、楽屋、廊下、な



どと大体下見しておいた通りの順序で、撮影を終り、最後に出口から出てくる処を向かい側から道路を隔てて一発放って完了した。

仕事を終えてほっとした途端、坂町のバーのママのことを急に思い出した。時計を見ると十時半を指している。来た時より幾分減ってはいるが、それでもぞろぞろと歩いていく人の波は中々絶えそうにもない。

私は車を走らせて、行きつけの日本一の駐車場へ入れた。そこから歩いて五分ばかり、沼田の言っていたバーはすぐ見つかった。表通りからはずれた横丁にずらりと並んだバー街の一角、色とりどりのネオンの看板が毒々しく絢を競っているのを見ると、私は一滴のアルコールも飲んでいないのに、なんだか酔っぱらったような気持になって、フラフラとそのバーの扉を押していた。

外の明るさに比較して中は暗かった。何ルックスというのか、私の眼が慣れるまでは、全貌が掴めない。奥深くて広いように見えたが、それは見掛けだけだと後でわかった。

「いらっしやいませ」

女と男の声がミックスして威勢のよい、それでいて、テープに吹き込まれていたようなお座なりの言葉が私の耳に入った。

初めて転り込んできた客に対する好奇心と軽い警戒心の入り混った視線が私を包んでいたが、沼田君から話を聞いてきた塚本だと言った途端、ママは相好をくずして近寄ってきた。

仕事で車に乗ってきたからアルコールは駄目だと言うと、レモンスカッシュを持って来させたママは、

「私、ヒロ子って申しますの。お話は沼田さんから、いつも伺ってますわ。もうすぐカンバンですよって、家へ送って貰いがてら、お話をしましょ」

肌ざわりのやわらかな口調で、そう言って立ち上るとバーテンの所へ行って耳もとで何か囁いている。

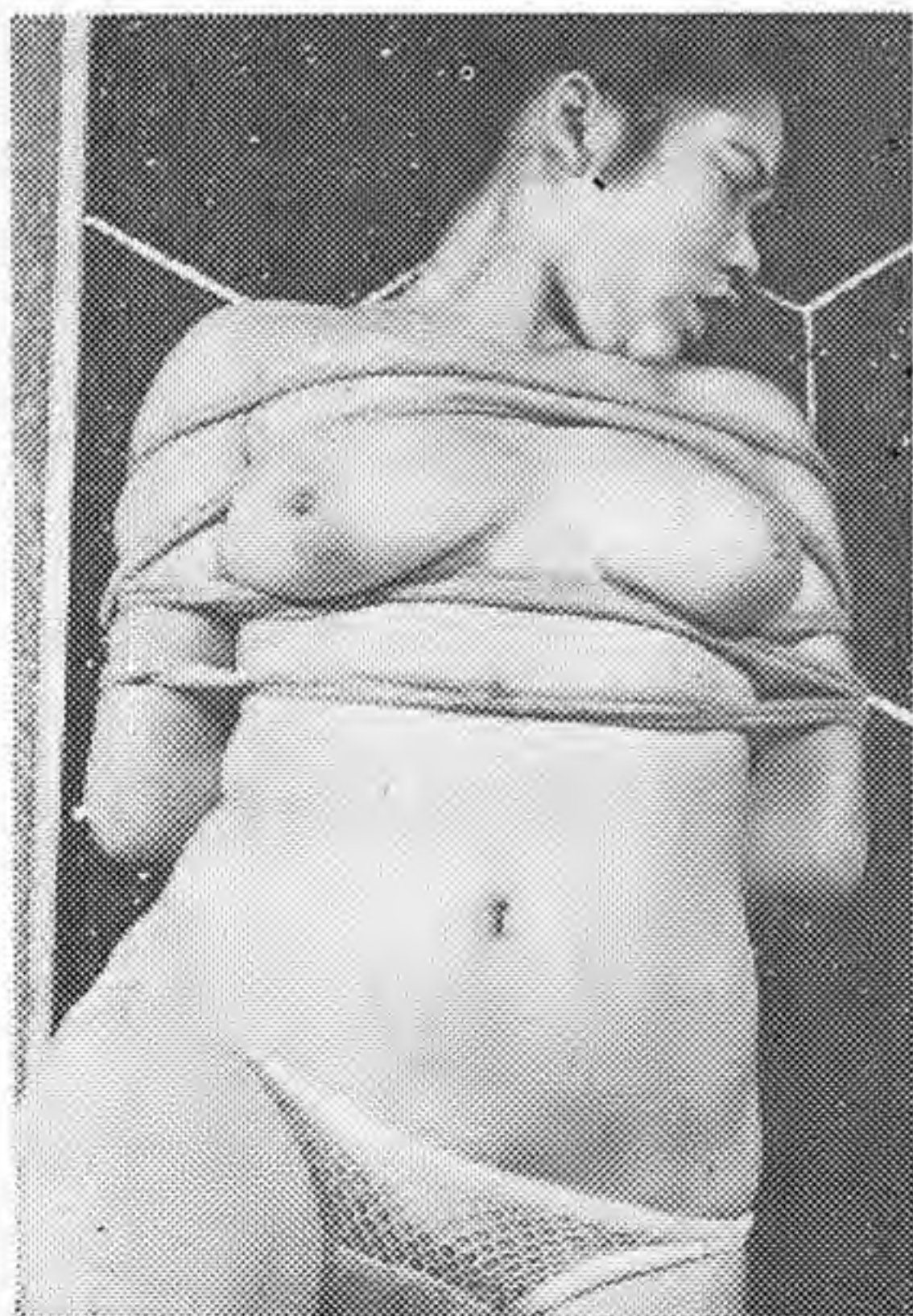
もう十一時はとくに過ぎていて、時折り酔客が行き交うくらいの静寂な街角に、私は駐車場から出してきた車をとめてママを待った。ネオンの点滅が車の金具という金具のメッキに反射して

妖しい光の世界に漂っているかのような錯覚に陥る。

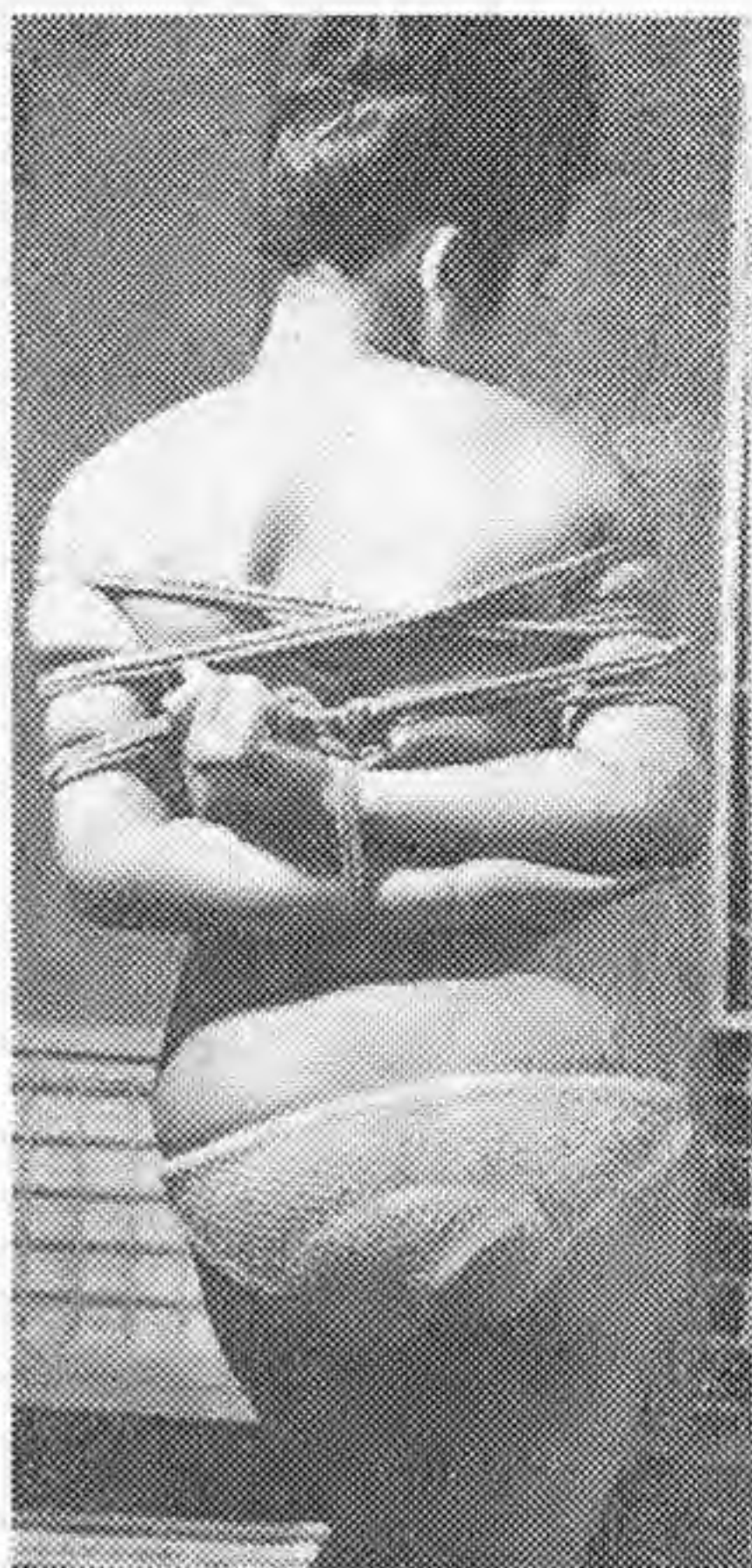
助手席にママを乗せた私は、彼女の家が西宮だということで阪神高速道路から名神高速道路へ向かった。

稍小柄だが、きりつとよく締った色白の肢体を包んでいる和服がよく似合い、ショートカットにした髪が心持ちカールしていて、小さ目の丸顔と相俟って、ぐっと若く見える。

私の左の腿にべったりと肘をついて身体をもたせかけるようにしてくる仕草は、商売用の習慣とは判っていても悪い気はしない。







時々変速するとき、クラッチペダルを踏む以外、左足を使うことはないので、私は左太股を任せたままにしておくと、やがてマダムは両手で腿を抱えるようにして頬を寄せてきた。

大分、酔っているらしい。

窓から入ってくる冷やかな夜風、軽い車の振動と零時近い時間帯は睡魔の襲うところとなるのは当然のなりゆきである。

私は時速六〇キロぐらいで走る中型トラックのあとを五〇米程の車間距離をおいて追尾し安全運転に心掛けてハンドルを握っていた。が、しかし、膝の上で軽い寝息を立てているマダム・ヒロ子に気をとられていたからだろ

うか、豊中インターで名神高速のゲートに入

ってから、何の気なしにそのままトラックのあとを追尾していたのがいけなかった。

△名古屋方面▽△神戸方面▽、この正反対の進路はハンドル捌きにして、僅か数ミリの違いである。私は何の気なしにトラックのあとを追ったお蔭で神戸方面へ向かわねばならないのに逆の名古屋方面行きのランプウェイに入ってしまったのだ。もっとも、それと気づいたのは、大分走ってからだったが。

神戸方面へだったら、トンネルがあるのがおかしい、そう考えたとき、はじめて逆方向を走っているのに気がついた。千里山のトンネルを抜けると、暫くして天王山の長いトンネルの中へ入った。

「ええ、ままよ」とばかり、京都南、京都東の両インターチェンジを高速で通過して大津まで一気に突っ走った。ゲイトへ向かわず車を展望のきく駐車場へ回して停めた。

まだすやすやと軽い寝息を立てているマダ

ムを揺り起こして、間違って滋賀県の大津市まで来てしまったことを告げた。

流石にバーのマダムだけあって、その時少しも騒がず、むっくりと起き上った。

今の今まで、ぐったりと寝ていたのだから欠伸をしながら寝呆け眼で文句の一つも言うかと思ったのだが、外気に当たった途端、しやきつとして襟元の身づくろいをしながら「まあ綺麗！ 灯が真珠のようだワ」

とはしやいでいるマダムは、どうやら寝起きがよいタチらしい。

「西宮の家へ帰るのは諦めて、大津で泊りましょうか」

そう言っ

て私の手をとるとベンチへ誘い、夜目にも白いハンカチを敷いてくれた。

ここは名神随一の見晴しのよい処である。昼の景色もよいが殊に夜景が素晴らしい。香港の百万ドルの夜景には及ばないが五十万ドル位の値打ちがあるかもしれない。

さやさやと足もとからともなく吹いてくるそよ風が至って涼しい。目の下に広々と琵琶湖の湖面が広がっていて、大津市内から雄琴温泉にかけての灯が、ちらちらと潤んだように瞬いている。

駐車場には十数台の車が駐まっ



ものアベックが、あちらこちらで熱いムードを醸し出している気配である。湖面に向いて置かれたベンチの一つ一つにはアベックが肩を寄せ合っているのが覗き見られる。一つのベンチを各々一組のアベックが占領しているのである。

夜露がしっとりあたり一面を湿らしているような気持がする。ここらあたりでムードに弱い女性を夢心地にさせるような台詞を吐かなければいけないのだろうが、私にはそんな器用な芸当は出来なかった。それよりもマダムから

「あなた、道を間違えたなんて言ってるけど最初から私をここへ連れてくるつもりじゃなかったの」

と詰問されはしないかと、びくびくしていたが、マダムは私を疑うような素振りはいささかも見せなかった。間違ったのは仕方ないとして、これからの時間を最も有効に活用することを考えている風であった。

それから三十分程して、私達はホテルKの湖面に添った部屋に落着いていた。

私は車のトランクに置いていたカメラのパックの中に、故障車曳行用のロープを秘かにねじ込んで部屋にまで持ち込んでいた。

マダムが入浴している間、私はストロボのACコードの配線も終り、いつでも撮影出来る準備を整えて待った。

これから明け方までの数時間、ムチムチとしたマダム・ヒロ子の裸身を思うままに縛り上げ、心ゆくまであらゆるカメラアングルでフィルムに印してやろう。幸い部屋は和洋折衷二部屋続きでベランダもついていて相当の広さに使える。椅子やテーブルの小道具も適当にあしらえそうである。

奇クの愛読者であるというマダム。自分からモデルになってもいいという位だから、縛られることについても経験と自信があるのだろう。これは傑作が撮れるわい、と私は胸わくわくの思いで心中、沼田に感謝していた。

だが、——風呂から上ってきたマダムが、そこに並べであるカメラ、ストロボ、縄の束などを見つけて、「これは何なの?」と不審そうに訊ねるので、私の方が驚いた。カマトトぶっているのかと一瞬思ったが、よく聞い



てみると、ヒロ子は、沼田にモデルになるなんて事は言った覚えはないというのだ。

「そりゃ確かに、塚本さんに逢わしてほしいって言ったわヨ、でも私、モデルになるなんて言った覚えはないワ」

マダムの答える言葉に、満更嘘もなさそうである。そうになると、私は引っ込みがつかなくなかった。ちらばっている撮影用具や縄の束を前にして途方に暮れてしまった。

だが、奔放なマダムは、徒らに私に間の悪い思いをさせておかなかった。ジャンプするように私に飛びついてきて、むっちりとした白い腕を首にからませてきた。

「写真なんかより、私、この身体を全部あげるわヨ」





まで、私は彼女の縛り写真を撮影することばかり念頭に置いていて、その事ばかりを考えていたのだ。

それが突如として予定が変更になってマダムの直接攻撃を受ける始末となってしまったのであるから慌てざるを得ない。弾力性のあるスベスベした肌であった。

濡れた手で石鹼を撫でるような感触が、べったりと私の全身を襲ってきた。

ぎゅっと抱きしめると、はね返すような抵抗感があって、それでいて、ふわっと誘い込む快い抱擁力が私を押し包んでしまった。

遠くでオートバイの爆音が高くなり低くなり、開け放ったベランダの窓から洩れ入ってくる。対岸の湖に沿った舗装道路をカミナリ族がぶっ飛ばしているのだろうか。夜のしじまが、そのときだけ静寂が破れるのが、尚一層、深夜であるという感じがひしひしと強

く迫ってくる。

オートバイの爆音が途絶えると、湖岸にひたひたと打ち寄せる波の音が、不思議と耳について放れない。

いつ果てるとも知らないヒロ子のスタミナに驚きながら私は見るともなしにバネのように張りのある彼女の真白い下肢に目をやっていった。理窟からいえば敷布の白さの方が、肌の白さよりも白いのが普通であるのだが、ヒロ子の下肢の白さは、輝くように光を放っていて、敷布より白く見えるのだ。

快楽の連続の中で、そんなことを考える余裕を持っている私は、或る意味ではベテランであるかもしれない。あくことなく喰い尽さねばやまないという食欲さは、一気に頂点を極めさせず、幾度となく中休みを置いてはスタミナを貯え、やがて一気に駆けめぐると見せて、再び執拗に喰い下るのである。

じらされ切ったマダムも、やがて私の戦法を知ったのか、妙なことを言い出した。

「据膳喰うのは、男の恥よ」

マダムの説によると、男たる者、いやしくも女を手を入れるのには、手練手管を弄したり金を使ったり、何かと努力するのが、本当である。それが、何も努力しないで、据膳を

強引に目の前のベッドに、もつれるように折り重なって倒れ込んだあとマダム・ヒロ子は私の耳元でそう囁くと、矢庭に羽織っていた浴衣を、かなぐり捨てた。その早さは、まさに電光石火というにふさわしい間髪を入れぬ身のこなし方であった。

湯上りの私は、バスタオルを腰に巻いているだけのスタイルであったから、ヒロ子の猛然たるアタックに対して、全くの無防備状態だった。ヒロ子が風呂から上ってくる今の今



喰うなど男の風上に置けないというのだ。

『据膳喰わぬは男の恥』と思っていた私にとつて、いささか耳の痛い彼女の言葉ではあるし、考えようによっては、今の私には皮肉にも聞こえかねない言い草であった。

何か適当な反駁の言葉を考えようとしたが何しろ、ぴったりと身体を合わせたままの会話のやりとりであったから、彼女の肉体の内部に変化が起けると、直ちに私の肉体にもシンクロナイズされている。

据膳喰うのが男の恥なのか、喰わぬのが男の恥なのか知らないが、とにかく私は白々と夜の明けるまで、マダム・ヒロ子の据膳を残らず喰わされる破目になってしまった。

据膳といえ、これも据膳を喰い放しにした、ほろ苦い思い出がある。

仮りにK子としておこう。これはマダム・ヒロ子と違って少しばかり写真は撮ってあるのだが、たった一回の逢瀬になってしまったところはよく似ている。

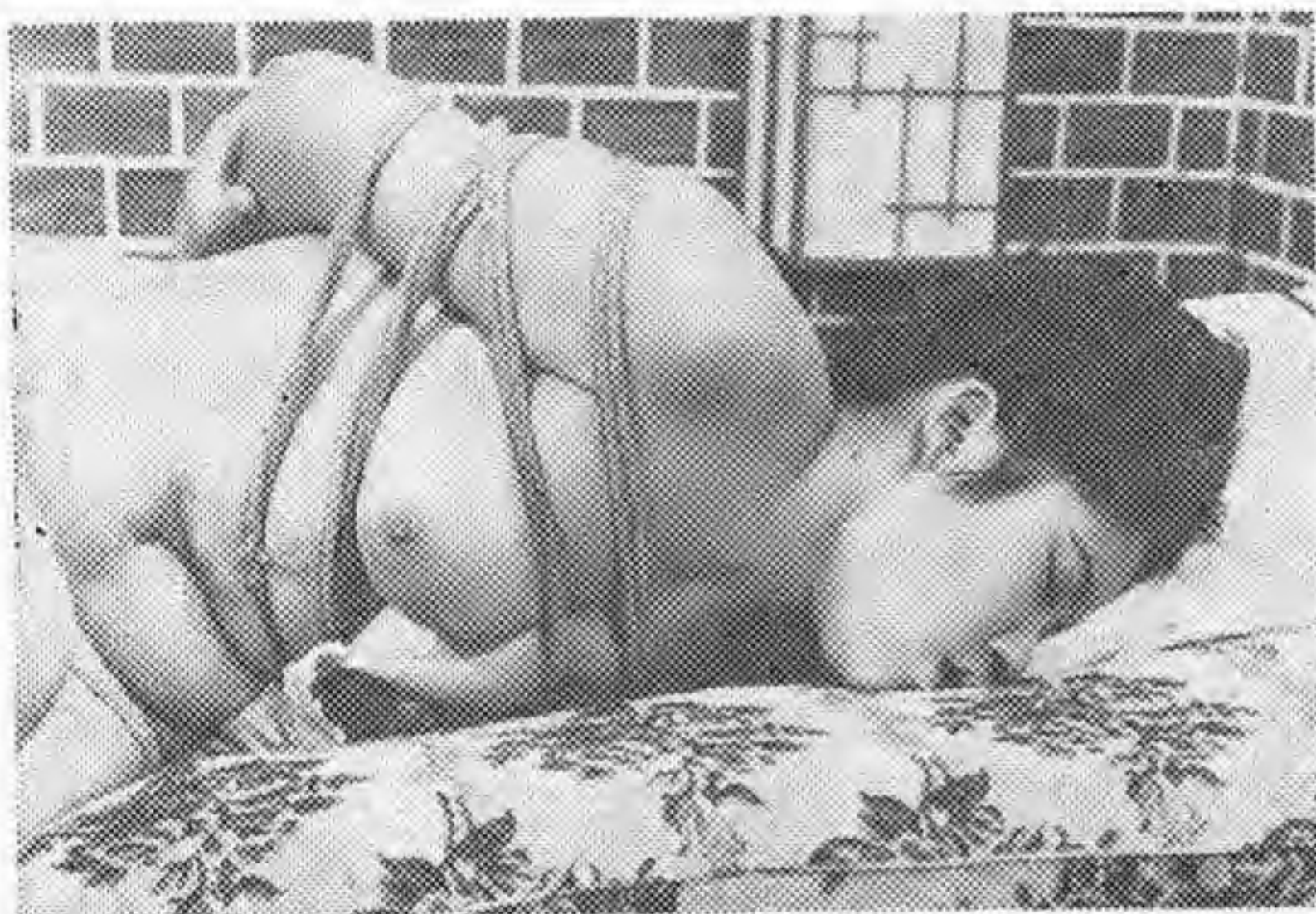
タオルの宣伝写真のモデルとして紹介されK子は十八才だというだけあって若々しくて豊かな肢体の持主であった。

セミヌードの写真を数種撮る写真であったが、私は素人じみた身のこなし方のK子が気

にいった。聞いてみるとアルバイトで初めてモデルをしたという話である。

私は仕事が終わったあとで、K子に対して縛りのモデルをやってみないかとすすめた。K子は考える風もなく、すぐさまOKした。

余り簡単に承知したので私の方が不審に思ったくらいで、ひょっとしたら、私の申出を



聞き違えたのではないかと思って確かめたところ、「裸になって縄で括られたら、いいんでしょ」と答えて、けろりとしていた。

K子の都合をきくと、今週の土曜日がいいというので、一時に難波の体育館裏にあるスナック・スレイブで待ち合わせることにした。

土曜日の午後はやはり人出は多かった。ナンバ球場で野球があるのか大変な人だかりである。都心の混雑には恐れをなして車を郊外へ向けて走らせた。

最近新築した恰好のモーターを見つけあったので、それをお目当てにしていたのだ。私はすでにK子のヌードを撮影していて、写し写された仲なので、恋人同志のような、なごんだ気持である。

私は車を走らせながら、この前の撮影風景を思い出していた。バスタオルで胸から下、膝頭の上ぐらいまでを掩った姿で脱衣室から出てくるところを撮影するのが狙いであったがモデルのK子は勿論誇らしげに全裸になっその上からタオルを巻いていた。

肉づきのよい肌は抜けるように白く、私はK子の裸身を見たとき、一瞬、眼がくらくらッ、とした程であった。

しかし、驚くのはまだ早かった。一通り依



頼まれた写真の撮影が終って休憩のため、別室へ来たとき、彼女はパッとバスタオルをかなぐり捨てると惜しげもなく私の目の前に全裸を晒した。

はち切れそうなグラマーな肉体、殊にボインが素晴しかった。

体毛は極めて薄い方である。

敷き詰められたカーペットの上を、K子は口でメロディを口ずさみながら軽く踊りだしたのである。

私に見せようとしてか、或は自分の肉体を誇示してのことか、とにかく、美しさだけがあって、いやらしさが少しもないのは、K子が十八才という、もぎたての果物のような若さがあり、ぴちぴちとした健康美が溢れていたからであろう。

だが、私が驚くのは、まだまだ早かった。一通り踊り終った彼女は、ぱっと一跳躍すると応接セットの一人掛けの椅子の上に跨ったのである。

私の方に正面向けてである。

大胆といおうか、傍若無人といおうか、両脚を左右に思いきり開いてポーズをとったのである。

「さあ、写して頂戴！」

彼女はそう言って、男心の奥の奥まで見すかしたような目つきで私を見た。

余りのあからさまなポーズに、私がカメラを向けるのを躊躇していると

「男の人って、こんなポーズを撮りたいんですよ」

彼女のその一言で、口惜しいが私は憑かれたようにシャッターを切っていた。

数日前の出来事を、甘酸っぱい生ツバを飲み込むような気持で思い出していた。

私の傍には、その御本人のK子が、全く何の屈託もなさそうに、ガムを噛んでいる。

新しく袋を破って、その一つをむき出しにして折ると私の口へ入れてくれる。自分が噛んでいるものは当然、男も噛むものだという

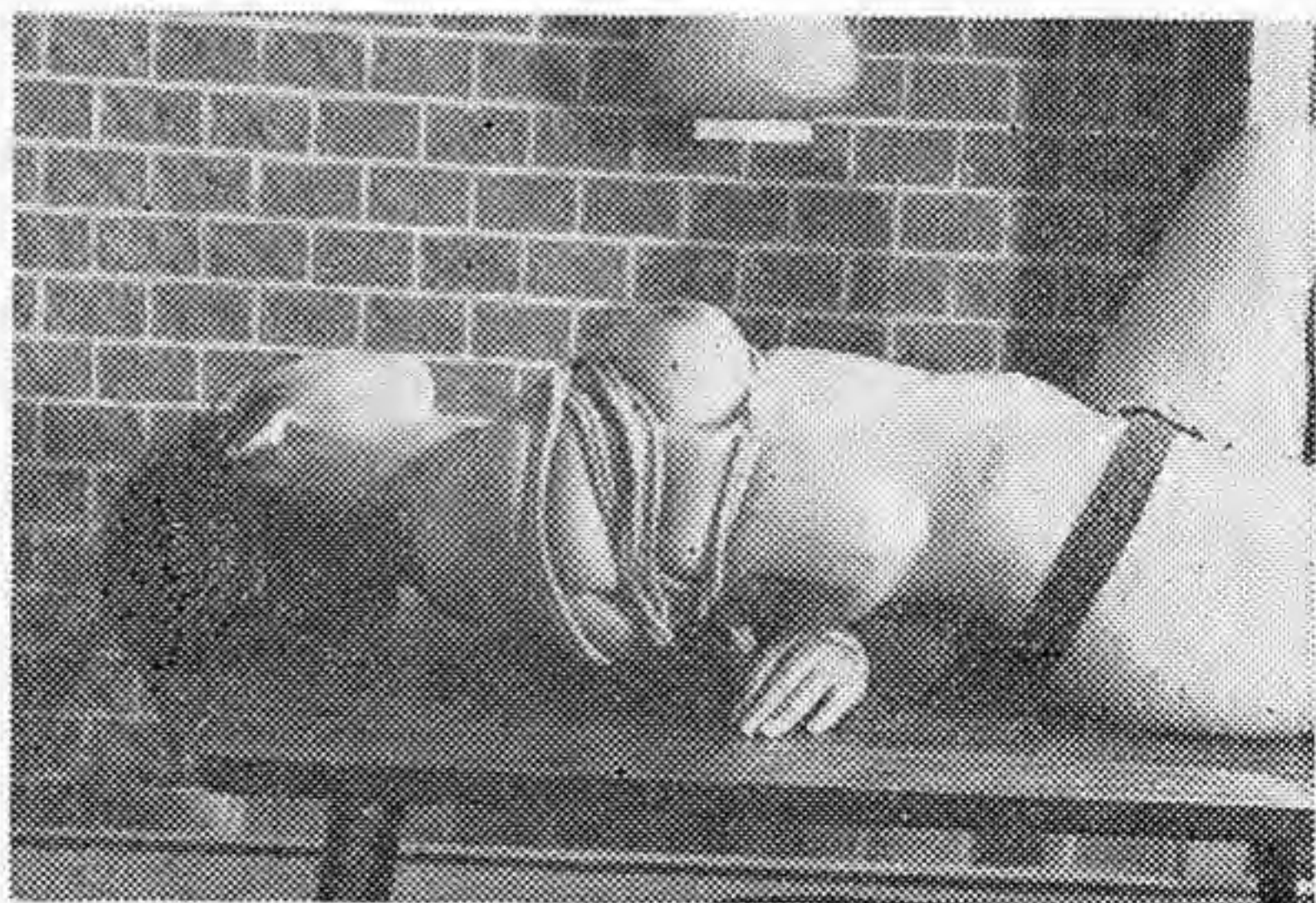
自然の仕草であった。

私は妖しい白昼夢からさめて、ヨーロッパのお城のような造りのモーターに車をすべり込ませた。

部屋は最近新築したばかりで木の香も新しく、それに和風と欧風の趣向をうまく調和させていて、ゆったりとした気持になれた。

網目のパンティを穿かせたままで、後手縛りにして小手調べ的にシャッターを切った。

彼女にしては初めての縛りだから、余り最



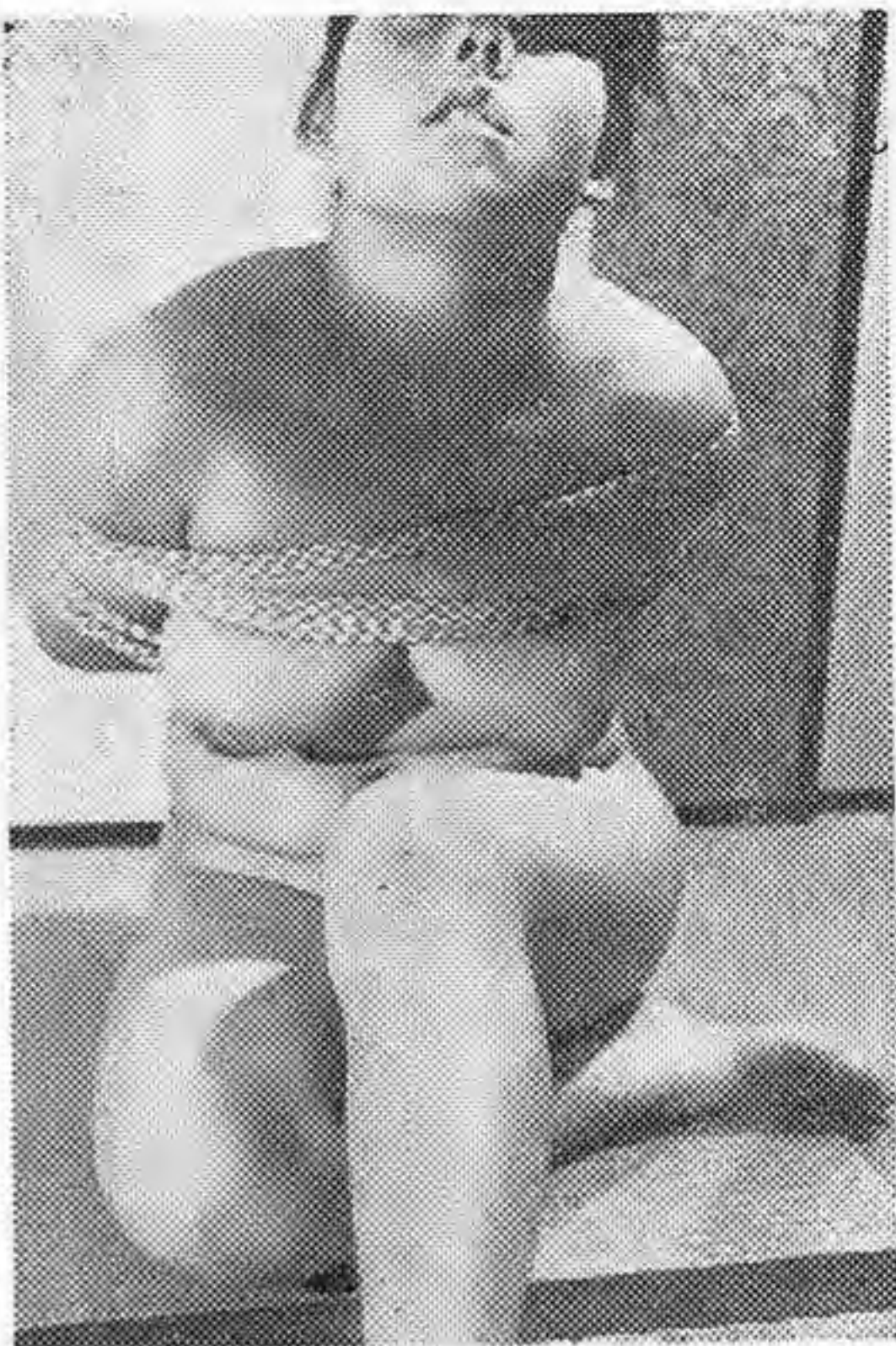
初から厳しくやってはと手加減したのだが、彼女は一向に気にしていない風だった。

数枚シャッターを切ってから縄を解いた。

次に縄を掛けようとしたとき、彼女は「こんなもの邪魔だわ」と、パンティを脱ぎすてていた。

逞しいヒップである。





私はポーズを変えカメラアングルを変えて  
忽ち一本のフィルムを撮り終えた。

フィルムの入れ替えて小休止である。

私は次はもっと厳しい変型縛りをしてやろう  
うと思っていたので一応、縄を解いた。

K子はピチピチとした肌を惜しげもなく晒  
したままベッドの端に腰を下ろして、両足を  
交互に伸ばしたり曲げたりしている。

いささか肉がつき過ぎているようだが、す  
らりと伸びた脚線美の脚は、シミ一つなく白  
く光っているように見える。その白い素足が  
フィルムを入れ替えている私の目前で、プラ  
ンプランしている。

足の爪が桜貝のように艶  
々しい。

二の腕にくっきりと残っ  
た縄の痕なんか、一向に気  
にする風もなくフィルムを  
入れ替える私の手元を眺め  
ている顔は、十八才という  
年齢にふさわしいあどけな  
さである。

カメラを三脚に据えレリ  
ーズを装着すると私はアッ  
プでK子の若々しい緊縛姿  
態を鮮鋭に把握したいと思ひ縄を手にした。

海老縛りでも胡坐縛りでも、逆海老縛りで  
も、柔軟なK子の肢体であれば十分サマにな  
るポーズを展開してくれるだろうと考えると  
楽しさで思わず胸がわくわくした。

「では、始めるよ」

私は縄を手にしてK子の後手に回そうと近  
寄った。その時だった。彼女のしなやかな両  
手がするすると伸びて私の首に巻きついてき  
た。不意を喰った私は、「あッ」と声を出そ  
うとしたが、それより早くK子の唇が私の口  
を掩っていた。

それは強烈なキスであった。

彼女の舌が私の舌にからみついて離れず、  
私は自分の舌が根元からもぎとられるのでは  
ないかと一瞬恐れたほどだった。

甘いミルクのようなバタくさい口臭が私の  
口の中に漂ってきた。

私は握っていた縄を手から放してK子の背  
中を抱いた。それをしおに彼女は仰向けに倒  
れて私を誘い込んだ。

ずっと唇は合わせたままだった。息苦しく  
なって私は振りほどこうとしたが、K子の妖  
蛇のような両腕が、しっかりと私の首に巻き  
ついていてため、長い長いディープキスが  
彼女の一方的な行動で続けられた。

K子の先制攻撃で始まった第一ラウンドは  
完全に彼女のペースで進行した。

彼女の唇はぴったりと吸いついて離れず、  
舌は私の口中を荒れ狂っていた。やがて彼女  
はべっとりとした粘っこい唇で私の舌を吸い  
込んだまま歯を私の舌に当ててきた。

私の舌はその根元まで彼女の口中に入って  
いて、根こそぎ持っていかれそうな痛さの上  
に、今度は舌の先が彼女の歯で噛み切られる  
のではないかという恐怖にかられた。

この不利な態勢を一挙に挽回するには、適  
切な有効打を放つしかないが、何しろ私は、





不意をつかれたためもあって、シャツにズボン、ズボン下、パンツ、それに靴下まで着たままだったから、すぐさま身軽に行動を起こすわけにはいかなかった。

なんといっても、口を封じられていることと、首に蛇のような両腕を巻きつけられていることは私の自由な身動きを阻止していた。

長い辛抱に耐えた末、私は一瞬のすきを見て、彼女の舌を吸い返した。くねくねとしたK子の両腕はまだ私の首に巻きついたままだ

ったが、私は彼女の舌に吸いついたまま、自由になる両手を使ってシャツを脱ぎズボンを脱いだ。胸をびったり合わせたままの作業だから困難を極めたが、ズボン下とパンツ、靴下を一緒に脱ぎ捨ててからは、私の方が完全に主導権を握ってしまった。

プレイが第二ラウンドに入ってから、K子は私の果敢な攻撃に喘ぎ、呻き、只悶えるばかりだった。

感度が抜群というより、言いようのない素晴らしい女体であった。

△真昼の情事△そんな言葉がふと私の頭の中を横切っていた。

陽はまだ高く、二階の部屋の窓からは明るい陽ざしが射し込んでいる。

感極まった涕泣にも似た嗚咽が、長く尾を曳いているのを、冷やかに眺めながら、私は第三ラウンドへの攻撃方法について、ゆっくり思索していた。

K子は完全に夢遊状態に陥っていた。

「いつまでも、このままでもいい」とか「私を捨てちゃいや」とか、私の耳元で繰り返し

口説き続けていた。

如何にK子が満足しきったか、若い女の恥も外聞もかなぐり捨てた姿態に、まざまざとそれを見せつけられて、私は自分の性的能力に一人の自信を持つことが出来た。

写真の枚数こそ撮れなかったが、いずれ、この調子だったら、次の機会にうんというものが撮れるだろうと思った。

入浴を済ませて椅子に落ち着いたとき、

「K子さんは、若いのに、あの方は凄いいんだね。全く驚いたよ」

私は彼女のハッスルぶりに、兜を脱いだ気持でそう言ったのだが、K子の答は更に私をびっくりさせた。

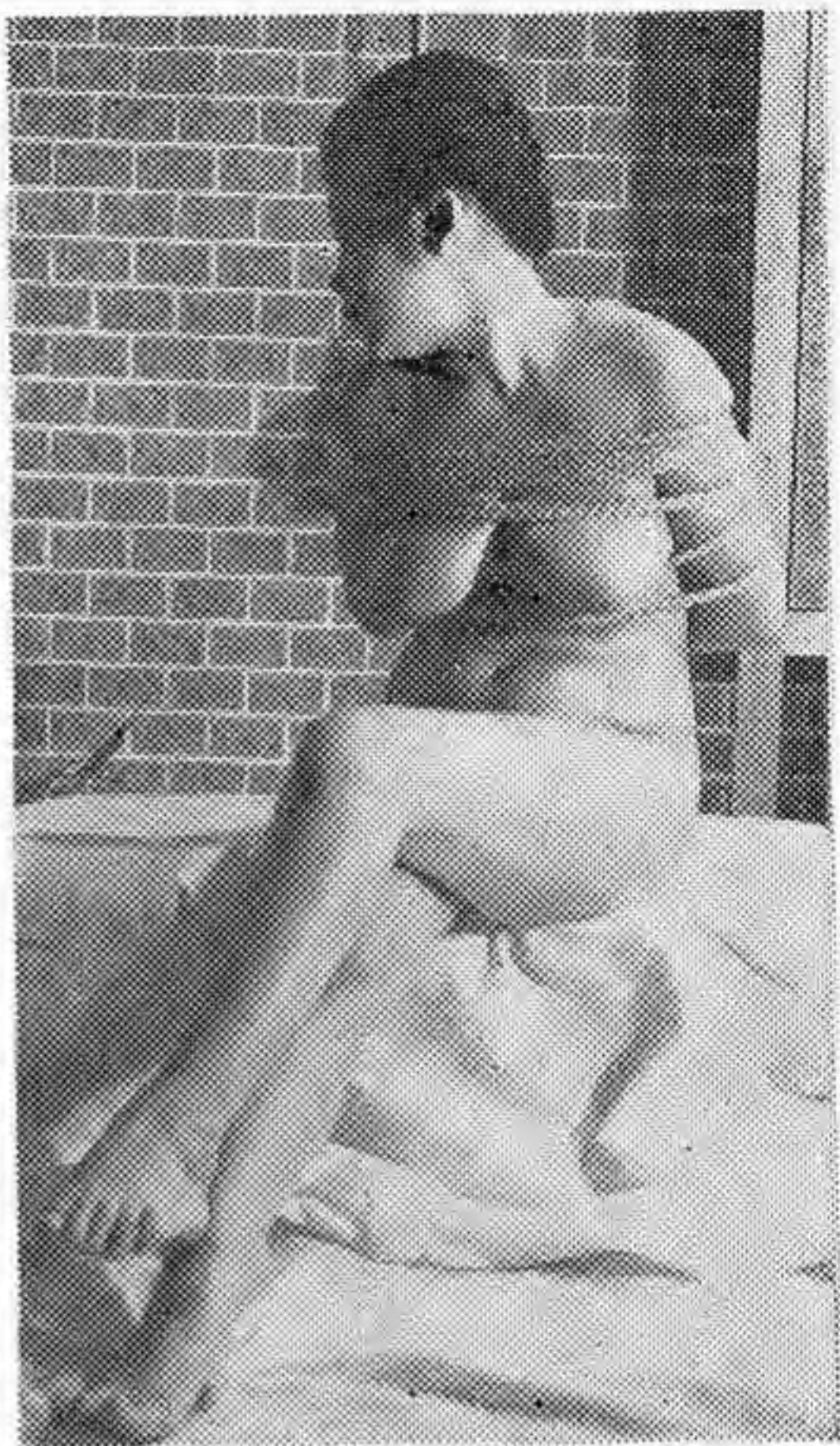
「同じするんなら、凄いいのをやらなきゃ損だもん」

そう言ってK子は、私の腋の下に腕を回して頬を胸元に寄せてくるのであった。

私は次回のデートは必ずK子の方から誘ってくるだろうという自信を持った。用があったら電話してくれるようにと名刺を渡した。彼女も住所と電話番号を手帖の切れ端しに書いて破って寄こした。

私はK子が翌日にでも、すぐ電話してくるだろうと、心待ちに待った。だが私の自信に





も拘らず、三日経っても、四日経ってもK子からの電話は掛かって来なかった。

一週間経ち、十日が過ぎたが、私は自分の方から電話するのは、何だかプライドを傷つけられるようで、ためらわれた。

狂気のように燃えさかったK子のあのときの有様が、ありありと浮かび上がってくると、私は掌中の珠を失ったような空虚な気持ちに襲われてくるのだった。

とうとう一カ月経った。

ひよっとしたら、病気にでもかかっているのではないだろうか。

ふと、そう考えた私は、彼女の残したメモ

の番号をたよりにダイヤルを回した。

すぐK子の母親だという人が出た。その話に依ると、K子は一カ月前、OSミュージックのテストを受けて合格してからは時々着替えを取

りに帰るが、殆ど稽古が忙しいといつて寮に泊り込みだというのである。

私は何か打っちゃりを喰ったような割り切れぬ気持ちだった。

据膳のつもりで自惚れていたのだが、彼女にとつては、通りすがりの喫茶店でコーヒの一杯でも飲んだくらい軽い気持ちでいたのかもしれない。

その後、新聞紙上でOSミュージックが営業不振で閉鎖したということを読んだが、K子は一体どうしたんだろうかと私は時折り、あの激しかった彼女のことを思い浮かべることがあった。しかしそれ以来K子の家へ電話し

ていないし、又彼女からの電話もかかってこないで、消息についてはわからない。只、三十数枚の緊縛フोटのネガが、そのときの彼女の俤を僅かに止どめているだけである。

マダム・ヒロ子とホテルKの一室で朝を迎えたとき、陽にすでに高く昇っていて開け放った窓からは夏にしては冷んやりとした風が吹き込んでいると思ったら、クーラーをつけたままだったのに気がついた。

私はヒロ子に「どうだい、折角カメラの準備も出来ているんだから、二、三枚でも写してみないかい」とすすめてみた。

物懶げに寝返りをうったヒロ子は、「ええ今度逢ったときには、きっと撮らしてあげるワ、今日は駄目——」と言って、それが答えのように白い腕を私の首に巻きつけてきた。しかし、そのヒロ子も、とうとう私は写真を撮る機会がなかった。

沼田の話に依ると雇われマダムだったヒロ子は、バーの持主が事業に失敗したため、職を追われ、条件のよい口を求めて指宿<sup>いぶすき</sup>くんだりまで流れて行ったということだ。

私は旅をしたいと考えるとき、指宿<sup>いぶすき</sup>という地名を先ず思い浮かべる。しかし、今もヒロ子がそこに住んでいるという確証はない。



——私の部分的セクスアリス——



ストリップ小屋

左右前後

松 原 千 次

手を思わしげに衣裳にすりおろしたり、首筋をなで上げたりしているが、観客を小馬鹿にしているのは、だらけきったそぶりだろうか。重たげに足を運んでは、舞台の袖で心じんだの地団駄をあらわし、中央へ戻り、一段高い灯りのさすガラスの台に登って寝そべった

りしていても、やる気のないのは、はっきりと見てとれる。

特出しがあたりまえのストリップ小屋に、間のびした時間が続く――。

家庭の事情がすけすけに舞台に並べられるのも、専属のストリッパーだからこそで、つ

まらない常雇いの女が、十日、十日の演だし物替りに名前をかえ、髪型をかえ、色がえをして登場し、ジプシーまがいのボヘミアン・ストリッパーの数の中に埋没して、浮草の命をつないでいる。

彼女達の夫は、小屋の掃除をしたり、切符をもちだり、照明を受けもったりの雑役で、雀の涙ほどの給金を貰い、妻の御開帳におぶさって、汚い部屋で日々をうごめいている状態では、かんじんの舞台に情熱が湧かないのも仕方ないことだろう。

娼婦でも、気持のただらしておるのは、中味もくだらないものだ。眼をなにかに見開いておらない人間というものは、観客に対する応答を引出せないのと一緒に、遊客に対しても、札をまるめて、「どうでもええわ」の反応しかない。

時間が遅くて仕方がないからと、泊りあがで登ったのに、おりものが白くかたまって、かんじんの所によだれをたらしているのを見て、昇った階段を、そそくさと手を振り口も利かずに降り、女をつまらない顔と思ひ合せわて唾を地面に投げ、金の一部が消えたのを落としたことよりもなげかわしく思ったものだ。

照明がストリッパーの動きを追っても、あ



れておらない所をみると、夫は舞台わきの雑役をしているようだ。

あんのじょう、特出しなしで引っ込んでしまつて、次の出番があわてて押し出されてきたのを見てもそれがわかる。

レコードの音がかすれた。

昨晚、他のストリップパー連とつれだって飲みに出たのが、たたつておるのだらう。飲みに行ったといつても、ぶらぶらしたただけだらうが、風呂へ入ってから外出するのだから十時をまわる。

それより、昼間、幕間を利用して肉体使用の商談を小屋裏口脇前の古ぼけた扉を持つ喫茶店でつけてストップウオッチをヴァギナにかますタイムを過ぎてくるのが素通する。

楽屋の割れた地面に、不似合な赤靴のコントラストを残して消えると、出番にはしつとりと艶を帯びて光ったつけ毛の特出しが、踊りのテンポをあげて花道に身体をさらして、男の視線を楽しむ風情になる。

金髪をよそおったストリップパーの下腹部のつけ根から、どの子もどの子も金髪に染めあげているのには感心する。二、三週間もすれば、又、手をつけねばならないのに、かぶれ易い場所を一本一本丁寧に手入れしている図

は、うつむき状で根気のいる作業でなければならぬ筈だ。

商売とはいえ、小屋の雑魚寝部屋に、一人身は全員つまつて、めし喰い、畳のほこりを浴びて横になる彼女の手入れの行き届いているのは、開帳専門の身だしなみというものだらう。

指、手、腕のしなやいでいるのは、東洋の踊りの特徴だ。スペインのフラメンコ、手、足とも動きは盛んだが、手、指は調子を取るために使われているようだし、ホタは完全に激しい動きのバランス取りになっているとも思われる。靴フェティシズム等が西洋に多いのも、脚を女性美の起点においてのマゾヒズムの現われと、バレエ、西洋のまたぐりを含んだフォーク・ダンスや社交ダンス、民族舞踊にふれても推察する。

その点、東洋は竹、扉、ローソク、火、紐等、指、手、腕を活かした踊で（フィリッピン、ベトナムの竹の群舞にやや異質の姿を見出せるが）、性具、性薬の面で西洋をしのいでいる所をみても、腹切りという被虐面にマゾヒズムが流れたともとれるようだ。

西洋人がボインにひかれ、フェラチオに異常な興味を持つのは、乳離れが早い故とする

ならば、今後日本人もそのような傾向が出てくるかもしれない。そうすると赤児への授乳風景も影をひそめるかもしれない。乳房で男心を刺戟するストリップパーの株もさすれば上昇間違ひなしとみる。

劇場附近には暖かくなれば夜昼なしに、小屋掛け姿のストリップパーが風呂屋通いや煙草買いなどでうろつく。陽光にさらされると、浮世の荒浪にもまれた年令の生地があらわれ、化粧のはがれがあらわになるが、なかには美しいのがいる。

黒人ストリップパーには純粹日本人がおり、小型が可愛い。臀部など黒光りして、はじけそうで、このはちきれる魅力は、黄色人種、白色人種にはないものだ。黒の不思議さ。

昨夜は向こうの小屋が警察にあがつたそうだ。この頃は鞆や帽子にかくしてシャッターをおろすちよろこい証拠写真はとらない。だからストリップパーたるもの、客の眼付と新聞ビラ等の紙類にも気を配る必要があるとういうものだ。

切符もぎりもストリップパーも、ここ十日ほどは慎重にしなければ、徳島から始まったといわれる特出しも、安心ではなさそうだ。



シヨ・ラムワカ画



創作

# 山の怪・犬

懸賞入選作品

山台次郎

(一)

テントの外で、かさこそ音がする。リスか地ねずみが、餌でもあさっているんだろう。山中での第一夜は、なかなか寝つけぬものだ。いつものことながら、体はつかれているのに、妙に神経がさえかえってしまう。腕時計をみる。

まだ十時半である。町にいる時なら宵の口だが、山じゃあ陽が落ちりゃあ、もう夜だ。その上、単独行ときているから、七時頃になりゃあ、もう寝るしかない。

だから十時半ともなれば夜中である。寝る前に飲んだトリス、じょうはつしてしまつて眠り薬の役目をほうきしてしまった。谷川の水音が又一段と大きくなった。夜がふけるにしたがつて、流れの音は大きくなるものらしい。雨でも降ってるのかと思うくらいザアザア鳴る。

トランジスター・ラジオのスイッチを入れてみる。あきらめてはいたものの、やはりガーガーとピーピーだけである。山中でしかも谷底だ。はいると思うほうが無理なんだ。尾根にでも出なければ聞こえっこない。

タバコをさぐつたが見当たらない。山の中の闇は一寸先も見えないってやつだから始末におえない。しょうがないから懐中電灯で照らす。ほんとのところ俺は、一人でキャンプしている時、夜中にライトを点火すのは嫌いなんだ。灯が、外の闇の世界に、俺がここにいるぞと密告するような感じがする。

ずしりと重い山の闇の圧力の中では、ひっそりと静かにしていたい気がするもんだ。ライトはすぐ消した。が、いこいに火をつけ、一ぶく吸いこむたびにパツと明るくなる火というものの威力をつくづく感じる。



安べえの貸してくれたエア・マット。なかなか具合がいい。やつこさんはいいい男だ。焼津を通過する時、駅でまっててくれて、窓からトリス3本といっしょに差し入れてくれた。

西課長の言葉が頭に浮かんでくる。

『しゃあないやっちゃ。また山か。こんどはどこや、本谷直登？ チョクトウってなんや？ 延滞債権に問題はないんやろな。小遣いはどうなんや。ご苦労さんなこっちゃ。ま、若いうちだけのことやな』

いいたい放題いってやがった。今度は楽な山を計画して、課長もつれ出してひと汗かかせてやろう。課員連中や若い娘っ子をいれておけば、ほいほいついてくるにきまつてる。いたって気は若いんだから。

静けさも度をこすと、試運転工場のガンガラガンといっしょで、頭をしめつける。こうなると却って沢音のザアザアが救いである。

汽車から降りて、オンボロバスに三時間も乗って山にはいった。

途中三つばかり、分校みたいな、ちつくさい学校の前を通った。

丁度下校時間だったので、学校前では小学生の群がわんさと乗りこみ、二つ三つ駅を過

ぎたあたりで、みんな下りてしまい、また学校の前にくる。

やまがの子ども最近赤、青、黄色とカラフルでデザインもいかす服を着ている。

目玉も大きく、澄んでいて、クリクリよく動くし、白いはだに、真赤な頬、皆チャームングである。じっと見つめられると、こっちが照れちまうような、きれいな、女の子もいる。女の子というのは、デブ、ヤセ、ノッポチビにかかわらず、小学生の頃は皆それぞれに、とっても可愛いのに、完成品になると、にくにくしいのやブスが出来てくる。なぜなんだろう。

《宇宙より声あり……「それは大人たちに無邪気な心と生き生きした動きがないからである。こころせよ」……と》

途中、すずめの学校のようになったバスも終点では、運転手、車掌、俺と三人だけのしよぼくれトリオだった。

なんだか眠れそうだ。耳を打つ沢の音が遠くになってきた。まぶたも重くなってきた。トロトロトロ……。

(二)

拝啓 御二方共に元気で活躍の由。先日雑誌にて拝見致し喜んでおります。御二方にとって興安街以来初めての御連絡ですので、さぞかし御驚きの事と存じます。

私も生命だけは何とか故国の地へ運びこんだのです。

色々お話したい事はあるのですが、きりがありません。用件のみお書き致します。

けい子は私がお預り致しております。

もちろん、貴方がた御二人の娘さんの事ですし、理由は、ふくしゅうのためでした。

満州から引揚げてきた当時の私がもっていた御二人に対する気持については、貴方がた御自身で、察して戴けるものと思います。

しかし、けい子をつれてはきたものの、その可愛さに手を下しかね、ついつい今まで育ててしまいました。いや、けい子を育てる事は私の生きがいになってしまったといえましよう。

いくら私を裏切ったとはいえ、一時は私の妻であった由起の子であるとすれば……。

乳のみ児だったあの子を十五年の月日が、いい娘に仕立ててくれました。貴方がたに対する底深い恨みも、けい子の笑顔が流れてしまいました。近頃では二人での生活を運命の



皮肉が私にさずけてくれた、ささやかな幸福  
と思うようにさえなっておったのです。

ところがここ一、二年の間、私の健康がす  
ぐれず、先日医者にみていただいた処、私に  
残された時間は良くて半年という宣告を受け  
ました。

「癌」しるる医者と大喧嘩までして聞き出し  
た診断がこれでした。

医者はこちらも言いました。「貴方をなおす  
ことはできない。しかし貴方が生きている間  
に受ける苦しみは、軽くしてやることができ  
る。だから入院なさい」と。

私は身辺整理のため、一週間の期限つきで  
病院を出ることを許されました。それで、こ  
んな手紙を書く気になったのです。

けい子はお返し致します。

この手紙がつき次第、私とけい子の山小屋  
をおたずね下さい。念のため、お預りした時  
けい子が着ていた産着うぶぎを小包にてお送り致し  
ました。山小屋の地図、私の診断書はこの手  
紙に同封致します。

追伸。貴方がたがこれを貰だとお感じてし  
たら、警察の方を同行して下さい。さし  
つかえありません。

現在の私にとっては、けい子の将来の心配

しかありません。貴方がたの処へ私が、けい  
子連れて出かけようとも思ったのですが、  
それをする氣力が、もうないのです。

私はもう山を出ないつもりでいます。入院  
も致しません。苦痛に耐えられなくなったら  
ホロンバインの哲からもらった白一本で、眠  
ったまま阿弥陀様のお手許へ参ろうと思っ  
ています。籍も満州で死亡となったままです  
し山で骨になったからといって、貴方がたに御  
迷惑がかかるということもないでしょう。  
では、貴方さまがたのおいでを待ち致し  
ます。

敬具。 荒木良雄殿、及び由起殿

山内一平

(三)

——俺は寝ているんだな——ボンヤリした頭  
が俺にささやいた。——雨が降っているよう  
だな——と、だいぶ前から重い頭がつぶやい  
ている。

目の前は真暗な闇である。自分が目を開け  
てるのか閉じているのかまるっきりわからな  
かった。心地よい疲労が体を重くおさえつけ  
て地面にめりこませているようである。

まぶたを動かしてみる。目を開けていたの  
がわかったので目を閉じる。

——やれ、やれ、またか！——と、胸の中で  
つぶやく。手も足も、まるっきり、ついてい  
ないじゃあないかと、おもいうくらい居心地よ  
く、どっかへおさまってしまったている。

——何故、目がさめたのかな？——とさっき  
からしきりに心に問いかけている。

ふとテントの中に何かのにおいが強くただ  
よっているを感じる。冬眠あけの熊穴みた  
いな臭いもするし、夏の草むらのように、む  
れたような生臭く暖かな臭いも感じる。

——寝袋シュラフに詰まってる水鳥の胸毛が、くさっ  
てでもいるのかな？——ここんところ、ずっと  
使わず、押入につっこんでおいたつけ。夏は  
やっぱり虫干しなきやあだめだな。かびくら  
いはやしてるだろう。このしめり氣と俺の  
体温で、ほんわかしてきたんかな。草の汁も  
俺のあせもしみてるからな。——それにして  
も、ばっかに強いにおいだ。けだものくさい  
やつだ。人間だってけだものなんだから、こ  
んなにおいでバスに乗ったら嫌な奴だと思わ  
れるな——。

その時、しびれるように重くしずみこんで  
いる身体に、疲労以外の何か別の物の圧力を  
感じた。クワァと血がのぼった。体中の神経  
がその変化をさぐろうと緊張した。



胸から腹、腰にかけて、ねばりつくような熱い重みと接触感があった。

「何だ！ 何だ！ 何だ！」

フィツと赤石小屋の凍死人のゆうれい話が頭に浮かんだ。

「そいつの隣に裸の男が寝ていた。

闇の中に白っぽくういて見えた。

寒いから服をくれといった。

上衣をやるとまだ寒いと言った。

あんたの着てるのを貸せと言った。

ズボンも下着もやった。

朝になったらいなくなった。

山を下りたら山の麓の衆が、あんたも会

ったかねと言ったそうさ」

はらわたがギューツとしめつけられ、胃袋

が空気にさらされているように冷たかった。

頭はガーンとしていた。手足の指、爪、耳

と身体の部分部分が、ばらばらにそこら辺に

ころがっているみたいで、まるで自分の身体

ではないようだった。

フーッと息の洩れるような音が、足許の闇

から聞こえてきた。腰がしめつけられる。何

かがグイッと押しつけられる。そこから熱気

が伝わってくる。

動くな！ 動くな！ ようすをみるんだ。

念仏でも、唱えるように頭がくりかえす。

もし熊なら一撃と一噛みで殺られる。絶対

動くな。心臓の音が高すぎる。呼吸をおさえ

ろ。つばをのむ音に気をつける。ちきしょう

息が苦しい。胸を動かさずに呼吸しろ。

秋ぐちに食いだめできず、冬眠しそびれた

熊は気が荒いという。

こんどは、ゆすぶり始めやがった。遊んで

やがる。チキショウメ。

その時、閉じたままの眼がサッと一瞬の光

を感じた。小石や枯枝をおさえるように踏む

音が近づいた。ついで何かが私の肩にふれ腕

をさぐった。やがて、それは、力を抜いた俺

の手を、俺の上に乗っている何かにあてがわ

せた。

それは冷やりとして、なめらかだった。俺

の手は自分以外の意思で自由にそのりんかく

を、たどらされた。柔らかで暖かみのある触

覚を感じた時、俺の手をコントロールしてい

た何かは離れた。テントのゆれるのと闇の気

配の重みが少しうすれるのを感じた。

——一匹は消えやがった——と思った、とた

ん先刻の感触がよみがえった。

身体のこわばりがほどけ、深く大きい息が

俺の口から洩れた。

——女だ！——

それからの俺は自分自身に戻っていた。や

っこさんは強烈だった。ペロペロとなめまわ

す、かみつく、ひっかく、けとばす、つきと

ばす、そのくせすぐに、じゃれついてきた。

機を見てそいつを組みしき何とか仕止めた

時、右肩に焼けるような痛みを覚えた。やつ

は、不意打ちをくらって上下逆転した俺から

一挙に離れようとした。お蔭で俺は、すがり

つくものもないまままで引きずられちゃった。

まあ、驚いたのなんのって……。

やつは俺を一メートルくらい引きずって歩

いたあと、立ち止まって振り返った。やつの

顔の辺りの闇にカツと燃える小さな二つの青

い火を見た。

と、同時に「ウォーッ」と吠える声が、あ

たりをうめつくして響きわたった。それから

やつは外に跳ねた。

次に俺が気づいたのは明けがたの四時半だ

った。体中が痛んだ。さんたんたる有様だっ

た。まず、体をさぐってみた。何とか無事の

ようだ。しかしまあムチャなやつだ。エンジ

ン・トラブルを起こしたダンブじゃあ、ある

まいし俺が大切にしているものをチェーン代



りにして引っぱるたあ何事だ。こんな反則をやられたんじゃあジャイアント・馬場だったのびちまわあ。

右手は肩が痛んでつかえない。かわきかかっている血で右肩はベトついた。

シャツも背中中はバリバリに破けている。体中傷だらけでカッカはてっている上、関節という関節がみなガタガタだ。

俺は気が変になっただけのかなと思った。感じは確かに女だったんだが。いや、まてよ。そういうやあ、首筋や腕の筋肉は固くてゴリゴリしていたし、足が子供みたいに細いし、形がどっかおかしかった。

やつは、いったい何物だ。

急に寒けがした。トリスの小びんを引っぱり出すと三口、飲んだ。いっぺんに半分減ってしまった。

傷口を洗わなければならんがテントの外の闇の中へはいっていく気がしない。外の気配をうかがう耳に、今まで忘れていた沢音が大きくきこえてきた。

「すべては明るくなってからだ！」

自分に言いかけると、残りのトリスを飲みほしてシュラフにもぐりこんだ。

こんどは左手にしっかりと鉈をにぎってだ。

#### (四)

オオイタヤメイゲツの純林を抜けた処で良雄は立止まり由起の方へ振り返った。

「五分の小休止だ。坐るんじゃない！ 立ったままやすめ。何回いったらわかるんだ。結局、その方が楽なんだ。坐れば疲れが出る。歩くりズムがとぎれるんだ。初めの一、二時間間が苦しいだけだ。あとは楽になる。慣れがでてくるからな……。お前の分だ、一口飲めいくらのどがかわいても、三十分一口だ。その方が疲れが出ない……。背囊もおろすなど言ったら。立止まるだけで楽になった筈だ」

良雄のブツクサ言う声は、すぐに山の静けさの中にのみこまれてしまった。

「けい子、可愛くなったでしょうね？」  
由起がポツリと言った。

良雄は黒いしめった木々から目を転じ、これからのぼっていく方の、コメツガ、シラベトウヒ等の針葉樹林を、あおぎ見た。

——満州にもあんな木があった——  
息は荒かったし、こめかみは血が走っていた。良雄はひたいの汗をぬぐった後、目を自分の太鼓腹におとした。

——わしも年をくったもんだ——

良雄は不機嫌だった。

満州時代を通じて得た、危険をそれとなく知らせる予感がしきりにはたらいっていた。それが良雄をいらだたせた。

彼は昨日から今朝まで、手紙についてのあらゆる検討と確認を行っていた。

奴の心境以外は全て真実のようだった。奴のおもわくが手紙どおりかは、確認のしようがない。それに文面の裏には、ひっかかる点がいくつもある。

① けい子が現在生きているという証拠は何もない。産着は奴がけい子を連れだしたという事以外には何の証明にもなりえない。

② 彼に死期がせまっているという事は、彼が官憲にとらわれず行動できるという自由を与えている。奴にその気さえあれば、わたし達二人を警官の前においても射殺するだろう。法律などというものは、今の奴に対して抱束力を失っているのだ。

③ 他の場所で会おうと思えば会えるのに山小屋に場所を指定した理由は何か？ わし達二人をわなにか、ゆっくりなぶりものにするつもりかもしれぬ。それで人目をさけるため山小屋を指定したのではないか？

なんにしても不意討と、相手の自由を奪う



ことがかんじんだ。

あいつが悪意を持ってるか善意を持ってるかは、けい子が生きているか死んでいるかでさまる。もし、けい子をこれまでの十五年間育ててきているとすれば情が湧き、結局は、けい子を悲しませる、ふくしゅうなど出来ないだろうからな。

「警察か、誰か他の人に頼めないの？」

由起が言った。

「けい子の事と奴のふくしゅうの事だけだったら、それでもいい。しかし、これには、わし達の過去を世間の耳目から遠ざけておかなければならんという問題がある。これがあるからこそ奴は、あんな手紙を出すことが出来るんだし、わなとわかっていても、わし達がいかなければ解決できないんだ」

良雄は由起に答えながら、まだ相手のでかたについて考えていた。

——まだ何かあるように思われる。だが、これ以上考えない事にしよう。考えすぎは人を臆病にし、行動をにぶらせる——。

「由起、お前、ここから帰れ。これから道もきつい」

「もうすこし、いってみるわ」

「きりがない。約束だ、帰りなさい」

「邪魔はしないわ。けい子を一目でいいから早く見たいの」

「ゆうべ話した筈だ、生きてない可能性の方が90%だ。カモになるんなら、わし一人でたくさんだ。それに一人の方が自由に動ける」

「けい子は生きています」

「テンパーセントな」

「なぜ、そんなこと言い切れるの。あなたはあなたは私がもうおばあちゃんなので、邪魔になってきたのね。それで、そんな残酷なことを平気で言うんだわ。けい子は、あんなにとっても、たった一人しかない子供なんですよ」

「いいか、よく聞くんぞ。けい子が生きているという証拠は何もない。そしてな、奴がけい子をさらった証拠は歴然だ。奴は俺達を殺すだけのうらみをもっている。死期のせまった奴にとって、今度は最後のチャンスだ。いいか、奴の手紙ではっきり断言できるのはこれだけだ。俺はな、奴に二度もチャンスにくれてやる程の甘ちゃんじゃないんだ」

「でも、あなたは、テンパーセントの可能性があると、いったじゃない」

「そうさ。殺されたという証拠も、ないんだ

から」

「じゃあ、生きてたら、どんなことをしてでも、連れて帰って下さるでしょうね」

「生きてればな。生きてれば、まず問題はないだろう。しかし、それを、あまり期待しちゃあだめだ……。それに、もし死んでたら、奴をやってやる、じわじわ苦しませてな。どうせ、死ぬ奴じゃああるが、楽には死なせない。少なくとも警察なんかに渡して、わし達の過去を洗いざらい世間にはき出されるなんてことはさせないよ。わし達の尻ぬぐいはわし達でやるのさ……。仮りに、仮りにだよ、山内の奴が、これがけい子だと言って、小さい骨のかたまりでもお前に投げてよこしたとする。お前はそれに耐えられるかね。また、わしがだ、奴を責め殺す事になったとする。お前、それを見ていられるかね……。お前は、引き返すべきだね」

「いいわ、わたし帰ります。でもけい子のことだけは、はっきり確かめて下さるわね」

良雄は、ゆっくり、うなずいた。

(五)

良雄は、びつこの人影が彼の前を通り、水場でバケツに水をくみ、また戻って来るのを



見守った。

バケツの水音がピチャピチャ聞こえ、ゆがんだ影が目の前に来た時、良雄は木の影から声をかけた。

「大変だな、山内」

山内は立止まった。

「中尉さんかね？」

良雄は木陰からゆっくりと出た。山内は良雄の手にさりげなくぶら下げられた銃に、視線をはしらせて、目を細め、顔をくずした。

「中尉さんは、あいかわらず鉄砲好きらしいですな。途中、何かいましたか」

良雄も笑って答えた。

「いやあ。こんどだけは、最後まで猟がなければいいがと思ってるんだ」

「大分お待ちになったようですね」

「昨日、三時頃ここについてね。悪いとは思ったが見張らせてもらったよ」

「こんな処では、なんですから小屋へ行きませんか。昨夜は冷えたでしょう。熱い茶でもいかがですか」

二人は山内を先にして歩き始めた。小屋の前の空地に甲斐犬が一匹いた。見なれぬ人影に耳と目をこちらに向け寝そべっていた。

「すまんが、犬をつないでくれるかね」

「いいですよ。しかしその鉄砲、見事なもんですな。連発ですか？」

「五連だよ。ウインチェスターのモデル70、スタンダードって言ってな。遠目にも近目にもいい」

「熊うちには手ごろなようですね」

「大物うちには、いつもこれを使ってるよ、ところで犬の方だが」

「ああ、そうでしたね。なわは小屋の中なんですがね」

二人は土間にはいった。山内はバケツをおろすと壁のロップに手をのばした。

「待て！」と、良雄は鋭く言った。「俺がとろう」

良雄はゆっくり近づくにロップをとり、山内に手渡すと、入口に立って犬をつなぐのを見守った。

山内が瓶に水をあけて囲炉裏に坐ると良雄は、つぶやくように言った。

「さて、と。けい子はおらなんだようだが、聞かせてもらえるかな？」

「まあまあ、そういそがんと。中尉、茶を今いれますから」

「中尉はやめてもらいたいもんだな。今は社長の方がなれてるんでね。それに火と鉄瓶に

も近づかんでくれ。茶は、わしが入れる」

「いいですよ。中……いや社長」

「茶わんは、あそこかな」

「すいませんね。お客さんに、していただいたのでは」

棚の上には、どんぶりばちが三コと湯のみ茶わんが五コあるだけだった。はしは一ぜんしかなかった。

部屋の片隅につんだ夜具も、ふとんが二枚きりだった。壁にかかっている服にも、女つ気のあるものはなかったし、二人分にしては少なすぎた。

「まずい事になりそうだ」

良雄は、いれた茶を山内の前に置きながら言った。

「すまんが、飲むには左手を使ってくれ」

良雄は土間に立ったまま、山内が飲むのを見て自分も飲みかけたが、

「やはりわしはこっちにしよう」

といって、茶をすててポケットから小型の金属製の容器をとり出し、ブレンダーを一口大きく口に含んだ。

「ここは暗いし、それになんだから、外で話を聞かせてもらおうか」

良雄は茶を飲み終った山内に言った。



二人は外に出ると、枯草の上に向かいあって坐った。

「中尉さんは、あいかわらずですな。そうでなくちゃあ、いけませんや」

山内が、ぼそりと言った。

「あのターパイのオーラは何だね」

「赤石岳ですよ」

「どうも、あれが君の墓石になりそうだな。

で、けい子はどんなふうに殺ったんだね。それが言いたかったんだろう。君の話が終わったら、わしの方でもいくつか趣好を考えて来たんだがね」

「中尉さん、早まっては、いけませんね。けい子は生きてるんですよ。手紙にも書いたようにね」

山内は、ゆっくり語り始めた。

# (六)

二十年前の八月十七日から三日間。私はまだ、目の前のこととして覚えています。あの時死んだ辻田や小倉達が、時々ここへ訪ねてくるんです。

私が夜、寝ていると、長谷川のあの大きいびきが横から聞こえてくる事もあります。疲れてるんですね、彼は。……だから私は黙っ

て寝かしといてやるんですよ。死んだって、まだ、彼の体が休まらないなんて悲しいですよ。

私がたまに焼酎を手に入れて、いっぱいやってると、いつのまにかみんなが、私の囲りに集まってるんですよ。パイチュウ飲むしか楽しみのない人達でしたから。

辻田のおくさんが言うんですよ。わたしは十人くらいの男達に自由にされたあと、めっちゃめちゃに切り裂かれて西山に送られたのよ……ってね。薬が飲めなかったため、恥ずかしい死にかたをしたとって泣くんですよ。

彼等と話してますと、私は、もう、こんなところが、皆といっしょに死んだんだ、などと思ったりします」

彼は胸をたたいてみせた。

「犬っころや猪みたいに巻き狩されちゃあどうしようもないですよ。」

麻畑なんてなものはひどかった。これだけは話さないことにします……。しかし無理もないことですよ。かんじんの時に兵隊さんが鉄砲かついでオイチツニノサンって引揚げてしまったんですからね。

皆は、あんた方が引揚げてしまった時も、軍用野菜なんてつくってたんですよ。皮肉な

もんです。

私はあの時、右目と左脚に貫通銃創を受けましてね。帰国できたのは奇蹟ですよ。しかしね、最近になって私は、こんなふうに考え始めたんです。私が帰国できたのは、皆が、貴方がたに、あいさつさせるための使者として私を選んだからなんだ、とね。

少なく共、あのとき貴方がたは私達開拓団に総引揚の連絡くらいはできた筈です。そうすれば、私達は三四日の時間的余裕も持てたし、わずかながらも助かる機会が与えられていた筈だ。

しかし、それはやってもらえず、千人近い人々が犬のように死んだ。むろんそれは、貴方がた二人だけの責任ではないでしょうが、私にとっては、はっきり目に見えるのは貴方がたなんです。

あれ以来、私の耳には、皆のささやきが毎日毎晩、きこえてるんです。

「中尉と由起に犬の苦しみを！ 犬の苦しみを！……」

中尉、あなたは強いお人だ。貴方は自分の死をも平然とうけいられる人だ。望みがある内は、生に執着するにしても。

そんな貴方であるとすれば死を与えた処で



たいしたことにはならない。そこで私は、全ての人間にとって共通の弱点「愛」を道具に選んだんです。

貴方の由起に対する愛には不確かな処が多いので一番確実な愛、親が子に対して持つ愛情を攻撃することにきめました。

しかし、それが単純な死の形をとったとすれば、貴方の生命力からして容易に立ちなおることが出来るでしょう。それで、けい子をお預りしてから十五年という年月が必要だったんです。

「けい子は、犬として、育てました」

けい子に子犬のおいを、べたべたにつけてみてね。母犬の処へやりました、すぐ乳を吸い始めましたよ。

人間というのは、不思議な生き物ですね。つくづく感じましたよ。犬として小さな時から育つと体格まで人間ばなれして犬のようになるものだということをね。

手なんかも、膝に届くくらいに長くなりますよ。掌は這って歩くので、コチコチです。足は細くて普通人の半分くらいの太さなんです。膝には、かたいたこができてますし顎も発達しましてね。犬歯なんか鋭くて長くなってるんです。言葉は、私一人ですから必

要もなく使いませんし、それに教えもしなかったから喰<sup>う</sup>くらいが関の山です。

兄弟犬は三匹いましてね。先刻つないだのは、その一番上の犬ですよ。あとの二匹は、けい子と一緒にどこかで昼寝でもしてるでしょう。

夕方から明方まで、餌あさりします。一日一食しか餌をやりませんので、あとは自分で狩をするんですよ。野ねずみ、うさぎ、りす鹿などが好物で、よく追い廻していますよ。

小さい時から犬とくろげまわって遊んできましたから、ひふなど堅くて厚くなってましてね。全身のうぶ毛も濃くて長いんです。

月一度の例のやつが始まった時は、おかしいですよ。自分の口がとどかないもんですから困るようです。手はつかえなくなってるんです。小さな時、靴のような手袋をはめて、ぬい合せておいたので、掌も小さく指も足の指くらいしかないんです。そこへ歩きだが出来て固まってしまったので、足の役目以外は、はたさないんです。

それでね、けい子は実に不機嫌な顔をしましてね。柔らかい地面や草にこすりつけましてね。すると、よくしたもんで、他の兄弟犬達が代りに世話してやるんですよ。犬だって

なかなかたいしたもんです。

その内に、あいつは犬達の中で一番大きいのを自分の亭主にしちまいましたね。

他の雌犬が色目でも使おうもんなら、やきもちをやきましてね、その雌犬に噛みついたりして猛烈なけんかをするんですよ。

そんな処は中尉……いや社長に似とられますね。

二年前、あれは子供を生みましたよ。もつとも、生まれてすぐ死にましたがね。

この辺は土地が高い上、十月から一月頃にかけては雨も雪もないんですよ。その上、風ばかり強いので、あれの死んだ子がミイラみたいになりましたね。それを半年ばかり抱いてましたよ。母性愛ってえやつですナ」

遠くで犬が狂ったように吠えていた。山内は立ち上ると、

「犬共が、さわいでいるようですね。ちょっと見てきましょう」

と言って歩き始めた。良雄も黙ってあとに続いた。

山頂附近は一面の熊笹だったが、皆、立枯していた。暗い針葉樹林の、とぎれから明かるい光の篠笹の中に出た時、目前に三匹の黒



い影が見えた。

山内が言った。

「やってますね」

良雄は一つの影をじっと見つめた。確かに人間だった。

だが、その肌は日焼け、あか、泥、濃くて長い、うぶ毛の密生で黒く、頭の毛は短く切られてはいるものの、モジャモジャに波打っている。顔は目の光の鋭さと広げた口から、だらりとたれ下らせている舌でけだものを感じさせていた。しかし膝で折れ曲っている後足の不自然さが目立った。

呆然と立ちつくした良雄の耳に、笑い声が響いた。山内が歯が欠け落ちた真黒に見える口を、ぽっかりと開けて、かすれた声で笑っていた。

突然、ライフルの連射音がするどく山にこだました。

一時間程過ぎた。良雄は枯笹の上に坐りこんでいた。

目はじっと、けい子に向けられていたが、心の火を失った目は、ガラス窓のように空ろうつろだった。

周囲の山は、まだ、銃声がこだましている

ように感じられた。

夜、良雄は小屋に寝ていた。隣には、つみ上げられた枯笹や木を、しとねにして、けい子と山内、二つの屍が横たわっていた。

明方近く、単身で山を降りる良雄の姿があった。後方の山影から、小屋の焼ける煙が昇り、炎が見えていた。

## (七)

二十日後、良雄も由起も、常態をとり戻していた朝、突然、数人の刑事と警官の訪問を受けた。

取り調べ室には、S県警を名のる刑事がいて良雄と応対した。

その夜十時頃、井沢刑事は良雄にタバコを差し出して火をつけてくれてから言った。

「おもしろいものがあるんですよ。ごらんになりますかな」

井沢刑事が渡してよこしたのは、一冊の大学ノートだった。表紙にはこうあった。「けい子成育日誌」中をばらばらとめくると、半分以上は写真だった。

刑事が言った。

「四日前に手紙やらなんやらと一緒に雑誌社

に届きましてね。記者の方と私達の四人で山に行きました。手紙にはこうありました。

「私は十二月五日附で、この手紙と証拠物件を送るように、ある人に頼みました。私がこれを書いてる今は、十一月二十日です。」

私は、ここ一週間の内に荒木良雄氏に殺されるでしょう。殺されなければ、手紙他は依頼した人から戻してもらいますので、この文を雑誌社なり警察の方がごらんになった時は、私は殺されたと、お考え下さって良いかと思います。又、私達の屍は荒木氏の満州時代のくせから、山小屋ごと焼くと思われ  
ます……」いかがですか」

良雄の耳に、山内のあのかすれた笑い声が高く響き始めた。

## (八)

俺は、又、山へ来た。例の場所にテントをはった。

また、あのモーレッツな奴に会えないかな。一週間ばかり、あいつの来るのを待ってみるつもりだ。

俺は、あいつにはれちまった。

——おわり——





七月号に載せて頂いた読者通信のおかげで編集部からお便りを貰ったばかりでなく、全国読者の皆さまから、沢山のお手紙を寄せて下さり、劣等感に悩まされていた私は、本当に心強く感じました。

あの通信を書きます時、お友達のすすめもありましたけれど、最初はためられて中々書きしぶっておりました。今では勇気をふるって書いたのがよかったと思っております。

心が落ちついたと申しましょうか、今までの狭い世界に閉じこもっていたのが急に大海

## <告白>

# 白い肌への劣等感

清水民子

原の広い視界にとびだしたようで、すっかり気持ちが変わってしまいました。

それでも、一度傷ついた女心というものはそれまで無智に近いまで純真だっただけに、中々一度には回復しないものでございます。

今度お知り合いになった方がDPEも自分でするからといって、私のヌードをお撮りになりました。縛りもやりたいのだが、はじめはヌードだけにしておこうと言われて私にも写真を下さいました。発表できるものなら発表下さっても差支えございません。

奇くはまだ二冊ばかり友人のご主人から見せて頂いただけで、本当は縛りについても何もわかりません。

高校を卒業してすぐ勤めに出た鉄工所は、本社が大阪になって各地に分工場のある大きな会社で、私の町の名前をつけた××工場も敷地が数万平方メートルもある広さで、この町随一を誇っていたのでございます。

従業員は十対一ぐらいの割合で男性が多く当然、女性が珍重されていました。

労務課に配属されていました私は男の方との接触も多く、それに自分で申しますのも変ですが誰からもお世辞でしようが、きれいだと言われ、自然ちやはやされてきました。

一年ほどは夢のように楽しい日々が続きました。昼休みの三十分ばかりの休憩時間には広い敷地の中の芝居や花壇でうちくつろいで雑談にふけったり、テニスやバレーに興じたりしました。

そのうち、カメラ熱心の人達がいつとはなしに集まり、いずれ貴女方は結婚したら会社をやめるのだから、一つ記念に写真を残しておかないかと、私達女子従業員の若者数人が選ばれてモデルになることになりました。なにしろ広い敷地内のことですから、背景になる場所はいくつでもあります。

その当時写して貰った写真は私はきちんと



アルバムに貼ってありますが、それを見かえすと私は胸が痛むのです。

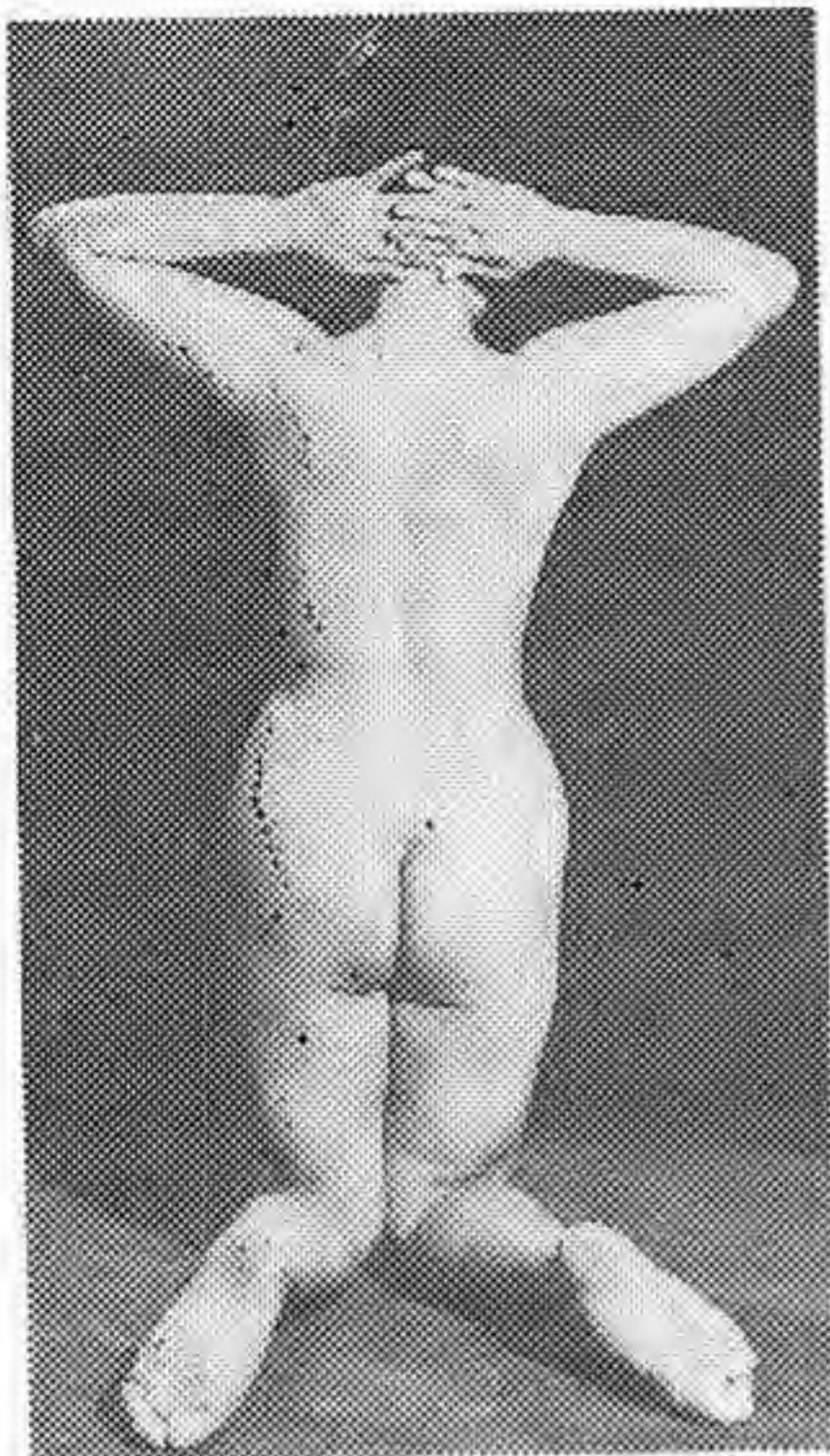
私は勝本という人と恋愛をした結果、皆に祝福されて職場結婚をしたのに、楽しいと思った生活も僅かばかり、主人は私の身体の不備を理由に離婚を迫ったのです。

結婚して一年間、私は悩みに悩んだ末、こんなに苦しむんだったら、と決心して、とうとう思ってもみなかった離婚に踏みきってしまいました。

職場にいた頃のアルバムを見ると、私は泣けて泣けて仕方がないのです。

今度、ご親切な便りを沢山頂いて有難いと思います。でも、そんな温い友情のこもったお手紙にも、私の傷ついた心はどうしても、元には戻らないのです。

再婚してはとすすめて下さる方もあります



が、現在のような自分の乱れた気持ちでは、かえって相手の方を不幸にするようにで恐ろしいのです。幸い、勤めに出てタイピストをしておりますので生活に不自由はありません。

このままアパートの一人暮らしを続けて自分の心の整理が出来るまで、気ままに過ごしたいと思っています。実家の両親は離婚の本当の原因を知りませんので私の我儘だとばかり思っているのが悲しいです。

離婚の時、主人から貰った僅かばかりの金は、このアパートの権利金を支払うと殆ど残りませんでした。

でも、いいのです。私は読者通信に自分の拙い文章を載せて貰ってから、何かしら、内から力が湧いてきたように思えるのです。

無毛ということとは、夫婦生活にも出産にも何ら支障がないばかりでなく、かえって衛生的だとさえ言われているのに、やはり男性の中には感覚的に嫌悪される方が、いらっしゃるのですね。いや、そういう方のほうが実際は多いのではないのでしょうか。

奇クでは、むしろ女性のを剃



り落としたいと願っていらっしゃる方がとても多いとか。

でも、それは有るものを剃るということに興味を示されるのであって、私のように最初から無いものに興味を示されるかどうか、それは疑問だと思います。

今度私のヌードを写真に撮られた方も、貴女だったら修理しなくてもいいですね、と言って冗談のように笑っておられました。私にとっては冗談事では済まされないことなのです。

このような私を、どうか、よろしくお導き下さいませ。



## 作

## 創

恥

(ちじよく)

辱

林

たけし



志羽利也・画

昨夜のオレは全くどうかしていたらしい。冷たい板敷の房に、薄汚れた毛布にくるまって、酔醒めの水がほしいなア……とつくづく思いながら、オレはこれから起こるであろうことを想像して苦笑と困惑とを禁じ得ない気持だった。

いぎたなく転がっている連中。それは拘摸<sup>すり</sup>や搔払い、恐喝、ポン引、と言った類<sup>たぐい</sup>の、いわゆる人生の吹き溜りに暮している人間たちだろうが、そのムカムカするような体臭が、オレの頭痛を一層強めるようだ。

全く、恥ずかしい話。オレともあろうダンディが、こんな連中と一緒に、ベルトもネクタイも外され、河岸のマグロのように転がっ

ているなんて……。しかし、それも身から出たサビで仕方がない。オレは暴行傷害、公務執行妨害でブチ込まれても当然のことをやらかしてしまったのだから。

嫉妬の感情は絶対的なものである、とドストエフスキーは言ったらしいが、その通り、オレは嫉妬に狂って、あの白ブタを叩きのめし、四つ谷怪談のお岩さんのようにしてしまっただ。一度は決着をつけなければならないうと前々から思っていたことが遂に起こった訳だが、女房の沙織は可哀そうに、ただオロオロするばかりで、パトカーがやって来た時には、気を失わんばかりに動転して、しくしく泣いていたようだ。彼女はそれほどやさし

くて、女らしい女である。オレは口で言い表わせないくらい彼女を愛しているのだ。だからこそ、あんなこともやらかしたんだろうがその彼女がきつと……。

オレは、たまらない気持で、頭を抱えこんだ。そして次の瞬間、肚の底からオカシサがこみ上ってきた。

—○—

オレたちの結びつきは、三年前の初夏だった。その頃、丁度親父が亡くなって、オレが跡目を継ぐのを拒否したため、と言うより、暴力団壊滅作戦とやらで、組が続々解散していた頃だったので、Y組傘下で長年勢力を振っていたオレの一家も、代紋を返してチリヂ



リバラバラになっていた。

オレは親父の遺してくれたマンションの家賃で暮らす堅気な人間になったんだが、刺戟ある生活が身に滲みついていていけるせいか、毎日が退屈で仕方なかった。オレは毎夜のように飲み歩き、遊び呆けていたのだ。

母さんは小さい時に死んでしまって、オレは親父の愛を一身に受けて育ったせいか、相当地に我尽で贅沢が身についていた。その上、親父がオレをK大に送りこんだおかげで、多少の学問も習っている。大学はしかしオレの心を捉えるほど魅力ある場所ではなく、三年目には自然に中退してしまって、親父をひどく残念がらしたものだ。

オレは、なみの男より多少小柄なのは仕方がないが、いつもニヒリスチックなポーズで行動するのが好きだったし、自分で言うのも何だが日本人にしては彫りの深い顔立ちでアランドロン張りの、どこかもの憂い眸をして淋しげな翳りがあるものだから、大ていの女がたちまちに憧憬と思慕を寄せてくる。

オレは又、常に最高のお洒落をする。スーツは総て英国製の生地で、有名な「S」で仕立てさせているし、タイピン一つにしても老舗を誇る「T」の保証付だ。勿論、靴にして

も、シャツやネクタイに至るまで全部オーダーと言う凝りようだ。そして、外車を乗り廻し、ケントを銜<sup>くわ</sup>える。ときたら、気障なプレイボーイを思い浮かべるだろうけど、当時、オレが気に入って通っていたクラブの格式を考えると当然であるのだ。

そのクラブの客筋は、大会社の社長、重役クラス、大学教授や医師、文化人知識人と呼ばれる人たちでしめられ、ホステスにしても知性とセンス抜群の美女が揃っている。大体オレの如き若僧が出入りできる筈もないのだけれど、オレのカッコいいルックスが得をして、いつの間にか坊や坊や、と可愛がられて常連になってしまっていたのである。

オレがモテたのは、もちろんロマンスグレイのおじさま族にひけをとらない気前の良さにもよっただろう。この店に、オレは個人で毎月十万円以上は使っていたし、親父が暴力団の組長だったなんて誰も想像つかないだろうと自信が持てるほど、折目正しく振舞っていたので、店の人は一体どここの御曹子だろうと噂を高めていたようで、オレのミステリアスな魅力に関心を寄せていただろうことは確かだった。

あれは確か六月だった――。

満員で席がなかったので、オレはカウンタ―に坐って、隅の花瓶に活けられた紫陽花の複雑な色を眺め、ナポレオンの芳香を含みながら、何となく冥想に耽<sup>かた</sup>っているような表情を作っていた。

ふっとミツコのそこはかとないういぐい漂い「忙しくてごめんなさいね。まア、何だかずい分、お淋しそうですのね」と言いながら、そっと肩に触れてきたホステスがいた。

あまり見なれない顔だったので、オレはそっけなく、「いや、別に。ボクは放つといってもらう方がいいんです」と、いつもの調子でキザに答えて、そのくせ横目で、彼女をあらためて観察した。

美しい！ 実に美しい。上質の陶器のように滑らかな皮膚をして、その眼許にはほんのりと紅の翳<sup>くれない</sup>があり、長い睫<sup>まつげ</sup>が愁いを含んで震えている。すんなりと形よくのびた鼻梁に、少しセンジュアルな唇が濡れているように見えて、見事な構図を画いている。

オレはゾクゾクするような感覚に襲われ、もしもこんな表現が許されるなら、一瞬にして彼女に恋をした！

彼女はオレの気持を見透かしたように艶然たる微笑で話しかけてきた。



「わたくし、沙織と申しますの。最近入りましたので、何もわかりませんが、よろしくお願いいたします」

「いやあ、こちらこそ」

ドギマギしながらオレはやっとこれだけ言うのが精一杯だったが、胸の中のどこかで、彼女のアクセントは関東風で感じがいい、それに声がハスキーで魅力がある、などと思っていた。

それからのオレは沙織を目当てに通いつめとうとう、口説き落とすことに成功した。オレはそれこそ有頂天になって彼女に溺れきった。オレたち独特の甘い生活は、マンションの一室を無二の楽園とも花園ともいうにふさわしいものにした。

だが二年ほどして、さすがの愛の花園にも多少のマンネリ化が訪れた。沙織はもう一度お勤めに出ようかしらと言うようになり、最初は猛烈に反対していたオレもやっぱり遊び人根性の抜けない人間だったものだから、まあいいだろうと許す結果になってしまった。

—○—

ここで一寸、オレたちの秘めごとの一端を告白しよう。オレと沙織は、世間なみの夫婦生活と違って、殆ど毎夜、多少のプロセス変

化はあってもずい分変わったお芝居をやる。暴漢に襲われる女、つまり強姦ごっこをして楽しむのである。

マンションは玄関を上ると六帖のDキッチンとバストイレ、その奥に八帖の洋間と六帖の和室がある。沙織は着物がよく似合って、殆どの季節を和服で通しているものだから、寝室は日本間に八端の蒲団など敷いて、枕許には雪洞風のスタンドが淡い光を投げかけ、悩ましいムードを漂わせている。そして沙織は、緋縮緬の長襦袢で横たわり、眠っているふりをしている。オレはベランダから音もなく這入って、ナイロンストッキングをすっぱり被ったグロテスクな顔で彼女を見降ろす。手には、親父の形見の米国製二十二口径のピストルを持ち、

「起きろ！」

とドスのきいた声で言っ、彼女の枕を蹴つとばすのだ。

「お前ひとりか？外に誰もいないだろうな」

「はい……」

彼女はガタガタ震えながら答える。

「オレは追われてるんだ。有金を全部出せ」  
彼女は顔面に恐怖の表情を一ぱいに浮かべながら、蚊の泣くような声で訴える。

「どうか、お願いですから、命ばかりは……」  
オレは突き出した冷たい銃口を、ピタリと彼女の頬に当ててやる。

「言う通りにすれば、命を取ろうとはいわねえ。早く金を出してしまえ！」

と言って促しながら、踊りで練えた沙織のしなやかな身体を睨めまわす。すると彼女はあわてて衿元を掻き合わせながら、ちよっと媚びた眼付をするのだ。

オレたちは、こんなお笑い草の演技に、何とも名状しがたいほど昂奮することが出来、次第に欲情してくるのである。

沙織は立ち上って、箆笥の小引出しから財布や預金通帳などを取り出して、

「どうか、これでカンニンして下さいまし」

「たったこれっぽっちか？」

「ええ、主人もいない独りぐらしで、大した貯えもありませんの……」

「仕様がねえな。宝石はあるだろう、みんな出してしまいな」

彼女がしぶしぶ宝石箱をあけると、美しいダイヤやエメラルドが燦然としてオレの眼を射る。オレはそれらを驚嘆みにしてポケットに入れながら、沙織を見詰める。

「オレが逃げおおせるまで、辛抱している」



と言って、蒲団の横にくるくると纏めて置いてあった赤い扱帯しごきや腰紐を使って、彼女を高手小手に縛りあげてやる。

「厭！ 厭！ お許しになって……お願い！」

彼女は悩ましげな声で哀願し縛られた体をオレの膝元で慄わす。裾は乱れ、髪の毛はほつれて白い頬にかかり、なやかな肢体は痛々しい感じにくねって、まるで晴雨の絵さながらの凄艶な美しさだ。

オレは突き上げてくるような快感に、われを忘れる思いで彼女に襲いかかる。

「ああ、許して!!……カンニンして」

沙織は不自由な体で身悶えし、抵抗はあえかな吐息と共にだんだんと弱まって行く。

—○—

沙織はクラブでも人気があつて、ずい分と口説かれることも多いらしい。品の良い店だの、客はみんなエリートだのと言っても、結局はどこも同じこと。男は女を求めてやってくるのだ。彼女と一緒にになってからは、デレデレと顔を出すほど野暮天ではないオレだから、わざとあまり店には行っていないけれど、沙織の行動は、やはり気になる。

毎日、夕方の六時になると、一分の隙もない鮮かな着付に、結い上げたばかりの髪が匂

うばかりの沙織を送って行くと、オレは深夜までの時間をもてあます。以前はよく賭場に顔出しして、小遣い稼ぎと暇つぶしをやったものだが、一切のギャンブルから足を洗ったこの頃では、飲むだけが楽しみと言う恰好でオレは、あちらのバー、こちらのスタンドとはしごして歩いた。

夜の三宮はいつも華やかで、人々は何の屈託もないみたいに、冗談を言ったり騒いだりしているが、オレの心にはどことなく空虚なものが流れている。オレは沙織を愛しているが、愛だけでは補えない生まれながらの孤独の虫が、魂の奥深く巣くっているようで、いくら飲んでも、ペーソスは深まるばかりだった。

オレたちは、毎夜一時前にスナックPで待ち合わせることにしていた。沙織のクラブ閉店を計算した時間である。

しかし、オレはある小さなスタンドの女の子に一寸イカれてしまい、どうしてもPに行くのが沙織より遅くなるようになった。

その女の子は女子大生でアルバイトに勤めているのだと言う話だけれど、かなりコケテイッシュなところもあり、その上、文学少女の傾向も持っていて、オレとの会話にも下ら

ない週刊誌ネタや、たいていの飲みやで語られる種類の話題は一切しない。つまりハイブローな話題が中心になると言うことで、オレの関心を惹きつけるのだ。

オレには彼女をものにしようなどと言う野心はなかったが、こうした知的な会話のやりとりが、そういう方面から離れてしまっているオレの空しさを、少しは埋めてくれる作用があるのか、ついつい時間を忘れてしまうのである。

沙織は、いつも遅れるようになったオレに嫉妬したり、機嫌を損じたりするような女ではなかったが、やはり一人で待っていることに辛抱できなくなったのか、店の同僚を連れにくるようになっていた。

その女は、顔立ちこそ美人だったが、色白はいいとしてもいやに太い肉のポインちゃん、その上何となくイケズらしいところもあって、凡そオレの好みには合わないのだが、沙織には店内でも特別好意をよせてくれ、ずい分と良くしてくれると言うので、オレは我慢せざるを得ないのだ。

ところがある時、妙なことに気が付いた。どうもそのポインちゃんは、沙織とただの同僚というだけではないらしいのである。



その夜も遅れたオレが、急いでドアを開けた時、帰りかける客が二、三人いて、オレの姿が見えなかったのであらうか、カウンターの隅に腰かけている沙織に、必要以上に寄り添った彼女がイチャイチャやっている。キスでもしていそうな感じにさえ見えた。

チクショウ！ オレはすっかり頭に来て、

日頃の紳士ぶった態度を忘れて、

「オイ、何をゴチャゴチャやってんねん。いやらしい奴やな」

と鋭い口調で言っちゃった。彼女は驚いて振り向いたが、たちまち開き直ってきた。

「アラ、何もしてへんわよ。へんな誤解せんといて頂戴！」

唇をちよつと尖らせて言う顔付はますますブタに見えた。だがオレはすばやく、沙織の表情に困惑が流れるのを読みとっていた。

「バーテンさん。アブサンロックくれよ」

「えッ！……大分、もう入ってるのでっしゃろ。そんな飲み方はしたら、悪酔してお身体こわしてしまいまっせ」

「ほんと。あなた、アブサンなんてお止しになって……ね、何か軽いものになすって！」

バーテンと沙織が心配して止めるのも聞かず、オレは無理矢理にアブサンの薄黄色の液

体をグイグイ流しこんだ。苦逢にがよもぎの匂いのする強烈な酒はオレの胃袋を灼き、みるみる酔いを廻らせてしまう。クラクラする頭でオレは「全く、この礼子と言う白ブタは、あの格調あるクラブに不似合な下品なホステスだ」と毒づきながら眼を据えた。

「あんた、いつも沙織がお世話になってすみませんア。おかげで僕も大助かりですわ」「いいえ——、どういたしまして。フフフ」

オレの皮肉をちゃんと読みとったこの女は巧みに冷笑してごまかしている。

どうして沙織が、こんな女と仲良く一緒に連れ立ってくるのだろう。きっとこの女は口が巧みに違いない。沙織は非のうちどころない素敵な女房だけれど、少しナルシズムなところが心配だ。礼子の奴は、きっとそれを見抜いていて、言葉巧みに沙織の心をくすぐるのに相違ないのだ。「こんな白ブタにジェラシーを感じてみても始まん」と、酔った頭でオレは自制しようとするのだが、哀しいかな感情に負けて、どうしても大らかな気持ちにはなれない。したたかに酔っぱらい、沙織を手古摺てこずりらせながら家に帰りついた。

そして、例の強姦ごっこにかこつけて沙織を縛り上げ、オレは本気で、嫉妬に狂った拷

問をやり出した。

「お前は、あいつと、ただの仲じゃないだろう。白状しろ！」

などと言って彼女を夜っぴて責めたてた。

「そんなバカなことを……。信じて頂戴。わたくし、本当に、あなた一人だけを愛しておりますのよ。貞淑な女ですよ……」

「嘘つけ！ お前がどんなに隠したって、オレにはちゃんと解るんだ。チクショウ、殺してやる！」

オレは、両手で沙織の首を締める真似をした。頭はカッカしていたが本当に真似のつもりだった。だが思わず力が入って、彼女はグッタリしてしまったのだ。オレはとび上るほど驚いた。

「沙織！ 沙織！ オイ、しっかりしろ」

ゆすぶり続けるのも必死で、すっかり酔いも醒め果てた。

しかし、うろたえるオレの眼下には、今までにみたこともないような、恍惚たる表情を浮かべた沙織の顔があったのである。

やがてうっすらと開かれた沙織の瞳にホッと見たオレは、反射的に平手打ちをその頬にとばしていた。

意識を取り戻した沙織に聞いてみると、不



思議なことに、実に何とも言えない快感だったと言うのだ。それは、まるで雲にのって、七彩の虹の中に融けこんで行くような、又、百花繚乱の花畑にでも身を横たえているような、得難い気分だったそうなのである。

「へえ？ 迦陵頻伽の声でも聞こえたの？」

とオレは半信半疑で彼女を冷やかしてやった。だが、沙織は、真剣な眼をして、

「そんなものは聞こえませんわ。ですけど、何て言うのかしらねえ。サイケデリックな感じとでも言ったらよいかしら？ きっとマリファナやLSDを飲んだら、あんな風になるのじゃないかしら」

などと言うのである。そして、小さく含み笑いしながら付け加えた。

「とてもいい気持だから、もうセックスはいらない……」

「なんだと、呆れたヤツだ。お前はいいかも知れんが、オレはどうなる」

「ではわたくしが、あなたの首を締めてあげようかしら」

「冗談じゃない！」

オレはあわてて拒絶した。いくら変わったことの好きなオレでも、女房に首締められて若しもそのままあの世へなんぞ行ってしまう

たら、それこそ末代までの恥ではないか。恍惚のままであの世行きするなら、最高の幸せである、などと言う人もいるだろうが、オレはまだ死ぬのはイヤだし、第一、恍惚とは思えない。

だがしかし彼女が首を締められて、うっとりする瞬間があるというのは嘘ではないかも知れない。以前に読んだ外国の短篇にも確かそのような事が書いてあったのを思い出す。

それは英国のある秘密クラブの話で、首つりクラブと言う題だった。会員は月に一回、古びた城館の人氣もないサロンに集まって、一人ずつ順番に天井からつるしたロープに首をひっかけて宙吊りになるのだそうだ。

二人の介添人が、時計を見ながら首吊りをしている人の表情の微細な変化を観察している。やがて彼が恍惚となつてゐるのを認める。と、あわや、と言うそれこそ何十分の一秒のところ、パッと救い降ろす。死とすれすれのスリリングなプレイをするのだそうだ。

オレは思わず首をすくめていた。

半信半疑のオレに構わず、それからの沙織は、すっかり首締めプレイがお気に召して、

「早く締めて……」

厭々だったオレも、次第に馴れてしまい、知らぬ間に、危険の一手手前で巧みに甦らせる技術を会得してしまった。しかし施術者としてのオレには少しも充足がなく、こんな夜をすごすのが次第に馬鹿々々しくなつて、オレは普通の女を欲しいと思うようになった。

例のスタンドのアルバイト女子大生、順子と名乗る彼女をとうとう誘惑したのも、そのセイかも知れない。

女子大生にもいろいろあるだろうが、水商売にバイトするような子は、もちろん実入りの多いのをあてこんでだろうけど、どちらかと言うと好奇心旺盛と言うタイプらしい。それだからいくらインテリぶってお上品に構えていても、オレが本気になれば、案外プロのホステスよりひっかけ易いと言う訳である。

オレはこの浮気を巧く隠して、沙織には気取られないようにしたつもりだが、天網恢恢疎にして漏らさずの譬え通り、ホテル街で手を取り合つて歩いているところを見つかつてしまった。沙織ではなく、白ブタの礼子にだ。もちろんすぐさま沙織の耳に入り、オレはさんざんつるし上げられ白状させられてしまった。

這い蹲つて謝るオレ。だが、沙織は日頃の



柔順さに似合わず強硬で、ついには、

「あなたが裏切ったことは許せせんわ。わたくしだって、これから勝手なこと、いたしますからね！」

と宣言する始末ですっかり参った。オレは心底、沙織に惚れていたのである。

——〇——

沙織はオレに復讐するなどと言う大袈裟なつもりではなかったのだろうけど、相当自尊心が傷つけられたとみえて、さすがに客と浮気するようなことはなかったが、礼子と前より親密になり、もうどう考えても只の友達ではないとしか映らなかつた。

人間とは妙なもので、どんな下らぬ相手にでも結構本気でジェラシーするものだ。彼女がまぎれもなく礼子といい線いつている、とオレは確信すると、もうたまらなくなつて、何とか現場を押えて、ぎゅうぎゅう言わしてやらなければ納まらないと思ひ始めた。

オレは順子の店で強い洋酒をガブ飲みして作戦を考えた。そして十二時前から沙織たちを張り込み、尾行することに決めた。

クラブの向い側にモータープールがある。

オレは横手の金網の陰に身を寄せて二人が出てくるまで根気よく待ち続けた。煙草を幾本

灰にしたことか。通りがかりの女たちが、オレの方へ妙な流し目をくれる。

やがて明るいクラブのネオンが消え、従業員通用口から次々とホステスが姿を見せ始め沙織と礼子がつれるようにして現われた。

オレは緊張して身構える。礼子がサツとタクシーを止め沙織を手招く。オレもあわてて後のタクシーに手をあげる。

「あのクルマ尾行てんか！」

オレはそう言いながら千円札を二つ折りして、助手席にボンと投げた。運ちゃんは、威勢よくスピードをあげて、走り去る沙織たちを追っかけ始めてくれた。

繁華街を抜けた車は、山手へ向かつてうす緑に輝くHホテルの玄関に横づけされた。女中が出て来て運転手に心づけのタバコなど渡している様子だ。オレは門のところまで飛び降り、さっと駆け出すと、降り立ったばかりの沙織の肩を掴む。驚愕する彼女に、思いきりバシ！バシ！とビンタをとばす。

沙織はハンドバッグを取り落とし、よろよろと片膝ついてのめってしまった。

「あんた、ひどいやないの！ そんな乱暴して、沙織ちゃんが可哀そうやないの。怪我でもしたらどないするの……」

「なにイ？ オン Dre 何の権利あつてそない吐かすんや！ オレの女にどないしようとおレの勝手じゃい。第一、ヒトの女房と知つてオン Dre は、どんな気でこんなところ来やがった！ このダボー。ほんまにイッてもたるか！」

オレは、昔の家の若い衆が、喧嘩の時に毒づく最も汚い言葉を探して投げつけた。

貴公子然としたオレの口から、こんな罵声がとび出すとは思ひもかけなかつたのだろう。白ブタの礼子は一瞬たじろいだようだ。そこを狙つてオレは、思いきりストレートパンチを喰らわしてやった。眉間を一寸はずれて右眼に炸裂。しりもちついた白ブタはいきなりわっと泣き出す。みるみる腫れ上った臉からタラタラと血が流れている。しかし勝気なこの女は、よろめきながら立ち上つてむしゃぶりつこうとして来た。オレは容赦せずに足を蹴り上げ、腰の辺りを、したたかにぶつとばす。又、白ブタはひっくり返つて一段と激しくわめき泣く。

「早う——〇番を！」

と叫んでいるのを聞きながら、オレは白ブタの礼子をコテンパンにやっつけていた。



日本の警察は、実に優秀な機動力をもって  
いるらしい。FBIやスコットランドヤード  
も顔負けするほど迅速なのだそうだから恐れ  
入る。

オレが酔いと逆上からまだ醒めぬうちに、  
彼等はサイレンと共にやって来た。

「暴力はいかん！ こら、止めんか！」

二人がかりで制止にかかる。オレはますま  
す猛り狂って

「なんや、オマエら、ひっこんどれ！ オレ  
はこの売女らをこらしめてんのや」

「女を痛めつけてどうするんか！ お前は男  
やないか。馬鹿なことするんじゃない」

「黙れ！ 一銭ボリ！ オレらの税金でメシ  
食うてんやないか。偉そうにすんな」

「警官に向かって何を言うか！ 侮辱すると  
許さんぞ！」

「許さんかったらどないや言うねん。さア、  
撃つなと斬るなとやってみい。赤い血が出る  
か黒い血が出るか試してみんかい」

チンピラでも言わないような幼稚な科白せりふを  
わめきちらしていたオレは、とうとうワッパ  
を填められてしまった。

——〇——

もう窓の外には、シャバの雀が可愛い声で

鳴き始めた。

本署に連行されたものの、あまり酔っぱら  
っていて話にならないから、ひとまず泊まっ  
て行け、と取り調べを翌日に延ばされて、こ  
こに放りこまれてから数時間たった。当直に  
知った顔がなくて幸いだった。

礼子のやつは、オレを訴えてやろうと、救  
急病院で傷の手当てをしてもらいながら考え  
たに違いない。そして沙織、彼女は参考人と  
して調書を取られたはずだ。

突然オレは可笑しくなった。係の刑事が、  
小学生の作文よろしく本籍から始まってつづ  
きに状況を書き込んでいる時の顔を想像する  
とオレは笑わずにはおられない。

「氏名は？……」

「武田勝彦」

「えッ？ 武田カツ子？」

「いいえ、武田カツヒコ……」

「何？ もう一度言うて下さい。冗談はいけ  
ませんよ」

小さな声で沙織が又繰り返す。

「武田勝彦です」

刑事は仰天してペンを取り落とし、まじま  
じと沙織の顔を見直すことだろう。

「ホントかね……あんた男か？ ウソやない

やろな。ほんまに男か？」

きつと消え入りそうな風情で、小さく沙織  
は答えるだろう。

「ハ、ハイ」

……と。

とうとうオレは、アッハッハと声を立てて  
しまった。笑いはなかなか止まらない。

「オイ、カッコいい兄ちゃん。ブタ箱に一晚  
泊まったぐらいで氣イ狂たんか？ 朝っぱら  
から笑い出して……びっくりするやないか」

隣に寝ていた髭面ひげつらが目覚めました。又、隣  
も、その隣もみんな、モゾモゾと起き出し、  
欠伸あくびをしたり、舌打ちしたりしながら、

「ゆんべは、えらい喧ましゅう言うて眠れん  
かったのに、又朝からゲラゲラ笑いよって、  
ほんまにアホとちゃうか！」

「一体全体何やらかしたんや？ ええ身なり  
して、こんなところ来るのにしては、場違い  
のアンちゃんやんか」

「おまえ、スケコマシでもやって、下手うっ  
たんかいや？」

口々に非難と好奇の言葉を投げつける。

「すみません。どうもお騒がせしてしもて」

オレは素直に謝った。

「まあええがな。アンちゃんは初めてやから



みんな、そないに責めたりいな」

一番年嵩らしい人がかばってくれる。

連中はゴソゴソ毛布をたたんだり、首を前後左右に動かして軽い運動によって寝疲れをとったりしている。

「もうすぐメシの時間や。ここの味噌汁は、ほんまに味噌だけの汁や。グは何も入ってえへん……。メシかて四等メシ言うて、外米みたいにモミないもんやけん、何ごとも若いうちの経験や。な、アンちゃん」

「お腹は空いてないんですけど、あのう、顔はどこで洗うんですか？」

「一応廊下に出て洗うんやけど担当さんが来るまで、もうちょっと待ってんとあかんわ」

オレは困って時計を眺める。顔が洗いたいばかりではない。

実は、先ほどからオレはしきりに尿意を催していたのだ。房の片隅には低い囲いがあって、ここのお客達が用を足す場所になっているらしい。先ほどから、もう二、三の者が代わる代わる朝のツトメを始めている。

髭面がふっとオレの素振りに気がついて、「なんや兄ちゃん、顔青うなったんやんか。二日酔いか？ 気分悪いんやろ？」

## 女責め図絵の系譜……

# 煙管と女に想う

— 絵 と 文 —

南彦造

南蛮人が伝えたと聞く喫煙パイプは、日本の生活のなかで独自の成長を遂げ、その名もきせると名づけられ、伊達と見栄、時には喧嘩の道具にも使われたものらしいが、きせるを手にした女性の姿からは、上品さと物静か

な風情さえも感じられるのは、何故なのだろうか？

たしかに「煙管」には種々雑多なスタイルがあつて、巨大な「枕形のきせる」から、小さな「小児用」に至るまで千変万化。その見

と言ってオレの顔を覗きこんだ。

オレはもう我慢できない。

廊下を窺っても、担当さんの影すら見えな。とうとうオレは心を決めて、身震いしながら、皆の視界にむき出しのトイレに向かわねばならなくなった。

「あっ！ こいつ、どないしたんや？ 女みたいにヘタリションベンしよるでえ！」

オレは、溜りに溜ったものを放出する快感と、背中に痛く聞こえる呆れたようなすっとなきょうな声に、死んでしまいたい、と思ったのである。

——了——

事な形態美。せん細な図柄を見事に表わした彫刻のあるものなど、その種類の豊富さは、その俤、庶民の歴史の流れを、極く素直に伝えているようである。

○

日常生活の必要品であつた「煙管」と「煙草」の沿革史——それは、その俤、日本国民の生活史のシンボルでもあるといえるであろうと思われる。

私は機会があつて煙管の形型、大小、様々の材質類などを眺めることが出来、興味を持って鑑賞しているうちに、この煙管と人間と





の結びつきが、単なる煙草を喫うための小道具に止どまらず、時には所持者の意志によっては『凄まじい拷問具』にもなりかねないであろう——と想像し、ますます興味横溢するのを覚えた。

たとえば『輪王寺宮ご使用の“喧嘩煙管”とか』『清水次郎長、持ちの“夫婦煙管”とか』……歴史に残る貴重な文献資料として珍

重するにたる価値のある立派な代物といえるであろう。

種々の変形があるがそこにはやはり個性というものがあって、長身で細身のもの。寸づまりで図太い、如何にも豪壮なもの——など蒐集すれば、膨大な数のスタイルとか、材質の変遷など——それはまた、その尽く愛用者の性格とかオリジナリティへの裏づけ・嗜好・用途・日常の生活”等々に至るまで彷彿とせずには、おかない。

私は戦災で焼失したが、和綴じの珍本『私刑類纂』の中にあった木版挿画の“遊女吊し責め”の構図を想い出すことが出来る。

その木版挿画の構図は——奥の院の座敷でもあろうか？ 縁側に面した部屋の梁に二人の遊女が、紅い湯もじ一枚の素裸にされ、両

の乳房も露わに、後手に縛られ吊し上げられており、下では歌舞伎役者の見得よろしく遣り手婆アが、二尺余りの煙管をぐいと右手に構え、左手は、骨ばった二の腕のつけ根も覗けるほど、着物の袖を肩にたくし上げて、泣き叫ぶ遊女の姿を下から、睨みすえているという、凄惨な図柄であった。

煙管の歴史——というほどのことは別としても、おそらくそれは、製作者が、使用者の特殊な注文にも応じたであろうし、また使用者は『身近かな必要品であるばかりでなく、あらゆる点で便利に使った？』であろうことは、容易に想像出来るし、うなづける。

そしてそれが煙草を吸う時には優雅となり意地の悪い男が、女性を痛めつける際には、たちまち凄艶な拷問具と化し、平和な箱型のそれは安眠の具となって、両極端な利用価値を示す。

ある封建時代の婢史や文献によれば『雁首や吸い口の穴の形状、突出状態の奇型なのは主としてアヌスいじめの浣腸器化していたものが、多い』——と伝えている。(終)



## むかで

さすがのジャンヌも何度となく悲鳴をあげた。全学連のヒロイン、かつての女斗士も、今は美しい「牝」であるにすぎない。心の鎧を脱ぎすてから、余計、心弱くなってしまったのかも知れぬ。それは兎に角、袋に荷造りされて、ゴトゴトとコンベアーで運ばれるのは不安というより、いっそ恐怖を覚えることであった。コンベアーの継ぎ目や曲り角で急にガクンと落ち込む毎に、何か奈落に墜落して行くかのような感じがして、思わず声

出してしまうのである。その都度、身体が二転三転しても、手も足も出ない。わずかに肘で顔を蔽って衝撃を防ぐのがセイーぱいのことだった。縛られるのは今がはじめてというわけではないけれど、このように、もみくちゃにされては全く荷物もよいところである。人間としてはおろか、生きものとしてさえ扱ってもらえないのだから、たまらない。

コンベアー上の旅は、なかなか、終わらない。彼女を含めて、袋の中の女囚たちには思いも及ばなかったことだが、身体に感じない程の勾配で彼女たちは次第に高所へ移動しつつあったのである。

前号までⅡガボンで巨富を築いた有明は、十数年前から彼の理想国を建設して来た。そこへの補給は、すべて原子力潜水艦ネプチューン号が行なっている。彼の独裁王国を構成する若い美女たちも同艦によって世界各地から誘拐されて来る有明に服従を誓ったジャンヌ、全学連の女斗士とて例外ではない。麻袋に荷造りされた彼女は、他の女囚たちと一緒に、コンベアーラインで何処へともなく運ばれて行く。最も哀れをとどめたのは脱走を企てたアマゾン女兵、肉体番号二〇三である。〇号重拘束という嚴重な刑罰を受けながら、港に着いた彼女を待っているものは……。



第二十四回



実際は20分ばかりだったのだが、人によっては、それが一時間にも感じられる旅が終わって、やっと平らな床に置かれたとホッとした瞬間、誰かに手足を掴まれたと思うと、二三回、ハズミをつけて、思い切り放り出された。

「ヒューッ」

反射的に、あらんかぎりの声が、出てしまふ。その声を余韻のように残して、ジャンヌの布包みは弧を画いて落下していった。彼女にはスカイダイビングをした経験があったが丁度、そんな感じだった。ただし、パラシュートもなければ手足の自由もない。髪の毛が逆立つような怖さが何秒か続く。

次の瞬間、ウレタンを厚く敷いたようなマットに当たって、ジャンボリンよろしく激しく跳ね返った。余程の高さから落とされたのであろう。それでも衝撃を吸収出来ずに、二度も三度もバウンドして、今度は何か迂り台のようなものによって再び滑降が始まった。それもすぐに猛然とスピードが、早くなってくる。

普通なら大抵、この辺で気絶してしまう筈であるが、女囚たちには荷造り前に予めトランキライザーを飲ませてあったので、恐怖感

の割には気を喪うまでに到らない。

迂り台も嫌になるぐらい長く続いて、ジャンヌは、胸が悪くなるのをこらえるのに必死だった。もうダメだと観念したとき、傾斜が急に弱まって落下速度が鈍ってきた。この迂り台の傾斜は随分と精密に計算されているらしく、おそらく目的の場所にピタリと停止したのにちがいない。というのは、待っていたように鎖が頭部の輪にかかり、ガラガラと宙吊りになったからである。その間、何秒という時間でしかなかった。そして、次々とベルトがゆるめられると、ジャンヌの身体だけがストンと床に落ちた。

明るい照明によって、真白に輝く広大な部屋の一隅だった。

「サア、立って」

女の声だが有無をいわせぬ迫力で、誰かがいった。気がつくやうに、周りを数名のアマゾン女兵が取り巻いている。ジャンヌの前には、すでに二人の女囚たちが立って慄えている。そして、両腕をアマゾン女兵に支えられて立上ったジャンヌは、後の一人と長さ50センチばかりのパイプで、首輪同士をつながれてしまった。一番目の女からジャンヌを入れて三人とも、同じ寸法のパイプを接手として首で

連っている。そうしているうちにも、ジャンヌのあとから迂り落ちてきた女囚が二人が、同じようにジャンヌの後に縛りつけられてしまう。

「七五一、七五二、七五三、七五四、七五五よし、これで、おしまいだね」

隊長らしく白皮の戦闘服を着た女が、五人の女囚たちのあらわな腰を、金属の鞭の先で突きながら勘定した。

「あるけ」

女兵の一人が七五一号、つまり一番先頭につながれた女の肩を小突いた。運動会のムカデ競走よろしく、ノロノロと五人は動きはじめる。

やや余裕ができて見廻すと、五人ずつパイプで連結された女囚たちの集団が悉く手首を頭の後で固定され、肘を頭の両側に張った姿勢で立ちすくんでいるではないか。よくわからないが恐らく何百人という数であろう。

突然、ジャンヌのすぐ前にいた女、七五二号が発作的に泣き叫びながら、

「イヤ、いやです。こんなの、もう……」

と叫んで暴れ出した。はずみをくって先頭の七五一号が仰向けに転んでしまう。途端に次々とバランスを失った女囚たちは前のめり



に将棋倒しになった。ジャンヌもこらえようとしたが、はげしく首を引きずられて、矢張り固いコンクリートの床に、いやというほど叩きつけられる。

「ギャッ」「ヒイ」「ウッ」など口々に悲鳴を発する五人。殊に、下敷になった七五一号などは胸を打って目を白黒させている。

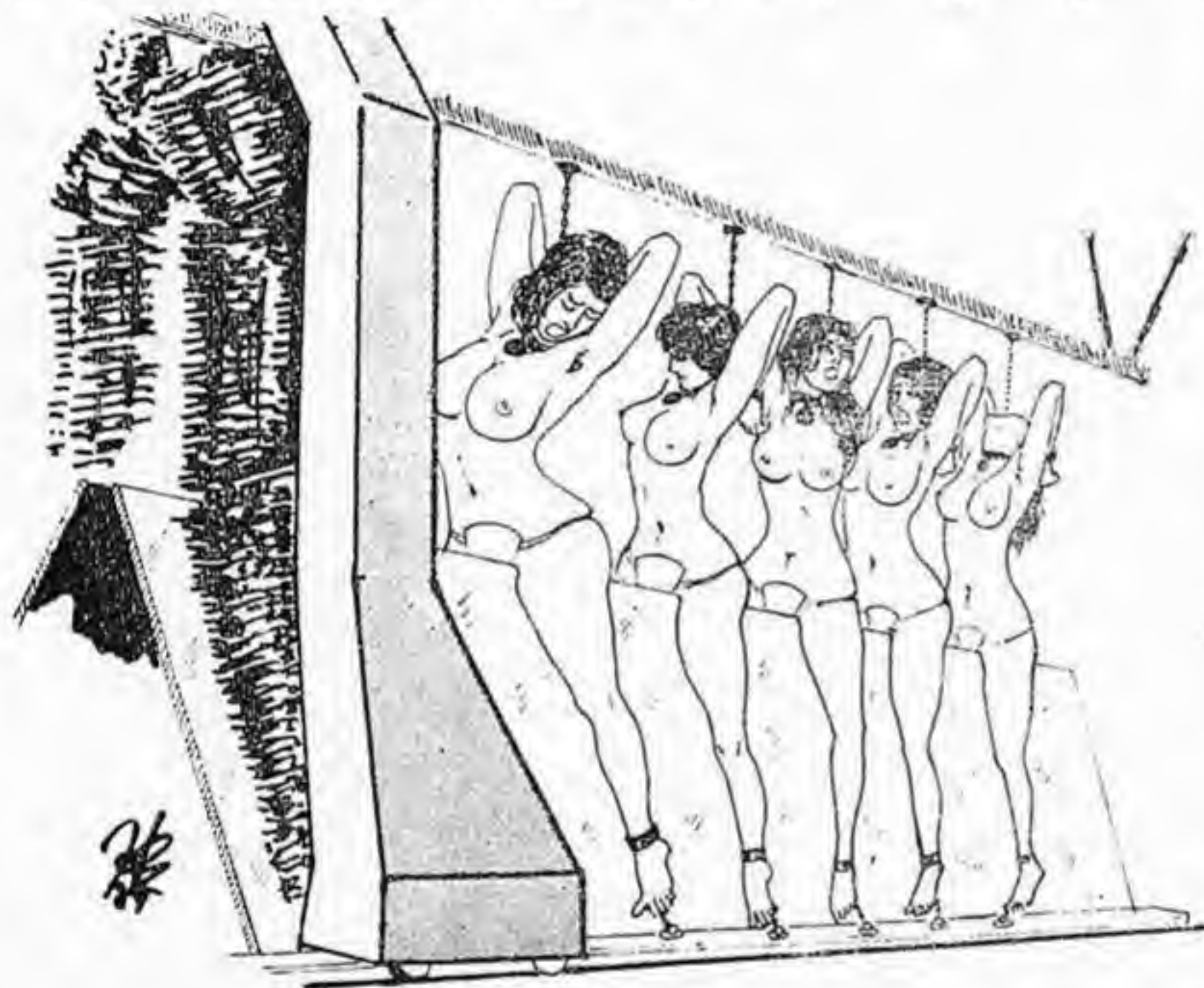
たちまち駆け寄ってきたアマゾン女兵が叫んだ。

「立て、すぐ立たないと痛い目にあうよ」

と言ったって、両手が自由にならないのだから簡単には立上れない。モタモタしていると、ジャンヌの横腹に焼けるような電撃が突きささった。アマゾン女兵の持っている金属鞭はスイッチによって電流をながすことが出来るような仕掛けになっていたのである。五人共に金属パイプで首を連結されているので、一人に對する電気刺戟は忽ち五人に伝播してしまう。惨烈な絶叫と共に五人は七転八倒した。しかし、言う通りに立ち上らなければ、苦しみは止むど

ころでない。泣きながら必死に起き上ろうとしても、バランスがとれないので容易なわざではない。それでも、辛うじて立ち上った。鞭のショックが、やっと停まる。

ここで五人とも身にしみて叩き込まれた教訓は、連縛のおそろしさだった。今までネプ



チューン号のセルで彼女等が忍ばねばならなかった様々の屈辱、苦痛などは主として個人の肉体や心に加えられただけであった。ところが、ここで五人ずつ、パイプによって繋ぎ合わされてみると、一人に加えられる危害がたちまち全員の苦痛になるのである。一人が倒れれば五人共、転がってしまわなければならない。苦しむ者が、そのまま他を苦しめる者となる。互いに激しく反撥し、コンピートする心理が生まれる。同時に五人は離れることを許されないのだ。しかも、その結びつきは単に肉体番号が隣り合わせであったという偶然にすぎぬ。つい数日前までは赤の他人だったのに、今は赤裸のまま自由を奪われて憎み合うのは何とも皮肉の限りだった。

特に七五二号は他の四人の怨嗟の的となった。ジャンヌの心に、かつて女斗士であった頃の向こう気が蘇ってくる。

「シッカリしてよ。皆がひどい目に会うじゃないか」

80センチ前に白い素肌を見せて、すすりなく後姿を、思わず蹴とばそうとする。しかし鎖で結ばれた足首は僅か30センチしか開かない。危く今度は自分が転倒してしまいそうになるのをやっとこらえ、ますますイラダッタ



彼女は、僅かに動かすことの出来る腰のひねりを利用して相手の臀を小突いた。ところがその暖くなめらかで、しかもソフトな感触が伝わり、ジャンヌの胸に、林美玉と過ごした、かつての爛れるような思い出が浮かんできた。そして、可愛さ余って憎さ百倍となつた林美玉に対する敵意と今、目の前でモタつている白ブタ（と彼女は心の中で呼んでいた）に対する怒りが二重映しになって、ますますジャンヌを、たかぶらせるのだった。

こう書くと長いようだが、ジャンヌの思考の移り変わりは瞬間的なものだったし、又、アマゾン女兵たちも、そうそう五人の芋虫を遊ばす筈がなかった。

「こっちへこい」

七五一号、先頭の首輪が、グイッと牽かれた。それが、つぎつぎと、あとの四人の首に伝わる。五人は不自由な足を曳きずってノロノロと歩いた。

部屋の隅に丁度五人が80センチ間隔に立てる程度のステンレス製のプラットホームがあって、その上に並んで立たされる。上から五本の鎖が下っていて、夫々の身長に応じて首輪に連結された。そこではじめて足の鎖が外される。その代わり、プラットホーム上に矢

張り50センチ間隔に埋めてあった足錠が、片足ずつガッチリくわえ込んでしまう。こうして五人は前を向いて一列に身体をピンと伸ばしたまま固定されたことになる。

キューン、とモーターの音がすると、みるみるプラットホームが二つに割れ、両足が無理矢理に開かされて行く。それと同時に、その隙間から二枚の硬化ガラス板がセリ上ってきて、五人の股に内側から割り込んできた。

モーターの動きが停止したとき、五人は断面が三角になったガラスのサドルにまたがったような姿になっていた。足を揃えていたときすでにピンとなっていたくらいだから、両足が開いた分だけ、ますます、きつく引っぱられて、五人はそれぞれ苦痛に呻いた。足錠にはスプリングがついていて、五人の脚長に応じて多少のアロワンスが許されるようになっていたけれども、誰も爪先をプラットホームに着けるか着けないかという程度に浮き上ってしまった。このことは、ガラスのサドルに体重がかかることを意味していた。もちろん二枚のガラス板は夫々上辺に丸いエッジをつけていたけれども、それでも腿の付け根に喰い込んで、女囚の体重に応じた苦痛を与えていた。二枚のガラス板は上辺を15センチ位い

離して、溝状の隙間を作っていたから、あの木馬責めのような、直接クサビ状に喰い込むという苦痛ではなかったけれど、反面、全く無抵抗にされているという不安感があつて、五人の心をますます怖れおのかせることになった。

ここで、未決服がハギとられた。未決服はこうした緊縛状態の中でも簡単に着脱出来るのが特徴であることは前に述べた。禪型のシヨーツがとり去られると、

「サア、便所の用意が出来た。はやくしてしまいな」

という声がかかる。何ということだ。この大がかりな装置は、彼女等のために作られた便所なのか。すくんでしまった女囚たちは、気もそぞろに用を足すところではない。

「便所は、ここじゃ勝手に出来ないんだよ。許されたときにしておかなくっちゃ、あとで苦しむことになるから」

吊られている首を無理にネジ曲げて下を見ると、ガラスの隙間の間に白い陶器の便器がセリ上ってきて待ちうけているのが見えた。それにしてもサドルが透明なガラスだから横から丸見えである。そこには数名のアマゾン女兵たちがニヤニヤ見ているし、その背後に



彼女等と同じ女囚たちが五人組みで並ばされていて、チラッチラッと、こちらに視線をはしらせているではないか。実際は、この女囚たちの集団は、この巨大な機構に圧倒されていて、とても他人のことなど気がつく余裕はなかったのだけれども、すくなくとも奇妙な便器にまたがった五人にとっては自分たちだけが衆人環視のまっただ中に恥態を曝しているような錯覚を感じていたのである。

「いいかい。これからしろといわれたときにして、するなといわれたときに絶対にしないという訓練を積まなくちゃ、しょっ中、懲罰を受けていなければならないということになるよ。だから、一生懸命リキんで大きいのも小さいのもスッパリ出しきっちまうんだ」電気鞭がスーッと、真中にいるジャンヌの腰を撫でた。

「ウッ」

と低くうめいたのは当のジャンヌだけで、あとの四人は口々に、けたたましく叫んだ。この点、ジャンヌの方がSM刺戟に耐性が出ていたらしい。それでも、この無法に対する恐怖心から、自分の生理を無理強いすること、自然と努力を傾けていた。それを出してしまったジャンヌの方が、まだしも幸せだ

ったか知れぬ。最後まで抵抗した七五二号などは、結局、細い金属カテーテルで絞りとられてしまったのだから……。

小が終わると、次は大の番だ。尻をピシャピシャ叩かれながら、必死にリキんでみても出ないものは如何とも仕様がなない。五人が五人共、無駄な努力に汗を絞る結果となった。股下を割るガラスの間には便器の他、いろいろな設備が調っていた。アマゾン女兵の一人がそれらの道具の中から、一本の嘴管をとり出し、グリセリンをつけた。勿ち冷たい浣腸液が哀れな犠牲者たちを慄え上らせた。嘴管には注入孔と排出孔が二重にセットされていて、充分な洗滌効果があるように設置してあった。女囚達は思いもよらぬ洗滌を受けねばならないのである。

それが、やっと一段落すると、門型をした内側に回転ブラシをつけた機械が近づいてきて、身体中を洗う。スピード・カー・ウォッシュャーを人間用に応用したものだと思えば先ず間違いないのである。

これで、やっと一段落。水の滴る裸身が再び閉じられ、硝子板が沈むと、ステンレスのプラットフォームがもとに戻り、五人の女は足の裏を、その上に腿を揃えて立つことが出

来た。

## ポートエリア

もちろん有明が一番先に上陸していた。

十数年前、はじめてこの洞窟を発見したときは、ただやたらにダダッ広い空間でしかなかった。よどんだ空気の中を蝙蝠だけがバタバタと飛び交っているだけだったのである。

火山岩の洞穴で表土も少なかったから、結構頑丈であることも科学的に証明された。有明の理想を実現するためには隠密な空間を必要とした。幸いここはスマトラ南西部に点在する無数の島々のうちでも、一きわ孤立しているし、表面が岩山ばかりで人の居住に適当でなかったから、全く目に立たず、思うままに地底の工事を行なうことが出来たのである。

この工事、膨大な資金が要することはまだしも一切を秘密裡に行なうという制約が非常な困難を伴う要因だった。必要な物資は特別に改造された潜水商船によって、洞窟内の仮設埠頭に陸揚げされた。不可欠の、労働力にしても、漏洩を防ぐため、拐かして来た男奴隷を使うことにしたのである。

彼の独裁王国建設にあたって画期的な出来

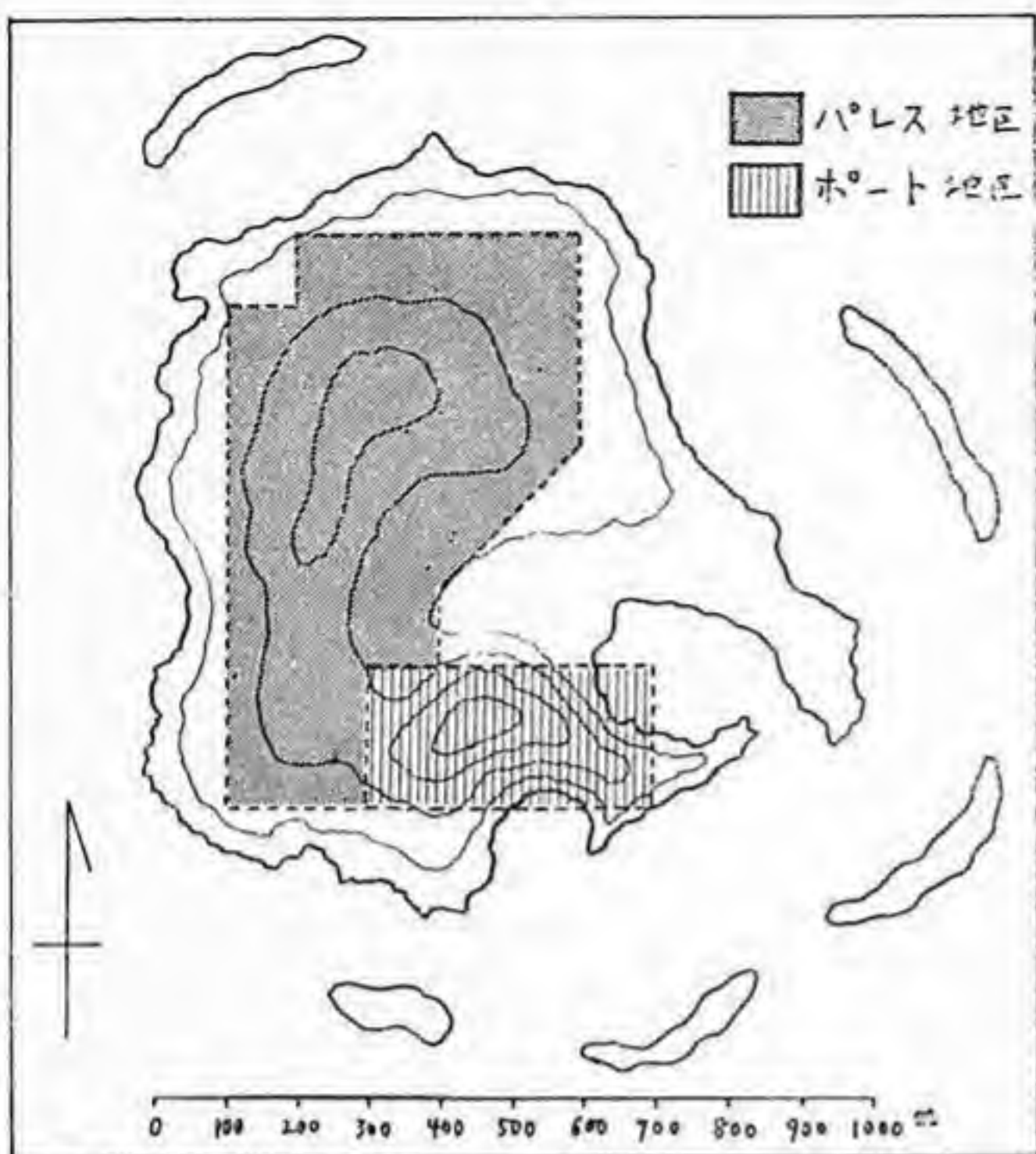


事は海底の潮流を利用した大電力を確保したことであった。これによってエネルギー上の問題は解消されたのである。以来、工事は急ピッチで進んでいった。

五年前、第一回の女囚大量捕獲が行なわれて薄倅の美女野沢洋子をはじめとして、小川晶子、杉本美和子(脱走兵)等お馴染みの美形が悲鳴を競う様にして囚われ人となった。この年から肉体番号が制定されて、それ以前の

女囚はA、あとは毎年、B、C、等という符号がつくことになった。従って、望月レイ子など今年の捕獲にかかる女囚たちにはFの符号がついて第五年次を意味することになる。

ジープのような電気自動車に乗った有明は埠頭を南に下った端にある、トンネルを潜った。しばらく進むと、急に辺りがひらけて、明るい空間に出る。



この地底の王国は大きく分けて二つの部分からなる。一つは宮城地域(パレスエリア)であり、これを維持するのに必要な諸施設が備い、且つ又、港湾地域を包含するポートエリアが、その二である。ただし、陸揚げされた物資原料は、エネルギーを含めてパレスエリアの管轄に属し、しかも双方から厳重に隔離されている。これは内乱等に慎重に、対処するためであった。

そこで、今、有明が入ってきた地域は勿論ポートエリアに属し、その中心部に当たっていた

のである。

ピカピカ光るヘルメットを永久に冠りつづけなければならぬ男奴たちにも、いろいろの職制があり、階級があった。ただ一様にコンピュータによって管理されている。大脳活動の中、与えられた職種に必要な部分だけが許されて、他の部分が働くと、システムに素早くキャッチされてしまう。システムが拒否するとヘルメットから耳殻に直結されたマイククロフォンから不快感が出て男奴を苦しめ服従を強制することは、前に述べた通りである。それでも命令に従わなければ音は次第にヴォリュームをあげ、遂には死にいたらしめる筈であった。又、ヘルメットに内蔵されたバッテリーは就寝時、充電する必要がある、充電しないしているとバネが延髄を圧迫し、遂にはその先端にある針が突き刺さって、これも又、死に到るであろう。つまり、コンピュータの命令に従わなければ、いずれにしても、待つものは死より他はない。かくして、男奴たちは持っている学識、能力の範囲内で最高の労働を強いられる、生きたロボットと化してしまわなければならない。

有明が電気自動車を停めた扉口にも、こうした男奴のガードマンが見張りをしていた、



右腕を胸にあてて彼に敬礼していた。

白い寛衣をひるがえしながら、有明が奥に入ると、そこはイギリス風のドッシリした調度に囲まれた広い部屋になっていて、二人の人物が待ちかまえたように近づいてきた。

「ハアイ、ドクター・ウイリー」

有明が決活に叫んで手を差しのべた相手は脊の高い白髪の老人だった。隣には、この物語の冒頭に登場したミセス・ウイリーがここにこしながら寄りそっている。

「ハロー、ミセス・ウイリー。しばらくだったね」

「ゴブジデ、ヨカッタデスネ。オカエリナサイ」

片言の日本語で夫人が言う。

「今度は大分、苦勞をしました。ヨーロッパでは、あなたの御蔭でうまく行きました」

「トンデモナイ」

ミセス・ウイリーが舌を出した。

「ドクター、ご研究は進んでおりますか」

「イエース」

ドクターは嬉しそうに、

「このところ、実験材料が豊富になってきたので、大いに助かっています」

「そうですか、結構です。いずれゆっくり拝

見いたしましょう。今度の航海で将校の脱走者が出ましてね、いずれ見せしめのため極刑に処さなければならぬのですが、そのときは又ご面倒をおかけいたします」

「面白くないことですが、……」

無然とした表情でドクターは答える。

「全体の秩序を維持するためには止むを得ませんね。特に私達を含めて、自由奴隷たちは束の間の自由に狎れすぎるくらいがありますから」

「そのように反省して貰えばいいのですが実際は仲々簡単には行きません」

「でも」

ミセス・ウイリーが口をはさんだ。

「システム管理が行なわれるようになってから大分、改善されたんじゃないでしょうか」

「そうです。コンピューターがプライバシーの壁を突き破ってしまいましたから」

夫が、それを受けた。

丁度その頃、脱走兵、肉体番号第二〇三号こと、杉本美和子は、見るも無残な状態であった。

吊り責めは、やっと終わって、汚物にドブ漬けになっていた尻も洗い流して貰った。し

かし、二重菱縄は依然として彼女の上半身にガッチリと喰い込んだままだったし、顔面に加えられた金串やヘアピンのアクセサリーも抜かれていない。眼蓋を閉じることすら出来ず又、舌ペロを引込めることも、許されなかった。泪も唾液も流れ放しだった。数十時間もブツ通しに吊られていては、生のあるのが不思議な位だと思いかも知れぬ。しかし、これ程の責め苦に苛まれながら、人間の肉体は尚、生きつづけようとするのだ。薄れて行く知覚に痺れ果てて、氣を喪うともなく切れ切れの眠りすら、とれるようになるのであった。

食事は比較的キッチンと与えられた。ただし口からではなくて、鼻孔に押し込んだビニール管を通して圧入される流動食だから否も応もないのである。その上、時々軍医が診察して適当な強壯剤とか強心剤を処方したり、注射したりしたので、苦痛を除いて、二〇三号の健康状態はマアマアであつたらう。反面、それが彼女の苦しみを一層、増すことになるのであろうとも。

股を縫っている金串が邪魔して、太腿を合わせることが出来ない。そうでなくても、血行を失った両足は「えた」ようになって動か



なかった。

苦痛に疲れ果てて、彼女はフッと、その心情の奥底にあるマゾ性を意識しつつあった。もはや逃れるすべもない苛酷な運命における唯一の救いは、それだけしか残されていないのである。

二〇三号の上陸準備は、そんなわけで一寸厄介だった。

命令が、唐丸箆で運べというのであった。

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

### ☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

やっと思部がはまる位の金属製の浅桶に、

膝を立てた形で固定される。その上から、釣り鐘状の金網をスッポリと、かぶせられる。ガチャリと、れいれいしく大きな南京錠が施された。

上端にある輪に棒を通すとハイカラな唐丸箆になった。彼女の分隊士たちが、これをつがされるのである。自分の分隊から脱走者を出したための一種の懲罰をも意味していたのだ。かつぎつけたことのないアマゾン女兵

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

たちは前後に二人ずつヨロヨロとあるくのはげしく揺れて、そのたびに二〇三号は苦痛にウメいた。身体がゆれると、ささった金串が動いて、その部分を痛めるからである。

アマゾン女兵たちが、かつての同僚の苦しみを少しでも楽にさせようと努力すればする程、皮肉なもので振動が激しくなって、二〇三号は、ひび割れた唇と唇の間から哀れっぽい叫び声を立てるのだった。

埠頭から所定のコースを、この奇妙な箆かきどもは所謂「引き廻し」を行なう様に義務づけられていた。しかも三名の鼓笛隊までついて、暗い音楽を奏でながら歩くのである。

真鍮のヘルメットをかぶった男奴たちが、さすがにびっくりしたように荷役作業の手をゆるめた。

「アア、この女ですね」

工業テレビの画面で唐丸箆の行列を眺めながらウィリー博士が言った。

「そこで、どんな最終処置をとられる、おつもりですか」

「〇号生存刑でしょう」

有明が顔をしかめながら応じた。

(未完)





告白

## 或る日突然に

大場 玄 一 郎

SMマニアの運転手は語る

小生は32才になるタクシー運転手である。堅苦しい事務職を放り出して、結構、現在の仕事をマイペースで楽しんでいる。そのせいか、未だに独身、これも気にしない。

神戸駅の北の方で、ひろった客が、私の常日頃のストレスを一度に解消させてくれた。

これこそ、*「或る日突然に」*であった。

客の人数は四人。派手な厚化粧の25才ぐらいのマダム風の女が運転席の隣に腰かけ、後部座席に35才ぐらいのやくざ風の男と20才前後のちんぴらが18才ぐらいの超ミニの女の子を挟むようにして腰かけた。

行先は尼崎である。昼間の客にしては上玉

であり、自然、小生の愛想も良くなり、話し好きらしい年かさの男の言葉に応じながら営業用の笑いが出た。

当然のことだが、男の話は下卑た話に落ち着いた。小生は勿論、嫌いな方ではないし、遊び馴れた極道者の好き話はむしろ楽しかった。そのうち、後部座席の若い女の太腿が超ミニから、はみ出しているのが、バック・ミラーにうつっているのに気付いた小生が、それを気にしているのを、年輩の方の極道者が見抜いたらしく、話を、その女の話に切り換えて、彼は女をいびり始めた。

平気で淡々と語る彼の話を要約すると、彼

女は源氏名をマリというゴーゴーガールで、よくもうけさせて貰っているショバ代替わりに、ちょっとモデルになることにきまっているのだとか。

「どうや、美しいオナゴやろ」と云われるままに、ゴマをすっていると、SMっ気の小生には、こたえられない話を持ち出してきた。

8ミリとカメラを使って、例のフोटを撮るのだそうで、折角の可愛い子ちゃんのマリの撮影だから、いい作品をつくりたいのだが、人手不足で結局、女優のマリと技師兼俳優のマダムを含む4人しか人が集まらなかったというのである。何とか気ばって、素晴らしいS



Mものを作りたいと考えていたがこれでは到底傑作は出来そうにもないというのであった。事がただけに、つい、気を出しすぎて惜しがってみせてたところ、極道氏に一本でどうやと水向けられ、にっちも、さっちもいかなくなる破目となった。

びびる小生に絶対顔は写さぬと云ったが、こちらには構図はわからないのだから、うっかり首を縦に振れぬ。

精一杯の自制心で抑圧中の小生の顔の輝きが、小生の心を露わに表現しており、小生のSMに対する願望を、年輩の遊び人は、すっかり看破したらしく、

「そう、用心しないでも、兄ちゃん、大丈夫や。俺達は変な商売をしようとしてるのところがうんやでえ。俺が好き者やさかいに、この娘との記念写真を撮影して秘蔵しようと思っ  
ているだけや。この娘も俺を好いてるさかい喜んで記録写真を、撮らしてくれると云うのや。云うならば合意の上と云うところで、他の二人かて、俺とこの娘とだけではセルフタイマーでしか、撮影でけへん、それぐらいなら良い写真が作られへんよって、助手に来て呉れているだけやね。そやさかいな、俺が写真を秘蔵して、誰にも見せんと直しておくね

ん。この二人にも、相手のこの娘にも、やらへんねや、俺以外の者が貰って変な気を起こしよったら困るからな。あんたが参加してくれても、写真はあげへん。合意の上で撮影した写真を、自分で仕上げて、誰にも見せないで愛蔵しとくんやったら誰も文句を云う筈がないやろ？ あんたに参加して呉れとたのむのは、俺の好きなこのねえちゃんの記念写真という意味で、出来るだけ素晴らしいフォトを記録しておきたいさかいやでえ。このねえちゃんは俺のために、どんなことでも今日はしてくれる約束やね。でもなあ何べんもというわけには、いかへんのはあたりまえやろ。今日、どんなことでもするかわりに今日で終りということや。俺がSM好きやから、二人の愛の記録だけなら興味あらへん。それで、この二人にも応援して貰ってもこの娘はかまわないと、云って呉れてんねや。もちろん、三人になっても、四人になってもかまわないと云ってるねや。なあ、たのむよ」

と、仲々のご執心であった。

早々と、車は阪神国道の西宮に近づいていた。小生はハンドルを握りながら、目的地に進む速度を、わざとおとした。

小生の左側に座を占めていたマダム風の女

が、小生に流し目を送りながら云った。

「お兄さん。良い体格をしてるわね。それにハンサムだし、憎い人。決心しなさいよ、チャンスよ。きらいじゃないんでしよう」

おしかぶせるように若い衆が、

「俺もするんやで。ただ乗りや、据膳喰わねば男の恥や」

「オホホホ。お兄さんたら、勇気を出しなさいよ。ホホホッホ」

とマダム風の女。

若い衆がさらに

「兄貴のSM趣味は大分、下等でなあ。何人かにやらさせて、ぐったりした奴の仕上げをして止めをさすのがSやと思うているのや」

小生は無言で大きくうなずきながら、話の先を促すように笑ってみせた。

「今日かって、マダムが、そこそこに仕上げから、俺が二番手で責めあげ、すぐに連続して兄貴が責める手筈や。兄貴は3人目か、4人目が好みで、俺1人で今日は不満だったところ、あんたと意気投合したのや。4人目ぐらいに全然、前の跡始末をさせないで凄まじい状況を記録しておいて、そのまま、最後の責めを撮影するのや。すげえぜえ、兄貴にかかったら、ぐったりしていた奴が、体を



反りかえらせて苦しむんやからな」

年輩の極道氏が、

「マダムの責めたあと、おめえ、一番に責めさせてやるぜ」

と言う。黙って、目ばかり光らせている小生に業を煮やしたのか、いきなり、隣の女性に手を伸ばす。

「ほんまに、ええ体してるぜ」

若い女が羞恥でぱっと顔を赤らめたが、頓着しないで、

「どうや、このむちむちした太腿、おいしそ  
うやろ」

と言うなり、さっとフレームの入ったミニ  
が捲りあげられた。

「あっ」と、小さく、その娘が声をあげたよ  
うに小生には聞こえた。

なんと美しい太腿の持主だったことか。

小麦色の肌は水々しく、うっすらと脂がの  
り、若さで、はちきれそうであった。

小麦色の太腿の中心に純白の布ぎれが目  
に痛いほど美しくみえた。

しかし、次の瞬間に、白いパンティは彼女  
の膝頭まで、すばやく、男の手で、ひき下げ  
られていた。あわてて、両手で、ずりおろさ  
れたパンティを押さえた、彼女の可愛い唇か

ら、はつきりと悲鳴がもれた。

その両手も、あっという瞬間に片方ずつ、

両側の男達に握られると左右にからめとられ  
た。あわてふためいて組み合わせ、両腿をび  
ったりと密着させたが、すでに遅かった。

「運転手さん、前方不確認でガチャンはいや  
よ。電信柱が前から走って来たなんて云わな  
いでね」

助手席のマダムが笑いながら云った。車は  
武庫川の橋を渡っていた。尼崎はもう、すぐ  
だったが、昼の12時スギの国道は案外、車が  
少なく、併行車はなかった。

対向車は時々あるにはあったが、こちらの  
車内の出来事を判別するのは到底無理であっ  
たし、乗用車同士では彼女の頬が赤いのはわ  
かって、彼女の太腿のあたりは視界の外で  
あった。大型車でも、勢いよく、すれ違う車  
どうしの内部は見渡せても、彼女の羞恥を確  
認することは不可能に近かった。よしんば無  
遠慮に車内を覗き込むトラックの助手がいて  
も、右側に坐った若い衆の鋭い目付と男二人  
の一癖も二癖もありそうな極道風態に、柄の  
良くない彼等でも目をそらしたに違いなかつ  
た。勿論、助手席のマダムは他の車を用心し  
ていたから、あらゆる意味に於いて、白昼に

もかかわらず走る小生の車は密室化したので  
あった。

自称S男が娘に云った。

「さあ、今日はなんでも命ぜられる通りする  
約束やったな。前の男前に見せてやれよ」

女は黙ってうなだれていた。

「早くせんか。なめると承知しないぞ。なあ  
約束やろ。そないに隠さないでも、どうせ、

お前さんの羞かしいところは、みんなみられ  
ることになっていたやろがな。愛人同志やな  
いかいな。俺が、みせてやってもかまへんと  
いうてるのやから、ええがな。なんやったら  
ここで、ベビー浣腸したるか」

女の膝はかすかに動いた。

小生は男の最後の方の言葉で、それこそ、  
ハンドルを取り違えるところだった。

若い女は10糎ほど組んだ腿を開いた。

男は云った。

「あほ、ぐわっとひろげるんや」

顔をうなだれ少し横にそらせながら、若い  
女は、少しずつ太腿を上げ始めた。

若い衆が

「邪魔だな」

と云って、彼女の足首にひっかかっていた  
パンティを抜きとった。



尼崎に車は入った。

「アマですけど。どこへつけますか？」

小生は尋ねた。

年輩のやくざ者は白昼の露出責めに興奮したらしく、うわずった声で答えた。

「ええわ、車賃はり込むさかいに、どこか、車や人通りの少ない道に入って、適当な方向へ、好きなように走らしてんか、ええもの見せてやる」

マダムが囁いた。

「宝塚の方向へ走らせて、まだ時間がいるようだったら奥武田尾の高原の方へ走ったら、よいと思うわ」

小生は車を大きくUターンさせた。

彼女の両足は、極端なまでに開いた。顔付は幼い感じだったが、体は、ふっくらと盛りあがるかのように柔らかな、そして温かな感じだった。

極道氏は、うわずった声音で話しかけてきた。

「よく見てみいな。きれいなもんやろ、マダム。あんたのすれっからしたものと、えらい違いやな。ほうれ、この可愛らしいこと」

マダムは妖艶に願って毒づく。

「なあに云ってんのよ。あとで並べて、比べ

てみせたげる」

「へっ、見あきたよ」

「いいわ、この人に見て貰うわ」

しなだれかかるマダム。小生は、あわててハンドルを切る。

「あぶないよ」

「運ちゃん、もうOK云えよ。きれいなもんだろう、病気は心配ないぜ。それに、ロハなんだぜ」

○ ○ ○

車が武田尾高原への淋しい地道を砂ぼこりをあげて走り始めた頃、女は、あきらめきった表情で目を閉じていた。

人通りのない三田から奥武田尾の道を、ゆっくりと走らせながら、小生は胸をわくわくさせていた。タクシー運転手という職業がら後部座席での男女の客の痴態は見あきるほどに見ている。これには相当に破目はずした行為もあるにはあるがあくまで運転手を虚仮扱いにした男女の睦ごとむつごとにすぎない。今日のできごとは、小生にとっては初めて見るSMの世界であったのだ。

あきらめきった若い女の表情にナルシズムの恍惚と被虐の悦びが、にじみでているとしか小生の目には見えなかった。

車外から、覗き見る影もない、両側に生い

茂った竹藪であることを確かめてから、二人の極道者は彼女の毛糸の薄編み袖無しセーターを、折りたたむようにして捲りあげて胸の上部にかためた。

彼女は現代娘らしく、シユミーズは身につけていなかった。若い衆がブラジャーに手をかけた時、かすかに彼女の体が震えたように見えた。

むしり取られたブラの下には、想像通りの型のよい乳房が、とび出していた。つーんと先の尖った乳首が、プリプリした乳房ごと上向きにつき出て、色も美しかった。

女の目が開かれ、その瞳と小生の目とが、バック・ミラーの中で、からみあった。

若い衆が吸いつくと同時に、その愛くるしい瞳は再び閉じられた。

車が大きく揺れた。竹藪が切れて、雑木林に変わった。道も狭くなって、車の窓に木の葉が、すれて、ざっざっと音がした。

白昼、走る密室の中で、ミニから羞恥をまゐる出しにさせ、乳房責めを甘受する20才前の女。

小生のS心は散々に乱れた。白昼の誘惑は続いた。



助手席のマダムが小生の横腹をつついて小生に見せたのは、大人のオモチャの店でお目にかかったことのある例のパイプ・レーターであった。

マダムは小生にウインクしておいて、ハンドバッグから、コールド・クリームを取り出し、パイプにべっとりと塗り始めた。

後部座席に女のむっちりとした小麦色の美しい太腿と、ピンク色のパイプがみえ、一緒に小刻みにふるえていた。可愛い肩が、上下に動き、美しい顔のみけんにシワがよせられも色の形の良い唇が小さく開いて、とっても魅力的な舌の先端がみえた。

華麗なる薔薇刑は続けられ、花開く熱い薔の唄は奏でられた。

小さな車内に若い女の恍惚とした匂いが満ち溢れ、新鮮な女の香りは甘酸っぱく、熟れた匂いを放っていた。

激しく迫ってくる甘い罠の中で、若い女は遂に自分を取り乱してしまったのであろう。女の業火に崩れ去った女は悶え狂い、熱い旋律の中に甘美なしびれるような泣き声を漏らし始めた。

車は大きく左右に揺れながら、雑木林の間の、やっと車体が通れる程の小道を砂ぼこり

を舞い上げながら走っていた。

明るいう白昼の太陽が車の窓から射し込むなかで、若い女が、ひとときわ、体を反らせたかと思うと、がっくりと首をうなだれて静かになったのを眺めると、年上の極道者が小生に云った。

「運ちゃん。どや、ただでどないや」と。

小生は決心して、首を横に振った。

ほんとうに、辛い決心だったが、小生は自分に勝った。

男は大きく舌打ちして言った。

「ええ、体格してるのに、仕方がない。宝塚まで戻ってんか。同じ穴のムジナになって貰われへんねやったら、俺達の家を知られたくねえからな。ええな、俺達はお前の車がスタートしてから、宝塚で別のタクシーに乗り替えや。すまんけど、俺達が降りたら、すぐスタートしてや。跡つけたらしたら、承知せえへんでえ。わかつとるな」

小生は素直に頷いた。

○ ○ ○

宝塚で彼等は六千円を千円札で差し出し、六百円の釣り銭をチップに呉れた。

魂が抜けたように、ぐったりとしている若い女を、二人がかりで抱きかかえるようにし

て、皆んなが車から降りた時、直ちに小生はアクセルを踏み、約束通り一目散に車を走らせた。小生も恐ろしさを、彼等を降ろしてから感じたのだ。

暫く走ってから、バック・ミラーに、白いものが映じているのを見付けた。

胸が、どきんとした。

車を物蔭に止めて、手にとってみた。

思った通り、さっきの若い女のブラジャーと白いパンティだった。

若い娘らしく、ナイロンと綿の混合の質素な白いパンティの左端に小さなチュールリップの花がアップリケされていた。

鼻を近づけるとふんと女の匂いがした。そっと裏返すと、うっすらと黄色いあとがついていた。嗅ぐとアンモニアの甘酸っぱいような匂いにまじって、若い健康な女の体臭が馥郁と匂った。

小生は、くるとパンティを全部裏返してみた。うしろ側に小さなこげ茶色のしみが附着していた。ピンク女優、谷ナオミを思い出すような、あの若い女の顔かたちや、豊かな太腿が一瞬、小生の脳裏に浮かんた。

小生はコゲ茶色のしみを吸った。渋く、にがいような味がした。

(完)





見果てぬ夢

## 悪魔退治

——&lt;薔薇と鎖の日日&gt;——

洪 沢 俊 彦 (カットも)

私は、約一時間も前から、ロクサーヌにポーズをつけています。

いつもなら、どのようなポーズをとっても美しいはずのロクサーヌが、今日はほんの少しですがどこか違って見えるようで、どうも調子がおかしいからです。

そう云えば、今日は来た時から顔色が少し悪いし、可愛い笑みもなんとなく沈んでいるようなのです。

私は、今一度ポーズをつけました。

そして、部分的にいつもと違う処を見究める事にしました。

顔、肩、乳房、と見下ろして、私の洗練された眼は腹部のなだらかな線に、ある変化を見つけました。いつもと違って、かすかながら、ふくらみを帯びているのです。

しかも、おさえるとしこりのあるようなふくらみ……。

「ロクサーヌ、どうしたの？ 今日は。どんなポーズをとっても、いつもの美しさは見られないよ。ウエストのあたりに少しゼイ肉がついたのかな」

その時、ロクサーヌが、ハッと、恥ずかしそうに顔を伏せたのを、私は見のがしませんでした。

「私のロクサーヌ、云ってごらん。ボクの方で治せるものなら治してあげたい。君の体は他の誰よりも美しいはずなのだから……」

何度かこの言葉を繰り返したのですが、ロクサーヌは顔を伏せたまま何も云いません。

「ロクサーヌ、ぼくの言葉が聞こえないの。

ぼくはもう、イライラしてるんだよ。今度の

「ロン・ド・ジュネ」に出品するために、君のその美しい体が必要なのだ」

事実、私はあせっていたのでした。私は彼女の傍に歩みより、淡いピンク色をした耳たぶに軽くベージュをすると、まるで内緒話をするように、やさしく云うのでした。

「ロクサーヌ。さあ、そっと教えておくれ。

ぼくをあまり困らすんじゃないよ。さあ、可愛いロクサーヌ、小さな声で教えておくれ」

ロクサーヌは、しばらくはだまっていますでしたが、そのうち恥ずかしそうに

「ピエール、あのネ……。でも恥ずかしいわ」

「おー、ロクサーヌ。僕は君のピエールなんだよ」

「ピエール……」

「さあ、ロクサーヌ、云ってごらん。君を苦しめている悪魔のことを」

「ピエール。私、私、お、お通じがないの」



そう云い終らないうちに、ロクサーヌは私の胸にすがりついて、泣き始めたのです。

私は思わず笑いながら、

「何だ、そうだったのか。何も恥ずかしがる事はないじゃない。さあ、ロクサーヌ、泣くのをよし。ぼくが治してあげるから」

「ホント？」

ロクサーヌは、急に眼を輝かせました。

私の心は、ロクサーヌの、こんな時につけこんで、ある種の期待にふくらむのでした。

「ちょっと待っておいで」

私は木炭紙をちぎって、「一〇〇ccのガラス製浣腸器1個」と書きました。

「さあロクサーヌ。薬局へ行って、これを買って買っておいで。そうすればすぐ薬にしてあげるよ」

ロクサーヌは、その紙の字を確かめる様子もせず、すぐ衣類をつけました。

ロクサーヌが、ドアに手をかけた時、

「ロクサーヌ、紅いバラの花も忘れずに」

と云い足しました。

ロクサーヌは、不思議そうに首をひねりましたが、すぐドアの外に消えました。

紅いバラの花。実はとっさの思いつきなのです。以前、ロクサーヌのお尻に紅いバラの花を飾り、異常なエクスタシーを感じた事があったからです。

私は、これからの事を考えると、楽しくな

って、バスルームの扉を開けました。

ロクサーヌが帰って来た時は、もう私の方の準備はすっかり整っていました。

「さあ、ロクサーヌ。着ている物を脱いで、こう云うポーズをとってごらん」

そう云って私は「SAM HASKINS EYE

FROM NOVEMBER GIRL」という、写真集のあるページを見せました。

それは、一人の女が仰向けに寝て、膝を乳房のあたりまで折り曲げている姿でした。

ロクサーヌは、立ったままで動こうとしません。

「ロクサーヌ、どうしたんだ」

「だって」

「云う事が話けないのかい。君の為だよ。さあ、早く。でないと、お尻をぶつよ」

そう云うと、ロクサーヌはしぶしぶそのポーズをとりました。

「いいよ、ロクサーヌ。ついでに、両手で膝を抱くようにして……。そうそう。それから……そうだ、ボクがよしと云うまで眼を閉じていておくれ」

私は軽くベーズをすると、ロクサーヌが買って来た包みのひもをとくのでした。

ガラスの器具は、白濁の石鹼液を吸い込むと、生き物のように輝きます。

そして、ロクサーヌに近づくのでした。

「ロクサーヌ」

私は、そのポーズの美しさにベーズを繰り返さずには、いられませんでした。

眼、鼻、ホホ、耳タブと短いベーズをしていくうちに、ロクサーヌの緊張がほぐれてくるようでした。

ロクサーヌの腕に力がこもり、とぎれ、とぎれに私の名を口ずさみ始めます。

「ああ、ピ、ピエール。お願い」

そして、頃合いを見てロクサーヌの器具は気持よく働き始めてくれたのです。

ロクサーヌは、まるで眠りの森の美女のように、夢うつつで、私にすべてを委ねております。

私は、合計三〇〇ccのの溶液を注入すると「ロクサーヌ、終わったよ」

と、耳元でささやきます。

ロクサーヌは、うつろな眼を少し開き、すぐに再び閉じてしまいます。

突然、ロクサーヌは叫び声を挙げました。私が、例のごとお尻をぶったからです。

「ひどいわ、ピエール」

「ロクサーヌ、四つ這いになるのだ」

ロクサーヌは、けだるそうに、云われたポーズをとりました。

私は、例の紅いバラを短く折ると、素早くロクサーヌを飾りたてます。

「ああ、ピエール、何するの」



ロクサーヌは、もう夢うつところではありません。

しかし、ロクサーヌの空しい強気は、それまでです。

「ピエール」

何かを乞い願う眼差しで、私の方へ振り向きます。

私は「ああ、わかってるよ」というかわりに、軽くベーズをしてやりませう。

私には、解っているのです。

今、三〇〇ccの小さな妖精たちは、ロクサーヌを憂うつにさせ、私をイラだたせた、悪魔と闘っているのです。

ロクサーヌのバラは、美しく私の眼を充たしてくれます。

「ピエール、お願い」

「ロクサーヌ、がまんするんだ。今負けてはなんにもならないんだよ」

ロクサーヌは額に油汗を浮かべながら、小刻みに体をゆさぶっています。

「ロクサーヌ、あと3分の辛抱だよ」

「ピエール、ひどいわ、もう許して、あっあ、もう駄目、ねえ、ピエール、お願い」

「ロクサーヌ、よくお聞き。モデルは自分の体にいつも気をつけてなくちゃいけないよ。

便秘すれば肌も荒れるし、顔もさえない。今後、こんな事があると、定期的に、行なわねばならないからね」

「ピエール、お願いよ。お、おトイレ」

「ロクサーヌ、ぼくの云ったことがわかったのかい」

「お……おトイレ……」

「ロクサーヌ、わかったの。今、ぼくの云ったことが」

「え、ええ。よく、わ、わかったわ。だ、だから……」

もう、ロクサーヌは、気が狂わんばかりに跪いています。

「まだ許さない。この為にぼくは、大切な制作時間を浪費してるんだからね。それに、返事はいつもすぐにしなければいけないよ」

「ハ、ハイ。だから……。オオ、ピエール、も、もうとてもガマンできない、わ。な、な、んでも、云うコト諾ぐ、から」

「……」

「ピエール、ピエール。あつ、ああ。お、お願い、ピエール」

○

『人間なら誰しも、サディスティックな心を秘めていると思う。特に美しいものを求める者は、必ず……』

そう思いながら、私の可愛いロクサーヌをまだまだ、許してやりたくない気持で思案にくれていましたが、そろそろ限度の時が来たようでした。

私は、意を決して、ロクサーヌを、バスル

ームへ導くことにしました。

「ロクサーヌ、許してほしいかい」

「も、もちろんよ。ああ、ピエール。お、お願い、早く」

「よし、ロクサーヌ、許してあげよう。ただし条件がある」

「な、何でも……」

「バスルームまで、這っておいき」

「ひどいわ、ピエール。そんな恥ずかしいことを、どうして……」

「じゃ、ここでやるかい」

「イヤイヤッ！」

「だから、云ってるじゃないか」

ロクサーヌは、仕方なしに、這ってバスルームに向かいます。

私は、バスのふちに腰を下ろし、

「さあ、許してあげるよ」

と、ロクサーヌを便器に腰かけさせますが、ロクサーヌは、

「でも、見ちゃイヤ」

とでも、云いたかったのでしょうが、言葉にならないうちに、ある人の詩う「激しい水洗のほとばしるにも似たあの音」を私に聞かせて、屈伏したのです。

私は、そのホツとしたような顔に、ある種のエクスタシーの表情を発見し、しばらくは見とれていたのです。





15

それから、また私は「ロマンス」へ行きま  
した。

「あら、来てくれたの。うれしい」

玉枝はからだをすりよせてきて、私の手を  
にぎります。二、三度通ってるのですから、  
お馴染みには違いありませんが、玉枝の私に  
対する態度はあきらかに意識的でした。

「マスターが来てくれると、あたし、とても  
嬉しいの。ホラ、見て、こんなに上気しちや  
って……」

玉枝はうっとり目を細めて私の顔の前に

壺

中

の

園

M  
の  
傾  
斜

5

真 砂 十 四 郎

自分の顔を近づけるのです。「キッスしても

いいのよ」といった意味が充分ふくまれてい  
るのですが、私はどうも、自分から積極的に  
どうするという行動もとれないのです。

男を悩殺するような情感の濃い眼です。こ

れは私が玉枝と最初に会ったときからそう感  
じていたことであり、妹の郁子と較べて（い  
いの眼で、わるいのは口許か）という印象  
だったのですが、こうして私の前五、六セン  
チほどの近くにクローズアップされた彼女の  
唇をみますと、郁子より大きく、郁子より厚  
い、何かを待つようなまっ赤な唇が、意外な  
魅力となって私の情感を刺戟するのです。

「ねえ、あんた……。きょう、家へ帰らなき

やいけないの？」

「うん」

「だって、郁子がいるんでしょ。あんたがい

ないんで矢沢さんが来てるかもしれないわ」

「来てるかもしれないね」

「矢沢さんって人、しょっちゅう来るの？」

「しょっちゅうというほどでもないね。十日

に一度ぐらいかな」

「郁子ったら、うまいことやってるわ。それ

でお店へ住込みにしたのよ、あの子。でもあ

んな、隣の部屋で寝てて、やけるでしょ」

「そうでもないね。平気さ」



「よく平気でいられるわね」

「慣れてるもの」

「ねえ、たまにはあんたが帰らない方が、郁子は喜ぶわよ。一ぺんぐらい、他<sup>よそ</sup>へ泊まったらどう？」

「……」

「あたしだって一人きりで、家へ帰っても待っていてくれる人もなし……」

二人で何処かへ泊ろう、という意味がよくわかります。私は郁子から「姉さんと結婚したらどう？」といわれた言葉が頭の中にしみこんでいますし、玉枝もまたこの問題については郁子と何度か話し合っていることが、充分に想像できます。

だから、いま私がこの女と一緒にホテルへでも泊まったら、それが結婚への前提となることも、また容易に想像できるのです。

何人かの男と連れこみ旅館で寝ている女のことです、私の場合とて、単なる遊びですむかもしれませんが、つきまとわれて、あとからうるさいことになるかもしれません。

こんな彼女の挑発にのるほど私も馬鹿ではない。君子あやうきに近よらず――。

私は、自分で自分にそう言いきかせて、オールド・ロングサインの音楽をきかぬうちに

「ロマンス」を出てしまいました。

そのくせ私は、家へ帰るタクシーの中で、いま玉枝と踊ったダンスの味を、牛のように何べんも反すうしながら思い起こしているのです。故意に自分のからだを私に押しつけながら、身をよじるようにして抱きついてくる玉枝の肉体を、車の中にいる今でもピリピリと電気のように感じて、消すことが出来ずにいるのです。

## 16

半月ほどすぎた店の休日の日でした。

郁子は矢沢とデートだそうで、昼すぎに家を出てしまいましたが、今晩は帰ってくるかどうかかわかりません。もっとも近ごろでは、わざわざホテルに泊まらなくても矢沢と一緒に帰ってきて、店の郁子の部屋で二人で寝た方が、金がかからなくてすみますから、帰らないということは無いと思うのですが、帰ってくるにしてもまず十時か十一時、いずれ遅いご帰館のことと思われれます。

私は二階の押入れの中を探し、郁子が、まるで放りこんであるパンティやソックスをとりだして洗濯していましたが、思いがけずまた玉枝が遊びにやってきました。

「あら、きょうはお休み？」

「おや、いらっしやい。休業日なんでね。郁ちゃんはちょっと出かけてるけど、まあどうぞ、どうぞ」

「マスター、ひとり？」

「僕ひとりだ。しかし郁ちゃん、夕方には帰ってくると思うんだ。それまで遊んでいらっしやいよ」

「ええ、ありがと。マスターはなにかご用があるんじゃない？」

「別にないよ。退屈してるんでね」

「そう。それじゃ、お店の出動まで、ここで遊ばしてもらっていい？」

「いいともいいとも。サアサアおあがり」

私は玉枝を郁子の部屋へ案内して「帯でもとって、ゆっくりくつろいで下さいよ。僕はちょっと下で、しかけた用事をかたづけてくるから、雑誌でも読んで下さい」

と、週刊誌を二、三冊、玉枝に渡して階下へおり、大急ぎで、洗いかけたものをゆすいで絞って、ハンガーへかけてから、また二階へ上りました。

玉枝は私に言われたとおり、帯をとって、伊達巻姿のまま、腹匍いになって雑誌を見ていました。



肩からウエストへかけて下降線をとった腰の曲線が、お尻のところでボリュームのある隆起となってもりあがり、再び足へかけてなだらかに下降している玉枝の肉体が、なやましい情感をともなって私の目にしみます。

この前「ロマンス」で逃げて帰った私に対して、玉枝はどう思っているのでしょうか。誘惑してもダメだ、と諦めたのでしょうか。きょうは郁子もおらず、この部屋に二人だけです。私も多少警戒しなければいけません。玉枝もキャバレーの雰囲気とちがいますので、露骨に言いだしかねているのかもしれない。

コーヒーとケーキの接待で、私と玉枝の二人は、とりとめもない話をかわしました。

それにしても、気を惹かれるのは玉枝の唇です。いくなれば、私の胸のうちの感情線をピンとはじくような唇です。最初の印象ではこの唇に私はいい点をつけませんでした。普通の評価点というものは、ある標準的基準型に対して及第点をつけるもので、特長のあつ、個性の強いものに対しては、うっかり見過ごしてしまうことが往々あるものです。大きくて厚くて、しまりがいい受け口で、私の最初の評価点どおり下品な唇にはちがいない

のですが、近ごろそれが私の心の中に大きく蔽いかぶさって、追いはうことが出来ないでいるのです。まったく口を吸うためにあるような唇です。その形から知性のかけらもうかがえませんし、その表情から何一つ清純さのただよいも感じられません。情欲だけがそこにある唇なのです。今まで、多くの男が夢中になってこの口を吸ったことでしょう。彼女もまた夢中になってこの口で男の口を吸ったにちがいません。

「ねえ、マスター。あんた、郁ちゃんから何か聞かなかった？」

「何か……って、なにさ？」

「あんた、あたしのこと、どう思ってる？」

「どう思ってる……って。美人で、すばらしい人だと思ってるよ」

「まあ、調子がいいのね。マスターはあたしを嫌いじゃないで？」

「もちろん」

「好き？」

「うん、好きだね」

「どのくらい？」

話の途中、突然、呼鈴が鳴りました。

「あ、ちょっと待ってね」

私は急いで階下へおりてゆきました。新聞

屋が代金をとりにきたのでした。お金を払って二階にあげますと、玉枝は膝をくずして足袋をぬいでいるところでした。

「マスター、爪剪りある？」

「ああ、あるよ。爪きるのかい？」

「ええ」

私は用簞笥から爪剪りを出して、彼女にわたそうとしましたが、悪いくせがまた出てしまいました。

「よし、僕が剪<sup>き</sup>ってやろう」

私は彼女のくずした膝の前に坐りました。

「いいわよ、あたしがするから」

「いや、足の爪<sup>つめ</sup>ってやつは自分では剪りにくいものだ。遠慮はご無用。僕がきってやる」

玉枝はちらつと私の目をうかがいましたが「そう、きってくれる？」

と、その気になったようです。

「さあ、おみ足を出して。君は座椅子にもたれていたらいいんだ。痛くないように、せいぜい気をつけて剪らせていただきます」

私はつき出された玉枝の足を握って、親指から剪りはじめました。すんなりした、無駄肉のない恰好のいい足です。玉枝は足を私にまかせたまま、一生懸命に爪を剪っている私をじっと見おろしていました。



酒の上とはいいいながら、一度、私を馬にしたり、足の指の間にトマトをはさんで食べさせたりした玉枝です。誰も見ていない二人きりの場所でもあり、私に足の爪を切らせていても、それほど抵抗はないようです。

「これでも読んで……」

左の足がすんだとき、私はかたわらにあって雑誌をとって玉枝にあてがいました。

「あら、ありがとう」

「さ、こんどはこっちの足」

玉枝は左足をひっこめて、右足を差し出します。また私は一つ一つ丁寧に親指から小指へと剪ってゆきました。

歌麿の浮世絵に「美女爪剪りの図」がありますが、女が足の爪を剪っている姿は、美しいものです。玉枝の場合は歌麿の絵のようにからだをかがめていませんが、反対に座椅子にからだをもたせかけ、からだをそらせて爪を剪らせています。さてこの姿は美しいかどうか？ 客観的評価などはどうでもいいことです。のびのびと突出した白い足に、やわらかい赤いものがぬんめりとからまって、その足を私にまかせて、雑誌の頁をパラパラとめくり読みしている玉枝の姿を私は最高の浮世絵と感じながら、プチン、プチンと爪を剪っ

てゆくのでした。

小指まで全部剪り終わりましたが、玉枝はそのまま雑誌を見えています。私はついつい、彼女の足を両手で捧げて、爪をきったあとの指先を一本々々なめてしまいました。

ハッとして雑誌から目をはなした玉枝は、そのままの姿勢で、じっと私を見おろしていましたが、何を思ったのでしょうか、右足をあげて私の首をからむようにおさえ、そのまま自分の方に静かにひっぱりこみました。私の首は、彼女の足の間にはさまったまま、ちょうど女郎蜘蛛の巣のまん中にひっぱりこまれる昆虫のように、徐々に引き寄せられてゆくのです。

（なにをするのだ）と、男の力でふり払ったら、それまでのものです。ところがなんと、私は声も出さず、雌に食われる雄のかまきりのように彼女のするまま、思うままに自分をまかせているのです。

以前、私を馬にした時の私の態度から……郁子と、ひそひそ話したとき聞いた私の性質から、私を参らせる手練手管のテクニクの変更を、玉枝はいまここで試しているのではないのでしょうか。

私は赤いお腰が首にからんだまま、奥へ奥

へと引っぱりこまれました。この足は、がんじがらめに私にまといついた、女郎蜘蛛の糸なのです。

「うーむ、うう……」

声にならぬ声をふりしぼっている私を、玉枝はからだを横にして、じっと見おろしながら私の反応を、試しているようでした。それなのに私はなんとことぞ、彼女に「ふふん」と勝利の笑みをもらさせるような賤しいふるまいを、残念ながらしてしまうのです。

私は彼女の足の下で、むせかえるような、しびれるような思いを味わいました。

「ねえあんた。あたしが好きなんですよ？」

そのままの姿勢で固定されたまま、私は天下一玉枝の声をききました。私はつまる息にあえぎながら「うん、うん」とうなずきました。私の顔は彼女の長襦袢の下にかくれてしまっていますが、玉枝は太腿の感覚で私の肯定を認めます。

「だったら、どう？ あたしと一緒にあったらどう？」

私は返事をしませんでした。彼女はしばらくそのままでしたが、両腿に力をいれて私の首をしめつけました。

「返事なさいヨ。あんた、あたしが好きな



「うん、うん……」

「じゃア、あたしと結婚するか？ どう？」

その味……。あたしと結婚するんでしょ？」

私の理性と感情の天秤は、あえなく崩れてしまいました。私はむせびながら、

「うん、うん」

と返事をしてしまったのです。

「そう……」

しばらく間をおいてから、玉枝はおもむろに足をひらきました。私はハーツと吐息をはきながら起きあがりました。そして二人で顔を見合せて、玉枝も私も思わず「あハハハ……」と笑い合ってしまった。

「ごめんなさいね。でも嬉しいわ、あんたが承知してくれて……」

私はにが笑いをしながら、また「うん、うん」とうなずきました。乱れた裾もそのまま、玉枝は勝ちほこったように堂々と私の膝の上に乗ってきて私に抱きつき、自分の口を私の前につきだします。敗れた私は観念して彼女を抱きしめて、あらためて二人の口と口を合わせたのです。

17

出勤時間が間近くなった玉枝が、乱れた着物を着なおして帯をしめ、お化粧直しをしているとき、郁子と矢沢が帰ってきました。遅くまで帰るまいと思っていたのが、意外に早いで帰館でびっくりしましたが、郁子も姉の姿をみて多少びっくりしたようです。

「あら、姉ちゃん、来てたの？」

「うん、きょうが休業日とは知らなかったものだから。マスターがいたからよかったようなものの、もし出かけていたらとんだ無駄足くらうところだったわ。もうすぐ郁ちゃんも帰ってくるから待ってろって言われたんで、つついっ落ちついちゃったってわけ」

「あたしがすぐ帰ってくるって？ マスターはうまいこと言って、姉ちゃんと二人きりで一緒にいたかったんじゃないの？ ねえ」

「いや、そんなことないさ。せっかく訪ねてきてくれたんだから、ひきとめるのも一種のエチケットさ。でもよかったよ。郁ちゃんの帰りがもう少し遅かったら、姉さん、帰っちゃったところだ」

「姉ちゃん、何時ごろ来たの？」

「そうねえ、三時ごろだったかしら」

「いま何時？ 五時か……。姉ちゃん、マスターと何してたの？」

玉枝は、にやにや笑っていましたが

「ねえ、あんた。言っちゃおうか？」

「……」

私は、たじたじとして口ごもりました。

「あのネ、あたしとマスターと……結婚することになったの」

「えッ、結婚……？」

郁子は目をみはって私と玉枝を見つめていました

「マスター、それ、本当……？」

私は、しぶしぶ……心の中ではまさにしぶしぶですが「うん」と首を縦にふりました。

「まあ、すてき！」

郁子は、足を跳ねあげてとびあがりましたが、かたわらの矢沢にかぶりつくように抱きついて

「矢沢さん。姉ちゃん、マスターと結婚するんだって！」

郁子にひっぱられて二人はくるくると一回転してから、郁子は矢沢の首に抱きついてキッスをしました。

「姉ちゃん、あたしが言ったとおりでしょ。」

マスターは姉ちゃんが好きだったんだから、こうなるのは当然よ。で、いつするの？ 結婚式」



「さあ、そんなことは、まだわかりやしないわ。いま二人で約束したばかりだもん」

「だけど、そう決まったら、早い方がいいわよ。あたしと矢沢さんで仲人になってやろうか」

「うるさいわね。そんなことは、こっちで決めるよ。ねえ、あんた」

こうして四人ともすっかりお目出度ムードになってしまいましたが、私だけは内心割りきれない気持のまま、にがい果実を噛む思いでした。

玉枝の気が変わって、キャバレーへの出勤はとりやめ、今晚は四人でお祝いパーティを開くことになりました。

「お料理は、あたしと、マスターがするからね。郁ちゃんと矢沢さんは買いもの係よ」

玉枝は、主婦になったような態度で郁子らに野菜や肉の買いものを命令し、私に手伝わせながら料理の支度にとりかかりました。

パーティは玉枝と郁子がもっぱらしゃべり役、矢沢と私が聞き役で、楽しい時がすぎました。

「姉ちゃん、どうするの？ 今夜、ここへ泊まる？」

「いやよ。婚約の日から、泊まったんじ

ゃ、いくらなんでも恥かしいからね。今晚は帰るわ。郁ちゃんも今夜は五反田の家へこない？ あたしと一緒に帰ろうよ。いろいろ話すこともあるからさ」

「だったら、マスター一人でおいくの？」

可哀そうね。マスター、いい？ 淋しいでしょう？」

「おいおい、冗談じゃないよ。姉さんが、そう言ってるんだから、郁ちゃんも今晚は家の方へお帰り」

「うん、じゃアそうするわ」

その夜、私はひとり、床の中で転々反側して眠れませんでした。

大へんなことになってしまった。よりによって、あんな女と結婚するとは……。

「ほぞを噛む」とは、このことでしょう。後悔の苦い思いが頭の中をかけめぐります。

あんな女を、お前の家内でございと人の前に出せるのか。誰が見たって安キャバレーの女給じゃないか。あんな女と偕老同穴……。

あんな女と夫と妻……。今からでも遅くはない。「よく考えたが、思い直した」とつぶねたら解決できる問題ではないか。迷うことは何もない。あしたにでも婚約は解消しろ。

そう何べんともなく繰返し自問自答しながら、蒲団の中で転々としているうちに、これはまたどうしたことでしょう。私の臉の映像が、少しずつ、少しずつ変わりはじめてくるのです。

きょうの玉枝の、あの破廉恥なふるまいはどうだ。足でおさえて、締めつけて……。なんとという恥さらし、なんとという下劣……。こんな女が……こんな女がまたとあろうか。またとあるまい。……またとない女とは……そこらへんに何処にでもいる女と違うということだ。……ということは稀少価値の高い女ということではないか。夾雑物にわずらわされず、まっすぐに考えてみることだ。体裁や、世間体にならずにわされることなく、お前の心の底の底を、よくく見つめる必要があるのではないかな。本当をいえば、こういう女をお前は「好き」なのではないかな。人前、人前というけれど、社会的にそれほど必要とする「人前」が、お前にはあるのか。場末の小喫茶店に、礼節正しく、才たけた妻を迎えて、格調高くお前は生きてゆきたいというのか。理性ばかりにこだわって、それで人生の幸福が得られるというのか。お前の感情の方はどうするというのだ。お前の感情を有効に生かすことを考えるのが、本当の理性なのではな



かろうかな。

バイロンを見る。永井荷風を見る。荷風が江東の陋屋に住みちびた下駄に汚れた風呂敷包み姿で浅草へんをうろついていたのは「荷風はケチだったから」という人があるが、財産をゆずる人もなく、あり余る金は一生ぜいたくに使い暮らしても使いきれないほど持っていたのだ。二間間口まぐちの裏長屋を、高級マンションに切替えようと思ったら、彼はいとも容易に出来たのだし、ちびた下駄をキッドの靴に、風呂敷包みをフラティンのショルダーバッグにかえようと思ったら、これも容易に出来た筈だ。それを彼は何故しなかった？ 洋行帰りの紳士として、当時日本で指折りのダンディだった彼が、あえてスラムのお爺ちゃんに脱皮した理由はどこにあったのか。それは格調ある世間体よりも、自分が求める真情に忠実に従ったからなのだ。才色兼備のインテリ女性より、玉の井の女や飲み屋の姐ちゃんの方が「好き」だったからなのだ。一杯飲み屋の美代ちゃんから「おじいちゃん、もうやめとき。サ、お茶でものみな」と言ってもらえる風体と環境の中に彼はいたかったからそうしたのだ。俺だって同じことだぞ。玉枝のような女を、本当はお前は「好き」なの

だ。だったら正直に自分の求める道をすすんだらいいじゃないか……。

等々々……あれを思い、これを思い、しているうちに、私はいつしか瞼の中で、しどけない寝巻姿の玉枝をしっかりと抱きしめていたのでした。

# 18

その秋、玉枝と私は結婚しました。結婚といっても私は初めてですが年も年ですし、玉枝の方もまた、以前、男と同棲していたこともあり、文金高島田で結婚式というのもおもはゆく、披露というのも気がひけましたので、矢沢と郁子の介添で、店の二階でほんの真似ごとの結婚式。同時に私と玉枝の介添えで矢沢と郁子の結婚式も……結婚式とも言えませんが、要するに二組が形だけの盃を交して、私と玉枝は北陸方面へ、矢沢と郁子は関西方面へ三日間ほどの新婚旅行に出ました。

郁子と矢沢の方は以前からですが、私と玉枝はその旅先の旅館で、初めて肉体関係を結びました。蒲団の中では一挙手、一投足、すべて玉枝のリードで、こがはこばれる有様でしたが、赤い花卉を一ぱいにひろげて待つ雌しべに、蜜蜂の私は夢中で、とろけるような

甘い蜜を吸ったのです。

寝物語での玉枝の話では、今の喫茶店「コルティナ」をスナックバーにしたいというのは。一軒、バーをつくるには相当の金がかかるが、今の店の改造なら、ほとんどあのままで間に合うし、ほんの僅かの金ですむというのです。

キャバレーの女たちの持っている抱負は、「いい人が見つかったら結婚したい」ということと「小さなスナックバーでも一軒持つてそのマダムにおさまりたい」という、まずこの二つです。玉枝が私と結婚したら、この二つの望みが同時にかなえられるという計算が、はじめから玉枝にはあったようです。きっと郁子とも相談の上だったでしょう。私への持ってゆき方、扱い方など、郁子もいろいろとアドバイスをしたに違いありません。

「場所がわるいよ。あんなところで、やってゆけるかな」

「大丈夫よ。そりやア一現の客はあんまり来ないかもしれないけど、バーなんてのは一現の客なんか問題じゃないの。要は、お馴染みさんよ。それはあたしにまかしといて。」「ロマンズの「あたしのお客もみんな引っぱっちゃうからサ。それに郁ちゃんもホステスで来



てくれるし」

「郁ちゃんも来てくれるのか？」

「矢沢さんの月給だけじゃ心もとないから、共稼ぎするって言うの」

「なんだ、郁ちゃんの方が先刻、ご承知なんだな」

「そりゃ、姉妹<sup>きょうだい</sup>だもん、いろいろ話し合うわよ。郁ちゃんも、姉さんなら大丈夫だって言ってるのよ」

「ふーん、そりゃアまあ、君だったらうまくゆくかもしれないな」

「よし、決めた。帰ったら早速、とりかかりましようよ」

そんなわけで、旅行から帰ってから、私たちは喫茶店からスナックバーへの改造にとりかかりました。

玉枝は私の家へ。五反田の家へは会社の独身寮から矢沢。私の家から郁子。道具といってもほんの身の回り程度ですが、金物問屋の運転手をしている矢沢が受持って、それぞれ運びこんでくれました。

店の名も、しちむずかしい「コルティナ」から、覚えやすい「タマエ」と改称することにし、私の文案で地図入りの開店挨拶状を印刷、マダム玉枝の名で三百枚ほど発送しまし

た。私が出す先はほとんどありませんが、玉枝がキャバレーで貰った名刺やら、杉並区内の会社商店の名簿などを頼りに、二百五十枚、郁子と矢沢の関係で五十枚といったところ。玉枝は洋酒の仕入先などと交渉。私は、一週間ほどバーテンの講習に通いなどして、いよいよ十月中旬、スナックバー「タマエ」が開店しました。

ホステスとして初登場の郁子は、ロングスリーブのワンピースですが、スカートがわずかに腰を蔽っている程度の超ミニ・スタイルで、今までの郁子から何段かイメージアップしてデビュー。セミロングの髪がひときわ彼女の魅力をひきたてています。玉枝はキモノ姿ですが、ロマンス時代の大柄な花模様をやや粋<sup>いき</sup>向きに変えて、江戸小紋のシルバークレール地に一色染め、それに淡い水色の半襟の襟もとからのぞく桃色の肌襦袢のふちが艶めかしい効果をあげて、一応のママさんぶりを発揮していますし、私はYシャツに黒の蝶ネクタイというバーテン姿でカウンターの奥に控えました。

開店第一夜……。来てくれた客は十五人ほどでしたが、ほとんど玉枝の知り合いらしく「開店おめでとう」とか「ママさんぶりが板

につく」とか「あたしの妹よ、ごひいきに」とか、私はただ黙ってビールを出したり、突出しの南京豆を小皿に入れたりするだけの用しかありませんでしたが、さすがに玉枝は三面六臂の活躍ぶりで、(商売も楽じゃないわい)と私もひそかに感心する始末でした。

帰る客にはドアのところで「また来てネ」「きつとよ」などとキッスもしかねないほどギョツと抱きついて送りだすのが気になりましたが、一々気にしていたらこんな商売はやってゆけないのでしよう。私はただ黙々と皿でも洗っているだけでした。

「ああ、くたびれたわ」

ようやく客も帰って閉店して、郁子も帰ったあと、玉枝は階下の部屋で帯もとかずに寝ころがってしまいました。

私は玉枝をそこにおいたまま、店のあとかたづけを、これは郁子のときから慣れていたすから、手際よくかたづけして二階へあがり、薄団を敷いて寝間の用意も全部ととのえてから、寝ころがっている玉枝のかたわらに坐りました。

「ごくろうさん。だいぶ、酔ってるようだが、疲れただろう？ 夜食でも食べるかい？ それともこのまま寝るか？」



「きょうはもう寝るわ」

「二階に蒲団、敷いてあるよ。じゃア、寝るとしよう」

「あんたア、抱いてってエ……」

「抱いて？……抱いてゆきたいのは山々だけど、僕の力じゃ玉枝ちゃんに、押しつぶされちゃうよ。よし、おんぶして行ってやろう。おんぶなら、なんとかいけるから」

私は玉枝をおんぶして、ふうふういいながら二階の寝間へつれてゆきました。

「さ、おねまと着換えだ」

「あんた、してエ」

「よしよし、さあ、そこへ立って」

玉枝は蒲団の上へ立ったまま、私にまかせています。

「はい、帯……腰紐……着物をぬいで……長襦袢」

一つ一つ私は玉枝のからだから脱がせてゆきます。

「次は肌襦袢、それからお腰……おや、パンティしてないのかい？」

「着物のときはしないのよ。芸者さんなんかみんなそうよ。早くよ、寒いじゃないの」

「ごめん、ごめん、はい、ネグリジェ」

郁子のネグリジェはピンクでしたが、玉枝

のは淡い水色のネグリジェです。

玉枝は私が襟許の紐を結び終えるのを待って、そのまま蒲団の中へ、お化粧も落とさないまま寝ころがってしまいました。

脱いだものを全部たたんでかたづけ、階下を一応見回って、私が床の中に入ったときは玉枝はだらしなくからだを投げだしたまま、すでに眠りこんでいました。私は気づかれぬように彼女の腰やら太腿を抱いて、そっと接吻しましたが、私が何をしようとまったくさせるまでも、玉枝は正体なく眠りこけて全然気がつきません。

こんな調子で第二日、第三日とすぎてゆきました。玉枝も自分の店ですから、夕方になるとお客たちへ「ねえ、来てちょうだいよ」の電話。来てくれた客へは「あら、うれしいわ」のサービスをこれつとめますが、しかしなんといっても立地条件の悪さは致命的のマイナスです。十日、十五日とすぎたころには一日十人來たらいいところ。土曜日などは二、三人という成績で、玉枝も郁子も大いに手持ぶさたをかこつようになりました。

しかし、なんといってもバー「タマエ」のプラス点は、権利金も家賃もいらぬこと、店の造作といっても喫茶店からの小改造で間に

合わせたこと、人件費は郁子の給料だけでいいことなどで、一日七、八千円も売上げがあったら結構やってゆけますので、私自身は悲観もしていませんでしたが、玉枝にとってはまことに不本意な成績のようでした。

そうしたあせりもあるせいか、玉枝のサービスが次第々々に濃厚になってきました。カウンターの中でサービスするのがたてまえになっただけですが、そうばかりもしてられません。「ママさん、踊ろう」などと催促する客もいます。玉枝自身も、軽いジョークや、しゃれたウィットの話だけでサービスするという柄ではありません。ほかに客のいないときなど、客の誘いにすぐに応じてしまいます。

有線放送の音楽に合わせて、玉枝と客とは店のフロアーでしつとりと抱き合って……踊りまわるといふ広さではありませんから、多少の足ぶみのほかは、踊っているというのは形式だけで、ただ二人、しっかり抱き合っているのです。飲んで、酔って、抱き合っているという状態の次にくるものは……客の男は玉枝の口に自分の口をおしつけます。すると玉枝は、踊っているその足ぶみも忘れて、ぎゅっと抱きしめたまま相手の口の中に自分の





読者ギャラリー『倒錯の情痴』岡 たかし

舌を挿し入れて吸い合うのでした。

こんなところをチラリと見る私は、しびたような感覚が胸の中を走ります。

ジェラシー……?と違います。自分の妻でありながら、自分には手のとどかない雲の上のいとなみを見ているような孤独感です。

「別に秘密じゃないんだけど、わざわざ、披露する必要もなし、あんたはこの店のパーテ

ンってことにしとくわ。だからあんたは、あたしやお客さんのこと、知らん顔してたらいいのよ」

開店するとき、玉枝の言った言葉が耳に残っています。私は皿でも洗うようなふりをしてことさらにカウンターの下へうずくまり、客の視野に私の姿が入らないように努力するのでした。

最初はいくぶん私に遠慮してか、私が見ていないような瞬間を見はからって……といった形での接吻でしたが、私が何も言わないのをいいことにして、その接吻の相手は次第にふえてゆきました。日を重ねるうちに、単独でくる馴染み客の大半と玉枝はこんな行為をつづけるようになりました。

「仕方がないのよ、商売なんだから。お客を引っぱろうとしたら、このくらいのサービスしなきゃダメなのよ」

という含みでしょう。玉枝は私に何も言いませんでしたが、私が気がついていいることはもちろん承知の上だと思います。

しかしそれにしても、単にサービスだからというキッスではありません。あれは玉枝自身が気をいれて楽しんでいるキッスです。私が文句を言えば「仕方がないのよ、商売なんだから」と反撃するのはわかっていますが、私が何も言わないので、彼女の方でも自分から言いわけする必要もないと考えているのでしょう。

それにしても不甲斐ない男——と知っているにちがいません。私の知らないところで、というのならともかく、これではコ、キ、ユ以下です。

(未完)



## 男マゾ映画の夢想……

## S M フィルム小案

松 山 壮 吉

現在はブルーフィルムの時代は過ぎてテープの時代になったと言う。フィルムは生々しい映像があるだけに、かえって醜悪になったり滑稽になったりし易い。それに比して主要な部分を想像にまつテープが、より迫力のある場合の多いのも、もっともである。してみれば、フィルムを論ずるのは多少時期遅れかも知れないが、最近些か感ずる機縁があったので、妄想的愚見を述べてみたい。

是迄にブルーフィルムは多少見て来たが、良質のものはごく少ない。近来著しく向上していると称されているが、最近実見した範囲では大巾にイメージチェンジ出来るほどのものではない。ただし新しい傾向はあるので、それは次の二種に大別出来ると思う。

一は「文学化」である。行き詰まったスト

リップがコミカルなショウとして再生しているのと同じ方向を狙ったものである。この方向を高く評価する向きもあり、確かにいやみがなく、宴会の余興代りに上映するにも気軽であるし、一つの方角ではあるが、これは益々大胆になる大きなスクリーンの成人映画にやがて競合し、結局圧倒されるのではあるまいか。もっとも成人映画を余興に上映するとは時間的にも出来ないから、いやみのないエロで、テレビよりは一寸あくの強い処をねらってすっ堅気の宴会用専門でいけば案外道が開けるかも知れないが、所詮私にはあまり興味のない分野である。

もう一つの方角はS Mをからませる傾向で



ある。これはずっと感覚的で将来性もあるのだが、何分にも未熟で、本当にS Mを理解する人の手ではない様に思われるものにしか、行き当たっていないのが残念である。

特に私の様なMにとっては、男性Mがとかくきわめて醜悪な印象でしか扱われ得ず、従って殆ど作品化されないことが残念であり、何とかしてより感動的刺激的な男性Mのフィルムに接したく、その方法をあれこれ考えるのである。その方法とは男性Mに限らずブルーフィルム一般に対する勝手な要望にもなる様だが、次に雑然と列举してみよう。

ストーリーめいた情況設定はよほど気の利いたものでなければ無用である。観客はストーリーを見ているわけではない。



この種のフィルムは短時間で勝負をきめるものなので、演技の順序、カメラの動かし方などは、通常のドラマ以上に綿密に組んでおく必要がある。シナリオというよりはコンテをしっかりと書き込んでおく必要がある。ところが実際は、どうせこの種のものだから、と出たとこ勝負的にやる結果、たまたまカメラマンや演技者がよほど上手でないとうまく行かぬと云う事になるようだ。大学生のお遊び仕事に案外いいのがあったと云うことだが、恐らくうんざりする程の「芸術性」がありながらも、入念なコンテが無神経な停滞をなくし、緊張感を持続させている処に原因があるのではあるまいか。通常のブルーフィルムの如き単純な切札を持たぬSMフィルムとしては、この準備と構成の工夫は一段と重要になるろう。

雰囲気としては貧乏たらしい日常生活性は感心せず、豪華な背景が必要である。必ずしもゴタゴタした道具立は必要ではない。或場面では黒いバックだけ、又或場面では黒いバックに寝台だけ、或いは椅子だけといった、やや象徴劇風なシンプルな装置で十二分に豪華な感じは出るのである。ただしバックのカートンは本当の重いビロードであり、その後

の壁は本当のコンクリートの厚味がある必要がある。カメラは格段に進歩しているのに、その辺の配慮が特に日本物では意外に不十分になり勝ちである。

衣裳は極めて重要である。革やゴムや鎖の冷たい効果は刺激的である。豊かな髪にきつい化粧、黒革のオールインワン、踵の高いハイブーツ、長い手袋をつけた纖手に握られるしなやかな革鞭といった、今では余りにもステロタイプ化したと言われそうな女王様のスタイルも、若かりし日のゴンドラの舳に立つヴェニス的美女や、コクトー演出で死の女神に扮して、冷たい魅力で登場した当時のマリ・ア・カザレスの様な、一種颯爽とした感じでサツと登場してくれば、中年の無神経を身につけた今の私でも、野坂流に云えば、「シッコをチビリそうなほど」の感激があるだろうと思うのである。実演やテレビには相応の雰囲気のある役者や演出もないでもないのに、最も端的にその魅力を打出せる筈のミニ・サイズにどうして良いものが無いのか、或は私の眼に入らないのか、残念な事ではある。<sup>①</sup>

颯爽たる登場で先取点をあげれば、後はそのムードでたるみを見せず一気に押切ること

である。

女性Mは比較的誰の眼にも魅力を持ち易いが、男性Mはマニア以外の眼には醜惡に映り易い。先日ヤプー出版記念パーティーでもどうもそれを実証してしまったらしい。特定のマニア以外の者にも或程度感じられる感覚でないと、出版物とは異なり、或程度の数でまとまって見るフィルムの性格から云って、どうも成立し難い。

そこで何が醜惡に見えるかを古来の若干の例で考えてみると、第一にスローな動き、特に如何にもカメラを意識した思わせぶりの繰返しである。こういうものが、大部分の男女の感性の表面を覆っている常識的感覚に拒否反応を起こさせるのだから単刀直入な思いきった烈しいショックで表層を一気に突き破り、男性の心には多かれ少なかれ有ると云われるM性、全女性の心情の底にあるS性をゆすぶるものでなくてはならぬ。

右の見地から考えると、中心になる見どころは、平凡ながら磔や吊しでの強烈な鞭打であろう。単純なバックの前に手錠足錠を使用<sup>②</sup>しての磔刑、或いは革手錠に鎖をつけての吊しというスタイルで革衣裳のサジスチンの強烈な鞭打を浮き上らせ、全身にたちまち縞縷



様が出来、やがて二三の条痕から血が流れるところを短い時間で見せれば一つの山場になり得るだろう。実演と違って繰返し③の必要がないから、生命に危険を与えたり後遺症を残したりしない様に勘所さえ心得れば、徹底的にやれるのが強味である。

男の役者に難点が出易いのは身分を知られるのを恐れるからであり、革やゴムの全頭マスクで顔を隠せば、モデル志願者はいくらもみつかるだろし、スタイルとしても一種の面白味があるように、或いは私の趣味に偏りすぎるかも知れないが、私には思われる。

黒いマスクをバックに鼻をアップし、鼻孔のアップ、纖手が細い錐でグサリと鼻中隔を突き刺し、手早く針金製の鼻輪を通し、鼻輪に鎖をつけて固定に一役買わせる。鞭打をそれに連続させる、と云うのもいいだろう。ただし鼻輪で固定する時は、本当の力はそこにかからぬ様にしておく必要があるだろうし、画面は連続していても、実は一時カットして血管収縮剤と軟膏で血止めをしておく方が望ましい。流血が目立つと陰惨な残酷味を帯びて来て美感をそぐからである。

汚物の扱いには細心の注意が必要である。サジスチンが立ちはだかったまま大ジョッキ

にネクターを仕込み、これをうやうやしくささげて飲む等は、比較的抵抗が少ないのではあるまいか。しかしその反面、ジョッキの中味をすりかえたと疑われぬ様に画面に一貫性を持たせる注意が必要になる。

大の方は非常に困難である。せいぜい一片が口の中にポトリと落ちる、その程度まで、それも試写の段階で何人かの意見を徴して、カットするか否かを定めねばなるまい。

鞭打を芯として、鼻輪、鞭打、神酒拝受と余計な時間を取らずにトントンと続ける。これを柱として、女王への礼拝、騎乗、蠟燭責め、吊し責め、特殊な拘束。手早く緊縛出来るサジスチンが得られれば緊縛の過程などのうち、過当なものと組合わせて一五分間をフルに設計すれば相当に密度が高く、かつ受容され易いものになるのではないだろうか。

或程度長いプレイを短時間にまとめる事にはなるが、あまりカットカットでめまぐるしく移るよりは、映画の正道に従い、中心になる演技は実時間とイコールの考えでいく方が、画面が緊張する様に推測される。

余計なストーリーを省いて、雰囲気豪華に、背景を単純に、衣裳を冷たい魅力に富んだ感覚的なものに、烈しい動きを中心として

快調なテンポを重んじ、停滞を避ける。これを綿密なコンテで支えていく。こういう要領で行けば、革衣裳のサジスチンが薄衣の少年の衣を引き裂いて、ヒシヒシと手早く緊縛していく処にアクセントを置いた、男性による暴行フィルムの逆をいった形や、⑤、厳しい鞭打でグッタリした犠牲者を横たえ、これをソファとしてのレスボスや、他の恋人とで通常のブルーフィルムとなり、終りはもう一度SM場面で結ぶとか、ヴァリエーションは各種考えられる。

マスクによる身分保障で男性Mを募り、女性Sは定評あるサジスチンでも、ヤプーの時の様に前衛バレリーナやホステスでも、わりに募り易いのではないか。

観客としては、掴み難い男性マニア層よりも女性を狙うべきではなからうか。ホストバーに来るお客や、女性の同窓会、中年マダム①の会合には、よく出来た男責めフィルムは人気が出ると思われる。男の気嫌をとるホステス②が仲間うちの宴会では残酷性を示すのはよく知られた事実であり、ホステスの慰労会用の余興等によって画期的にサジスチン層を拡大し、悩めるM男性の福音となる功德もあるし、社会福祉にも役立つと思うのだがどうだ



ろう。

時流を一步だけ先に、先取りするのが風俗営業の面白味であり、女性上位、男性Mのようやく尖端的流行となりかかった現在においては面白いと思うのだが……。

つけ加えれば成可くならば同時録音式が望ましいので、これなら靴音や悲鳴は勿論、見た眼に地味な鉄砲等特殊な縛りでも、呻き声を入れることで十分効果的となり得るのである。ただし大袈裟な悲鳴はかえって良くない。厳しい鞭打の際には革製猿轡でもかけておいて、もれてくる呻きをいれる方がずっと面白いであろう。もし可能ならば、私は千里を遠しとせずして馳せ参じ、モデルを勤めさせてほしいものだと思願している。

最も醜惡に成り勝ちな男責めを綺麗に刺激的に撮りあげる事が出来れば女責めや通常のブルーフィルムはぐっと容易に、格段に質が上がるのではなからうか。

註① 最近他誌に広告されていた男責めフィルムは未だ見ていない。私の視野はごく狭い事は告白しておかねばなるまい。

② 金属の冷たい感覚は刺激的な視覚的要素であるが、吊しの場合金属手錠では手首を傷つけ易い。痕を覚悟ならそれでも良い

が、夏分には社会生活を考えれば革手錠を用い、これを鎖で吊すことで満足すべきであらう。

③ プレイ用房鞭ではショウとしての効果はあまり望めない。革バンドでも大して痕はつかない。分厚い本格的革鞭を用い、一鞭毎に鮮かな縞を描く様でなければ、短時間のフィルムとしての効果に乏しい。途中を省略すれば観客は当然、演出上のトリックであると判断するからである。鞭打に際し、頭部と頸への打撃は厳に避けねばならぬ。背椎への打撃は、棒による場合は命取りにもなり易いが、弾力のある革鞭の場合、通常の肉付きのある背部なら、過度に神経質になる必要はないという。しかし、プレイ用の鞭でなく、短時間に視覚的效果をあげる強力な鞭を用いるのだから、力の入った打撃は背椎直上は避け、背部の両側と臀部とに止める配慮が為されていれば、一見肌を破り肉を裂く痛烈な鞭打も、案外さしたる事もない様に思う。

④ 煩雑な情景描写は有害無益である。マスクをつけた頭部、そのままカメラを近づけて鼻のアップ、手早く鎖を刺して輪を通して、端をペンチでひねって鼻輪を完成す

る。これだけを一気に見せることを眼目とし、前後の説明的描写は切捨てられるだけ切捨てて簡潔にすますべきである。簡潔であるか否かは、泥臭くなるか否かの決定的要因であるように思われる。故意に簡潔を避ける技法も存在するが、時間的に限界のあるミニサイズ物の場合、簡潔である以外の方法はない筈である。

⑤ 自動車か何かのCMを「毛皮のヴィナス」の一シーンとダブらせてみる。少女めいた優美な女性がいる。男性用ネグリの男が登場、女性がイヤイヤをするのを強引にキス、暫時恍惚としている様に見えて突き放し、平手打ち、ドレスを脱ぎ棄てると下は颯爽としたサジスチンのスタイル、隠し持った鞭で打ちすえ、うずくまる処をネグリを引き裂き、緊縛してどんぶんに責める、最後に三角に緊縛して尻に蠟燭を立てて燭台とし、再び優美なマキシドレスを羽織ってソファに寄り、花模様の表紙の本でも開く、静かな夜の一刻、これを照らしている人間燭台、葉代りに挟んである赤い羽根を手に取り、眼は文字を追いつつながら、ふと燭台の男を優雅な手つきでいじめる。エンド、等というのは、私自身厳しく排する処の「文学化」への墮落傾向かも知れないな。



カット 京 伊木留



告 白 小 説

被虐の旅シリーズ

# 求 め る 人

由 利 美 千 子

能登から帰って、平穏な日が続いた。私は昼間お稽古ごとに行き、夕方から伯母の経営するスナックバーを手伝っている。

葉山が来たら恥かしいなと思いながら、私は毎日、待っていた。

体から責められたあとが消えていくのが、彼が私から離れていくようで淋しかった。

伯母は私が金沢の友達の所で遊んで来たばかり思っている。十以上も違う葉山と私を結びつけては考えられないのだろう。

それよりも、毎日のように店へ来る若い男たちの中に、私の愛人がいるように思っていたようだった。

たしかに、何人かは私に好意をもってくれているようにみえた。私も又、大きな声で笑い合ったり、さも意味があるようにひそひそと話したり、若い者同志の雰囲気をついた。しかし、その人たちで満足出来ない自分を知っていた。

私は自分のアパートの浴室で自分の裸体を鏡にうつしてみる。

この腕に残った縄のあとが、褐色のしみのように薄くなって、きたならしかった。

私は自分で自分の腕にかみついた。

「痛い！」

と、言いたくても、口は腕にかみついてい

るのだから声は出ない。

「先生」

私は、おなかの中で叫んでいた。

その痛さは彼への思慕を、より強くする。

私は、いじめられたかった。

噛んだあとは赤く、まるでビールのせんの

ギザギザした所を、キューツとおしあてたよ

うに痕が残った。

私は、もう片方の腕にも、自分で自分の歯

型をつけた。

次には、腕のふくらんだ所を吸ってみた。

吸うのは痛くなかった。自分にかすかな体

臭があることが、自分で解った。それは石け



ソのジャスミンの香りと一緒になって、何ともいえない、やわらかい肌の匂いだった。私は、それを快く吸いこみながら、自分の肌を吸った。

私は、もしかしたらナルシストというのかもしれない。

昔、ナルシスという少年が、水にうつる自分の姿を愛して、水に身を投じたという話がある。そのあとに水仙の花が咲いたという。英語で水仙のことをナルシサスというのは、このギリシャ神話にもとを発しているときいたことがある。そして、自己愛の強い人をナルシストということも……。

私は浴槽につかって、お湯を透してみた自分の乳房も好きだ。水の屈折によるせいか、それはいつもの乳房より、もつと形よく美しくみえる。自分でお湯につかった目の位置でみると美しいのだから、誰にもその美しさを見せてあげられない。

もしかしたら、一緒に並んで浴槽に入っぴったりくっついて私の乳房をみてももらったら、その美しさをもてもらえらるだろうかと思う。

でも私は、私ひとりですれをみている方がいい。

だからナルシストなのかもしれない。

しかし、その乳房の形を見ていると、その上を縄でギュウツと締めつけてもらいたいなあ、と思えてくるのだ。

そして、白い服の胸にブローチを飾るように、あまりになめらかな肌と二つの隆起は何かで飾らないと淋しいように思う。

あれは縄か、さもなければ、赤いバラの花をおしつぶしたような痕なのだ。

私の唇は自分の胸にはとどかない。だから自分で自分の胸を噛むことは出来ないのだ。

「先生！」

又しても私は彼のことを思った。

彼と能登を旅した時は粉雪が舞っていた。

しかし今はもう冷房をいれる季節なのだ。

その間、彼はどこで何をしているのだろう。

「何考えてるの？」

伊波という学生がきいた。

「この頃ようぼんやりしてるやんか？」

「そうかしら？」

「恋人のことと思うのか？」

「そんな人いないわ」

「ほんま？」

「ほんまよ」

「ほな、ボクとつきあわへんか」

「つきあうって、どの程度？」

「はっきりしてるな。そんなこと最初からきめんかてええやんか」

「そうはいかないわ。友達に友達、恋人は恋人。友達としてなら、もうこうしてつきあってるやんか」

私は、東京弁と大阪弁をごっちゃにして使う。

亡くなった両親が東京生まれだったので、小さい時から東京弁に慣れていた。そのくせ大阪近郊に住んでいたから、まわりの人達は大阪弁だ。

私が十以上違う葉山にひかれたのも、彼の東京弁に父をしのんだせいかもしれない。

「な、ボクとドライブせえへんか？」

「どこへ？」

「和歌山へ泳ぎに行こうな」

「うん」

私は、あいまいにうなずいた。行ってもいいと思った。

「友達としてなら行くわ」

「なんでそういちいちきめとかな、あかんのかいな。大丈夫や。保証する」

「自分で自分を保証したら世話はないわ」

私は、伊波という学生をきらいではなかつ



た。けれど、結婚を対象にするには、伊波は若すぎた。遊び友達としてなら、弟のように気楽だったが、そのぐらいの年令の人たちが、遊びというのをすぐ肉体に結びつけたがるのを私は知っていた。そして、それはわずらわしかった。

「伯母さんに許可もらってよ」

私は言った。伯母が伊波との間を誤解してもいい。そうしておけば、葉山が影にかくれる。どうせ葉山がこれっきり現われないとは私には信じられなかった。いつか又、葉山と旅が出来る——。その日のために、伯母の目を他へそらしておくのもいいだろう。

そして、土曜日の午後、私たちは和歌山へ向かった。

私は、ただ和歌山ときいていたし、どうせ夏のことだし、このあたりの海岸にはバンガローもあれば、貸しキャンプもある。線香をたいて車で寝てもいい。恋人同志ならどんなにせまくても体をふれあって愛を語るだろうが、私は伊波とそんなことをしようとは思っていない。あけやすい夏の夜を仮眠すればいいと思っていたのだ。

しかし、伊波は和歌山市を通りこし、海にそうて車を走らせた。海南市、有田市と、ギ

ラキラ光る海を見ていると、すぐに水着に着かえてとびこみたくなかったが、車はなおも進んでいった。

そして、

「ここや」

と、伊波が車をとめたのは西部劇に出て来そうな小さなアメリカ風の建物の前だった。

私が、もの珍しそうに見まわしていると彼は鍵をあけて、私を中へみちびいた。

「戦争中にこの建物を買うて、疎開してたんや。そうや。ボクはここでくらしただけはあらへんのやけど、その後、夏だけ遊びにくるのに、おいてあるんや。別荘いうたら大げさやけど、ま、そんなもんや」

伊波の説明で、そういえばこのあたりにアメリカ村というのがあったという話を、何かで読んだことがあると思った。それをいうと、

「ここはアメリカ村とは違うけど、やっぱり移民で行って帰ってきた人が建てたんと違うか。エキゾチックで、ええやろ」

たしかに古めかしい家具は、妙な雰囲気を持っていた。

同じ洋間でも、背の低い椅子やソファはやわらかい感じがするが、脚の長い木の卓や椅子は、きびしく冷たい。そして、それは拷

問台を連想するような暗さをもっていた。

私の二の腕は、そう思ったとたん、チリチリとした。

伊波が急に私を抱いた。

「あっ、何すんの」

私はその手をのがれると、椅子の背に手をおいて身構えた。

いよいよ西部劇のように、その椅子をふりあげなければならぬかと思うと、そんな緊急の時にかしさがこみあげるほど、私にはゆとりがあった。

「なんで笑うの。ボクを嘲笑するんやな」

伊波が言った。

「ボクを笑ってもいいよ。ボクは美っちゃんに笑われたい。ボクは人に笑われるのはきらいだ。けど、美っちゃんにならいい」

伊波の目が、さつき見た海の色のよう光った。

「どうせ、美っちゃんがボクを愛してくれないことは知ってるよ。美っちゃんの好きな人は……」

「誰？ 誰？ 言ってごらんさい」

私は椅子の背をもって彼の方へ椅子の脚をおしつけた。

伊波はジリジリと、壁の方へ下がっていつ



た。

私は顔を真赤にして重い椅子をもちあげ、脚で彼をおしていった。

「葉山という人やろ」

彼が云った時、私は椅子の脚で完全に彼を壁へおしつけていた。

「痛い！」

伊波が言った。

椅子の二本の脚は、腕のつけねのあたりを圧し、あとの二本の脚が脇腹を圧していた。

「痛いよ」

「もういわないと言いなさい」

「口があるから言うよ」

私は、どうしてやろうかと思った。

私は力一杯、椅子をおしつけた。

「うっ……」

伊波は唸った。

「降参した？」

伊波は、うなずいた。

私は力をゆるめたが、まだ椅子の脚でおしたままの姿勢で、

「降参したって証拠がないわ」

と言った。

「痛いよ」

伊波がそれに答えないので、私は又、力を

入れた。私自身、痛くはなかったが、しんどかった。

「痛っ……」

伊波は心もち口をあけて、歯をくいしばった。

「ボクが何も出来ないように……椅子に縛ってもいい」

伊波は、とぎれとぎれに言った。

私は、やっと手にもっていた椅子を下におろした。

「本当に縛るわよ」

「ああ、いいよ」

伊波は椅子に腰かけて、腕のつけ根をおさえていた。きっとシャツの下に痕が出来ていくのだろう。

「紐、どこにある？」

「その階段の下を押入に、細引があるよ」

伊波は言った。

「それより鍵しめなければ……」

私は人の訪れるのを気にした。

「もうしめてあるよ、入ってきた時に……」

私は、ふっと、それを交に思った。しかしそれならなおさら、伊波が縛ってもいいというのだから、縛っておかないと、何をされるかわからないと思った。

私は椅子に腰かけた伊波の胸に細引をまわした。男の平たい胸は椅子の背にぴったりとくくりつけられた。

一と巻、二と巻、私はぐるぐると縄をかけた。

伊波は、おとなしくしていた。

私は彼の両方の足を別々に椅子の脚にくくりつけた。もう伊波は、身動きが出来なくな

った。  
「美っちゃんの好きな人は葉山やろ？ そやろ？」

伊波は、又しても言った。

葉山という言葉は、私に痛くひびいた。それを他の人の口からいわれたくなかった。

「違うわ」

私は言った。

「違えばいいよ。ボクに関係あらへん。けど葉山がどこにいるか、教えてやろうか。彼は今頃ヨーロッパのどこかで、女の子を縛っているよ」

私の胸は熱い棒を突っこまれたような感じがした。

「ほら、顔色が変わった。やっぱりそうや」  
そういう伊波の口を私は思いきり抓った。

「イイ……」



痛いという言葉がゆがんで、彼の口から出た。

彼は体を浮かそうとしたが、椅子がカタンと音をたてただけだった。

「まだいか」

私は指先に力をいれ、爪を立てた。

「ウウッ——」

伊波は泣きそうな声で呻いた。

私は指をはなした。爪痕から血がにじんで、すうっと流れた。

「葉山さんのことなんか何とも思わないけどそんな詮索する人きらい！」

私は言った。

しかし私の胸の中では伊波が何をいおうと問題ではなかった。

「ヨーロッパのどこかで、女の子を縛っている」

という言葉が嵐のようにさわいでいた。

葉山の場合、縛るということは可愛がるということなのだ。私は嫉妬に狂った。それで店へ現われないのかと思うと、よけい居たたまれなかった。

私の血管を狂暴なものが音をたてて流れるようだった。

「そんなこと云えないようにしてやる」

私は彼の靴下をぬがせると、それを彼の口の中へおしこんだ。そして、私自身の靴下を手拭のかわりにして、その上をおさえた。

「さあ、もう何もいえないでしょう」

私は獲物を見るように言った。

男の縛られた姿は醜くかった。

縛られるということは、もっと美しいことかと思ったのに、靴下で猿ぐつわをはめられ

た男の姿に美しさはなかった。

私は、その醜さが癪にさわった。

「つまらないことを言った罰よ」

私は、あまっていた細引を短く手に握ると、彼を打った。

椅子に縛られている肩といわず、胸といわず打ちつけた。

「くう……」

と、彼は声にならない声を洩らした。虫が鳴いているようだった。

(醜い虫けら……)

私は自分の手がだるくなるほど打った。

私は伊波の顔を見たくなった。

何故そんなに、伊波を憎らしく思ったのが

その時は夢中だった。

多分、葉山への嫉妬が、目の前の伊波をいじめることにおきかえられたのだろう。

私は椅子ごと伊波を横にした。

そして、さらにひっくりかえした。

伊波は椅子の背を背中に負ったまま、床へ顔をすりつけた。これで私は伊波の顔を見ないですむ。

私は、その椅子の背に腰をおろした。

「くう……」

伊波が呻いた。

彼の顔は、つぶれた柿のように、へし曲げられているのだろうが、私はそれをのぞこうとは思わなかった。

私は、はづみをつけて、どしん、どしんと腰をおろした。

その度に、椅子がキュウキュウと音をたてるように、押しつぶされた伊波の口から呻き声が洩れた。

やがて海からきこえてきた汽笛の音に私はふと我にかえた。

恥しかった。

どうしてこういうことになったのか、自分でもわからなかった。

私は大急ぎで椅子を元通りにたてると、猿ぐつわをはずした。

「ごめんね、帰るわ」

私は彼を結んだ縄目をといた。縄目をとい



でも、ぐるぐる巻きにした縄を体からぬくには、ひまがかかる。

私はハンドバッグを手にとると、鍵をはずして外へとび出した。

どっちへ行ったらいいのかわからなかったが、幸いバスが近付いてくる通りが見えた。

私は走った。

走って、走って、バスにとび乗るように乗せてもらうと、大きな息をついた。

私は、おそく店へ出た。

どうせ和歌山で泊まると伯母にことわってあったのだから、真直、自分のアパートへ帰ってもよかったのだ。

私は両親の残してくれた家を階下と二階に分けて人に貸していた。広い家だった。その家賃と伯母がスナックバーの手伝い賃といってくれる小遣いとで、充分生活出来た。だから浴室のついた二間続きのアパートに住んでいるのだが、ひとりでいることがたまらなく淋しい時がある。

今夜も、そうだ。

バスに乗って御坊へついた私は、すぐ電車で天王寺へ帰ってきた。準急で二時間ほどの距離だが、もう夜になっていた。

夜気の中にうるんでいるネオンの灯を見ると、一人の食卓で一人で食事するのは、あじけなかった。

それに、自分のしてきたことが、あまりに異常だったようで、自分自身、恐かった。

（自分がいじめられるのは異常ではなくて、ひとをいじめるのは異常なのだろうか）

不思議だった。

しかし、どう考えても、自分が縛られた時以上に、ひとを縛ったことは恥かしかった。

そんなことを思いながら、ひとりの部屋へ帰るのは、穴ぼこへ落ちこむように淋しいと思った。わびしいというのかもしれない。

「どないしたん？」

伯母にいわれ、返事もせずに、自分でブランデーグラスにヘネシーを注いだ。

葉山がいつもそのスタンドに腰かけてしたように、自分の掌でグラスをあたためながら無言でブランデーの香りをかいだ。

「伊波さんと喧嘩したの？」

伯母がいうので面倒くさいから、うなずいた。

「喧嘩するくらいなら、行かなければよかったのに……。葉山さん、来てはったんよ」

私は、

「えっ？」

と自分の耳を疑った。

「今しがたまでいてはったけど、あんたがいないと、お客さんが、みんな早う帰ってしまふ。やっぱり若いもんでないと、あかんのかいな」

「で、どこへ行きはった？」

私は（なんで伊波さんと出かけたんやろ）と後悔した。

（意地の悪い神さま……）

今日まで何カ月も葉山を待って、毎日この店へ来ていたのと思う。

「まだのみ足らんようやったから、その辺のんではるのと違う」

「みてくるわ」

私は外へ出た。

しかし、あてはなかった。

（葉山さん、どこにいるの？）

私は、まるで予言者が空を仰ぐような恰好で、夜の空間をみつめた。

見えない電波のようなものが、葉山のいる所を教えてくれるのではないかと思った。

その思いが通じたのか、伯母の店へも顔を出す花売りの娘が通った。

娘は私に目で会釈した。



「ねえ、あんた知らない？ この冬あたり、毎日うちのスタンドでのんでいた三橋達也のようなお客さん……」

みなまでいわせず、娘は言った。

「知っています。このさきの路地の一番奥の店にいてはるわ」

「有難う。うちの店へ忘れもの、しはったので……」

私は、とってつけたように弁解がましくいうと、娘の教えてくれた店へ急いだ。

ドアをあけたとたん、薄暗い照明の中に、煙草の煙が立ち昇って、どこに誰がいるのかわからなかったが、次の瞬間、私はスタンドの隅にいる葉山をみつけた。

「先生」

よびかける声がふるえていた。

「おう」

彼も意外だというように笑顔をみせた。

彼の隣にいたホステスがすぐ立って、席をあけてくれた。

「しばらく」

私は彼に言った。何を話していいのかわからなかった。

「元気？ 結婚する相手、みつけた？」

「いいえ」

「ボクは始終、旅行でね。御無沙汰した」

「ヨーロッパへ行ってらしたの？」

「誰がそんなこと言った？ 銭湯へ行くのをニューヨークへ行とくいうのと同じようなことだろう」

「いらっしやらなかったの？」

「ああ、香港まで行っただけだ」

私は何となく、ほっとした。

「あした、九州へ行くつもりなんだ」

「まあ、あした……？」

もしかしたら、それを誘いに伯母の店へ来てくれたのではないだろうか。

「車で？」

と私はきいた。

「いや、飛行機で行くつもりだ」

彼は答えた。私は何となくがっかりした。

「おひとり？」

「勿論さ」

そんな会話は目の前でシェーカーをふるバーテンの耳に入っているだろう。きかれても害のない会話である。

「日航？」

「いいや、全日空の大村行だ。一時十五分伊丹発の予定だから、今日は早く帰って準備したいんで、もう帰ろうと思っていたところ

だ」

「うちの店へおよりにならないの？」

「ああ、又、行くよ」

そして彼は立ち上った。

私も一緒に外へ出た。

彼は私の伯母の店の前まで送ってきてくれたが、

「じゃあ、又……」

と、帰りかけた。

「先生、あした、行ってもいい？」

私は短く区切るように早口で彼にきいた。彼の顔がサーッと一枚、皮膚をはがしたように明るくなる気がした。

「くるかい？」

「ええ」

「じゃあ、切符を買っておく。一時に塔乗口で会おう。全日空だよ。二階へ上ったところだ」

「ええ」

私の胸は嬉しい動悸を打ち出した。私も又体中の皮膚がお湯をあびたようなさわやかさで、生き生きとしてくるのを感じた。

私は伯母に二、三日、旅行してくると言った。



伯母は私が伊波と和歌山へ行つて喧嘩したらしいのを、私が失恋したと解釈したのかも知れない。その傷手を直すための旅行だと思つたのだろう。うるさいことは何も言わなかつた。

私たちは大村空港へ三時についた。

「雲仙へ行こう」

葉山が言った。

雲仙の地獄といわれる温泉のふき出た所でキリスト教の信者たちが拷問された話は私も知っていた。葉山もそれが見たかつたのだろう。二人は暗黙のうちに、お互いのひそかな思いをみつめあつた。

キリシタンの責めは、ひどかつたらしい。硫黄の匂いの立ちこめる煙の中で、ブツブツと音をたてて湯がふき出す地面は、白茶けた沼のようだった。

そこでキリシタンは、どうやって責められたのだろう。

私は何かそれを説明した立札でも建っているのかと期待した。

しかし、叫喚地獄とか、お糸地獄とかいう立札はあつても、その責苦の説明は書いてなかつた。

私は地面に、こわごわ手をふれてみた。

「やけどするよ」

葉山が言ったが、私がふれた所は火傷するほどの熱さではなかつた。勿論、それをおそれ、はしの方へふれてみたのだから……。

しかし、それでも熱かつた。

菱形に縄をかけられたキリシタンは、もつと熱い地面の上へ正座させられたかもしれない。

怪が熱けただれでも、命に別状はない。

役人は長い柄の柄杓で、ふき出す熱湯をすくい、囚人の背にかけたかもしれない。

それをよけるすべもなく、もし、縛られた身でその熱さに耐えられず体を横たえれば、熱さはよけい激しくなるのだ。

転々とのたうてばのたうつ程、火傷の傷みがふえる。

そして囚人は「我等の祈りをききたまえ」と、祈ることさえ出来ないほど、呻き苦しんだのだろう。

中には焦熱地獄へ下半身をつけられたまま苦しみ死にした人もいたときいたことがある。

旅館の浴衣を着ながら、ゾロゾロと歩いている観光客の何人が、そうした責め苦に興味をもっているのだろう。

葉山と私は終始、無言だった。

硫黄の匂いの中を黙々と歩いた。

そして起伏のある白茶けた道を、私は囚人の気持で歩き、彼は捕吏のつもりで歩いていたのだろう。

丘の上の小高い所に白木の十字架が建っていた。

私はいじめられることが好きなのに、やはりその熱湯の中へつけられることを思うと恐いと思つた。ただ、身動き出来ないほどにいましめられて、その恐怖の中で、この道を引立てられてみたいとは思つた。私のマゾヒズムは、少し贅沢なのかもしれない。

私たちはタクシーで仁田峠へ上ってみた。

海の展望が開け、ロープウェーが妙見岳へ通っていた。

さわやかな景色だった。

しかし、私はロープウェーの走る丘を見て「あっ！」

と思わず声をあげた。

カラスの群れが点々と、草の間を黒くしていた。

そのおびただしいカラスは、お宮のハトのように群れていた。

時々飛び立って、思い思いの輪をえがいて



空を飛んでは、又おりてくる。

木の根っこかと思う黒点が動くのだ。

草原一杯のカラスだった。

「もう行きましょう」

私は、そのカラスに恐怖を感じた。

あの雲仙の地獄で、ふき出る湯につけられて死にかけている囚人を、カラスは突っ突きにいったのだろうか。

それともこの仁田峠に磔柱を建てて、囚人をカラスの餌食にしたのだろうか。

能登のような陰惨な景色ではない。明るい峠の上なのに、私はカラスの群れに身が引きしまったのだ。晴れていることが、かえって無気味さを増すこともあると知った。

「雲仙で泊まる？」

葉山が言った。

私は首を振った。

私たちの遊びは、もっとピンク色であってほしかった。黒い、遊びにはしなくなかった。私は雲仙の恐ろしい拷問のイメージを振り落としたかった。

「じゃあ、島原まで行こう。海の見える良いホテルがあるそうだから……」

葉山はタクシーを探した。

タクシーで千五百円位すると、タクシー会

社を覚えてくれた男が言った。

それでも雲仙で泊まるよりいいと思った。

それに、海が見える旅館の方が、山にかこまれた雲仙よりいいと思った。

しかし私は、雲仙へつれて来てもらったことを、うとんでいたのではない。地獄も、仁田峠も、厭な印象を与えられたのではなかった。むしろ、その印象が私の皮膚をチリチリさせすぎて、離れたかったのだろう。

一度は行ってみてもいい観光地だと思っている。

ホテルの部屋は、すばらしかった。

土曜日は全部、満員だったそうだが、恰度日曜なので、あいていたらしい。

ドアの外の廊下までは洋風なのに、ドアの中には三畳程の茶室があり、石畳で部屋に通じていた。

部屋は和風の二間続きで、奥の海に面したテラスを仕切って、石灯籠のある庭が作られていた。

係の女中さんが去った瞬間、私は私から葉山の胸にとびこんでいた。

「会いたかったわ。先生の意地悪。手紙ぐらい下さってもいいのに……バカ、バカ……」

私は彼に頬ずりし、彼の唇を求めた。

「風呂へ入ろう」

彼は、いたずらっ子をあやすように私の手からはなれると、服をぬいだ。

立派な造りなのに、脱衣場がなかった。

私は茶室で服をぬいだ。

「一寸、見せてごらん」

彼が言った。

何の気なしに振返えると、彼は私の二の腕を、ぐっとつかんだ。

「この齒型は何だ？」

そこには私自身でつけた、ビールのせんをおしあてたような痕があったのだ。

そして、自分で吸った二の腕のやわらかい所は、野バラの花をおしつぶしたような痕になっていた。

「これ？」

と、私は笑った。自分でつけたというのが恥しかった。

「やっぱりボクの留守に男友達が出来たんだね」

彼が言った。

「そんなことないわ。これは……」

みなまでいわせず彼は、私の手を逆手にとった。



「あ、痛……」

「じっとしてゐるんだよ。いいか」

彼は半分、裸になっている私を突き放すように茶室へ残して、テラスのカーテンをしめに行った。

そして、ジャラジャラと音をたてて、スーツケースから細いくさりをとり出してきた。

「今日はこれで縛ってやるよ」

何に使うくさりなのか、ネックレスのように細く、青い色をしていた。

彼は私を後手に縛ると、胸へもそれをまわ

した。金属が素肌に冷たかった。

彼は奥の部屋の前の小さな庭へ私を引きずるように連れていった。

「そこへ坐れ」

私は石灯籠を背にして、庭石の上へ正坐させられた。その折りまげた胫と腿を一つにまわして鎖がかけられた。

いくら細い鎖でも金属は角ばっている。それをぐるぐると巻かれて石の上へ坐るのは、ソロバン責めと同じように脚が痛かった。

私は体を浮かすようにして、その痛さをこ

らえた。

すると、彼は別の鎖で、私の体を石灯籠にくくりつけた。

「あばれると石灯籠の頭が落ちてくるよ。静かにおし」

彼は言った。

私の手は石と鎖でこすられて、動けばよい痛かった。

「さあ、誰にその痕をつけられたか言ってごらん」

彼は言った。

私は彼が嫉妬してくれているのが嬉しかった。だから、わざとだまっていた。

室内電話が鳴った。

お料理を持ってくると言っているらしかった。

「静かにしているんだよ」

彼は私にいうと、間の襖をしめて、ドアの鍵をあけに立っていった。

石と鎖に責められて、ただ縛られているだけで私は苦しかった。

荒い息が呻き声になりそうなのを、じっとこらえた。鎖が胫に喰いいていた。

「痛い……痛い……」

私は声に出さず、その痛さをこらえた。

## ☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対ししても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供にしましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。



女中さんが、夕食の皿小鉢を卓にのせて去って行くまで、随分、長い時間のような気がした。

「どうだ？ 痛いかな？」

彼は近づいて言ったが、

「もう少し、痛くしてやろう」

と、書類をはさむクリッパーを手の平にのせてチャラチャラいわせた。

それは、洗濯ばさみのような形で、洗濯ばさみより、もっとしっかりした金属で出来ていた。

「さあ、どうかい？ 誰と仲よくした？」

私は首を振った。

「誰とも仲よくしやしないわ」

「うそをいうね。ボクに嘘をつく気か。さあどうだ」

彼は、そのクリッパーで、右の乳首をはさんだ。

「あっ！」

とび上るように痛かった。クリッパーの強いバネが乳首をもぎとるようにくいこんだ。

「痛いかな？ ボクは香港で仕事していて、書類の整理にこれを買ったんだよ。そして一度キミのオッパイをはさんでやろうと思ったんだ。そんなに痛いかな？」

ものもいえずにいる私を彼は、まじまじと見て言った。

「しかし、ついでだ。もう片方もはさんでおこう」

「やめて！」

私は悲鳴をあげたが、左の乳首もクリッパーで、はさまれてしまった。

脚も、手も、乳首も、ただ痛かった。

「痛い……痛い……」

私は泣き声をあげた。

「大げさだな。これは、まだ序ノ口だよ」

彼は畳の上へチャラチャラとクリッパーをひろげてみせた。大きいのが小さいのがあった。

「この小さいのは指をはさむんだ。こうしてね」

彼は私の足の親指を、それではさんだ。

「あっ」

と言ったものの、それはそんなに痛くなかった。

彼はその効果をみてとると、すぐにそれはずして私の乳の上の胸の皮膚をつまんだ。

それは抓られたように痛かった。

「フーン、ここは痛いらしいね」

彼は次々に所きらわず、クリッパーでつま

んだ。

おなかの皮を大きなクリッパーでつままれた時、

「痛い！」

と私は思わず大きな声を出した。

私は針ねずみのように銀色のクリッパーを飾りたてられた。

「もうかんにんして……痛い……」

私は訴えた。

彼は面白そうに、手でクリッパーを横なでにした。

私は息がつけなかった。

すると彼は、乳首のクリッパーだけとってくれた。ほっとする暇もなく、ヒリヒリしている乳首を彼の指が、まさぐり出した。

痛さと陶醉と入り混った夢心地に私は誘われた。

「やめて……」

と、もがけば鎖とクリッパーが、チャラチャラと鳴った。

私は又、彼の完全なとりこになり、彼の思いのままの音を出す楽器になっていったのだ。





— あ る — 日 —

## 紫のスカーフ

— 鈴 川 露 子 さん へ —

舟 山 和 夫

それは春一番が過ぎ去っていったあくる日のことでありました。わたしのコ罗纳は、国道十一号線をひた走っていたのでした。朝のラッシュがひとまずすぎた午前十時過ぎに、あの渦潮で有名な阿波の鳴門海岸に来ていました。このあたりは今観光ブームに乗って、旅館やホテル、国民宿舎などが急ピッチに建築され、見上げるような高層建築が、松林の緑と海の青さに映えて美しくもあり、異様にも感じられます。助手席には、初めてみる鳴門の美しい景色に目を凝らしている鈴川露子がいたのです。

露子はブルーのツーピースを着、長い髪をした美しい女です。きょう初めて会った女性なのに、もう十年の知己のような感じがしていたのです。

私たちは、鳴門大橋という美しい朱のつり橋のたもとで逢ったのです。この大橋は三百八十一米、真中の小さな島に一つだけ橋脚を

立てて、直径七〇ミリのワイヤロープで作ったものだそうですが、橋を渡って右に回ったところから眺めた形が、ちょうど露子の裸身をおお向けにし、腰のあたりに台をおいてそり返らせた姿にも似ていると私には思われたのでした。その連想は更に発展し、露子の腰部にロープをまきつけて引きあげ、宙づりにした姿にも見えてきます。

「どう？ この橋」

「きれいですね」

私は車をとめて、橋に見とれる露子の表情や身体をじっと観察しました。超ミニのブルーのスカートは、ひざ上三十五センチくらい、スナリと伸びた両ひざの素肌は、とても白く美しく、私の目に痛いほど突き刺さります。

「寒くない？」

露子のチャリと動いた視線を意識した私は、あわてて、そう訊いたのでしたが、こちらを向いた露子の目に、何か熱っぽいものを感じ取ったのです、そして私は急に血の逆流を覚えたのです。

「いいね」

これだけ言って、露子の背後から左腕をつかみ、少し前倒しに押しつけながら右腕もと



って彼女の背後にまとめた両手を後ろ手縛りにしたのです。

露子は、狭い座席で体を前にかがめ、さらに横向きになって縛り終わるまでじっとしていました。私はこの突然の行動に、彼女とのこれからの運命まで賭ける覚悟があったのですが、却って拍子抜けするほどでした。しかし、彼女のおとなしさに気をよくして、左手の上に右手の甲を重ねてきゅっとして男結びにしてやりました。そして、そのまま、助手席に前を向かせて姿勢を直してやったのです。

その時、持っていたこげ茶の小さいハンドバッグが足許にころがり落ちました。私はそれを拾いあげて、ひざの上においてやりましたが、彼女は一言も口を利こうとはしませんでした。

「いこうか」

無造作に言っ、私はそこから車をスタートさせました。内心では（いきなり縛ったりして怒っているかな？）と思ひながら……。

瀬戸内の海とちがって、太平洋に続くその海岸には大きな波のうねりが押し寄せ、きれいに舗装された道路にしづきがあがっていました。私たちは無言のまま、十分程も走った

でしょうか、今、問題の鳴門、明石ラインの大橋架橋地点の見える千畳敷というところにきました。そこには、四国から本州電気を送る送電線の高い鉄塔が立っていました。

「ここが本四連絡橋のかかる所ね」

露子が、何の変わりもなく話しかけてきたのです。私は急にドキドキする胸の鼓動が高くなる思いでした。縛られたままの彼女は怒ってはいないようなのです。

「うん、ここだ。九七〇米くらいだからね。」

でも、ここが鳴門の渦潮だよ。ほら見てごらん、波が巻いているだろう」

私は跳ね出したくなるような気持を押えて、出来るだけ普通の態度でいい、車の窓ガラスを巻き下ろして、見せてやりました。

「渦はね、今が一番大きい時間だよ。満潮だからね」

彼女は、まるで平然と後手のままで海に入ります。私は少しニクラシクさえなりました。

「露子、君の太ももにも、渦巻きを作ってあげようか」

「ええ？」

返事にとまどっている彼女をしり目に、私は咄嗟に、以前使うべしで買ったまま、ダッ

シュボードに入れてあったのを思い出した太手のゴムひもをひき出し、太ももの真ん中へぐるぐると巻きつけていったのです。少しきつくしめて七、八回ほど巻き、その端をしっかりとくくってしまいました。左足の方は、座席が狭く、手が届きにくかったので、許してやりました。

この間にも多くの観潮の車やバスが通りすぎていきました。

私たちは、しばらく景色をながめてから、ひきかえすことにしましたが、私の期待通り、露子が、ぼちぼち右足を左右に振ったり上下に動かしたりし始めました。そして、後手に縛られた手を、上体を捻るようにして前に回してきて、右足の太ももの横にさわろうともがき出したのです。ワクワクしながら、私は知らん顔で運転し続けました。

海岸線から、松林に道が別れているところに来たときです。待望の、彼女の哀願が始まりました。

「お願い。ほ、い、で、足がしびれて……」と泣き出しそうです。

俄然、気をよくした私は、車を左にカーブさせて松林の旧道へ乗り入れました。その道は、新道が出来る前の古い回り道で、今は誰



も通っている者はありませんでした。わざとゆっくり車を止めてから、

「いたい？」

とさりげなく聞いてやりました。

「しびれて感じないの、早くといてよ」

「感じないって？」

私は、右足の小さく可愛い靴をぬがして、足先をもんでやりました。それからだんだんと上へ揉み上げてゆき、ゴムひもを巻きつけている太ももをさすってやりました。ただほんの軽いさすりかたにも、露子は身をよじって苦しがりました。ちょっとオーバーだと思いうくらいに、とても苦しそうにもがくのです。そして絶え入るように

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会は一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いません。致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

「はやく、といて、はやくといて……」

とくり返して言いました

私は、ふっと意地悪気を起こして、こう訊いてみました。

「露子、きょうはパンティつけてるの」

「……」

「返事しないと解かないから」

「見てちょうだい……」

私はさっとリクライニング・シートを後ろへ倒し、超ミニのスカートをちょっとずらせてやりました。ちらっと真紅なパンティが見えました。

露子の体は百二十度くらい後ろに倒れ、その体の後ろに両手があり、右足をこきざみに動かして、顔をゆがめています。本当に痛そうで、少し可哀想になった私は、急いで太もものゴムひもを解いてやりました。一気にゆるんでハネ返ったゴムひもの痕は、みみずばれとはいかないまでも、滑らかに白い太ももの肌に、細く赤い跡がきれいに輪模様を作っていたのです。

私はその模様に見惚れました。美しいなと思いました。まっ白の肌と輪の跡の赤との対照が、なんともいえぬ印象的でした。

「いたかった？」

ほどいてから、また、右足を揉んでやりました。彼女ははじめは、とび上がるようにして、苦痛の反応を見せましたが、だんだんと、何かうっとりし始めたような表情に力を得た私は、謝罪の意味もこめて、一生懸命に揉み続けたのでした。

「もうお昼ね」

やがてポツリと云う彼女の声は普通の調子で、私をホッとさせてくれました。時間がたつのは、早いものです。そこからもの道へ出て、ホテル・シーサイドで昼食をすることにして、ホテルが見える所まで行ってから、私は彼女の後手の紫のスカーフを解いてやったのです。

午後は、車を降りて見物するところが多くて、縛りは出来ませんでした。が、帰路につく時、私は紫のスカーフを、露子の太ももに、今度は落ちない程度に結びつけて、黙って手を差し出しました。彼女はじっとそれを眺めているだけで取ろうとはせず、微笑を浮かべましたが、やはり黙ったままで私の手を握り返してくれました。

手を振って町角を回る彼女の後姿のスカートの裾から、ちらりと紫の色がのぞいていました。



連載・アブ紳士行状記

## M 派 交 友 録

(九)

仁科雅介の巻(一)

鬼 山 絢 策

## 秘めたる恋心

拝啓

突然のお手紙、お許し下さい。

小生は奇クの愛読者ですが、中でも先生の「へぼ・きゅうり」「らぶ・すれいぶ」を読んで感激しました。「らぶ・すれいぶ」の主人公、下条清二は実在の人物ですか。もし実在のモデルがあるとすれば、世の中には同じような性格、同じような境遇の人が居るもの

だと思いました。実は私も、あの主人公とそっくりな性格、運命を経験したのです。

私は岐阜市で薬局を開いています、時々上京することもありますので、その節は先生をお訪ねしてもよろしいでしょうか。また当地へ、或いは名古屋あたりへ御いでの際は、是非、御立ち寄り下さい。

昭和二十八年九月二日

岐阜市千代田町

仁科雅介

○ 地方の方から手紙をもらった場合、なるべ



春川ナミオ・画

く返事を出す様にしているのであるが、この時は返事を出したかどうか忘れてしまった。

当時、私は中野に仕事部屋をもっていたが留守の時に訪ねてこられたことがある。

その後も二、三回、手紙をもらった。

昭和二十八年と言えば、ちょうど本誌に、「らぶ・すれいぶ」を連載中であつたから、かなり古い話で、当時、私の友達と言えば春木君や花村君ぐらいのもので、前記の本村氏などは、まだ知らない。知り合った順序に書いていくわけではないから、話が前後するの



は、お許し願いたい。

その年の秋、仕事で名古屋へ出張した。

夕方までに仕事をかたづけて、友達と麻雀をやるうということになったが、さて今夜はどこへ泊まろうかと思った時、ふと岐阜の仁科君のことを思い出したのである。

最初の手紙には電話番号が書いてあったがメモしてなかったので、覚えていない。岐阜市の電話帳を調べて見たが、仁科雅介の名はない。

やっぱり変名を使っていたのかと思ったがそうとは思えない。電話帳には仁科という苗字が二軒のっている。思いきってその二軒に電話を試してみた。「雅介さん、いらっしゃいますか」と聞くと、一軒目はだめだったが二軒目の家で「雅介さんなら天竜堂さんでしょう」と言いつて電話番号を教えてくれた。試みに電話帳を調べてみると、天竜堂薬局仁科雅太郎と出ていた。

電話してみると、おばあさんらしい声が出て「雅介は居ません」と言う。「何時ごろ帰るか」と聞くと「分からない」と甚だ不愛想である。

とりあえず麻雀荘の電話番号を知らせて、10時ごろまでここに居るからとだけ言って、

あてにもせず麻雀をはじめた。

すると8時ごろになって電話がかかってきて、すぐ迎えに行くと言う。名古屋のすぐ目と鼻の先に来ているのだった。

そういうわけで、仁科君とは名古屋のガチャガチャ騒々しい麻雀屋で初めて会ったのである。

仁科君は三十五才と手紙に書いてあったが色がくろくて額が禿げ上っていて、四十二、三に見えた。頬にちょっと、しみみいたいな、あざみいたいなものがあつたが、それを除けば、なかなか好男子である。

「岐阜へ来ませんか」

と言うので、友達に断わって麻雀をきりあげ、岐阜へ行った。

柳が瀬の「おさだ」という飲み屋へ連れて行かれた。当時は、まだ柳が瀬ブルースなどはなかったが、ネオン華やかな活気に満ちていた。

「おさだ」で飲みながら、仁科君の話を聞いた。

彼の家は昔から薬屋をやっていて、父の雅太郎氏が小金を貸して貸家の十軒も持つようになり、かなり裕福な家の一人息子だった。

雅介君は秀才で愛知一中から早稲田に進み

薬剤師の免許もとっていた。

終戦後、和紙の商売を始め、仁科紙業株式会社というのを創立して社長になり、一時は大儲けしたが、世の中がおさまるにつれて、大メーカーに圧されて思わしくなく、借金を背負って倒産した。いまは親父のところにゴロゴロしているということだった。

仁科君の結婚は、やや遅く、三十二才だった。

仁科君には大学時代から秘かに想いをこめた女性がいた。岩田美子という料理屋の娘だった。大学時代、帰郷した時に親密に交際するようになったが、美子には彼の他に、もっと深い仲の恋人がいた。

大場浩三といって予科練くずれで、一時はグレてやくざみたいになり、バーテンをやったり、不動産の仲介などやったりしていたが、この男は金が入ると派手に使った。

「美子、美子」と呼びつけにして自分のスケみたいにしていたし、美子は美子で女房氣どりでいたが、時には喧嘩して「何だよ、バカッ」と仁科君の前で口論し、美子が平手でピシピシと浩三を殴りつけたこともあった。浩三も喧嘩は強かったが、美子には笑っていて手を出さなかった。



美子の強烈な平手打ちを目の前に見た時、仁科君は自分が殴られたみたいにボーンと顔が赤くなった。

「自分もあんな風に殴られてみたい」

その時ほど美子が美しくすばらしい女性に見えたことはなく、恋しく思ったが、彼は自分の意志を美子に打ちあけることができなかった。

浩三と喧嘩すると美子は仁科君と遊ぶのだったが、美子の前に出ると仁科君は何もできず、美子の方から仁科君の首を抱えてキスしたりした。

そんな時、自分のことも嫌いではないのだなと思うのだが「結婚してくれ」とは、どうしても言えなかった。

昼間、喫茶店で美子とデートしていると、

突然、浩三がやってきて、

「名古屋へドライブしないか」

と美子に言った。

「うん、行く！」

美子は仁科君を無視して立ち上る。

「雅やんも来いよ」

と言われると、断わることもできず、二人

のあとからついて行く。

浩三は美子の肩を抱き、前の席へ二人で乗

ると、後の席へ仁科君を乗せた。

どこで借りてきたのか車はトヨペットの新車だった。美子はキャッキョッと喜ぶ。美子を片手で抱いて浩三は何回もキスした。

バックミラーにうつる仁科君と目が合うと浩三はニヤリと笑った。仁科君は怒ることもできず、調子を合わせて笑い返すのが、やっとなった。

恋人を横取りされて、しかも目の前で、さんざんいちゃつかれる。耐えがたい怒りとともに、重苦しく胸も締めつけられるような悩みの中から一種の恍惚が生じた。

### 味つきバナナ

浩三は、だんだん大胆になって美子のスカートの中へ手を突っ込んだ。

「いやあ、バカ！ すけべえ」

美子は手をはらいのけたが、浩三は片手で運転しながら、しつこく手をのばしてくる。

美子は、もう何も言わなくなってしまった。息をはずませているのが、後の仁科君にも分かるほどだった。

「ああ、俺やりたくなかったよ」

「バカ、何いってんのよう」

美子はチラと仁科君の方を見て、浩三の耳に口をつけて何かささやいた。

「そこにバナナあるだろ。それで間に合わせとけよ」

「フン、何言ってやがんだい。そんなにシケてないよ」

美子はバナナを剥いて食べはじめた。

「あんた、食べる？」

「おう、とも食いも悪くねえな」

美子は皮を剥いて差し出した。浩三は、その白い身をつまんだが、汚れた自分の指に気がついた。

「あ、いけねえ、つかんじやった」

「なにさ、いいじゃないの」

「おう、雅やん。バナナ喰うか」

「エエ……」

浩三はバナナの実をつかみ直して美子に渡し、あごをしゃくった。

「ハイ」

美子はそれを受取って、仁科君の方に差し出した。仁科君は、すべてを知っていたが、美子から手渡されると、そのまま食べた。

「あのバナナは、うまかったですね。チーズとバナナと一緒に食べたような味でしたよ」

名古屋へつくと夕飯を三人で食べてダンス



ホールへ行った。

そこで踊っているうちに、いつの間にか美子と浩三の二人はいなくなってしまった。

仁科君は完全に、まかれてしまったのである。

何のために名古屋までついてきたのか、夕飯代もホールの入場料もみな仁科君が払わされた。

そんなことをされても仁科君は、さして怒りを感じなかったと言う。

「どうですか。こういう心理が『らぶ・すれいぶ』の主人公、下条清二と似ているでしょう」

「そりゃまあ、似ていることは似ていますが大体マゾヒストの心理としては、みなそういう傾向があるんですよ」

「でも下条にも大槻というライバルがいて、大槻には、かなわなかった。私にも大場浩三がいて、大場には、かなわなかった。こんなところは、そっくりでしょう」

「そう、そこは凄く似ていますね」

「これから、もっと似てくるのですよ」

仁科君は、こくめいに話してくれる。時々私の質問にも委しく説明してくれた。以下、物語り風に彼の話をまとめて見よう。

### 三人 雑魚寝

仁科雅介は当時、小さな計器の会社に勤めていた。高田の馬場の近くの六畳に下宿していた。昭和24年頃のことである。

東京で生活していると、美子が恋しくなり

岐阜へとんで帰りたくなるのを、じっと我慢していた。また大場浩三が、いまごろは美子を抱いて、あのピチピチとした肉体を思うさま愛撫しているであろうと思うと、狂おしいまでの嫉妬を感じた。嫉妬が激しくなると、いつもそれが快感となり、どうしようもない欲情がうずき、自ら慰めて辛抱していた。

そんなところへ美子から手紙が来た。

『一週間ばかり東京にいたい、あなたの下宿に泊まってもいいか』と言う手紙だった。

仁科は狂喜した。

早速、下宿のおばさんに千円ほどつかませて内諾を得た。下宿人は同居人や、宿泊人をおいてはいけないうのだが、一週間ぐらいならと、大目にみてくれた。

すぐ大歓迎する旨の返事を出し、時間を知らせてくれれば、東京駅まで出迎えに行くと

言ってやった。

間もなく月曜日の午後6時に着くという葉書が来たので、その日は5時半頃から東京駅へ行って待った。

6時すぎに列車は着いたが、美子の姿は見えない。或いは、ひと汽車遅れたのかと、次の到着列車、更にその次と待って見たが、見当たらない。

「きつと何かの都合で、明日にでもなったのだろう」

と、がっかりしながら下宿に帰ってみると美子が来ていて、酒を飲んでいた。

だが、美子だけではなかった。大場浩三が一緒にやってきたのだった。

啞然として立っている仁科に、

「何をボンヤリしてたのよ。いくら探したっていやしないんだもん」

「まあいいやな。突っ立ってねえで入れよ」

浩三は自分の家の様に大きく構えていた。まったく最初から主客顛倒した形だった。

部屋にはなかった一升びんが置かれ、やかんでお燗をして、二人は相当、酒が廻っている。6時について7時にこの家に来たにしては、ことが進みすぎている。

「きつと、ひと汽車早く来たに違いない。そ



して俺を東京駅まで出しておいて、その留守に上りこんだのだ。駅でなら浩三の同行を断わられたかもしれないが、こうして上りこんでしまったのは断わるにも断われない。そこを狙ったのだ。

これは美子の考えたことか、浩三の悪智恵か？

「まあ一ぱい、やれよ。どうだい、東京の景気は」

浩三は頭から仁科を呑んでかかっていた。

「ところで浩ちゃん。君はどこへ泊まるの」

「どこだったって、此処よりほかにねえよ」

「そりゃ困る。此処は下宿人以外の宿泊は、できないことになっているんだ」

「じゃ、美子もダメか」

「いや、美子さんだけは、おばさんに話して黙認してもらったんだ。だが二人も泊めることはできない」

仁科としては勇気のある発言だった。

「アッハハハ、そんなかたいこと言うなよ。」

一人泊めるのも三人泊めるのも大して変わりはないねえじゃねえか」

「そうは行かないんだ。困るんだよ」

「そうかい。折角、出てきたんだから、そんなら他へ泊まろうか」

浩三は美子に話しかけた。

「そうねえ。雅やんが迷惑だと言うんなら、他へ泊まりましようか」

「えッ、美子さんも行くんですか」

「当たり前さ。嫁入り前の娘を野郎一人のところへ泊めるわけにゃ行かねえだろ」

仁科は言葉に窮した。

「何が嫁入り前の娘だ。さんざん男と方々泊まり歩いているじゃないか」

と言え、美子をけなすことになる。

「東京も変わったな。終戦後に来た時にゃ、焼野原で、ヤミ市が一ぱい出ていたが、今はすっかりよくなった。さすがは東京だ。俺も東京で暮そうかな。なあ、美子」

「そうねえ、岐阜なんかいたら、うだつがあがらないよねえ。あした、銀座へ行ってみようよ。きっと、よくなってるよ」

何となしに三人でベチャクチャしゃべっているうちに、十一時になってしまった。おなかがすいたと言うので、ラーメンをとって三人で食べると十二時。

「あ、十二時だ。そろそろ寝ようや」

「寝ると言っても蒲団がないよ」

「まあ、いいや。三人雑魚寝と行こうじゃねえか」

飲み食いしたものを片づけて仁科は押入れから蒲団を出して、敷蒲団を二枚並べて敷いた。敷布団も掛布団も二枚宛しかないのである。九月の末だから、これでも寒くはない。「あたし、まん中に寝てあげる。どっちも手を出しちゃダメよ」

電気を消したが外から淡い光が、ほのかに流れて、おぼろに寝ている者の姿が見える。

仁科は、なかなか寝つけなかった。

ふだん一人で淋しく寝ていたのが、急に三人も、しかも隣には恋慕う女性がムンムンと女の体臭を匂わせて寝ている。恐らく美子と二人きりでも寝られなかったろうが、それは何と楽しく悩ましいことだろう。同じ寝られないのでも、その向こうに浩三がいるということで、楽しさは消えて苦しいものに変わってしまった。

手をのばしても、足を出しても届くところに寝ている美子の肉体の、どこでもいいからソツとふれてみたいと思う。その強い衝動を一生懸命、抑えていた。

「手を出しちゃダメよ」と美子は言った。仁科は、それを忠実に守っていたのだった。

酒を飲んだせいか、浩三は二言三言、しゃべっていたかと思うと直ぐ眠ってしまった。



美子も軽い寝息をたてている。

「この女は一体、誰と結婚するのだろう。浩三と一緒にいるかに見えるが、何か二人の間は遊び友達のように見える。恋人同志とは言えても、結婚するには浩三の生活が安定してないから、むずかしいだろう。それなら僕にもチャンスはあるはずだ」

あれやこれやと考えているうちに、いつしか仁科も眠ってしまった。

### 暗闇の痴態

夜中に、ふと仁科は目がさめた。

目をあいて見ると真暗で、何も見えなかった。仁科は自分が壁の方、つまり美子に背を向けて寝ていることを知った。  
すると――

「ウッ、ムーン……」

という美子の荒い息使いが聞こえた。仁科は冷水を浴びせられたように、一ぺんに目がさめた。

「ウッ、ウーン……」

また美子のあえぐ息の音が聞こえる。頭を廻して美子の方を見ようとするが、どうしても首が動かない。美子の鼻息にまじって、浩

三の荒い呼吸も聞こえる。

「見ろ！ 見るんだッ！」

と自分を励まして寝返りを打とうとするのだが、身体全体が硬直したように動かなくなってしまった。

「何故、見ないのだ。いくじなし！」

身体全体が不随意筋になったように、彼の意志の通りに動いてくれないのだ。

仁科は首の力を抜き、少しずつ、少しずつ仰向けにし、仰向けから右へと首をまわして行った。真暗だった目の先に薄い光が見え、右側から次第に部屋の内部が、ぼんやりと見えてきた。横目を使って美子の方を見た。

美子は仁科の方を向いて寝ている。浩三は美子の影になって見えない。

仁科はテッキリ美子の上に重なっている浩三の姿を目ぶたに描いていたのだが、それが見えないので、ホッとした。だが、その安堵も美子の荒い息使いで、ふっとばされてしまった。

快楽をおしころしたような息使い！

仁科はソツと鎌首をもたげて美子の後ろを見た。

居ない――。

浩三の頭が見えないのだ。蒲団のより上り

で、中に潜っているのが分かった。

仁科はハツとして頭を枕におとした。美子が目をあいて自分を見たように思ったからである。

仰向けになって目をつぶった。

美子の荒い呼吸が前より激しくなった。まぶたをとじていても、浩三と美子が、どんなことをしているかが浮かんでくる。

憤りと嫉妬に、パツと跳ね起きて二人の蒲団を引ん剥いてやろうかと思う。だが、そんなことをしたら美子に恥をかかすことになり、美子に嫌われてしまう。それはできない。

「明日になったら二人とも出て行ってもらおう。こんなに苦しくては、やりきれない。」

浩三の奴、浩三の奴！

人をばかにするにもほどがある。岐阜から東京まで、わざわざ自分のところへ来てまで見せつけなくともいいだろう。俺をどこまで苦しめれば気がすむのだ

仁科は寝返りを打ち、美子に背を向けて暗闇に対した。此方側は目をあけても何も見えないから、いくらか気が静まる。

「美子も、ひどい。少しは僕の気持を察してくれて、よさそうなものだ――だが、最





読者ギャラリー『いぬ』春川ナミオ

初、美子は一人で来るつもりではなかったの  
だろう。それを浩三に知られて、むりやり  
ついて来られたのかもしれない。何とか浩三  
と美子を切りはなす手段はないものだろう  
か。

して自らの手で慰める自分にあまりにも、み  
じめに思えた。

### 埋めあわせ

浩三なんか死んでしまえばよい！”  
間もなく二人の呼吸が平静に戻った。  
だが仁科の心は平静にはならなかった。ど  
うにもならぬ慾情をおさえきれず、自ら慰め  
るより、すべがなかった。

傍の、直ぐそばに想いこがれる女が寝てい  
て、しかもライバルと逸楽に耽っている。  
その脇で指をくわえて辛抱している男。そ

疲労に誘われて、ウトウトとしたが、翌朝  
六時に仁科は目をさました。

あたりは既に明るくなっている。  
美子は浩三の首へ白い腕をのばして眠って  
いた。

“勝手にしろ！”

出勤には、まだ早かったが、もう寝てもい  
られないので、洋服を着ると、そのまま下宿

をとび出してしまった。

会社へ出ても仕事は暇だったので、眠くて  
しかたがない。昼休みに喫茶店へ入って、三  
時まで眠ってしまった。

五時に会社を出たが、下宿に戻る気がしな  
かった。

二人に「出て行ってくれ」とは、とても言  
えそうもないし、言ったところで出て行くよ  
うな二人でもない。今夜もまた、あの悩まし  
さ苦しさを目の前に見せつけられては、とて  
も寝られないし、睡眠不足になってしまう。

その夜、仁科は友達の家泊まった。

“このまま放っぱらかしといてやれ”

四、五日は友達の家を泊まり歩いてやろう  
と思ったが、あの無軌道な二人のことだから  
夜中に騒いだりして、はた迷惑をかけるかも  
しれない。

家を明けていて、下宿のおばさんに文句を  
言われるのはいやだし、文句ぐらいですめば  
よいが「出て行ってくれ」と言われたりした  
ら、引越すには権利金やら礼金などが要る  
し、面倒だ。

と、いろいろ心配になってきて、やっぱり  
一応、様子を見に帰ることにきめた。

夜の八時ごろまで時間をつぶしてから帰っ



てみた。

部屋には蒲団が敷いてあって、美子が一人で寝床の中で週刊誌を読んでいた。

「フフン、怒ったの——」

美子は寝床の中からニッと笑った。

「ゆうべは、あたし一人で寝たのよ。浩ちゃんも麻雀で徹夜して帰って来ないんだもん」  
「しまった」

と仁科は思った。昨夜は美子と二人きりになれる絶好のチャンスだったではないか！  
部屋の中一面に、女の匂いが立ちこめている。仁科の蒲団も敷きっ放しで、すべておとこの晩のままだ。

「あんたは居ないしさ。あたし一人ぼっちでつまらないから映画見て、ラーメン食べて帰ってきたわ。この部屋ラジオもないし、つまらない」

「すみませんでした。昨日は会社が忙しくて遅くまで残業したんで友達のところへ泊まったんです」

「フフ、雅やんは、まじめね」

美子は蒲団をまくった。シュミーズ一枚で寝ていたが、裾がまくれて太い腿が露わに仁科に挑んできた。

薄いナイロンのパンティから、水底のよう

にのうにすけて見えるのも、仁科を一気に欲情させた。

「美子さん！」

仁科は美子の足にとびつき、両手で太腿を抱いた。ふくよかな二本の足に交互に接吻の雨を浴びせた。

腕の中から足が一本スルリと脱け出て、仁科の首を巻いた。

「雅やん——」

美子は、しっかりと顔を挟んだ。

「おとこの晩のこと、雅やん知ってたんでしょ」

仁科は羞恥に足の間に顔を埋めた。

「いいわ。今晚、埋め合わせしてあげる。世話になってるんだもんね」

「美子さん。僕はずっと前から、あなたが好きだったんです」

「フフフ、何言ってるのよう。ホラ、脱がさしてあげるわ」

巻きついてた足がとけて、美子は仰向けに大の字に寝た。

だが仁科には、美子のパンティに手をかける勇気がなかった。弾力のある逞しい足を抱えて接吻を続けた。

「美子さん。浩三君と結婚するんですか」

「アハハハ、誰があんな奴と結婚なんかするもんですか。ねえ、雅やん。どうしたの」  
美子は焦れたように自らパンティを脱いだ。

仁科にとっては、めくるめくような感激に夢中で、美子の腰に抱きついて行った。

少年のようにとり乱した仁科を憐れむように、美子は、その顔を再び足で巻いてやった。

美子の方が落ちついていて、ずっと年上の女のような、ゆとりがあった。

仁科の思うままにさせ、それに調子を合わせるように愛撫した。そして美子も次第に昂奮してきた。

仁科にとっては、生まれてはじめての甘美なひとときであった。蜜のように甘い接吻に感溺した。美子もそれに応えるようにプリプリと弾力のある太腿が柔らかく、或る時は強く締めつけてきた。

仁科は時のたつのも忘れていた。

「ねえ、いつまでやってんのよう」

美子は仁科の顔を持ちあげ、傍のタオルをわたした。仁科は汗みどろの顔を拭いた。美子は次の行動を期待しているように目をつむった。



「ほんとにいいのかしら——」

だが、こんなチャンスは、めったにない。

仁科は半身を起こしてズボンのバンドに手をかけた。

その時、階下の扉がバタンとしまる音がして、

「それがー銀座のーカンカンむすめえ」

聞き覚えのある浩三の声が、悠々と階段を上ってくる足音とともに近づいてきた。

## チャンス到来

「その時、僕は童貞でも何でもなし。女を十五の時に、もう知っていたんです。それなのに、あの時の接吻の味は生涯、忘れえぬものでした。僕の性向を、Mの方へ方向づけたのも、あの時からだったでしょうね」

当時を想い出して、仁科君は盃にチュッと音をさせて、絞り取るように酒を飲んだ。

「ところで、さっきの話の続きですが、折角これから本番というところで、憎い浩三が帰ってきた。残念だったでしょう」

「そりゃ残念でしたわ」

「それでまた、三人で雑魚寝したんですか。だとすると当然また、浩三と美子がおっぱじ

めたでしょう」

「ええ、僕がやるばかりのところでしたからね。美子もその気になってるところですから、ただではおさまるわけがありませんわ」

「また悶々と眠られぬ思いをした」

「ええ、だけど、おとこの晩とは大分、違った気持ちになりました。美子が浩三とは結婚しないと云った、あの言葉が救いとなったんですねえ」

仁科君は髪の毛をモシヤモシヤとかきながら

「と言えば体裁がいいですけど、そのとき、僕の性向は、またひとつの方向へ決定づけられたんですね。それが現在でも、そのまま継承されているんですが、つまり、どうにもならぬ苦しさ、憤りがそのまま快楽に変化してきたんです」

浩三は前の晩の時よりも露骨に、美子を求めて、かなり華々しい情痴のあらしの吹きまくる中で、彼は身をかがめ、じっとこらえる中に自分もその両名の快楽と同じものを感じたと言うのである。

「でも目の前で好きな女の身体を、思うさまむさぼっている浩三が憎くもあり、うらやましくも感じたんですが、ああいう風に女を牝

のように扱う男は、その肉体を自由にすることはできても、心まで捉えることはできない。一時的な遊びであって、どちらかが飽きれば離れて行くのだと信じていました。私のこの予想は半分は当たっていました。しかし、半分は大きくはずれました。そのはずれたことが、私を大きな破滅に導くものとなったのです」

仁科君は酒は強い方で、もうこの頃は私は飲めなくなっていたので一人で飲んでいた。

飲んで余り顔へは出ないが、頬のあざが紫色に濃くなってきて、恐らく本人もこのあざは相当、気にしているであろうが、このあざさえなければ彫りの深い好男子なのだとは思いつつ、酌をした。

「その年、僕は会社をやめて岐阜へ帰ってきました。そして、和紙の会社をつくったんです。親父の友達で和紙をつくっている連中を相当、知っていましたし、親父の持家の一つが空いたので、そこを事務所にはじめたんです。親父の顔で融資してくれる人もあり伝手もあったので、仕事はスタートからトントン拍子にうまく行きました。太田という古い友達がこの和紙の仕事をやっていたのでその男を番頭にしたのも、成功の原因の一つ



だったのでしょうか」

人も五、六人、使うようになり仁科紙業の社長として俄然、羽振りがよくなってきた。

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

当然、彼の結婚話もでてきた。

恰度その頃、美子の身辺から大場浩三が姿を消していた。仁科と入れ違いのように東京

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

へ行ってしまったのである。仁科君の勘は、正しく当たっていたわけである。

ああいう火遊び的な関係は、簡単に別れてしまうものだ、と思っていたことが、その通りになったのである。美子は当然の結果として、仁科に接近してきた。

「いまこそ結婚すべきチャンスだ。ようやく永年の想いが叶ったのだ」

「どうです、こんなところは先生の「らぶ・すれいぶ」そっくりでしょう。僕は、あれを読んでいて気味わるく思っただけなんです」

仁科君は、ひとごとのように言って、うまそうに盃をほし、また酒を頼んだ。お銚子が二、三本たまると引つ込めてしまうから、何本飲んだかわからないが、もう十二、三本は飲んでゐるはずだ。時計を見ると1時近くに

「宿の方は大丈夫です。僕がお世話しますから今夜は悠々腰を据えて僕の話聞いて下さい。こんな話、聞いて頂けるのは先生よりないんですから」

どこからか、しのび泣くようなギターの音が聞こえて、柳が瀬はまだ宵のうちのようであつた。

(続く)



サディズムは私の心の悪魔

## S 小説へ一言 前原 浩一

奇クには毎月、多くのS小説が書かれている。私はそれらの多くのS小説を何度も読みかえしては、私にとってサディズムとは何かを考えてみる。

サディズムは、普通はマゾとの関係や、それ自身をプレーとして固定化して語られる場合が多いように思われる。しかし、私にとってはマゾなどは全く眼中にないし、プレーとしてサディズムの行使を考えた事など一度もない。私にとってサディズムとは、たとえば満員電車の中で一人の美女の尻をなでまわす時の、その女性の羞恥に満ちた表情を楽しむ快感であり、しかもいつ捕まるかもしれないという恐怖感が私の体中を駆けめぐるときであって、それによって女性がどう変化するかは問題には余りならない。

それ故に、私のサディズムは常に抵抗する女性を責める過程で満足するのであって、私に従う傾向が責めによって出て来た女性は、もはや対象外となるのである。それに、責め

を喜ぶマゾなどは私にとって気持ち悪い存在でしかないし、サディズムをプレーするなど全く考えられない。

サディズムとは他人と合意でプレーするなどという種類のものではない。例えば、サディズムの快感は、いやがる女を強姦する時に最も感じられるのであって、肉体関係にある女性といかに技巧をこらそうとサディズムの快楽は味わえないと思う。だからサディズムとは私にとって暗く重い存在として私の心をむしばんでいるすばらしい悪魔だ。

現実に私のサディズムを満足させるには現行法に反した強姦、誘拐しかない（今の所は余り勇気がないが）私の様なのを危険人物というのだろうか。それ以外には局部的にラッシュなどで感じだけでも味わうか又は空想以外にはない。

そこで、私は空想の世界の代表的な例としての小説を取り上げ、しかも多くの自称SFファンが好む『花と蛇』について感想を述べて

みるとしよう。『花と蛇』の登場人物の女性達は女性一般の類型を、それぞれ表わしている事は想像にかたくないが、多くの、いや九〇%のファンがその一類型としての静子夫人に注目している。

確かに始めの段階においては静子夫人に私の眼もそがれた。しかし、先にも述べた様に、少しずつマゾ化し、ついには外見上マゾの性質を十分に備えるに至った静子は、今や私の眼中から消え去った。現実に永久に抵抗し続ける女性なぞいないと思うが、せめて小説の世界に位は存在させてほしいと思う。殆ど、マゾ性のない女、気が強く、見ただけで犯したくなる娘、しかも暴力的にやらざるをえない娘、そんな女性こそ『花と蛇』のヒロインではないだろうか。

そういう点で私の興味を最も引く女、『花と蛇』における私にとってのヒロイン、それは八京子Vである。確かに『花と蛇』においては京子が、右記のような一類型として登場されているとは思われるが、それが徹底していないし、最近はその特色が薄くなりつつあるように思われる。

私は、これまで京子に加えられた責めについて、くわしく調べて来たが、京子への責めの特色は、シスターボーイによる責めの前とそれ以後に大きく分けられる。シスターボーイ以前は静子の側面として、ひき立て役とし



て責められたが、シスターボーイ以降は、独立して取り上げられ責めの方法も発達して来ている。しかもアヌス責め、ガラス棒、アヌス交合と京子のアヌスが集中的に取り上げられている。

これによって気づいたのであるが、女性に様々な類型がある様に責めには類型があるのではないだろうか。たとえば、羞恥責め系、肉体の一部を実験的に責める肉体責め系、ムチ打ちなどの苦痛責め系、など。

こうした種類の責めを系統的に行なったら京子らの女性の類型が一層はつきりすることと思う。例えば、全ヒロインに共通するものとしての羞恥責めは、前提として静子には羞恥の極限を、そして重要な我が美女京子には肉体実験的責めを、アヌスの徹底的な責めを京子の精神教育めきで行なうのである。

少し具体的になったが、京子のアヌス責めは京子をマゾに教育したり、スターにする為ではなく、アヌスそのものを実験的に責める事により、京子の肉体の一部を開発するといふものである。

次に、問題となるのは責めの一貫性だと思う。浣腸一つを取り上げて見ても、静子夫人の場合、気のせいかもしれないが液の量や仕方などに一貫した発展性がないように思う。京子にしても、一人の男との交合から二人の男との交合と発達して来たのであるから、清

次らの時は、それを生かしてもらいたいものだ。静子夫人は、性器の責めの発展と一貫性、京子にはアヌスの責めの発展と一貫性が私が物語から考えうるもので、そういう点において静子へのダイヤのアヌス挿入のための責めは、静子でなくて京子に清次らによって加えてはしかなかったと思う。

空想の世界、そして『花と蛇』の世界、それは私に無限の可能性を幻想として与えてくれる。そんな幻想が、幻想の美女△京子▽が責められなければ、ありふれた偽りのセックスの現在ではとてもたえられない。だからこそ私は、現生では存在しないサディスト好みの美女△京子▽を、観念的であれ、バカげていようと追い求めたいと思っている。そして、そんな△京子▽を現存の女に投影して私はセックスをするのである。

私は、女同志のレスビアンを好まない。というのは、私のサディズムは男が女を責める事に見られるのであって、女同志はどちらか一方の女を強調する傾向があるし、美しい肌と肌がふれ合うなんてイタダケない。

だから、京子が静子夫人とレスビアンの関係にある前期は、静子夫人ばかり強調されニガニガしく思っていたが、後半は数人の男が京子を責めるので喜んでゐるし、又、静子夫人に対し千代夫人、というように京子には特定の悪女が存在せず（銀子らは全員共通なの

で別）男ばかりで、しかも数人と、いい傾向だと思っている。

数人の悪人男が一人の女に、例えば清次ら三人が京子に、やもりのようにまといつて責めるといふ事は、女の体を全身充分に責められる点でも、女の羞恥を昂める点でも充分だし、ワクワクしている。

『花と蛇』中に、静子夫人が最も恐れるものは浣腸だと書いてあったが、その通りで女性が最もいやがる責めは浣腸に代表されるアヌス責めだと思われる。多くの女性は性器は見せたりさわらせても、アヌスはさわらせたくないし、まして浣腸に排便など特にいやがるものである。それだからこそ、私はアヌス責めや浣腸責めに興味を持つのであって、京子へのアヌス責めは大喜びである。それ故、京子への浣腸を責めとして、更に拡張器、ガラス棒、肛門鏡などを使って京子のアヌス責めを強力に行なうべきだと思う。

だからだと、まとまりがなくなってしまったが、かつてマル・キ・ド・サドが当時のフランス社会の腐敗に反撥して反社会的にSM文学を書いたのと同じように、現在では考えられない反人道的な責めを京子に加えてこそ、私にとってのS小説の真価があるのである。



## S M カメラ・ハント……谷山久美子の巻

## マゾヒスチック・アニマル

## || その悦虐の履歴書 ||

辻村 隆

## (悦虐の履歴書)

本 籍 岡山県 倉敷市

現住所 愛知県 豊橋市

氏 名 谷 山 久美子

生年月日 昭和十五年五月十日生

一、学歴 岡山県××高校卒業

一、Mの経歴

『昭和三十三年七月、十七才の夏、奇譚クラブを始めて購読する』

「高校三年の夏でした。お友達三人と試験休

みを利用して鷺羽山へ出掛けました。下津井節で有名な下津井港の東に、鷺が翼を広げたような花崗山の山に登り、頂上の鐘秀峰に立って、瀬戸の島々から、遥かの塩飽諸島まで見て、わたせる、その素晴らしい景観に酔っていた私は、少なくとも多感な乙女の無垢な清らかさに包まれておりました。それから、数時間後に私の半生を変えるような、異常な衝撃が待ちうけていようとは思いませんでした。小学校二年まで倉敷市の鶴形山公園の近くで育った私でしたが、父の勤務の都合で岡

山市へ移り、高校時代のその頃は、津山線の法界院駅の近くに移り住んでいたのです。勉強が原因か、テレビの見過ぎからか、高校に入学した頃より近視になっていましたが、体操が悪く黒板の字を見る以外は眼鏡をかけませんでした。鷺羽山からの帰り途、岡山市内で友達と一緒に、とある古本屋に立寄り、手芸本や、好きな推理小説の単行本などを、安く求めようと漁っているうち、ぎっしり並んだ小説類の本棚の下の台に、無雑作に積まれてあった雑誌の「奇譚クラブ」という白い表



紙の薄っぺらな、一九五八年九月号の本に何気なく眼がとまり、軽い気持でとり上げて、パラパラとめくった時、思わず卒倒しそうになりました。こんな雑誌があったのかと、ひそかに心の片隅で願望していたものに、正面から対決した思いで、友達と一緒にいることも忘れて、一冊の推理小説、——そう、確か松本清張でした——の下に隠して、胸をドキドキさせて買い求めました。古本屋だというのに定価の二百円という値も上の空で、宝物のように、この薄っぺらな雑誌を胸に抱きしめて、友達と別れ、帰宅しました——と、彼女は往時を懐古する。

彼女が買ったという三十三年九月号を参考にとり出してみたが、その号に私の寄稿はない。大塚啓子の緊縛フォト数葉。四馬孝氏、滝れい子氏、それに現在、編集者杉原虹児氏のSM画が散見される。読物は、僅かに土路草一氏の『魔教団NO8』が気を吐いている程度で、『家畜人ヤプー』で一躍、名をなした沼正三氏が『手帖雑報欄』で高橋鉄氏を弾劾している博識振りが目立つくらいのものであった。しかし、珠玉の入選作品『草双紙における責場の研究』や、知る人ぞ知る、清水正二郎氏がペンネームで、『マリアンヌの手

記』なども掲載されていて、この号全体を通じて読むと、SよりMの方に幾分、傾斜しているようである。

麻薬のように、谷山久美子の心に奇クが、しみついてゆき、偶に買いそびれた月などはぼんやりと何をする気にもなれない日が続く。内攻していた被虐性は急速に芽崩れ出し



夜、悶々として自虐に耽るようになり、自縛自縛の時間を持つようになる。いつか、嗜虐の男性が彼女の前に出現して、ひねもす悦虐の境地を、さまざまような幻想に捉われ、それは願望として、いつしか久美子の心を占拠してゆく。反面、多感な乙女心の羞恥心が、自からそれを求めることを心ならずも拒んで、悶々の日々が経過していった。後年被虐の権化と変貌した谷山久美子の、世にも稀なる超努級のM性は、この頃から培われ出したのである。

『昭和三十五年九月、十九才の早秋、某金関係の会社に、事務員として就職、昭和三十九年十二月、家事の都合で退社する』

「十九才から二十三才まで満四年ちょっと、勤めておりましたが、慢性化というものは恐ろしいもので、あれほどまでに傾倒していた『奇ク』への情熱——裏返せば被虐の願望——も幾分さめ、時折、気が向けば買い求める程度になりました。内容に心が馴れてきたせいもあるでしょうが、所詮はいくら一生懸命に読み耽ってみたところで、プレイが実現出来るわけでもなし、絵空ごとの小説の世界なのだと自分自身にあきらめさせていたので



す。その癖、疼く心の片隅では、誰か私を思い切り虐めてくれないかしらって、絶えず考えているのです。でも、いざとなったら恐らく逃げ出していた私自身をダメにしてしまうと反省するしりから、轟々と緊縛されて、咎の洗礼をうけて、のけぞり恍惚に欲びの呻きを挙げている私の姿を、想像するのです。

「奇ク」を読めば、私自身の心が妖しく乱れたまらなくなるからこそ、努めて避けるようにする私ですのに、独り寝の淋しい夜など、十数冊の「奇ク」を枕元において、好きな読物をあれこれ拾い読みするうち、もう堪まらなくなつて、独りで吐け口を求める行為に走るのでした。自慰と呼ばれるその行為も、私は外の女の人達の様にセックスにはつながらず、自縛による被虐の悦楽の想念が、しらずしらず体を濡らしていたのです——と、彼女は泌々と語ってゆく。

男女社員併せて、三十数人の働く社内で、この様な考えを持っているのは、自分独りだろうか、久美子は内省して真剣に悩む。社内ではしばしば耳にする、セックスの卑猥なY談のたわごとの間に、SMめいた話題は、ついで耳にしたことがなかったという。男性社員の数名からデートに誘われて、出掛けてい

ったが、世の常の男性のする如く、手を握ったり、果ては唇を求められるようなことのみで、嗜虐を好む男性には遭遇することが出来なかった。結婚適齢期を迎え、両親や親戚があれこれ氣を使ってくれて、しぶしぶ二十三才の夏、氣の進まぬ見合したが、先方が氣に入つたというので話がトントン拍子にすすみ、親のいいつけでその冬、退社して花嫁修業の稽古ごとに通うようになる。数度デートするうち、相手の男性がWがかった、妙にニチャニチャした感じのM性であることを知り、会う度毎に厭氣がさして、遂に破談にする。久美子にとっては、女を征服し尽さずにはおかない、むしろ暴君めいたS的な男性が理想像であつた。自分を、奴隷妻のように扱つて、虐めつくし、責め立てる男性を憧憬していたのである。自から破局へと話を進めておきながら、それでいて急に自分が憐れに思え、滅茶苦茶に自分を虐めてみたくなり、家中が寝鎮まつた真夜中、自分で両足を縛つたロープを引っ張り上げて、独りで鴨居に逆吊りになつて、カッと血の逆流する思いに、激しい陶酔を覚えたりした。夜半、全裸になつて、屋根上の物干台に出て、角の柱に我が身を縛りつけ、寒風吹きすさぶ真夜中の、凍り

つきそうな冬に、ガタガタ胴震いしながら、数分間もじっとそうしていると、たまらない被虐の想念にかき立てられるのであつた。

素ッ裸になつて、両手両脚を自縛して、朝までタタミの上に転がっていて、手足がひどく痺れ、二、三日、痺れがとれず、ひどい下痢に悩まされたこともあつた。

全身の体毛をすっかり剃りとり、果ては頭髮までもと思いつめたが、流石に世間体を考へて、頭髮はあきらめたが、衝動的に独りカミソリをふるう夜もあつたとか——。

心の虚しさを紛らわすため、浣腸を試みた時もあった。羽鳥水江の被虐の願望に共鳴し蛙腹になるまでエネマシリンジで注入し、その排泄をこらえる苦悶に、身を掻きむしりながらも、妖しい恍惚感にひたり、果てはA感覚の探求に憂身をやつしたこともあつたのである。この頃が、谷山久美子の自慰的な被虐願望の昂進期であつた。

『昭和四十年六月、再び就職。洋家具店の事務員として住込み勤務。翌四十一年二月S男性を知り、同店を退社。三カ月、同棲する』

「物思いに耽り勝ちな私に両親は心配し、或いは、私の性向に薄々気づいていたのでしょ





うか。遠縁に当たる洋家具店に私を預け、店の手伝をさせました。炊事のおばさんと、も一人いる店の女の子と三人、六帖の部屋に寝るようになって、心ならずも私の自虐プレイは鳴りをひそめざるを得ませんでした。しばらくは苦しいが平静な日がつづいたのです。二十五才の冬のことでした。始めて私の前に願望久しいS的な男性が現われたのです。私の初恋——違った意味の初恋ですが——彼の名はK・Aといいます。Aを知ったのは、岡山市に程近い西大寺市の、あの有名な裸祭りの夜のことでした。

毎年二月の第三土曜日には、若々しい男達の揮一本の裸身と裸身がぶつかり、もみ合い火花を散らします。私のようなM性の女にとっては、たまらない魅力でした。

洋家具店の同僚のS子と二人、日暮れ頃から西大寺市へ向かいました。

吉井川畔の金陵山西大寺は、もう宵のうちから、人の浪で、万人近い裸身の男性の神木争奪の華々しい行事をみようとして、

色もあでやかな女性の姿も数多く混っており、また。まるで、ダンテの地獄篇を思わす、この東洋の奇祭に、夜の更けると共に、人々の興奮は昂まって行きました。怒濤のように殺到する人浪に揉みしだかれ、いつの間にかS子と離ればなれになり、私は男くさい雰囲気の大喚声の中で、必死にあがいていたのです。

どどっと打寄せた人浪に、思わず足をとられ、体が宙に浮いて、うしろに倒れかかった時、背後からしっかりと、私の体を支えて抱きとめてくれた力強い腕を感じました。

ふり向きもならず、押しよせ、押し返す人浪に木の葉のように翻弄される私の体を、がっしと後の男性は、足を踏んばって支えてくれていました。

揉まれ揉まれて、やっと人浪を脱し、暗い境内の片隅に立った時、私の手は知らず知らず、その人の腕をしっかりと掴んでいたのです。三十才過ぎの夜目にも髭の剃りあとの濃い、太い眉の凛々しい人でした。

裸祭りの熱気がそうさせたのか。それとも寒空の人恋しさが私を無暴にさせたのか、雑踏から遁れて、その人の云うが尽に、ふらふらと彼のアパートを訪れていたのです。その人がAでした。

裸像群の昂奮がさめやらぬ私は、やがて温かくぬくもり出したガストロブの熱気にあてられたように、抱きしめたAの腕の中に身をすくめていました。

彼は終始、余計なことは喋らず、殆ど無言に近い状態で、このうたかたのパントマイムを進行させていったのです。

私を押し倒して挑みかかって来た彼に、ハッと正気に返った様に私は愕然としました。少なくとも二十五才の今日の日まで、男知らずの無垢な体で過ごして来た私なのです。咄



嗟に身の危険を感じて、パツと起き上り、扉に走った私に、背後から、いきなり革バンドがしたたかに、私の首筋から背をムチとなつて打ちのめしました。その痛撃に呀々と頸筋を押え、ヘタヘタとしゃがみ込んだ体に、容赦なく二のムチが私の背を激しく叩きのめしました。

ジーンと突き刺さるような痛みが、忽ち甘美なよそおいに変化したのです。

見も知らぬ男から、叩きのめされ、ムチの洗礼を受けた——。その衝撃が私の、忘れかけていた被虐の願望に、一挙につながってしまったのでした。

踏み込んだ私にAはのっそり近よると、革バンドを投げ捨て、背後から羽搔じめにして荒々しく道行コートをとり、帯をときにかかりました。いやいやと身悶えする態度とは裏腹に、私の心は被虐の欲びに悶え、胸を疼かせて、もっともっと荒々しく振舞ってほしいと願っていました。

長襦袢一枚に引剥かれた私は、男の暴力を誘うように、空しい抵抗を、今はわざと続けました——と久美子は、そこで絶句する。

久美子は暴力で犯されたいと願ひ、尚も身悶えして抵抗した。彼の思う壺で、業を煮や

したAは、男物の黒い帯で、長襦袢の上から久美子を後手に縛り、下着をぬがせていった。下半身むき出しの久美子に、Aは激しい慾情に燃えていった。Aは強姦したと思ったらしいが、久美子の心がそのようになることを希って働きかけていたとあとで知り、Aの慾情は一気にSに爆発する。

久美子は歡歎し、悦楽に悶え、快喜の呻きをあげ続けた。彼女の西大寺詣りが続いた。

Aにとって、それは意外なことの成り行きであった。フトした出来心の姦淫に、女は乱れに乱れて歓喜にのたうったことは、まさに、ヒョウタンから出た駒であった。

もともとS的な下地のあるAと、被虐願望の久美子は、陰陽そのところを得て、一気に飛躍してゆく。

それでもその当時の久美子は、自分の方から、緊縛や責めや、いたぶりは、いい出せなかった。Sといっても内潜在的な、どちらかというとノーマルに近い、その刹那のみ荒々しく振舞う彼と、情事的前提に、強烈な被虐を求める久美子とでは、そのSMのプレイに相当の感覚のギャップがあったことは否めない。

それでも久美子にとっては、S的な初の男

性だけに、心底から打ち込み、果ては多少迷惑顔のAの許へ転がり込んで、同棲にまで漕ぎつける。Aは久美子の果てしなき被虐の願望を、いつしか知って、反って心が後退する。久美子が押せば押すほど後退し、やがてAは久美子の気力に圧倒されて、新緑の頃、久美子の前から忽然と姿を消してしまった。余りにも激しい押しつけの愛情に、Aは草臥れ果て、重い負担となつてのしかかって来たのであろう。

必死にAを探し求めたが、沓としてその居所は掴めず、彼女は失意の胸を抱えて煩悶し泣きに泣いた。私にしてもAのその時の、心の重荷が分かるような気もするのである。

『昭和四十一年六月より家事に従事。家内工業の内職を手伝う。』“奇ク”を再び

耽読。昭和四十三年一月、編集部気付にて山本一章宛、私信を出す』

「辻村さんのカメラ・ハントや山本一章さんのカメラ・ルポが私の大好きな読物でした。ベテランの辻村さんより、優しく親切そうな山本さんの方を選んで、思い切って、始めて編集部気付で拙い被虐願望の希望をのべたのでした」——と、久美子の話がようやく現実に触れてきた。





山本一章のカメラ・ルポ「この女（ひと）」の、谷山久美子の巻は、昭和四十三年六月号に発表されている。

彼女が山本氏宛に出した志望の便りを、ここに再録してみよう。（「この女と」に掲載）へ突然お手紙を差上げて御免なさい。私この数年来（辻村註—本当は十年來である）奇クを読んでいる二十七才の女です。辻村様のハントや、カメラ・ルポに最も興味を感じていましたが、昨年九月号の、左近麻里子さんのルポを読んでからは、左近さんが羨ましくてたまらなくなりました。そして、今まで空想だけで満足していたのが、何だか物足らなくなり、現実に一度あんなに縛られてみた

いと考えようになりました。そう考え始めると、何か苛立たしい毎日となってしまうのです。それで昨秋（註—事実は一昨年の冬）当時、交際していた男の人にこの希いを打掛けてみたのです。彼は一夜、私の体を現実に縛ってはくれました。しかしそれは、奇

クを知っている私には、ほんの真似事で、私の夢には程遠いものでした。もっときつく、もっと本格的に——。しかしその人は、その時を最後に、私から去ってしまいました（註——事実は三カ月間、同棲した前述の通りである）恐らく変態女に愛想をつかしたのでだろうと悲しみました。しかし一度、点けられた火は、大きく燃え上るばかりで、やり切れない毎日を、せいぜい縛り場面のありそうな映画を観ることによって慰めています。そんな時、カメラ・ルポがお休みになりました。もしかししたら、適当な方がないためではないだろうか。それなら私でどうかしら——そう考え始めると、もうペンをとらずにはおられな

くなりました。勝手な想像なのはわかっています。そして厚かましい押しつけなのもわかっています。でも山本先生なら、私の体の中でくすぶりつづけているこの悩みを、理解して下さるのではないだろうか、本当に縋る様な気持で、この手紙を書いています。一度だけでも結構ですから、お会い下さいませんか。でしょうか。そして私の体を、思い切り責めてやっていただけませんかでしょうか。はしたない女と軽蔑されることは覚悟しています。どんな強い縛りにも、どんな残酷な羞かしめにも耐えるつもりでおります。女からこんな手紙を書く辛さを、憐んでやって下さい。日曜日なら大抵、都合つくと思いますので、お返事を首を長くしてお待ちしています。ぶしつけな手紙を、おゆるし下さい。余計なことかも知れませんが、セックスの経験はございますので……。

岡山市〇〇〇〇〇 谷山久美子V

これが、編集部気付で、山本一章氏に宛てた手紙の内容である。彼は大喜びし、早速、日時、場所を指定する。折返し速達で久美子より返事が届き、プレイのデートはここに成立して、昭和四十三年三月三日の桃の節句の日山本一章は長駆、愛車を飛ばして国道二号線



をひた走り、岡山駅で彼女と会う。

強烈な猪吊り、逆吊り、鞭打ち、柱縛り、開股逆吊り等々、数時間で精力的に活動して谷山久美子を狂喜させたのは、彼が「この女（ひと）」とで詳述した通りである。

あの頃、このルポを読んだ私は、してやられたわいと、彼に大いに敵愾心を燃やしたものであった。同月号の私のSMカメラ・ハントは、先々月号発表した佐々木真弓の初めてのハント「ケメ子早春譜」で、私は私なりにやっていたのであるが、何といっても迫力の違いは、彼に一步ゆずらざるを得なかった。

前述、後述を、谷山久美子の便りで結び、サラリとプレイの要点のみを書き流したあたり、まったく以て心憎いばかりである。

彼女のその時の感想の手紙は次のようなものであった。（「この女と」掲載から引用）

「この間は、とても楽しい半日でした。でも山本さんは、きっとお疲れになったことでしょうね。ごめんなさい。空想していたことが現実となった時、それは素晴らしいものでした。今まで心の中で燻っていたものが、一ぺんに一掃されてしまって、生甲斐を感じています。尤も翌日一日は、体の節々が少し痛みましたが、でもその苦痛さえもが、なんだか

私に喜びを思い出させてく

れるのです。そして何も知らずにいる女の人を見ると、この世界を知らないのが、気の毒にさえ思えるのです。セックスだけの喜びは、この世界の喜びと比較する時、余りにもみすばらしく貧弱です。そんなに考えるのは傲慢かしら。でも、ジーンと頭にくる感じは、プレイの中では、決して厭

なものではありませんでした。吊りも鞭打ちも、山本さんが私の体になさったすべてが、私の望んでいたものと一致していたようです。でも最初だから、少し手加減なさったのではないかしら。もっとひどいことでも辛抱できるのではないかと思っています。辛抱出来るって言うのは、表現が拙いかしら。望んでいるって書く方が、正直なのかも知れませんがね。山本さんのなさることなら、どんなことでも喜びになりそうです。そして、きつければきつい程、その喜びが大きいのと思います。もし今度お逢いできることがあれば、手加減せず、滅茶苦茶に責めてやって下さい。



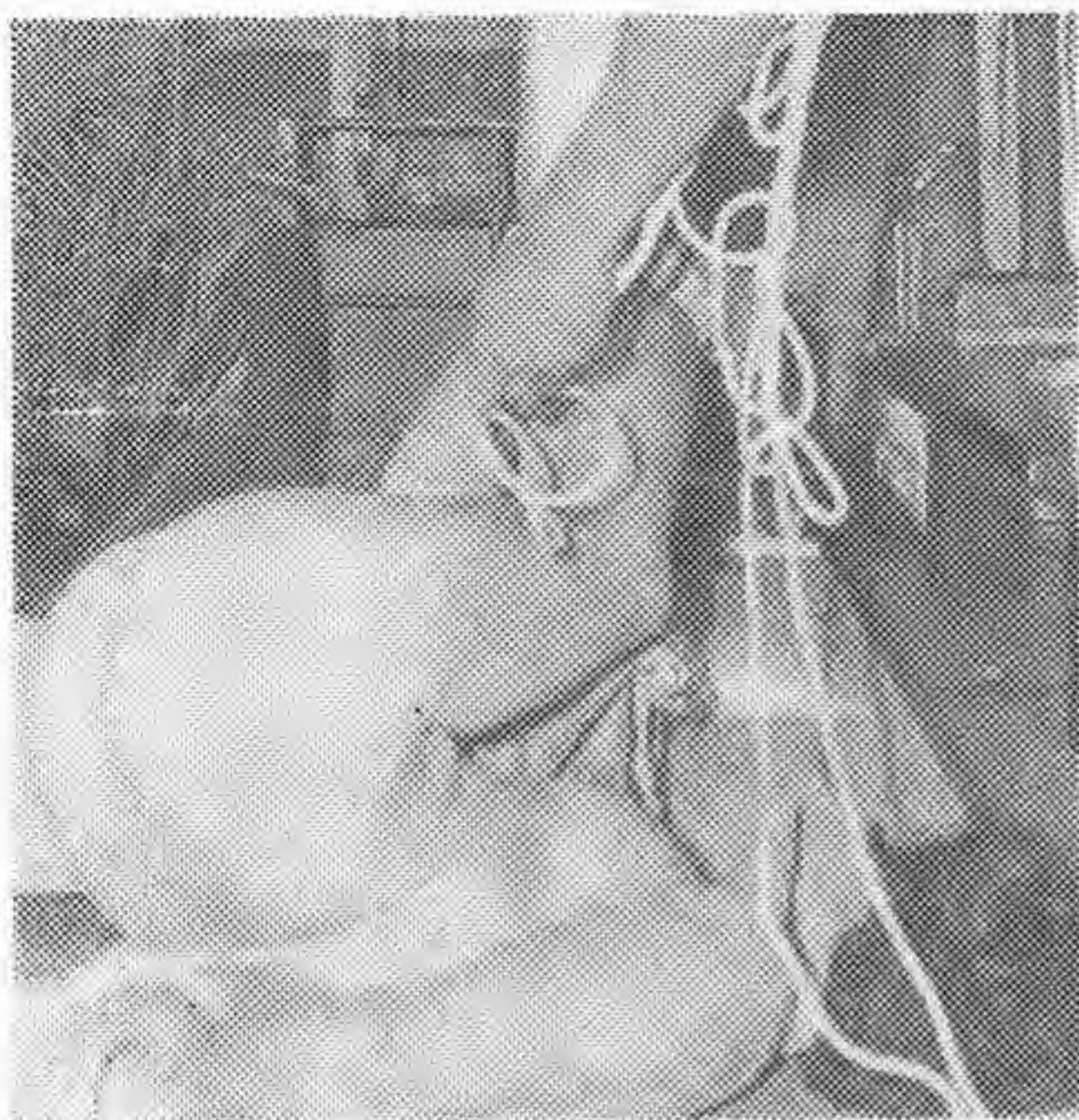
奴隷だと思って——お呼び下されば、次は私の方から大阪へ参ります。きっとお返事下さいね。また、お逢い出来る日を、心からお待ちしています。

谷山久美子

『昭和四十三年三月より七月まで山本一章によって奴隷飼育の調教を受ける。同年七月末、辻村隆を紹介される』

「毎日でも山本さんと会いたい、激しく昂ぶった気持でしたが、あの方のお仕事の点もあり、月二回の日曜日を、首を長くして待ち兼ね、山本さんの指定される場所へ飛んでゆきました。あの方は、お書きになった「痴人の糧」の、その頭の産物をすべて私に試みられ





て、女の肉体に可能の限界を見出そうとなさ  
いました。苦しくも嬉しい月二回の願望の日  
でした。あの方こそ真性のSなのでしょ  
うか、三月から七月までの、合計八回の飼育プ  
レイの間、たった一度たりとも、私との肉体  
の結合を求められず、徹頭徹尾、責めと屈辱  
と汚辱に終始したのです。

あの方は、とてもヒューマンな、その癖プ  
レイ前後は、それはそれは優しい、むしろフ  
エミニストの方です。それが一旦、ホテルに

入り、いよいよ飼育の時がくると、忽ち態度  
をかえられて、徹底的なサジストに変貌され  
るのでした。

先ず私は全裸になり、彼の膝下にひざまず  
いて、奴隷宣言をさせられます。あの人から  
手渡された宣誓状を暗記させられたのです。

——凡ゆる冒瀆と屈辱とを、喜んでお受けし  
ます。一章様から飼育され、調教をうけるの  
は、牝犬となった女奴隷の無上の光栄でござ  
います。牝犬は人間の言葉がいえません。

飼育中は人間を放棄して一章様の  
責めと可能性の限界を試す実験台に  
なりまして、この牝犬の体を捧げる  
ことを誓います——

エコノミック・アニマルとか、セ  
ックス・アニマルとかいった言葉が  
流行する昨今でしたら、さしずめ私  
はマゾヒスチック・アニマルといえ  
ましょう。そうです、虐待動物とい  
う言葉が、一番びったりする私で  
した。

あの人に半死半生になるまで苛め  
られるために私の生甲斐がありました  
た。私は、あの人に命じられた通り、  
いろいろなものをつくり準備し

ては、いそいそと出掛けただけです。

牝犬奴隷の宣誓が終わりますと、私は持参  
したゴム粘土を丸めて、両耳に栓をし、聴覚  
を遮断してしまいます。ついで私の分泌液で  
穢しては乾燥させ、それを繰り返して、汚穢  
にまみれた布を口腔一杯に押し込み、その上  
からしっかりと自分の手で猿轡をはめます。両  
鼻を指先でつまみますと、息苦しいながら、  
辛うじて猿轡を通して呼吸出来ます。それを  
確かめてから、ゴム粘土を指先で細長くして  
鼻孔に押し入れてゆくのです。息づまる苦し  
さの中に、既に微かな陶酔が、体中をジーン  
としびれさせてゆくのでした。

最後に、大判の絆創膏を両眼にはりつけ、  
視覚、聴覚、嗅覚をすべてなくした上、一言  
も発せられない私になって、一章様の前にひ  
ざまずくのでした。これらのものは、すべて  
私が準備させられました。それまで鋭い眼で  
私をじっと見つめていられた一章様は、私の  
牝犬になる予備行為が終わると、やっとヘレ  
ンケラーのような私に近づかれ、力限りに両  
手脚を縛られ、私の最後の肉体の開孔部を、  
蠟燭のしずくによって、完全にうめてしまわ  
れるのでした。激しい熱さに呻き、絶叫しな  
がら、気の遠くなるような恍惚境へと惹き



込まれてゆきました」——と、久美子は、その時を懐古するように、そっと胸を両手で抱いたのであった。

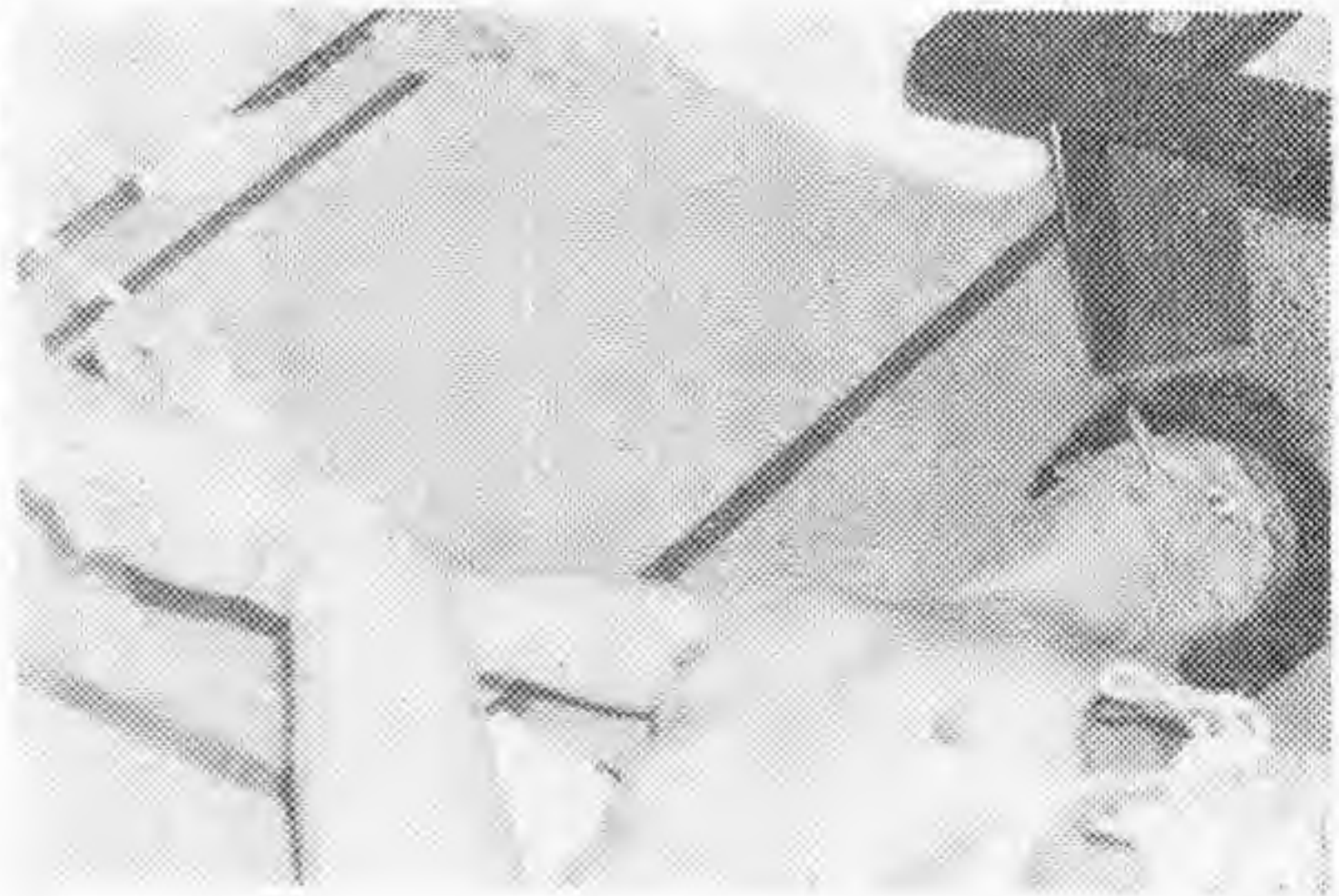
それは、山本一章が、自作『痴人の糧』で書いた手段であった。肉体のすべての孔を塞ぎ、触覚のすべて、五感のすべてを奪った上あらゆる凌辱を女体に加えたのであった。

人それぞれの好みがあるとはいえ、今、彼のカメラ・ルポを想い起こしてみても頂いて分かることであるが、その女性の殆どが眼隠しや猿轡をされていた事実を——。

裏返せば、彼は非常に羞かしがり屋であり照れ屋でもあったのだ。女性の眼が、彼の演ずる種々の行為をみつめる時、彼は内蔵する嗜虐行為の十分の一も実施出来なかったのである。一匹の奴隷牝犬と化した彼女に、山本一章は全智全能を傾けて飼育し、調教を試みたのである。被虐の権化のような久美子にとって、その凌辱の限りが、又たまらない陶酔でもあった。

すべての感覚を奪われ、不安が久美子の被虐願望に、むしろ拍車をかけたようである。

聞こえず、見えず、語れず——という極限状態で、しかも一章は、彼女に対し、他の女性に試みようとして果たし得なかった、すべ



てを賭けたのである。

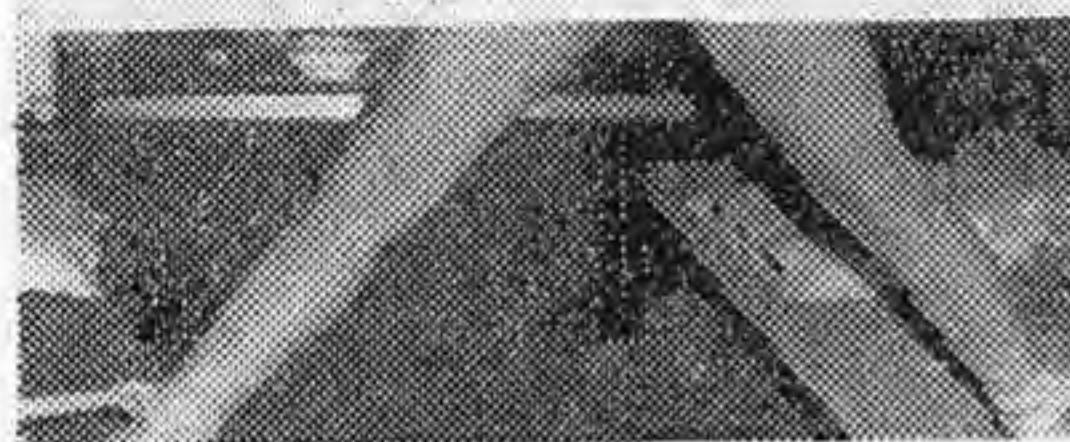
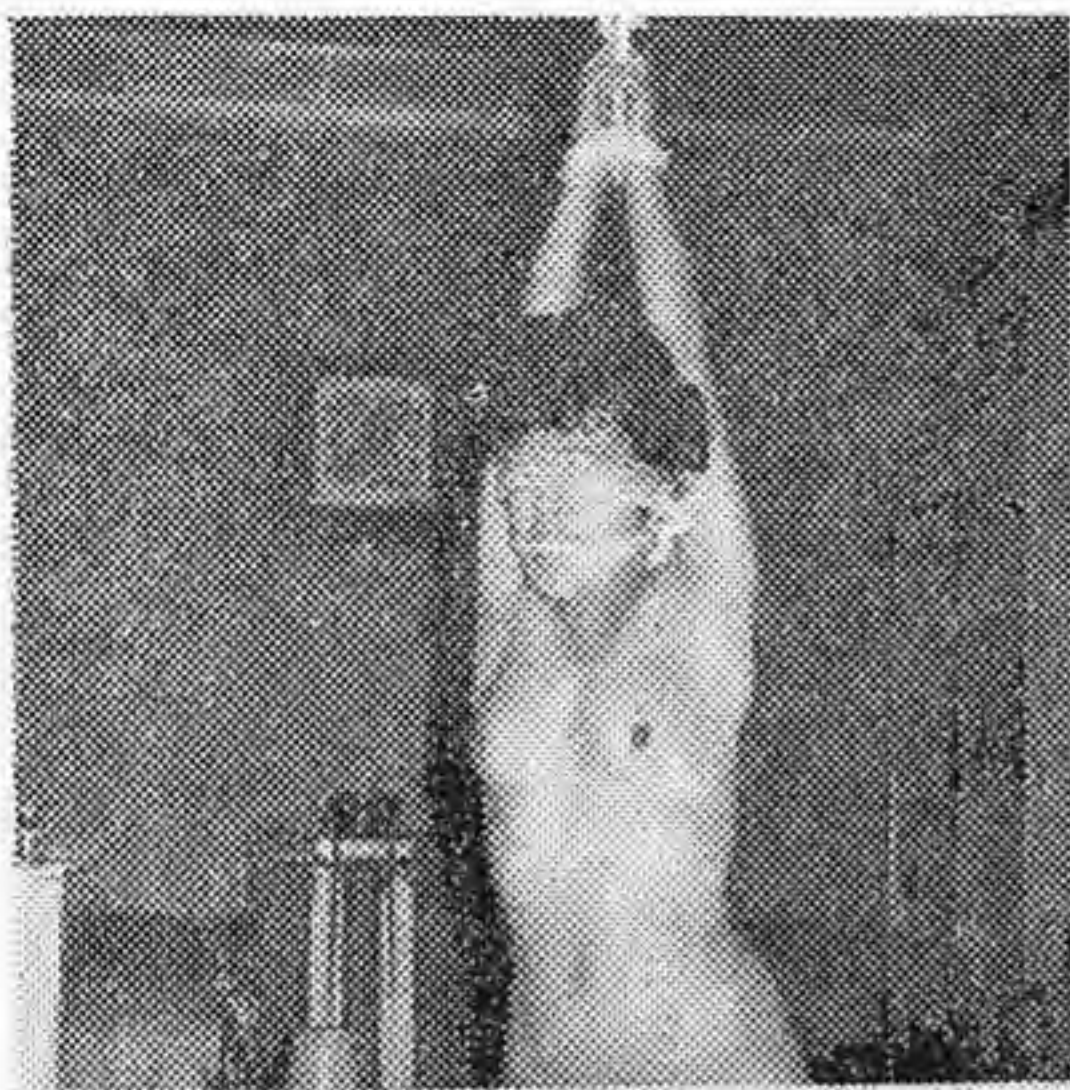
その結果——、あらゆる嗜虐を試みて、飽和状態になった彼は、遂に彼女を最後としてペンを擲ち、その後はカメラ・ルポを書かなくなってしまった。即ち、書く気がしなくなったのである。久美子以上の女性が現われた時、彼は再度、情熱を燃やして書く気になる

かも知れない。しかし、恐らく彼女以上のマゾヒスチック・アニマルは、現実世界では、到底、不可能であることを、彼自身、一番よく知っているに違いあるまい。いい換えれば、谷山久美子こそ、このSMの世界の、最高のマゾ女性であると断言出来るのであった。(それは、私が彼女とプレイしてみても、断言出来る言葉である)

山本一章をして、カメラ・ルポの情熱をなくさせた女性、その空前絶後のMの極致の彼女の探究が、一章にとって幸か不幸か、それは知らない。しかし少なくとも、ゆきつくところまでは、ゆきついたということである。

その凄絶ともいうべきプレイの状況を、彼女はなつかしさをこめて、こう語ってゆく。「あの方はあらゆる吊りを試みられました。一番苦しかったのは片足吊りで、足首にじかに縄をまきつけられて吊るされました。それと駿河責めという、両手両脚を背で結び、吊るされましたが、手脚の関節がぬけそうで、半月ぐらい、ふしぶしが痛みました。肩から片手を回しての鉄砲縛りというのも苦しかったです。声が立てられず、眼も見えず、息もたえだえにつまって窒息寸前の私の体を、数十分ぐらい叩きつづけられました。あの時は





体中が腫れ上って、三日ばかり、うんうんいって寝込んでしまい、骨が外れたのかと思いましたが。あの方は気持が昂揚すると、最後に私の口で奉仕を求められ、長い間かかって、やっとあの方の気持を鎮めるのです。必ず嚙下させられました。時には、どうして私の体をお使いにならないのかしら、と思いました。が、潔癖なのでしょうか——」

縄や革バンドでの笞打ちは、痕跡が全身に残り、風呂へゆけなくなるので、牝犬はゴム紐で伸縮する、笞打ち用の紐をつくった。山本章は一度使ったきりでそれをなげうち、平手叩きにかえた。愛撫は叩きのめすことで

あった。臀部はいわずもがな、顔といわず、胸といわず叩きまくる。叩かれる久美子より叩く一章の掌の方が、赤く腫れるほどである。

プレイが終われば、彼は温厚な元の紳士に還元し、その日の彼女の嗜虐の愉悦の反応をきき訊した。今日は五〇%、今日は八〇%という風に、パーセンテージで彼女は、満足の分量を現わしたのである。

如何に強烈、苛酷の最大限を行なっても、谷山久美子が百パーセントと応えたことはない。若し彼女が百%と答えた時、それは或いは死に到らしめるか、かつての性倒錯の極限をいった小口末吉の妻ヨネのように、すさまじい肉体損傷の無惨さの時のように感じるのである。

彼が偉大なるマゾヒスト、谷山久美子を私に紹介したのは、四カ月の飼育により、飽和状態に達した、やや持て余し気味になった時である。

七月三十日——、じっとしていても汗のふき出す暑

い夏の午下り、谷山久美子をのせた一章の車が、大阪十三公園<sup>じゅうさんこう</sup>の、舗道に面した木蔭で私を待っていた。

『昭和四十三年夏、山本、辻村の二人に調教を受ける』

「これが、カメラ・ハントの辻村様かと、眩しい気持で、貴方と始めてお目にかかりました。既に山本様のお考えの、あらゆる責めを受けました私は、ベテランといわれる、あなたにお目にかかり、今日は二人して私の体をそれこそクタクタにして、身も心もとろけさせてしまうのではないかと、激しい欲びを身内にジーンと感じていたのです。強烈な嗜虐心を持たれたお二人が、外面はなぜこうも柔和なんでしょう。あなた達からは、それこそ表面は毛筋程もS性を感じないのです。そのことをチラリともしたら、あなたは笑って、谷山さんからも偉大なるマゾヒストであることを感じませんよと仰有いました——」と彼女は、はにかんで笑う。

私の第一印象は、二十七才という年齢にしては、非常に若く見えた。どちらかというと大顔の眼鼻立ちの判っきりした女性である。私に一礼して、一寸、眼を細めたのは近視のせいであろうか——。



山本一章と数度出会って、谷山久美子という女性の、極端なマゾ性なり充分に飼育され尽した調教の数々をきいているだけに、一見して、ごくおとなしそうな平凡な女性であったのが、むしろ意外であったのである。

山本一章は心得たように、私を助手席に迎えると、すぐスタートした。行先は例の十三ホテル街——。私にとっては始めてのホテルであった。

男二人対女一人の組み合わせに、アベックホテルの案内嬢は、一寸とまどった感じであったが、私はよくあることで馴れている。彼の方が妙に照れ臭そうであった。

「一度、飼育ぶりを拝見したいですね」

という、やあと頭を掻いて、

「どうも辻村さんと一緒じゃ、やりにくいですよ。どうぞ御自由に——プレイ開始と共に奴隷になって、どんなことでも辛抱しますから、一度思いっきり苛めてやって下さい。私は今日は見学します」

彼は明るく笑って、私に一步、譲った。

「まあ、そういわないで、兼々聞いている、宣言と、牝犬になるところを見せて下さい」

「それじゃ、やってみましょう」

谷山久美子は早々にバスで体を洗って上ってくる、バスタオルを胸高に巻いて、洋間の片隅に膝を崩していた。

「おいで——」

手招きした彼は、

「じゃあ、プレイを始めるよ。」

いつもボクの時で作るようにやるんだ。今日は辻村さんにみていただくんだから、うんと覚悟しておくんだよ。よし、やり給え」

ニヤリと私に笑いかけて、私達は部屋の中央に立ちほだかる。

大きくうなずいた久美子は、パツとバスタオルをとって、全裸になると、ハンドバッグをあけて小さな包みを取り出し、それをもった俵、私達の立っている脚下にひれ伏した。

「唯今から谷山久美子は……」

例の宣誓を、澁みなく、スラスラと喋る。既に彼女の頬は紅潮し、言葉によって軽い昂奮を覚えていようであった。

耳にゴム粘土の栓、軽く異臭の漂う布ぎれ、鼻孔栓、絆創膏などをとり出すと、耳、鼻、口、眼の順序で、自からの五感を閉ざしてゆく。

正座して彼女は、ぐっと体を前に傾け、両手を背後で深々と組んだ。

「やりませんか——」

やや得意顔に彼は私にうながす。うなずいて手早く縄をかけ始めると、

「ああ、ゆるいゆるい。この女には思い切りきつく縛ってやらないと応えないんです。力任せに、ぎゅうぎゅうしめあげてやって下さい。却って、その方が欲ぶんですよ」

とアドバイスする。

私は手を止め、改めて、後手をきつくしめ直して、腹部がぎゅっとくびれる程に締めつけて、ピョコンと両乳房が突起するぐらいに





きつく胸縄をかけた。

私の縛った久美子を、彼は傍らから、ドンと上体を蹴飛ばす。久美子の体が後手を下にして仰向けに転がり、縛った両手をよじらせていたが、間もなく静止する。太腿や、腰の辺りに、暗紫色の百円コイン大のあざが、あちこちに斑点をつくり、白い肌にそれは対照的であった。

「相当、抓ったあとがありますね」

「いや、噛みついた痕ですよ。御覧なさい、あの足首を。黒く隈をつくっているでしょう。片足吊りしてやったら縄跡がとれなくなっちゃったんですよ。薄いんじゃないんですよ。先日会った時、プレイの仕納めのつもりで剃毛してやったんです」

山本一章は太いローソクを二本、片手に握って、器用にライターで火をつけた。

「一寸、開いていて下さいAを。今、流し込みますから」

左右の手に握ったローソクが傾くと、やがて蠟涙が尾を曳いて、みるみる堆積してゆく。久美子は熱痛に身をよじったが、声は洩れなかった。

引続きウテルスにまでも熱涙を傾注して彼の作業は終わった。私はぐっと開いていた彼

女の両足を離す。氣息奄々と女は激しく胸を浪打たせて、微かに喘ぐ吐息が洩れてくる。

数年前、山本阿津子という女性が、息詰まる刹那に酔っていたのを私は想い出した。久美子も亦、猿轡の微かな間隙から洩れる、ごく僅かな呼吸を唯一の頼りに、必死に息を吸いやや顔色を蒼褪めさせて、苦しげにのたうっていた。絆創膏と猿轡で蔽われた顔面に、

彼女の切迫の表情は隠されてはいるが、激しい胸の起伏が、それを裏づけていた。

その極限の状況に彼は、いきり始めた。いきなり両脚を屈曲させると、顔すれすれにまで両膝を押しつけ、胸と膝を縛り合わせた上両手へぐりと股縄をかけて、ポンと蹴ころがす。豊かに剥き出た臀部をパシリ、パシリと力任せに平手で叩きのめしていた。

彼は時々、久美子の胸をさぐっていたが、急にハッとしたように、俄かに叩く手をやめて、大急ぎで縄をとき始め、猿轡の縄を手早く解いた。その場にぐったりとした俛、久美子は、みじろぎもなかった。

軽い不安にかられて私もかけよる。  
「どうしたんです？」

「ええ、こうして時偶、失神するのです。頬ぺたを三つ四つ、ひっぱたいてやったら、

すぐ気がつきますよ」

彼は、じっとりと脂汗のにじんだ久美子の頬を、激しく掌のかたのつくぐらいに叩きつづける。

ウーンと高く呻いて、久美子は失神からさめる。睫毛が抜けやしないかと心配する私にお構いなく、彼はメリメリと両眼を蔽った絆創膏を引きはがす。

「ああ、あたし……あたし……」

久美子は絶句した

「牝犬が人間の言葉を吐くなッ！」

うなずいて、彼女は大きく息を吸い込む。  
「辻村さん、部屋を汚すといけませんからベランダへ出ましょう。ここはいい工合に、どこからも見えやしない。ビルの中の間隙に作った中庭なんですよ。ちっぽけだけれど」

そういって、縄束を握ると、彼は久美子の顔を掴んで引きずり出すように、低いサッシ窓を開けて、体ごと外へ押し出した。

アベック・ホテルで、こうした太陽の下でプレイするなんて珍しいことである。

続いて私も外へ出る。早くも彼は菱形のオースドックスな後ろ手縛りに掛かっていた。

山本一章は、如何にも手馴れたように、彼女の鼻をつまむ。久美子は喘いで口を開く。





ベランダの片隅のホースを引っ張ってくるよう彼は私に告げた。

いわれる通り蛇口にホースをつないで、チヨロチヨロと水を出して、一章に手渡す。開いた口中にホースの先を押し込むと久美子はむせて激しく咳き込んだ。

「さあ、のむのだ——」

眉をしかめ、久美子はこぼすまいとして、ホースの水をのみ込んでゆく。

いい加減水をのませてから、彼は久美子を押倒し、腰高のポーズにさせる。膝がじかにコンクリートに支えられ、かなり苦しげであるが、女は弱音ををはかない。ハッハッと悦

の溜息が大きく洩れるだけであった。牝犬と化した久美子は、一章の行為に一言も言葉を発しなかった。

一旦ホースをとめ、彼はホースの先にノズルを挿し込む。これで水は勢いよく噴射するはずであった。

腰高になった双丘へ、ノズルが陥没して、彼はしっかりと水勢に脱去しないよう押えつけると私に蛇口を

ひねるよう告げた。

「勢いよく、ひねって下さい」

うなずいて、ぐっと大きく開栓する。あつと腰高の姿勢が崩れるのを彼は膝で受止め、ぐっとノズルに力をこめて離そうとしない。膨大な水量が、久美子の腸内に充満していった。

「止めて下さい——」

大急ぎでとめる。はっきりと彼女の腹部は妊娠七カ月程度にふくらみ、みるも苦しげである。

「もうすぐ始まりますよ。傍観しましょう」嗜虐に疼くように、額の汗を手で横拭いし

彼は、私にひきつったような笑いを送ってきた。見守る私達二人の眼前で、ウンウンと久美子は、必死に呻き声を上げて、こらえている。

「立てッ——」

よたよたとよろめいて立ち上る久美子に、追い打ちをかけるように、

「大きく足を開くのだ」

じりじりと女は歩一歩、拡げてゆく。こらえきれぬ水液が、ポポタと落下する。

「ああ、もう……」

「よしッ」

途端に、車軸を流す勢いで、奔流となった溶解された水液が、激しくコンクリートの地面を叩きつけた。まざまざとまじる排泄物が、落下する水液に飛散し、軟弱になって遊弋している。数度、華やかな撥音が響き渡り、やがて落下は静かになって、ポトポトと残滓をした垂らせていた。

水液は斜面に向かって、排水溝へと流れて行く。彼の手が、いきなり久美子の体にかかると、まるで上手投げのような技手で、ドサリとコンクリートの、今しも水液のあらかた流れ去って、残滓物のドロドロした汚穢の中へ、ひっくり返した。俯伏せに倒れ久美子は



もがいて、両足をバタバタさせて、必死に顔をのけぞらせている。その顔を押しつけるように、彼の右足が女の頸筋を、力一杯踏みつけ、ぐいぐいと踏み蹴る。空間に臭気を撒きちらして、女体は汚穢にまみれてゆく。

「さあ、舐めろ、吸え——舌を出してベロベロやるのだ」

流石にやりかねて、久美子は齒を喰い縛っている。彼は私に何か耳打ちした。私がウンとうなずくと、彼はゴロリと女体を蹴返して仰向きにさせる。

どろどろの褐色の物質が、或いは濃く、或るところは、べっとりとして体へばりついていく。それに向かって私達は並んで放水した。キラキラと太陽の光をうけて、水液はさんさんと光り、小さな虹を描いて、女体にしづきをあげて飛び散っていった。まるで白昼夢のような目昏めく数十秒間——。何処に向かうのか、セスナ機が、轟音をなびかせ、かなりの低空で飛来していった。見えはしないと思っても、刹那どきりとして放水がとまる。

汚穢と凌辱の極限を、呻きと悶えで表現するだけで、久美子は口を緘していた。

独特の異臭に軽く眉をしかめたら山本章はあわてて蛇口の栓を一杯に開き、勢いよく

ほとばしる水で、バシバシと女体を叩くようにして洗い始めた。

じつとりと汗ばみ、褐色にまみれた肉体に水勢は快いのか、久美子はうっとり一章の水に身を任せている。叩きつける水勢で、肌はみるみる赤らみ、それは一種の打擲に似た効果を顕わしていた。

腰を高く抬げさせ、排出口に水しづきは長く飛び散って突きささっていった。

解きにくそうに、かたく締まった縄目をとくと、堅くなった縄束を彼女に渡し、

「よく洗って、乾燥させて、柔らかくしておくの。いいな、持って帰って次のプレイの時に持ってくるのだぞ」

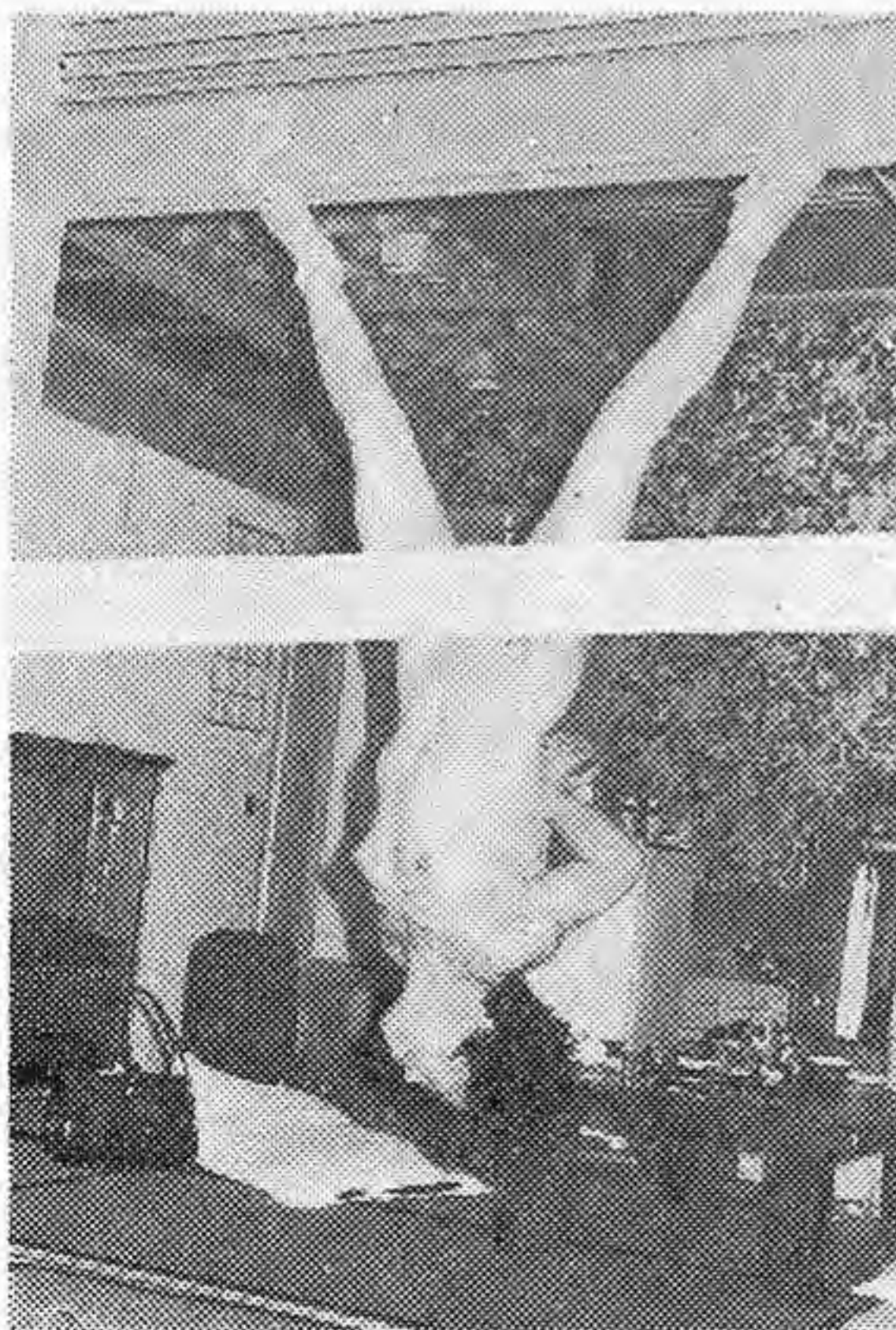
と、彼は命令口調で言う。大きくうなずいて久美子は、しずくの垂れた、軽く異臭のしみついた縄を手にした。

結局終始、私は傍観者に廻ってしまった。私に紹介し、いよいよ

バトンタッチとなると流石に長い日数飼育したこの牝犬に愛着が残るのか、それとも、飼育の数々を私に披露したかったのか、免も角、谷山久美子のその日の調教は、すべて彼がイニシヤティブを握っていた。

再度、バスで身を潔めて出てきた久美子に容赦なく一章の掌が飛び交う。

頸筋で念仏縛りにした久美子の髪を、いきなり掴みしめた彼は、逸り立った我が身に耐えかねたように、矢庭にずるずるとバスの方へ引きずってゆくと、小さい浴場の扉が勢いよくしまった。バスからくぐもり声の、一章





の叱声が洩れる。

五分、十分——私は衝動にかられ乍ら、二人の出てくるのを待つ。

私はこの時に、はっきりと彼の挑戦を感じた。彼はかくまで、マゾヒスチック・アニマルに飼育した谷山久美子を、判っきり私の眼前に誇示しなかったに違いなかった。彼の力



メラ・ルポと、私のカメラ・ハントが、その頃否応なく対立していた恰好であった。間歇的に発表する彼——。毎月、次々手を変え品を変えて発表する私——。そこに眼にみえぬライバル意識が生まれ、量よりも質とばかり、ここに一匹の牝犬化した、完全飼育の谷山久美子の極限の姿を、まざまざとみせつけたのであろうか——。

彼女の飼育に全精力を注いだ挙句、彼のカメラ・ルポが、彼女を最後として消えた時、私はその事実を後日になって判っきり確信したのである。彼が汗と湯で、ぐしょ濡れになったパンティ姿で、虚脱したような足どりで部屋に戻ってきたのは、十五分後のことであった。

「いやあ、御免なさい——つい気が昂ぶっちゃったものだから……」

「分かってましたよ。これで？」

と、私は自分の唇を指さすと、照れた笑いが拡がって、微かにうなずいた。

「辻村さん、やりますか——」

「いや、どちらでも……山本さんはもう気が抜けたのでしょうか」

「正直いって……」

「じゃあ、いいんですよ。紹介してもらった

のだし、執れ私は私の方法で——」

「そうでしょうな、貴方は私のように、眼隠し、猿轡、耳栓など、すっかり顔を蔽ってしまふことは好きじゃない。所詮は趣味の違いでしょう」

「いや、それはそれでいいんじゃないでしょうか。真のプレイヤーなら、そうするでしょうね。私の場合、いつもハントのフォトが頭にチラつくものですから、つい顔を曝すようになる。苦悶の表情や、絶叫の呻きも、私にとっては刺激となって、プラスするんです。あなたは自分のプレイする姿を相手にみられたくないから、ついそうなるのでしょうか」

「仰有る通り、奇妙に照れ屋なんです。バスで行なったことを、貴方の眼前では恥かしくて出来ないんですね」

その時、久美子の何となく吹っ切れぬ裸身が現われる。私達の話は中断した。フト白けた空気が軀の中を吹き抜けていった。

夏の日はまだ高い。プレイは二時間足らずである。彼は早々に部屋を片づけ始めた。

十数分後、私達三人はホテルを後にした。大阪駅近くで、私と彼女を降ろすと、あとはどうぞ御自由にといわん許りに、軽く手を振って、それが癖の、パイプに両切のピース



を挿して啞え乍ら、ニヤツと笑って車をスタートさせていった。

何となく取残された感じで、並んで駅の構内へ入り、時刻表をみると、岡山通過の列車が、もう二十分もすれば到着する筈だった。

「いつも、何時頃、帰るのですか？」

「その時によって違うのですが、大体夕暮れになります」

「じゃあ、せくともありませんね。一列車おくらせて、軽く中食でもしてゆきましようか」

ときくと、一寸考え込んで、

「別に急ぐ用もないのですが、折角間に合うのですから、今日はこれで失礼しますわ」

「いやにつれないのですね」

「いえ、辻村さんにどうのってことないんです。唯、私むしろように淋しいんです。分かって下さるかしら、この気持」

「分かりますよ——。正直いって、今日の私は邪魔者でした。一章さんも貴方も、心底までプレイに耽溺出来なかった。そうなんでしょう？」

微かに、うなずき返す。

「所詮、一対一でないと、嗜虐、被虐の極致は味わえないかも知れませんか」

「かも知れませんか。あの方、これが最後だと仰いましたのよ」

山本一章との、あっけない別離が、一入に彼女の心をしめつけていたに違いなかった。

「あの人、お風呂の中で申しましたの。これからは辻村さんに飼育してもらって……そんなものでしょうか、男心って——」

「いや又、きっと貴女が、恋しくなるでしょ



う。しかし毎月二回のプレイという負担が、彼を少々疲れさせたようです。彼の嗜虐の想念も出尽したのでしょうか。日が経てば新しい構想が湧いて、きっと又、求めてくると思いますよ」

「あの方、謎めいた方でしたわ。これだけお交際いしながら、遂々あの方の正体が分からずじまいです。おところもお仕事も、そして本当のお名前も——お便りは、いつも局留でした」

「私だって……。彼は、よくよくの秘密主義です。いつだって、用件は彼から電話があるのです。私からの場合は、編集部を通すより仕方がない。その奇クの方すらも、近頃はあなたにかかり切ってか、御無沙汰勝ちだそうです。いいじゃありませんか。それで」

「ええ、あきらめていきますわ。でもプレイを通じて、私の一生、忘れられぬ方ですわ。辻村さん、私を可愛がって下さる？」

「さあ、彼ほどの根気と熱意はないかも知れませんが」

「フフ、お忙しいのね。ハントや何やかやで——。でも私みたいな女でもよかったら、お気に召したら、いつでも御連絡下さいね。生理以外なら、万難を排して参ります。生理で



もよかったら、私は構いませんのよ」

淋しげな瞳が、チラッと遺瀨なくまたたいで、彼女は余り私に期待出来ない一抹の不満をのぞかせ、丁寧な頭を下げると、雑踏する中央ホームの改札口へと消えていった。

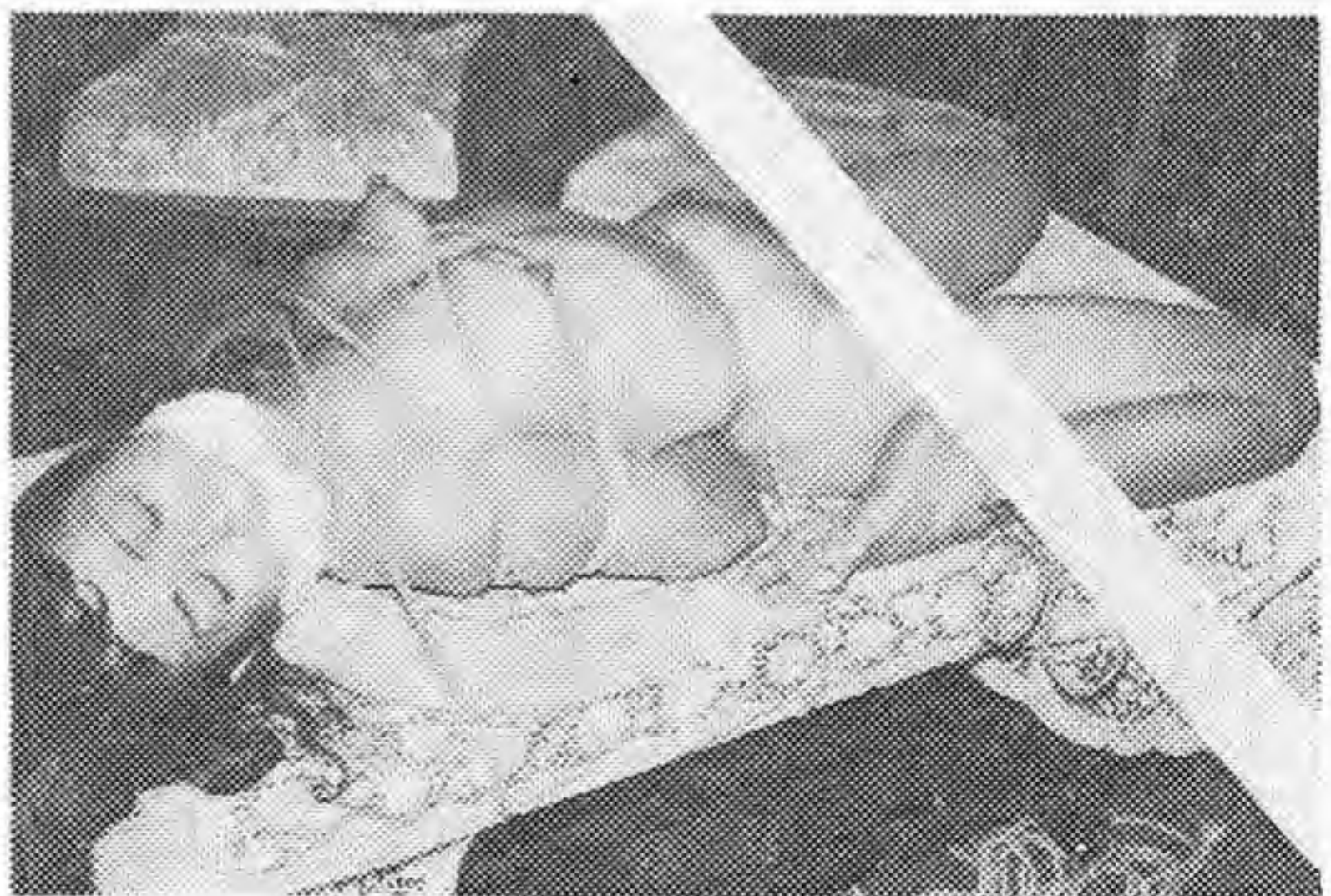
『昭和四十三年十一月結婚し愛知県へ移住。同年十二月辻村隆と単独のプレイ』

「結婚に踏切った今、こうして辻村さんとお目にかかってプレイするのが、幾分、気が咎めるのです。そのくせ、私のお知らせした連絡場所にお便りのあった時、もう矢も楯も堪らず遂々出て参りました。私って悪女だと思います。」

山本章さんとの別離が、私を結婚に踏切らせたといっても過言ではないのです。あのお別れした日から、私は魂の抜けた人間になりました。あの方が私の心のウェイトをどれほど占めていたか、つくづく知りました。まるで恋患いみたいに、何も手につかず、ぼんやり考え込んでいる私に心配して、両親は結婚させたらと、あちこちかけずり廻っていました。お見合して話ができ、トントン拍子に進んでも、まるで他人事みたい——。私みたいな女でも希んでくれるのならと、その気になって、好きでも嫌いでもない三十四才

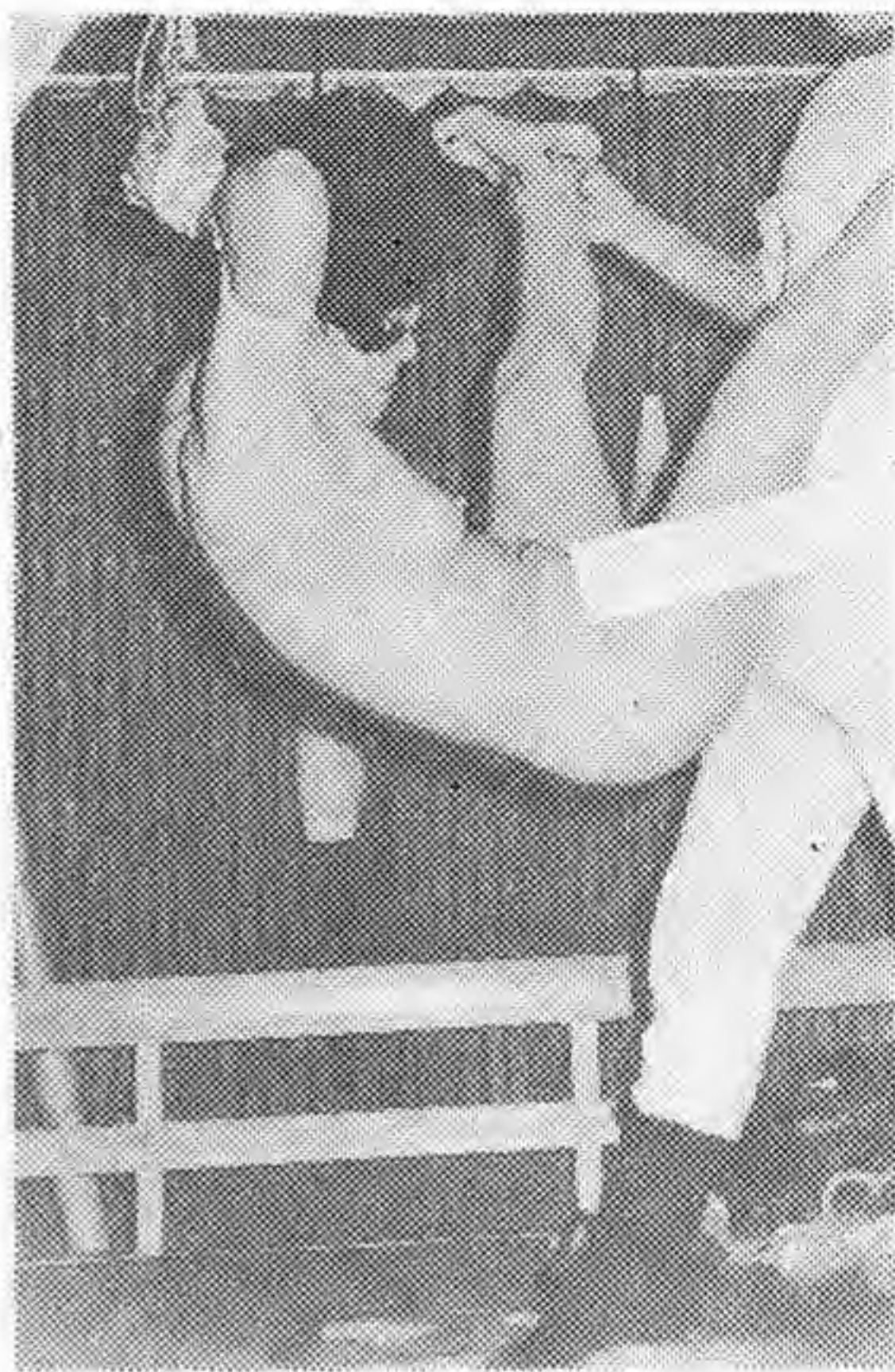
の、一度結婚に失敗したことのある方と一緒にになりました。私も段々年をとって行きますし、いつまでも独りでいるのも不自然と思っただからです。でも矢張りこの結婚は失敗でした。夫の会社の都合で、結婚したら愛知県の豊橋の方へ転勤することは既にきまっています。自動車関係の仕事で、社宅での二人切りの生活は単調でした。私の体はどうしてもその時、燃えないのです。それには二つの原因があります。一つはあの方によって飼育され、強烈なプレイの数々を知って、単なる場合には何一つ欲びが見出せなかったことと、も一つは夫が早漏なのでした。それはもう、呆気ないので。そうでなくてもノーマルな夫婦生活では燃えない私が、も一つ悪い方に拍車をかけているものですから、どうしようもないのです。憂々たる日々が過ぎていったのです。

夫は自分の体の欠陥を知っていて、種々治療に努力しているようですが、一向に効めもないようです。私に対して、何とはなく劣等感を抱いているようです。真面目な人ですが、人一倍、それを期待していた私にとっては、致命的な絶望感でした。何の性知識もなく、ましてや、激しいSMのプレイなど尚更しら



ず結婚した女性なら、或いはそれが普通だと思いかも知れません。いえ近頃はその種の本が沢山出廻り、女性週刊誌などもよく書き立ててますから、知ってるかも知れませんがね。私の場合、その反動は、むしろ人の数倍も大きく、失望のみが体をしめつけていったのです。山本さんは、私の移住は御存知ない





のです。思い余って辻村さんにお便り差上げましたが、やはり夫のある身なので、直接の私宛の手紙は憚られますので、編物の手内職を頼まれているお家を連絡先にしました。気さくな未亡人と子供一人の二人暮らしで、その方も結構セックスをエンジョイなさっておられ、思い切って私の性向を告白して、味方になっていただいたのです。編物の出来上りを届けにいつては、辻村さんか山本さんのお便りを一日千秋の思いで待ちました。ひょっとしたら、この由紀未亡人は、軽いそねみで手紙を隠しているんじゃないかと疑ったくら

山の方へ便りを出したが、返事のない俛に、私は矢張り彼女は山本一章に心を奪われているのかと、がっかりしたのを覚えている。多分、両親によって握りつぶされたのであるう。

彼女が豊橋に移住したことを、その時、私は始めて知った。彼女の宛先は書いておらず豊橋市石巻町の大倉由紀様方宛に連絡してくれという手紙に軽い不審を感じたのである。内容は左記の通りであった。

八すっかり寒くなってきました。長らく御無音に打過ぎ、勝手気儘な女だと、さぞか

いです。でも、やっ  
と辻村さんのお便り  
をお受けして、今こ  
うしてお目にかかれ  
たのです。嬉しいで  
すわ、私……」

と、眼を輝かせ  
て、谷山久美子は飲  
ぶのであった。

彼女からヒョッコ  
リと便りのあったの  
が十二月の初旬で、  
それまでに一度、岡

しお怒りのことと存じますが、何卒おゆるし  
下さいませ。今回わけあって豊橋の方に移り  
ました。私の持つて生まれた願望はもだしが  
たく、日と共に激しく燃え上り、一度、心ゆ  
くまでこの奴隷を苛めてやってほしいのでご  
ざいます。山本様は、私が移ったことは御存  
知ありません。こちらから局留で便りしまし  
たが、何の返事もなく、恐らく御存知ないの  
で、とりに行かれないのだと思います。今は  
辻村様が唯一の頼りでございます。この哀れ  
な奴隷めを、思い切り可愛がってやって下さ  
いませ。どんな激しい、苦しい辛いことにも  
耐えられる自信がございます。始めてお目に  
かかった日のプレイは満足感三〇%でした。

腸内の注入と排泄と汚じよくは、私のM感覚  
を幾分刺激しても、好むものではございませ  
ん。やはり私は、ひしひしと縛られて、思い  
きり苛められる方が愉しいようです。セック  
スの不満もうっせきしております。ちょっと  
事情があつて、私の住所はお知らせ出来ませ  
んの、左記の人のところへお便り私宛にお  
出し下さい。たのしいお返事を一日千秋でお  
待ち申し上げます。尚、山本様御連絡あれ  
ば、恐れ入りますが、是非々々、左記住所を  
お知らせ下さい。くれぐれもお願ひ申し上げ





ます。

悩める女奴隷 久美子 V

数度の往簡が頻繁につづき、師走の二十五日——、世間は正月前で慌しいというのに、私は遙々新幹線で名古屋駅まで出向いた次第であった。

駅前の食堂で、私と久美子の会話が続く。「それでもダンナに内緒でよく出てこられましたね」

「豊橋へ来て以来、始めての外出ですもの、一度、名古屋にいるクラスメートに会いたかったら、快く許してくれました。夫は

午後六時半頃いつも帰宅しますので、それ迄に帰っていたらいいのです」

「じゃあ、余りゆっくりも出来ない」

「苛めていただけますか？」

声を潜めて、嬉しそうに云う。

「そのつもりで来たのですよ。」

いいでしょう」

「勿論ですわ。毎日、夢ばかり見ておりました。辻村さんに悪いけど、夢の中で辻村さんとプ

レイしているくせに、そのお顔は山本さんになっっているんです。御免なさいね」

「私へのイメージが薄いからでしょう。じゃあ出掛けましょう」

天婦羅定食で、軽く銚子一本をあけ、微かな酔い心地で席を立つ。

タクシーに乗込んで広小路を走る。めざすは、かつて利用したことのあるオリエンタルホテル界隈であった。

クリスマス・イブの翌日だけに、何となくこの辺りは雑踏している。

二人なら、ホテルはどこでもよかった。テ

レビ塔を左にみて、適当に下車して一寸外れと、もうホテル群が乱立している。

その一軒、消えたネオンの字がGホテルと読みとれる。

何階か分からない。案内嬢の誘導で狭いエレベーターに乗り込み上昇する。

二間つづきの部屋は広く、珍しく電気自動あんま器がおいてある。それをチラと横目でみて、早くも私に一つの構想が浮かんでいった。部屋に入るなり彼女はコートを脱ぎ、帯を解き始めていた。とき色の縮緬の羽織が、若妻らしくなまめかしい。

あわててバスの湯を満開にする。彼女はもう一刻も早く被虐の境地に耽溺したがっていた。

「ご一緒にお入りになりませんか？」

「構わないんですか？」

「縛って入れて欲しいのです——こんなに早くいけないでしょうか」

彼女は持参した提袋の底から、桃色のビニール紐をとり出して私に差出した。

早くも機は熟しつつあった。

彼女は提袋の中のハンドバッグから、小さい紙包をとり出し、まるで宝物のようにその包みをといて、ゴム粘土、絆創膏など、例の



山本一章好みのものを机に並べる。身についた被虐願望の、牝犬のさがであった。

「お使いになるでしょ」

「いいんですよ、私は彼じゃないんだから。さあ、いらっしゃい」

ビニール紐をしごいて、呼びよせると、彼女は裸身をちよっと、寒そうにかがめて近づいた。

夏のさかりから冬の始めへ季節は移って、五カ月振りの会合に、私の胸は早くも疼き出していった。

ぎゅっと肌に喰い込むぐらい、細いビニール紐で、きつく両手を後にしばり、余った紐で胴をしめつけ、簡単にとめる。

温まらぬ部屋の空気に震え乍ら素早く裸になって、追い立てるようにしてバスへ飛込んでゆく。

適当の湯加減に人心地がつき、私は背後から久美子を抱きしめる。もたれ込んできた彼女の体を抱えた俤、唇を求めてゆく。甘えた声が、ねっとり響く。

「辻村さんは私を奴隷になさらないのね。どうして……」

「その方がいいのかい」

「ええ、あなたの奴隷にして……」



「よし、してあげよう。さあ、上るのだ」  
タイルの上に正座させ、私はその前に立ち  
はだかる。

「さあ、足の指先から順序よく、お前の舌で  
潔めてゆくのだ」

「あい」

いそいそと頭を下げ、ペロペロと舐めり出す。多少、擦ったいが、軽い快感が、私の気分を盛り上げてゆく。膝から腿あたりまでは前哨戦——。目的はその上にあった。

彼女はよだれを垂らし、必死に奉仕をつづけていた。

妖しい快楽に憑かれて、私はハッとする。

この俤終われば何の事はない。名古屋へ来た目的は何か一つ行なわぬうちザ・エンドになりそうであった。

私は、いきなりザブリと湯に飛込み、心鎮めると、裸身にしづくをした垂らせ、濡れた平手で、ピシャリと久美子の頬を、したたかに撃った。あっとのけぞる顔に更に一発、見舞い、女の体を抱えるようにする

と、パンパンパンと、かなり景気のいい音をバスルーム一杯に鳴りわたらせて、その豊かな臀部をうちつづけていた。

×

×

×

谷山久美子の願望をエスカレートさせて行くには、先ず何をさしおいても、叩いてやることであった。既に夫のある身の彼女にとって縄鞭や帯革は、まざまざと数日も痕跡をとどめるので、平手打ちを希望するのであった。

その平手打ちが激しければ激しい程、彼女の悦虐は昂まるのである。

冷蔵庫の傍らの電気あんま器の腰掛けに、



左右の手をしっかりと縛りつけ、その手首に太腿を密着させて縛ってある。両脚は高々とあげさせて太いロープで繋いである。

十円コインを投げ入れると、背の拳大の四個の電動揉器が激しく活動を始める。身動き

出来ぬ女体に、それは強烈な圧力となつて、激しく襲いかかった。

肩を腰を、肋骨をぐりぐりと非情の拳は容赦なく押ししだいてゆく。部屋一杯に、けたたましい絶叫が流れ、私はガクガクと揺れ動く頭部をしっかりと押えて、あわただしく猿轡を嵌める。嵌めても、くぐもりの叫喚は雄たけびのように部屋に充満する。テレビの音声を高くして、ぐいと開ききつた臀部の前に坐りこんだ私は、心ゆくまで震動する女体の生々しさを、この眼でたしかめながら、力一杯の平手打ちが、間断なく炸烈する。

三分間——揉みしだかれたフラフラの女体が、やっと鳴りをひそめる。無数の掌の跡が、まざまざと双丘に真赤なマダラ模様を染め

上げている。

叩いた私の掌の方も真赤になって、ヒリヒリと痛みを感じていた。いきり立った私は、一本の縄をとり上げると、彼女との約束ごとも忘れて、相当な力をこめて、発止としばき

上げたのであった。五指がのけぞって虚空を掴む——。動けぬ首を、いやいやとふる彼女に、更にもう一発、強烈な縄が飛んでいた。みるみる浮かび上る、みみず腫れ——。

そのくせ、身悶える女体の桃源の表情に、にじみ出る愉悦と恍惚のしたたりを、私はまざまざとみた。

「どうだ、牝犬！ 少しは、こたえたか」

わざと、ふてぶてしくいうと、微かに首を振り、顎めた眉に判っきりと悦楽が流れていた。この強烈な電気責めは、久美子なればこそ果たし得た試行錯誤であった。満足げにうなずいて縄をといてやると、一息入れる間もなく後

手に縛って、ひきずるようにして柱に上半身をくくりつけ、ぐいと両足をもち上げ、柱を挟んで縛りつける。これも又、臀部むち打ちには恰好のポーズであった。

痛くなつた平手打ちの掌に僻易して、パシリパシリと縄鞭の洗礼を与えてやる。

山本一章によって飼育され尽した強靱な臀部の皮膚は、少々のむちぐらい、陶酔の甘いむちに過ぎず、久美子は猿轡の奥で、快樂の吐息をもらして欲びに体をのたうたせていた。

この調教が終わると、両の柱への開股図の展開である。両手足を一緒に束縛して、これ以上、開ききれないまでに思い切つて広げる。

凡そ被虐の極致が寸分の容赦もなく、この牝犬の肉体に苛烈に加えられてゆく。それは筆にすることを憚る行為であった。このポーズをもってすれば、誰しも働かせる想像を、私は現実の牝犬に試していたのである。

責める方の私が反って草臥れてくる——。

一旦、解きほぐし小憩を与えようとする、この牝犬は、私の膝にじゃれつき、寸暇も惜しげに被虐を求めて、眼で訴えてくるのであった。一章の調教が完璧だったのか、プレイ





の間、牝犬は人間の言葉を発せず、唯、叫喚と呻きと喘ぎと悶えで、すべてを表現していた。

「まだ責めたりないのだな」

女は、はっきりと大きくうなづく。

直立させて、両手を鴨居につり下げ、左右の足首に縄を巻いて大きく揺らして行く、爪先すれすれに直立していた体が開股と共に、両手が吊られた恰好になる。

牝犬の調教にふさわしいよう、一本の縄で眼と口を雁字搦目にしばってしまう。不安定にぶら下った体は前後にユラユラと揺れる。

平手が臀部のみでなく、全身にピンピンと鳴り響いた。

ライターに点火し近づけると、その熱さに体がビュクンと宙に躍り、夢中でくねる。何かが焦げる異臭が微かに漂う。

乳首をひねり上げると、牝犬は耐え切れぬ呻きを洩らして、上体が揺れた。

牝犬をどう料理しようと、すべては私の意志に左右されていた。

叩き疲れて、ヒリつく掌に、私はやけっ八のように、牝犬の体を振り上げ、ひねり廻しこぶしを堅めて小突き廻していた。

このプレイにやがて飽きた私は、時間をか

けノロノロと縄を解いてやる。吊り下った手首の縄目が、痛々しい程深々と喰い込んでいた。

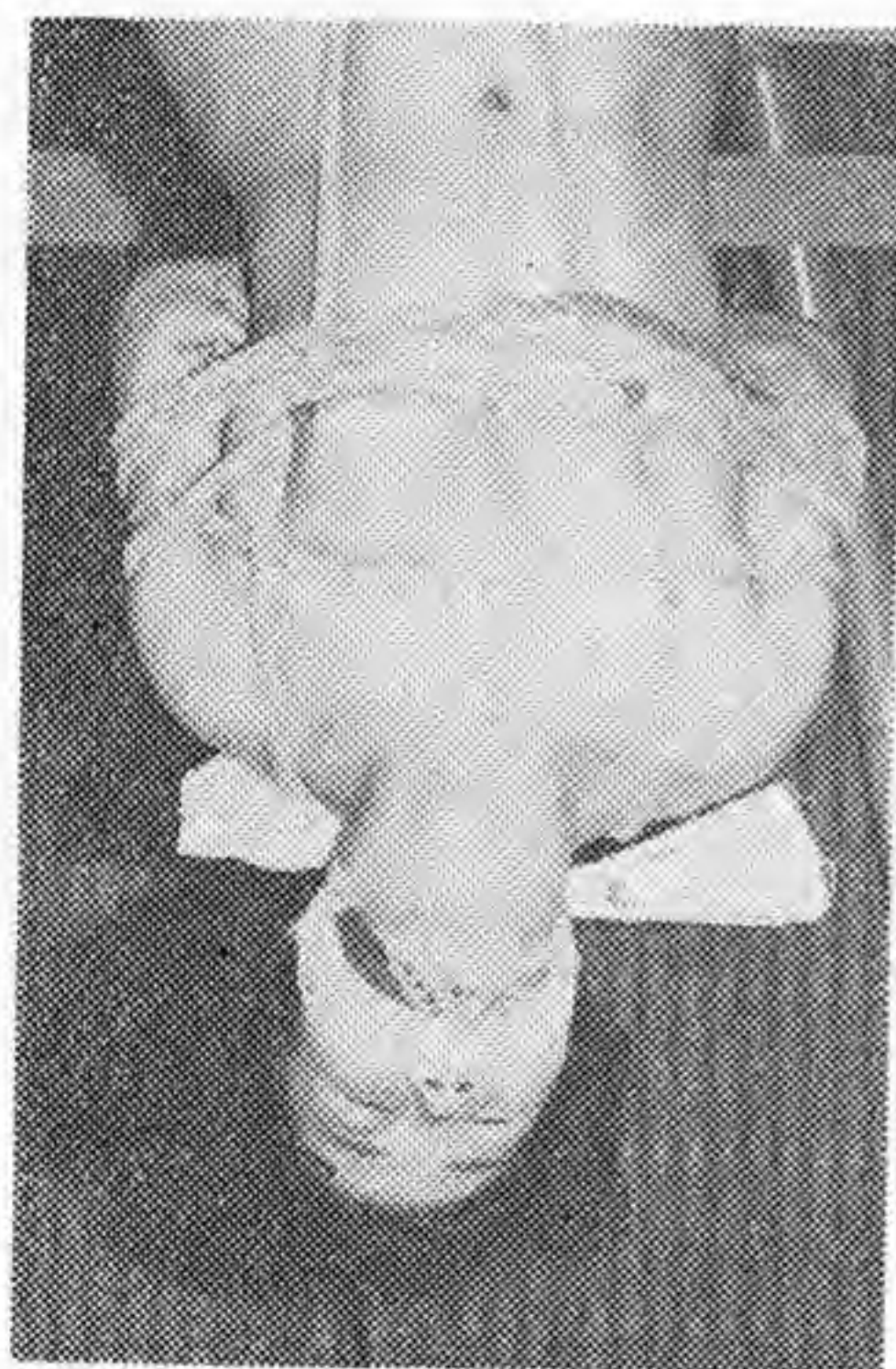
肩で二の腕をしめ上げたすきにかけた、後手縛りは、いつもの斑ら縄で試してみた。この程度の緊縛は、久美子にとって茶飯事にも等しい。縛り終わって髪の毛を掴み、平手でパシリパシリと頬をぶってやる。キリストの如く、この奴隷化した牝犬は従順に、左の頬をうてば、次に右の頬を差出してきた。くつきりと手型をつけて、牝犬は愉しそうに莞爾と笑う。ぐいと押し倒して、懸案の逆吊りにかかる。

一章からきいている逆吊りの方法は、久美

子に限って可能なのである。躊躇うことも、斟酌してやる必要もなかった。苦痛が強ければ強い程、彼女は更に悦虐の陶醉に浸るのであったから――。

無雑作に足首をそれぞれ縛り、先ず左足の縄を鴨居に抛擲する。四十八キロの女体はかなり重い。私はその太腿のあたりをしっかり抱え、片脚に全力を籠めてぐいぐいと吊ってゆく。落下せぬよう必死の意気込みで何とか結びとめる。自由の脚が宙に浮いて屈折している。これは片脚吊りである。流石に牝犬は苦痛の呻きを噛み殺して、キリキリと奥歯をかみならしていた。

残る片脚はラクであった。ぐっと開いて鴨



居に結べばよかったのである。

それでもこの作業で、私はぜいぜい息を切らし、大きく喘いでいた。

くるぶしに縄がかみ、足首に喰いこんでも久美子は逆吊りの俚、体をかすかに揺れるが俚に任せていた。

この巧みな密室の正面の襖を開くと、大鏡が嵌め込んであった。



牝犬に努力の結晶の逆吊りをみせてやるべく、襖を押開く。久美子は今、我が逆吊りの極限の責苦の姿を、脂汗をにじませて、恍惚にうるんだ瞳で凝視していた。

既に牝犬の顔面は、逆流する血漿で真赤に充血し、弾む息は切迫して激しくなりつつあった。

この最高の状態に、錦上華を添えるべく、黄金の炎が、Yの接点でゆうゆうと、またたく。それは被虐を願望する牝犬の最高の状態であった。

いつものカメラ・ハントなら、優に一回分にも匹敵するこの素晴らしいプレイに、私はかなり駆足である。諸賢はそれを不思議に思うかも知れない。しかし、私が、かくも強烈なプレイの実況を、駆足にさせたのは、この一対一のその日のプレイが、その後につづく数々のプレイに較べたら、ごくありきたりなそれこそプレイの前哨戦か、前夜祭ぐらいの程度であったことを久美子の怖るべき超一流の肉体から、知り得たからであった。ここで紙数を費やせば、その後に起こるプレイの状況は、いくら書いても書ききれなかったからである。

もう書こう、もう書こうと思いつつも、会

う度毎に、被虐の感度は増し、前回のプレイが色褪せてみえる久美子の肉体の演じる妖しさに、つい書きそびれ、前後六回に亘るプレイの一つ一つが、優に、どのカメラ・ハントよりも強烈であるだけに反って温存してしまつたのであった。

数ある女性をハントした中でも、谷山久美子に勝る被虐を甘受する人は、ついぞなかったといつてよい。凡ゆる被虐を快楽に変じ、かくも欲喜する女性は谷山久美子をおいて見当たらなかった。その点、彼女はマゾ女性の超一流のナンバーワンの存在であった。

あの激しい山本一章を堪能させ、かくいう私自身に、今日の日まで筆をとらせなかった彼女は、いわば被虐の権化のようであった。苛めつくし、責めつくして、草臥れるのはいつも私の方であり、かつての山本一章の方であった。そのタフな肉体の根源は何処に潜んでいるのだろうか。

逆吊りの女体に、間断なく乱れ飛ぶ縄鞭、容赦なき張り手、金色の熱蜇はゆらめいて谷間にしたり、さながら地獄の如き責苦の合間にも、呻吟し、叫喚する悲鳴は甘く、恍惚を奏でていた。

しかも尚、降ろした女体は陶醉に呻き、あ

くことなく、その猥らな眼は、次の緊縛を要求していたのである。

全身を滅茶苦茶に縛り上げ、散々縄でぶちつづけ、大型パイプを牝犬に装填して、私は流れる汗を落とすべく、バスにおもむく。正直いって責めあぐねて、些かお手上げの状態で、独りバスにつかっていた。

私の人並みの情欲は、強烈きわまるプレイによって完全に昇華していた。逆吊りというエネルギーの酷使が、私の肉体を限界に迫りやっていた。それは、私の年令をもってしては、もはや限界ギリギリのプレイであった。ゆっくり体を休め、バスから上った時、布団をまくり上げたマットレスの上で、牝犬はもうこれが幾度目かの、襲い来り、去り行く激情の、絶え入りそうな呻きを挙げつづけていたのである。

ものうく響く、パイプの微かな音が、空々しく私の耳朵をうった。

山本様のプレイとは又趣きを異にした、貴方様の数々のプレイに、終始夢心地のひとときでした。もう辻村様は、私の心に一生灼きついて離れないでしょう。このメス犬を、どうぞ又苛めてやって下さいませ。それが今の私の唯一の生甲斐でございます。





す。

## 貴方様のメス犬

谷山久美子より▽

『昭和四十四年一月より四月まで、辻村隆とプレイに耽溺。四月下旬佐久間輝を紹介さる』

次々と現われるハント女性の合間を縫って一月より四月までの間に、前後五回、私は彼女とプレイに耽溺した。そのことは、『楽我記』にも時々散見されている。

考えてみますと、私はこの世に、苛めてもらうために生まれて来たように思われます。哀れな女をガツカリさせないで下さい。あの日のプレイは、久し振りに私に七〇%の快楽を与えました。

山本様よりお便りありましたが、今の処お忙しいそうです。それを口実とうけとれない女でございます。あの方にも、貴方様にも、夢よもう一度――。これが、偽らざる私の心境でございます。悪女の深情けとお笑い下さい。別便で名古屋名物のウイロ、僅かでございますがお送り致しました。御賞味下さい。その些少事が、私の欲びの表現でございます。又の日をぜひ、ぜひ、お願い申しあげま

いっても、数枚とるうち、彼女の真性マゾ性の魅力に惹きこまれ、それこそカメラ抜きのプレイに走ってしまうのである。

二回目からは、私の時間の都合もあって、彼女は都度、上阪した。新幹線を含めて前後数時間とられるので、彼女は私と会うとそれこそ、食事する時間も惜しげに、寸暇を惜しんで、只管にプレイの雰囲気没頭するのであった。

五回のプレイフォトの断片を掲載すれば、枚挙に遑がないので、省略するより仕方ない。牝犬は咆哮し悶絶し、痴態を展開して、マゾ性の享樂に耽りきった。音を上げるのはいつも私の方で、ともすれば時を忘れて忘我の境地を彷徨する彼女を、正気に還らせるのが私の役目みたいな習慣になってしまっていたのである。

私は谷山久美子に対して、日頃の持論のアイ・ラブは感じていない。所詮はプレイの対象として、心を燃焼させて来たつもりであった。しかし、一人の女性に対し、余りにも度々プレイする私に、妻は或る種の拘泥を覚えたことは慥かであった。心ならずも、彼女の激しい要求のままに、度々デートし、しかも深追いしていることは、日頃の私らしくない

余りにもプレイが激しきが故に、反ってカメラ・ハントを躊躇させていたのが真相である。書けば余りにも生々し過ぎ、全文露出気味のものにならざるを得なかった。

要請は、いつも谷山久美子の方からであった。衝動的にかかってくる電話に待てしばかりなく、私とても職業を持っている身であれば、そうそう彼女に時間を合わせてもおられない。それでいて、五回のプレイタイムは、やはり、私をして、あの強烈きわまる彼女の妖しいマゾ性に強く惹かれたためであろう。又してもという感情が、私にカメラを撮る興味を失わさせていった。習慣的に持参して



態度であっただけに、寛大な妻も、やはり女としての疑惑の眼を向け始めたのである。はっきり離別せねばならぬ日が近づいている事を、私は妻の態度で悟った。

激しく増す彼女の、頻繁なる外出と、肉体の損傷に、彼女の夫はどう感じとっているのだろうか——私には、それも不思議の一つであった。今以て、彼女の住居は分からないう。こちらからの連絡は、例の未亡人を通じてである。しかし私の方の電話を知らせたため、彼女の方からは自由にかかってくる現況であった。

家庭の平和を乱したくない困惑と、これ以上のプレイが、万一、生命の危機を生じてはという、昂進してゆくマゾ性への危惧で、私はフト不安にかられるのであった。山本章が彼女の許から去っていったのも、それが原因であるようにも思え、彼が谷山久美子との耽溺のプレイに没入して以来、筆を絶ったのも、私が彼女のプレイに対して、躊躇したのと同じような想念をはらんでいたように思えるのである。彼は谷山久美子に、人智の凡ゆるプレイを試みて、その結果、嗜好の飽和状態に陥り、他の女性を求めて、ぬるま湯のようなプレイをするバカらしさに、もうこれ以

上のプレイは出来まいと、潔く放棄したようである。

私の心も当然そのように働いていた。谷山久美子に可能なプレイの半分も、いや十分の一も実施出来ぬのに、ヒイヒイ悲鳴をあげられたり、羞恥にのたうったり、嫌悪の情を示されたりされては、幾度かカメラ・ハントの煩わしさに抛とうとしたか知れなかった。

世にも稀小価値の彼女の存在で、数多のハント女性との行為は、正直いって蔭がうすれ情熱が湧かなくなるのである。

しかし一方「過ぎたるは及ばざるが如し」という格言通り、余りにもマゾ性強烈をきわめる彼女に、時によっては辟易し、自から行なっておき乍ら、その残酷性に自己嫌悪に陥り、眉をしかめることも屢々であった。

同好者最大のスポンサー、夙川の会長のご好意で、VTRを拝借し、浣腸の実況を録画し、排泄するさまをまざまざとテレビにうつし出して、流石老練の会長をウームと唸らしたのも、その一コマであった。



或いは応接セットの机上に縛りつけ、数時間、そのポーズ一つで、ビールをのみ乍ら、女体を肴に、いびり責めに終始した昼下りもあった。私が髪の長い人が好きだと、チラリ洩らすと、忽ち、ヘアピースを買求めて附毛で、長き黒髪を乱して呻吟する牝犬の協力ぶりであった。

彼女とのプレイは余りにも多過ぎるのである。もう私の原稿は七十枚をオーバーしている。それでいて、まだまだ書き尽せそうにもない、豊富なプレイ報告の資料が溜っていた。

私がいつかはプレイの時にと、あれこれ考えていた小道具は、この牝犬に対して、殆ど使用され尽したといっても過言ではない。





太い針金で手足を縛り、ペンチでひねってやっとな止め、熱湯を全身に撒きちらしてもみた。クリップで全身を挟んだ時もある。

洗面器二杯近い石鹼湯を、せっせとエネマで注入し、その忍耐の限界をたしかめるべく蛙腹に膨れ上った腹部をきつく巻き上げ、肉塊がぶくぶくと縄目よりハミ出し、さながら太いボレンスハムのような盛り上りをつくった上、接着剤のポンドを流し込み、更にその上から、梱包用の幅広い粘着テープを貼りつけ、彼女に白眼を剥かせて、悶絶寸前にまで追いやったこともあった。

全身を電線のビニールコードで、力限り縛り上げ、粘土の耳栓、鼻栓をさせた上、粘着テープで両眼を蔽い、ポリバスの底に仰臥させ、口に一本のビニールパイプを咥えさせて水と湯を交互に噴出させ、遂にはすっかり全身が底辺に沈み、ゆらめく湯の底に長々と伸びた女体を、僅か一本のビニールパイプで呼吸を続けさせるという、思いきった

試みも行なってみたのである。

偶々一度、生理日に当たった時、それを承知で私とデートした彼女に思い知らせるべく、真赤に染まって、たっぷりと生理の鮮血のしみ込んだ紐つきタンポンをとり出し、それを口腔に押し込み、強いバネの書類用のクリップ二個を唇に挟んで、散々ぶちのめしてやったこともあった。

谷山久美子が、世にも珍奇なマゾヒスチック・アニマルなら、かくいう私自身も、野獣の牙をむき出しにした一匹のサジスチック・アニマルと化して対決した。

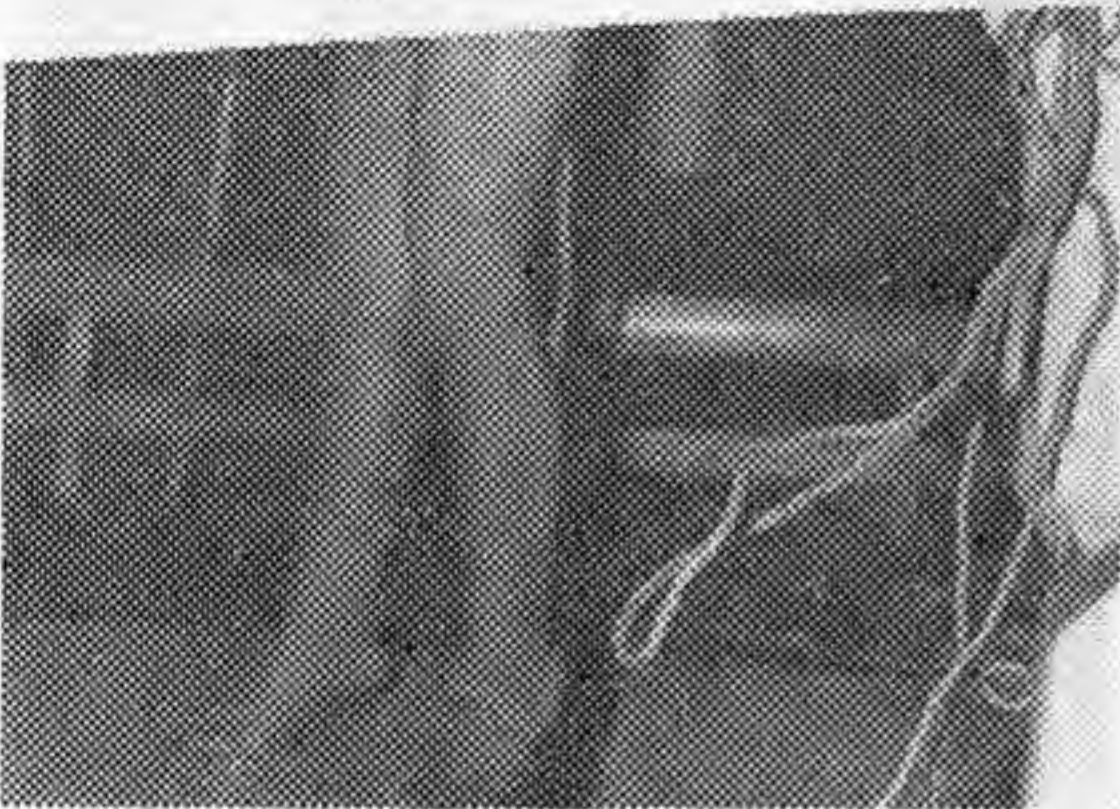
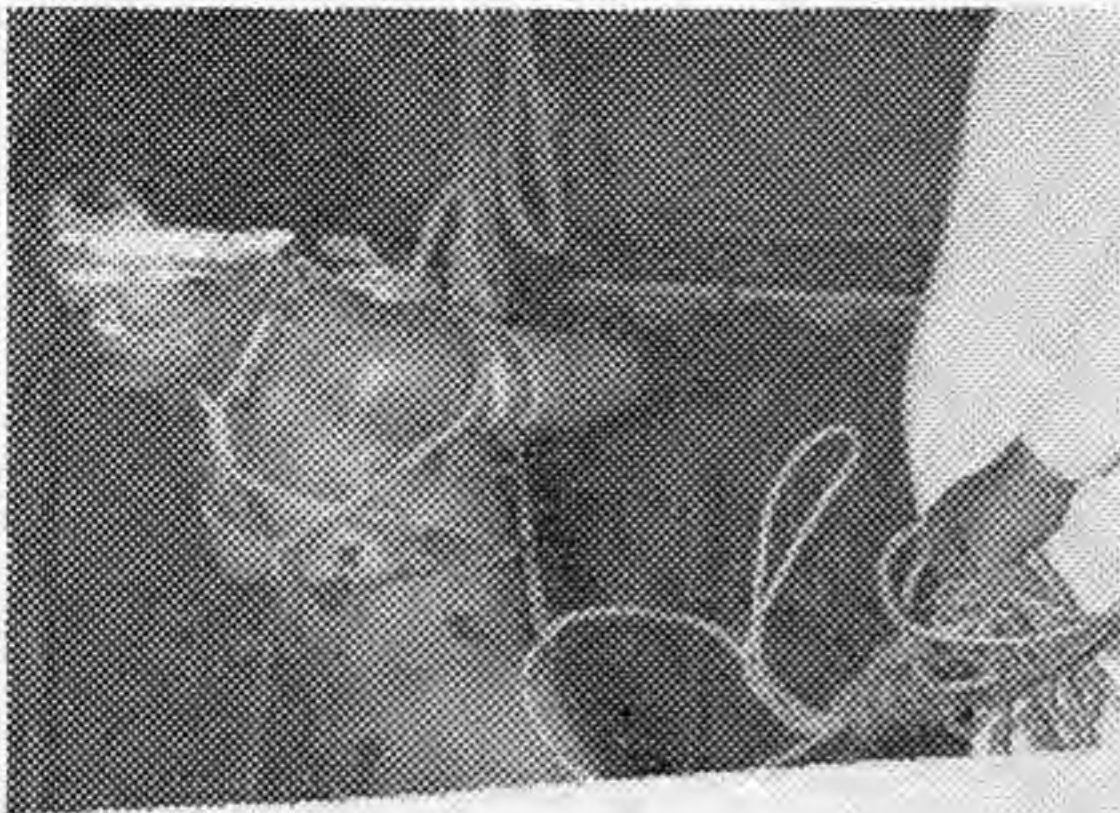
ノーマルな人間が、私達の対決を監視した時、懼らく吐気を催し、おどましさにチリ気立つてであろう行為も、二匹のアニマルは、歓喜に酔い痴れ、悦楽にうつつをぬかしている赤裸々な姿に外ならなかった。

その結末におとずれる人間本来のセックスが、私達にとっては誠に呆気なく、時には既に昇華し尽して、プレイのあと、みち足りた遊び呆けたような虚脱状態に陥っていたのである。

虐めても苛めても、いくら責めても、いじめ足りぬ女——それが谷山久美子であった。全身腫れ上り、時によっては双臀の皮破れて斑々と血しぶきにまみれ、激しい愛咬の極致の跡が、あざとく肩に頸筋に、腕に、腿に暗赤色の斑痕をとどめ、古い噛痕は刺青さながらに、腿にしみついていても、この牝犬は欣喜の声をあげて歓楽にのたうっていたのである。

とりようによっては、怖るべきパラノイアであった。百分の満足を知らぬ女体の、マゾ性の果ては、恐ろしい死につながっているように、プレイにうつつを抜かす私も、時としてはゾーッとすることすらある激しさである。





或いは怖るべきカラストロフを拒否したい  
気持も働いたのか、妻の不信感を一掃しよう  
とするためか、四月上旬、ひょっこり私宅を

訪れたドクター氏こと佐久間テル氏に、妻の  
面前で、谷山久美子を紹介しようと切出した  
のであった。かつての山本氏が私に紹介した  
ように——それは咄嗟の思い付きであった。

西大寺の男——山本一章——私——佐久間  
輝……と、久美子のマゾ遍歴は四転し、こう  
して新たな一頁を加えていった。

ドクター氏こと佐久間テル、欣喜雀躍した  
ことはいう迄もない。私も又、このアニマル

の飽くなき執念のマゾ性に、少々持て余して  
いたことは否めない。

× × ×

予定通り、新幹線を利用して、京都八条口  
に降り立った彼女を、私達二人は出迎える。

四月中旬の、風も甘く香る桜満開の候であ  
る。責めの場所は平安神宮近くのホテルH。

かつて、結婚前の左近麻里子とプレイした、  
憶い出のホテルであった。

彼女にくどくど説明する必要はない。プレ  
イの巧拙が、彼女の心を左右するからであっ  
た。気に入れば、佐久間——谷山の路線は逸早

く開通するに違いなか  
った。

このアニマルは、強  
烈なマゾ性特有の、露  
出癖をも持ち合わせて  
いた。

衆人監視の公園の大  
樹に、全裸で吊るされ  
たら、願望は最高に昂  
揚するだろうとたわ言  
をいったり、嗜虐男性  
十人ぐらいに、入れ換  
り立ち代り責めつづけ

られたら、死んでも本望などとうそぶく有様  
であったのである。

私の紹介する、でっぷり太った佐久間先生  
も又、日頃は温厚柔和そのものである。この  
人の何処にそうした強烈なS性がひそんでい  
るのかと不思議に思うくらいであった。

彼女は一見して、彼の人柄のよさ、温容さ  
に好意を持ったらしい。少々マンネリ化した  
私達二人のプレイに、今日は清新の息吹きが  
ふき込まれるものと、早くもイソイソしてい  
た。

プレイに対しての、巧言令辞とか、一切の  
斟酌は、彼女の場合、無用であった。

ホテルの部屋に入る。三人連れでモジモジ  
しているのはドクター氏だけで、私も久美子  
もケロッとしている。

私は直ちにバスに湯を満たしに行く。既に  
牝犬化した彼女は、ドクターの眼前で、素裸  
になる行動に移りつつあった。眼のやり場に  
困っている彼に、牝犬は妖しく微笑む。牝犬  
は早くも満を持して、ひたすらに被虐を求め  
て前向きの姿勢で行動的であった。

「いやあ、大した度胸ですね。羞恥心が欠如  
しているんでしょうか」

ドクター氏は、やや毒気をぬかれた顔付で



あきれたように、バスへ向かった彼女を見送る。息を弾ませているのは、既に昂揚の何よりのしるしであった。

「アニマル宣言させましょうか。牝犬と化して、一切、人間らしき言葉を発しないように」

「ああ、是非そうして下さい」

「牝犬の調教はお任せしますよ」

「とてもとても、辻村さんをさしおいて私なんか——」

「いや、それがいけないんです。牝犬に対して斟酌は一切、無用です。いろいろと小道具は準備して来ましたから使ってください。正直いって私は、もはや彼女の場合、飽和状態です。だから新鮮さを先生に求めたのですよ」

「本当にいいんですか、何をやっても……」

「いいんですよ、それが彼女の欲心を買う、最大の手段ですからね。思いつきやって下さい。アニマルですよ、相手は」

「じゃあ、お言葉に甘えて……しかし、嬉しいですな、遂に巡り来た我が世の春ですなあ」

ドクターは心から嬉しそうに、春風駘蕩たる顔付になって、尻をほころばせて、やに下った。

「一人で荷厄介な時は応援します」

久美子が裸身にバスタオルを纏って部屋に入っている。いきなり私は牝犬の濡れそぼった髪を引き攔んで、その場に押し倒した。

「今日のご主人様は、そこにいらっしゃる先生だ。いつもの牝犬になるアニマル宣言をするんだ。いいな」

ピシヤリと小気味よい音が女の頬になる。

全裸になって土下座したこの牝犬は、アニマルの宣言を、澁みなくスラスラと述べる。ドクター氏は頬をピクピクけいれんさせて、牝犬の宣言を、うっとり聞き入っていた。

「唯今から、この私奴は、一匹の牝犬となつて、凡ゆる冒瀆と屈辱を飲んでお受けします。ご主人様に飼育され、調教をうけるのは牝犬の無上の光栄でございます。お情けによりまして命だけはお助け下さいませ。その代わり、ご主人様のなさることに一切、人間の言葉を出さず、責めと可能性の限界を試す実験台となり、この卑しき牝犬にお恵みを垂れ給い下さい……」

多少、語句は違っても、すらすらと口をついて出るアニマル宣誓であった。

「さあ、四ツ這いになって部屋を一周し、牝犬の性別を、尻を高く持ち上げて、先生に鑑

定してもらうのだ」

私の声にうなずいて、牝犬は腰高で部屋をぐるりと一周して這い廻り、先生の眼前に高々と腰を挙げて、雌雄の別を明示したのであった。

むくむくと湧き上る嗜虐心に、顔面をケイレンさせて、ドクター氏は立ち上る。

うずくまる牝犬に近づくと、さっと両手を頸筋の背後で縛り上げ、丸環を通して、天井の突出した飾り棟に縄をかけ、ぐいと引き上げる。爪先立ちになった女体を、しばし愉しむようにみていたが、矢庭に牝犬の両足を握って、体を宙に浮かせる。二の腕が痛々しく脱臼しそうになっている。苦痛をかみ殺して牝犬は唇を噛む。両足首を握って、ドクター氏は軽々と振り廻し、果ては拡大して、反転させ、縦横無尽に宙に浮いた体をゆさぶり続けた。女の体は、細縄一本で、両手にすべての体重がかかっていた。

「よしッ！」

とうなずいて、手を離すと体がドサリと落ちる。私を一寸見やって、いいんですね？

という視線を、送ってよこす。うなずくと、それに力を得たのか、素早い斑ら縄が、牝犬の上半身を縛した。





猿轡に代わって大きな書類用のクリップが、牝犬の口を封じていた。太く短い

に、ジジジと音を立てて仄黒い煙を上げて燃

えつづけていた。

ドクター氏は、うっとりとした表情で、この凄絶なポーズに魂を奪われていた。幾度となく、夢寐に描いた幻想が、今現実となってドクター氏の眼前に展開されているのであった。

蠟燭の除去と共に、強裂に炸裂するムチ打ち。細いしなやかな革紐が数本、長く垂れた先生ご自慢の、外国産の調教ムチである。

薄赤い条痕が、レリーフのように数条浮き上ってくる。

ピチーツ、ピチーツと快音が、女体にはねかえり、時には亀裂を擦過していった。

一しきり調教の笞打ちが続いたあと、そそくさと先生は解き放ち、一服する間もなく太縄を使つての緊縛が始まる。連続する緊縛に、恍惚の牝犬の表情は、眼を細めて欲びを

現わしていた。

太縄が深々と鼠蹊部に喰い込んでいる。両足首を縛って鴨居に吊り下げ、辛うじて肩で支えた女体を、ドクターの太い足がぐいぐいと踏み躪ってゆく。果ては髪を引っ掴むと、ヨイショと掛声もろとも髪吊りして、体を宙に浮かせ、ゆさゆさとゆさぶり出したのであった。

重みに耐えかねた先生は、胸縄に更に一本の縄をつなぐと、飾り棟にかけ、女体を宙吊りにした。逆さの「へ」の字型に吊り下った牝犬の肌に、しなやかな革鞭が、風を切って交錯した。

フウフウ息を切らせているドクター氏は、

大きな溜息と共に

「ああ、きついですなあ。辻村さん、一度、交替して下さいよ」

と、紅潮させた頬に、じつとりと汗を浮かべて、カメラを握った私に声をかけてきた。

「じゃあ、一度——」

私はカメラを措く。先生は素早く解いてゆく。縄跡も生々しい女体に私は縄をかけてゆく。ドクター氏が坐り込んだ後、逸早く焦点を合わせて、閃光をきらめかせた。

高手小手が忽ちそこに現出する。縄先は、

口中一杯に押込んだのは、ホテルの湯上り衣の腰紐である。丸めてぐいぐい押し込み、その上から、日本手拭でしっかりと猿轡をはめる。

両足を握って、ぐっと彎曲させると、ポツカリと豊かな双臀が屹立する。

ドクター氏持参の真紅のローソクが近づいてゆく。ポトポトと垂れる蠟涙が、目にも鮮かな真紅の斑点となって臀部を無数に染め上げてゆく。炎は徐々に肉体に近づく、十数センチしか距離のない熱滴に、熱さに悶えて牝犬は咆える——。蠟骸をはじき飛ばす勢いで、ドクターの平手が非情に飛ぶ。激しい呼吸の乱れは、ドクター氏の口から洩れていた。私は久方振りにプレイから解放されて、心をカメラに走らせていた。

次は股裂き責め——。部屋の隅の直角を中心に、飾り手摺に女体が縛りつけられ、





例の天井の棟から吊るしてある。腰紐で眼隠

しされた女体がよろめく。叩き不足の臀部に、十数日振りに私の平手が発止と響き、打

擲の撥音は立て続けに部屋に鳴りわたった。

よろよるとよろめき、うーっと呻く女体をポンと蹴上げる。牝犬は大きくゆらめいて、倒れかかり、吊り下げた縄が倒れるのを防いだ。プラスチック容器から、クリップ、洗濯挟みをガラリと机上にあける。

私と先生の二人は、洗濯挟みをめいめいに握って、牝犬の体中に挟んでゆく。上下の唇、乳首、脇腹、腹、腿、臀部……と、十数個のクリップが、牝犬の体を挟みつけていっ

た。

棟の縄を、もう少し引上げ、爪先すれすれに立たせて、縄鞭が容赦なく飛び始める。当たりどころによって、プチンとはずれたクリップが、はじけ飛んだ。

声を立てぬよう、眼と唇が、更に縄によって犇々と巻かれ、くぐもりの呻吟がはげしく洩れはじめる。

叩き手が交替し、ドクター氏の力強い縄が臀部にくだけ散る。被虐の限界のポーズが今、ここに在る。忍苦にたえて牝犬はよろばい、呻吟をもらす。どのモデルにも到底なしえぬ最高の悦虐に、ドクター氏の眼は血走り

吐く息ははげしく、怒濤のように狂奔する嗜虐の快楽に酔いしびれていた。

無斬に突き出た、腕の付け根の関節が、脱臼寸前の痛々しさで、二の腕の緊縛が如何に強いかを歴々と物語っていた。

クリップの飛び散ったあとが、赤いあざとなって、斑らに女体のあちこちを赤く染めていた。突然、牝犬

の顔が、ガクンと落ちた。

ハッと見合わす私達——。ドクター氏が吊り下げた縄を急拠ゆるめる。私はあわただしくクリップを外してゆく。

二の腕が下り、微かにキクンと関節がなった。

顔縄をとくと、べっとりと冷汗が顔面一杯に滲んでいる。蒼褪めた頬を激しく叩く。

生気が、やがて蘇ってくる。極度の苦痛が失神を呼び、鼓動を確かめるドクター氏の手付きは、既に医師のそれであった。

「大丈夫ですよ。少し気を失っただけです」「強烈すぎた時、よくあるですよ。しかしいつも愕かされます」

「最高のマゾ性でないと到底、辛抱しきれませんよ。あの二の腕が吊り上って、今にも折れやしないかと、ハラハラしました」

私と先生はニヤッと笑い合って、安堵の吐息を洩らした。所詮、徹底した野獣になり切れない私達であったのだ。

どんなに苦しくても、宣誓通り牝犬は一言も発しない。

「どうだ、百%か？」

ううん、と首を振る。

「じゃあ、九〇%だろ」



まだまだという風である。

「八〇％は、いったぞ」

まあまあというように、うなづく。

「何ですか、それ？」

ドクター氏は審かしげに訊ねる。

「被虐感度の割合ですよ。未だかつて百％はないんです——」

「最高の被虐の悦楽——それは死を意味しますよ」

撫然とドクター氏は謂って、煙草をくゆらせた。

「でしようね、多分」

「始めてです、こんな女は……」

ドクター氏はしみじみ呟くようにいった。

彼にしても、彼なりにM女性をハントし、過去に数人の女性とプレイしているのであるがこんな女性は流石に始めて遭遇したのであるう。大きい驚愕の嘆声であった。

「女じゃない、牝犬ですよ」

プレイの継続中だ。私は訂正する。

喘いで苦しげにのけぞっている牝犬に眼を落とし、私達は小憩する。このあとに待っているものは、ドクター氏待望の吊り責めだったからである。

彼女だったら、縄をじかに巻きつけても我

慢できるのに、やはり、根がフェミニストのドクター氏、牝犬を雁字搦目に縛り終わり、足首だけ手拭を巻いて、苦痛を防ぎ、その上から斑ら縄を巻いて、吊り易いように丸環を通していた。

「手拭なんか要りませんよ」

「でも、いくら何でもチト無理でしょう」

「私は、じかに縄で縛って吊りましたよ」

「そうですね、でもまあ、折角やったのだから、こうして吊ってやりましょう。その方が長持ちするでしょうから……」

自己弁護して、二人掛かりで吊り下げる。

この作業は二人となると簡単であった。易々と女体は逆吊りになる。嘗って同一の位置に、左近麻里子を、独りで逆吊りした苦心のあの時をフト想い起こし、私は甘い感懐にひたる。

佐久間テル氏は、この最高の逆吊りに、すっかり感激したようであった。

今、女体は微かに揺れて、長々と吊り下っている。それは嗜虐者にとって、最大の悦楽の極致であった。

縄を握って静かにゆさぶると、微かな棟のきしみを混えて、ゆるらゆらと無言の女体は前後に動揺した。

僅かな呻きが伝播してくる。やがて徐々にその呻吟は大きくなり、放置した逆吊りは、既に五分近くなりつつあった。

「降ろしましょうか？」

問いかける彼に私は首を振る。

「よし、最後に一揺り……」

声に出していうと、いきなり、じっと女体を搔い込み、勢いよく離す。

ミシリミシリ棟の音もきしみをまして、充血した顔面は苦悶に歪み、ヒーツ、あっと人間らしい絶叫が洩れてきた。

私の制止もきかばこそ、縄をつなぎとめた柱にドクター氏の手がかかり、ズルズルと頭から女体は落下して、ドサリと横たわる。

「どうだ、もうプレイを中止するか？」

牝犬はキツパリと首を振る。

「ハア、どうも驚きましたな。何ともすごいマゾですねえ」

感嘆した口調でドクター氏は私の顔を見た。

「もう一度、吊ってやりましょう」

「じゃあ、折角縛ったのだから、その俛で縄をかけて……」

と、体を二つ折りにして縄をかけ、吊り下げる。かなり強く縛ったつもりでも、折れかがんだ女体で、かなりの隙間が出来る。





逆吊りにくらべ、これは比較的、ラクらしい。牝犬は膝に顎をついて、吊りの感触を愉しんでいる風であった。

恰度、手頃の臀部の位置に、パシパシと立てつづけに平手打ちをくれてやったら、それに刺激され、先生の革ムチがうなる。

私はグルグルと体をコマのように廻す。手を離すと、縄のヨリが戻って、女体は空中にクルクルと転回する。転回する女体にムチは飛びかい、女体をとろきらずピシリとたたきのめす。

甘い絶叫が流れ、悦虐に狂ったように、激

しい歎歎が、いきなり唇をついて流れ、そのすすり泣きに、恍惚の陶酔がまぎれもなく絡んでいた。

『昭和四十四年四月より現在に至る間、佐久間輝とプレイ歴三回。昭和四十四年八月より現在に至る間、長田実とプレイ歴四回。昭和四十五年

六月、辻村隆宅を訪問——』

「何からお知らせしてよろしいやら……でも辻村さん、私あの頃からくらべて、又一段とマゾ的に成長したようですわ」

六月初旬、長い間、音沙汰のなかった谷山久美子から、ヒョッコリと電話がかかり、今こちらへ来ているので、よかったら会って呉れないだろうか、という一方的な通話であった。仕事であったが断わりもならず、やむなく、自宅へ招いたのである。

「どうしたの？ 一体、急に」

「団体で万国博みに来たのよ。旅館がうまく

ゆかなくて、今夜は奈良県天理市の、教会の詰所に、参拝をかねて泊まるということ——。俄か信者なんです」

「万国博は、いつ見に行くの？」

「明日——」

「じゃ今日はあいてるってわけ」

「バスは天理まで走っちゃったけど、私だけ途中で降りたのよ。お会いしたいから……」万感を胸にこめての言葉だろう。家までの道順をいうと、一時間後に玄関を開く音。谷山久美子は、遂に私の家までも押しかけてきたのであった。

それから、それへの話は尽きない。

彼女のプレイの対象は、佐久間輝以外に更に一名、殖えていた。

佐々木真弓の消息を知らせてくれた長田実が、所用の途中、ひょっこり立寄り、四方山話のプレイ談義の合間に、偶々彼女の事を口を滑らせたなら、そんなマゾ女性を独占するなんてと、彼に口説かれて、詮方なく、豊橋の未亡人宛の連絡先を教えてしまった。ひとつは多忙な佐久間ドクター、やいやいってくる彼女の要請に、三回に一度ぐらいしか行けぬので、衝動的な彼女のことゆえ、或いは欲ぶかも知れないと思っただけ、彼女に無断での



紹介であった。

第五の男、長田実とはコマメである。我が世の春と許り大張り切りで、彼女とのプレイ四回に及んでいるらしいが、彼からは、たった一度（うまく連絡つきました）と電話で告げてきたのみである。

佐久間ドクターが、独りで吊りを敢行したのはいいが、縄の結び目がゆるんで、体重でドサリと落下し、相当強く、したたかに腰を打ち、十日許り痛んで困ったこと――。

長田実が、彼好みの革具を次々装填させ、ニューポート社やマルゴ仕込みの変形下着をつけさせて、撮りまくったこと――。

彼が、久美子に熱を入れ過ぎた結果、奥さんとの仲が陰悪になりつつあること――（これは私も同様であった）

佐久間氏と交友中の、京都の徳永昭二が、しきりにドクター氏にプレイの同伴を要請しており、彼女も又、徳永氏に仄かな期待を抱いていること――。

谷山久美子の夫が、彼女の肉体のあざや縄傷に不審を抱き、剃毛を発見されて、相当にしつこく問い訊かれ、遂に白状して、夫のS的な激しい憤りの行為を期待したが、彼女の性向を知った夫は、反ってそれを、黙許した

こと――。

佐久間ドクター氏が、私や徳永氏を誘い、一日離れ小島に逃避して、野外の自然の環境の中で、大樹に高々と吊り下げ、猪吊りして竹棒をになって、島内を歩き廻り、野獣の戯れを希望していること――など、など。

愉しげに語る、谷山久美子のSM談義は、いつまでも尽きない。

コーヒーマットをもって現われた家内にも、彼女は如才なく挨拶し、手土産の天津甘栗の、かなり大きな紙袋を手渡すのであった。

電話がかかり、所要をすませた私に、家内が囁くように、

「あの人なのね、例のすぐM的な女性って……思ったより好感のもてる人じゃないの。私、もっと男殺しの、悩殺的な女の人かと思っていましたの」

と、意外に印象がよかったらしい口吻に、内心ホッとすする。

「よかったら、ちょっとプレイしなさいよ。離れ座敷で……邪魔しませんよ」

といわれても、ハイそうですかと出来るものではない。それに山積する仕事で、幾分は私のプレイの気分をそいでいた。

「これから、どうするの？」

と問うと、

「辻村さんの心次第ですわ。ホテルへでも、どこへでも参りますわよ。だって今日は帰らなくていいんですもの。結婚以来、初めての自由の時間ですものね」

と大いに誘発的である。

いざとなると家内の手前、何も出来ない。そっと女体をまさぐると、喘ぐ声もなまめかしく心を乱して抱きついて来た。

あわただしい交歓も、所詮はそれまで――。

物足りぬ表情で谷山久美子は家を出た。それはどうしようもない心の燃えぬ、仕事の谷間のひとときであった。

別れがけ、そっと囁くように、

「うそいって御免なさい。本当は昨日から出てきているの。万博を見終わったあと、長田さんとプレイして泊まっちゃった。彼も奥さんとひとめありそうだわ。仕方ないから辻村さんを訪ねたけど、ダメなのね。いいわ、佐久間先生に電話してみようかしら」

この稀小価値の、悪徳の妖女は、猥らに笑って、私の腿を抓った。

彼女にとって、それはよろめきではないのであった。



## △告白▽

## 緊縛人生 早木夢二

夫婦プレイに、いそしんでいる時、ふつと、今ごろ日本中（なんと大げさな）緊縛プレイを楽しんでいる人が、どれくらい居るだろうか？ などと思うことがある。

思うだけやボなこと、私にとって、今日の前に素肌に厳しい菱縄縛りを受け、さまざまの拷問プレイに喘ぎ悶えている慶子の姿さえあれば、それで十分すぎるほど十分なことではあるのだが、同じような姿で（縄のかけ方はいろいろ違っているであろう）プレイの醍醐味に浸っている人達が他にもいるに違いないと思うと、何か悩ましい気持が強くなり慶子を責める手にぐっと力も加わるといふものである。

そんな人たちは、どんな責めを受けてるのかしら、と欲の深い慶子はいう。

なあに、お前と同じようなものさ。と答えたものの、時には何か違った責め手を考え出してごらんよ、とでもいわれたような気怏れにおそわれる思いである。他人は他人と割り切った心境でばかりいる訳にゆかない気持になるから妙なものである。

ひよっとしたら、お隣でもと、深夜のしじまに耳を澄ましてみたり、向こうに見える二

階の窓に、若い女の縛られた裸身が、縄尻をとられて引廻される姿がのぞくのではないかと目を見据えてみたりする。

実際には、そんなことがあるかどうか判らないが、そう思ったりすることによって、私たちのプレイも一段とハッスル出来るから不思議だ。

慶子との緊縛遊戯が始まった頃は我不関焉とばかり、それこそ傍目もふらずに自分たちだけのことに打込んで、他人のことなど考えもしなかったのに、奇クに拙文を載せて貰ったり、あれこれと他人さまの縛りのことなど気になり出した昨今は、長い年月と共に心のゆとりが出てきたともいえるのだろうか。それとも心の弱りといった方がいいのだろうか。いずれにしても、自分たちの縛りの生活のことも含めて、多少は他にも気を配れるようになったのだろう。

喜ぶべきか悲しむべきかは知らないが、奇クに載せて貰う拙文に、自分の姿をいささかでも客観的に振り返ることが出来るのは、がむしゃらに自分たちだけの縛りの生活に没頭し、生き甲斐を感じてきた私にとって、この上もない幸せだと思ふのだ。

夫が、強烈なS癖なら、彼女は結構、夫に満足して、奴隷化した牝犬となって、そのすべてを捧げ尽していたに違いない。

若くして開眼したマゾの仇花は、年令と共に、いよいよ絢爛と咲き乱れて、猥らな妖香を撒き散らし、そのとどまるところを知らず嗜虐の男性を求めて、巷を彷徨するのであった。

プレイした男性すべてをスキになり、そのくせ、次々と求めてゆく被虐願望の飽くなき欲求は、これからも、その対象の男達を飽和状態にさせては、新しい刺激を求めて遊戯して行くことであろう。

素晴らしき哉マゾの女王、谷山久美子——彼女の名は、ひとたびプレイした男共の脳裏に、永遠に灼きついて離れぬ、強烈な印象として残るに違いない。

彼女のハントに逡巡していた私が、思いきってこの百枚を越す長稿を書く気になったのは、外ならぬ、谷山久美子自身の、その日の熱心な要請の結果である。

今も奇クの熱読者である久美子よ——。

このハントの一文を読んで、若し不満あらば、それは私の筆の至らざる処である。以て諒とされたい。

（終）





(5)

われながらほれぼれする美しい脚に魅入られ、ドレイさながら、足もとへぬかずく成田晴雄を、小森尚子は甘く見ていたようだ。

真実をいうなら昨夜の彼女は、心地よいほろ酔い気分になさそわれ、茶目ッ気半分、くすぐったい蜜の愛撫を満喫してやろうと、不敵な欲望を胸のうちにぎらつかせていた。相手の性癖に不快感をいだきながら、心のどこかで、二度と味わえそうもない奇体な愉悅を求め、悪徳の香りがただようなかで、底知れぬ快楽をむさぼろうとしたのだ。

△創作▽ ア パ ー ト の 檻 (後)

## 美囚の反撃

保 藤 久 人

自分を誇り、永遠に足もとへなびかせようと、男に隷属を誓わせたのだが、それが、思いがけなく、相手が仕組んだ陥穽だと気づいたときは、もうすでに遅い。羞ずかしい姿で縛り上げられた上、奇怪な檻の中へ入れられ、浅はかだった自分の思慮を呪いながら、若い女の身空で、このうえもない辱かしめを受けようとしていた。

人が変わったように傲慢になった男が手にしたタバコの火が柔肌へ迫った時、はらわたのにくりかえるくやしきよりも、さきだつ絶望感に打ちひしがれてしまった。

恐怖のあまり、からだの奥深くを疼痛が走

り廻る想いである。実際に、生理的な排泄の欲求が湧き上り、それはたちまち限界に近づき、はげしい痛みが集中した。

「きれいさっぱりムダ毛を焼いて、ついでにカッコよく烙印を押そうか。店さきにぶら下がった豚肉なみに……だ！ アハハハ」

恐ろしい脅迫に尚子の身動きならぬ体はさらに、ちぢみあがった。

からだをうつ伏せに後ろ手に縛られ、片方の脚を柵の外へ引き出されたまま、自由な片脚を深く折り曲げ、ぺちゃんこ蛙のように、尚子はみじめにのたうちまわる。

早くしないか、と無情にせきたてられ、よ



うやくのことで浅ましく腰を浮かすと、情けなさに涙が自然とあふれた。

「よしよし、それでよい。すこしハレンチだが、すぐくチャーミングな恰好だぞ。日頃は絶対に見られない素敵なポーズだ。その姿をフィルムに納めてやろうか。どうだ！」

全身、羞恥の炎にくるまれ、切迫する自覚におびえて、硬直した四肢が細かく慄える。敗北的なうめき声がつづいた。

「おい、尚子！ 以後、おれに対して絶対服従を誓うか？ 素直な女に生まれ変わりますと約束したら、すぐに楽にしてやろう」

ひきつるように皮膚をふるわせ、カーペットにすりつけた尚子の顔が何度もうなずく。

「よし、その心掛けを忘れるな。ほら！」

檻の中へこじ入れられた容器。と、たちまちほとばしる水音が、彼女のたましいをこなごなに打ち砕き、容器が取り除かれてもぐたつとしている。

引き伸ばした片脚のいましめをゆるめ、晴雄は、おえつする尚子の正面へすわった。

「元どおりの形になれ。あおむきに、だ！」

尚子は怨めしそうに晴雄を見た。耐えがたい屈辱感を涙でしめし、くるしみを涎に変えて、憎らしい男をにらみつけるのだった。

「なんだい、その顔は！ いまのいま、服従しますと言ったあの誓いは、一時のがれの、でたらめかい。お前がその気ならそれでもいいさ。おれだって覚悟がある」

目の前にある美しい裸身は、晴雄にとっておどろいたかぶるプライドの化身も同様だ。すばらしい脚線美を誇り、美貌を鼻にかけて男をたぶらかす魔性の女かも知れない。

そういう女を思う存分あやつり、さんざん辱かして足もとに這いつくばう姿を嘲笑してやりたいと、不敵な欲望にかられた晴雄は女の憂愁を見ながら胸をはずませている。

初めて体験する戯れだから相手が素直でないほうがつごうがよい。反抗を口実に十分いたぶることができし、そのためには女の心を脅かし、いやがることを強要するのが効果的だろうと、ちゃんと計算をした上だ。

「この檻は小森尚子のプライベート・ルームだ。お前のためにわざわざ設計し、おれがこの手で念入りに造ってやった特別室なんだぞ。おれの厚意に感謝して、すこしはうれしそうな顔をしたらどうだい」

柵のあいだから手を伸ばし、ところ構わずなぶりものにしては、大きくくねる艶肌にニタニタと笑う。

「元来が家畜小屋だ。人間がはいるところではないから天井も低い。だが、家畜は立って歩かないだろ。いつも四つん這いだからこれでも広すぎるはずだ。楽々と生活もできる。」

しかし、見たところ、お前はまだ生意気にも人間づらをしている。だから頭がつかえて窮屈なんだ。きょうからお前はメス犬だ。ホラお前の首にはちゃんと首輪がはまっている。

鎖もついている。それがお前がメス犬に変身した何よりの証拠だろうて！ あとで飼犬らしく四つ這う練習もさせてやるが、きょう一日はがまんしろよな。正座はムリだが、あぐらを組んで頭を低く下げればよい！」

彼はしゃべることが楽しみだ。わかりきっていることをわざと言葉にする。言葉で相手の心をいたぶり、苦悩を深める女の表情を観察してニタリニタリとほくそ笑むのだ。

いかにも、陰險なやり口だが、成田晴雄という男の性格を知りつくしている尚子には、それが手ごろな脅かしの材料になる。実際に尚子のおびえはつのる一方で、もはや昨夜までのプライドは影をひそめ、哀れ悲しく、男に媚びる女に変わろうとしていた。

「どうだい。いい加減に観念して、おとなしく元の姿になれよ。ぐずぐずするなッ」



語尾を荒げて、晴雄は麻縄をつかんだ。

「言うことをきかぬとどういうことになるか教えてやろう。この細引を引っぱる。さっきは片方だったがこんどは両方だ。すらりとしたその脚がお前の財産だろうだが、自慢の脚もいまに泣きべそかいて『八時二十分』にひるがるだろうな。どうだ一度リハーサルさせてやろうか？ すばらしい眺めになるぞ！」

ア、ア—と喉の奥で泣き、男の声におびえた尚子は、不自由なからだを必死によじつて、いわれるとうりにあおむきになろうとする。懸命の動きだった。

全身を汗でぬめらせ、浅ましいうごめきをくり返して、尚子はようやく反転した。そのさまを冷ややかに見おろしていた晴雄は、いきなり力まかせに麻縄をググツと引く。ヒエ—とひと声、尚子のからだは、ひっくりかえった。引き寄せられて健やかな脚が檻からはみ出してきた。

扇型になった足首のいましめをソファの脚につなぎ、晴雄は叱咤する。

奇妙な声でうめき、尚子は上半身を転々としてみだえる。必死になって男の命令通りに、なんとかして起きあがろうとするのだが、後ろ手に縛られたからだは自由がきか

ず、動くたびに角材がきしみ、恐ろしい痛苦にのたうちみだれる。

晴雄は、みじめな女体のうごめきに目を光らせていた。柵をへだてて上半身を身もたえるもうひとつの女の表情がタテヨコナメに、さもつらそうに可憐な風情を描きだしているのだ。

どうしてもからだを起こすことができず、美しい目にいっぱい涙を浮かべて、尚子がわが身のはかなさを改めて痛感したとき、その時機を見はからっていた晴雄は、ふたたび檻の中へはいった。

「ええい！ しょうのないやつだな」

わくわくするような心の高ぶりを隠して、わざと聞こえよがしな舌打ちをひとつ。乱暴に尚子の倒れかかるからだをささえ、力強く抱き起こした。

「そのまま、じっとしているんだぞ」

急いで檻の外へ出た彼は、中央にある棒をはずした。と、そこにぽっかりと四角い穴が明いた。しろうとにしては実に巧妙な細工だが、そのあたりひとつひとつに成田晴雄の執念がこめられているのだ。

「さあ、ここから首を出すんだ。早く！」

外から髪の毛をつかまれ、くしゃくしゃに

ゆがんだ女の泣き顔が、四角い柵の穴からぽこっと出た。彼は、奇妙な形をした二枚の板で、女の首を上と下からはさんだ。

奇怪な板は、すっぽり首にはまるように中央が丸くえぐってある。恐ろしい言葉に似合わず、その切口には皮膚をいためない配慮の、厚いフェルトが貼りつけてあった。

「この首かせは釘づけにしてしまおう。きょう一日、お前はさらし首の刑だ。おごりたかぶった自分の罪を反省し、すっかり心を入れかえるのだ。わかったな！」

口さきのおどしでなく、本気だった。彼は本当に首かせを左右の柵に釘づけにした。

慄然として、勝ち誇った男の声をうつろにききながら、尚子は観念の目を閉じた。

正直にいった、彼がこれほど深い奸策をめぐらせていようとは、夢にも思っていなかったのである。相手を軽んじた自分のウカツさを悔むより、こうなれば、男の命にさからわず、身の安全を図るほうが賢明だろうと、屈辱のなかでも打算的に心が走った。

足首のいましめが解かれ、おしりの下に堅い枕が当てがわれた。両方の脚を投げ出し、前かがみに首を突き出した哀れな姿で、傷心の涙が尚子の頬をツ—とつたう。



によきによきと柵からはえた二本の脚。優美な線で形づくられた尚子の下肢の、こころよくはずむ柔肌の感触をじっくりと愉しみ、筋肉のおののきに心をみたす晴雄。そして女の顔を両手にはさみ、伸ばした舌を近づけていった。

「ふふふ。どうやらあきらめたらしいな」  
顔じゅう、さんざんなめまわされ、彼女の心はいたましくもつぶれてしまっている。

「おれの真心を踏みにじった罰だ。しかし、おとなしくおれの飼い犬になると誓えば、まづ舌かせから解放してやるが、どうだい」

新しい涙を浮かべて、尚子はうなずいた。  
「だいぶ素直になったな。その調子だ。その心構えを忘れず、忠実なメス犬になれよ」

晴雄は、尚子の舌を捕えていた金具をはずした。感覚を失い、冷えきった舌を急いでひっこめ、尚子の哀泣が忍びやかに流れた。

「あしたから四日間、おれは休暇をとった。きょうの日曜を入れると五日間だ。そのあいだに十分飼育してやる。さし当たり、馴致第一日目の科目はさらし首。おれが得心するまでその姿でいてもらう。いいな。食事も、用たしも、皆そのままだぜ」

もの悲しい哀感が胸を締めつけ、空恐ろし

い思いが彼女のたましいを踏みつぶす。

「許してエー」　ようやく自由になった口で男への屈伏を誓い、尚子は哀願をくり返す。

「それほど言うのなら、よし、お前の心をためすことにする。試験科目はふんだんにあるが、まず、いちばん簡単なことから……」

晴雄はふらりと立ちあがった。

「舌を出せッ。わかってるな！」

男の考えはすぐに理解できた。尚子は浅ましく舌を伸ばした。

「たらん。もっと！　まだ伸びるはずだ」

意地悪くあやつられてすすり泣き、やがて彼女は真剣な動作に変えていった。

# (6)

一時間後、女の首を釘づけにしたまま放置し、晴雄はプイととび出していった。

実は、熱心な尚子の屈伏ぶりにつけこみ、忠実の度合を知る第二のテストだ——と言って尚子をおどし、いったん後ろ手のいましめを解いて、自分につごうのよいように彼女に一通の手紙を書かせたのである。

それも、かねてよりの手はずのひとつだった。尚子が書いた手紙を持ち、わざわざ遠隔地へ足を運んで投函してきたのだ。

これで当分のあいだ、彼女の不在を怪しまれる心配がなくなった。小森尚子は保養がてら、人知れず高原の温泉地を転々としていることにした。その間、彼は安心して尚子の飼育に専念することができるのである。

三時半、晴雄はアパートへもどってきた。

六帖の居間をのぞくと、尚子は、檻の柵にしがみつくような恰好でビクンとおびえ、その目にみるみる涙があふれた。

首や足は朝と同じ形だが、上へひろがった両方の手は、べつべつに柵へ縛ってある。口には大きなバンソウ膏が貼りつけてあった。無残な姿でひとり置き去りにされ、おそろく彼女は、心細さにおののきつづけていたのだろう。晴雄の姿を一目見るなり、涙とともに、クスンと甘えて鼻を鳴らした。

「おやッ！　と晴雄は首をかしげる。明らかに彼女の態度が一変しているのがわかる。」

「お嬢さま。ご機嫌うるわしくて結構だな。いやにしおらしくなったじゃないか！」

女は魔物、油断は禁物、だまされないぞ！　心をいましめて冷ややかに笑い、ピンク色をした胸の突起を指さきではじいてやる。

ヒクヒクと肌がふるえた。が、彼のいたぶりに、堅く目を閉じた尚子は、柵のあいだか



らせりだした胸をゆするものであった。

あえかな身じろぎをしいにはげしく、首をゆする尚子の頬に、あざやかな血の色が映えた。せわしく小鼻がふくらみ、乱れた息が甘くかぐわしく戯れてくる。艶やかな女のあえぎであった。

「よしよし、まず上出来だ。黙っていたがいまの第三のテストだった。お前とは長いきあいだが、いまみたいに女らしい尚子を見るのは初めてだぞ……」

羞らいが彼女をおそった。からだじゅうをまっ赤に染めて、ぱっちりに見ひらいた明眸がぬれぬれとうるみ、必死に何事かを訴え、男の心にすがりついてくる。

「わかってる。これだろうが——」

晴雄は、口のバンソウ膏を取ってやった。

「あ、あー。もう赦してエー。晴雄さん」

「ダメだな。男がそれ相当の覚悟をしてはじめたことだ。いまさらあとへ退けるかッ」

彼は尚子のハンドバッグをさぐった。

「見ろ。昨夜せっかくお前が取り戻した写真がここにある。だが、これはもう不用だ」

小森尚子と成田晴雄の、もっとも密接な関係をしめす過去の記録は、彼がともしたライターの火でメラメラッと燃えあがった。

「灰になったな。だからと言って安心するのはまだ早い。新しい記念品をつくるのだ」

晴雄は、位置を見定めて三脚を据えた。

「いまからの部屋をスタジオにする。最初にヌード・スター小森尚子の一日と題して生記録をつくる。余興をたっぷり挿入してだ。フレッシュなはだか娘の体当たりの演技を、詳細に8ミリカメラで捉えてやる。話では、その美しい肢体がやがてブラウン管に映るそうだが、くだらないコマーシャル・フォトよりも、これから始まる迫真的な作品のほうが値打ちがある。視聴率の驚異的な上昇は請合いだからな」

耳にするのも恐ろしい男の声に、尚子はさめざめと泣き、声をしのばせて哀哭する。

「ゆ、ゆるして……赦して……下さい」

尚子はせつなく、ひきつった顔をあげた。

晴雄がつぎつぎに浴びせる言葉は、ひとつひとつがどす黒い男の欲望にいろどられていく。しかもその蔭に彼の本当の目的がある。

そうと悟ったとき、彼女に心底からのおびえがきた。口さきだけでいう羞恥や屈辱とは異なり、気が狂いそうな深刻な恐怖だ。

ホゾをかむ怨嗟の声も忘れ、痛恨こめた男への憎悪も知らぬうちにうすれてしまってい

た。残るのはただひとつ、容易なことではすまぬという没落的な自覚だけである。いや応なしに相手の言いなりになり、みずからの動作で、男への従属を表現しなければならぬという苦境にたたされ、極限的な屈従の決意に迫られたのであった。

「……あなたのおっしゃることなら、どんなことでもします。だから、お赦しを……。あなたの真心も知らずに、わたしは悪い女でした。虚飾にあこがれ自分をおごり……。みな女の浅はかさでした。心を入れかえます。そして誠心誠意、ただひたすらあなたに……」

「おれに飼われて満足するというのか？」

「は、はい。必ず！ いままでとは立場を変え、足をなめろとおっしゃるのなら、よろこんでなめます。はだかもしもいといません。嘘だと思えば、鎖を引っぱってためして下さい。あなたの意のまま、四つん這いになります。そして、犬の真似を……」

「ダメだ！ だれがマネをしると言った！

その場まかせの真似事ではない。本当に動物になるというのなら話はべつだが第一、犬や猫が人間みたいに口をきくもんかッ。いい加減なことでごまかそうたってダメだ。お前がその気なら、言うよりもまず態度で示しても



らおう。おれが信じるのは実態だけだ。このことを胆に銘じて覚えておけッ」

見栄もプライドもかなぐりすて、男の意図に迎合しようとする尚子の努力も、逆に嘲笑をさそうばかり。屈辱をかみ締めての嘆願すら、相手の心に通じそうもなかった。

「では、どうすれば、いいのでしょうか……」  
つらそうに首をあげ、尚子の声は可細い。

「どうすればいいのか、教えて下さい」

「正真正銘のメス犬になれ！ そうしたら、すこしはお前を信じる気になるだろうな」

「そ、そんな！ あ、あなたは、ずい分むごい……ムリなことを……おっしゃるのね」

「ムリなもんか。お前の気持ちしだいだ」

クー、クククと、哀切の声がもれた。

「な、なります。その……犬とやりに……」

血のにじむような悲痛な声がほとぼしる。

「その前に、せ、せめて……この、首かせだけを……はずして——。お願いします」

「はずしてやる。撮影がすんだら、な！」

「さきに、お、お水を……。水を下さい」

「そうだ、忘れていた。お前はゆうべから何も食べていなかったなあ。さぞかしはらがすいたことだろう。人間、いや動物は、空腹に耐えられなくなると、なんだって食べるよう

になる。差し当り、水ならおれのをやろう」

「……あ、あなたの……水——？」

「そうだ。暖かい水だ。いやか！」

「そ、そんな、無茶なこと！ イヤ、イヤです。それだけは……かんにんしてエー」

「そのムチャなことを、ゆうべ、おれに強要したのは、いったいこのだれだったかな。ずい分、傲慢なやつだった！」

「ゆるして！ あなた、どうか赦してエー」

「お前、メス犬になると言ったじゃないか」

「犬にはなります。でも、それだけは……」

「イヤだとは言わせない。まあ、見てろッ」  
非情に徹しようとする男の意志は堅い。  
とうとう彼は、固定した女の首へ、大きなポリバケツをぶら下げたのである。

尚子を見おろす晴雄の眼がすわった。

ほつれ毛が痛々しい白く冴えた額。泣きぬれて艶々しい頬。必死に、惨とした汚辱に耐えようとかたく閉じたまぶた。長いまつ毛が

細かく慄え、女の哀れがにじみ出ている。愛らしい鼻すじ、上品な色香をたたえたチャーミングな唇。つつ立った晴雄は、自分の強固な意思を伝え、尚子に新しい覚悟をうながす。

せっぱつまった窮地にたたされ、すさまじい辱かしめに驚怖する彼女は、いったんカットと見ひらいた目で男を凝視したが、やがて、きしむようなうめき声とともに縫い合わせたようにまぶたをしわめ、逆に、わななく唇をかすかにひらいたのである。

ポリバケツが、雨だれの音をひびかせた。その音と臭気が、わずかにとどまっていた尚子の理性的な余力を根こそぎ奪い、たましいまで細かく斬りきざんでしまった。みじめに打ちひしがれてがっくりと首を落とし、その姿かたちは、ついに晴雄に完全な屈伏を告げる最終的な女の姿であった。

# (7)

窓の外は、すっかり暗くなっていた。

厚い遮蔽幕で外界をこぼみ、そのうえさらになまめかしいカーテンを張りめぐらせた部屋の中は、目にもまばゆい光彩がきらめき、文字どおり昼をあざむく明るさである。

照明は四方八方にあった。求める影も、おおうすべもない羞ずかしい姿で、尚子は、部屋の中央にすわらされていた。晴雄の操作する非情なレンズが裸身にまつわり、寸分の狂いもなく彼女のすべてをとらえていく。



「ひとやすみするか——」

ほがらかな声で男が言った。

その声を合図に、せつない女のむせび泣く声が、あたりをはばかって低くくぐもる。

「泣いたって仕方がないだろ。どれ！」

晴雄は、尚子のそばへしゃがみこんだ。

「柵にすがってよろこぶ表情をトップシーンに、檻から這って出るメス犬の動き、ついで、後ろ手に縛られた要所要所のクローズアップ——。まあ、だいたいのところ見事な出来ばえだったとほめてやろう」

いましめた女体の背中に手をまわし、もう片方の手がふくらんだ胸乳に伸びる。

あえぎ乱れ、のけぞってその手を避けようにも、いまの彼女にはわずかな自由もない。

昼間、人間的な感情をすてた必死の努力で汚辱を甘受したことから、晴雄の心もいくらか和らぎ、恐ろしい首かせをはずしてもらったものの、檻から引き出された彼女には一段と苛酷な責めが、待ち構えていたのである。

やさしいスロープを描き出す優美なウエストへ、ベルトが蛇のようにからまった。そのベルトは後ろ中央にケバの多い太綱が垂れ、ミルク色に煙ったような腹部のまん中に妙な金具がぶら下っている。小さな滑車だ。

あらためて後ろ手に縛った縄は、その余りが二の腕もろとも胸の柔肉をかみ、乳房を絞りだそうとする嚴重さだった。あげくに、膝がしらを広々と左右にしてすわらされた。

足首をかさねてくり、ついで細引が頬をくびって唇を割り、彼女から声を奪った。身の毛がよだつ思いがする悪どいいたずらがどこされたのは、そのあとだった。

尚子はイカの刺身が好物だ。それを知っている晴雄は、手ずから料理したイカの片々を手にするにニタリと笑った。

そのあと彼は、後ろに垂れた太綱を強引に前へまわして上昇させ、腹部ベルトに取りつけた滑車をくぐらせて十分に引き締め、太綱のさきを束ねた足首に連結し、さらに背中の両手を高々と、肩越しに足首へつないだ。

すさまじいばかりの緊縛を受け、尚子のからは前へかたむいたまま、身じろぎひとつできなくなってしまう。それから今まで、緊縛各部の大写しがつづいたのだが——。

執拗な男の責めが彼女のからだから汗を搾る。あらゆる女の弱点を知りつくした細微巧妙な晴雄の苛責は、まざまざしく尚子の羞恥をあばき、涙を流させるのだ。

「お前のほうは味付ができたし、こんどはお

れの番だ。ごちそうは味が肝心だからな」

ひそとうなだれた首をイヤイヤというふうにかすかにふり、身も世もあらぬ風情でよよとすすり泣く尚子を冷ややかに見おろし、晴雄は、後ろ手に縛ってある縄を解いた。

うわべはやさしく、内側に毒を含んで、彼はしびれきった彼女の腕を撫でさすった。「もういいだろう」

椅子を持ってきて、晴雄は尚子の前へすわった。彼の手にはまっ赤なお皿がある。一目見るなりうろたえた尚子は、おびえきった表情でうつ向く。おえつする肩が慄えている。

「おれのことを拒む勇氣があるなら立派だとほめてやろう。その代わりもう一度檻の中へ逆もどりだ。もちろんさらし首——見ろッ」

晴雄は左のほうを指さした。そこにはあの恐ろしい首かせがある。無気味な舌ばさみの金具がころがり、檻部屋の柵が目にも痛い。

（檻はイヤ。こわい！ どうしよう、ああ）

檻の中へはいったが最後、どうしようもないことを、いやというほど思い知らされていくのだ。痛ましいいうめき声をあげ、わななく手指がおどおどと男の命令を受け入れる。「そっちの手にしっかりとこれを持て！」

目の前へ皿をつき出し、晴雄はニヤツと笑



うことを忘れない。

尚子が持った真っ赤な皿には、真っ白なイカの身が、いろどりもよく盛り上げてある。「こんなことはバカげたことだが、それもお前のためにしてやるんだぞ」

恥知らずなことを強要しながら、晴雄は、逆に恩返しをましくうそぶくのであった。

やがて、唇を割った細引にギリギリと歯をたてながら尚子は、足もとに置かれた二枚の皿を暗然と見つめ、思わず生つばをのんだ。皿には両方ともイカの刺身が盛られていて、彼女の好物のイカが……。しかしその調味料は双方とも何であるかは彼女が身を以て知っているのは当然だった。

理性では死にたい思いで拒みながら、飢餓感に悩まされた彼女は、男の言いつけどおり両手をつき、猿ぐつわのなくなった口で、犬のようにベロベロとなめて、食べた。

わずかばかり、食べ物を与えられた。

男が手に持ったパンを手を使わずにガツガツ食べたあと、足首のいましめが解かれた。

「ア、アッ。それだけは……ゆるしてエー」

立たされ、身をもんで哀願する彼女に、禪代りの太いケバ網が襲いかかった。

晴雄は尚子の前へハイヒールを置いた。

「この靴をはけ！ はらごなしの運動だ」

「もう赦して下さい。なんでもしますから。でも、歩くのだけはかんにんして……」

「歩くのがイヤなら檻の中へはいることだ」

尚子は悄然と声を失う。その目の前へ、おぞましい金具とパンソウ膏が突き出された。

「選ぶのは自由だ。どっちが好きだい？」

憂愁の目を伏せ、頬を肩にすりつけた尚子は、おののく唇を差しのべていた。

魅惑的な唇をめくり、さんざんいじくってから自分のブリーフを押しこみ、頬のふくらみを調べた男は、パンソウ膏を貼りつけた。「歩けッ。イヤなら鎖をつけて引きまわしてやる。歩くのが従順度のテストだと思え」

従順——。そのひと声が尚子の胸に強くひびく。うわべだけでもしおらしく見せかけ、相手の気持ちと和らげねばならない。それ以外に彼女の救われる道はないのだ。

しかし、身をもってそれを表現するのは容易でない。ひと足ごとにまがまがしくきしむ太綱を意識し、ともすれば足がもつれる。くるしくなやましいうめき声が自然にもれた。

上品に、しかも元気よく胸を張って堂々と歩く——。それが晴雄の厳命であった。

苛責の効果を十分に計算したおぞましいこ

の拘束を、どうして彼が知っているのだろうか。いまさらながら尚子は、晴雄の綿密な計画におののく。苦悩を姿態に示し、涙とともに彼女は歩いた。

「音がききたいな。靴音は妙なる音楽だ！」

隣の部屋のあかりを消し、ベランダに通じる大きなガラス戸をひらいた晴雄は、尚子の腹に締まっているバンドに手をかけた。

拒めばギシギシと綱を締め上げられる。非情な追い立てに、尚子は泣き泣き外へ出た。

冷えびえとした外気が裸身を包んだ。はげしい身ぶるいをしたが、からだの中では何かが燃え、顔がカッカとほてりはじめた。

鉄柵の向こうになつかしい自由がある。正常な時を刻んで良識の世界があるのだ。胸いっぱいに吸う空気はどれも同じなのに、一歩足を踏み入れると彼女には自由がなくなる。

大声で叫びたかった。柵を越え、一気に地上へ飛び降りたい心地がしきりだった。

しかし結局は何もできず、彼女は、おぼつかない足どりで、彼が言った妙なる靴音の音楽を奏で、頬に涙をしたたらせていた。

(8)

月曜日——。晴雄が目ざめたのは昼近く、



窓いっぱい暖かそうな光が輝いていた。

「アーア、と、みちたりたアクビを大きくひとつ、彼は元氣よくふとんを蹴って浴室へ急いだ。湯沸器のコックをひねり、浴槽にお湯をそそいで、そのあいだにす早く顔を洗う。

部屋へもどると、すぐに押入の襖をひらいた。檻の中の尚子は後ろ手に縛られた背中をこちらに向けて、前かがみに小さくなっている。首には鎖のついた輪がはめてあった。

「どうだった。よく眠れたかい？ さあ、出ておいで。お風呂へはいろいろよ」

鎖を引かれ、首を伸ばしてぐり戸からいざり出た尚子は、彼を見あげてクスンと甘えた。口をパンソウ膏でふさがれているのだ。

奇怪な檻の中での生活が、一日半過ぎたいま、尚子のようなすはすっかり変わっている。

首を固定されたみじめな姿で、おんなの命にもたとえたい顔が無残によごされ、それからつづいたみだりがましい男の玩弄にも齒をくいしばって耐えぬいている。多分、どうしようもないというあきらめだろうが、昨夜、ベランダでの散歩がすんだあと、彼女は、見違えるばかり、従順な女になっていった。

何を言われても素直にうなずき、果ては浅ましい四つん這いで畜獣の生態を表現し、撮

影中、カメラに向かって笑顔さえ見せた。

とくに、ようやくまともな食べ物を与えられた夜半すぎには、手を使わずに皿のものを食べたあと、彼の温情に対するよろこびを動作であらわし、大胆にも、ほぼ完ぺきに近いメス犬の演技を披露して彼を驚嘆させた。

尚子の意外なしおらしさ、そして、自分からすすんで家畜になりきろうとする懸命な努力に感じ入った晴雄は、首輪以外、すべてのいましめから解放してやったのである。

夜、寝るときも、万一を用心して声を封じ両手の自由を束縛はしたが、裸身にはちゃんとうすい掛具をかけてやったのだ。

いまでも、屈辱の怒りが嘘のように消えてしまった尚子の表情は、素朴な羞じらいがただよい、柔和なほほ笑みが浮かんでいる。全身の挙動ひとつひとつに、言うに言われぬなまめかしさがにじみ出ているのである。

歩け！ と、うながされておとなしく物置へはいり、狭い浴槽で男の手に全身をゆだねた。ときどき羞かしそうに甘え、うっとりとした表情で彼の顔を見たりする。

からだを拭い、うすいガウンをまとった晴雄は、ベッドに腰をおろして尚子を招いた。

「すこしはおれを見直したようだな。弱虫だ

とののしられたが、いまではお前を飼う主人だぞ。これからの毎日が楽しみだ」

うなだれた女の首がかすかに動く。自分がこの男に飼われているのだという悲惨な現実を、はつきりと肯定しているのだろうか。

「どうだい？ 後悔しているだろうか」

尚子は、あわてて首を左右にふった。

いまの彼女は、ほんのささいなことでも決して男の機嫌を損じてはならない。相手の言いつけを忠実に守り、いつときも早く、からの自由を取りもどさねばならないのだ。

尚子は、うるおった目で晴雄を見あげた。それにしても、相手がカレだったのは不幸中の幸いだと、彼女はつくづくそう思う。

もともときらいな相手ではないのだ。一時はお互いに愛をかわした仲である。どちらかというとひと弱なたちだが、彼はマジメ一方、むしろ純情な青年で、コツコツと堅実な歩みをつづける努力型の男である。顔だちもワリと端正だし、サラリーマンとしてなら、まず優秀なほうだろう。以前の彼女は、彼のそういうところらに惹かれたのである。

深い関係が生じ、アブノーマルな彼の性向を知って眉をひそめたが、別段、生理的な嫌悪をもよおすようなことはなかった。それど



ころか、逆にふしぎな優越感にひたり、胸をふくらませたことさえあるのだ。

TV・CM用のモデルに……。という話がでてから母親のきつい言葉もあり、結果的にはカレを避けるようになった。しかし、こんなむごい扱いを受けながらがまんができたのも、相手がカレだからこそ——であろう。

（さもなくば、わたしはきつと——）

ふと、そんな思いにふける尚子であった。

「手を縛るのはやめよう。だが、首輪ははずしてやらないぞ。お前はこれから、台所で食事の支度をするのだ。わかったな」

もどかしそうに、女の目が彼にささやく。

「なんだい？ 何が言いたいのだ！」

やさしい線で形づくられた裸身をきれいなバラ色に染め、尚子はまぶたを閉じた。と、プツンと光る露の玉が噴き、ツーンと流れた。

そんなようすを見ていると、晴雄は急に、尚子がいじらしくなってくる。無言でパンソウ膏をはがし、口の中に詰めてある薄色のパンティを引っ張りだしてやるのだった。

尚子の目から、堰を切ったように涙があふれ、ワーンと泣きくずれてしまった。

「チェッ！ 甘ったれるなッ」

女の哀感を火のように熱く感じながら、晴

雄はわざと声を荒げる。とたんに尚子のからだはすくみ、泣き声がぴたっとやんだ。

いやいやというふうに首を左右にふり、ぬれた目がわびしげにまたたく。羞かしそうにうなだれて、腰をもじもじと動かし、ぴたりと閉じていた膝をゆるめる。とうとう足をくずしてあぐらを組んですわった。急にこみあげてくる羞かしさに耐えられなくなったのか、尚子は背中を丸め、男の足に熱い接吻をするのであった。

「うん、よしよし。だいぶかわいい女になったな。その調子だ。犬の作法を忘れるなよ」

一瞬、足をなめる動きが止まった。と見るに熱い頬ずりをしたあと、熱心な犬の動作に変えていくのである。

「うむ。まあいいだろう。手を解いてやるが、その代わり、おれが言いつけた用事をするととき以外は、立って歩いてはいけない。必ず這うんだぞ。いいな！」

艶やかな背中を向けて、ようやく手首のいましめを解いてもらった彼女は、かわるがわる撫でさすりながら、まるでふしぎなものを見るように、自分の手をじっと見つめた。

（ああ、やっと自由になったわ！）ぐっとこみあげてくるものがある。この自由がほしく

て、どんな辱かしめにも耐えてきたのだ。

「人間の手は便利なものだ。手が自由だとんでもできる。前肢の代わりにもなるな」

尚子の心情をもてあそぶように、晴雄は、意識してゆっくりと言う。案の定、尚子の後ろ姿がこわばり、小さなけいれんがつつけさまに起こった。だが、彼女は屈辱を耐え、男の意思を素直に受け入れ、言われたとおり、両方の手を前肢の代わりにしていた。

「ゆうべ言ったように、お前に飽いたら解放する。同時に写真を焼増してバラ撒く。それがいやなら飽きられぬように努力をしろ」

（努力！ そうだね。いまのわたしに必要なのは、その努力と忍耐なのよ！）

ふと、かえり見た尚子は、せつなくさわぐ感情を抑えて男に媚び、膝と手で這った。

そこらじゅう這いまわり、彼の前へくると膝を伸ばした四つん這いになった。甘えたそぶりでは彼の足を、手を、舌を伸ばしてなめまわした。その姿は、じゃれつく美しい犬に似ていた。

晴雄は陶然として、白いけだものに化身した尚子の動きをふしぎそうに眺めていた。

（あれほど高慢だった女が、これはまた、なんとという変わりようだろう——）



と、彼は自分の眼が信じられなくなり、いきなり、傲然と女の前へ立ちふさがった。

するとメス犬は、うれしそうに目を細め、桃色に光る優美な乳房を麗々しくもみしだきながら、静かに首を伸ばす。そのしぐさを見ていると、たちまち奇体な愉悅感が、ひたひたと彼の感覚をうるおしていくのだ。

正直に言って、晴雄は、こんなにうまくいくとは予想していなかった。だが尚子は、彼の思惑をはるかに凌駕し、身も心も愛玩動物に変形してしまっているのである。

「それじゃ、食事の支度をしてもらおうか」  
台所までわずかな距離だが、晴雄は、本当に犬を連れて散歩する心地になった。

念のため、首輪の鎖を冷蔵庫の取手からめ、自分はそばの椅子にすわって、流し台で働く裸女の姿を飽きもせずに見つめていた。

案ずることもなく、尚子は声をたてず、またふいに訪れてくる人もなかった。やがて彼女は、食卓を四帖半の部屋へ運び入れた。

「いいから、ここへおすわり——」

支度をととのえ、型どおり自分の足もとへすわった尚子に、彼はやさしい声をかけた。  
「もう、いじめたりしない。ネグリジェと下着が買っているし午後から着てもいいよ」

ク、クーツと、喉をきしませてむせび泣く尚子の手をとり、ふたつ並べた椅子の中央にすわらせた晴雄は「さきにおあがり！」と言って、自分はテーブルの下へもぐりこんだ。

豊かに、若さのみなざる太腿へ手の平を置くと、それだけで彼の意中を悟ったらしく、尚子はいやがりもせず、好きなようにさせるポーズをとった。

食事をしながら尚子は、何度もテーブルに突っ伏し、優美な裸身をくねくねとのたうたせた。

その瞬間、立場が入れ替ったようだが、その一種異様なかたちこそ、晴雄の本質的な部分が、あそこがれのうちに希求してやまなかったひとつの夢のポーズであった。

もしも無難にふたりが結ばれていたなら、すでにいくたびか、この部屋でくりひろげられたことだろうが、晴雄が尚子に夢をたくしながら、とうとうきょうまで実現しなかった幻想的な悦楽のシーンだったのである。

「やっぱりおれは、エッチな男らしい——」

自分の席につき、はにかむ尚子を好ましく見て、晴雄は思わず苦笑を浮かべた。とたんに、ふいにすがりついた尚子は、膝に乗りかかり、大胆にもあえぎはじめたのである。

突発的な女の媚態に煽られ、彼は驚きよりも、しばしの歓喜に酔った。意のままに女を飼育したという満足感で、心が妖しく乱れた。

「ごめんよ、尚子。ひどいことをして——」  
彼の胸の中で、尚子の顔が左右にゆれた。

「いいの。エッチなあなたが好きよ。もう何もいらない。このままここにいさせてエー。もっと、もっといじめてエー。身も心もささげた女ドレイのように、わたし、よろこんであなたのペットになります。だからもっと……」

……わたしは……あなたの……メス犬……」

しまいのほうは消え入るような声だった。

晴雄は自分の耳を疑い、憑かれたように熱い口づけをくり返す尚子の顔を、ただぼう然として見とれていた。

(9)

夜もふけ、あたりはしーんと眠っていた。

そんな気配のなかで、晴雄はベッドに横たわり、凝然と一方を見つめていた。キッチンのようによく見えるように、間仕切りのカーテンが明け放ってあった。

ステンレス流し台の前で尚子は小まめに動いている。その姿には活気がある。自由を謳



歌し、若い精気がみちみちているのだ。

晴雄はふしぎでたまらない。ようやく自由を取りもどしたとはいえ、尚子は相変わらざるはだかである。しかも、たおやかな首に茶色の輪をしっかりとはめられたままだ。

白い背中に垂れたひとすじ、長い鎖は、彼女の動きにつれて床板の上で無気味な音をたてた。鎖のさきは麻縄をつなぎ、その端を、油断なく彼が右手ににぎり締めている。

そんなみじめな姿なのに、尚子はむしろいそいそとして、いまにも口からハミングがもれそうな、清新な意気が感じられるのだ。

ともかく、優麗な美身で誇り高く男性を魅了した小森尚子——これがその当人だとはとても信じられないほど、およそ常識では判断できない極端な変貌ぶりであった。

いつでも、どこでも、たちまち無邪気な子どもになれる素朴な人間のように、あるいはまた、原始的な生態を再現するかのように、無思慮に、本能的に、すばらしい行動意欲をしめして働く尚子の心情が理解できず、かえって晴雄の心には、混乱が生じてくるのだ。

（おれが間違っている。尚子は本気で愛情をしめしているのだ！）ふと、そう思う。

（いけない！ あれは女のずるさだ。だま

れるのじゃないぞ！）という一度裏切られた女に対しての不信感も依然として根深い。

だが、不自然な形を不自然とは見せず、ふたりだけの秘めやかな生活になじもうと努力する女の姿が、逆に彼の意識のなかへ気味の悪い不調和感を送りこんでくるのだった。

微妙にゆれ動く自分の心情におびえ、晴雄は、ふいに手にした綱をグイと引いた。と、それを合図と知って、尚子はこちらを見た。

「早くしろ！ 何をぐずぐずしているッ」

ほのぼのと芽ばえた新鮮な愛着をひた隠しにして、ことさらに冷たい声で叱りつけた。叱られて、尚子は板敷きの床に正座した。にっこり笑い、ていねいにおじぎをする。

ふたたび彼の胸のうちに、深い混迷が押し寄せてくる。温順すぎる尚子の挙動が、奇妙な惑乱を招くのである。

晴雄は眼を閉じた。自然に心が和らぐ。

（もう首輪はいらん。それよりも——）

と、昼間一度着せて見たおしゃれ下着のかずかず、そのあで姿を脳裏に浮かべるのだ。

透けるような薄いハートバタフライ。網生地を加工したダイヤサポーター。はおらせたレースのエキサイトスリッパ。また、素肌にはかせた舶来の網タイツなど——。彼がひそ

かに買ったこれらの品は、びっくりするほど高価だったが、それなりの値打があった。

どれもこれもすてがたい魅力にあふれ、羞じらった尚子の姿態は、ドラマチックに、妖麗な影絵を描きだしたのである。

晴雄が甘い夢にふけっているあいだに、台所の物音がしなくなった。気づかれないように、うす目で、彼は尚子の動きを観察した。

跡始末をすませた彼女は、あかりを消してすぐに低い姿勢になった。音たてて鎖を引きずり、こちらへ向かってやってくる。

彼が寝ている簡易ベッドのそばへくると膝を使って這うのをやめ、まっすぐに足を伸ばして完全な四つん這いになった。豊満なおしりをぷりぷり動かし、二度三度、部屋の中を往き来する。もうすっかり四ツ足の動物になりきっているのだ。

済みました！ という言葉の代わりに彼の足に唇をつけ、さらに指を含んでやさしく吸った。それがメス犬のあいさつなのだ。彼は尚子に対していだきつづけた自分の不信感が急に恥ずかしくなり、同時に、身も心も、おのずと甘くたゆんで、本来の愛情がにわかに勢いを得て全身をくるみ、暖かい豊かな波調が、胸のうちをくすぐりはじめる。



尚子！ 感きわまったように小さく叫んで起きあがった彼は、尚子の姿を夢うつつで眺め、忘我のうちに伸ばした手でうなじをまさぐり、首輪をはずした。

とたんにいっそう強く彼の倒錯の性をさそい、願望がいちじるしく盛りあがってきた。  
(いいじゃないか、相手は尚子だ。足指をなめて隷属することを誓ったこともあるのだ。この悦服、むしろ本望だ！)

結論的に言うなら、晴雄は、彼自身の本質的な被虐の性にほろぼされたのだろう――。

すでに故人となった作家、尾崎士郎の戦後の作品に「ホーデン侍従」というのがある。命ある限り太公につれ添い、重要な役割を果たしながら、ついには邪魔物扱いの非運に甘んじ、肝心の門戸をおとなうすべもない。

「ペニス傘<sup>かさ</sup>さし、ホーデンつれて……」

文中に挿入されたこの俚謡<sup>りやう</sup>には、ユーモラスなエロティシズムのなかに、宿命的な「ホーデン侍従」の悲哀感を織り混ぜ、巧みに語りつくされている。

あらゆる束縛から解放されたとき、明敏な尚子は、この男の急所に狙いをつけたのだ。従順なメス犬の攻撃を受けた晴雄は、あが

く力を失い、一瞬にして死命を制され、長くのびてしまった。

ほんの一、二分、いや数秒かも知れない。そのわずかな隙に敗者が勝者に入れ替わった手近に拘束具があったことも晴雄には不運だった。尚子は鎖のさきにつないである麻縄を解き、す早く彼の手足を縛った。

「あッ。な、なにをするんだ、尚子――」

尾を引く疼痛に表情をゆがめ、身もだえてわめく晴雄の顔へ枕を押しつけ、尚子はさかさまに馬乗りになった。

窒息させてしまつてはまずい。適当に圧迫を加減して男の体力が衰えるのを待ち、そのあいだも尚子の手は機敏に動いた。

ついさき、男の死命を制した急所に細い鎖を巻きつけ、力まかせに締めあげた。

グワーツと、男は奇怪な声でうなった。

ネックレスを扱うような慣れた手つきで、尚子は男の首へ恨みのこもる首輪をはめた。ついでに口へもバンソウ膏を貼り、にんまりとした尚子は、上と下を連結した鎖の中央にぎり、まるはだかのままスックと立った。

自由を奪われ、意気消沈とした男など、もはや足もとにころがる小犬にひとしい。ベッドから転落してうめくのをグイと踏みつけ、

腹の上へどっしりと乗っかる。

「どう！ ご感想は――？」

かえり見て、尚子は頬に冷笑を浮かべた。

「ちよっとした油断が運のツキよね」

鎖をつかんでじわじわといたぶる。鼻孔がうめき、男の四肢にけいれんが走った。

「これじゃおもしろくないわ。そうだ！」

襖をあけて檻の中へはいり、尚子は彼が考案した舌かせと、細くやわらかい皮の紐を選び、長い紐を適当に切った。

短い紐で縛り直してから鎖をほどき、紐のさきへ電気アイロンを箱ごとゆわえ、

「その重荷に耐えられるかしら。駄目だったら、これはちよっとした見ものだわよ」

ふふふと笑い、尚子はさも憎らしそうにぐるぐる巻きにしてしまった。

まったく抵抗する意思のない男の胸にまたがり、紐のさきをしっかりとぎった尚子は、

「舌をお出し。もっとよ。さもないと……」

容赦なく紐を引っ張り、うめく口からバンソウ膏をはがした尚子は、哀れっぽく、長々と伸びた晴雄の舌へ金具をはめてしまう。

「アーンと口をおあきよ。きのういたたた暖かいお水、あれ、とってもおいしかった！ だから、こんどはお返しに、わたしがおもて



なしをしましうね。オッホッホホ」  
 たちはだかつて男を見おろす尚子は、完全に傲慢な女に還っていた。

## (10)

明るい声がアパートの一室にこもった。  
 「どう? ワリとおいしいもんでしょ」

ぐっしよりとぬれ、よごれた男の顔を踏みつけた尚子は、はみ出した舌に足の裏をこすりつける。そして手足を縛った縄を解く。

「ねえ、立って歩いてても這っても、どちらでもいいからお散歩をしましうよ」

死命を制し得る紐を左の手に、右手に男のズボンから抜き取ったベルトを下げ、尚子

は冷たい目で男のようすをじっと見た。

悪かった。赦してくれ! そう叫んでも声にならず、晴雄は喉声でわめきつづける。

「うるさいわねえ。ぐずぐずしていると!」

いきなりかざしたベルトの鞭が、つづけさまでに二度三度、小気味のよい音とともに男の太腿にはね返った。

晴雄は両手をふりまわして必死に暴れた。

しかし彼の抵抗は、はかなくとぼしい。

彼女の左手の紐が盤石のおもしとなり、立ち上るのはもとより、引っぱって這うのもくるしいらしい。

彼は、手の生えた爬虫類のように身をくねらし、鞭に追われて檻の中へのめりこんだ。

## 〔伝言板〕

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます故、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替(切手代用は一割増)にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留(封筒は郵便局で売っています)にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分(前篇写真と絵画特集)第二回分(続篇小説絵画特集)第三回分(前篇続篇収録小説特集)のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。

自分もいっしょに押入へはいり、尚子は彼の手足を四方へつないだ。首輪の鎖と急所を捕えた皮紐が、前と後ろへピーンと張った。

「これでおしまいね。ご気分はいかが?」

ゲラゲラ笑い、尚子は、彼がそうしたように上の穴から檻の中をのぞきこむのだった。

彼の部屋へきて、不覚にも薬をのまされて眠り、それから五十数時間ものあいだ、彼女が体験したさまざまな出来事は、気が変にならないのがふしぎなほど、骨身にこたえる無残な仕打ちだ。奪われた服を身にまといながら、こうして元どおりの人間らしい姿になれたのが信じられない。

無然として感懐も新たに身仕度をととのえた尚子は、すぐに室内をさぐりはじめた。

「ア、あった。これでやれやれだわ。こんなもののお蔭で犬の真似をさせられちゃった」

未現像のフィルムに光を当て、手紙をまとめた彼女は、彼の姿を見てクスクス笑った。

「気がむいたら遊びにくるわ。お望みどおりわたしの犬にしてあげます。じゃーね」

明るい声をひびかせたあと、笑いをこらえて階段をおり、建物を一歩離れて彼女はもう本来の小森尚子になりきっていた。



カ ッ ト ・ 秋

勲



小 説

# 奇 病 結 婚

☆ 懸賞入選作品 ☆

牧 麗 子

—— (一) ——

午前十一時頃でした。人の気配に振り返ってみますと、朝、会社へ出かけたはずの夫がびしょ濡れでつつ立っているのです。

「あらッ、どうしたの？ 会社へは……」

そう言いかけて、あたしは彼の表情があまりにも陰惨なのにドキリとして、後の言葉が出ませんでした。夫は入口のドアをゆっくりと閉めると、キーを降ろしてしまいました。そして、妙に居坐った目であたしを見つめ、

かすれた声で言うのです。

「令子、……話があるんだ」

彼はなんとも気怠そうな動作で、居間に入り、窓を閉め、カーテンを張ってしまいました。今日は雨が酷くて蒸し暑いお天気でしたから、この締め切られた部屋に入ったとたんに、肌がジツトリ湿ってくるのでした。ともかく夫の濡れた衣服を取り換えてやらねばなりません。ところが、彼は突然、あたしを強く抱きしめて、強引に接吻し始めたのです！ 夫はあたしより、ずっと、からだが小さいも

のですから、このような時には、何ともおかしな姿勢になるのでした。彼は口づけしたまま、あたしの頭を両手でしっかりと掴んで、自分の方へグイグイ引き寄せせるのです。そしてネットリした唾液が、厚い唇の動きにつれてあたしの顔や首筋の素肌のいたる所を、ネバネバと犯してゆくのでした。

わたしたちにとって、水びたしの神経というものは、あらゆる刺激をエロチックな興奮に変えてしまうものなのです。夫婦生活が未だ新鮮だった頃、あたしはこの欲びを、存分



に味わうことができたものでした。

林の外に出ると、気にかけていた厚ぼったい雲が急に光を閉め出して、大粒の雨が地上を叩き始めたのです。ここは観光地だとは言うものの山の中でしたから、間近の休憩所まで走って十分もかかりました。目の先が真白で、まるで水の中を泳いでいるようでした。苦しくなって口を開けると、水滴が舌の上にビシャビシャ流れ込んでくるのです。着物が肌にピッタリくっついて、冷たさに筋肉が縮まりました。

それでも夫に手を引張られて、やっと小屋まで辿り着いたのです。ここには誰もいませんでした。あたしは、白木の乾いたベンチにびしょ濡れのからだを投げ出して、大きく胸で深呼吸しました。そして鼓動が静まってきた時、気がつく、あたしは普段以上に女らしい女になっていたのです！ 下着の底に水が溜って、それが体温に暖められて、ジクジク肌が疼いているのです。まるで、全身が子宮の粘膜になってしまったように、とても敏感になっているようでした。あたしは抱き起こされて、やはりぐしょぐしょの夫に抱かれました。そして乱暴にスカートを脱がされパ

ンティを剥ぎ取られてしまいますと、からだが余計に火照ってブルブル震えます。そのうちに濡れた土の床にドスンと押し倒され、二人とも燃えに燃えたのでした。濡れた衣服や蒸し暑い季節は、夫と共に私にとっても、催淫力を発揮するものと知ったのです。

夫は、ゆっくりと抱擁を解きました。不思議なことに彼は、もの悲しい目つきになっているのです。そして壁にもたれ掛かりながら畳の床に坐り込み、ようやく話を始めたのでした。

「……おまえは、このアパート暮らしをどう思っている？ 他人を見て、どんなことを考えていた？ ここには奇形の人が多い、ということに気づいていただろうね？」

あたしは頷きました。この建物は設備が良くて、トイレやお風呂などは各家庭ごとに完備しておりましたから、他人と交わる機会ほとんどなかったのです。でも、孤立生活がいくら閉鎖的なものとはいえ、完全に独立合った生活ができるはずもないのです。あたしは何人もの手の指のない人や、からだ全体が真白な人。眼玉が始終ヒクヒク動いて落着かない人。骨格が洋弓のように二段に湾

曲していて、足をガクンガクンと引擦りながら歩いている人……などがこのアパートに住んでいることを知っていました。

この人たちを見ることは本当に辛いことでしたから、あたしはなるべく顔を合わせないようにするのです。だから、親しく交際している家庭は、ここには一軒もなかったのです。そしておかしいことに、今まで、このことについて夫と話し合う機会はほとんどなかったのです。

「何故、彼らはあんなのか？ そしてわたしたち夫婦は、彼らとは全く別種の人間なのだろうか？……こんなこと、考えたことあるだろう。実際、これは考えるべきではなかったし、又、知るべきでもなかったのだが」

あたしには、夫が何を言おうとしているのか見当もつきませんでした。あたしたちは五年前に見合い結婚をして以来、ずっと平穩無事に暮してきたのです。それなのに、夫はこの生活に、破壊的な精神を吹き込もうというのでしょうか？ それとも、外向的なパラエティを付け加えようというのでしょうか？

「おまえは、松山哲治さんのことを、どう思っている？……信用しているのかい？」

松山さんというのは、あたしの育ての親な



のです。つまり、あたしは捨て子だったので  
す。夫も同じように孤児であり、寺田さん  
という方によって育てられました。ところが、  
松山さんと寺田さんとは同業の開業医で知り  
合いだったので、それが縁になって、あたし  
たちが結ばれることになったのでした。この  
二人のお医者さまはとても親切で、今でもあ  
たしたちのことを気にかけてくれて、何かと  
面倒を見てくれるのです。実は、このアパー  
トは松山さんの所有物で、それをあたしたち  
のために、無料で貸し与えてくれているので  
した。こうした立派な感謝すべき方に対して  
夫は何を言おうというのでしょうか？

「できることなら、わたしは何も言いたくは  
ない。しかし、知ってしまった以上、隠して  
おくわけにはゆかないのだ。……今朝届いて  
いた署名なしの手紙だが、おまえ、これが誰  
からのものか知っていたかい？」

夫は胸の内ポケットから、皺だらけになっ  
た白い角封筒を取り出しました。

「これは、原田君が出したものののだ。彼が  
死ぬ直前に書き上げて、ポストに投げ入れた  
ものらしいのだ」

原田さんというのは、古くからの夫の親し  
い友だちで、近くのアパートに住んでいらし

た方でした。ところが、一昨日、この方は街  
頭でヤクザにいちゃもんを付けられ、短刀で  
おなかをブスブス突き通されて、そのまま死  
んでしまわれたのです。きのうお葬式が行な  
われました。この方も孤児で、しかも独身で  
したので、桜木さんという育ての親であるお  
医者さまが、何から何まで面倒を見てくれた  
のでした。

夫は封筒の口を開いて、中から薄汚れたメ  
モ用紙を取り出しました。細かい字がギッシ  
リ並んでいます。

「この手紙には、面白い事が書かれているの  
だ。おまえ、読んでみなさい」

あたしは差出されたそれを、受け取りまし  
た。半紙大の薄い紙が全部で十枚以上もあり  
ひどく崩れた文字が乱雑に埋められているの  
です。夫にこう言われなければとても読む気  
にはなれなかったでしょう。

## — (一) —

△このメモが、間違いなく、君の手元に届く  
ことを祈る。ひょっとしたら、僕はもう長く  
は生きられないかもしれない。というのは、  
大変な秘密を知ってしまったからなのだ。今  
は時間がなく、詳しいことは書き尽せない。

しかし、その要点だけはできるだけ正確に、  
君に伝えておきたいと思う。

いったい、実践的な科学者ほど陰険な存在  
が他にありうるだろうか？ その科学が生なま  
身の人間を取り扱う際には尚更なのだ。僕た  
ちの知っている三人の医者、つまり、寺田氏  
松山氏、桜木氏は、ひどく生真面目で、博愛  
的で、親切であつたのだが、そのことの理由  
はごく単純に考えたとしても、簡明に終始し  
てしまうということにはなかったのだ。彼らは  
理性的な文化人であつたから、ある目的に向  
ってルールを敷くために、必要に応じて人望  
家になることができたのだ。そして愚かにも  
僕たちはすっかり騙されていたのだ。

この医者たちは、僕の知ったところによれ  
ば、その方面ではかなり著名な遺伝学者であ  
つた。彼らは科学者として、この方面に異常  
な関心を示していた。人間についての遺伝の  
研究は、男女の交配の累積による家系図的研  
究が主要なものであり、その他、双生児を使  
った研究法などもあるそうだ。そしてこれら  
は唯一の合法的なやり方らしいが、しかし同  
時に、効率良い、唯一の方法でもなかったの  
だ。つまり、個々の偶然的な実例による資料  
は、量的にも質的にも貧弱なものにすぎなか



ったからだ。ところで最近、全く別の方法が開発され、インド出身のゴビンド・コラーナとかいう博士の研究は、それを一層押し進めたそう。彼はDNA遺伝子を化学的に合成することに成功したということだが、これ以後、遺伝子に対する人工的加工技術はいよいよ急テンポで活性化されることとなったらしいのだ。今や、遺伝の研究は遺伝子の研究によって根底から基礎づけられ、男女の交配による生殖細胞の合体、成長だけでなく、放射線等によるその人工的な加工や、更には全面的な生命合成が問題とされるまでになっているのだ。だが、これらの研究手段は拡まったとは言うものの、あくまで研究室でのナルシズムにすぎなかったのだ。これらは、人間の肉体とは無関係な研究に陥りがちであったのだ。生化学者は細胞合成にすべてのエゴイスティックな欲求を満足させることができたが、生理学者や医学者はそれだけでは気がまず、人間と遺伝との具体的な関係を知りたがったのだ。しかし学問研究の自由は、近代ヒューマニズムによって排斥されていたのだ。

松山哲治氏の祖父である賢全氏は、明治中期の有力な遺伝学者であったそうだが彼は研

究に当たって、いつでも、この人道的障害にぶつからざるをえなかった。当時は細胞合成の技術は皆無に近かったから、当然、彼のやり方は家系図を中心にしたものになっていたらしい。しかし明治の常識は既に離婚を推奨していたから、彼の仕事には初めから、未来は少しも見つからなかったのだ。なぜなら、遺伝子の発見、型の確定には離婚の対立現象である近親婚が、最適であったのだからだろう。近親婚は、特殊な上層階級にならば当時でも日常的だったのだが、そこには反学問的な権威があつて、一介の学者ふぜいには手が出せなかった。しかし彼はこの研究の必要性を強く感じて、ある実験を思いついたらしいのだ。それは、失敗したならば間違いない、彼の命取りになるような危険なものだった。つまり、近親婚を人為的に、自由に組み合わせてつくり、子供を次々と生ませることによって、信頼すべき資料を作成してゆくことなのだ！

例えばここに一組の夫婦がいるとしよう。この夫婦に子供が生れる時、医師または産婆が立合う。子供が生れたら、両親には『残念なことですが、死産でした』と告げる。ところが当の子供は生きていて、第三者の手によ

って養子として、あるいは実子として育てられるのだ。だから、この不運な親たちはいつまでたっても子宝に恵まれることはなく、淋しく死んでゆかねばならない。一方、子供は成人してから、やはり同じ道の上で育てられた青年と結婚させられる。この場合、彼らは互いに全く知らない同志の場合が多いのだから、それが兄と妹だろうと、姉と弟だろうとあるいは親と子の間柄だろうと、自由に組み合わせができるわけだ。こうして合法的に、かつ確実に血族結婚が押し進められてゆく。しかも何代にも亘って、なのだ！

この恐ろしい実験を始めたのは賢全ひとりだけではなく、そこに秘密のグループが結成されたのだった。現在、そのメンバーのうち解っているのは、松山、寺田、桜木の三人だけなのだが、他にも何人か、あるいは何十人かいるのに違いない。それが一人当たり約二十組、つまり四十人ぐらいの実験カップルを自力で養っているらしいから、この三人だけで被害者は百二十人を越えることになる！このような医者に限って、資力が絶大なものだから、こんなことがたやすくできるのだ。しかし、実際には想像できないほど多くの人々が、このような目に合っているのに違いない



のだが……。

この実験の効果はてきめんに現われて、ほら、君のアパートに住む人たちのように、奇形やら奇病やらが続々と発生したのだった。彼らは、皆、自分たちの欠点を隠そうとばかり努めているから、お互いの境遇について、ますます無智になってゆくばかりなのだ。

全身性白皮症、先天性表皮水泡症、青色鞏膜、全色盲、先天性眼球震盪、遺伝性難聴、血友病、先天性短指症、裂手、裂足、指趾過多……等々を始めとする、あらゆる奇病を、君は見る事ができただろう。僕が見たもので特に印象に残ったのは、三十五、六才の陰鬱な女性だったのだが、その胸が奇妙なふくらみ方をしていたのだ。それは、『先祖がえり』だった。彼女には乳房が、大小四個もあったのだ！ それはかなり大きかったから、歩くたびに上下に揺れて……思わず、吐気を催したほどだった。

この惨劇の中で、最大の被害者は、……言うまでもない。そして、これはいちばん重要なことなのだが、僕もまた被害者だが、おそらく、君たち夫婦が実は兄と妹との関係であることは、間違いない事実だろう……。

以上が僕の知っている内容だ。……今、僕

はどうしてよいか解らない。これを世間的に

さらけ出して、彼らを訴えるべきだろうか？ それとも自分の手の筋を眺めつつ、永久に黙認してしまふべきだろうか？ あるいは、秘密を保ったまま彼らを説得して、実験を中断させるべきだろうか？……今の僕には全く手段が解らない。しかし、一応、君にこれを知らせておくことにする。ところが、僕が真実を知ってしまったという事に、彼らは気がついてしまったらしいのだ！ 僕は何らかの圧力を受けるに違いない。場合によっては、殺されるかもしれない。しかし、その危険から強いて遁れようとは思わないのだ。この事実を知ってしまった上で、更に長生きしようと思うほど僕は気丈ではない。僕自身も何らかの奇病であるのに違いなく、それはいつ発現するのか解らない貯蓄された震源地なのだから。だから、今では、何がどうなろうとたいして気にはならないのだ……。

ところで、僕がどのような方法でこの事実を知り得たかという事は、長くなるし、今は気力もなくなったので、省くことにする。このことは機会があったら、君に直接話すことにしよう。僕は当分家には帰らないつもりだが、気が向いたら連絡するよ。では、奥さ

んによろしく。

原田 信

### (三)

何ということでしょう！ でも、本当なのかしら？ 薄気味悪いことですが、そう言われてみれば、なんとなく思い当ることが確かにあるのです。

原田さんという方は、実に真面目な、大人しい方でしたから、ヤクザと争って刺されるなどということは、全く考えられなかったのです。だからこの事件を容易に信じる事ができなかったのです。血まみれになって、両目をカッと見開いたまま硬直している歪んだ顔を見て、あたしは最初それが誰なのか見当もつきませんでした。夫の話によれば、あの方はおなかを六カ所も刺されて、その上グリグリ抉られていたため、内臓の一部が盛り上ってはみ出し、まだ温い血に浸されて垂れ下がっていた……ということなのです。そして、この事件が、無惨なものであればあるほど、ますますこれが原田さんとは関りのないものに思えてくるのでした。

ところで、あたしは結婚してから今までに二回身をもって、松山さんの病院で出産したのですが、いずれも死産だったのです。胎



児は順調に成長し、生まれる直前までそれはそれは元気に、おなかの中でモコモコ動いていましたのに。……松山さんの話では、赤ちゃんは出生時に脐の尾が首に巻きついて、窒息死したのだということでした。でも、それが本当だったのかどうか……?

それにしても、あたしたち夫婦が兄と妹だなんて、とても信じられないことです。随分と、顔立ちやからだつきが違うのです。あたしは夫よりも背が五センチも高く、やや肥り気味なのに、彼はガリガリに瘠せていて、頼りないくらいヒョロヒョロなのです。あたしは全身毛深く、目鼻立ちが少々きついのに、彼はまるで反対で、目立たない優しい顔立なのです。只、二人とも、あの遊びが大好きだという点では、まるで双生児ふたごのように、一致しているのですが。

でも、ここに一つだけ気掛かりなことがあります。最近、夫の様子がおかしいのです。夫は瘠せているものの至って健康で、最近まで毎晩欠かさず、あたしをうっとり痺れさせてくれたものでした。ところが、ここ一カ月、いいえもう二カ月にもなるでしょうか、彼は全くダメになってしまったのです。あたしは最初、夫は疲れすぎているのだと思いま

した。というのは、彼の指がひとりでピクピク動きだしたり、あらゆることに對して気が乗らなくなったりしたからでした。しかし夫のからだの異常は一向に治る気配が見られないのです。今では、手首から先と足指とが無意識のうちにヒクヒク震えだし、頭の方もスッキリしないらしいのです。寺田医師に診てもらったところ『これは慢性的な疲労によるものです』としか仰しゃいませんでした。薬の力によって、この奇妙な症状は一時収まりましたが、しかし少し日数がたつと、又、元のように戻ってしまうのです。

今では会社に行くことさえ辛いようです。だから彼はこのところ全く意気消沈してしまい、そのせいなのかどうかは解らないのですが、彼は男性としての能力を失って、ひどく老衰したようになってしまったのです。

あたしは胸騒ぎがしてきました。原田さんのメモから目を離し、夫の方を見ますと、彼は静かに目を閉じて瞑想に耽っているようでした。その植物的に丸まったからだを見て、あたしは軽いめまいを覚えました。ずぶ濡れの貧弱な夫が、このままの状態で生れてきたような、生臭い奇形児に思えてきたのです。からだの組織が未発達で、只、神経系統だけ

が漸く成長することができた、未熟児のようなのです。彼の栄養を、あたしが全部吸い取ってしまったから、あんなに頼りなくなってしまうのでしょうか。遂には、彼は意識だけしかもたない達磨さんになるような気がします。そうなった廃人の夫を、あたしは心から愛し、同情して共に泣き、優しくいたわってやり、何から何まで面倒を見てあげたいと思いました。

でもよく考えてみれば、現実には、そんなロマンチックな生活は、ほんの少しの間ですら望めはしないでしょう!

あたしは夢みることは大好きなのです。つまり、夢というものは、いつでも現実から区別されていて、あたし自身は積極的な施行者か、又は消極的な観覧者で居り得るのです。ところが今の夢は、そのどちらをも許さないのです。というのは、あたしが患者の妹であるならば、あたし自身も何かの遺伝を受け継がされて、土中の偏った種子を胸に宿しているのに違いないのです……。あたしも、又、夫のように、からだヒクヒク震えてくるかもしれないのです。そのいやらしさは、あくまで完璧なダイヤグラムにそって拡大されるのですから、病人同志は互いに慰め合いつつ



湿った蒲団の底にジッと時間を硬直させていなければならぬのです。もしそうなるのだったら、とても我慢できないでしょう！ 自分が惨めになるのは、たまらないのです！ この時、夫の声によって、あたしは彼の正面に引き戻されました。不思議なことに夫の態度は少しも悲観的ではないようなのです。「おまえ、このメモに書かれていることを、信じるかい？」

「ええ？……何とも言えませんが、まるっきり否定することはできませんわ」

「そうだろう。わたしは、全面的に信用しているのだよ。与えられた真実は、素直に受け取るべきものだ。そこから逃げようとしてはいけない。濁った空気は濁った精神によってのみ快く変質させられるのだ。わたしは、この奇怪な病氣のために長生きはできないだろうし、又、おまえにしたって同じことだろう……しかし、おまえがわたしの妹だと解った時、わたしは久々に興奮したのだ。今まで、実の妹を二度も妊ませてきたわけだからね。そう思ったとたんに、消えかけていた情欲が気前よく舞戻ってきたのだ、ほら！」

夫はズボンのファスナーを開いてみせました。久々に見た夫らしさに、わたしは胸がつ

まる思いでした。

「令子、おまえはわたしの妹なのだよ。これから、わたしのことを『兄さん』と呼んでおくれ。さもないければ、また、きつとたちまち老け込んで、バカになってしまふのに違いなのだよ、いいね！」

夫は顔を引寄せ、あたしの両腕をグッと握りました。すると、不快な熱気の中で、ねっとりした悪魔が、そこから全身にドロドロ流れ込んできたのです！ からだがいつものまにか小刻みに震えていました。でも、必ずしも穢らわしいこととは思えませんでした。もしかしたら既にあたしは、ここから抜け出ようという氣力を失ってしまったのかも知れません。全身から力が抜けて、氣が遠くになってゆくようでした。

「奇形なのは、わたしたちだけじゃない！

人間は、文明人は多かれ少なかれ、遺伝的にせよ後天的にせよ、皆、奇形と奇病とに既に犯され、そしてこれから、更に犯され尽されようとしているのだ。しかし、異常を正しく意識することができるのは、わたしたちだけなのだ。だからこそ、わたしたちは、悲惨さを先取りして、それを満足に変えてしまうことができるのだ！ あの巧妙な医師団によつ

てモルモットにされたことは、かえって好都合だったのだよ。……わたしたちが兄妹であることは、この上なく喜ばしいことだ。なぜなら、イデオロギーはいつでも実在し、そして下部構造と対立できるからなのだ。近親婚が悪習だなんて、どこの道徳家が言い出したのだろうか？ 奇形児が不幸だなんて、誰がこじつけたのだろうか？ そんなことは今に、皆迷信になってしまふに違いない。わたしたちは新しい規範を、自ら作り出してゆくところの、より強力な価値基盤を作り出してゆくところの、まさに実践的なパイオニアなのだ！……」

あたしはボーッとしたまま、夫の演説を聞いていました。夫の言うことを、抵抗なく受け入れていました。夢と現実との区別は、もはや、意味をなさなくなっていたのです。

(四)

その直後、何が起ったのか解りません。夫の言葉をたぶん途中までは聞いていたようなのですが、畳に坐ったまま氣を失ってしまったらしいのです。からだがりりり痛んで、あたしは意識を取り戻しました。

目の前が真暗です。どうやら目隠しされて



いるらしいのです。それに手足が締めつけられて、少しも動かすことができないのです。いったい、どうしたのでしょうか！幸いにも口は自由でしたから、夫の名を呼んでみました。すると、すぐ耳もとで、冷たい声が返ってきました。

「令子、そのまま聞きなさい。おまえには心の入れ換えが必要だ。尤も、その大部分は既に終えてしまっているようだが。……しかし、おまえは今のところ、状況に対して第三者にすぎないのだ！ だからわたしの立場ほど深刻でも決定的でもないのだ。おまえは自分自身の現実に出会った時、それに耐えられるだけの心の準備を今からしておかなければならない。おまえは逃げることを考えてはいけない。只々、居坐ることだけを考えなければならぬのだ！ わたしたちにとって、積極的に生きる道とは、与えられた場に居坐ること、それだけでしかないのだからね」

夫の声が終るやいなや、あたしは顔を持ち上げられて布切を口の中に押し込まれ、その上からストッキングのようなもので、堅く顎のまわりを固定されてしまいました。暗闇の中に、たったひとりで取り残されてしまったのです。どうやら、あたしは両手両足を縛ら

れて、畳に横向きに転がされているらしいのです。紐が肌に堅く食い込んでいて、痛いやら、苦しいやらでたまりません。夫にこんなことをされたのは初めてです。あたしは腹が立ってきました。

結婚生活は成るようにはか成りません。主婦というものは、待つことを職業にするものなのです。平凡な女は、いつでも不平を並べながらも結局、夫に従わなければならぬのです。あたしが為す生活を送っていたのは、記憶によれば、子供の頃だけなものでした。その頃は、あらゆる瞬間が非連続的に主体から客体へと、自由自在に変わりえたのでした。だから加害者と被害者はあくまで同等で、その一方を選ぶのはおよそ偶然的な恣意でしかなかったのです。

あたしは、近所の腕白どもと一緒に、ギャングごっこをしたものでした。これは七、八人の子供が二つのグループに分れて、互いに相手の側の宝物を盗み合うゲームなのです。当時は敗戦後でもない頃で、空地がそこらに豊富にあった時代でしたから、あたしたちは自然と大胆になったものでした。時たま相手のグループの一人を捉えて、捕虜の拷問をするのですが、あたしはからだが一ときわ大き

く力も強かったもので、いつでもボスだったのです。不幸な生贄が自分よりかわいい女の子であるときには、あたしは一層奮い立ちました。両手を後手に縛った上で、からだのいたるところを抓ったり、髪の毛を引張ったり、ある時には随分とエッチなことを、意地悪く笑いながらしたものなのです。

だからあたしは相手のグループから特にしつこく狙われ、捕まった時には大変な目に合いました。まっ裸にされて両手をきつく縛られ、首に縄をつけて四つん這いに引張り廻され、そのまま、使えなくなった暗い防空壕の中に、閉じ込められたりしたことさえあります。初めは怖かったのですが、そのうちに、縛られるのが楽しくなってきました。だからわざと捕まったりすることもありました。大声で泣いたりすると、皆、びっくりしてやめてしまうものですから、あたしはできるだけ大人しくし、かつ彼らを荒々しく勇気づけるように、悪口を並べたてたものなのです。

一体に、大きい男の子は何をするにしても優しく手かげんしてくるのですが、あたしと同じ年頃の女の子ときたら実に残酷で、ある時には全身が真紅に腫れ上がるまで引っぱたかれました。こんな時にはワーワー泣き



だして、男の子に助けてもらったものなのです。でも、その翌日になるとケロリとして、またこの遊びに耽ったものなのです。

だから、自分がこれと似たような目に会わされているらしいことが解った時、あたしは子供の頃のことを思い出していたのです。すると、今までのムカムカしていた気持ちが少しずつ消えてゆきました。

もちろん、子供の遊びと現在の境遇とは全く違います。既に常識をもってしまった人間は、自動的に心を狭め、禁欲的になり、その埋め合せとしての自由を求め始めるからなのです。だからあたしにしても、素直にこの状態を認めることはできませんでした。でも、あたしは夫を信頼していました。だから腹立たしくは思ったものの、決して大袈裟に不安がったりはしなかったのです。

これは何かの気まぐれで、今すぐにも楽にしてももらえるのに違いないのです。夫は恐怖のために、頭が混乱して、腹いせにあたしをいじめているのです。そして、それを楽しんでいるのに違いないのです。今後どんなことが起ころうとも、あたしは彼の保護者になつてやらねばいけないのですから、いつでも、寛大に振舞わなければならぬのです。

それから、随分長い時間がたちました。正確な時間は解りませんが、もう一時間以上はたっているのに違いありません。耳は自由でしたから、あたしはこれのみに神経を集中させていましたが、外を通る車の騒音と時計の機械音しか聞こえないのです。あたしは次第次第に苛立ってきました。

あれ以来、夫はこの部屋にいるのかいないのか、……さっぱり手ごたえがないのです。待つということとは、何と辛いことなのでしょう！ いったい、いつまでこのままの状態でいなければならないのでしょうか？ ほんのちよつとでも気を許せば、無限の未来から飛来する重々しい妄想に、全身がスッポリ包まれてしまうのに違はなく、それが怖いのです。全くのところ、こんな目に合わされるなんて、ひどすぎます。

確かに、あたしはこのような遊びがあることを知っていましたし、それについて、決して嫌悪したりはしませんでした。でも、自分からやってみようとは思ひもよらなかったのです。このような暴挙は、一種の夢にすぎないのです。それは大人にとっての忘れられつつある情念や、連合しながら霞んでいる記憶などと、同じ程度の迫真力しかもっていない

のです。少くとも、そうでなければならぬのです。

夫は何と粗雑な誤解をしているのでしょうか。あたしは彼のオモチャではないし、又、この遊びに、同意したわけでもないのです。それを、失神につけ込んで、こんなことをするなんて。自由になったら、懲らしめてやらなくちゃ！ 腕力では、あたしの方がズツと強いのですから。

もう、我慢できません。ああ、気が狂いそう！ でも口もきけないし、どうしたら良いのかしら……。あたしは不自由なからだを無理矢理バタつかせました。でもすぐに疲れてしまいます。少し休んでから、もう一度やってみました。すると、足音が近づいてくるではありませんか！ あたしは急に嬉しくなつて、更に激しくからだを動かしました。その時いきなり、胸が潰れるほどの重い痛みを覚えて、ほんの一瞬間、息が止まってしまいました。

「何てことだ！ やはり、何も解っていないんだ。……そんなに自由になりたいかい？ だったらいっそのこと、ありのままの姿を、自分自身の目で確かめてみるがいい！」  
いきなり、目隠しが外されました。眩しく



て、顔の正面に穴があげられたようです。でも、部屋の明りに馴れると、夫があたしの顔のすぐ前に立って、じっと見下しているのがまず目に入りました。彼は全裸で、よみがえった情欲をむき出しにしたまま、両手首をヒクヒク震わせていました。そして、あたしは……あたしは目を睜りました。ああ、あたしも同じく丸裸にされていて、しかも白い細引で雁字搦めに縛りつけられていたのです！

両腕は手首を後で組み合されて固定され、その上から針金のように堅い縄が胸の回りをお乳の上と下に二本ずつ、そして腰のくびれに四本も喰い込んでいるのです。両足は足首を結びつけられ、正座するような形に折り曲げられて、太ももと脚と腰とがしっかりと縛りつけられていました。からだは縄目にそって息苦しく溢れて、なんとも奇妙です。お乳などは、上下からキリキリ締め上げられて、腕げ落ちそうにプックリふくらみ、艶々していました。太ももの外側も張り切って、なまめかしく光っていました。

あたしは初めて見る、成熟した自分の被縛の姿に、知らず知らずにウツトリと見とれておりました。こんなにも自分のからだが美しいとは、今まで思いもよらなかったことなの

です。そしてこのように、無惨な姿だからこそ、よけいそう思えるのでしょう。今まで腹が立っていたことなど、すっかり忘れてしまいうほどでした。

夫の顔を見上げますと、彼はなんとも気が抜けたような表情になっていました。あたしがいとも簡単に順応してしまったので、力を落としてしまったのに違いありません。でもあたしの顔の前に覆いかぶさるように坐り込むと、優しくキスしてくれました。

「おまえは、なんて物解りが良いんだろう。いいことだ」

そう言いながら、猿轡を取り除いてくれました。でもまだ、からだは自由にしてはくれなかったのです。

「もう少し、厳しくしてみよう。大人しく言うことを諾ぐんだよ、いいかい！」

あたしはまだ、この拷問が続くことを知って、思わずドキリとしました。でも、恐怖感に圧倒されるようなことはなかったのです。

夫は、あたしの足首と太ももの縛めを解くと、こんどは胡坐あぐらを組ませて両脚を緊縛し始めました。あたしの内股はこのためとても風通しが良くなって、クシャミが出そうなくらいなのです。

夫は体力がないために、寝床では決まってあたしの重みで足搔き苦しまなければならなかったのです。だからこれは、今までのうさ晴らしでもあるのでしょうか。あたしにしても、このようにされることは、少々癢でもあり、又、頼もしくもあったのです。あたしは無抵抗のまま夫の縄目を受けてゆきました。そもそも彼は腕力がありませんでしたから、強く縛れるはずもなく、たいした苦痛にはならなかったのです。

夫は仕事を終えると、肩で息をしながら暫く休んでいました。それを見て、あたしは思わず吹き出してしまいました。彼がきつい目で睨みつけます。

「だって、あなた。そんなに疲れた顔をしているのですもの。……ちよっと、無理なのじゃないかしらね……」

夫はふくれ面をして、次の作業に取りかかりました。あたしはこんな彼を、今でも、とてもかわいいと思うのです。夫には、肉体的に危険な冒険は何もできないのです。だから少しも恐れることなどないのです。これはほんの遊びにすぎないのです。

女親分のあたしは捕虜になって、相手の男



の子に折檻されているのです。宝のありかを言わなければ殺しちゃうぞって。それ、宝はすぐそこにあるじゃないのよ、目の前に……その気になれば、すぐに取れるじゃありませんか。

男の子は、女の子が大胆になればなるほど恥ずかしがって、赤ちゃんのように小さくなってしまったものです。あたしは平気で自分の裸を占領者に見せつけ、相手の困惑と興味とをからだ一杯に受けとって、秘かに飲んでいたものです。いじめてもいいわよ、ねえ、したいようにしてごらんさいよ、……と心の中で期待しながら。

最近のハレンチな子供たちと違って、終戦直後の男の子は、皆、大人しかったようでした。その小さな頭の中で、戦争責任を感じていたのに違いありません。だから、あたしを積極的にいじめようとするのは、いつでも同性の、それも目の大きいふくらした女の子でした。エツ子ちゃんは、二重瞼のキリッとした聡明なかわいい子でしたが、この上なく残酷な少女であつたのです。彼女は、人差し指ほどの大きさに育ったナメクジをブリキの空缶に一杯集めてきて、あたしに食べさせようとしたり、からだじゅうにそれをペタペタ

貼り付けて悲鳴を挙げさせて楽しんだり、あるいは先端を細かく割った太い竹の棒であたしの全身、とくに下半身を、真紅になるまでパンパン叩いたりしたのでした。

だからあたしは、いつでも仕返しの種類には事欠なかつたのです。エツ子ちゃんを捕虜にした時には、大喜びで彼女を丸裸にして、防空壕内の柱にキリキリ縛りつけ、オシッコを顔に引っかけたり、ウンコを胸やおなかにベトリ塗りたくってやったり、その他様々な悪どい、いたずらをしたものなのでした。

突然、あたしは背中にビシリと重い痛撃を覚え、思わず前のめりに倒れ込んでしまいました。背中がヒリヒリします。顔をもちあげて後を見ると、夫がそこに立ちはだかつて、手には柄のついたメートル程の長さの太い赤皮の鞭を、片手に握っているのです。あたしは、高層ビルの屋上から路地の狂犬を発見した時のように、何も考えられなくなって、目の前が黄色っぽくなってゆきました。厚い皮の鞭は、なんと恐ろしく、不気味なものなのでしょう！ これは、裸の女を打ち叩くだけの目的に、好色な男たちが心を込めて作

りだした狂器なのかしら！

ああ、こんな目に合わされるとは、思いもありませんでした。夫はもはや男の子ではなく、真正銘の男なのです！ あたしは前のめりに倒れ込んで、肩と顔で畳を噛んでおりましたから、胡坐を組んだ両足は丸裸のお尻を高く持ち上げる結果になっておりました。だから当然といえば当然でしょうか、第二発目はこのお尻にビシリと命中したのです！ 「あーッ！」悲鳴がひとりでにからだから漏れ出しました。お尻は激痛にビリビリ震えて、一旦高く飛び上り、次にはドスンと床に落ちてすっかりノビきってしまいました。そこへ焼け焦げた火箸をブスブス突き刺されるような、骨まで響きわたる痛みが、たて続けに襲ってきたのです。

あたしは畳に肌を擦りつけ、全身を電気人形のようにヒクヒクさせました。お尻の皮が今にも破れてしまいそうなのです。

「あなた、やめて、許してッ！」

あたしはもう泣き声になっていました。でも、夫は少しも苛責を緩めてくれません。それどころか、今度はあたしを仰向けにゴロンと引っくり返すと、お乳とおなかを交互にビシビシ打ち始めたのです。抗議の叫びを上げ



ようとすると、いきなり鞭で顔面を引っばたかれ、頭がジーンと高鳴り目の中がチカチカしました。お乳は、ミミズ腫れで赤黒く盛り上り、今にも挽げ落ちてしまいそうでした。おなかは、惨たらしく潰れて、皮が張裂けてしまいそうでした。この受難の中で、あたしは又もや失神してしまったらしいのです。

ジワジワする痛みのために気がついてみると、夫の顔が目の前に迫っていて、あたしのお乳に力一杯爪を立てているのでした。そこは既に黒ずんでしまうほど傷だらけになっていました。まだまだ苦痛に麻痺してはいなかったのです。お乳は二房とも信じられないほど飛び出して、その痛みに涙がポロポロ溢れ出てくるのでした。

あたしのからだは、今までの姿勢とはうって変って、両手首を頭の上でしっかりと縛られ、その縄尻で天井から吊り下げられていました。つま先がやっとで畳につくほどだった。腕と肩の関節が伸びきって、今にも外れそうにキリキリ痛むのです。夫は、傷だらけにむくんだお乳を、たんねんに責め回した後、再び鞭を取りました。

ビシリ！ ビシリ！ あたしは空中でゆっ

くり回転しながら、顔と脚とを除いた全身いたるところに打撃を受け、そのたびにビクンビクンと震えるのです。でも声を漏らす気力は、もはやありませんでした。いつのまにか涙で顔がグシャグシャになり、そのままウンウン呻きながら、からだをくねらせました。何百本もの熱い鋼の矢が、全身を、間欠的に突き抜けてゆくようでした。又もや気が遠くなってゆくようです。もう何も考えられません。苦痛さえ、真実性を持たなくなってきたのです。からだはグッタリして、もう、打たれても反応しなくなりました。ただ真紅に火照って、傷だらけになっていることだけは、おぼろげに解るのです。

この時、漸く、拷問が終ったのでした。気がついてみますと、天井から吊るされたまま、夫の優しい掌を肌感じていました。不思議なことに、あれほど衰弱しきっていた傷だらけのからだは、急に敏感に蘇り、彼の愛情をしきりに、受け入れたがっているのです。なんと切なくて、そして、なんともじれったいような気持。……ズキズキする全身の痛みはたしかに残っています。でも、からだの奥の奥から湧き上る不思議な津波のようなものに、すっかり押し流されかかっています。

した。からだは自然にワナワナとうねりだしもはや恍惚状態といえるものが、わたしのすべてを覆いつくしかけていました。

こんな気分の時なら、何に対しても素直になることができたのです。あたしは夫のオモチャであり、掃溜であることに満足出来ました。そして妻であり、同時に妹でもあることが少しも不自然でない気持になったものでした。

これ以来、あたしたちの異常さは、正しい意味での正常さになり始めたといえると思います。

# (五)

あまり難しいことは解りませんが、普通の人にとっての人世観とは、多くの場合、体験がこびりついていて定着した印象に他ならないでしょう。ですから、それはいつでも断片的なのです。ところが、この偏見が根底的に追求された時には、それはあらゆる現実的な力を背後に加えて、異常と正常との区別を解消させてしまうのではないのでしょうか。このような時、常識とか優生学とかいった健全な思想は、まるっきり只、無害に過ぎないというものに変質させられてしまうようです。



あたしたち夫婦が、兄妹になってから、もう三年もたちました。この間に、平穩な家庭生活と、蹂躪および被虐の性生活とが、リズムカルに交代しながら、堅く堅く結びついていったのです。この生活はごく自然な、生き生きしたものでした。わたしは、ほんのちょっと想像しただけでも、胸がゾクゾクしてくるようにすら、なっています。楽しくてしかないのです。ああ、なんて幸せなんでしょう！ あたしは全身で、兄を愛しているのです！

近親婚が反社会的だなどということは、とてもなく空想的な恐怖に違いないように思えてなりません。というのは、あたしたちを不能者にしてしまうような、心のお医者さまは、いつまでたっても立ち現れる様子がなかったからなのです。だから、モラルはいつでも、閉じられた世界の大地から出発するといえるように思います。あたし達には、兄と妹とが性的に愛し合うということは、他に同等な類例を見つけることがむずかしいほど、極めて道徳的な行為であったのです。

あたしは、週に二回か三回、縛られ、鞭打たれ、苦痛に悶えて、欲びの涙で素肌をグツグツ濡らしてしまふのでした。これほど充

実した時期は、後にも先にも全く考えられないほどなのです。夫も、いいえ兄も、同じ気持であるのに違いありません。彼は今にからだが、ガクガクになって悶死するのを想像しつつ、あたしをいじめていたそうです。

兄は全身が痙攣し始め、そのため会社勤めができなくなり、代りにあたしが働きに出るようになりました。生活費の不足分は、松山さん、ら援助してもらっていました。この方は実に研究熱心だったものでしたから、今や信じられないほど親切で、慈悲深かったのです。

この遊戯のある晩は、昼間のうちから浮き浮きして、仕事がほとんど手につきません。疲れたからだで家につくと、毎回新しくアレンジされた、お仕置が待っていてくれるのです。兄の暴行の手際はますます洗練されてきました。兄は力が出なかったのです。彼は全身の筋肉だけでなく顔までもヒクヒク歪めて、始終笑っているのです。それに頭も少しおかしくなっているらしく、ポカンとしていることが多いのです。

時には悪夢にうなされて、あたしに抱きついて救いを求めたりします。それも真昼間に

そうするのです。こんな時、あたしは自分の子供をあやすようにして、怯えきっている兄を慰めてやるのです。すると彼は安心して、お乳の谷間に顔を埋めたままスヤスヤ眠ってしまいますが、時にはいきなり飛び起きて、ひどくドモリながらあたしに裸になるように命じ、それを待ちきれないで、例の鞭で（この鞭は、長い間にはすり切れてしまふものだったので、何回も新品と取り換えなければなりません）でした。ですから、今のは三代目の小道具であったのです。お尻や太ももをビシビシ打つのです。

最近では、兄は、どうかすると急にドモリだします。そして突然陰鬱にふさぎ込んでしまったり、全身を激しく痙攣させながら、奇声を発したりするのでした。でも、あたしはこのような兄を、以前にも増して愛していました。……それはそれは、かわいくて、いじらしくて、かわいそうで、恐ろしくて……とにかく、大好きなのです！

永びいた快楽は、機械的に色褪せてしまうものなのでしょうか？ 新鮮な心は、絶え間ない不測の進化を続ける生活によって、初めて保たれるのでしょうか？ この点、あたしたちは不幸であったために、かえって幸運に



なることができたのでした。乱行は水々しくかつ長びきはしなかったのです。

初めの頃、あたしは全身を堅く縛られ、畳に転がされたまま鞭打たれました。次には、天井から吊るされて先を割った竹の棒で叩かれました。そしてお乳やお尻に、クッキリ歯形が残るまで噛みつかれました。あるいは、逆さ吊りや片足吊りにされて、画鋏を柔らかいふくらみに何十本も突き立てられました。そして鼻の穴に水を流し込まれ、そのまま灌腸せられました。兄の尿をコップに半分ほど満たし、それをコカ・コーラで割って飲まされたこともありました。汚いところにいろいろな食物を押し込まれ、一日たってから掘り出して、食べ合ったりしました。縛られたまま頭髪を掴んで引きずり廻された時には、血だらけになってしまいました。搗粉木すりこぎでめちやめちやに責められたこともありました。股裂きをされて、鞭で散々に打ちすえられたりもしました。あるいは、こうしたものの模倣的な実演を、人通りの少ない、夜のコンクリートの上でスリリングに行なったりもしました。でも、これらの真剣な営みは、あたしたちの希望よりは、ずっと早目に終わってしまったのです。つまり、兄のからだは全くダメに

なってしまったのでした。

彼は全身をシンナー痛みのダンサーのように絶えず動かし、決して休むことができなかったてしまったのです！でも、その顔はますます陽気に笑っていました。ドモリは一層ひどくなつて、もはや、まともな会話はできなくなりました。

しかし、はっきりした意識だけはもっていたようですが、彼はその生活の大部分を、幻覚の中に没入させてしまい、その世界にいる間は、あたしを見ても、誰だか解らないらしいのです。そして、兄がこのようなってしまった時、彼はあたしの加虐者である資格を永久に失ってしまったのでした。

発病以来七年目に、兄は病院に收容されました。あたしは仕事をやめ、一日中彼のもとに付き添うことにしました。

そこは奇病の溜り場でした。ありとあらゆる奇形の発作と正常な期待とが入り混って、永遠の世界が繰り広げられていたのです。これらの人々はすべて死期に迫られておりました。しかし、それなのになんと楽しげに、人生と歓楽について語り合っていることだろうと思いました。病人はほとんど、皆、現実的

な樂觀主義者だったのです。これは実験施行者の無形の教育によるものなのでしょうか？それとも、被害者集団の自動的な本質によるものなのでしょうか？

兄はもはや、一流の病人でした。なんと多くの熱心な医学者たちが、彼を観察しに訪ずれたことでしょう。これらの人たちは、皆、遺伝実験グループの会員達なのでしょうか？彼らの目は、真実を直視する喜びでキラキラ輝き、寝食をも忘れて研究に没頭するのです。兄がスターとしてのモルモットになってしまった時、あたしはすべての喜怒哀楽から見放されてしまいました。あたしは、この熱心なお医者さまたちに、すべてを奪われてしまったのです。研究資料は厳重に実験室に保管され、そこへは数人のお医者さまだけしか出入りできませんでした。だから、あたしは病人の臨終が来るまで、全くの他人として取扱われたのです。

それは何と長い待ち時間だったでしょう。およそ三年後に、あたしはようやく対面を許されました。妹と医師団との凝視する中で、すっかり知能を喪失してしまった兄は、ミイラのように瘠せこけて、でも、にこやかに踊り狂いながら、ゆっくりとゆっくりと死んで



いったのでした。

——(六)——

頭のまわりが並はずれて大きい男の子は、電車の震動に合わせて、耳ざわりなメロディを口遊んでおりました。その声は、反対側の座席にいたあたしの心に、執拗に響いてくるのでしたが、それが単調に長びけば長びくほど周囲の他人は表面から隠した目で、この子を見下ろすのでした。これほど気味の悪い子供というのは、他にはとても考えられないほどののです。

両方の窪んだ目は中央に寄り合って、時折グルリと反転し、その時に顔面の筋肉がヒクヒク震えだすのでした。その表情は硬張って今にもブロック屏の上の猫にさえ飛びかかりそうな、狂暴な歯を剥出しにしていました。体格は既に大人並なのに、他のすべての点でこの子は幼児なのでした。

あたしの子供が生きていれば、もうこの子ぐらいには育っているのに違いありません。兄の病気は滑稽でこそあれ、決して見苦しくはなかったのです。彼は涙であたしのちぢれ毛をゴシゴシ洗ってくれましたが、その時でさえ、精一杯笑い続けていたのです。でも

この子はどうでしょう？ いったい、奇形であるだけの値打があるのでしょうか？

この時、その子の白い目があたしをジロリと睨んで、子宮の奥底がキュッと締めつけられるような思いになりました。わたしもやはり、異常は異常なのです！

兄がいなくなってからというもの、あたしは毎晩何かの形で自分をいじめなければ寝つけませんでした。一種のオナニーでしょう。もう一人ぼっちになってから、一年もたつのです。あたしには、兄のように強暴で、しかも優しい支配者がどうしても必要なのです。

この子は成熟した女をいじめたことがあるのでしょうか？ はたして、サディストになれるだけの精神的な創造力をもっているのでしょうか？ ああ、その濁った目はジツとあたしを見つめているのです！ そして衣服を透過した触感で、あたしのからだを撫で回し始めたのです！

わたしはその途端に直感しました。この子はきっと、あたしの生んだ子なのだ……と。彼は初めて会っただけなのに、自分の母親を見つけたのに違いないのです。きっと原始的な知覚力が発達しているのでしょう。だからあたしたちは、只、向き合って互いの目

を見つめるだけで、すべてを了解することができたのでした。

彼は突然わたしに襲いかかってきました。そして、その逞しい力で、あたしのブラウスを引摺むと、ビリッと一息に破り棄て、更にその下の黒いブラジャーをも、ちぎり取ってしまいました。

そして次の瞬間には、犬歯の発達した赤茶けた凶器で、剥出しになったお乳に、ガブリと噛みついたのです！……あまりの痛さに全身が硬直して、悲鳴さえでませんでした。彼の顎はガクガク動きながら柔らかいふくらみを食い破り、静脈が切断されて黒い血がドクドク噴き出しました。あたしは床に仰向けに押しつけられ、只々、呻き、悶え、涙を流すことしかできないのです。

暫くして顔を上げた彼の口元には、血だらけになった握り拳大の肉の塊が、しっかりと啜えられていました。あたしのお乳は、根元から食いちぎられてしまったのです！

彼はそれを噛みくだいてから、ゴクンと飲み込んでしまいました。そして、ますます恐ろしい表情になってあたしを見すえました。その血まみれの歯は良く見ると、犬の牙のよ



うに、すべての歯の先端が鋭く尖っているのです！ わたしは無惨にも、片方のお乳はすっかり食い取られ、そこからあばら骨の一部が飛び出し、胸は血でベトベトに、汚れていました。

あたしの生んだ奇形児は、次に、残ったもう一つの白い塊に挑みかかりました。そしてこれもたちまち噛み潰され、腕取られてしまったのです。ところが柔らかいお肉が彼の胃袋の中に収まってゆく時、あたしは性感に圧倒され、激痛がこの上なく快いものに思えたのでした。

二つの白い起伏はあとかたもなく食い荒され、そこにできた生臭い血の畑に、どこからともなく、数十匹の蠅がたかってきました。あたしはそれでも失神することなく、被虐の欲びに満されながら、次の凌辱を待たびていたのです。この子は、さっそく母親のスカートを引きずり降りし黒いパンティを縦に引裂いてしまいました。そしてあたしを俯伏せに引っくり返すと、お尻の片方にギリギリ噛みついたのです。あたしは実の子供に食い殺される欲びに涙を流し、絶叫しました。またたく間に、お尻のふくらみは二つともすっかり食い取られ、骨盤が露出して大量の血液がふ

き出し始めました。あたしは薄れゆく意識の中で、それを感じているのです。

彼は、次に、この死にかかった母親をもう一度仰向けに戻し、片手に握れるものを、手当り次第に引き抜き始めました。たちまち血がジワジワ滲み出始めました。この時、あたしは絶叫よりも、切ない溜息を漏らしていたのです。そしてそれが欲びである証拠が血と混ってほとばしったのです。

彼はそれをまともに、顔に引っかぶりました。そして何やらわめきながら、最後の牙をむき出し躍り掛かってきました。快い激痛が湧き上り、彼の歯の動きにつれて、あたしは、からだをバタバタ震わせました。ああ、もうたまりません。なんて、素晴らしい子なんでしょう！ もっと、もっと、もっと、あたしをいじめて！ お母さんをうんと苦しめて、食い殺しておくれ！ あ……あ……あ！

喰い破られたお腹の中へ、子宮の中へと、彼の顔はめり込んでゆきました。きっと母親の胎内へ戻ろうというのでしょう。あたしは女としての魅惑的な肉体が、自分の分身に食べつくされてしまう快感に酔いしれて、すべてのなりゆきに身をまかせ切っていました。お腹の中が、すごい力でひっかき廻される

感覚が、これほど私を悦ばせてくれるものとは知りませんでした。

ぐいぐいと腸管が捻じられて引き千切られる苦痛。ノドの奥がぎゅうと引き込まれるような気がして、息がそこでせき止められる素晴らしさ。さらに掴み出されたあたしの心臓が、眼の前に差し出されたあたしの子供の掌の上で、鼓動を動けているのを見る陶醉。

ああ、なんて素敵なお子さんなのでしょう。

電車がガクンと揺れ、あたしの意識は外に戻されました。そこには既に、息子の姿はありませんでした。あたしはたった一人で取り残されていたのです。母親となることは、勇気のいることなのです。しかし、一人でいることは猶更むなしいことなのです。

あたしはスカートのポケットから手を抜き出しました。なぜかそれはベトベトに濡れてしかも、ピクピクと無意識に震えているのでした。

兄の症状と同じです。

あたしの発病は、兄より十一年ほど遅れて今、やっと始まったところらしいのです。



春川ナミオ・画



A

三田が毎日のように葉子のいる小料理屋に通い始めた。それも真昼が多かった。

夜は混んでいて、とても葉子とゆっくりしている、ひまがなかったからである。

三田の職業はわからない。かなり人を使っているようだが、昼間から葉子のところに入り浸ってられるほど、仕事が順調で、金まわりがいいとは思えない。三田は、自分の仕

## 青春の陥穽

## 客ならぬ客

芳野眉美

事を放棄しているようなふしがあった。

葉子のいいところは、そんなところをくどくどと詮索しないから、三田も安心して遊べるのかもしれない。

遊びに来て、沢山飲み、チップをばずんでくれさえすれば、三田の家庭が不和であろうと、仕事が左前であろうと、そんなことはどうでもいいのである。

女のところへ飲みに来て、家庭内のことをうじうじいったり、仕事の悩みをぐずぐずいったりしてもはじまらない。ただ座が白けて無駄金を使うだけのことである。

三田は、せっせと遊びに来るのにもかかわらず、自分のことは何一つ葉子にしゃべらなかった。小料理屋で知り合った、客と酌女の

関係で、ほかのことは無用であった。

真昼に来るのはいいのだが、明け方まで営業している葉子にとっては、眠くてしょうがない。はじめのうちは、三田を待たせておいて、簡単に化粧をし、寝起きの顔を見せなかったが、慣れるに従って、三田に対するあつかいが、ぞんざいになった。部屋にいつまでも三田を待たせておいたまま、ひとねむりしてしまったり、ようやく起きると、寝不足で気嫌が悪いのか、

「また来たの」

と侮辱したような口を平気できくようになった。

「お風呂に行つて来るから、待っておいで」

三田は葉子から何をいわれても、



「はい、はい」

と、にこにこしているだけであった。

「いらっしゃいませ」と三つ指をつき、「おひとつ、どうぞ」という流儀の客ではないことは、三田がはじめて店に来たときに知らされた。

葉子の姉さん株の、滝子のでかい尻に顔を潰されて、にやにやしている客の紹介だったから、葉子も初対面から三田をなめていたが事実、三田もかなり変わっていた。

銚子をとり、葉子が

「どうぞ」

と酒をすすめると、

「その前に、葉子さんの唾を吐いて下さい」

と三田は盃を葉子の前にだす。

「風邪気味だから、痰がからまって、きたないわよ」

「葉子さんの痰なら、汚くありませんよ」

「そうかしら」

葉子は三田の盃に口を近づけて痰を吐く。飲み過ぎと、睡眠不足、それに男関係が多いから、どうしても風邪をひきやすい。

まっ黒な、どろりとした粘液性分泌物が、小さな盃に、とぐろを巻いた。

「ほら、こんなにきたないわ」

葉子は盃に酒を満たした。

三田がぐいと一息に、飲み干した。

「あらあら」

あきれたように葉子は三田の口元を見つめている。

「風邪がうつっても知らないわよ」

「光栄ですよ、葉子さんからうつるんなら」

「うつしてあげる」

お客の首に両腕をまわして接吻するような葉子ではない。

お膳の上に身体を乗り出して、

「ああんして」

と、葉子は三田にいった。

三田も葉子のほうに身体を乗り出し、馬鹿みたいに口を開ける。

葉子は三田の口にどす黒い痰を吐いた。

しかも連続して吐く。かなり痰がつまっているようであった。

「ぺっ、ぺっ」

こうなると、三田の顔は、葉子の痰と唾液で、どろどろになる。

「気持悪い」

葉子は眉をひそめて、酒をぐい飲みする。自分で唾液を三田の顔にさんざん吐いておいて、気持悪いもないものだが、事実、三田

の顔が天然痘のように見えて、気色悪いのである。

そんなときに、お滝姉さんが部屋に来ようものなら、

「ほほう、やってるやってる」

と面白がって、

「ちよいと、便所の雑巾を持っておいでよ」

と葉子にいい、便所掃除の汚れた雑巾で

「三田さん、顔を拭いてあげるからね」

と、一瞬ひるむ三田をつかまえて、ごしごしと、その雑巾で拭いてしまうのである。

葉子のS的なお師匠さんだけあって、滝子のは少々えげつない。

三田の顔を拭いてから、

「女世帯は、ほんとに便所を汚すねえ」

と、さもきたならしそうに、窓から便所の雑巾を捨ててしまうのだから、これで三田が怒らなければどうかしている。

が、三田は怒ったことがなかった。そんな扱いにもにこにこしている三田を見て、「これは、たいしたものだ」と滝子は、うなったのである。

「これは本物だ。面白い」

「なにが本物なんだい、お滝さん」

「白ばっくれなくてもいいよ、三田さん」



「別に白ばつなくてもいいさ」

と葉子が馬鹿々々しくなるほど、意気投合すると、葉子は急に、三田を滝子にとられたくない、という奇妙な嫉妬を感じて、狼狽するのである。葉子が三田に好感を持っているという、証拠かもしれない。

滝子があらためて三田に酌をして、二人で盃を交換しているすきに、葉子は、ぐずぐずしている鼻をかみ、紙を丸めて袖にいれようとした。と、

「おっと、紙屑はこっち」

と滝子が、鼻をかんだ紙を奪い取り、

「ほら、葉子ちゃんの鼻汁だよ」

と、三田の口に丸めたその紙を押し込んだのである。

## B

葉子の風邪が縁で、痰と鼻汁からはじまった三田との奇妙な関係は、ますますエスカレートした。というのは、三田があまりにも早く店に来るので、めんどろくさくなった葉子が、滝子と寝ている二階の居間に、三田を呼んだからであった。これであれば、三田が来たからといって、わざわざ起きて、着がえる必要もなければ、化粧する手間もはぶけて、

すこぶる楽であった。

お滝姉さんの寝相は、三田でもおどおどしてしまふほどすさまじく、下穿きなど穿いたことがないから、あけすけになっていることは日常茶飯事で、とりたてて珍しくはないのである。

それだけならまだしも、もっとも顔をそむけたくなるようなことも滝子は平気なのであった。

眠っていても、男の夢を見るのか、それとも、三田がいることに気がついて、寝たふりをし、わざとそうしているのか、そのへんのこととは、よくわからない。

自分だけではつまらないのか、隣に寝ている葉子の足を引き寄せたりするのである。

寝ているはずの葉子の足の指が、もぞもぞと微妙に動き出すのも妙であった。

足の指だけが眼をさましているらしい。

バイコン画集にも、貴婦人ののびやかな脚が少女を捕えている美しい絵があったが、浮世絵でも、こたつでの毛雪駄（というのだそ）うだが）は、恰好の題材で、現在でも生きている。

そんな光景を、三田はもじもじしながら、部屋の隅に坐って見ているのである。

客の三田を無視しているのか、わざと三田に見せつけて、露出的な欲望を満足させているのか、茫洋としていて滝子の気持は、よくわからない。部屋の隅に坐っていた三田が、身体をのりだして、つい覗き込んだとしても無理はない。

三田の鼻がひくひく動いて、三田は滝子の男を知りつくした中年女の匂いを、思い切り吸うことになるが、滝子は平気で、ぐうぐういびきをかいているのである。

それにくらべて、葉子の寝相は乱れない。乱れないから、三田は葉子の派手な恰好を見たことがない。となると、むやみに見なくなるから、人間の心理は面白い。

肥った滝子の太い脚が、どかっ腹の上に乗っかっていては、いくらなんでも、重たすぎる。

「重いなあ」

滝子の足をはいのけると、くるりと背を向けて横になり、珍しく掛布団がずれて、葉子の寝乱れ姿が三田の眼に飛び込んだ。

三田は、ごくりと唾液をのみこんだ。

ずれた掛布団のわずかな隙間から、葉子のまっ白なふくよかなお尻が覗いたのである。

居間にまで入ることを許されたのに、三田



と二人の女、滝子と葉子の間に、関係が一度もないのも珍しかった。

男女の関係そのものより、葉子にいじめられる過程が、三田には面白く、せっせと通う理由になるのである。

三田は、おそろおそろ葉子の布団ににじり寄った。ストリップ小屋で、裸の女のお尻は見慣れているはずだったが、寝乱れ姿で、ちらっと見える葉子の尻に、胸がどきりとするほど刺激を受けたのだから妙であった。

両手を畳について、上体をのばし、掛布団のずれから上眼使いに覗いたところを、どうも寝たふりをしていたらしい滝子に見つけられた。

「なにさ、その恰好」

三田は、ひやっとして上体を起こした。

「なんだ、起きていたんですか」

「なんでもないもんだ。葉ちゃんのお尻なんか覗いてさ、いやらしい」

と二人の会話に気がついた葉子が、ぴしゃりと布団を直し、三田の顔も見ずにまた寝てしまった。

「そんなにお尻が見たいのなら、お滝さんのを見せてあげるよ」

と、布団に這って、くるりと寝巻をまくっ

たのである。

「葉ちゃんみたいに可愛くないけどさ、これではまんしておおき」

くすくす笑いながら、困ったような顔をしてもじもじしている三田の目の前で、滝子はわざと尻をももぞさせてみせる。

「えんりよしないでさ、近寄って、よくごらんよ」

「ええ」

「さわったっていいんだよ」

朝であろうと、昼であろうと、滝子は露出するのが平気なのである。SEXに昼も夜もないから、この点、滝子はすこぶる、はつきりしているわけである。

巨大な臀部を顔の前に突き出されても、かならずしも魅力を感じるわけではない。

三田がどうしようもなく、身体を固くしているの、

「好きなようにしたっていいんだよ」

と滝子は急に猫撫で声になった。

「舐めたっていいんだよ」

そういわれても「はい、そうですか」とペロペロ舐められるわけがない。

「三田さん。ストリップの女の子のを舐めたことがあるんだろう」

三田を紹介した滝子の常連に聞いたのだろう。どうも、三田は全ストマニヤであるらしいのである。

「お滝さんのお尻じゃ、きたなくて、舐められないとでもいうのかい」

と滝子は、かなりしつこかった。

「そんなことはありません」

「じゃ、お舐めよ」

仕方なく三田は、滝子のどっしりと重そうな尻を情けなそうに眺めた。

ちらっと布団からこぼれた、葉子のまっ白なお尻だったら、いわれなくても、ふるいつきたい気持で一杯だが、滝子からやいやいいわれると、ますます舐める気がしなくなってくる。

「おや、いやな顔をしているね」

と滝子がからんできた。

「そんなことはありません」

三田は、あわてて否定した。

ここで滝子を怒らせたら、滝子と一緒に寝ている葉子に会えなくなる。

「それなら、もっとうれしそうな顔をしな」

酒も飲んでいないのに、からんでくるのだから、芝居と趣味が一致してしまったような滝子の性癖であった。



「はい」

三田が意を決して、ぶよぶよの白豚のような滝子の尻に鼻先を突きつけたとき、異様な音がして、三田は

「あっ」

と顔をそむけた。

屁であった。

滝子は、三田が顔を近づけるのを待って、一発、放屁したのである。

「ああ、気持がいい」

ほがらかに笑いながら、滝子はいった。

「これですっきりした」

滝子は、すっきりしただろうが、まともに滝子の放屁を顔にぶつけられた三田は、たまったものではない。

鼻をつまむのも忘れて、呆然として滝子を見ていた。

鳥羽僧正覚猷の筆（のように伝えられている）になる「放屁合戦」の、臭いのを一発くらわしている光景を、まざまざと思い出すほどの、それはすばらしい放屁であった。

「三田さんのもの欲しそうな顔を見たら、急にオナラがしたくなってね……」

まだ笑いが止まらないのか、悲しそうな顔をして坐っている三田とは反対に、滝子はい

つまでも腹をかかえて笑っていた。

「くさいなあ」

布団をはねのけて、葉子が窓をあけた。

## C

滝子の放屁さわぎで、眠いのを起こされたのと、メンスが近かったせい、葉子是不機嫌であった。

髪をかきかき台所に出て、歯ブラシを口にくわえた。

「ほらほら、お嬢さんが、おめざめだよ。女中、じゃない、男中は、しっかりしなけりやだめじゃないか」

と滝子が三田にいった。

「ぼやぼやしていないで、お嬢さまの用を足さないのかい、このウスノロ男中め」

男中、と呼びつけにされて、三田は反射的に飛び上った。

滝子のところにては何をされるかわかったものじゃない。それより、葉子の側にいて葉子の用をしたほうが、まだましである。

おそろおそろ台所に顔をだすと、歯ぶらしを口に押し込んだまま、じろりと葉子は三田をにらんだ。

どうも一波乱ありそうな雲行きであった。

「あのう」

と三田は、くちごもった。

葉子は知らん顔して歯をみがいている。

「あのう」

と三田が、またいった。

滝子に男中と命名されても、何をしていいのやら、わからない。

「うるさいわねえ」

歯ぶらしを口にくわえたままで葉子は三田をにらみつけた。

「歯ぐらい、ゆっくりみがかせてよ」

「違うんです」

あわてて三田は、いった。

「お滝ねえさんが、葉子さんの用を足せというから……」

「ああ、そうかい。痰壺になったくらいだから、なんでもできるわね」

葉子は口をすすぎ、流しに捨てないで、三田を振り返った。

あごをしゃくって三田に合図をした。

三田が、おずおずと口を少し開けた。

葉子は首を振った。床にしゃがむように手で合図をした。

三田は、うなずいて葉子の前に跪ずき、口を大きくあけた。



齒をみがいたあとの、ゆすいだ水を、葉子は三田の口に吐いた。

「まだだよ」

葉子の唇に未だ齒みがき粉が残っていた。葉子の口の中でゴボゴボと水の音がした。

「やってる、やってる」

いつの間に覗きにきたのか、滝子がニヤニヤしながら、うしろから眺めていた。

タオルで口を拭くと、跪ずいたまま、葉子の次の命令を待っている三田の顔を、葉子は足をあげて踏み、台所の床に顔をこすりつけた。

「四つ這いになってごらん」

「やるねえ、葉子ちゃん」

満足そうに滝子が呻った。

「その調子、その調子。今日は、いいことがあるよ」

四つ這いになった三田の背中に葉子は、どかっ、またがった。

両脚をもたげて、足の裏で三田の頭を踏みつけ、三田のネタクイを手綱がわりにして、三田を馬にした。

「歩け」

と葉子は三田の頭を、けとばした。

「便所まで乗せて行け」

葉子が、かなり重いらしく三田は、よたよたと歩き始めた。

「ほれっ」

奇妙な叫びをあげて、滝子がビールの空びんで三田の尻を打った。

三田が前につんのめり、葉子は下に転げ落ちそうになった。

「しっかりしろ、この馬鹿」

まるで客あつかいではなかった。

滝子も葉子も、三田を完全に男中のようにあつかっている。

「すみません」

面白がって滝子はビールの空びんを振りかぶり、その度に三田は泣き声をあげた。

「許して下さい」

「おだまり」

「早く歩かないか」

「はい」

二人の女に同時に責められては、いくらなんでも泣きたくなるだろう。

葉子の足の裏で頭をこづかれ、滝子にビールびんで追われて、打たれ打たれてようやく三田は便所まで這った。

葉子は、そそくさと便所に入り、

「戸を閉めて、そこで待っておいで」

と三田にいった。

戸を閉めたとたん、大きな音が三田の耳に入った。

かなりがまんしていたらしく、勢いがかなり強かったのだろう。

「終わったよ」

と中から声があり、どうしていいのか三田が迷っていると、

「戸を開けていいよ」

という、葉子の声がした。

おそろおそろ三田が便所の戸を開ける。

「拭いて」

と葉子が三田にいった。

便所に紙が切れていた。

三田があわててポケットをさぐったが、鼻紙を忘れてきたらしかった。

「早く拭いてよ」

いらいらして葉子は叫んだ。

「か、かみがないのです」

「紙がなければ、頭を使いなさいよ」

「頭って！」

「猫のように舐めればいいでしょう」

「舌で……」

「そうよ。舐めるのが好きなんですよ」

腰を高く持ち上げるようにして、葉子はヒ



ステリックにいった。

「早くして」

「は、はい」

便所の戸の前に正座していた三田は、上半身をのばした。

「仰向けにならなければ、だめじゃない」

仰向けになれば、頭が便器の上にでてしまう。

まごまごしていると、

「いつまで待たせるつもりなの」

と葉子が怒声が、またとんだ。

三田は意を決して便器に寝た。

頭をもたげていなければ、頭が便器の中に入ってしまう。

あと始末をしようと首をもたげたとき、どっしりした重量が三田の顔の上にのしかかった。三田の頭が、すっぽり便器の中におさまった。とたんに、なにかあたたかいものが三田の顔を濡らし、唇をつたわっていった。

「あら、でちゃった」

子供のような葉子の声が上でした。

水責めには違いなかった。

## D

ようやく遅い朝食になり、簡単なお茶づけ

ですまそうということになったが、滝子は部屋の隅で神妙に控えている三田の顔を見てはにやにやしていた。

またなにか、三田を罵ることを考えだしたらしかった。

「三田さんも、どう」

と食事が終わりがけた頃、思い出したように滝子がいった。

「いえ、すませましたから」

「あら、だって、もう昼を過ぎたのよ」

昼前から葉子のところに入り浸りでは、三田はかなりの金を小料理屋に支払っていることになる。

葉子に夢中になる三田に、それだけの理由があるのだろう。

「えんりよしなくてもいいのよ、三田さん。」

二人の仲じゃないの」

屁の仲とでもいいたげな滝子の顔だった。

「では、軽く……」

「そうしなさいよ」

滝子は、いきなり三田の前に両足を投げ出すと、着物の裾をたくしあげた。

滝子は、ぴったりと両腿を閉じ合せ、その間に飯をひとつかみ置いたのである。

そして、こともあろうに、少しずつお茶を

注ぎ始めた。

「おねえさんったら」

葉子が驚いて滝子にいった。

滝子の太腿の間に湖が出来た。

「はい、お茶づけ」

「――」

「天然の若布茶づけだよ」

若布酒というのはきいたことがあるけれど若布茶づけなんかきいたことがない。

「早くおたべよ、三田さん」

「は、はい」

眼をぱちぱちさせていた三田が、首をのばしてきた。

「フフ、くすぐったい」

さも愉快そうに滝子は笑っていた。

「どう、おいしいかい」

「はい」

「塩かげんはどう」

「――」

「少ししょっぱくないかい」

塩分がとけて茶づけをしょっぱくしているのだろうと滝子は、いうのである。

思わぬごちそうにありついた犬のように、三田は一生懸命であった。湖は忽ち消えた。

両手をうしろに突いて上体を支え、両足を





## 妻 と 相 撲

三田の首に巻いて滝子はニヤリとした。

葉子の倍もありそうな、でぶでぶした巨木で首を締められて三田は、ふうふう荒い息を吐きながら、残飯整理にセイを出す。

「うまかったかい？」

と滝子がいった。

「葉ちゃんもどう？」

両足を三田の背中ではたばたさせながら

「お茶づけをこしらえてあげたら」

「けっこうよ、おねえさん」

と葉子は一服しながらいった。

「それより、部屋の掃除と、便所の掃除を三

田さんにしてもらいましょうよ」

「それはいいわね」

と滝子はにこにこしながらいった。

「洗濯もたまっているのよ」

「着物のほころびも縫えるかしら」

「大丈夫、三田さんは器用らしいから」

滝子と葉子は勝手なことをいい、

「ほら、しっかりやりなよ」

と三田を、どやしつけた。

## (一)

私は四十一才。職業は会社の警備員で、二十四時間勤務の交代で、一日置きに休日となる。薄給ではあるが勤務は楽な方で、夜間の睡眠時間も可成り取れるし、翌日一日休むまでもない位である。

私達夫婦は子供が無い。私も妻も共に晩婚で、結婚してから五年だが、妻は私より一ツ年下で四十才である。妻とは行きつけの食堂で知り合った。その食堂の皿洗いをしていたのだ。名はお艶と云う。

私は身長一米六五。体重は六四キロ。筋肉型で浅黒い。お艶は身長一米五七、体重は私より多く六八キロもあるが、肌は白く滑らかで、手足は大きく毛髪は細毛であるが多毛である。顔は丸型で頬骨が少々高く、一重瞼の

告

白

## 見 発 手 敵 好

文 と 画 椿 寿 郎



三白眼で黒いうるんだ瞳である。鼻は短く高くはない。上唇の両端が少し上に反って下唇は厚く受け口である。乳房は大きいが垂れ乳型。性質は、まことに柔順で愚直な正直者。無口な私には誠に似合いの妻である。

私と一緒にってから毎年肥って、その脂の乗った太鼓腹は見事である。私は肥った女性が好きで、瘠せた女性はどんなに顔が美人でも魅力を感じない。

私は、自分の好みに合った肥った妻を恵まれて幸せ者だ。

## (一)

五月非番の日の午後、夏場所の大相撲をテレビで見て居た私は、フト妻の裸形が目につかび、相撲を取ってみたいと思った。

「お艶!! 一寸おいで」

勝手に水仕事をしていた妻はエプロンで手を拭き乍ら出てくる。

「なあ、おまえ角力を取った事があるかの」

「見た事は何度もあるが、取ったことはないわ」

「お前の田舎では、お祭りに女角力がかかる事があるそうだな……」

「妾の子供の頃はあったわ」

「取りたいと思っただろう?」

「いやあ、とんでもないわ」

「面白いとは思っただろう」

「そりゃあ……」

「面白かったら、取りたいと思うことだってあるだろうが……」

「あたしは女よ」

「かかるのは女相撲だろう?」

「……」

「女相撲っていうのは女じゃないのか? 名前だけかい?」

「いじわるネ」

「女なんだろう」

「そうよ」

「だったら、おまえが取りたいと思ってでも不思議じゃない」

「でも、皆、大きな女の人よ」

「おまえも大女だぜ」

「すんませんねえ、大女で……」

「お前は力がありそうではないか」

「そうね、田舎では仕事をしていたからね。でもねえ、今ではもう駄目だわ」

「そうでもなさそうだ。どうだ、俺と角力をとろう」

「あなたには、かなわないわ、男ですもの」

「いや判らん。とってみなけりやな……なに」

「あなたの晒布の腹巻きならあるわ」

「よし、それを持っといで。二本だよ」

お艶は、私の突然に言い出したことに一寸あきれたようではあったが、今まで一度とて私に反対した事のない性質なので、やがて二本の晒布木綿をもってきた。

「さあ、褌を締めよう」

私は久し振りで締めた褌に腰がキュツと締まる感じがあった。お艶は裸になったものの褌の締め方が解らないらしい。

「あなたどうするの?」

「この端を顎で押えて、股を通して、腹へ廻して……最後にここをくぐらしてと……」

私は後の立褌を吊り上げて締めてやった。

「痛いかい」

「いいえ、痛くはないわ」

私は常に妻の裸身を眺めては楽しんでるが、褌を締め込んだ妻の裸は、何とも言えぬ不思議な美しさがあった。

白いベンベンとした腹部を押し上げるように締めつけている白木綿の晒は、それだけでこうも違うものかと思う効果がある。

「後側をお見せ」



お艶は背面を見せた。立禪は喰い込んで見えない。

押し入れから薄団を出して室の中央に敷いて土俵にした。

私とお艶は、この土俵の両端に別れて型通りにチリを切り、水をつけ塩を撒くまねをして、四股を踏んだ。フトンの中央で向き合っ

て腰を下ろし、両手を下ろして仕切った。

「いいか、三番勝負だよ。遠慮せんで力一杯来い!!」

そう云うて、私がお艶を見ると、三白眼の眼を吊り上げて、私をにらんで居た。思わず「こい」と私は立上った。お艶も「ヤッ」と叫んで私に組みついて来た。狭いフトンの土俵では、突っ張り合いも出来ず、右四つに組んで、上手下手に禪を掴んで引き合った。

私が吊りに出るとお艶も吊りに出た。吊り合いになったがお艶の腰が重く、逆に私が危くなり、右から投げようとしたが、しがみつ

くようにして、外がけに足をからましてきた

お艶の重味に耐えきれず、私はドスンと尻餅を付いてしまった。

「負けたよ」

私はいささか油断をしたと思うと同時に、お艶の体力に一寸、驚いた。

「おまえはなかなか角力の手を知ってるぞ」

「いまのは、はずみよ」

「さあ二番目だ」

私とお艶はフトンの中央で仕切って、にらみ合った。今度は私も本気で、このお艶をどの手で攻めたものかと眼を据えた。

「ヨオッ」とお艶が、勝った勢いに乗じて突っかけてきた。

私はそのお艶の丸い肩を突き放し、尚も突っかけてくるお艶の左上手から後の禪の結び目を掴むと、左手でお艶の首をはたいた。お艶はつんのめって私の腰にしがみついたが、足が浮いてドスンと、腹這いになってしまった。

お艶は乱れた髪をなで上げながら、坐ったまま私を見上げた。

「やっぱり、あなたの方が強いわ」

「亭主の俺が、負けられんからな。さあ立って、決勝戦だ」

「よーし、今度は妾も負けないわ」

二人はゆるんだ禪を締め直して仕切った。

お艶の一重の三白眼が、吊り上って、蛇の眼のように私をにらんでいる。

「こい!!」私は立ち上った。お艶も「ヤッ」と叫んで武者振り付いてきた。

お互いに右手を差して、相手の禪を引き合

い左手で前禪を取ろうと争った。仲々強い。

私の方が負けそうである。

腰を反らして防ぎながら、私は、苦しまぎれにお艶の右乳房をいきなり掴んでやった。

「アッ」とお艶の声。私はかまわずねじ上げる。

「ウッ……」とお艶は歯を喰いしばって声を殺し、私の前禪を掴むと、大鼓腹を利して吊り上げようとした。晒木綿の前禪が吊り上げられて痛く、手の力が抜けそうである。

ここで負けてなるものかと、必死の力を振り絞って、脚を外がけにしてのしかかった。

「グウ……」と、つばきを齒の間から、どば

して、耐えて居たお艶の腰が、砕けてドスンと二人は重ね餅に倒れ込んだ。

お艶は、汗びっしょりになり、

「卑怯だわ、乳房は女の急所よ」

ハハハと激しい息を付いている。

「お前だって俺の急所を吊り上げたぞ」

「では、お互い様ね」

「この勝負はお前の負けだ」

「今日の処はね……」と、お艶は笑った。

私はこの角力の好敵手を妻に発見して、何とも言えぬ、楽しさが湧いて来た。



はなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへび

連載小説

はな

ひへ

花

と

蛇

團  
鬼  
六

續篇（第六十六回）

珠江夫人の啼泣

色々な角度から写真を撮る大塚順子は最後に腰をかめ、珠江夫人のクローズアップまで撮り出して、

「フフフ、とってもいいポーズよ。この写真を見て御主人はどんなに驚くか、想像するだけでも面白いわ」

と笑うのだったが、珠江夫人は、美しい顔をひきつらせたまま固く眼を閉ざし、しかし川田や吉沢等に叱咤されて優美で繊細な二肢は左右に割り、カメラの集中攻撃を受けているのだ。

「御苦勞様。これだけカメラに収めれば充分よ」

順子がようやく腰を上げると、珠江夫人は元通りぴったりと二肢を閉じ合わせ、張りつめていた氣持が砕け散ったようにがっくり首を落とすと、ねっとり白く輝く両肩を激しく慄わせて号泣し始めるのだ。

「今更泣いてもおそいぜ。この素晴らしい写真  
真は現像が出来次第に早速、千原流後援会の  
全メンバーに発送する事になっているんだ。  
これで折原博士の社会的地位も潰滅したって  
ことになる」

川田がそう云って笑うと珠江夫人は、一きわ激しく耳を揺って哀泣する。

「フッフ、折原の奥様、こんな写真が世間にバラまかれるって事になれば、もうまともに奥様は陽の当たる場所へは出られないわね。となれば、これからこの屋敷内で修業をつみ別の女となって再出発をするより方法はないと思うんだけど」

大塚順子はさめざめと泣く珠江夫人を樂しそうに眺めながら皮肉めいた云い方をし、つい先程、様子を見るためにこの部屋へ入って来た田代と森田の方に眼を向けた。

「それじゃ社長、契約書に判を押させて下さいな」

田代は北叟笑んで、小脇に抱えていた小さな鞆から、タイプ印刷された一枚の紙を取り



出した。

「一度、眼を通して下さいな、奥様」

順子は田代からそれを受け取って、すすり上げてゐる珠江夫人の眼の前に持って行く。

「判を押す前に一度はつきり内容を御覧になった方がいいわよ」

順子は珠江夫人の顎の下に手を入れて、ぐいと顔を上に立てさせ、奇妙な契約書を泣き濡れた眼の前に突きつけた。

気弱に眼をしばたたかせ、それを見た珠江夫人は、思わずさっと赤らんだ顔を横へねじって嗚咽をくり返しながら、

「性の奴隷だなんて、私がそんな罰を受ける程の罪を犯したというの。ひどいわ。ひどすぎます」

珠江夫人は、おどろに乱れた黒髪を揺さぶり、口惜しげに耳悶えするのだ。

田代は懊悩する珠江夫人を愉快そうに見つめながら、順子の手より契約書を受け取って音読し始める。

——折原珠江（三十一才）は長年、千原流生花の後援会長として横暴に振舞い、湖月流生花の発屏を妨げたる罪によって、本日より性の奴隷として当屋敷に檻禁、森田組の商品として生涯飼育されるものとす——

田代が読み上げると、横に伏せてひくひくと慄えて見せていた珠江夫人の白い頬に、大粒の涙がしたたり落ちる。

田代は、そんな珠江夫人を楽しげに眺めて更に読み続けるのだ。

「ひとつ。性の奴隷、折原珠江は森田組の許可なしに身に布をまとう事を許さず——つまり、遠山静子と同じく、この屋敷内ではいつも素っ裸のまま、暮して頂くってえこと。いいですな、奥さん」

田代は口を歪めて笑った。

「ひとつ。商品化するための如何なる調教にも不平を云わざる事。ひとつ。定期的に行われる秘密ショーには、特別の事情のない限り出演するものとす。ひとつ。森田組の資金源である秘密写真、その他の仕事にも積極的に協力するものとす」

そんな風に田代は、珠江夫人の屈辱に歪む顔をチラチラ眺めつつ、ゆっくりと読み上げていくのだ。

「それでは、これに判を押して頂きましょうかね」

そんな事をするのは田代の趣味だとわかってゐる川田と吉沢は、それを手伝って奇妙な契約書を立位で縛られている珠江夫人の足元

に拡げ、静子夫人に署名させた時と同様、足の指にペンを無理やり挟みこませようとするのだ。

「いいですか折原夫人。ここにゐる女奴隷は皆、こういう風に契約書に判を押させる事にしているんだよ。承諾の判をね。もちろん、一旦、判を押せば、契約書に書かれた事は、どうしても守っていただく」

「それを聞くと珠江夫人は激しい狼狽の色を見せて足指の間へペンを挟ませようとする川田と吉沢に抗って、二肢を悶えさせ、腰を揺さぶるのだ。

「おとなしくしねえか。さ、指に挟んで、はつきりとサインするんだよ」

吉沢と川田は、必死に腰を揺さぶる珠江夫人を取り押さえ、面白そうに笑いながら、ペンを指に挟みこんだ。

「嫌っ、嫌です！」

珠江夫人は悲痛な声を張り上げたが、「今頃何を云ってやがる」と強引に押さえつけ、ペンを持ち添えて折原珠江に無理やりサインさせた川田は、更には朱肉を取り出し、珠江夫人の足の親指にべったり浸らせて、名の下へ強引に押しつけるのだ。

「よし、御苦労だった」



と、田代はえびす顔になって、契約書を取り、満足げに眺める。

「これで奥様との契約は、目出度く成立したぜ。今日から森田組の女奴隷だ。今までの有閑夫人としての生活はもう過去のものだとはっきり割り切り、ショーのスターとしての修業を今後はつんで頂きますからね」

田代は勝ち誇ったようにそう云って笑ったが、珠江夫人は打ちひしがれたように頭を垂れて泣きじゃくるだけであった。

「それじゃ、森田組の商品となられた元、博士夫人に対する歓迎会をこの場で簡単に開こうじゃありませんか、社長」

大塚順子は、田代の肩に柔らかく手をかけて、すすり泣く珠江夫人を見ながら頬を意地悪そうに歪めるのだった。

「そうだな。女奴隷となられた折原夫人に対して乾杯をしよう。出来るだけ沢山の人間をここへ集めてくれ」

田代は吉沢の顔を見てそう云った。

それから十数分後——吉沢の召集でぞろぞろつめかけた男女は、珠江夫人を酒の肴にした恰好で賑かに酒盛りを始めていた。

「こんなすばらしい獲物が網にかかったというのも、みんなあんた達のおかげよ。さ、ど

んどん飲んで頂戴」

大塚順子は上機嫌で、千原美沙江の女中であった直江と友子のコップにビールを注いで廻る。

「これからは大いに仲良くやっていこうよ。あんた達も、今日から立派な葉桜団の一員なんだからね」

と、銀子達も直江や友子に酌をし、肩をたいて男みたいに笑うのだ。

「ちよいと、その美しい女奴隷さん。そんなに黙りこんでばかりいず、なんとか云ったらどうなのさ」

そろそろ酒の酔いが廻り始め出した銀子は太いロープに緊縛された裸身を支えられて立つ美しい晒し者に対して毒ずき始める。

長い睫毛を伏せて、うなだれている珠江夫人の智的に整った美しい横顔を小気味良さそうに眺めるスベ公達は、静子夫人をこのように丸裸にしてなぶりものにした日の事を思い出すのだ。

あの時、まるで処女のように泣き叫び、死に者狂いになって抵抗した静子夫人も今は連日連夜の徹底した調教のもと、色々の珍芸を覚え、今は別室で捨太郎とコンビを組み、痛快な映画に出演しているのだ。

「どう、鬼源さん。静子夫人は熱演していらっしやる？」

と、朱美がつい先程までその珍映画の撮影に立合っていた鬼源に尋ねる。

「ああ、大熱演さ。ありや大変なプレミアがついて売れるぜ」

鬼源は口をとがらせて酒を吸いこむと、

「とうとうあの奥さん、俺達の苦心と念願が叶って立派な森田組のドル箱スターになってくれたようだな。身のこなし方にしろ、むしろやぶりつき方にしろ、完全にプロ並みになってきたようだ」

その映画の演出は、かつて静子夫人の女中であつた千代がしている、と聞かされてズベ公達は大笑いする。

鬼源は、盃を置くと鼻の頭をこすりながら眼の前の美しい晒し者を見上げるのだ。

「お前さんも先輩に負けねえようにしっかり修業をつんで、うちのドル箱スターになってくれなきゃ困るぜ」

珠江夫人は、やや上気した顔を横に伏せ、ただ押し黙ったままであつたが、

「ね、せっかくだから、ここへ地下の美沙江を引っ張り出し、その奥様と同じように晒し者にしましょうよ」



と、順子が田代へ提案し始めると、ハッとしたように顔を上げるのだった。

「大、大塚さん！」

珠江夫人の白い冷たい頬を再び大粒の涙が濡らし始める。

「お願いです。まだ何の汚れも知らない家元のお嬢さんだけは救ってあげて。お嬢さんには何の罪もありません。ね、大塚さん」

必死に哀願する珠江夫人をニヤニヤ見つめていた川田は、大塚順子の耳元に口を寄せて云った。

「こういう犠牲的精神は大いにこっちが利用すべきですよ」

以前、桂子や小夜子を何とか庇おうとする静子夫人の犠牲的精神をうまく利用し、徹底的ないたぶりを夫人に加えて、彼女の肉と心を変貌させるまでの調教に成功した、と川田は順子に説明するのである。

「成程ね。わかったわ」

大塚順子は川田に悪智恵を授けられて口元に薄笑いを浮かべた。

「それじゃ折原の奥様。貴女の切なる願いを聞きとどけて、家元のお嬢さんを女奴隷にする事だけは勘弁してあげますわ。そのかわり奥様には女奴隷として、また性の演技者とし

て、徹底した調教をほどきますわよ。いいですわね」

大塚順子は煙草の煙をゆっくりと吐きながら美しい晒し者に声をかける。

珠江夫人は、透き通るような色白の美しい頬をさも悲しげに歪めながら、

「お嬢様を救って下さるなら、私は、私はどうなっても——」

唇を慄かせながらそう云って再びポタポタと大粒の涙を流すのだ。

あのような写真までも撮られてしまったのだ。この連中が云うように、もう自分はまともな陽の当たる場所へは出られない。——そうした悲しい諦めが珠江夫人の胸に充満し始めたのだ。

「それから、俺の方からも云っておくが」

鬼源がのっそりと体を起こして

「お前さんの調教は俺が受持つが、そちらが元、社長夫人であれ医学博士夫人であれ、そんな事にこちとらは頓着しねえし、手加減もしねえ。最低の女郎を仕込み上げる要領で手きびしくしごくからな。妙な気位や気取りなんかを持つと承知しねえよ」

そう云った鬼源は、懷から巻尺を取り出して

「一応、商品の体のサイズを計っておこう。朱美、手伝ってくれ」

朱美と銀子は鬼源の仕事に協力して、緊縛された珠江夫人の優美な裸身に寄りつくとき、形のいい胸のふくらみを巻尺で計り始めるのだ。

「バストは、八十五だわ」

子供を生んだ経験のない珠江夫人の胸の隆起は、陶器のように冷たい滑らかさとそんな年令と思われぬ位の水々しさを感ぜさせる。

「はい、次は、おヒップね」

銀子と朱美は、腰を低めて、次に珠江夫人のヒップを計り始めた。

「八十八という所ね」

珠江夫人は、ズベ公二人にヒップへ巻尺を巻かれて、さも羞かしげに顔をそらせ、ほっそりした美しい眉根を、悲しげにしかめさせている。

「じゃ、次にこのサイズは」

含み笑いしながら朱美が巻尺を持って行くとき、珠江夫人は、ブルツと下半身を震わせて腰を引いた。

顔をひきつらせ、怒ったような眼を二人のズベ公に向ける珠江夫人を見て、順子は哄笑する。



「フフフ、奥様、それは性の奴隷として一番大切な事なのよ。これから奥様を色々調教するための参考にもなるんだから、くわしく調べさせて頂くわ」

珠江夫人はキューと唇を噛みしめて、眼を閉ざした。

調教に抗ったりすれば千原美沙江にとばかりがいくぜ、という鬼源の凄んだ一言が珠江夫人に忍耐をもたらしただのかも知れない。

「そんなに羞かしがっちゃ駄目よ。あまり身体を固くすると計り難いわ」

銀子と朱美は、巻尺を使いながら、陶器のように白い冷たい頬を蒼白にさせている珠江夫人を見上げて笑うのだ。

それは昨夜、川田や吉沢達の攻撃の前に口惜しい敗北を示したと信じられない位にいじらしいばかりにびっちりと緊まり、ふと意志の反抗を示すかのように思われて、銀子と朱美は腹立たしいものを感じて、躍気になり始める。

耐えかねたように珠江夫人は、ヒステリックな声を張り上げ、優美な腿をびったり閉じ合わせると双臀を激しく揺さぶった。

「な、なにをなさるのですっ」

その敵意と反抗をはっきりと顔に現わして

激しく肩で息をする珠江夫人を見た銀子は、フンといった表情になり

「何さ。こちららはね、くわしく調べる義務があるんだよ。あんた、私達の仕事に協力しないというのかい」

蛇のような眼つきになって銀子は凄んで見せたが、川田がそれをなだめるようにしながら

「お前達はそのものズバリに攻撃をしかけるから、奥様はびっくりなさって身体を固くしてしまふんだよ。女を従順にさせるにはムードというものが要だ」

と笑って、シクシクすすり上げている珠江夫人の肩に手をかけるのだ。

「それじゃ奥さん。何から何まで調べて欲しくなるまで俺達がリードしてやるぜ。ま、こっちへ任しておきな」

そして、川田は吉沢の方を向いて、仕度にかかりな、と合図した。

吉沢は前もって打合わせが出来ていたらしく、友子や直江と一緒に立上ると、部屋の隅から西洋剃刀や石鹼などを乗せた盆を持運んで来ると珠江夫人のびったりと揃えている足元に白いハンカチを丁寧に拡げて置くのだ。

何ともいえぬ無気味さに珠江夫人の美しい

顔はますます蒼ずみ始める。

「何をなさるおつもりなのっ。ね、大塚さんはっきりおっしゃって」

重苦しい、沈黙に耐え切れなくなって、珠江夫人は身慄いしながら声をあげた。

「何度も云ってるじゃありませんか。この場で奥様に湖月流生花を愚弄した事に対する詫びを入れて頂くのよ。やくざなら指の一本も斬り取る所だけど、森田組の商品になった奥様にそんな手荒な事は出来ないじゃありませんか」

陶器で出来たコップの中の石鹼水を川田は刷毛で溶かしながら、珠江夫人の足の爪先の前へ楽しそうにあぐらを組む。

「遠山家の若奥様だって、最初は俺達を色々手古ずらすので一度きれいに剃り上げてやった事があるんだ。それからってものは割と素直に調教を受けるようになったぜ」

川田はそう云って、象牙色に輝く心も吸いつくような柔らかい珠江夫人の太腿に眼を向け、徐々に見上げていく。

絹のように柔らかい、ふっくらとした太腿の艶肌は、これから開始される屈辱を感知してか、かすかに慄えているように見えた。

そうした仕置を受ける事によって、珠江夫



人の虚栄心も自尊心も音を立てて崩れ落ちるだろう、そう思うと大塚順子は身体が震える程の興奮を覚えるのだ。

珠江夫人は、固く閉ざした眼尻より幾筋もの涙をしたたり流していたが、血の出る程、唇を噛みしめ、それは、こうした絶対絶命の場面に遭遇しても驕慢な意志の力でそれをはねのけようとする強さを秘めているように見受けられるのだ。

「さ、折原夫人、少しじっとしてな」

川田が石鹼水にたっぷり浸した刷毛を持って、珠江夫人に塗りつけようと身を寄せた。

「およしになって！」

珠江夫人はそれが触れようとした時、たまらない生理的嫌悪にカッと頭に血がのぼり、激しい声と共に腰をひねった。

川田の手からシャボンの入ったコップと刷毛が床に転がり落ちる。

「くそっ、何て事をしやがる」

川田も、カッと頭にきて、仁王のような顔になって立ち上ると、いきなり珠江夫人の頬を平手打ちした。

「こっちが優しく出りやつけ上りやがって。くそっ、こうなりやもう、容赦しねえぞ」

川田は、銀子達に向かって云った。

「地下の美沙江を丸裸にしてここへ連れて来な。折原夫人の泣きわめくところを見物させてやるんだ」

よしきた、と銀子達が立ち上ると、珠江夫人は、必死な表情になって首を振る。

「私が、私が悪かったわ。お嬢様だけは、お願い——」

珠江夫人は叫ぶようにそう云うと、がっくり首を落とし、ひきつったように号泣するのだった。

大塚順子は、それ見ろ、といった表情で珠江夫人に近づき

「ね、わかったでしょう。ここにいる人達はみんな気の短い人達ばかりよ。さっき約束した事に違反した行動に出ると何をするかわからない。今後はよく気をつける事ね」

珠江夫人の驕慢な意志の力も次第にくずれ出した事を感じて大塚順子は楽しい気分になるのだ。

「それじゃ、友子さんに直江さん。この仕事はあんた達に任せるわ。傷つけないように気をつけて、きれいに上げて頂戴。折原夫人も、どうやら覚悟は出来たようだからね」

大塚順子は、すすり上げる珠江夫人の白い肩をさするようにしながら小気味よさそうに

云うのだ。

ニヤニヤして近づいて来た友子と直江に珠江夫人は何ともいえぬ口惜しげな眼をチラと向け、すぐに涙に濡れた優雅な頬を横に見せて観念したように瞑目するのだった。

## 魔 薬

優雅な匂いに包まれたような妖しい悩ましさを持つ珠江夫人の太腿を抱くようにして腰を沈めた直江と友子は、

「こんな事したいことはないけど、大塚先生の命令やさかいな。奥さん、気を悪うせんといてや」

と、繊細で微妙な美しさを凝視しながら、そっと剃刀を当てがうのだった。

美しい眉根を苦しげにしかめて、この羞恥地獄を耐え切ろうと魂まで凍りつかせていた珠江夫人であったが、冷たい刃が、しかも、

美沙江のお付き女中であった友子の手で肌に当てられると、嫌悪の戦慄が背筋まで走り、反射的に覚悟を動揺させるのだ。

「動いたらあかんというてるのに。うちらあまり器用な方と違うさかいな。傷でもついたらどうすんのよ」



直江は舌打ちして、珠江夫人の双臀をピシヤリと平手打ちする。

酒を飲みながら、それを余興として眺めていた田代達は大口を開けて笑い出す。

「そんなに、モジモジ羞かしがってばかりいちゃ仕事がやり難いじゃないの、折原夫人。友子さん達の仕事がいよいよにもっと前へ突き出すようにしてやってよ」

銀子はその事を云って朱美と一緒にキヤッキヤッと笑い出す。

「ね、やっぱりシャボンか何かつけてやらないと可哀そうじゃない」

順子が含ま笑いしながら川田に云うと

「そんな必要はありませんよ。せっかくこっちが優しくしてやろうと思ったのに、そんなものはいらねえってシャボンをひっくり返しちまいやがったんですからね」

川田はせせら笑ってコップ酒を飲みつづけるのだ。

「ね、奥さん、少し肢を開いてよ。このままじゃうまくいかへんわ」

友子は珠江夫人の膝元に身をかがめたままモタモタしている。

しかし、珠江夫人は頑強なくらいにぴったり二つの腿を閉じ合わせて歯を噛みならし、

女中達のいたぶりに耐えかねたよう深く首を垂れて泣き沈むだけである。

「大分、手古ずってるらしいな。よし、援軍として出動するか」

鬼源が川田の耳に口を寄せて、何かさやいた。

「そうだな。そいつもこの場の余興だな」

川田は部屋を出て行くと小さな揺り鉢を抱えて戻って来た。

「静子夫人を折檻した時の残りが、まだこれ位残っていたぜ」

「それだけありや充分だ」

鬼源は、よ、お前達、少し退きな、と友子達を押しやると、代わって、珠江夫人の足の下へ揺り鉢を置く。

「これはな、お前さんのような気位の高い御婦人には一番の妙薬なんだ。身体中がどろどろに溶けちまうようなたまらねえ気分になつて、剃られようが何されようが少しも気にはならなくなる」

鬼源は鉢の中のどろどろした液体を指でかき混ぜながら面白そうに珠江夫人の恐怖に歪んだ顔を見つめるのだ。

「それにシャボンの必要もいらなくなるぜ」  
鬼源と川田にその薬の効用を聞かされた珠

江夫人は、ハッとして顔をそむけ、狼狽と羞恥にブルブル白い肩先を慄わせるのだ。

「昨夜、アメリカ製で可愛がられて幾度も演じたあのすさまじい恰好を、も一度この場で演じて頂こうじゃねえか。そうすりゃ気楽な気分で友子達の剃刀を受けられると思うぜ」  
「待って、待って下さい」

鬼源がたっぷり掬い上げてつめ寄ると、珠江夫人は、乱れた黒髪を揺さぶって首を左右に振り、哀しげな言葉を吐いた。

「友子さん達のお仕置を受けますっ。ですから、そんな事をなさるのはやめてっ。お願いです！」

すると、大塚順子が吹き出して  
「全身の緊張をほぐすために一度この場ですっきりした気分浸った方がいいと思うわ。奥様がどれ程感受性の強い女性か、田代社長にも御覧に入れておきたいと思うのよ」

鬼源は舌なめずりしながら、珠江夫人の背後へ回って腰を沈めた。

「まず最初はここだけにしておくんだ。薬の効果がどんなに鋭いか、身に泌みてわかるだろう」

柔かく、ふっくらと盛り上る珠江夫人の双臀に手をかけた川田は、思い切った行動に出



た。

あつとつんざくような珠江夫人の悲鳴。

深く秘めておきたい背後を襲う羞恥と苦悩に珠江夫人は、異様な声を張り上げて背中の中程に縛り合わされている、両手首を悶えさせ、狂ったように双臀を揺さぶり始めた。

手に入った美しい獲物に対して、真綿で首を締めつけていくようなこうした残忍で淫靡な責めを加える事は彼等の得意とする所であった。しかも相手が驕慢の美を誇り、虚栄心と自尊心が傷つく事を極度に嫌い、未だどこかに反抗の心を持っていると感じた場合、悪魔達の残忍さは更に一層の激しさを加え出すようである。

わざとその部分だけに悪魔の薬液を注ぎこみ、美女の苦悩を観察した上で、更に責めを加えて苦痛を倍加させていく——そのように残忍さにも計算が加わっている。

「その内、たまらねえ痒みにがまん出来ず、面白い尻振りダンスを始めますぜ、社長」

鬼源は、田代の持つ盃に酒を注いで、ニヤリと黄色い歯を見せた。

「どれ程、敏感な女か、その証拠をもうすぐ社長の前にさらけ出しますよ。ま、お酒の余興にゆっくり御覧になって下さい」

と川田も田代の横へ坐りこんで楽しそうに云うのだ。

鬼源の云う通り薬は次第に、その強力な効めを発揮し始めたようである。

徐々にこみ上って来るたまらない痒感に珠江夫人はブルブルと双臀を痙攣させ、真っ赤に上気した顔を身を世もないように右に伏せたり左に伏せたりしながら、艶めかしいうめき声を立て始めたのである。

「如何が折原夫人。何時までも高慢ちきな顔つきをしていると、こういう目に合うのよ、少しは骨身にこたえたでしょう」

大塚順子は、べっとり額に脂汗が浮かべて苦悶する珠江夫人を見つめながらおかしそうに云った。

「ああ、ど、どうすればいいのっ」

珠江夫人は、やがて狂ったように激しい身悶えを見せて、酒を飲む悪魔達を哄笑させるのだ。

大塚順子は立上って、ゆっくりと珠江夫人の背後に回ると、両手を回して縄に締め上げられた珠江夫人の乳房を抱き、熱っぽい彼女の頬に優しく頬ずりするようにして

「もう二度と私達に手を焼かさないでね。奥様はこれから最低の女としてここで生まれ変

わるのよ。わかった？」

順子はそう云いながら、珠江夫人の柔らかい二つの乳房を、優しく両手でもてあそび始めるのだ。

「あー、大塚さん、そ、そんな」

珠江夫人は順子の巧妙な掌の攻撃に狼狽を示し、更に激しい身悶えを見せた。

その薬効のたまらない痒感と、順子にいたぶられる事によってこみ上って来る無気味な錯乱は言葉では云えぬ狂おしいものだった。

「いいか、今後、俺達には絶対服従するんだぜ。わかったな」

鬼源も懊悩の極にある珠江夫人につめ寄ってドスのきいた声を浴びせかける。

珠江夫人は、わなわな頬を慄かせながら、はつきりとうなずいて見せるのだ。

「よし、それじゃ、さっきのようにそっけない態度をとらず、銀子に何もかも測定させるんだ。自分の口から銀子に頼んでみな」

鬼源に熱い頬を指で突かれた珠江夫人は、すすり上げながら、唇を慄かせて鬼源の命じた通りの事を口にする。

「もう二度と生意気な態度はとりませんわ。くわしくお調べになって」

途切れ途切れにそうつぶやいた珠江夫人は



激しい啼泣をくり返しながらも、銀子と朱美が位置を占めるとぴったりに重ね合わせた艶々した太腿からゆっくりと反抗の力を抜き始めたのである。

「そういう風に協力してくれると大助りよ」

銀子と朱美は、見物人達の喝采を受けながら再び巻尺を使って仕事にかかった。

「まあ」

銀子と朱美は、珠江夫人が女のもろさを隠しようもなくなっているのを嘲けるように、わざとらしく頓狂な声を上げて笑い出した。

「皆んなの見ている前で、こんなざまになるなんて、フッフ、それでも貴婦人のつもりなの」

ズベ公二人の気が遠くなる程の屈辱的な揶揄を珠江夫人は甘い身悶えとすすり泣きをくり返しつつ聞いている。

遂に優雅で高貴な捕われの人妻は、ズベ公二人に弄ばれても反抗すらせず、されるままに、見物人達の納得のいくまでの鑑賞を受ける事になったのだ。

魔薬を塗りこめられた部分のおぞましい刺戟に誘発されるのか、珠江夫人はズベ公達の軽いたぶりに対しても、おどろくほどの反応を示すのである。

「ああ、もう、もう勘忍してっ」

珠江夫人は、乳房をいたぶる順子に仰向くようにして首をもたれさせ、艶々しいうなじをはっきりと浮き上らせて、甘えかかるように頭を振るのだ。

「どう、社長。この奥様って、すごく敏感でしょう」

順子は、調子を一段と上げて珠江夫人をいたぶりながら正面にあぐらを組む田代を見て笑った。

「女も三十を一つ二つ越した時が、一番だというからな。無理もないさ」

田代は珠江夫人の狂態を酒の肴にして眼を細めて悦んでいる。

鬼源は、狂乱に近い状態の珠江夫人を見ると、ここが機会だとばかり、森田組に対する服従を徹底させようと懸命になり始める。

銀子と朱美を一まず退かせた鬼源は、友子と直江を押し出して、女中としてこれまでこき使った事の詫びを入れさせようとする。

珠江夫人は、鬼源に教えられた通り、涙に濡れ光った眼をしばたたきながら、二人の元女中に語りかけるのだ。

「今まで貴女達二人を使用人とし、冷たい眼で見て来た事をどうかお許し下さい」

珠江夫人は、大粒の涙をこぼしながらそう云い、更に濡れた頬をひきつらしながら

「けれど、今日からは貴女達が私の御主人ですわ。これまで私に受けた恨みをどうか晴らして下さいませ」

そういう屈辱の言葉を口にしながらも、珠江夫人は断続的にこみ上って来る痒感に眉根を寄せ、双脣を痙攣させるのだった。

「そんなに痒いの？ 奥さん」

友子は珠江夫人の尻振りダンスを面白そうに眺めて、

「何なら私が、悩みを解決してあげてもいいのよ」

と、次に珠江夫人の朱に染まった顔をのぞきこむようにして云うのだ。

珠江夫人は必死に友子から顔をそらせ、消え入るように小さくうなづくのである。

「その代わり、条件があるんや」

友子はチラと銀子の方を向いて片眼を閉じた。二人の間に珠江夫人を更に懊悩の極に陥れるべく何かの相談が出来ているらしい。

「ここにいる人達は、家元のお嬢さんの尻振りダンスも、ぜひ見たいと云うてはるのや」

奥様に千原美沙江はなぶり者にしないと約束したばかりだが、美沙江も仲間に引きこ



む事を承知してくれるなら、悩みを解いてやってもいい、と友子は云うのだ。

珠江夫人は上気した顔を見る見るうちに蒼ざめさせ長い睫毛を怒りに慄わせて口惜しげに友子の顔を見たが、すぐに顔をそむける。

その涙に濡れた美しい横顔は憤怒のためか冷ややかに硬化していくようである。

「もうこうなったらお嬢さんも仲間に引きずりこんだ方が身のためというもんや。え、奥さん、返事せんかいな」

友子は、苦しげに眉を寄せる珠江夫人の肩を揺さぶった。

「なぶりものにするのは、私一人で充分ですよ。約束を破るような事はなさないでっ」

珠江夫人は喉元にこみ上って来た火の玉のような口惜しさをぐっと呑みこむようにして友子に対し、敵意を含む燃えるような瞳を向けたのである。

「何だよ、その生意気な言い草は」

と銀子が不快な表情を見せ、つづいて朱美が、

「まだ、この二人を女中だと思って、そんな生意気な口をきくんのだろ」

と、口をとがらした。

「いいかい、奥さん。千原美沙江も私と同じ

く素っ裸にして、性の奴隷にして下さい、とはつきり一言云えば、痒くてたまらないその悩みを私達が優しく揉みほぐしてあげる。もし、云わないのなら」

朱美は珠江夫人の足下に置いてある播り鉢を取上げて、

「この残りを全部、使ってもいいのよ。フーフ、一塗りだけでもそんなに苦しいのに、そんな目にあったら、どんな思いをしなきゃならないか」

朱美は見るからにむず痒くなるようなその中身を見つめながら、わざとらしく珠江夫人の眼の前に近づけていくのだった。

反射的にハッと腰を引く珠江夫人であったが、悲痛な表情になって、

「たとえ気が狂うような責めに合っても、私も千原流をこれまで後援してきた女です。家元のお嬢さんだけは命に代えても、貴女達のなぐさみものにはさせないわっ」

と激しい口調で云うのだ。

大塚順子の顔に険悪なものが走った。

身も心もこれで微塵に打砕かれたであろうと見ていた折原珠江が、美沙江に危機が迫ると見るや息を吹き返したように立直ったので腹立たしくなったのだ。

私も千原流をこれまで後援して来た女——という自負めいたものの言い方も順子は癪にさわった。

順子が怒りをぶちまけるより先に銀子と朱美がカッとなって

「フン、そんなみじめな恰好にされながら、よくもそういう生意気な口がきけるものさ。それならこっちも手加減しないからね」

銀子は、川田の方を見て、

「川田兄さん。この奥様を、も一度しっかり縛り直して頂戴。少し縄がゆるんできたようだわ」

よしきた、と川田はベッドの下から新しい麻縄を引っ張り出して珠江夫人の背後へ吉沢と一緒に回った。

「塗りつけられりゃ狂ったように暴れ出すにきまっているからね。ゆるまないようにしっかりと縄をかけておくのよ」

「わかってるよ」

川田は楽しそうに口笛を吹きながら、滑らかな背中の中程に縛り合わされている珠江夫人の手首にキリキリ別の縄を巻きつけ、余った縄尻を前に回して、柔らかく形のいい乳房の上下をきびしく締め上げていくのだ。

「何だよ、奥さん。まだ、ブルブルとケツを



震わせているじゃねえか。この上まだ塗られちゃ本当に気が狂っちまうぜ」

吉沢は、観念したように眼を閉ざしている。珠江夫人の神々しいばかりに美しい横顔を見つめながら、からかうように云ったが、何か祈りでも捧げているように珠江夫人は綺麗に揃った柔らかなような睫毛さえ動かさず、口を噤んでいる。

「さてと。本当にいいんだね、奥さん。思い直すなら今のうちだぜ」

川田は、時々、腰部を痙攣させながらも硬直した表情で立つ珠江夫人の前に腰を沈めるのだ。

その華奢で優雅な眼に泌みるばかりの白さを持つ両腿を凝視しながら川田はゆっくりと掬い上げる。

「強情な女だ。吠面をかいでも知らねえぜ」

川田の仕事を手伝うべく銀子と朱美は、優美な線を描く珠江夫人の太腿と繊細な下肢を左右から押さえつけ、身動き出来ぬようにした。

「もう情けをかける必要もないようね。いいわ。うんと吠面をかかせてやってよ」

大塚順子は敵意のこもった眼を光らせて川田達に声をかける。

よし、俺も手伝うぜ、と吉沢も川田の横に腰を落とし、揺り鉢からたっぷり掬い上げるのだ。

白い頬を真っ赤に充血させて、歯を喰いしばった表情を見せていた珠江夫人は、男達の手が触れると、うっとうめいて、顔をのけぞらし、毛穴から血が噴き出そうになる嫌悪の戦慄をキリキリ噛みこらえるのだ。

色の道の巧者である川田と吉沢にとって崩れかかった女を泣かせるのは容易な事であった。面白半分に誘ってはいなし、いなしては誘いとくり返してまたたく間に珠江夫人を順応させていく。口惜し泣きと共に珠江夫人が抵抗しきれずグッタリとなり、拒絶の力を使えば果たしたとみると、待ちかまえていたように野卑な二人の男は、魔薬を注ぎかけていくのだ。

傷ついた獣のようにうめき続ける珠江夫人を見て会心の微笑を口元に浮かべる大塚順子は、そっと田代の耳に口を当てる。

「千原美沙江をどうしてもここへ引っ張り出したいわ。千原流後援会長のダンスをぜひとも見せてやりたいと思うのです」

田代は、口元を歪めてうなずいた。

一方、川田と吉沢は珠江夫人に細工をほど

こすと、ざまあ見ろ、とばかりに立ち上る。

「おや、社長に大塚女史、これからまた面白いダンスが始まるってのに、何処へ行くんですよ」

そっと部屋から抜け出そうとする田代と順子を奇妙な顔で川田は見るのだ。

順子は白い歯を見せて照れ臭そうに笑ったが、急にふてくされたような顔つきになって珠江夫人の顔を見る。

「色々、考えたんだけど、やっぱり美沙江嬢もここへお呼びするわ。だって、折原夫人の面白いダンスを私達だけで見物するのは勿体ないものね。ま、気を悪くしないで頂戴」

瞬間、珠江夫人は、名状の出来ない程の口惜しげな顔になった。

「大塚さんっ。よくも、よくもそんな——」

胸が張り裂けるばかりの悲痛な声を出した珠江夫人は、あとは言葉にならず、わっと声を上げて泣き沈んでしまう。

「奥さんが思っている程、私は人情家じゃないのよ。よく覚えておくがいいわ」

大塚順子は薄笑いを口に浮かべ、田代をうながして部屋を出て行った。

「ちよいと、大塚先生に対して今の口のきき方は何さ」





読者ギャラリー

『誘惑』

室井亜砂路

銀子と朱美は、肩を揺さぶって激しく泣きじゃくる珠江夫人のあちこちを指でつく。「あまり俺達をなめると、後悔することになるぜ」

川田は、再び、揺り鉢の中のものを掬い上げると珠江夫人の柔らかい双臀にまたもや手をかけた。

「も一度、ここに辛い思いをさせてやるぜ」しかし、珠江夫人はただ号泣するだけで、もう反抗する気力もないようだった。「まだまだ」

調子に乗った銀子と朱美は、何かにとり憑かれたようにはしゃぎながら、川田とは逆に前方へ回った。

「私達の怖さを思い知らせてやるからね」朱美が手に持つ揺り鉢の中から掬い上げた銀子は眼尻を上げて落花微塵と注ぎかける。「さあ、面白くなるぜ。肢を縛りな」

川田と吉沢は、珠江夫人の早くもヒクヒクと痙攣し始めた両肢を重ねて、キリキリ繩をかけ始めた。

「呪います。死んでも貴方達を呪いつづけるわっ」

珠江夫人は、脂汗をねっとり滲ませた太腿にもヒシヒシ繩がけされていきながら、妖しい悪夢の中をさまよっているようにあえぎつつうめくのである。

「うるせえな。おい、猿轡をはめろ」

川田は、むっとした顔で立ち上ると、ぼんやり突っ立っている友子と直江に、お前達パンティを脱げ、と命令するのだ。

びっくりした顔になる二人に、

「それで奥様に猿轡をするんだ。早くしねえか」と川田はいらいらしてどなるのだった。

恐ろしい川田の顔に、おびえたように友子と直江はその場に身を縮めて脱ぎ始める。

「ピンク色とは気に入ったぜ」

川田は唇を舌で嘗めながら、それを指でつまみ上げた。

——(未完)——





五月晴れのある日、私は直子を誘って美濃市の小倉公園に出かけた。平日のセイカ、山頂の数軒の「でんがく屋」はどの店も空いていた。

昔の茶店を想わす店の中は、二、四畳ぐらゐに、赤白の幕で仕切っており、名物という「木の芽でんがく」を喰わすのだが、あまり珍しいとも思えないそれも、山の緑を眺めながらだと格別の味と感ぜられるから、人間の味覚とはヘンなものである。

直子は疲れたらしく、毛氈の上に長々と横になり、足がダライといって飯台の上にドタリ。おかげでミニがまくれ上って、赤パンティがマル見えである。私はもちろん喜んだのが本音だが、一応は「店の者がくるんだから

## セミ告白

## パンティ・マスク

座頭孝司

座頭孝司

しばらく我慢しろよ」という。しかし内心では彼女が素直に諾くなんてなことは思っていない。案の定、起き上りもしない彼女の足が大きく宙に弧を描いて方向転換し、私の膝の上へドスンと舞い降りて「少し揉んでよ」ときた。「しょうがないな」という声に似つかわぬ私の掌が、ふくらはぎの張りのある柔らかさを喜んで揉み始めたところに、店の女が茶を運んできた。

変な目つきにテレながら、注文と一緒にチップをハズムと最敬礼して退ってくれた。もちろん、呼ぶまで来ないようにつけ加えることを忘れるような私じゃない。

余計に疲れるんじゃないかと思うようなマッサージ奉仕をしてから、何くわぬ顔をして

手を打つと、待ちかねたように盆を抱えてきたのはさっきと別の女だったが、怖いもののように注文品を置くなりサツと消える。きつとチップを分けてもらったのだろうと思う。坐ってもおれないほど疲れていた筈の直子が、ビールの顔を見ると急にあぐら坐りになったと思うと、もう私の目の前にグラスが突き出されていた。

見事な飲みっぷりである。ゴクリゴクリと波打つ白いノドに見とれていると、すぐにグラスが空になった。それをまた私の方へ突き出してから「ああ、おいしい」と一言。

二杯目は途中で一息ついたが、やはりみるみるうちに飲み干して、フーッと大きく息を吐き、左手の人差し指の背中で下唇の下辺りを



横拭いにしてから、初めて気がついたように私にもグラスを取れとってくれた。

彼女のフックラした手で注がれたビールはやはりうまかった。桜はもう葉ばかりになっていたが、満開の山つつじの花がキレイだなどとも云おうと思ったとたんに、彼女が先に口を切った。洗面器とタオルを借りてきてほしいというのだ。気持が悪いから汗を拭きたいそうである。

「飲み出す前にいえいいのに」と口の中だけでブツブツいいながら、私は店先まで行って借りてきたが、直子はデンガクをパクツキながら「固目に絞ってヨ」と、タオルの絞りがたまで、こうるさくいう。

体を拭くのは、期待に反して私に下命はなく、自分で器用にやったが、上半身はアゴの下と両脇だけであった。彼女の目的は足のほうだったらしく、太腿から足先までを丹念に拭き、更にパンティの中までタオルは及んだが、「ああ、サッパリしたわ」という声と共にそのタオルがポイと私に投げ返された。じっと見詰めていたおかげで、それを受け損じることはない。「もういいかい？」と訊いてから、それで私も顔を拭いて洗面器へ返した。

元の座へ戻るなり、直子が飲みかけのグラスを置き、ニッと微笑して「ビール、あげようか？」という。私が頷いてグラスを突き出すと、「洗面器のお水、捨てたらどう？」ときた。私は、今、拭いたばかりの汗が、新たに湧き出すのを覚えた。返事もせずまた土間に降り、突き当りの小窓から外へ洗面器の水をブチマケて持って上った。彼女はクスツと笑って受取ってくれた。すぐにその洗面器が音をたてた。飛沫もあったことだろうと思うが、毛氈が私より先に吸い込んだようだった。

それから、ちょっと変った光景だっただろうと思う。なにしろ、あぐら坐りの彼女はピンを傾けてグラスを満してはゴクゴクやっているが、片隅で少なくなった私は、グラスのほうを傾けて洗面器から掬い取るのだから……。ゴクゴクのほうは同じ、といたい私が私のほうは彼女のピッチに同調するわけにはゆかない。だいいち冷えかたが違う。当然ノドの通りも一緒にはならない。彼女が、新たな王冠を抜いて何回か傾け、空にしたピンを転がすまでに、私のほうはグラス一杯がやっとなったが、それでも山の緑に包まれてのビールの味はまた格別のものといえた。

彼女の前の四本目のビールは残り少なにな

っていたが、私のほうのは、まだ相当量が洗面器に残っていた。だが、こちらは特に「ビールは最初一杯が美味」との通説が厳存するようで、多少惜しくはあったがオカワリの気は起こらなかった。私は意を決して洗面器を抱えて見晴し台へ出た。惜しいのを振りきってブチまける。五月の日光を反射してキラキラ光りながら樹木に吸われていくのに、私は「また頼めば貰えるサ」と我が心を慰めていた。ふと、彼女はどういうだろうかと思になり振り返ると、直子は知らん顔でグラスを空けていたのでホツとした。それでも、彼女の視線がこちらに戻るのを待って、空になった洗面器の底を一ナメしてみせた。グラスの時より強い味が、ピリツと私の舌に突き刺さった。

しばらくして下山にかかったが、四本のビールをほとんど一人で空けた直子はかなり足がふらついていて、とてもじゃあない危いことこの上ない。仕方なく、支えたり背負ったりしてやっと辿り降りたものの、これも私がグラスに二杯、いや正確には一杯のビールしか飲んでいないおかげだったと思う。しかし軟体とはいえず、ズッシリとした重量を担ぎ降りした重労働に私も平地に着くと同時にヘタ



り込んでしまった。彼女は、そんな私を眺めて「昇りより疲れたわねえ。どこかホテルで一休みしようよ」という。まったくいい気なもんだが、ホテルと聞いてはヘトヘトだなどといった場合ではない。私はとび起きた。一番近くにあったホテルという名の店は、およそホテルらしからぬ外見だったが、この際、構っちゃられない気持だった。

表面上だけだろうが、外で受けた感じより

## 空想派の見たSM感

隅田 潔

私は毎号の愛読者ではない。大っぴらに読むことに後めたさを感じるので時々古本屋で買う程度であった。ただ奇クの存在に興味を持ちはじめたのは随分以前からである。自分としては深入りすることに恐怖を感じ、抜け出ることのできない違った世界へ入ってしまうような不安な気持から自分を抑制してきた事も度々である。

先日なにげなく買った週刊誌に、団鬼六氏の言葉が載っており「本格的なサディストは何万人に一人ぐらいだがサディスティックなエロチシズムを好む人は多く、これは自己のサディスティックな趣向を空想の上で楽しむ人々で十人中四人はこの趣味を

はチッタアましな部屋へ案内されるなり、直子はグウグウの高いびきを始めた。きれいな顔に似合わぬことを平気でする彼女だが、このいびきも信じられないくらいだ。アルコールのセイだと思いこむことにした。

私も結構疲れてるんだから一眠り……と思うんだが、かんじんの神経のヤツがおとなしくするどころか、主人の私に「仕事」を命じ早くやれと騒ぎまくる。無理もないとは思

持つ。これはエロチシズムの変形を愛好するだけのことで変質者などというオーバーなものではなく、SMマニアとも言ふべきものだ」と書かれており、これを読むことにより大いに安心し、この投稿を試みることにした。

時々行く古本屋で奇クのパックナンバーの何冊かのうち、どれを買おうか迷う時の選択の基準となるのはやはり辻村氏のカメラハントである。一枚の写真を見せられるより、そこへ行く迄の過程や女性の心理的な変化及異常美を追求する辻村氏の心の状態などが文章と、順を追った何葉かの写真で表現されているところに興味を感ずるか

が、待てしばしのないヤツだけに困る。セツツカレルままに「仕事」にかかった。

茶屋でさんざん見せつけられた真赤なパンティだが、こういう状態ではまた別の新鮮さが出るから妙である。最終的に欲しいものは彼女が目醒してからとしても、時間待ちの間、何年か以前に体験しているパンティマスをさせて貰ってもいいだろうと、勝手に希望して勝手に許可することにした。

あれは私が二十二才の時だ。二つしか年の違わない義母が出来て、遊びに来ていたその義母の友達という女二人と共に、三人がかりで押えつけられた。今ほどではないにしろ、そういう状況は毎夜のように夢見ていた私だったから、大喜びでおとなしく、されるがままになっておれただろうと思うのだが、そうではなかった。たぶん、あまりにもお誂えむきの襲撃にビビリ上ってしまったのだろうがテレ隠しもあって大いに暴れ、大いに叫んだものだから、三つの軟体重圧はますます圧力を加え、義母の汚れたパンティが、さるぐつわ兼用の覆面となって私の顔をすっぽり包んだ。とたんに私の斗志？は失せ、呆気なくも三匹の牝猫に弄ばれる鼠一匹と変わり果てたのだった。



らである。

今月もカメラハントでは女性の心理的変化と辻村氏の責めの状態や会話を文章で、また実際の緊縛姿態の変化、特に身にまとうものを段々剥いでいく状態などを写真で現わして面白く読んだが、先月号の「秋山夫妻」ほど強い刺激を感じなかったのはやはりアマとプロのポーズの違いが大きな原因であろうか。ただやたらに刺激的なポーズを求めるというわけではなくアマの初々しさを尊びたいのであるが、今月の伊藤嬢の場合その変化しない表情の冷たい感じが読者の印象に大きくマイナスしていることは否めないと思う。

カメラルポは外人の女性という異色な企画に目を見はる思いであったが、やはりモデルが職業意識に徹している感じでプレイをしているというムードがない点が残念なのだが、そこまで求めるのは無理なのだろうか。

六月号で一番私の目を見はらせたものは「私のプレイ」と題する佐野みさ子さんの記事であった。「奇クサロン」や「短信往来」では、このようなプレイをしている人々が実際にいるという興味と驚きを感じ、演技のない生の新鮮さが魅力である。特に「私のプレイ」ではまず洋装の佐野さんの

写真を冒頭に置き、それからプレイのフォトを紹介しているのがよい。特に開股縛りの写真の美しさにはしばし見とれてしまった。特に佐野さん自身が責められる立場で文章を書いているので、その心理状態なども、わかり興味ある記事になっていると思う。

本誌を読んでゴムマニアとか神酒マニアなどがあることを知ったが、こういった方面にはあまり興味を感じない。また小説なども面白く読むが、現実を飛び越えたというかプレイの域を脱して、残虐のみを強調するようなものも、好きではない。その点「花と蛇」などは想像の世界をうまく表現した傑作であると思う。

先に記した団鬼六氏の言葉の結びとして「SMプレイというものは、実践してみるよりただ空想して楽しむ方が無難です。そのための小説や写真集なのですから。実践派は、だんだんと人間の軌道を踏み外すようになります」とあり、なにかひとつの真理を指摘されたような感じがした。より深く追求したくなるのが人間であるけれど軌道を踏み外さない程度に空想の世界を楽しむたいと思うので、読者の期待に応えるべく益々充実した誌面を作り上げて欲しいものである。

近頃の猫は鼠をとらなくなったというが、

私のアパートの飼猫は、共同炊事場でがんばっていて、なかなかの実績を挙げている。きつと、獲らすのが目的で飼っている管理人のババアが餌をケチってるんだらうが、喰ってしまうのはどうか知らないが、弄ぶところはゾクゾクしながら眺めたものだ。だから、こんな形容も、古くさいとは分かってながらつい書いたのだが、実にピッタリの執拗極まるナブリ方を、あの三匹の牝猫に私はされた。今思い返しても、なんともえげつないイヤラシイ、そして素晴らしい女たちだ。

それ以後も、その女たちは義母のもとへよく遊びに来ていたようだったが、私は行商で遠くへ行くようになって、理不尽な襲撃は受けることがなくなった。まことに残念なことであると思われる。

直子のパンティをスッポリ冠り、薄暗い芳香袋の中でそんな思い出に侵っていると、いきなり引き倒されて、ドスンと重いものに押えつけられた。パンティで覆った顔がヒシャゲて、窒息しそうだった。

「そんなものと、私の体とどちらが値打ちがあるのよッ! バカッ」

ヒステリックな声が落ちてきた。(了)





# 「珍画」「珍本」「珍写真」

蒐集ものがたり

斎藤夜居

## 粹古堂未刊の一書

あらゆる書物の刊行案内書は、後になると大切な記録となる。著名な書籍では説明の方法はいくらでもあるから必要ないが、風俗出版物の場合には、書目書誌の参考資料として貴重だ。また私如き個人的な立場としては、目録代りあるいはノート代用として珍重してきたが、元来保存がきかないものでいつとはなく散佚してしまうことが多かった。そこで私の見た範囲内に限られたものであるがその実際について、本誌のかくれた読者のうちには、奇書探訪家も多数おられると仄聞しており、それらの方々の発掘の手掛かりやら、興趣を深めるための、ご参考にもなればと思つて……。一応話題は戦後物に限った。

むかし大正末期昭和初年にも刊行案内だけで、実際には出版しなかった書物も多かったが、企画だけでおわったもののうちには文献として、若し実現されたらと惜しみて余りある未刊の書もある。

昭和二十七、八年頃。まだ城北音無川畔のカメラ屋に移らなかつた時分の、いわゆる軟派愛好者間には懐しかった本郷丸山福山町時代の粹古堂伊藤竹酔が案内状だけ送った、『筆禍小説文庫』というのがそれだ。

出版物の発売禁止処分は、

安寧秩序紊乱（社会政治批判）

風俗壊乱（わかり易くいえば、軟派もの）  
この二種に大別されている。この筆禍小説文庫は明治以降の旧出版法のため法網に引っかけた風俗小説集で、安秩物も少し含んでいる。

夢野道鏡花水月 依田学海。大耻辱 山田美妙。緑源氏 巖谷小波。淫婆 藤本藤蔭 色道論 斎藤緑雨。寐白粉 小栗風葉。破垣 内田魯庵。媒介者 徳田秋声。師匠の娘 長田幹彦。酒精清 加能作次郎。逆徒平出修。小間使と若旦那 秦豊吉。醜男 久米正雄。延命院 小山内薫。入れ墨師の子 岩野泡鳴。お千代と其母 宮地嘉六。丘の上の家 綿貫六助。犬 中勘助。烙印



花房四郎。武烈天皇行状記 田瀬月奢。

内容は右の二十篇を選んでいた。おそらく資料は少雨莊斎藤昌三からの提供を予定した出版計画だったのであろうが、少雨莊文庫も竹酔もなくなってしまった現在では、尚更に当時これが出ていたらと悔まれるものだ。

### 美和書院もの

やはりその頃、昭和二十七、八年より昭和三十一年まで和紙をたっぷり使用した美書、貴重文献保存会を称した美和書院が芝浜松町にあった。軟派文献を特濃和紙豪華本に仕立て、これを「紅鶴版」「丹頂版」「別版」などと唱え、これも一種の軟派時代の産物で、本冊の禁句伏字表（正誤表）を直接購読者には送っていたが、この表だけでも作品によっては実に数十頁分もあったりした。念を入れた造本であったが、和紙なので手ずれと汚れが着きやすいのが欠点。併し、いまでは、保存のよい美本で伏字表附完本は高価である。古書展でもガラス棚に納まったりしていて、眺めているうち思わず微笑を禁じ得ない。

美和書院（馬淵量司）では昭和二十八年一月に年頭挨拶をかねて自社出版案内を読者に送っているが、顧問の斎藤昌三は「吾々の企

画に就ては既にお含みの如く、平和日本の曾て不出世の珍什文献を顕発紹介を目的としたし出発、既に四部を出版いたしました。依然頑迷な当局から初出二点は禁止になりました。然しそれらは問題とせず益々精進斯界の開拓に尽瘁の覚悟で努力しています」と述べ同じく岡田甫も「戦後相当出た艶本類の古典翻刻は、殆どが昭和初期までの杜撰な秘密出版そのままの繰返しであり、原本と忠実に対校したものは皆無と言ってよく、読み易く現代風に文字を改竄してあるばかりか、誤読誤字の羅列である。これでは古典保存の意義は全く失せ、風俗文献としての価値は零と云っている。これらの悪書の駆逐のために、厳正良心的な仕事を遺したい」と言っている。また刊行社は両先生のご指導の下、貴重文献の良心的刊行を目指す、と宣言しているから、斎藤・岡田二老人が資料提供者だったことが知れる。珍書出版も腐ったようなむし返しばかりしていないで良心的にやろう、と言うことであって、やはり、時代の気運を感じさせる。ストリップ劇場などで、見物人がコーフンして「もっと真面目にやれッ」と怒号するようなものだ。つまりそれを裏返しした気分で、当社は軟出版を忠実に一言一句誤りなく

翻刻いたします、と言っている。加えて先行二点は禁止になったがそんなことは問題にせず頑張る……と。此処らに梅原北明以来の軟派出版社研究者共通の往年のプロ斗士流の言葉使いがあるようだが、最近ではこの種のタイプはまったく無くなったし、そうまで肩を怒らさなくなったって、〈人性〉を教育・衛生・風俗・文献等々の面で云々しても先生と呼ばれこそすれ、あんまり羽目を外さなければお叱りは少なくなった。久しき太平の余徳とでも申すべきか。

この禁止になった二書は『艶女玉すだれ』と『好色三大伝奇書』である。

『艶女玉すだれ』は西川祐信の挿画二十一図を挿入したその名のみ喧伝されていた（現存するただ一冊）の完全復刻で、内容は傾城、遊女、商売女、素人娘等の諸分やら床の秘技を解説したもの。附録として伝西鶴として著名な『真実伊勢物語』を加え、校訂並解説は斎藤昌三である。

『好色三大伝奇書』は「袖と袖」（伝小栗風葉）、「乱れ雲」（伝佐藤紅緑）、「四畳半襖の下張」（伝永井荷風）の近代三大奇書を一堂に会したもので「これは少雨叟先生の努力により、最初の刊行物又は生原稿の写本によ



り、本格的な作品に復元したもので、研究家読者層に非常な感銘を与え、後世に伝える底本として斯界に喧伝されています」と自讃たっぷりだったが、たしかに内容が充実していたので事実売切絶版となり、そのころ芋小屋山房（森山太郎）の雑誌『稀書』でもこれの仲介販売の労をとっていたが、本当に売切だと言っていた。

『江戸三大綺文集』は「藐姑射秘言」（黒沢翁満）、「阿奈遠可志」（沢田名垂）、「逸著聞集」（山岡明阿弥）の三書を含み、校訂解説は少雨叟、菊判大型の変型本で本文オーナメント、当時の頒価は千円だった。

『諸遊芥子鹿子』（しゅゆうけしかのこ）、この書は江戸時代の公娼、私娼、密淫売女、男娼の口説、床の秘技、体験などを艶に説き明したものだ。遊女と素人女との技法の相違、遊女のオルガスムスの告白、遊女と間夫（まぶ、情夫）との密会方法、肥後芋茎（ひごずいき）の使用法等を経験豊富な女郎や男娼などに問い、その解答を記述したという内容で西川祐信の原画十一図を挿入、附録として伝西鶴の「好色堪忍記」を載せた。この書は刊行数が多かったか、あるいは売行きが悪かったのか、伏字表抜きの特価本が一時は神保町

書店街に出廻っており、筆者も一本求めた。校訂解説は岡田甫。

『真情春雨衣』幕末風俗本で作者は吾妻男一丁（滑稽本七偏人の梅亭金鷲の隠号）人口に膾炙した人情本風の艶本である。附録に「春窓秘辞」を副えている。校訂解説岡田甫。

尚これには、『現代語訳秘本真情春雨衣』（昭和27年）大和出版社がある。斎藤昌三訳となっている。昌三本らしくない、安本である。『好色増鏡』この書は古来有名の作だが『日本小説年表』にも書名が逸していた程斯道専門家の間ですら手にすること極めて稀な珍書とされてきた。半紙本四冊、貞享二年刊行、作者不明。復刻の底本は式亭三馬の旧蔵書だという。内容は戦国時代から徳川初期にかけた物語風好色咄の短篇集——。附録は西鶴の「色里三所世帯」。校訂解説斎藤昌三。

『全釈柳の葉末』（紅鶴特別版）俗に天保の末摘花と称せられる大バレ狂句集。解説は岡田甫。

『水のゆく末』伝江島其磧と称する編者岡田甫の新発掘にかかる、未紹介の作品。淡々とした筆致ではあるが、日本版『女の一生』。一人の美女が少女時代から数人の男に接し、一家の落魄から芸妓となり、妾となり、更に

人妻、遊女と種々雑多な性的遍歴譚となっている。附載は伝山東京伝の「子犬つれづれ」柳亭種彦の「春情妓談水揚帳」。

ほかに『絵合好色四季咄』附録に「今様厚情伝」、「閨友月之白玉」があるというが、未見。

次に「丹頂版」と称した現代艶笑文学で、

『茨の垣』

『風流賢愚経』

『寂寥のままに』

『話をきく娘』

等々、仲々情味深い作品集だが、いまはまだ差し障りあるので別の機会に改めて詳しく紹介したいと思っている。所で、この美和書院の最後の出版は、特別別巻として、

『糸遊』（いとゆう）であった。解説者岡田

甫は「沸き返るような色欲界、人妻あり、処女あり、西洋美人あり、遊女あり、妾あり、恰も極彩色の絵巻物を繰り広げるような絢爛さを示すが、その女性群の中を渡り歩く主人公は、まるで湖上を歩く聖者のような、犯し難い清らかさに包まれている。時には失敗して凡夫の浅ましさを見せるが、それは御愛嬌というものである。群書の涉獵に余念なき読者も、必ずや一読三歎」することを受合う、



と最高級の褒めっぷりである。では、本文の一部を見てみよう。

「そして朝まで寝て居るわ。その間にあたし……一度だけ正常でさせて頂いて、あとは後門でもいいわ……ちゃんと知ってるでしょ。偽善家。隠しても駄目よ」

「……」浅見は返事のしようがなかった。「先生が一人で暮していらっしゃる訳はちゃんと知ってるのよ。先生は四谷公園？ それとも浅草の金龍館？ なら、あたしも行ったことあるわ。彼処にはお尻専門の女も来るのよ。あたしはお尻専門じゃないけれども……お尻だって出来るのよ。だから、きっと先生には気に入られると思うわ。自信あるの……ね。御覧になって……あたしのお尻」彼女は炉辺で、オリブの袴を解き掛けた。

「よくあたしのお尻見てよ。そして元気づいているなら、あんたも出さないよ。縁があるのよ。よう出してみて」片貝は恥ずる色もなく、裾をまくって真白い尻を向けるのだった。

「勃起なんかするもんか。したらどうしたというんだ」

「するのよ。するために男は元気を出すんじ

やないの」

「するとは」

「あたしとよ」

「……」

「だからさ、それは一度でいいといったの。先生はどうせ女がきらいなんだから……あたしは女の身体だから、前がいいにきまってるわ、でも一度だけ慰めてくれたら、あとは後ろを許して上げるわ。先生は女はきらいでも、後ろのことをおもっているのでしょう。だから、元気になってくるのよ」云々。

こういった素晴らしい文句がめんめんと綴記されているのである。菊大型縦判、箱入豪華本、本文耳付和紙オーナメント、校訂者サイン入り、特別頒価八百円だった。

所で、この美和書院刊行物のうちどうしても書き加えたい一件がある。それは少雨荘の著『海相模』青園荘私家版（昭和24年）のうち「猟奇おもちゃ箱」という短文のうちにも書かれている挿絵画家で、余技に女性局部ばかり数千枚をスケッチして秘蔵していたが、その画家の歿後にその絵をめぐって、当初譲り受けた故小倉清三郎（相対会主宰）の会の所有権あるものを、斎藤昌三が美和書院には

かって秘密出版してしまったことだ。この件は『相対』十六号（昭和29年6月）の挟み込みの通信「手紙にかへて」に、未亡人小倉ミチヨが詳細に書き、昌三の非をうったえている。軟出版に関する著作権や所有権の問題は将来の課題で、むづかしい所だ。現在では相手の道義心きりアテにできない。

### 紫書房一件

発禁本研究家の長尾桃郎の用語をもってすれば、内容に乏しく装幀ばかりきらびやかな限定版など、おもてばかり着飾っているという意味で「おいらん本」と呼んでいる。また七五三の子供の晴着にもたとえて、中身がその重味に堪えかねていると冷やかしたことがあったが、そこにはまだ鑑賞の美がかるうじでも存在しているのだから、ゴテゴテ着飾った限定版も各人の好みに従っては、愛撫愛玩の余地が残されているのである。併し、紫書房の「へ本」ほど愛書家にとって嫌味な本はない。この社の刊行物のことを思うと、そこには「へ見るたのしさ」も無いし、何かしら疑惑の念がきざし、軟派出版物という人のこころの弱みにつけ込んでくるイヤラシさがぐっと胸にくるのだ。最近、古本屋でも紫書房の



本はじつに高価を呼んでおり、得難くはなっているが……。それは軟派文献の直接的な資料が市場でいかに不足しているか、又は需要が思いのほか多いかと言うことを物語っているようだ。美和書院が斯道出版物において、内容を吟味し造本を美しくしたことは仕事として立派だった。けれども、紫書房のように何がなんでも儲けずくのやつつけ仕事というのは、後味の悪い淋しい結果だけが残る。

紫書房は当時（昭和二十七年—昭和二十九年）目黒区宮前町にあって、社主は渡辺正範で、表看板は「国民教育社」と称していた。

その出版図書のほとんどは過去に刊行された艶笑文献からの和文和訳および通俗的に改悪化した海賊版ばかりで、そのうち種がつきてくると当時現行の他社の出版物まで、改題し書直して発行する悪どいやり方だった。出版社の劣悪な手段はもとより憎みて余りあることだが、併しそんな所へでも何がしかの生活のためにかけた無名のライターたちをおもうと、なんだか情なくなってくる。だが、軟派文献という物は一般には、むかしから高価で入手し難いことになっているから、例えばダイジェスト版にもせよ鰻の蒲焼の「へ匂い」だけでも嗅がせた点だけの功績は認めるべきだろ

う。紫書房の本は大てい二百円から四、五百円、千円以内のものが殆どであったから。次に紫書房出版リストと解題を左に掲げる。

「世界艶笑文庫」とそのシリーズを称し、刊行趣旨としては、古今東西の珍奇書を歴史と類別と系統とによって整理し、文化の変遷過程を庶民的側面において把握し、戦後の国民生活に希望と潤いを与えたい——と言い、いま市井に氾濫している醜悪な享楽主義を排斥し、艶本研究に対する世の謬見と偏向的無理解を批判する。と言っているのだから、これではまるで言うこととやったことと違う。言葉のアヤにしても凄まじ過ぎるようだ。

#### 『匂える園』（第一集）

発行と同時にすぐに発禁。ご存知の文芸資料研究会で昭和三年に発行した酒井潔訳『くえん・ひわ』の焼直し。原典は勿論立派なもので、医学と宗教と文芸とを結合させたアラビヤの古性典として著名である。紫書房では、のちに創立一周年記念として改訂版を出している。また振替による前納者には「紫アルバム」を進呈していた。

#### 『情婦ヒル』（第二集）

よく知られているジョン・クリーランドの「ファンニー・ヒル」の焼直しである。

#### 『変態性欲心理』（第三集）

クラフト・エビングの名著の抄訳で、内容見本ではわが国ではその名のみ喧伝され実例が余りにも露骨なため、遂今日まで出版を許されなかったもの、と称しているが既に大正十一年に白水社から訳本が出ていた。

第四集は『ガミアニ』。第五集『秘話バルカン戦争』。第六集『ふろっしい——十五歳のヴィナス』。第七集『中国性史・素女経』。第八集『ベルリン狂奏曲・ローレ』。第九集『おんな色事師、附・蕩児の冒険』。等々、いずれもなつかしい文芸市場社時代の作品ばかりずらりと並べている。

ほかに、『女盗さんげ録』メイ・チャーチ

原作。フランク・ハリスの、『我が生涯と恋愛』を日本語では発表できぬ英文サワリつきで、閨房描写のことごとくを中学一年の学力でも十分読みこなせるようにと、懇切丁寧に訳註を附したもので、黒百合選書として『黒ミサ異聞』ユイスマン原作の中世紀風の耽美作品。サドの『ジュリエット』。ジョバンニバッツレ原作『二十日物語』。C・ペトロニウスの『ローマの饗宴』。更には中国清朝末期の『品花宝鑑』の抄訳。シャルル・ベルラン原作、マドレーヌの告白、として知られた



『聖春婦』。チャールス・デヴルウの『印度のヴィナス』。ついにはイギリス艶本として著名な『船長夜話』の抄訳まで発行した。

また日本現代艶筆作家の小説集としては、池田みち子の、『人妻の危機』。武野藤介の『色道』。同じく武野著『私は知らない』。

これの宣伝文句は仲々傑作なので次に写す。「ああ……いい気持だわ。久しぶりなんだから。たまらないわ」「こここのところはどうかだい?」「そ、そこよ。そこがいいわ」「すこし痛かアないかい?」「いいえ、ちっとも。もっと強くしてよ。もっと強く」「一遍拭いちゃどうだね。汗が……」「拭いて下さいなこんど私、うしろ向きになるわ」こんなきわどい肉感的な会話から始まるこの小説集は、現代の西鶴、日本のモーパッサンと絶讃される武野先生の近來の快著、世界の艶書、江戸期の艶本を経巡り来たって遂に昭和期の一大艶笑文学をここに公開、あまり夢中になって椅子なんかに抱きついて、私は知らない。

尚、紫書房刊行の江戸読物は、『真情春雨衣』。『真実伊勢物語附袋法師絵詞・とのゐ袋・新選古今枕大全』。『女護島延喜入船』別に、中野栄三編『陰名語彙』を刊行した。

次に、『相對』における小倉ミチヨの昭和

二十八年十二月の、会員への通信より抄出する。

「この資料「避難宿」は、昨年（昭和二十七年）十二月、東京都目黒区宮前の国民教育社又の名紫書房渡辺正範が、無断で「相對会」の名を堂々と出し「避難宿の出来事」を「田舎宿の出来事」。「田原安江」を「安江と云ふ女」と題名を変え、所々へ広告。読者を集めているのを、地方会員からの報せで、私は紫書房へ行き、その非を詰り、発売中止を申し渡して来たのでありました。

本年（昭和二十八年）一月二十六日神田錦町大盛堂望月新助が私の摺印なく（註。『相對』全冊番号および世話人の摺印がある）所有番号なき増刷「相對」を、町へ流したため私は警視庁保安課風紀係に検挙され、摺印番号のある「相對」までを、私が違法だとして拒むのにもかかはらず、押収してしまったのであります。（註。『相對』はこの時の事件のため、一号―五号が最も入手し難い）

その頃、「田舎宿の出来事」が、我が物顔で本屋の店頭飾られたのをみた私は「これこそ正しくY本販売である」と、上村課長へ紫書房を突き出したのであります。渡辺正範は警視庁の留置場で十数日を送ったと、後に

係から聞きました。今は、彼も正しくなって表看板の国民教育社に恥じない仕事をしていることと信じて居ります」

と、叱責されたり皮肉られたりで、事実上ここら辺りで遂に紫書房の活躍も、お手上げになってしまったらしい。「紫本」は実際の所、マニヤも幾分こり、性なのは問題にしない。それだけに記録もないので、古い刊行案内を見ながら、感想の一端をも述べたまでだ。以上はそれでも出版という事業を、いちおうは表街道を歩こうとしたから、〈発売禁止〉などのことも生じたが、まるっきりそんなことには頓着しない。まったく地下室作業の「珍画」「珍本」「珍写真」のダイレクト・メールがあった。むかしも今もだ。つかまらないで、うまく相手方に売りつけさえすればそれで目的を達したと言う〈春本屋〉のこと、それだけに虚々実々の案内状の珍文たるや、あの手この手をつかって、おどしたり、すかしたり、哀願したり、威猛だかになったりで、迷文も多い。

だが、純艶笑文芸と〈純春本類〉の区別は言わなくても判っていることだが、マニヤといえども心して裁量すべきであろう……一応老婆心までに。



最近海外から、北欧やアメリカの性的印刷物が輸入され、素晴らしいカラー版の写真集なども見られるようになったので、以前に蒐集家たちが苦心惨胆して集めた古くさい陰湿な写真や春本の類は、まったく問題にされなくなってしまった。

たしかに、カラーものと白黒写真ではその差は歴然としているから、時代の移り変わり、文化の発展ということは、こんな末端の現象にもはっきり顕れている。それに伴って感覚的にも麻痺してしまって、気ぜわしくなくなってしまった、過程というか、順序や順番を待つのが、まどろこしくなってしまう、物語りは一切不要でいきなり強烈に視覚にうったえ、頭脳をセックス化させてしまう傾向がふつよくなつた。

それはそれで大変結構なことだとは思っているが、何事にも歴史があることだけは忘れたくない。これから少しだけ（当り障りがあるので）記してみたいと思うことは、日蔭に咲いた花の歴史とも言えるべき「春本」や「春画」のうち、そのごく一部分だけである。

いまから十数年前、昭和二十八年の夏。ある日『風俗奇譚』だったか『風俗草紙』か誌

名は覚えていないが、そんな雑誌の読物に読み耽っているうち、フト頁の片隅にある小さな広告に気がついた。例によって「珍画」や「珍書」「珍フィルム」を御注文の方に代金後払いで密送する、魅惑の芸術社特価品目録ご希望の方は郵券同封お申込みください。但ハガキにての注文はお断りというのだった。別に珍しくはなかったが、驚いたことには、その住所がなんと拙宅から数歩の場所だったので、ヘンな気持ちになった。

早速、むらむらと好奇心が湧き上り、出掛けて見た。アパートで、階下の下駄箱の上の名札に社名があった——、その部屋の戸をトントンとノックした。と、言ってしまうえば、たったこれだけのことだが、その時の気持ちたるやそんな生易しいものではない。好奇心が段々と恐怖心にかわって、わずかの時間のあいだに、それこそ幾回か止めちまおうと思っただか知れない。が、どうせ乗りかかった舟だと、思い切って声をかけた。

半開きにしたドアから顔を出した男と、ごく自然に挨拶したのは、実は近所の銭湯で顔見知りだったからだ。また、その頃そのアパートで変死人が出て、大騒ぎをしたことがあり、町内の役員として私は大分世話を焼いた

こともあったからだった。また、彼の細君がパン屋の店先で買物をしている姿はいつも見掛けていたので、満更初対面という感じがなさを感じなかったが……。それにしても、どう切り出すか、話しを始めるのに弱ってしまった。

併し、思いのほか話はスムーズに進行して（詳細は略す）写真と本を頒けてもらったが帰りぎわに、此処まで訪ねてきたのは今迄に貴方一人だけですから……と釘をさされた。

それから、横の連絡がついたものか、あつちこちの珍書屋から、目録や案内状がどっさり山程舞い込んできた。——これが昭和四十一年まで続いていたが、その後どういふ訳かプツリ来なくなった。

彼は間もなくそのアパートを引越して行ってしまったが、長く音信だけは通じていたのである。最後に会った時は、都心の繁華街の路地奥の、ビルの一室で、事務所を構えていた。部屋に不似合な電気冷蔵庫が置いてあるので、そのことを尋ねたら、中の野菜入れのケースを金庫代りに使っていると言って、冷えて切っている一万円札の束を明けて見せてくれた。「こんな所に、お金が入っているとは誰れも気がつかんでしょうなあ」と言って笑



っていた。意表を突くと言うか、人を食ったやり方なのか、やはり一抹の性格の異常さは隠しきれなかった。彼のその後のことは現存しているのかそれとも昇天してしまったのか、知らない。生活の背後に、いわゆる暴力団関係とかテキ屋とか、そういうものはなくて、「一匹狼」としての存在だったことは確かである。

併し、こんな例は稀有に属すること、この種の業者に会ったという話は、マニヤからも殆ど、聞いたことがない。私の知人の製本業のHさんというのがあるが、其処の住所とたった一番地のちがいで「現代社」とか「明星社」とか名乗る社があって、珍書、珍画、珍写真、美容コケシ、肥後ずいき等々、ありとあらゆる珍品を通信販売しているが、これの場所が十数年来、どうしても分らないそう

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かず送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメーヅ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

だ。時々、眼つきの変わった若者が、カタログ片手に事務所に飛び込んでくるので困ると言っていた。とにかく、手紙だけはちゃんと届いて、そこが何処だか分からないというのだから、現代の怪談である。また、銀行や会社の重役室に白昼堂々と乗り込んで（勿論、然るべき紹介状を持参している）ゆうゆうと商談取引を済ますというのが、案外多いのも事実だという。

いちばん危険なのは盛り場の横丁など暗い所で、エロ映画の映写会に誘われ、思いもかけぬ大金をふんだくられることで、私も浅草で、旧赤線地区内に誘われ、ひどい目にあったことがある。好奇心も程々にすべきだと柄に似合わぬことだが申上げておく。

拝啓。益々御清栄の段慶賀に存じます。

扱て、早速乍ら、要件につき——。今回あなた様だけに、特別ないしよで、秘密のお知らせを差上げます。特別な秘ぞう品とでも申しましょうか、ちょっと説明にも困るような、とても淫らな恥かしい秘写真や、秘本を、あなた様に、ひそかにお分けいたしたいと存じます。この機会を逃さずぜひお買上げ下さい。

実際に実演しているいやらしい写真や、寝室での楽しみを、より倍増する露骨な本など、他では絶対買えないようなとても下品な恥かしくなるモノばかりですから、好事家にはピッタリのものと存じます。掘出し物とはこれのことです。他では、誇大な宣伝カタログなどでだまして、ロクでもないものを送って来ますが、安物買いのゼニ失いにならぬよう、充分にご注意が肝心だと存じます。

…注文書まで付いていて好色淫写真特撰一組（荷造密送料共）三〇〇〇円。好色淫本と称するのと同じくで、但書きに両方お買上げの方には特秘景品を贈呈いたします。ご注文は前金でお願いします。お金がつけば品物はスグ発送いたします——とある。

これが、第一回の通信で、第二回目になると次のような奇文が到着する。勿論、その社によってそれぞれ違うが、余りにも長文に過ぎるかも知れないが、ご参考までに。

『先日はお買上げ戴きありがとうございました。さて早速ながら今回あなたは秘密趣味の会の特別会員として登録されたので御連絡申し上げます。この会は私共よりお買上げ下さ



った人だけが、会員となれる特別頒布の会です。

あなたはヒヤカシではなくて、心からこのような蒐集の趣味があることが判りましたので、これからは色々得難い秘蔵傑作写真や珍本のご案内を差上げて、あなたの趣味の役に立ちたいと存じます。

この特別情報は一般の人々は全く知らないもので、特別会員だけに限定して頒布する数ある中から厳選した逸品ばかりですから、きっとあなたのお気に召すものと存じます。ご承知のようにこのようなものを売るのに大きな広告や宣伝やカタログなどできませんし、只のいい加減なヒヤカシかも知れない人に始めからそんな凄い秘蔵品を売るわけにはまいません。ショックが大き過ぎて、腰を抜かして大騒ぎになると困るからです。

ハッキリ言ってあなたはきっと先日の分はあまりお気に召さなかったかも知れません。正直いっていささか拍子抜けでガッカリしている人も中にはいるかも知れません。しかし此処でよく考えてみて下さい！ あなたとの取引は先日が初めてであり、私共にとってはあなたが本当にこのような趣味の持ち主か、本当に買う気があるのかどうかわかりません

でした。しかし、あなたは実際に私共よりお買上げ下さいました。これからは特別会員として、門外不出の秘蔵品が買えるわけですから、先日お買上げのは、入会金だと思えばまったく安いものです。

さて、あなたは特別会員になれたわけですから、これからはヨキモノが手に入るわけですが、そうヨダレをたらしてニタニタと喜んばかりはいられません。秘蔵するものは非常に高価なものだからです。いいものにはお金が沢山かかっています。道楽とはお金のかかるものです。もし、あなたがお金もロクスツポ出さず、おもしろいものが欲しいなんて虫のよい考えならば、こういうものを手に入れようなんて考えは今すぐすてなさい。

見本に一枚送れたの、分割して売れたの、後金払いで送れたの、そうしたケチクサイことはこの世界では一切適用いたしません。私共は只お金のためにやっているのですから、お金さえうんと戴ければうんと凄いのをお送りするというわけです。

あなたは私共より、はるかに高級なお仕事で、あぶく銭を儲けて、このようなお金のかかる道楽趣味もできる人なのですから、ケチなことは言わないで、この特別情報の秘蔵品

を気前よく買って下さい。尚、この通信によってお買上げなき場合は、残念ながらあなたをお金のない人とみて、以後連絡は打切りいたします。』

大要以上の如き案内文で、これでも約三分の一に縮めてあるが、同じような言葉が執拗かつ毒々しく、また哀れがましく、そうかと思ふと鬼面人をおどすと云った塩梅で、勿論なにを云おうとするのか良く判るが……ひどい文面で、まったく読むに堪えないものだ。

然し、ものは試しで、この時も、

写真二十枚と本三冊一組で三千円、というのに送金した。送金上の注意事項に、書留便や現金書留は眼立つから、速達の手紙に現金を同封して呉れ、と書いてあるので、その通りにもしたが、結果は、……梨のつぶてだった。更に奇っ怪なことには、こんどは別名の社から又案内状がきて（勿論住所も違うが）くだくだしいので案内文は畧すが、

「前客。毎度お世話になり厚く御礼申し上げます。さて、前回は郵便受付係の不正があり、一部の方に御迷惑におよび、品物の発送が出来ぬ分があったかと存じますが……」

と、いうのに始まる孔版の手紙で、全く盗人たけだけしいというのはこの事であろう。



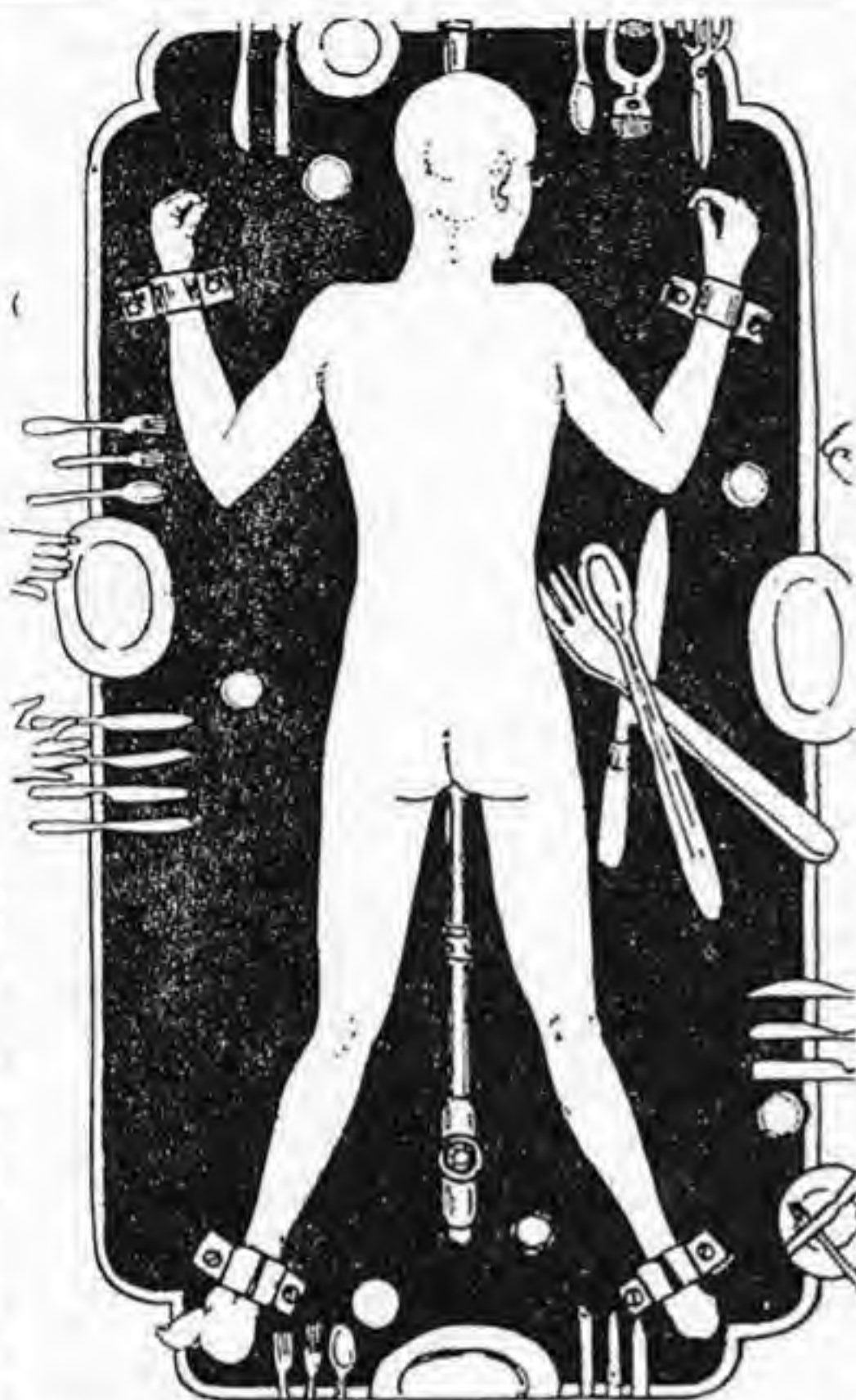
多色華麗な豪華本

稲垣足穂の代表作を結集!

# 絵本逆流の王

著者／稲垣足穂  
イラスト／ふじ沢光男  
松永真和  
定価／二〇〇〇円

★タルホ独特の官能美学を鬼才画家ふじ沢光男と松永真和が精魂を込めて描いた幻想的なイラスト★タルホのすべてが判る宗谷真爾の決定的タルホ論★高橋鐵所蔵の「男色」に関する貴重な図版・資料約九十点



好評中  
発売中

内容 一千一秒物語／A感覚とV感覚  
／prostata-rectum機械学  
装幀(ふじ沢光男) アート紙、極上質  
紙によるジャンボ版(B5)／多色刷り  
四八ページほかオフセット、総二二八ペー  
ジ／金色のメタリック・クロス装幀

超豪華・限定本

購読者予約受付中!

独創的な着想のデラックス特別装幀／限定二百部／申込み〆切り日九月三十日、満約次第打ち切らせていただきますのでお早目にどうぞ／頒価七五〇〇円

書店売切れの時は直接本社へ

(注文は現金書留で送料当社負担)

東京新宿南元町三  
若越ビル

現代ブック社

電話 (359) 5 1 6 1  
郵便番号 1 6 0



創

作

## 丸木氏の女

大江 草子

サイドテーブルの狭い平面上で、女は腕を折り曲げ四つん這いになって、臀部をより高く持ちあげ、脂汗を浮かせて苦斗し続けている。台面が狭いので折り曲げた肘から先の手と顔、それに膝頭から下の脛と突きあげた臀が宙に飛びだしている。台面に支えられているのは胸と膝頭だけだ。

丸木氏は柔らかいダブルベッドに寝転がって、熱心にプロボクシングJ・ライト級世界タイトル・マッチの画面を見つめている。手に汗をにぎって、

「そこそこ、フックだ。チンだ」

と、身をのりださんばかりに興奮して、ラウンドが終了するたびに、深々とたばこを吸いこんで息を整える。

女は苦勞をして力み返った姿勢を、相変わらず保ち続けて、ベッドの奥の鏡はテレビの熱戦と女の孤闘を豊かな色彩で映している。

丸木氏は爆情的なコマーションが流れると、ちらりと女の方に視線を送る。疲労の色を息使いに顕しながらも女が、奇妙な姿勢を保っているのを見届けると再び画面にもどるが、たばこを捨ててからは、無意識のように手を伸ばして女に触れる。

女は我慢強くびくりとも動かない。丸木氏は指を女の脚や臀に遊ばせながら、「それ行け、アッパーだ」とテレビの虜に還ってしまふのである。

破廉恥な姿をしているけれども、女の肢体

は若々しく、肌も美しい。

ボクシングの十五回戦が済んで、チャンピオンが僅差で数度目の防衛に成功した。丸木氏期待のノックアウトはなかったけれども、日本の選手が勝ったのだから、丸木氏の機嫌はそんなに悪くない。ビールを運んで来て飲み出す。肴はピーナツと女の孤闘の姿だ。

ピーナツを噛み、ビールを飲み、ときどき女の肌をまさぐる。

女は、一時間余の苦しい業にもかかわらず彫像のように動かない。

ビールを飲み干してしまうと、丸木氏は軽



小川茂正・画



い調子でハミングしながら、枕辺に置いた鞭を選ぶ。野球の選手がバットを選ぶ要領である。丸木氏は巾広のしなやかな鞭を持って立ちあがる。丸木氏好みの鞭だ。

「運動開始」

「……………」

女は答えないけれども、充分納得しているはずだ。丸木氏はゆっくり鞭に素振りをくれる。一回、二回。調子は上々だ。丸木氏は深呼吸をする。

ヒュー。

女の臀に空を切った鞭が弾む。

ビシー。音の終らぬうちに、女の臀は快速力で縮まった。立てた膝を折らないで、息をつめて、全身の力を集中して、臀部だけを低く小さくしているのだ。

鞭の合図が忙しくなる。

女の臀は追い立てられて、空中高く舞いあがる。鞭は女に休むことを許さない。

女は汗に塗れ、呼吸を早くしながら、惨めな運動を激しく繰り返している。女の動きがいくらか鈍くなった。

丸木氏はその様子を見てとると、続けざまに太腿を叩きあげた。

女は揺りあげた臀を、合図に従って更に高

くしようと懸命に焦り、夢中になって励んでいる。丸木氏は女の努力が、もうどうにもならない最後の一ミリの限界線にくるまで、容赦なく鞭の合図を叩きつけ続けた。

女の臀は激しかった鞭の雨の記録を充分にとどめて、全体に赤く腫れ上り熱を帯びて火照っている。

丸木氏はたばこに火を喫いつけ、ベッドに腰を掛けて、寛ぎながら女の様子を監視している。ときどき、首をかしげて、これからどうしてやろうかと「遊びの方法」を考えているようだ。

女は極限状態に張りつめた姿勢を維持する苦勞に、全霊を打ち込んでいるので、ものを思索する気力の余りはない。

丸木は微笑を洩らすと、悪戯っ子のように瞳を輝かせた。

○

丸木氏はニュース写真の大家として広く名を知られているあの丸木佐度氏である。

今年の沖縄デーであった。

新宿いっぱいには練りあげられた学生デモ隊と警官隊の激しい死闘。催涙弾がデモ隊の陣列を崩し、怒声と罵声と絶叫と悲鳴。警棒が打ちおろされ、引き立てられて行く学生。

丸木氏のカメラ・アイが目敏く、捕縛された一人の女子学生を追った。

彼女は両腕を二人の警官に抱えられて、引きずられながら運ばれて行く。長い髪が乱れて舞い散る。グリーンの地に黄色の斑点を無造作にあしらったブレザーの後姿は華奢な流れに見え、ぴっちり密着したストラックスに表現された抵抗の動きは、しなやかな女豹のように弾力がありそうだ。

「わたしの助手です」

丸木氏は強引に警官と掛け合い、彼女を救出した。

彼女。つまり、丸木氏から見ても女は、氏の直感通り女豹であった。

幼児のまま成長を忘れたのではないかと疑うほど、白くキメのこまかい皮膚を持っていた。雛人形を拡大したような古典的な顔形をしているが、ときどき瞳を見開いて瞬きをすると、それが可憐なあどけなさをばら撒くのがあった。首が細く、ウエストがよくもまあと呆れるほどくびれている。か弱そうな上体に乳房ばかりが高く広く盛りあがり、視線ですら弾き返されそうである。

女は小さい唇を動かす。どこに潜んでいるのか尖鋭的な論旨が快い音声のリズムと不釣



合いに飛びだして来る。昭和日本のジャンダークを自認しているように、この愛すべき革命家はまくしたてる。

丸木氏はしゃべりまくる女は嫌いである。この女を俺の鞭の下で喘がせて、ころころと足もとを這いずり廻るペットに飼いならしてみたい。問われたことを手短かに応えるだけの、慈悲を乞うときに哀願するだけの、伏し目勝ちの女にしてみたい。ほっておけば四六時中でも無言で通す家具のような女に変えてみたい。丸木氏は女の饒舌を聞きながら、いろいろと考えたものである。

○

一年が過ぎた。

女は見事に変貌した。

女を飼育することにかけては名人の丸木氏も、これほどの傑作ができるとは思ってもみなかったのである。

女はT大学の二年生になった。ようやく、十九才の芳紀を迎えて、匂うように美しくなった。女でありながらストレートで合格したと聞いているから、故郷では村をあげて自慢する才媛なのであろう。名前は嵯峨秋絵。しかし、丸木氏にとっては、知性や誇り高い履歴など、まったく無用だった。彼のいう

女とは、張ち切れるように輝く肉体を、妖しく悶えさせる一匹の従順な動物にすぎないという持論だからだ。

丸木氏は、女の一カ月の予定表を持っている。女の自主行動を最小限度に切り詰めたものだから、ほとんどが空時間になっている。丸木氏は予定表を見て、自分の好むときに、一方的に女を呼びだす。週に一度の場合もあれば、連日に及ぶこともある。

女は丸木氏の招令を待って、終日、化粧を凝らしてアパートで待機している。丸木氏の指令は急であることが多いが、女は迅速に馳せ参じた。留守をしていたり、遅刻したり、化粧が悪かったりの不手際は絶対というほどおこさなかった。ほんのちょっとした不祥事であったとしても、自分の身体に加えられる苛酷な罰の恐ろしさを女は充分に知っていたのである。

丸木氏は上機嫌で、女の優雅な嗜みを楽しんだ。

待ち合わせの喫茶店などに丸木氏が悠然と入っていくと、女は入口の見える奥の方の席で、すっと立ちあがる。

丸木氏がシートに坐るのを確かめてから、女は遠慮勝ちに腰をおろす。

「お呼びいただいてありがとうございます」女は頬を染めて頭を下げる。一度教えられたことは必ず守り、必ず脇に黒いケースを置いていく。

ケースの中には数本の鞭と金鎖、小さいリング、それにストラックスが一枚入っている。女は自分の身体を苛み、肌を傷つける道具を持ち運びさせられているのだ。ストラックスは脚に生傷ができたとき、スカートのままでは帰れないからだ。

「手入れはできているか」

丸木氏がコーヒーをすすする。

「はい」

女が、しおらしく肯く。

自分のアパートで鞭や鎖の手入れをするように命じられている女は、自らの身体を痛めつける責め道具を、孤独な灯りの下でせっせと手入れすることの屈辱に耐えられぬ気持ちを起こして、怠ったことが一度だけある。

そのとき、丸木氏は烈火の如く怒った。女は獣吊りに手足を一つに縛られて、天井からぶら下げられた。丸木氏は鋼の芯の入った鞭でぶちのめした。いつもは腿から臀、せいぜい背中までという不文律的習慣でとまっていたにも拘らず、その日は制限がなかった。腹



も乳房も腕も果ては顔まで女は容赦なく打ちのめされた。

乳首がふっ飛んだ。鼻がちぎれた。女はそう錯覚しつつ数回、失神した。

気がついたとき、女は丸木氏のマンションで手厚い看護を受けていた。全身の傷が癒えるのに一カ月近い時間を要した。以後、女は丸木氏の命令には、神経質なほど忠実に従った。

「鞭はなんのために手入するのだ」

丸木氏は女の心を打診する。

女は他の客に聞こえないかと、用心深く周りを見渡す。植木鉢のゴムの葉陰を通して幾組かの客がいる。しかし、自分たちの話は聞こえないようだ。女は頬を赤く染めて小さな声で言う。

「鞭は、数奇代をもっと素直な女にして下さる先生ですから」

数奇代とは、丸木氏が女に与えた名前だ。

丸木氏は電話でも「オイ、数奇か」といい、女にも「わたし」とか「わたくし」とか言わないで、一人称も『数奇代』と言わす。

丸木氏は十年ばかり前に、三人の同好の士と三人の女を飼ったことがある。女は十八才、十九才のピチピチした若さを持ってい

た。丸木氏は、三人の女に『数奇代』『伊弥世』『阿曾子』の名前をつけることを提案した。抽籤の結果、丸木氏のペットに引きあてた名前は『伊弥世』であった。今の女に近いほどよく飼い慣らしたペットであったので、丸木氏は『数奇代』と名付けたかった。丸木氏は念願の命名をするのにふさわしいペットを探していたのだ。

丸木氏の快楽は始まっている。

「数奇代は今日、どんな芸がやりたい？」

「数奇代はご主人様次第です」

「鼻の訓練をしてやろうか」

「お願いいたします」

「乳首を強くしてやろうか」

「お願いいたします」

丸木氏は紳士である。二人で歩くときはケースを女に持たさない。女は命名通り惚れ込んだようすを体全体に滲ませて、丸木氏の腕に縋りついている。しかし、顔は伏目勝ちにしおらしく装っている。

丸木氏は直接ホテルへ行かないで、女を連れて街を歩いたり、バーへ寄ったりする。ヌードモデルのように整った肢体、臍たけた清純な表情を併せ持った連れの姿は好奇心な目を惹く。

丸木氏を冷やかすことばが、あちら、こちらで女をさいなむ。

「ああ、惚れられてね」

丸木氏は磊落に笑ってみせる。

「マーさんがお熱なんでしょう。ねえ、お嬢さん。誘惑されちゃだめよ」

バーの女たちが覗き込む。

女は瞳を伏せて、耳まで赤く染める。「俺が促さないときは口を利くな」丸木氏から厳命されているからである。「女は男の持物だから、言ってみれば一種の道具だ。余分なことをしゃべる必要はない」という丸木氏の哲学が身に染み込んでいる。

「おとなしいお嬢さんね」

「男に惚れると、こうなるのさ」

丸木氏は鼻を蠢かしながら、女の顔や肩をいじくり廻す。こんな女はこうしてもいいのさ、丸木氏はこういって、女の乳房を引っ張りだして、飲みかけているグラスの酒をブツカケてみたいような衝動を押さえ、後の楽しみに残しているのだ。

丸木氏は時間をかけて女を責めたてるのが好きだ。だから、丸木氏が疲れを覚えてプレイを終え、スコッチを口に含み、シャワーを浴びる頃には夜が明ける。解放されるとき、



女は疲労のため鼻が高く見えるほど痩せる。腰などは筋肉が凝り固まって跛を引かないと歩けないのが常だ。

○

丸木氏は鞭の柄を逆手に持ち替えた。グリップの太さは相当なものだ。それでぐいぐいやられては、堪まらない。女は腸が逆転するような苦痛に「ううう」と呻く。しかし、臀は、下げるの合図がないので勢い強く張りだしたままだ。

丸木氏の責めは一段と力が加わった。

「うわあっ。うわあっ」女の呻きは只ごとでない。

「ご主人様。数奇代にご慈悲を下さいませ。数奇代にご慈悲を」

女の声は絶切れ絶切れである。限界に来なければこの女は声をださないはずだ。丸木氏の責め手が力を抜いた。

「はあっ」

女の息が幾分、落ち着く。

「手入れしろ」

丸木氏は女をサイドテーブルから引きずりおろすと、女の前に鞭を放りだした。美しいペットの吐いた弱音に、丸木氏の機嫌が悪い。

女は全身に恐怖の鳥肌を立てる。踏みこんで鞭の柄に舌をあてる。いつ新しい鞭が舞い落ちてもいいように、臀を高く立てながら……

「今夜は覚悟しろ」

丸木氏の声が響く。

「……」

女は、鞭の手入れを忘れた日の記憶を蘇らせて、ああと胸中で震える。女は高くあげた臀を犬のように揺する。必死で揺する。猫のように「ぐおろ、ぐおろ」と咽喉を鳴らす。女に許された精いっぱい媚である。

丸木氏は女の頸を引きあげ、金色のリングを女の鼻に通す。リングに軽金属の鎖をつなぐ。女は戦慄する。

丸木氏はベッドの足に鎖をつないだ。鎖の長さは二メートルばかりある。特大の嘴管が示される。ポンプ式になっている細いゴムの管を腿を這わせてプッシュする部分を女の膝頭の下にテープで貼り着けた。女は肘を折り曲げて臀を高く持ちあげた四つん這いである。丸木氏は先太りの大きな鞭で女の臀を後から叩きつけた。

「走れ、走れ」

丸木氏は怒鳴った。

鼻鎖で固定されているので、女の這い廻れる範囲は狭い。しかし、「走れ」と言われたのだから駆けなければならぬ。駆けるたびに膝頭の下プッシュ部を押すことになるので、自分を責める結果を生んだ。

ヒュー、ビシ！

ヒュー、ビシ！

丸木氏の鞭は適確に降り注がれる。女は這い駆ける。駆けすぎると鎖が伸び切って強い衝撃が鼻を襲う。

「うわあ」

ビシ！

「痛あっ。うわあっ」

女は被虐の歓叫を張りあげ、苦痛の悲鳴をほとばしらせる。

ビシ！ ビシ！

丸木氏は汗を拭いながら責め続ける。

「うわあっ。うわあっ」

女は歓声とも悲鳴ともわからぬ叫声をあげて駆け巡っている。

まだ零時には間がある。丸木氏の攻撃は朝陽が登るまで続くだろう。しかし、女の絶叫は失神の直前であるようだ。

——（おわり）——





—— 観 劇 レ ポ ——

残 虐

＝ 地獄絵ショー

—— 絵 と 文 ——

柴 利 好

忍妙子の、「残虐地獄絵ショー」がモダン・アートに掛った。記憶に誤りがなければ、従来は川向うばかりで、山の手上演は今回が初めてではないかと思う。関西では「耐子」で通っているらしいが東京では「妙子」という。さまざまな残酷な責め折檻を耐え忍ぶM女性の受け身の演技が売り物であることは、彼女の名前が如実に示してくれている。例によってその日に見た他の演者に就いては全て省略して、この「地獄絵ショー」だけにスポットを当て、その綱要をご紹介します。

暗黒の舞台の尽で、幕が揚がり、除々に照明が明るさを増すと、おっ！ 何ということだ。のつけから妙子が舞台中央の天井から吊るされているではないか。

朱色の薄絹のような長襦袢に紅のしごきを締め、下は赤い湯文字といういでたちで彼女は、親指よりやや太めのロープで腹部を六巻きされ、両手は後ろ手に天井から

滑車で吊られている。髪ではあるうが鬚がガックリ毀れて、両脚は膝から下があらわにブラリと垂れ下がり、爪先と舞台の床面との距離は二米はあろう。

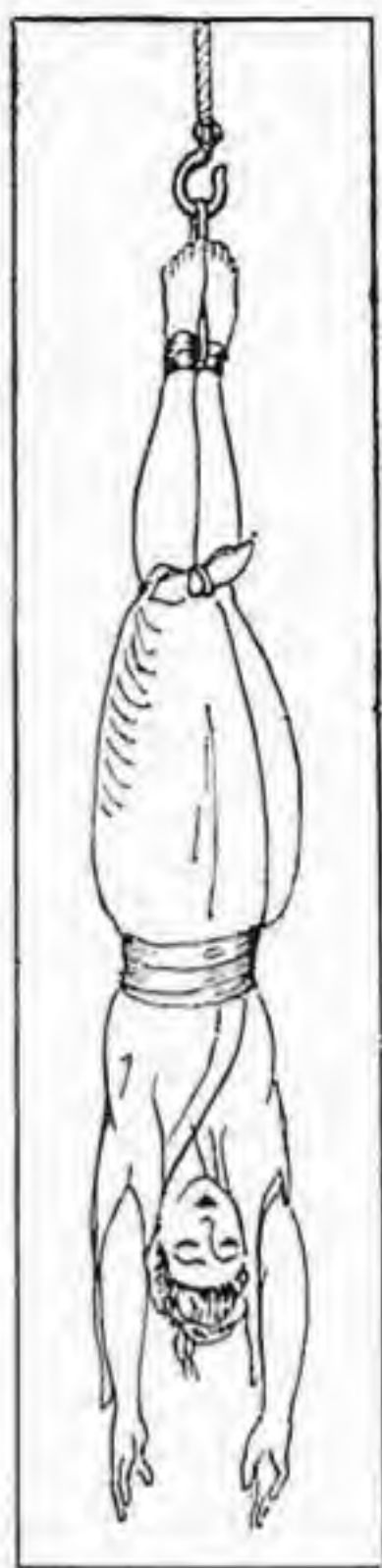
場面は明治三十何年かにみすみ遊廓で起った逃亡未遂の遊女に対する折檻である事をスピーカーが知らせる。その遊廓がどこであったか、いつの出来事か或はそういうことが実話であるかどうかは問題ではない。兎にあれば、彼女は責めに責めぬかれ、苦しみ悶える演技を続けられそれでいいのだ。

責め手は右頬傷の凄いやくざ風の男。恐らく実生活では彼女の夫君であろう。

何処へ逃げようとしたのか。誰が手引きしたのかを執拗に尋問するが、もとより彼女は白状しない。

やがて吊り降ろされた彼女は、かねて用意の拷問台に縛りつけられる。この台はお棺を少し大きくしたくらいよすみの合板作りで、両側上四角に鋸が打込まれていて、その各々に七〇センチほどの長さの細引が結びつけてある。その台上に彼女は無理矢理に頭部を上手かみてにして俯伏せに乘せられ、両手首、両足首を鋸の細引で嚴重に二巻きして縛りつけられるや否や、鞭で背中を滅多打ちに打ち叩かれる。





この鞭は責め板といった方がよいかも知れない。長さ約一米近く、巾三センチ、厚さ二、三ミリの板の手元に布切れが巻きつけてある。打ち叩かれる背中に当る箇所には、襦袢の下にマット様のものが仕込まれているらしいことは分かるけれども、バシッ！バシッ！と前後二十四打も立て続けに打擲される鞭音を聞いていると、何ともいえない気持ちにかられてくるから不思議だ。

この鞭打の一打ごとに彼女は全身を硬直させ、頭を抬げ顔を捩じ曲げ、そして四ツ手に張られた手足を精限り魂限り動かしながら悲鳴を挙げ、泣き叫ぶ。その叫声の凄まじさ。正に圧倒的迫真の演技である。厚化粧した顔は真赤に上気して、脂汗が滴たり「ゲケッ！グアッ！ウウウ！ヒュッ！ウワァ！」といった言葉とも何ともつかない叫び声は、恐らく実際にこうした場面に出喰わせれば本当に出ることだろうと思われる。

やがて手足の縄が解かれ、拷問台から降ろ

鍔に縛られた手首の先がダラリとしたなりの  
無残さである。縄を解き放された手首、足首  
の肌には細引の条痕が二筋ずつ赤く染まって  
残っているのも見せ所となっている。

床に伸びた彼女の股間辺りに唐辛子が差し込まれると、その刺戟のため又しても彼女は悶え苦しむが、それでも頑として意に従おうとはしない。次いで八目ローソクに火が点けられると、火の点いたままそのローソクが股間に押し込まれ、「ギャッ！」と一声、彼女は失心した様子。「これで当分使い物にならねえ！」という責め手の台詞が入って、やがて、男はローソクを投げ出して、更に新たな責めにかかるのである。

先ず彼女の襦袢の裾を膝頭の処で結び合わせる。次いで両脚を揃えて足首を腰紐で三巻きほとして固く縛る。別のロープをその腰紐の縛り自を通して輪を作り、それに引下ろした滑車の鈎を掛け、これで逆さ吊るしの準備が終ったらしい。

男の腕が滑車のロープを引き絞るとギギツと滑車が軋み、見る見る彼女の身体は足先を上にもズルズルと逆さに引き上げられ、遂に頭が床から離れる。両手はダラリと垂れたままで高々と吊り上げ、完全直線逆さ吊るしが達成されたとき、手先と床面との距離は一米以上、隔たっていた。

そしてこの逆さ吊るしの女体の背に又もや責め板の連打が、ビシリビシリと六打も続けられ、彼女の身体は緩やかに回転する。「明治何年。法律によってこの私刑は禁止された」と再びスピーカーが伝え、彼女の逆吊りの俣舞台は暗転して幕が降り、所要時間二十分間でこのショーは終わった。

舞台化粧のせいで、彼女の顔立を存分に知  
ることはできなかったが、豊頬のやや面長の  
美人で、いわば明治、幕末ころの女のスタイ  
ルといえよう。全身の肉付きは特に豊かには  
見なかったが、如何にも肌白で、非常に柔軟  
な体質の持主のようであった。年令は、化粧  
したその面ざしから受ける感じより、大分若  
いではなからうか。

このショーで特に印象的なのは、彼女に対する責め手の縄掛けの巧みさであった。それには何のためらいもない、被縛者に対する配



慮なども毛頭感じさせない縄さばきで、飽くまでも責めぬくのだという自信に満ちた嚴重な緊縛が、敏速無慈悲に実行されていることであつた。如何に職業柄とはいえ、仲々左様割切つた非情な振舞は出来るよう出来ないものだ。そして前にも触れた彼女の悲鳴、絶叫の凄まじさである。それは内に堪えた、じつと苦しみを耐え忍んだ呻きでは、決してない。身も世もあらぬ苦悶の表現が実に見応え聞き応えがあつた。

事実彼女は苦しいに違いないと思う。仮に今度の場合のようにマットで保護されているらしいとはいえ、鞭打を継続的に縛られた身に受けたり、全く補助縄なしの本吊るしに二度も吊るされる舞台を、毎日何回も演じなければならぬのだから並大抵の苦勞ではないことは充分諒解できる。

『切手代用』送金についてのお知らせ  
○七月号広告でお断りとしておりましたが、当方の整理も一応つきましましたので、御注文の際の『切手代用を再開』して受け付けます。但し『一割増』は従前通りです。尚、よくお願いいたします。  
『振替』等の方法にて送金下さることをお願い申し上げます。

これを三谷豊兄の方法で計算すれば、一日四回公演、一興業一〇日として八〇回の本吊るしに耐えぬいてことになる。しかもこうした演技を敢えて売りものにして各地を巡業して廻っている彼女の身内に激しく燃え盛るものは何か。これこそ真性のマゾの火でなくて何であろうか。

同じS・Mショーでも内攻的でいじらしささえ感じさせる青木順子の舞台。或は既に様式化を完成して、スピーディーな一種のパレ―を見るようなローズ・秋山の陽性な舞台などに較べると、彼女、忍妙子の舞台こそ、文字通り陰惨な残虐地獄絵を感じさせずにはおかない。そこに特質がある。その意味でこそ彼女の舞台人としての真価が認められ、不変の名声の高まる所以でもあると考える。今後とも何卒、ご夫妻相共に扶け合つて、良い真剣な舞台をいつまでも続けて戴き度いものと、願うこと切なるものがある。

この公演終了の翌日から、同じ小屋で引続いて残酷ショー第二弾と銘打ったS・Mショーが掛つた。前の素晴らしい公演に続いて演じられるショーであるからには、それ相当の内容を備えたものであらうと想像するのが一般の人情である上に、出演者名も『三笠忍』と

ある。さてはS・Mショーの「忍」合戦が見られるかも知れないとの秘かな期待を持って訪れたものの、その期待は見事裏切られてしまった。

孤閨に悶える女の部屋に脱獄囚と称する男が忍び入って、女を犯そうとする。何度か鞭様のものを床で鳴らし、ローソクの蠟涙を女の肌に滴らしなどして一応責めのポーズはとってはいても、その内容はお粗末で、取交される台詞のやり取りも、ふざけ切つたものであつた。結局男はピストルで撃たれて下手に消えてから、一人残つた忍女史が他のショーの踊り子と同様の仕草でストリップダンスを演じて、漸く受持時間を終えたのであつた。何のことはない、SMショーとは名のみ、いわばショーダンサーの余技の類に過ぎなかつたのである。

これでは到底「忍」合戦どころの話ではなく、残酷ショー第二弾のうたい文句が泣かうということではしかなかったことを、残念乍らご報告しなければならぬ。羊頭狗肉とも思われるこの公演は、実験劇場と呼称して演劇上の真面目な努力を続けようとするこの小屋の名誉のために心から惜しまれてならない。



## 愛飲派小説

## 処刑の部屋

浅羽 やすし

(1)

ノックなどは、いっさい無視して、社長室の重たいドアをいきなりあけて、とびこんできた不二子は、

「こんちわア。来たわ、社長さん」

まるで、仲間の家にでも遊びに来て話しかけるみたいな口調で、大またに歩き、ソファに、ドンと、腰をおろして、ミニの足を組んだ。

三宅社長が、交換台を使わず自身で、地階のティールームに降り、そのピンク電話で呼び出しをかけてきた。その用件は、言われなくても、ちゃんとわかっているのである。わかってはいるからこそ、できるだけ、らんぼうにふるまうのである。

「ウム。だいたいな情報が入ってきた。しばらく待っておれ」

社長の三宅大造は、たったいま、九州支店から入ってきた、テレックスの報告テープを



春川ナミオ・画

熱心に読んでいる。

だが、それは仕事をするポーズでなく、いささかのテレくささをカムフラージュするためと、ひとつには、なるべくよくいかに時間をかけて、だす量を多くさせムードを楽しもうという、三宅一流の、たんなる見せかけであることぐらいは、不二子にはチャンと読めているのである。

「やだなあ、また。ビール二本のんで、三時間もトイレがまんしてるのよ。不二子、ハチ



きれそうよ」

「ゼイタク言うんじゃない。和船で沖釣りにいつたときのことを思や、それくらいガマンできるじゃろ」

「ああ、もりそう。ほんとよ。おなかが痛くなってきたわ」

すべては、前に三宅から教え込まれたセリフのやりとりであった。

三宅は、電話をかけてよこすとき、いつでも細々と変わった注文をつけるのである。

でも、今日の不二子は、まんざら、三宅から指定されたセリフを棒読みしているのではないのである。

たしかに、命ぜられたとおりここへ来る前に、二本のビールは、つづけざまに、胃のなかに流しこんできた。だが、その前に、ゆうべ、知人のやっている小料理の「初音」で、しこたま、そらまめの塩ゆでを食べ、鮎の塩焼きを、たてつづけに五ひきも食べた。そのうえ、冷や酒を三合一。寝るまえに、おなががふくらんだら、下痢するのは、不二子の習慣であった。

三宅から、電話をうけ取ったとき、不二子は、まだベッドにいた。

会社の勤務が、社長づきの助手という名目

で、フリーに変わった日から、不二子は、朝寝のクセがひどくなった。

週に三回、午前中、三宅のところへ行けばよいという条件は楽であった。

しかし、条件は楽でも、仕事はきびしかった。研究の必要上、トイレへ行くのも、三宅のOKがいる。というのは、なんとしたことだろうか。

いまだって、そうなのだ。

おなかをこわして下痢ぎみのくせに、とにかく、ごはんでもパンでも、なんでもいいから、朝食のつものものを食べないと、便通がない——これが、不二子の毎朝の習慣であった。

で、けさも電気釜で、めしをたき、コンビーフ、スープ、キャベツを山ほど盛って、とにかく朝食をすませておこうとベッドの中で考えているところへ、三宅から電話がかかってきたのだった。

「ワシだ。たのむ。午前中に来い。それから例の……」

電話のむこうで、三宅は声をうんと落として、言った。

「ビールを、忘れんようにな。例によってお前は、まだ、ベッドだろう。わかってるだろ

うが、トイレへは行かずに来るのだぞ」

用件だけ言うと、不二子に返事をさせず、三宅は電話を切るのが、くせであった。

不二子は、あわてた。三宅の言いつけにそむいて、トイレをすませて出向こうものなら、三宅は、ひどくおこって手がつけられない。

「なんのために、高いカネを払ってお前を呼ぶと思ってるのだ。いわれたとおりしないとだめじゃないか」

その代わりに、目の前で牛乳を五本、たてつづけに吞まされ、吐き気をおぼえたことがある。

「五本ものめば、出がよくなるじゃろ。さ、はよ、のめ！」

首をつかまれ、むりやりのどのおくへ流しこまれ、苦しかった。

苦しくても、のまないではすまされない。それが、研究上必要といわれればいやとはいえないだろう。

涙を流し、ともすれば、もどしそうになりながら、死ぬ思いで、甘ったるい牛乳をのむしかない。

「そうしといて、下から、はよ出せ」だって、あたしは、メス牛じゃないわ」



思わず口のなかでボヤキ、恨みたくなつたが「高いカネの魅力」が慰めてくれる。

それくらい、いつつけられたことは守り、来る前にはかならず、ビールを二本あけてくることにした。三宅は、

「やはりビールが、いちばんだのう。原料が牛乳では、なにか甘たるくて」

と、目を細めるのである。

「ああ、ほんとにもっちゃうわ」

不二子は、うめいた。

だが三宅は、それを自分が前に教えこんだセリフだと思ひこんでいるので、彼女のうめきを本気にしない。

もう不二子の尿意は、限度に達していたのである。

尿意がたかまれば、便意のほうも同時におこる。

けさの彼女の下痢症状は、特別ひどいようであった。

「社長さん、かんべんして！」

まるで、失神しそうな、便意であり、尿意である。

「そうか、ワシの言いつけをよく守ったといふのじゃな。だが、まだガマンできる。お前が、ガマンすればするほど、ワシの妙薬は、

余分に得られるというものだ。もうすこし、辛抱せい」

社長室の、ツイ立てで仕切られたむこうには、設備のととのった浴室と、洗面台と、そして和式のトイレと、洋式の便器が、コンポ―トにまとめられている。

ツイ立てのむこうに、回りさえすれば、いっさいの用は、人にみられずにすむのだ。ただひとり、三宅社長の目さえ気にしなければ――。

だが、いまの不二子にとって悲しむべきことは、コンポ―トの、たったひとつの出入口には、カギがかけられていることだった。

ダイヤルのナンバーさえ合わせれば、ちゃんと、ドアは開き、即座に使うことができののだ。だが、そのナンバーは、三宅一人しかわかっていない。

「ああ、苦しいわ」

不二子は、ソファに身を横たえて、うめきをつづけた。

不二子は、ビールには弱い。二本が最高限度であり、それだけのむと、角瓶半本あけたほども酔うのである。

酔えば自制心も羞恥心も、いっさい引っこんでしまう。三宅は、それも知っていて、だ

から「来る前にビールを二本のんでこい」と、注文つけるのである。

高いカネを払ってやるのだから。無理を承知でいつける三宅の胸のなかには、そんな思惑がある。

払ったものに見合う対価を求めるのは、資本家として当たり前のことだ。だからこれでいいのだと、割りきっている。

突き上げる尿意と、目まいのしそうな激しい便意と、そして、嘔吐を伴った酔いに、不二子の苦しみは続いていた。

だから三宅が、足音を忍ばせて足もとに回り、床にひざまずいて頭をたおし、その位置から苦悶する不二子を、ニヤリニヤリとうれしそうにわらいなが見上げたことも、全然気づいてない。

三宅は、奇妙な形の「いれもの」を大切にうに手にしている。

自身で考案し、医療器具の工場へ特別注文した特殊な便器である。

それは透明なガラスを本体とし、大小二つのジョーゴが、ビニールパイプで本体に連結されている。

ジョーゴの一個はダ円形で、長さ十センチ。もう一個は半径五センチ。ビニールパイ



プは透明で、中のものが本体へ還流するさまが、観察できる。ビニールの長さは、三十センチだが、これは、いつでも長いものにつけ変えられる。

本体の頭部からは、コンセントに接続するためのコードが出ており、スイッチをONにすれば、モーターが回転して、かなりの吸引力が、ジョーゴに作用し、そこにあげられる液体や固形物は、一滴あまさず本体に吸いこまれる仕掛けになっている。

いちおう、病人用の便器という名目で、弁理士に依頼して、パテントを申請してはあるが、三宅の目的は、実は、そんな商売に魅力をもったためではない。そんなミミッチイ仕事よりも、もっとスケールの大きい会社を、三宅はもっているのである。

製作を依頼した医療器工場主は、この彼のアイデアにすごく感心し、設計を、五十万円で譲りうけたいと言う。

だが、三百人の従業員をもち、年商三十億を上回る三宅鋼業株式会社の創立者であり、社長でもある三宅大造にとって、年収三千万円のわが身に、五十万円は、問題にならない金額であり、いまのところ、売りわたすつもりはない。

それよりも、うまく仕上がって、すべてに思い通りに動く、便器を、自由自在に操り、憧れの採取物が、ビニールパイプを通過して、本体に流れこむさまをみるのは、なによりも興味のあることであった。

まして、スイッチを切り、まるでミキサーのフタをとるように、その内部にためられたものを、スcoop皿にうつすときの、相手の秘密をのぞき見るような感じは、最上のものといえた。

スイッチをいれて十分間たつと、不二子は尿意も便意も完全におさまったらしく落ちついてソファに、放心したように身を投げ倒した。

便器の吸収力がつよく、事後に、トイレットペーパーを使う必要はない。使用者は、ただ本体のモーターに、すべてを任しておればよいのだから、不二子が身を起こそうとしないうのは、当然のことだろう。

その便器は、いまのところ、不二子の専用品になっている。

大造は、注意ぶかく、内部にためられたものを皿に移すと、本体からパイプもコードも取り外し、浴室へ入って水道の水で、本体をきれいに洗った。

「疲れたか。どや、大增へ行つて鮎でも食わんか」

大造は、すごく、きげんがよい。

不二子が、ちゃんといいつけを守って、ビールをのんできたし、下痢をしていることは思いがけなかったが、おかげで「原料」が、思ったより、よけい採取できたのは、何よりであった。

だが不二子は、鮎料理どころではない。

便器のおかげで、急場は救われたものの、秋山研三が大すきなコーヒーを用意して、そろそろ渋谷の、いつも利用する料亭で、首を長くして待っている筈なのだ。

「社長さん、あたしなんだか、血まで抜きとられたみたいで、めまいがするの。鮎は、このつぎにするわ」

彼女が、血——という表現を使ったのには理由がある。秋山研三という男は、気がむくと不二子の太ももから、血を抜きとるクセがあるものであった。

そこへ、タイミングよく秘書が入ってきたのは、不二子にとって、まことにつごうのよいことであった。

秘書は、ある大切な来客の来訪を、三宅に告げた。



一回について二万円ときめたギャラを受取ると、不二子は渋谷で待ちかねる秋山研三のもとへかけつけるため、タクシーをひろうのであった。

## (2)

三宅大造は、一向に快方に向かわぬ持病の糖尿病に悩んでいた。

医師から、糖尿病と告げられて、すでに七年たっている。それは五十二才のときであった。

酒と美食と、不規則な生活が、ゼイタク病と言われるこの病気を招いたのだろうか。

すでに慢性化した持病に、用いる薬はなくなっていた。

「あとに残るのは、食餌療法だけです」

医師は、もはやサジを投げたみたいにいるのである。

二十一才で独立。文字通りの徒手空拳から築きあげた事業で、九階建てのビジネスセンター「三宅鋼業ビル」を構えるまでに成功していたが、しかし、事業のライバルには勝っても病には勝てず、不快な闘病生活を送る彼に、ある人から、古ぼけた一冊の書物が贈られたのは、いまから三年前のことであった。

その書物の名は、

「食事で治す糖尿病」――。

いろいろの献立が紹介されており、大して参考になるものとも思われなかったが、その書物の、序文が、たいへん気になった、その文章は

「むかし、外国のある城主が……」

という書きだして、珍奇な料理法にふれている。

なかでも大造は、つぎの一節にひどく興味を抱いたのである。

「病人は、食べものはすべて、まず若い女性の口中でよく噛ませ、唾液と交ぜ合わせ腹の中に送る状態にしたものを吐きださせて食べるのがよい。」

さらに、効果をあげたければ、そのまま吐きださず、いったん胃中に送りこみ、よく消化させる。頃合いをみて、これを嘔吐させ、それを食べる。

さらに――。

と、その序文は、つづける。

「女性の紅唇を通じて、食道から、胃腸に達し、よく消化された果てのもの。そして、一部は他の器官に送られ、体内をめぐり、やがて体外にだされた、それらの排泄物

も、用いかたではりっぱに薬物となるものである。」

――と。

三宅大造は殊のほか、この序文に惹かれたのだった。

若い女性――。

金に不自由のない成功者である大造にとって、そのような役目に使える心当たりは、たくさんあった。

そのなかの一人が、不二子であった。手を回して、系列会社の受付係をしていた不二子をスカウトし、マンションに住ませたのはほかでもなく、その用に使う目的のためだけであった。

八百万円のマンションを買い与え、月の手当てに十万円。

そして、「食餌」を摂るために、一回呼ぶごとに二万円ということにきめた。

会うには、人目を避けて、わざと社長室を利用する。

系列会社の受付係が、書類を届けるためにやってくるという口実は、誰の目にも、不自然さを感じさせない。社長室は八階にあり、七階でエレベーターを下り、裏階段をこっそり昇れば、社員の目にふれることは、まずな



かった。

莫大な費用をかけて、社長室の一隅に、ホテルも顔負けするような、浴室とトイレをつくらせ、ひそかにマジックミラーをつくりつけて、自由に、その内部をのぞき見できるようにしたのも、ありあまる金の使いみちに困ったの、道楽からであった。

糖尿病にかかってからというもの、妙に女性、トイレを使用するところがみたくなるのは、なぜだろうか。

それは、大造自身にもわからないことだったが、要するに、病気がそうさせた、といえるだろう。

不二子が帰ったあと、だからデスクの上に、さきほどのスプ皿を置くのは、誰にもみせてはならない、大造だけの理解する秘密である。

その便器を使用して採取したものを、どんな方法で摂取するかは、不二子にも説明しない。なまじ説明したら、あるいは、おぞけをふるって、二度と社長室へ姿を現わさなくなるおそれがある。

たとえば、豪華なマンションに住ませ、莫大な手当てを与えてはいても、大造の本当の行為を知ったら、大ていの女性は遠ざかるだ

ろう。

いや、なによりも、立志伝的成功者である社長としての体面上、いくら病気のためとはいえ、本当のことを不二子に告げるのは、賢明とはいえないだろう。

不二子には、自分が事業の余技として糖尿病の特効薬を研究し、ついでに病人用の便器の開発をやっているのだということにして話してある。

「これで一と山あてたら、別会社をつくる。

お前は、その会社の社長だ」

ある女性生理用品の会社が、電機メーカーをバックに創立され、女性社長が出現したニュースは、当時、女性週刊誌のよきネタとなり、話題をよんだ。

そのニュースは不二子も知っている。

だから、糖尿病薬の会社と、便器メーカーの大造の提案は、不二子にも大きなユメを与え、いらい、大造ののぞみは、やすやすと達せられるようになっていく。

「女性用便器のサンプルをテストする必要があるから」

という、もっともらしい口実が、彼女をして、出がけに二本のビールをあけさせる結果となり、さらに、糖尿病の新製剤の原料に、

という大造の求めに、不二子はためらいながらも、いやとは、いわなくなっている。もちろん「高いカネ」が貰えるからだが……。

このごろでは、不二子のほうから、小遣いがほしくなると電話をよこし、

「あとう、テストはまだですか。いま不二子「原料」がだいぶたまってるんですけど、新鮮なほうがいいでしょうと思って……」

冗談半分に、売りこみをかけてくる。

はじめの頃のように、いやがるのを口説くのもおもしろいが、こうしてきわめて手軽に、欲するとき、欲するものをえられるのは、べんりなことであった。

いま、大造はデスクの上に据えたスプ皿の、銀製のフタを開いた。

特有の香りと、色。これを食うのだ！

モーターの作動は完ぺきで、全量が、ここにおさめられている。

飢えを満たす喜びと、人倫にそむく背徳の、みにくさ。

しかし、これで、かりにも、糖尿病の苦痛から逃れられるなら……。

これを、闘病には欠かせぬ薬物と、自からに言いしかすことで、その醜悪さを排することができるとができる。



マユをしかめ、それにしても、口あたりのよくないそれに、スプーンをいれて、少量をすくいあげる。

人目がない、自室での、絶対に秘めた行為だからよいようなものの、かりにも、名のある会社の、社長のやる行為といえるだろうか。

「なんということだ。やめろ！ 大造！ スプーンを捨てろ！」

という声を、天の一角に聞いた心地であった。しかし、醜悪なものなかに秘められた、妖しい魅力にあらがう気持は、いまの大造にはない。

息をつめ、おそろおそろスプーンに口をよせる。

社長室の静かな空気の中に沈んで、大造はいる。自分ながら、とんでもなく愚かな行為をはじめようとしている。

だが、誰もみていない。と心を許したのは大造の油断であった。最初、便器から、皿にうつし、その皿から、スプーンですくいあげたそれを、苦しうに顔をゆがめて口中に落としこみ、全身を貫くような不潔感におののきながら、残滓もあまさない、まったく奇怪なこの行為を、ある目が、あまさず、隣接し

たビルの一室から窓ごしに超精密な大型望遠鏡が追ひ、さらに、これも精巧な望遠レンズをつけた十六ミリカメラが、くわしくねらっていることには、うかつにも気がつかないのであった。

(3)

不二子が、あわてて駆けこんだ渋谷の、いつも利用する落ち合い場所に、まだ秋山研三のすがたはなかった。

セツカチな彼にしては奇妙なことである。指定された時間より、こちらが、三十分も遅れたのだから、当然ジリジリしながら待っているものと思ったのに、いささか拍子ぬけた不二子に、仲居は

「どうぞ、秋山さまはお待ちかねですわ」という。

秋山研三は、この料亭への大口出資者であり、顔はすぐ利く。

秋山は、出資の見返りとして、いつでも自由に利用できる離れをもっており、ここを、住み家のようにしていた。

座敷の中央には、タタミを一メートル四方切った、穴が床にとどいている。

冬は、こたつになり、夏は、この底に仕掛

けられたクーラーが、室いっぱい、冷風を送りこみ、住み心地は抜群であった。

電話一本で、直接、板前に料理を注文し、となりには、いつでも入れるように、風呂がたてられている。

不二子は、いままでに十何回も、ここへ通されているが、そのホテルのような住み心地は、自分には分不相応と思いながら住んでいるマンションなど、及びもつかないほど豪勢であった。

「あの、ビールでものんで、待つように、と旦那さまがおっしゃってまして」

仲居は、秋山を「旦那さま」と呼び、特別扱いしている。

また、ビールかと、うんざりしたが、この仲居がしらは、秋山に特別近く、いままでも、秋山の代弁者という立場で、言葉はやさしいが、その伝言には、逆らえないきびしさがあった。事実、秋山も、「おせいの言うことは、おれのいいつけと思って、かならず守るように」と、会うたびごとにくどく念を押している。

おせいというのが、この仲居がしらのことなのである。

「あ、忘れていましたわ。さきほど旦那さま



から、電話があつたんですよ。急用で、十分ほど遅れるけど、あなたは、かならず待っているように、ですって」

さんざん、じらしておいて、いまごろになって、電話をもちだすのは、バカにした話だが、不二子は不快さを押し殺した。

もしも、その手落ちをなじれば、どんなシッペ返しをくうかわかったものでないからである。不二子は、怒りをおさえて微笑でうなずくしかなかった。

「やあ、待ったか」

いかげんシビレのきれたころ、ようやくにして秋山が、ドスンドスンと足音荒くやってきた。

一八〇センチ、八十五キロの巨体が、あわてて入ってくるのだから、すごいほどの足音になるのは、あたりまえだろう。

しかも、彼は、両の手に重そうな荷物をもっており、おせいの顔をみると、

「ばあさん、手伝ってくれよ」

荷物をタタミに放りだすように置いた。

「ばあさんはないでシヨ」

ことし三十五歳という、おせいは、口ではおこりながらも、しかし

「ハイハイ、人つかいの荒いひと」

ボヤキながらも、荷物をほどきだす。出てきたのは、ケヤキの座卓であつた。だが天板の中央には、半径十センチくらい大きな穴が切られ、座卓には使えないようだ。

「こいつを、ここへもってくる」

よいしょと、こたつの穴の上に据え、

「おい」

と、不二子を呼んだ。

「いまから金もうけの予行演習だ」

手まねで、その座卓に腰をおろせといい、自身は、こたつの穴のなかにもぐりこんだ。「予行演習だから、服はそのままでもいいが、ホンバンでは、全ストになるんだぞ」

半身をずらせ、穴の上からのぞくと、そこに秋山のするどい目が光っている。

「おい、おせい」

秋山は、おせいを呼び、

「おまえ、おれと入れかわりに、ここへ入ってみろ」

だが、困ったことに、そのとき、不二子は再び、つきあがるような尿意と、便意におそわれはじめていた。

下痢のときは、どうしても、尿意と便意が同時におこってくる。だいぶ腸が弱っているにみえて、便意のほうが激しく、どうにもが

まんできそうもない。

なにげなくもういちどのぞいた穴の底に、おせいの、一重まぶたの、切れ長の目をみてハッと息がつまりそうになった。

下着は、ちゃんとつけているものの、スカートはミニだから、いくら同性とはいえ、尻の下に他人の顔をみるのは、目くらめくような羞恥が起る。

「なにしてるんだ。二階と一階で、にらめっこか」

とつぜん秋山が、不二子の肩を抱き、どさっと重みをかけてきたのは、そのときである。

虚をつかれて、はげしい便意が下腹を走り、ゆるめるともなく不二子は、緊張を解いてしまった。それを追うように、たまたま尿意がおこり、それはもう止めようがなくなつた。

はげしい音をたてて、激流が、おせいの顔に殺到した。

おせいは、せまい穴のなかに身うごきができず、交わすひまは、まったくなかった。

「あつ、秋山さん、助けて」

とだけは言ったが、そのとたん、ドロドロした、気色のわるい、えたいのしれないもの



を顔いちめん落下され、あとの声がだせなくなってしまった。

それが、なんであるかは、わかっていた。だが、どうにも避けようがない。

奇妙な滝は、それからしばらくはつづきおせいの顔面いちめんひろがった。

そうされながらも、おせいの心のなかに、格別、不快感もおこらず、怒る気にもなれないのはなぜだろうか。

おせいにとって、秋山は、すぐく金ばなれのよい旦那であった。

秋山の甘心をかっておくことは、この料亭での地位をよくさせることにつながることもよく承知している。

すべては、秋山の命令から、こうなったことである。せつかくのパーマントを汚され顔を汚され、仕立ておろしの夏の着物を台なしにされはしたが、気前のよい秋山は、きつと弁償してくれるだろう。それも、利息をたっぷりつけて。

そう思うと、おせいにはガマンができるのだ。だから、わざと死んだように、身動きひとつしようせず、滝の洗礼を浴びながらじっとしていたのである。

## (4)

「おせいも、不二子もよくやった。ゴホービに、二人に、すばらしい金もうけのおすそわけをしてやろう」

秋山は、上きげんでいった。

あれから、一と騒動も二た騒動もあった末に、やっと、部屋のあと始末は終わったのである。

不二子は、下着とミニスカートが汚れた程度なので、かんたんだったが、こたつの穴の下から、はいあがったおせいは、惨めだった。

目もハナも耳も口も、汚れに汚れ、髪からも、きものからも、異様な臭いが、ぶんぶんと、ただよい、数寄屋づくりの、ざしきは、トイレみたいになってしまった。秋山が強引にフロントへ命じて、代わりの着物いっさいを運ばせなかったら、おせいは、えらい恥をかくところであった。

「おい、不二子。きょう、お前が三宅の社長室でやってみせた芸は、すっかり十六ミリにうつさせてもらったよ」

秋山は、のっけにダメを押すように言った。ソファで苦悶する不二子の表情から、三

宅は、その足もとで、ノライヌのようにうるつき、ついに便器を空間にささげるところまで、くわしく撮ったというのである。

「撮ったのは、現職のニュースキャメラマンで、編集もベテランにやらせる。これで、三宅をしめあげて、ダマリ料を少々ばかり、いただくことにしたのさ」

秋山に、三宅社長の奇怪な行動をバラしたのは、実は不二子であった。

バラしただけでなく、室のなかで、ソファに身を横たえる位置を、わざと屋上のカメラにとらえやすい位置にずらせたのも、不二子である。

もう不二子は、秋山の共犯者にさせられたというしかない。

そして秋山は、そのように、自分の命じるままに不二子を動かすことのできる、おそろしい武器をもっていた。

秋山の正体は、会社のスキャンダルをかぎつけては、その相手のもとへ乗りこんで、こうした動かない証拠を高価に買わせるのをビジネスとするゴロ紳士であった。

ゴロ仲間、横の連絡がよくとれている。

不二子が、会社の用件をダシにして、しばしば三宅の社長室に長居することは、会社の



なかにスパイを放って、洗いあげてある。

十六ミリに撮り、一本の映画に仕立てあげただけでなく、相手によっては、それを半ダースもプリントし、手を変え、品を変えて、仲間が代る代る売りこみに行く。一方、そのフィルムから、ふつうの写真も焼き付け、組写真のアルバムをつくりあげ、これを持ちこむのである。

十六ミリ一本が、三十万円。組写真アルバムは一冊十万円と、きめてある。

だが、買うほうは、いっぺんねらわれたらホネまでしゃぶられるのだ。

一人がワンセット四十万円で売込みにくるのを、あわてて買い取ると、やがて翌日は、第二のバイ人がやってくる。三日めは第三のおとこと、けっきょく最低で二百万円。相手によっては、一千万円以上も絞られた例があるが、脅迫は巧妙で、事前に充分の調査をやり、動かせない証拠をつかんでから、徹底的に行動を仕掛けてくるやりかたで、ねらわれたら、まず逃れようがない。

女子社員を妊娠させ、あとの処置にもたついて自殺事件にまで追いこみ、それをタネに五百万円ゆすり取られた印刷会社の社長もあれば、人妻との不倫な関係をあばかれてスキ

ヤンダルが家庭にまで持込まれ、ついに離婚のうき目をみた若い重役もある。

経理上の不正を暴かれて、株主総会でバラすと迫られ、心労が昂じてノイローゼになり廃人になって精神病院の一室に、うつろな目で横たわる寝具メーカーの社長もある。

正義グループ——彼らは、自からをそう名づけた。そして、秋山は一味のリーダーである。

秋山が、三宅と不二子の関係をかぎつけたのは、そう古いことではない。

「若い女子社員が、仕事にかこつけて、社長室に長時間こもる。彼女が訪れているあいだ、そのドアにはカギがかけられる。これはくさいぞ」

たったそれだけの情報があれば、その秘密をあばくのは、わけはない。

若い者に命じて、三宅鋼業の入口前に見張りさせ、不二子を尾行して、ことば巧みに、お茶にさそう。

さそいこんだ喫茶店にも秋山の手が回っており、なにげなくだされたコーヒーには、ある種の中毒性の麻薬が混入されており、コーヒーをのみ終えるころにはえたいのしれない恍惚状態におち入り、またふたたび、どうし

ても、そのコーヒーがほしくなる。

中毒が進むと、理性が乱れ、秋山の指示のままに、どんなことでもやっつてのける。コーヒーの回数にして、ものの十回。ちょうど、マリファナ中毒と同じ状態になってしまうのである。

不二子が、会社の上司の目も忘れて、渋谷の秋山のもとへだけは、きちんと出むくのも実は、このコーヒーのふしぎな陶酔にとりつかれてのことであった。

「金もうけは、こうやるんだ」

秋山は言った。

不二子が、うまい口実をみつけて、三宅をここまでおびきよせる。

おびきよせたら、まず、コーヒーをのませてしまい、たったいま、おせいがやらされたように、こたつ穴の下に三宅を押しこむ。

座卓に坐るのは、もちろん不二子である。

念のため、その状況をもういちど、ビデオのテープに撮っておく。ビデオは、その場での再生が自由だから、映してみせたら、三宅は自分の、あまりにあさましい行状にショックを受けるだろう。そこで、社長室で撮った、もうひとつの十六ミリのあることも匂わせる。信用しなければ見せてやればいい。お



そらく勝負はあっさりつくだろう。

「相手は財バツだ。おれは一世一代の大芝居をうつのだ」

秋山は胸を張った。

「オトシマエは三千万。ヤツは三億の財産家だから、出すだろう。不二子、おまえはもういいかげんに、三宅の糖尿グスリの製造元なんてえミミッチイ商売はやめにして、おれの『正義グループ』のメンバーになれよ」

秋山のユメは、とめどなく続くらしい。

だが、不二子はともかく、神妙に彼の話をきき入るおせいが、『三宅鋼業』の名に、ひととき緊張し、キラリと目を光らせたことには、秋山も不二子も、まったく気づかないのであった。

(4)

秋山のもとへ、三宅鋼業の総務部長から電話がかかったのは、そんなことがあって、十日ほどのちのことであった。

「社長が折り入ってお願いしたいことがあると申しておりますので」

丁重な総務部長のたのみに、秋山は一も二もなく飛びついた。

「こっちからアタックするのはおっくうだが

テキさんが、飛び入りでくるとは、これはうめえ」

おせいを相手に、熱燗をたのしみながら、

秋山は上きげんであった。

大切な仕事の前に、熱燗で二合ひっかけるのは、秋山のジンクスである。

酒気を帯びての商談などは非常識だろうが、秋山のような人間には、かえって向くのかもしれなかった。

内々で会いたいからと、指定された品川の御殿山のマンションに、彼は外車を乗りつけた。

外車は、すぐくデラックスなニューカーだが、これもあるデパートの社長のスキャンダルをタネに、運転手ぐるみ巻きあげたもので、必要があれば、電話一本で、いつでも、わがもの顔に使えるのである。

マンションに到着し、ブザーを押すと、中年の品のよい紳士が、にこやかにドアを開き秋山を招じ入れた。

「三宅です。よく来てくれました」

丁重にあたたまをさげ、応接間に招じ入れられた。

他人をまじえず、社長が直々に迎えるとは相手の用件が、秘密を必要とするものであ

り、重大な性質のものが多し。秋山は、職業意識をピンピン働かせながら、あたりを見回した。

せまい応接間には、クーラーはみえないのに、ヒンヤリした肌につめたい空気が、たっぷりと流れこみ、上着をつけていても、涼しすぎるくらいであった。そのつめたい風にまざって、オゾンのような、やや刺激のある、しかし快い、名香のような香りがひろがり、酔ったからだに、ひとしお快く、秋山はウトウトと、ねむりはじめたのであった。

前後不覚に、三十分ほどもねむっただろうが、秋山は、

「おい、起きるんだ」

強く肩をこづかれてハッと眼が開いた。

肌が、すぐくつめたい。

つめたいのも道理。いつ、誰が、なぜやったのやら、着衣は上から下までぜんぶ剥ぎとられ、まったくの丸はだかであった。

ハッとして立ちあがろうとしたものの、足が利かずによろめく。

手にも足にも、食い込むように、太いくさが打たれ、からだの自由は利かない。イモムシのように、ジュータンにころがるのは、まったく不覚であった。



秋山を手ごわい男と判断した三宅が、出入りの化学工場の工場長に依頼して、二十キロのボンベを、ここへ運びこんだことは、三宅のほかは、不二子も知らないことであった。そのボンベには、大の男をたおす有毒ガスが混入されており、圧サク空気と共にこの応接間へ送りこまれたのだ。なんのことはない秋山は、ナチスのやった、ガス処理室へ放りこまれた囚人と同じ運命であった。

「正義グループの大将。気分はどうかね」

三宅社長が、まるでゴルフのボールでもけるみたいに、あたまを蹴りつけるのだが、反抗どころか、身うごきもできず、三宅の足の動き通りに、ゴロゴロと、右に左に、ころがされた。

「あの応接間の空気を吸ったら、プロレスラーだって、いっぺんでコロリさ。おれは趣味で薬物の研究をやっている。応接間をガス室みたいに密閉して、シビレ薬を気体にして送りこむくらい、朝めし前さ」

なんのために、自分の自由をうばうのだろうか、まるでキツネにつままれた秋山の頭上から、

「センス、今日は」

仲居のおせいであった。

おせいも、三宅と同じく、着ているべきものを、ぜんぶはぎとった、生まれたままのすがた。中年おんなとはいえ、まだ子供を生んだことのないからだは、ヒップもキュッとひきしまり、神々しくさえみえた。

「おせい、用意しろ」

三宅は、調子にのったおせいが、片足をあげて、秋山の顔を踏もうとするのを手でさえぎり、言う。

「ううん、はじめてですもん、うまくできやしない。社長さんやってえ」

「厄介なやつだな。仕方ないな。じゃ」

おせいが、手にしているのは、ピンクいろの浣腸剤、イチジクであった。

秋山には、なにがなんだか、さっぱりわからない。なぜ、こんなところに、おせいが現われ、なぜイチジクなんかチラつかせるのだろう。

三人が三人とも、丸はだかでないければならないのは、なぜだろう……。

「いそいで造らせたから、見かけはよくないが」

三宅がニヤニヤしながら持ちだした座卓を、いきなり顔の上に据えられ、秋山はあつと思つた。

座卓の中央には、丸く穴があけられ、自分が、つくらせ、不二子に腰を据えさせ、その下におせいを追いこんだ、このあいだのことだ、うかびあがり、だんだん事情がわかってくると、秋山は、もういちどアツと思つた。

座卓の下に、顔をさしのべさせられ、うしろむきになったおせいが、三宅からなにをされてるのやら、

「いやだわ、ヘンな感じ」

くすぐったそうに、身体をクネクネとよじらせるのが不気味だった。

「社長さん、オツケーらしいわ」

妙になまめいた、おせいの声がきこえ、それと共に、面上の穴が、フタをされ、そして視界は、うす暗くなった。

自由を完全にうばわれた悲しさに、どうよけようすべもなく、彼は、その落下してくる物体の前に、いやおうなく屈伏しなければならなかった。

おせいはおせいで、座卓の上に、苦しうにからだを前に折り曲げ、あえぎにあえいでいた。

だが彼女は、いつぞや自分が、秋山のために、いまの秋山と同じようなポーズをとらされ、不二子から異様な滝を、いやというほど



浴びされた日から、秋山にたいしては深い恨みを抱きはじめていた。

不二子にたいしては恨む気がおこらないのは、自分ながらふしぎであった。

それに、三宅鋼業の名は、商売がら知っており、不二子と組んだら、秋山にたいして思いきりカタキ打ちができる半面、その興味のもてそうな、三宅社長に近づくためにも不二子と仲よくしたほうが、有利と判断したのである。

「不二子さんのことで」

と電話で売りこんだら、三宅は、かんとんに乗ってきた。そして不用意にも、秋山が洩らした三千万円脅迫計画を、当の三宅に密告したことから、三宅は俄に、おせいに好意を抱いたのだ。

「おもしろいシバイみせたるで」

三宅が、愉快そうに電話をかけてきた日から、もうおせいは完全に三宅側の一員になっていた。

三宅は、秋山のおびき寄せを執行する日、おせいにも同席をゆるし、その秋山の処刑は、万事つごうのよい、不二子のマンションときめたのである。

三宅の計画は恐ろしいくらい、あたったよ

うである。

だが、おせいにとって、いくらカタキうちとはいえ、イチジクを使われ、あげくに、秋山の顔の上に、尻を据えなければならないとは、思いがけないことだった。

でも、ここまできたら、あとへはひけないのだから仕方がない。

おせいは「このとしになって、はじめて人間の顔の上で用をたすなんて、やなカンジ」と、ボヤクのが、せい一杯であった。

「おせい。もういいだろう。立て」

三宅は、いまだ醜怪なものに目をそむける表情で、押入れから大巾のブラケットを引っ張りだし、座卓ぐるみ、すっぽりおおってしまうと、

「不二子、出番だ」

となりの部屋に声をかけた。

不二子が、顔をのぞかせる。

彼女もまた、すべてのものをかなぐりすてた、生まれたままのすがたであった。

三宅は、キッチンから電気掃除機をとりだすと、毛布でおおわれた座卓の内部へ吸込口をつっ込み、ガーとスイッチいれてモーターを作動させた。

「くさくていけねえから、少々荒療治だがク

リーナーで大掃除さ」

座卓の下秋山は、みじめなピエロであった。息も絶え絶えに、顔いちめん、醜悪なものでドロドロに汚れたのへ、強力なクリーナーの吸込口をつきつけられ、つつき回され、逃げようもない。しかしクリーナーのおかげで、半乾きの、その醜悪な、悪息を放つものが、吸い取られてゆくのだから、辛抱するしかないだろう。

あらかた、それを取りのぞかれ、悪臭もほとんど消えたころ秋山は、亀の子のように、間のびした顔を、そっと毛布のすきまからのぞかせ、彼は、そこでもういちど、アツとおどろかねばならなかった。

そこに、不二子の顔をみたからである。

「おう、キレイになったところで、みせてやるものがある。不二子、支度しろ」

おそろおそろだした顔の上に、ふたたび、重たい、固いものをのせられ、秋山は、顔を半分つぶされそうになり、あわてた。

それは、三宅の大切なマスコットである、例の便器であった。

「ああ、モリそうだわ」

不二子は、キャッキャッと笑いながら、座卓の上におどりあがった。



やがて再び、秋山の顔いちめん、悪臭がおそうことになるのだが、顔の上に便器をのせられたおかげで、さっきのように、じかに洗礼をうけなくて、すみそうであった。

その代わり、秋山は、さきほどにも増した苦痛を味あわなければならないのである。

三宅は、その便器のフタをあけ、白い粉薬を、したたかに混入して、

「おい、秋山。食うのだ」

こればかりは、と、顔をそむける横顔に、ビンタをくわせ、便器をつきつける。

なんでもかんでも、白い粉薬——ヘロインの中毒にさせ、この使いかたによっては、役に立つ秋山を、屈伏させ、こちらの味方にしておく必要があった。

そうすれば、三千万円の金をおどし取られずにすみそうだし、おせいと秋山を、うまく追い使うことによって、不二子と自分の悦びを、より深く、楽しいものにできるだろうと、計算したのである。

従業員三百名のなかには、荒くれ男もおおぜい居る。それをおさえるためにも、秋山は必要だった。

だれだって不二子の妖しい味を知ったら、たちまちとりこになってしまいうだろう。

そして、秋山に、そんなものへの欲望が案外あることは、さきほど、おせいを使ってテストしてみた結果でも、見当はついていたのである。

「不二子、わしと秋山の固めの盃につかうの

だ。もういちど、だせ」

便器のものには、ヘロインがしこたま入っていて使えない。固めの盃には、ぜひ新鮮な、生あたたかいのが必要であった。

「ハイ。でも、あんまりたくさんはだめよ」

不二子は、大型のジョッキを手にして、いそいそとトイレへ消えた。

室の一隅には、大型ボンベが、ころがっている。

そのボンベには応接間へおびき入れた秋山の、身体を自由をうばう目的のために、一本で十分以内に三十人の人間をチッ息させ殺してしまう有毒ガスが詰められている。

秋山が、倒れたあと、いちどは、そのガスの出口のcockをひねったけれど、その後の混乱で、四人のうちの誰かの足がさわったらしく、ボンベのcockが、ほんのわずかに開いていたのは、四人にとって不運としかいいようがないだろう。有毒ガスは、ごく微量ずつ部屋に拡がりはじめ、もうすぐ室内の空気は危険度に達する筈だった。「さあ、乾盃！」三宅は、不二子の美酒を盛ったグラスを、大切そうに捧げもち、別のグラスを秋山に渡した。有毒ガスは、その間も正確に、音もなく洩れつづけていた。

(終)

## 天星社刊

### 《限定版グラビア写真集》

### 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美7」

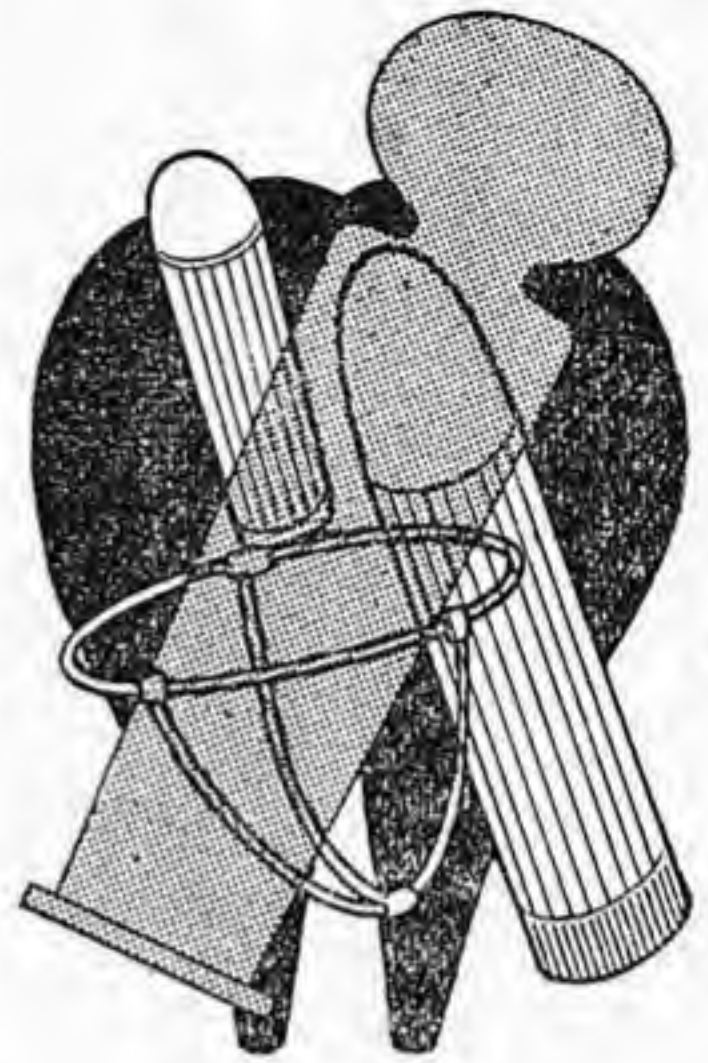
◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円(送共) 略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。





## 体験告白

# あなる・せつくす

長谷田 亀 治

私が「アナル・セックス」の魅力にとりつかれてから、かれこれ数年にもなります。

最近でこそアナル・セックスは週刊誌でも度々とり上げられ、欧米を中心に世界的な風潮となっているようですが、当時はごく一部のマニアの間で秘かに行なわれていたに過ぎず、なにかしらアブノーマルで、陰微なものという感じがぬぐえませんでした。

アナル・セックスがこれほど時流に投じ、日常茶飯事のように行なわれるようになったのは、やはり普通のオーソドックスなセックスに比べて、多くの利点があるためだと思われます。

第一に、アナルはヴァギナに比べて括約筋の緊迫力が問題にならないくらいすぐれています。未産女性の標準膣圧は15〜25%Hg

(経産女性は12〜20%Hg)ていどですが、アナルは60〜80%Hg、人によっては一〇〇%Hgを越えることがあり、実に五倍の数値を示しています。

この世に生を受けて以来、毎日一度はこの括約筋の世話? になっているのですから、当然のことといえますが、人間の筋肉の中でもっとも強じんな筋肉がアナルの括約筋だということをお願い返せば、想像がつくというものでしょう。

本誌七月号の読者通信で、神戸の小杉千恵さんが『……女性のために代表して申しますなら、Aだけは止めてほしいのです。あの甘い陰微な責めは、女の誇りもナルシズムもみんな取り除いてしまい、生々しい羞恥と屈辱だけにしいたげられるからです』といわれて

いますが、果してそんなものでしょうか?

男性の悲しさで、女性の微妙な心理や感覚を知るよしもありませんが、私の知っている女性に関するかぎりというならば、全く逆説的な結果をみせつけられているのです。

欧米では、一対一はおろか、同時に二人を受け入れるダブル・ウェイ。さらには三人のトリプル・セックスの事例があるというのですから、どこまでエスカレートしてゆくのか想像もつきません。

ただ、アナル・セックスにおいては女性が最初から甘美なエクスタシーにひたれるわけではありません。むしろ例外はあるでしょうけれども、やはり入念な訓練、調教が必要なことはいうまでもないでしょう。いきなりでは快感どころか激しい苦痛を与え、果ては拒



否されるのではないでしょうか。

訓練、調教については、『花と蛇』で団鬼六氏が静子夫人に対するそれで、微に入り細をうがって書いておられますが、中国の清朝時代のおもしろい話があるので紹介してみましよう。

## ○

清朝末期、悪徳官吏たちはワイロやピンハネで私腹をこやしましたが、政府の金庫へ現金を持ち運びする運搬人の役得は、三年の任期中で十両に達したといひます。運搬人たちは金庫への出入に当って、盗みを働いていない証拠として手を水平にあげ、足を開いて鷺鳥の鳴きまねをしなければなりません。このため、盗んだ銀貨をアナルへかくしたようなのです。

この技術を習得するため、まず薬で筋肉をゆるくし、油をぬった卵の練習から始め、一個、二個、三個と次第に数をふやして、最後は十両（約三七〇グラム）の重さの鉄丸が、六、七個を目標に訓練したそうで、達人？になると十個が可能になったといひます。

この十両という重さは銀貨一個分にあたります。当時、銀は秤量貨幣で形は幾種類もあったそうですが、彼らは隠すのにつごうのい

い円形の江西省の銀貨を、このんだといひます。（中央公論社刊・満州族支配の落日）

私の場合は最初、浣腸からスタートしました。イルリガートルを用いて、2パーセントの石けん水を千五百cc注入したのです。七百ccといどもいいかと思つたのですが、千五百ccというのは大腸のすみずみまで石けん水が行き渡る量ですので、そうしたのです。こうして外科的手術も可能なくらいに、大腸、直腸をからっぽにしてしまい、塩酸ジプカインを入念にすり込んで、約15分のマッサージで痛みを感じないようにしてから、ワセリンを約5グラム注入したのです。

こうして準備したうえで、いよいよお目当の拡張にとりかかったわけですが、ガラス棒や金属棒は敬遠して、市販されている棒状の大、小二種のバイブレーターを使いました。

大きいほうのは直径4センチ、小さいのは直径2センチで、根気のいるマッサージでしたが、局部麻酔薬のおかげで痛みはありませんし、パイプによる副効果として、薄い膜一重の隣接地帯への良影響も大いにも認められました。

固定用としては、根元にツカのついているもので、長さ10センチ、直径4センチのスポ

ーンジ製コケシと、ゴム製のアナル・バンドを使い、放置期間は一週間ぐらいでしたが、この間、毎日二回は浣腸を行なって直腸内をキレイに保ち、バイブレーターによるマッサージをくり返したのです。

この結果は、ワセリンさえ使えば卵なら二個、ピンポン球なら三個は軽くOK。私の狙いは成功ということになったわけです。

三カ月ばかりまえ、団鬼六氏とアナル・セックスについて電話で話し合ったさい、『花と蛇』で静子夫人が二人のシスターボーイの調教を受けていながら、千代の小さな宝石に非常な苦痛を訴えるシーンについて、小生の体験ではそういうことはまずありえず、調教さえじゅうぶんなら、卵やピンポン球でも可能の旨を指摘したところ、さっそく七、八月号では、静子夫人にダブル・ウェイならぬダブル・エッグの陰惨な責めを試みられ、みごとに二刀流の達人に交ぼうさせられていました。まさに我が意を得たというところですよ。

SMプレイの一つの課程として、アナルへのこうした調教は一石二鳥、いちだんと効果を高め、女性に対してもさらに奥深い新境地を開くことになるのではないかと思うのですが、どうでしょうか。



## 我が性の開花

黒

くろ

い

幻

げん

影

えい

麒麟田 欧二



出門 順・画

ぼくが、あの「黒い幻影」にとりつかれたのは、いったい、いつごろからだろう。それはまだ物どころもつかぬ幼い頃からであったような気がする。ひょっとすると、生まれる前からだったのかもしれない。

いまの子供たちは知らない「兵隊ごっこ」という遊びで、まだ小学校の一年か二年だったぼくは、いつも捕虜にされた。近所の大人たちから「坊ちゃん」と呼ばれていた生白い少年に、子どもたちは極く自然に敵意のような感情を日頃から持っていたにちがいない。それが「兵隊ごっこ」という恰好の状況の中で、ほかの子どもに対するとは別な一種のい

たぶりとなって現れた。「ニグロ」という、あだ名の、顔も手足も真ッ黒な悪童の一人はとりわけ、ぼくを目のカタキにしていた。

彼は藁縄でギューギューぼくを縛りあげ、電信柱（とぼくたちは言っていた）に括りつけると、憎々しげに唇を歪めて、へやい、弱虫。それでもお前、男かゝすると周囲を取り巻いた子供たちがへ女かもしれないぞと囁し立てる。ニグロは得たりとばかり薄笑いを浮かべて、へよし、おれが検査してやるゝ気味の悪いほど黒く、それでいて爪だけが奇妙にピンク色をした指が、たちまちぼくのズボンの前ボタンをはずしてしまふ。幾つもの坊

主頭が近々と覗き込む。それから、わあツと声を揃えて囁す。

面目のないような気持と恥かしさで全身を緒らめ、きつと縛られていなくても身動きも出来ないでいたであろうぼくの眼の前に今度はニグロが自分のズボンを開いて見せる。

彼は、ぼくばかりにではなく、一同にもたつぷりと鑑賞の時間を与えてからへエイツという気合もろとも、勢いよく液体を、ほとばしらせる。逃げることも出来ないぼくの膝から下は、生温い彼の放水が淡い臭気とともに湯気を立てる。そして、やっとぼくは解放される。



からだのあちこちに擦り傷を拵え、衣服は破られ、そのうえ小便の洗礼まで受けたばかりの姿を見て、驚きかつ呆れた母は、きびしい口調で二度と悪童の仲間にはいることを禁じた。

しかし、ぼくは彼等と遊ぶことをやめなかった。母の目を盗んではこっそりと「兵隊ごっこ」に加わり、捕虜となり、縛られ、いたぶられ、嘲笑の中で小便をかけられ、帰りは汚れを拭き取って何喰わぬ顔をしていた。正直いうと、ぼくは彼らの手でそういう目にあわされることが、ちっとも厭ではなかったのだ。そればかりか、ニグロの黒い手で手加減もなく荒縄を巻きつけられる時、奇妙なときめきに似た感動さえおぼえるようになっていた。それは自分でも説明のつかない、甘酸っぱく遺瀦ない血の疼きであった。

しかも不思議なことに、たまたまニグロが遊びに加わらず、縛り手が他の少年だったりすると何の感動も身内に湧かなかった。そういう日は、心の底でひそかに期待していたものも見る事が出来ず、何か空洞でも出来たような淋しい気持で家に帰った。

だが、こんな夜に限って、夢が満たされぬ心を慰めてくれた。小さいけれど大人の形を

もった黒いものが、ぼくの視界を踊り廻り跳ね廻り、縛られているはずのぼくは、それを掴まえ、それに触れようと汗みずくになるのだった。

ぼくを縛り上げ、嘲笑した上に小便をひっかけたニグロに具象された「黒い幻影」は、すでに小学生のぼくの中に、はつきりと根を下ろした。しかも旧制中学に入る頃から、それはぼくのセックスと密接に結びつき、ぼくは謂わば倒錯した状況の中で、はじめての悦びを知った。

柔道師範であり水泳コーチであったN教諭は、赤銅色の筋骨と毛皮を貼りつけたような体毛の持ち主だったが、それにも増して彼を特徴づけたのは、おそろべき体臭だった。彼の全身から強烈に発散する特異な刺戟臭は、彼がたとえどんな人混みの中にいても、立ちどころに識別できるだろうと思われた。しかもそれは、柔道着を身につけることによってその極に達した。稽古着姿の彼は、すでに人間というより体臭そのものであるともいえた。汗と混じり合った生臭いケモノの臭気は、広い道場の隅々にまでしみついて、誰も居ない時でさえ、その臭気だけが厚ぼったく澱んでいた。

ぼくの性の開花したのが、このN教諭のめくるめく体臭の中であつたことは以前に書いてしまった〔注：奇ク誌上『白い牡』〕の細かい経緯は省くが、寝わざの稽古という抜き差しならぬ状況下で、自分が予期した失神でも嘔吐でもない結果を、ぼく自身の肉体が示したことは、ぼくに潜在するリビドーがそれを受け入れたことを意味するのではあるまいか。

その証拠には、それ以後のぼくは、N教諭の体臭を遠くから感じただけで、肉体の変化を意識するようになった。

水泳練習の時など、ぼくは殆ど、水から上がれなかった。N教諭が其処に居るといふだけで、ぼくの心身は皆の前に立ち得ないほどの無残な状態を示し、それが自分の意志ではどうにもならなかったからだ。

真夏の太陽に漆黒ともいえるほど陽やけした彼の逞しい裸体——胸から臍の下まで深々とした胸毛が密生し、その下をわずかに逆三角形のパンツが覆っているが、それは辛うじて皮膚に食いついているといった感じだった。ぼくの脳裡には、何の脈絡もなく幼い頃「ニグロ」というあだ名の少年に受けた、あの胸の中がジーンと熱くなるような情景がよ



みがえったのだ。

ぼくは殆ど毎夜のように、N教諭の夢を見た。しかもあの強烈な体臭を伴い、それがぼくのオナニーの契機だった。

その頃の中学生は、陸海軍の学校に志願するのが常識になっており、ぼくも陸軍の士官学校に願書を提出した。

そういう時代だけに生徒間の話題も、いきおい戦争に関することばかりだったが、ある日、生徒の一人が言った。ヘアメ公の最前線は、殆どが日系二世とクロンボばかりだっていうじゃないか。二世は、裏切り者と思われないために死にもの狂いで戦うし、クロンボは、戦争でもなければ一人前に扱われないから、これも一生懸命いいところを見せようとする。この連中を弾よけにして、白人さまは後ろでうのうとしてるんだ。まかり間違えば白旗を挙げればいいんだし、日本人とはどだい考え方が違うんだな。この言葉が、一つの啓示になった。

クロンボ——これは悪童のあだ名ではない正真正銘のニグロだ。クロンボの兵隊——ぼくの頭の中に、士官学校志望者らしからぬドラマチックな空想が組み立てられ、昼も夜もそれに執り憑かれるようになったのは、この

時からだった。

士官学校を卒業したぼくは少尉に任官し、少壮士官として前線へ派遣される。相手は黒人ばかりを集めた命知らずの鬼部隊、激戦に次ぐ激戦の果て、重傷を負って倒れているところを、少年時代の「兵隊ごっこ」の時と同じように捕虜にされてしまう。

日本兵が最も不名誉とする細目の恥を受ける羽目になったぼくは、自決することも許されず、将校であるということから、味方の秘密を聞き出そうとする敵の手で、さまざまの拷問に遭う。

死にまさる苦痛にも、頑として口を割らないぼくに、敵は戦術を変えた。へ名誉を重んずる日本人には力づくの拷問は無意味だ。名誉心を逆用した苦痛以上の恥かしめを与える方が効果があるう。と彼らは考えた。子供ごころに死ぬほど恥かしかった「兵隊ごっこ」の時のそれに似た責めが、もっと淫らに、もっと陰湿に、すでに大人である青年少尉に加えられることになる。

少年の時のようにズボンだけではない、身に着けたものをすべて奪われた少尉は、あるいは大の字に、あるいは逆様に、あるいは逆海老にと、想像され得る限りの惨めなポーズ

で縛りつけられ、取り囲んだ黒人兵たちの気紛れな、しかも悪意に満ちた責めを受けなければならぬのだ。

舌を噛んで死のうとしても、口の中には血と泥に汚れた自分の下穿きを押し込められ、その上からゲートルがぐるぐる巻きに顔半分を覆っている。

彼らの責めは、意識的に少尉の下半身に集中した。彼らは、少尉の少年の頃を知ってでもいる如く、「兵隊ごっこ」の時ニグロがそうしたのと同じに捕虜を嘲弄の具にした。

少尉は自分が、N教諭のような逞しさも力強さも持たないことが恨めしかった。

生白く、首を垂れたままの捕虜をぐるりと取りまいた黒人兵たちは、軍靴で軽く踏みつけたら、少尉から取り上げた日本刀の切先でチクチクつついたりした。

排便も大小の区別なく、立縛りのまま自分の鉄かぶとの中へしななければならない。排便後もそのままに放置されたので、しばらくすると、少尉の全身からは悪臭がふんぷんと立ちのぼるようになった。それでも彼らは、責めをやめなかった。

ずたずたに心を引き裂かれながらも、青年少尉は耐える。弱々しいとはいえ、彼の肉体



がいたぶりに対して敗北の姿を曝したことがないのが、せめてもの誇りであった。

だが、敵の責めも執拗で、手を変え品を替えての嘲弄が続き、若い少尉が身も心も微塵に碎け散る時がやがて来るであろうことは容易に想像された。

ある日、酔いどれの黒人軍曹が拷問の場に来て来た。地面へ打ち込んだ四本の杭に大字に磔された捕虜を見ると、何を思ったかその喘いでいる胸に跨がって、どんと腰を下ろした。へうっ〜と咽喉で呻いて、苦痛に耐える少尉の鼻先で、「兵隊ごっこ」の時の光景が、ここにまた再現された。

だが、黒人軍曹が誇らしげに示したものは、まだ少尉が見たこともない巨大な、そして漆黒の強烈な異臭の塊りであった。

その異臭が、まぎれもなくN教諭の発散していた体臭と全く同じであることを知った時、我にもなく少尉の全身に戦慄が走った。

頭の中が熱くなり、五体の血があやしく騒ぎ始めた。少尉は眼をつぶり、歯を喰いしばって耐えようとしたが、彼の努力とは、うらはらな現象が、嘲笑の中に起こり始めたのだ。

へああ、いけない———と思った瞬間、強い酒の刺戟臭を含んだ液体が、雨のように少尉

の面上を濡らし始めた。それは恐るべき勢いで、眼といわず、鼻といわず、口といわず降り注ぎ、いつ終わるとも知れなかった。

四肢を緊縛されたままの少尉の全身が、痙攣するような悶えを見せ、声にならない声が猿轡の奥から洩れた。やがて少尉は、完全に敗北した自分を遠くに意識しつつ、ガックリと崩折れた。……

———ここで、ぼくもまた少尉同様に敗北するのが、夜毎の習慣となった。

だが、この空想は夢だけに終わった。ぼくが士官学校の試験を受ける直前に、戦争が終わったからだ。

若い悲運の陸軍士官として黒人兵の淫虐な責めを受けることは出来なかったが、皮肉なことに敗戦のおかげで、それまで見たこともなかった黒人兵の姿を、現実に目にする機会がやって来たわけだ。

日本中のいたる所を、戦勝国の進駐兵がわがもの顔にのし歩き、うちひしがれた日本人は乞食のような恰好で小さくなっていなければならなかった敗戦直後のある日、それまでは自分の空想の中だけで形づくっていた「黒い幻影」の実体を、ぼくはほんの偶然の機会

に見たのである。

学校からの帰途、誰もいない駅の便所でぼくが用を足していた時、カン高い話し声と大きな靴音を立てて、二人の黒人G Iがはいって来た。六尺ゆたかな二人の大男は、ぼくを挟むような恰好で両側に立った。彼等の巨軀に威圧されたぼくは、身を固くして自分の用が早く済むのを祈ったが、彼等は放水しながらも、ぼくの頭越しに喋りつづけていた。ぼくが或る種の冒険をおかしたのは、その時だ。ぼくは、殆ど頭を動かすことなく、素早く視線をめぐらした。一瞬、頭の中が火のようになり、軽い眩暈がぼくを襲った。ぼくは、見た。夢の中か空想の中でしか見る事が出来なかった黒い実体。しかも、それは嘗て夢の中で見たK教諭や、少尉として血を熱くした黒人軍曹の想着よりも遥かに逞しく、漆黒に輝いていた。第一に、それは生きていた。

大学の予科にはいる年頃になると、友人たちの関心は当然のことながら異性に移って行ったが、ぼくは相変らず「黒い幻影」の中にみずから閉じこもり、陰湿な夢想到に明け暮れていた。

戦勝国アメリカが日本を占領したついで



に、ぼくを彼らの奴隷にしたらどうだろう。ぼくは、かつて空想の中で主人公を演じた軍曹のように逞しく荒々しい黒人兵の奴隷となつた自分を想像してみた。

黄色い見すばらしい肉体を白日に曝し鎖つきの首輪を曳かれて人混みを歩かせられる姿、裸の尻を靴で蹴られながら片足を上げて小便をし、衆目の中で臭気ふんぶんたるものまで排出させられる醜いポーズ、主人が路上に吐き出して踏みにじつたチューインガムに飛びついてしゃぶるあさましさ、屋根の下では主人の喰べ残しを与えられ、トイレットへお伴してペーパー代りを務めさせられ、夜はベッドに繋がれて、あらゆる破廉恥な奉仕をさせられた挙句、主人の眼前で、自らの手で惨めな一瞬を呼び起こして果てる——そんな情景が、際限もなくぼくの頭を去来した。

しかし、現実のぼくは極く小心な、羞恥心の強い大学生に過ぎなかった。

あの時だってそうだった。

ヘイトレット？公園のベンチで本に読み耽っていたぼくが、耳馴れない発音に顔を上げると、雲突くような大男の黒人兵が急迫した様子で立っていた。ぼくは忽ち全身が赭くなり、しどろもどろに答えると、そのまま眼を

俯せてしまった。

もしそれが空想の中だったらどうだろう。きつとぼくは彼を便所まで案内し、彼が我慢していたものを一気に放水する壮絶さの前にひざまずいたに違いない。その瀑布の中に自ら飛び込んでいたに違いないのだ。

が、現実には、俯せた頭の前から大きな影の気配が去ってからようやく顔を挙げ、足早に立ち去る黒人の大きな後ろ姿を、疼くような興奮を押さえて、ただ、弱々しく見送っただけだった。

へお前、小学校の時のK子をおぼえているかい？ あれが今クロちゃんのオンリーになつてゐるんだとさ。久しぶりに逢つた小学校時代の級友がそういった時、ぼくは内心はげしいショックを感じた。それは無論、相手がぼくの中に期待したような性質のものではなかった。

ぼくはK子が羨ましかったのだ。黒いアポロのような黒人兵に金で飼われて自分の肉体を自由に弄ばれている全裸のK子——爪だけが至極生々しい色をした真ッ黒な指が全身をまさぐり、猫が鼠を扱うように、小さな日本娘の白いからだを思うさま翫つた挙句が……ぼくの異常な願望が連想を呼び、例の変化が

起こり始める。

へだが、相手がクロじゃ大変だろうな。何しろ、奴らはケダモノ並みだっていうから、拷問みたいなもんじゃあないか。ぼくがいうとへと思うだろう。ところが、そこがよくしたもの、黒人てのは、ひどく女にやさしいらしいんだ。K子も甜めるように大事にされてゐるらしい。一度、黒人の味を知った女は、もうほかの人種なんか相手にしたくなくなるそうさ。へそんなものかね。へそこへ行くと、白人のは図体ばかりで、グツと相場が下がるそうさ。しかも白い連中は、自分の国では女に威張られてゐるくせに、日本女を相手にすると、ずいぶん酷いこともするそうさ。サジストが多いんだとさ。

どこまでが真実なのかどうか、相手は得意げに説明した。彼のいうへ黒人は女にやさしい」という言葉に、ぼくはいささか落胆した。力強さと荒々しさと、むしろケダモノのような性格こそ、その漆黒の肌に覆われた逞しい肉体にはふさわしいものだ。彼らが目を細め、鼻を鳴らして女を愛撫している図などは、滑稽というよりない。黒人が本を読んだり、眼鏡をかけたり、教養や常識的思考を身につけた時、彼らはもう黒人ではない。黒い



肌は、爆発的エネルギーの象徴でなければならぬ。なぜなら、ぼくの「黒い幻影」も、その上に成り立っていたのだから。

さて、ぼくの生活に一つの転機が来たのはそれから間もなくだった。

大学を出るか出ないうちに、家庭的な理由から人生のピンチに見舞われた。苦しい窮乏の生活の中で結婚し子どもを持った。血のにじむような苛酷な毎日が、否応なくぼくを夢想の世界から引きはなし、現実の中へ投げ込んだのである。従って十年余りの間、「黒い幻影」は少なくともぼくの上層意識にあらわれて来なかった。

だが、どうやら生活も安定し、子どもも大きくなり、ぼく自身は中年の坂にかかった或る日、それはまさに突然に甦ったのだ。東京オリンピックたけなわの一日だった。

黒い猛牛のように、風を捲いて疾駆するボブ・ヘイズの超人的エネルギーをTVはとらえていたが、やがて百メートル10秒0という驚異の記録で優勝した彼の雄姿が、ブラウン管いっぱいに拡大された。全身の毛孔から噴き出した汗がユニフォームを濡らし、それから現れた漆黒の皮膚が美しく輝いているのを見た時、それまで永い間、全く忘れていた妖

しい血のうずきが、ぼくの五体に炎のようにひろがった。

ぼくは瞬きもしないで、ブラウン管の彼を凝視した。

陸上競技特有のダブダブしたパンツ——その下に、しとど汗を吸ったサポーターがあるに相違ない。逞しく力強く、そして漆黒に輝く芸術品——巨大な肉体に蓄積した全エネルギーを一瞬に爆発させたあとの、それは汗と体臭の集積場であるに違いない。

……ふと気がつくと、ぼくの肉体は、十余年ぶりに、あの懐かしい痺れるような甘い霧に包まれていた。

ジャン・ジュネが「花のノートルダム」の中で描いているセック・ゴルギという黒人の「大草原の草いきれを思わせる強い匂いのする陰部」（堀口大学訳）という言葉が、ぼくの五官に生々しく蘇った。

ヘイズもまた、いまあの広いグラウンドの中央で、「大草原の草いきれ」のような激しいにおいを、思うさま撒散していることであろう。

それを、なんとかぼく一人のものにした。その体臭の粒子を余すところなく鼻孔に吸い込みたい。

ぼくの眼はきつと、いまにも血を噴き出しそうな狂気を湛えていたにちがいない。

黒いエネルギーは、陸上トラック競技の殆どを制し、オリンピック史上、かつてない、「黒い旋風」といわれた。彼らは地球上の全人種に、黒い肌の持つ肉体的優越を、いやというほど見せつけたわけだ。

これが、契機だった。

一瞬の爆発的エネルギーに賭ける陸上競技の、あるいはケダモノのように肉塊がぶつかり合う重量級ボクシングの、さらに力感溢れるプロ野球の、黒い腰部を覆ったパンツやトランクスやユニホームの下に、汗と体臭にまみれて息づくサポーター。……ぼくの意識下に永い間眠っていた「黒い幻影」が、再び熱い体温をもってぼくの中に根を下ろしたのは、あの東京オリンピック以来であり、それはとどまるところを知らぬように膨れ上がったゆくばかりだ。

現に今もぼくは、その「黒い幻影」の乱舞する世界に、首までドップリと浸っているのである。

×

×

×

×

×

×





いっとう  
一盗 二婢 三妾 四妻 武部 要

昔から八女の味Vの良さの順位として『一盗二婢三妾四妻』というものがよく言われる。

私もようやく不惑を越える昨今に至って初めてその真の意味を知ることが出来るようになった。

「一盗」というのは、他人の妻とか妾、或は許婚者、恋人、愛人などを持主の目を盗んで秘かに情を通ずることで、これがなんといっても女の味の中で第一等に位するのだから大したものである。

理由の第一に挙げられるものはスリル、危機感である。スリルのあるセックスこそ、その味を二倍にも三倍にもすることが出来るのである。次に責任感の欠除したセックスも面白味がある。なにしろ相手は持主の定まった者か、いずれ持主のきまる者であるから、楽

しみだけは完全な頂きで、あとの責任は我は関知しないというのだから、男にとっては最上である。

「二婢」は、自分の使っている女中、お手伝い或いは使用人と仲良くなるということだが、現在では社内での部下なんかも、これに類すると見てよいだろう。

「一盗」に次いで、この「二婢」が男にとって良いのは、やはり人目を忍ぶというスリルと使用者であるという権力を笠にきて無責任に行なえるところにある。

元来、男性にとってのセックスの楽しさは、原始時代の略奪結婚の例をとるまでもなく、惜しみなく奪い取るところにある。責任だとか代償だとかいうさく言われると興味を失うものである。病院勤めの医者が自分の使っている看護

婦に手出しする心情もそういうところにあるのだろう。

「三妾」は金を出して妻以外の女を囲うことを言うのだが、これは金を払って買う女を含めてもよいだろう。これは「一盗」V「二婢」Vに比べて、スリルの点でも責任感の点でも大分劣るのはやむを得ない。秘かに人目を忍んで逢っていた女も、一度自分の持物として囲ってしまえば興味は半減するばかりでなく、経済的にも責任感が増すばかりである。しかも、常に一盗の脅威の不安感に悩まされる。

ラストの「四妻」は、言うまでもなく正式の妻であって戸籍上も社会的にも公認の女であるから、スリルは全くないばかりでなく、一生飼いきれなければならぬ責任感の重圧は、セックスの面で男性をスポイルしてしまう。

美しい許婚者や恋人とアベックで歩いている二人を見て羨ましいと思う人も多いだろう。しかし実際は双方の両親も許した公認のデートでお膳立通りのコースを進むことは、女の味としてはラストの「四妻」Vとまではいかなくとも、

「三妾」Vにも及ばないであろう。ましてや許婚者や恋人の時代から、既に女房面をして何かと世話

を焼きたがるに於いては、この段階でスリルを失っているといつてよいだろう。

あくまでも道德面、倫理面を度外視して女の味をセックスの面でのみ考えれば以上の通りになる。例えば親の許さない恋人同士の間柄なんかは、スリル感と危機感が一層二人の間の感情に拍車をかけることになる。平穩無来な夫婦の間に倦怠感が生ずるのも又理の当然といつてよい。

だからといって、反道德的、非社会的な女性関係を奨励するといふことは、如何にセックス本位の現在の世相に於いても是とするとは出来ない。そこで「一盗」Vの趣向を穩便且つ妥当に行うのは、

「緊縛プレイ」という妙法に尽きるのである。夫婦の倦怠期を打破する一方法として如何にSMプレイが効果を發揮するかは経験した者でないとは判らないだろう。私は自分の経験からして、夫婦間の性的危機がSMプレイの演出に依って回避された実例をよく知っている。恋人愛人許婚者夫婦に於いてもセックスの面でSMを加味して適度のスリルを味わうに於いては男女間の愛情は緊密化し深刻化することを保証する。



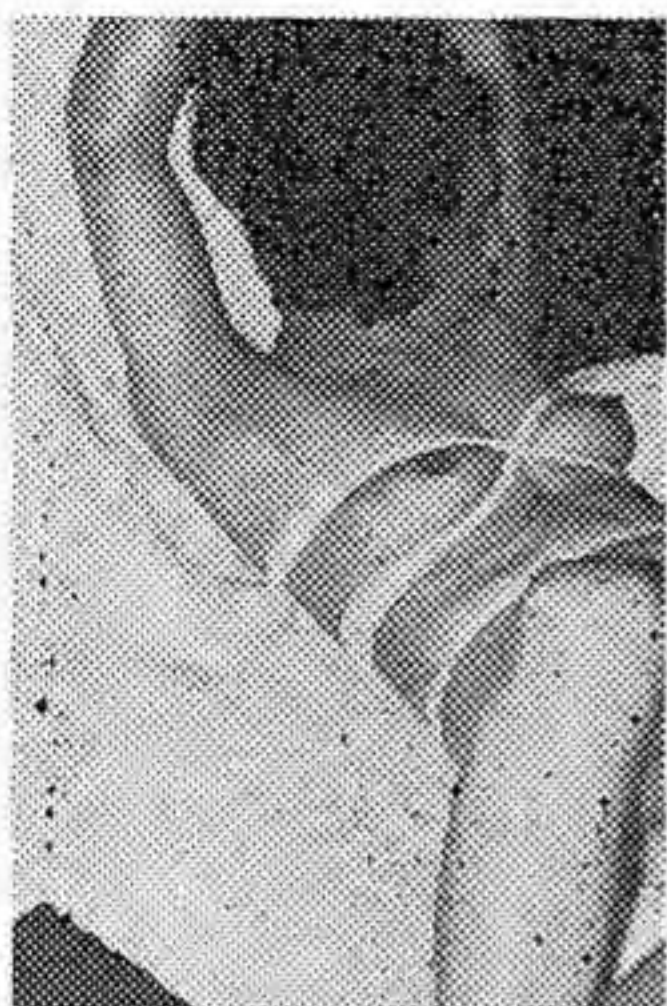
夫婦生活に於ける

## S M 願 望 と 期 待

東京 E T 生

七月号で神戸MY氏の「我が夫婦生活の告白」を読んで私の日頃夢想する願望と軌を一にしている事に一驚し、且つMY氏に羨望を覚え、その刺戟と昂奮が私の内部に願望の実現を強く期待させるようになったのです。

妻と結婚生活十五年、緊縛プレイを始めたのは今から五年程前からです。最初は妻にはその気持はなかったようですが、気永に少しずつ馴れさせてきました。写真撮影もやってきましたがDPEの技術がありませんのでプロロイドカメラで妻の緊縛姿態を写すという始末です。同封しました写真は桧舞台から飛び降りたつもりで自宅より遠く離れたDPE屋に頼んで



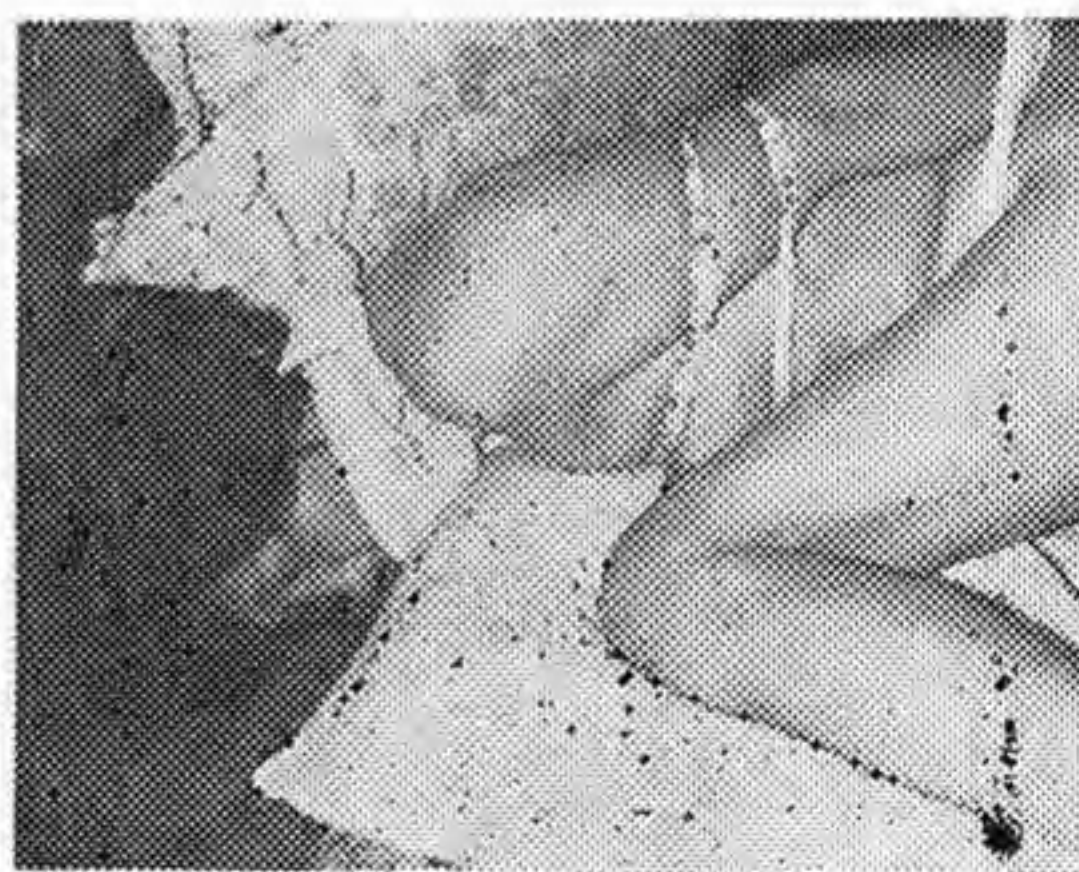
やってもらったものです。

妻が望む緊縛は主として乳房を中心としたもので、特に乳首への責めは相当刺戟を感じるらしく、或る程度耐えられるようです。私達の緊縛プレイは飽くまでセックスの前戯としてのものですので苦痛を伴う責めは余り好みません。

私の夢想する願望は、妻が私の眼前で他の男性に縛られ乳房を責められ果てには犯されてしまうと、いったパターンに集約されるのですが、そういったプレイにもいろいろなバリエーションを加えて空想するのです。

私はSM双方の性向があります。が、どちらかというと愛する妻が他の男性に虐められる事に強い被虐的悦楽を覚えますが、

勿論他の男性と共に二人で妻を責め苛み、果ては複数のセックスプレイへと進む事にも強い欲望を感じます。それから書く事を何度もためらったのですが、私の性癖の一つに弄根願望（こんな表現があるかどうか知りませ



んが）があります。下腹部を細紐で緊縛され、あらゆる方法でその周辺のセックスゾーンを刺激される事で異常な昂まりを覚えるのです。

先に書いたプレイのバリエーションの一つにこの願望を加えると私の嗜虐期待は果しもなく拡がり妻が他の男性に責められ犯されてゆく過程で突然妻が娼婦的態度に変貌し、プレイ相手とのセックスプレイを、これ見よがしに見せつけるさまを、哀れにも私が縄で括られ下腹部をも緊縛された身動きも出来ぬ惨めな姿で眺めていなくてはならないといった場面にまで

私の妄想はエスカレートしていったしまうのです。

このようにいくつかの妄想場面を描いては、果していつの日に、そのような時がくるのかと、絶え間のない嗜虐願望の期待で一杯のこの頃なのです。

過日、亦々酒の酔いを借りて妻に私の望み三人によるプレイVを叶えて欲しいと何度も頼み込む中、初めは中々判然と返事は呉れなかったのですが、妻にも何か淡い期待感でもあるのか、とうとう「そういう機会があれば言う事を聞いてしまうようになるだろう」という意味の返事を呉れたのですが、何時、誰とといった具体的な事が決まっている訳でもないのでも半ば安心してその場だけの返事であったようにも受け取れるのです。

ここで単なる先ばしりの願望のみではなく一気に具体的に決行しなくてはと焦り気味になっているので、本当に信頼出来る同好の方で、相互の秘密とプライバシーを厳守の上、プレイの真の悦楽を共にされる方の出現を希ってやみません。

妻は三十六才、私は四十才の会社管理職です。





## — 第七十五回 —

辻 村 隆

近頃の流行作家の、中間小説や読物を拾い読みするが、やれレズだ、ホモだの、SMとか、プレイなどと、ひとかど知ったかぶりを書いてるのが多い。現今の世相を敏感に反映して、阿諛迎合していると思えない、ほんの上っ面だけの様に思えるものが殆どである。所詮はSでもMでもない傾向の文士が、多分この様なことであらうと想像して書いているに過ぎないのであって、恐らくはこうした作家諸氏のネタの根源は、案外奇巧辺りにあるのではなからうかと思われるのである。奇巧の投稿の方々は無名に近い人達許りであるかも知れないが、本人自身の性向からにじみ出る、体験的告白が多いだけに、流行作家の書くも

のに較べて、文章は稚拙でたどたどしくても、遥かに迫力のあるのは皮肉である。私自身にしても、未だに、切腹やゴムマニア、女斗美、女装などに、も一つ興味が持てないが、若しそうした趣味あるかの如く真似て書いたとしても真のマニアの人達はすぐ見破るに違いないからう。過去三十年近く、SMに惑溺してきた私が、流行作家諸氏の達者な文章をよんでも、その底流をつらぬくSMが、俄仕込みの附焼刃式のものであることはすぐ見破れるのである。小説だフイクションだとうそぶいても、儲けん哉の文士根性が、SM同好者にとつては、フト嫌になることがある。時代が変われば忽ち変身するであらう、これらの大衆作家の

便乗的な書き振りに、唯々お見事というしかない。

× × ×

兵庫県飾磨市S強烈生(U君)の、再三再四に亘る懇望もだし難く、伊藤圭子さんを連れて大阪キタの喫茶店で再会させて上げた。意馬心猿の挙句、有馬温泉の一室で逸り過ぎて失敗したU君のことは、既にハントで御存知の通りであるが、彼にとっては始めてのM女性とのチャンスであっただけにそれからというものの、寝ては夢、さめてはうつつ幻の……という状態で、ひたむきに彼女を想いつづけて、仕事も手につかないというのであった。

伊藤圭子も、今は以前の彼女ではない。その後二度許りプレイする機会もあって、今はすっかりMづいていて、かなり大胆に体を開いてくるし、強烈な緊縛にもよく耐えるようになっていた。真剣そのもののU君の、つきつめた表情に引換え、あの頃の野暮ったさからすっかり脱皮した彼女は、微笑みすら泛かべながら、U君のしどろもどろの弁解をきいていた。今度こそは神に誓って粗暴な行為に走らないと、今ひとたびのプレイを切望するU君に、彼女はかなり

好意を持ち始めていたのは確かである。その真摯な態度が、女心を動かしたのであらうか——。

マイカーのギャランで彼女を万国博へ案内して、車中ゆっくりと話をしたいという彼に、私はあっさりうなずいて喫茶店で別れたが三日後U君からではなく、伊藤圭子からその夜のプレイの報告の電話があった。女の口から大胆な形容も出来ないが、どうやら彼女のM性は満足すべき状態であつたらしい。ところが、あれ程頼んでおきながら、肝心のU君からは、その後ウンともスンともいってこない。彼の身勝手さに腹立たしく思い乍らも、すっかり彼女にノボセ上っている彼にとって、今は私の存在など念頭にもなく用済みなのかと思うと、近頃の青年の、自分本位の衝動的な生き方に、佗しい苦笑を覚えるのであった。孤独から遁れて“圭子の夢は夜ひらく”といったところであらう。こんな時、私の師と仰ぐ先生の教訓がフト蘇るのである。(相手の喜ぶことをしてやって、あとで腹を立てたり、恩に着せたりするのだったら、しないで、恩に着せず腹を立てない方がいい。やると腹にきめた以上は結果がど



うあろうとも腹を立てず、恩にも着せないこと)

とはいふものの、そこは凡人、やはり心はおだやかでない。圭子と再会させなければ腹も立たないのにと悔んでも、あとの祭りである――。

× × ×  
編集部宛のモデル志望の女性はかなり多く、そのなかから、距離



イメージ画 『恍惚境』 宮城昌子

的、時間的に比較的都合のいい女性を紹介してもらって出掛けるのであるが、SMのプレイはどの様なことでもOKというのに、さてフォトを撮る段になると、激しく拒否する女性がいる。ハントのフォトが誌上に掲載されるのを懼れるのと、プレイの証拠があとに残るのを心配するむきが多い。憂積するM性を奔放に吐かせたいがフ

オトはいやとなるとこれは同好者好みであるが、ハントには向かない。又、そうした女性の殆どが、プレイのあとに当然セックスが伴うものと承知して、女性の方から求めてくるのであるが、人妻あり、水商売の女性あり、OLありの多士済々で、ある三十八才の未亡人など、ホテル代は愚か、食事から私への土産まで一切合財、賄ってくれる始末で、そのくせ、フォトは一枚も撮らさない。痛し痒しとはこのことで、いい

目をして文句をいうのも可笑しいが、当の未亡人が、神戸の服飾デザイナーとして、少しは顔の売れた人だけに、めくるめく刹那のプレイには骨の芯まで耽溺しても、カメラハントを書く私のカメラの万一を慮んばかりにしていることが、ありありと、察しられるのであった。

SMが、まだまだ世間的には受け入れられ難い、特殊な性であるがためか、と、私としてはふと複雑な気持ちにも襲われるのであるが、よく考えてみれば何もSMプレイに限ったことではない。世間に公表した夫婦以外、男女が並んで歩いても噂にする我国の古い悪習が、まだ根強く残っている現状から、当然といえば当然なのだ。

モデル志望の女性達の心理を解剖してみると、モデルにことよせて、秘かに内向するマゾ性を私や塚本氏などの手を借りて満足させたいというのが本音ではなからうか。見ず知らずの誰でもというわけには行かず、手っ取り早く吐かせる手段として、志望してきたと考えられる様な女性がしばしばあるようである。

フリーセックスの思想は、形をかえて奇クの世界にまで忍びよっ

てきた感が深い。

× × ×  
東京へ転勤して以来、その後、御無沙汰勝ちになっていた増田喜代司夫妻が、万博見物と帰省をかねて来阪し、可愛いさかりの双生児の娘さん達を両親に預けて、夫婦でひょっこり訪れてきた。

つもる話もそこそこに、夜の更けるのを待って、午前二時より、夜明けの五時まで、たっぷり三時間、夫婦プレイの妙味をみせて戴き、久し振りに私のカメラは躍動する。

彼の鼻への執着は増強して、愛妻みゆきさんの鼻障子も貫通して細い金鎖が、二人の鼻腔を連結させ、凡そ想像もつかない鼻責めを主体としたプレイが展開されたのだった。

夫も妻も、SとMを互角に兼ね備えてのプレイは、正に夫婦プレイの醍醐味でもあろうか。夏の夜は早や白々と明けそめた頃、二人は精根つき果てたかの様に、鼻と鼻とを繋ぎ合せた俛、しっかりと抱き合って、敷布団の上に転がってしまった。

濁った私の脳裡に、その二つの肉塊がこよなく美しいものに映ったことであつた。



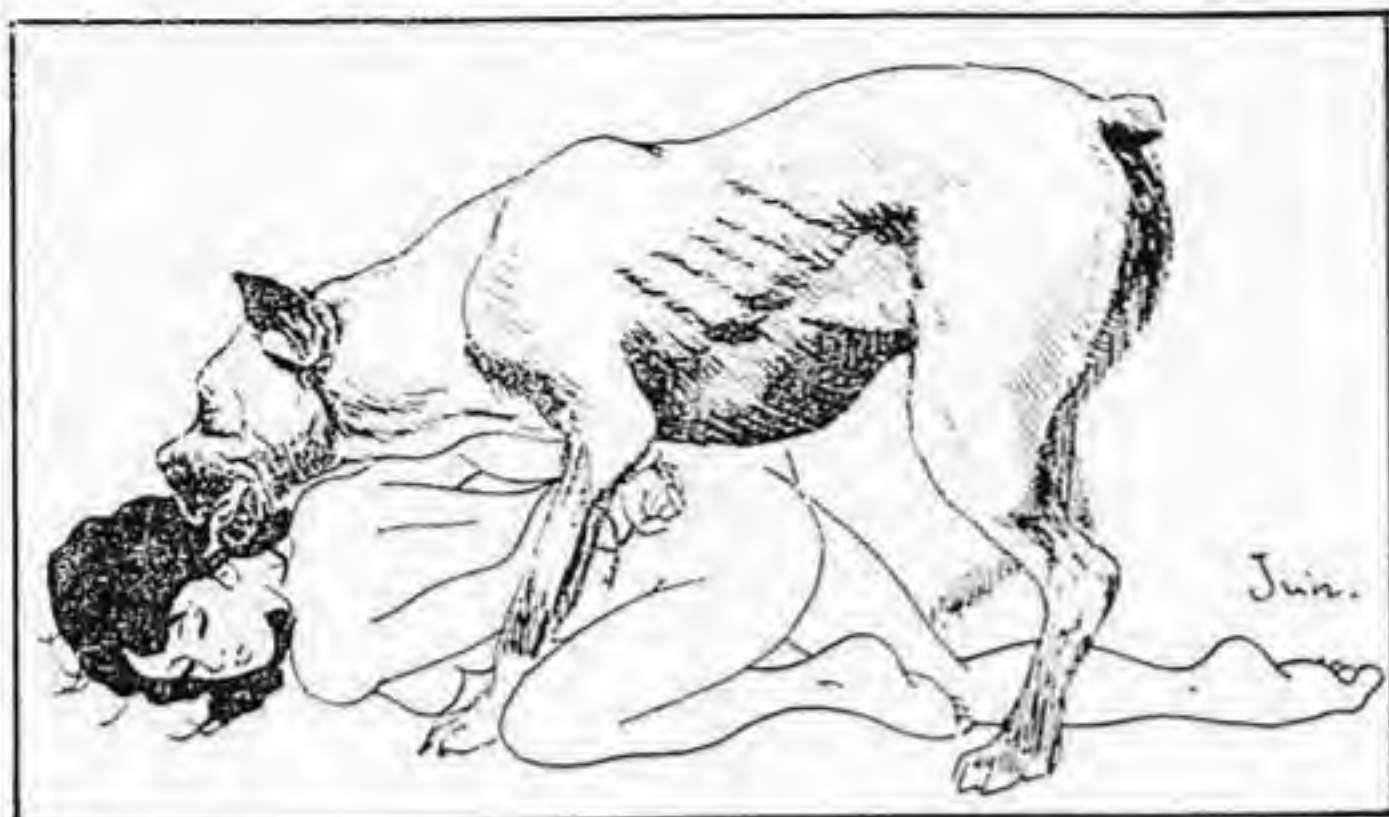
提

案……………忍頂寺

譲……………

……小説『花と蛇』を中心として……

前略、十八年来貴誌を愛読させて頂いております。最近の貴誌に対する感想、及び特に『花と蛇』に対する希望などを少し述べさせていただきます。近時他の読者から『花と蛇』がマンネリであるとの意見



『芳香』出門順

が頻発しているようです。その意見には私も賛成です。たしかに、一時見られた熱情のようなものが見られなくなっているようです。しかし、マンネリでも続いている内はまだいいけれど、作者自身ジレンマに陥り、この小説を捨ててしまうことがあっては大変なことです。この小説があるがために毎月貴誌を購入している私のような愛読者には購入目的がなくなってしまう。そこで差し出がましいようですがマンネリ打破の為の私の構想を聞いていただき、この小説の寿命がもっと伸びるようにならないものかと思い、筆を執った次第です。

従来より、マンネリ打破の方法としては、種々あげられて来ましたが、一つに新たな拷問方法の発見が、もっとも云われて来ました。私もこれに異論を唱えるものではないかもしれませんが、この方法にも自ずと制約と限度があるように思います。そこで私としては他の方法による打破の手段を考えました。

それはストーリーに現実性を盛り込む事と錯雑しすぎた登場人物、

特に被害者を整理することです。作者自身、次々と被害者を作り出したものの、その比重の置き方に苦勞しているように見えます。又、被害者側の生い立ち性格が、余りにも類似的にすぎませんか。静子—小夜子—珠江—美沙江は、全く同一人物にしてもよいようなものです。又、これだけの女性が誘拐されて警察が全く手がかりをつかめないというのも、少しリアリズムに欠けます。

そこでストーリーに新鮮さを増すために登場人物、特に被害者桂子、小夜子、珠江、美沙江等余り人気がない？人物を、抹消してしまいたらいかがでしょう。

抹消方法としては、珠江、美沙江事件により警察の探知するところとなって本拠の手入れとなり、右記女性の救出となるのです。残りの静子、京子、美津子は一部の加害者と共に捜査網をめぐり、新たな加害者の許に身を潜めるということにすれば、ストーリーは無理なくつながると思います。さらに一旦諦めた三人も救出の可能性があると考えるようになると、被害者の心理面にも新たな展開と描写が可能となるのではないでしょう。

又、どうしても右の三人では物足りないというのであれば前記の被害者と全く生活環境の異った被害者を創出すればいいのではないかと思います。右の被害者としては捜査にあたっていた婦人警官などがよいと思います。類型的に京子とイメージが重なりますが、京子他二人が加害者の前に屈服しつつある現状では、京子を上回る気性の強さと絶対的な不屈性と非順応性を与えることで、イメージの重なりを克服出来るのではないのでしょうか。特にこの婦人は絶対にマゾ性の眼覚めなどということがないようにストーリーを運べば従来の犠牲者とは異った新鮮味が溢れるようになると思います。

以上が私の『花と蛇』に対する希望、及び提案です。次に編集部の皆様に対するお願いをきいて下さい。

現在サド小説は『花と蛇』一本だけですがこの一本だけで貴誌を毎月購入する価値があると思っています。たとえ定価が五百円、千円となろうともこの小説ある限りこの意思に変わりがありません。しかしこの小説の終了した時、又は中断した時のことを考えると、暗澹たる気持となるのは私だけで



はないと思います。

そこでこの支柱たるサド小説の他に支柱たる責任を果せるサド小説を養っておく必要があると思います。この小説は読切ではあまり意味がありません。連載物こそ読者の期待と焦慮を誘う唯一のものであると思います。その対策として、有望新作の発掘は勿論、旧作のリバイバルを積極的に提案します。過去のサド小説にもいいもの

## 読 後 感

九鬼好太郎

### 読ませた、8月号

かつて誌面を華やかに飾られていたグラビヤ写真や口絵。読者の購入条件ともいえるべきそれらを全廃という大英断に加えて、文中の挿絵や、挿入写真にまで極端なほどの制限を実行した奇ク誌が、他誌の興亡をよそに依然として健在なのは、SMに徹した作品群の力に因るものであろう。

この意味で読んだ8月号は、とくに読む奇クの真価を発揮していると思う。

まず、芳野眉美氏の『S的な開眼』に目をみはる想いを受けた。私は以前から芳野氏の独特の筆法に魅せられてはいたが、8月号の

が沢山ありました。私の記憶に残っているものは、外国物が多いのですが、あの用意周到に計算された文章は『花と蛇』のcockのある描写とは又違って、忘れ難いものがあります。

私のみの好みから云わせて貰えるならば『クリスチーヌの受難』『アリスの人生学校』『甘美なるアリスの降服』等を、是非復活連載して戴きたいものです。これら

作品にその真髓を見たといってもよいと思う。

次に挙げたいのは風流極道軒氏『おんな人柱』である。権力をかさに着て、合法的に無法を働く有様や、現実にもありそうなかけひき、美しい女の悲劇や内面的M性の表現は見事である。

同じく創作で、保藤久人氏の作品『反逆の罌』は、同氏の前作とはまた異なる面白味が出ているように思えた。文体は、風流氏などと比して遥かに硬派といえるだろうが、居室に設ける巧妙な檻というものは、S紳士の共通の夢ともいえるのではなからうか。まして

が旧誌面上を彩っていた日からすでに十数年を経た今日、若年読者層も増えたことでもあるし、これら名作は老年読者の独占するものとしたのでは余りに勿体ないものと思いませんか。

又旧誌以来の読者にしても一度読んだものが再び誌面を埋めたとしても、懐旧感こそ抱くとも、憤る読者はいないでしょう。私自身大事に扱っているつもりでも形あ

その檻の中に蠢く、美しい獲物となれば、Sマニアの理想像であるう。この設定における責め場が活字と共に浮かび上って楽しい。次号完結とあるが愉しみである。

鬼山絢策氏の『M派交友録』千葉青鬼氏の『大噴火』

……と並べ出すと、読む奇クを形成している作品は数多く、総てを列挙しなければならなくなるのであるが、どうしても触れたいのが、やはり鬼の字のつく団氏の『花と蛇』である。

ありとあらゆる羞恥をあじわい尽し、衆人環視の中の屈辱ショーも自ら行い得るまでにM的成长を遂げながら、尚かつハニカミを全身で表わすヒロイン静子夫人。この美女の創造は、作者団氏のSM

るものの運命ゆえ旧誌のいたむことは防ぎようもありません。故にここで又新たに保存版として右に掲げた旧作を発行してくれることを切望しているのです。如何に旧作を読みたがっている人間が多いかを編集者の方は過少評価してはいけないと思います。旧誌のあの馬鹿高い値上りがその証拠といえましょう。その点も考慮して編集部御賢察を期待します。

に対する情念の塊りと解釈する。この上は、予告済の各モチーフを駆使されて、大切に長々と、ネチネチと根気強く静子夫人を調教して戴きたいものである。

前原昇氏の『団先生へ』は、この私の気持を代弁してくれているといえる。静子夫人のM化は別としても、けなげな反抗を示す京子の屈伏なき屈伏の情景は、私も心からお願ひしたいところである。

読者通信等を中心とする感想、論評、批判も、読む雑誌の要因的愉しさがある。SM願望を満たし得ぬ孤独感から抜け出し安堵と休息の場を見出し得るからであろうか。短文のもの一つにしろ、おろそかにしない態度も、読ませる雑誌充実に幸いしているのだろう。



プレイ・レポ 阪東 太郎

やっただぜセニョーリー

うっとうしい梅雨空のさなか、私は、深く心中に潜在していたS M願望の発露もだしがたく、半ば脅迫的、半ば嘆願的に要求したところ幸い妻の理解と協力を得て、本格的な緊縛を実行することが出来ました。

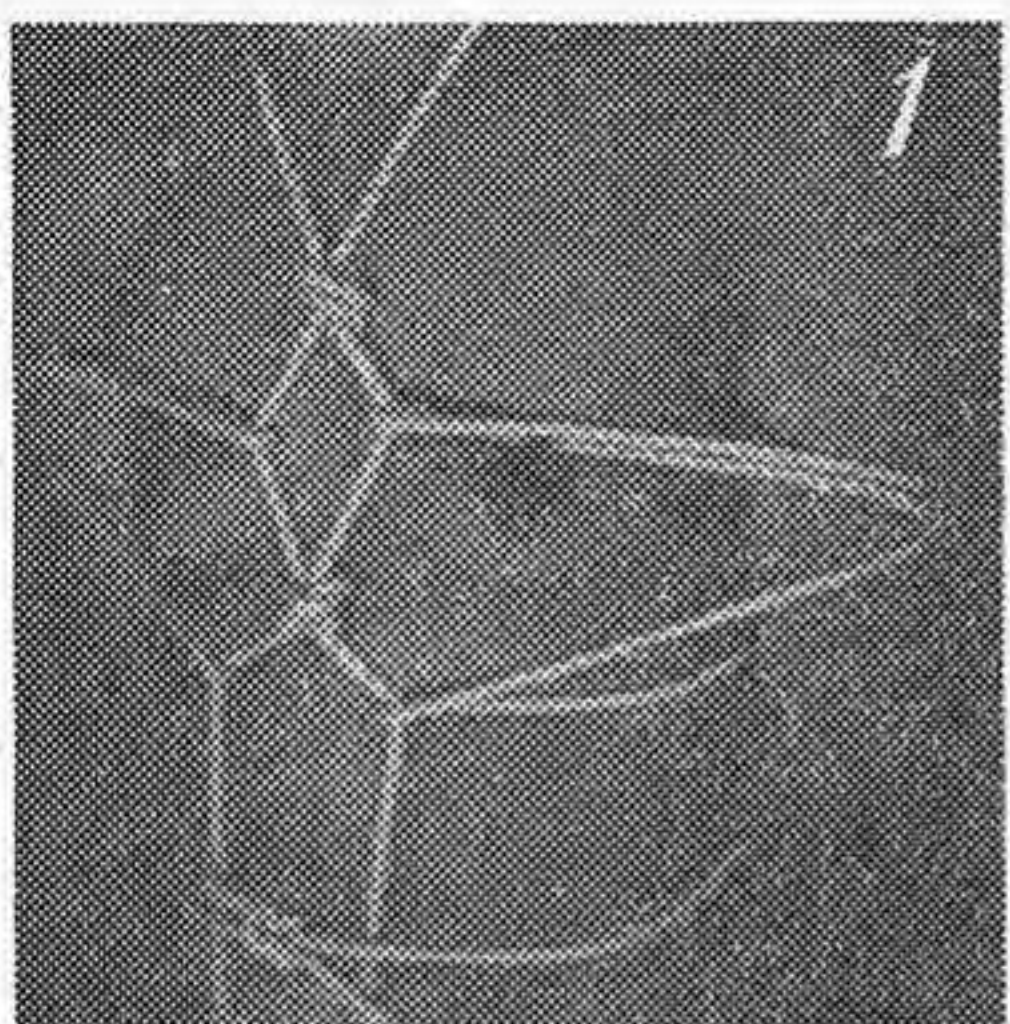
同封のフォト四葉が、その日の記録です。七月号に掲載してもらった『妻をM性にしたい』に添付した写真と見比べていただきますればおわかりと思いますが、私としてはほぼ満足の出来る緊縛だと

自讃している次第です。これも、わが妻の協力あってのことと感謝しております。

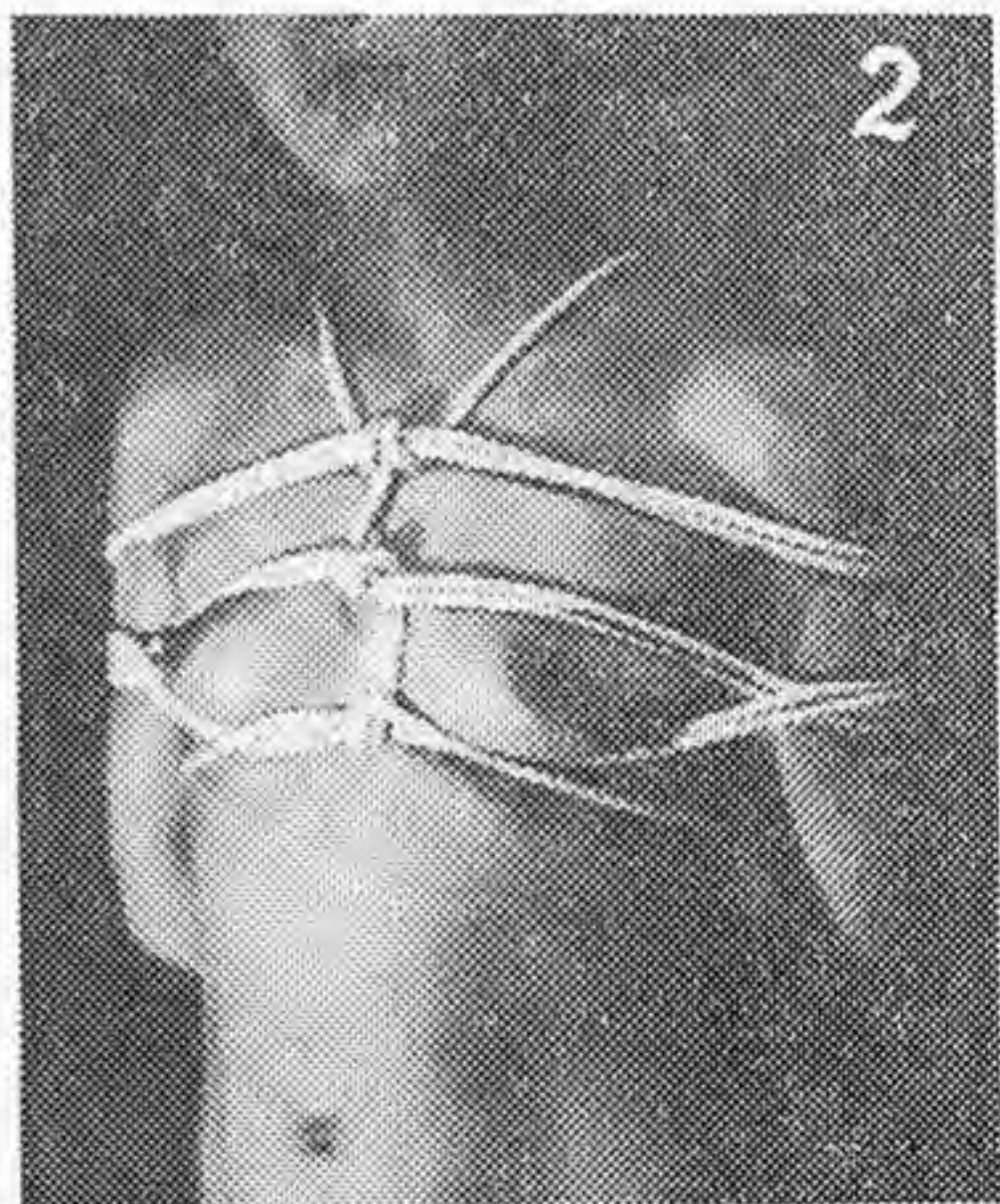
六月末日に行なったこの緊縛プレイは下着姿で始めたのでありました

が、私の常日頃から抱っている女性美、とくに乳房の美を強調するにはどうしても裸身が一番適当ですので、一度縛った後に、下着を着けないことに変更して行なったのであります。

フォト(1)は、亀甲股間縛りです。私が常々頭の中だけで考えた我流の縛り方ですが、首に縄をかけて乳房の上下に結び目をつくり、縦縄を背後に回して後手に縛り、胸の縄に通して締めあげ、背面に返して縄止めたものです。印画をみると、縄の紋りかたがすこし緩いようですが、私と



2



しては相当に締めあげたつもりですし、妻もかなり痛がっていたのですが……。

フォト(2)は、私の狙いの中でもとくに主目的であるところの乳房強調縛りにしたものです。高小手にした縄を胸に回して二の腕を締め上げ肩に回してから一つにまとめて、乳房の上下の縄に連結し、更に背後に返して縄止めしたのでありますが、これも乳房強調が狙いでありながら印画になって見ると、それほど緊縛感が出ていないように残念です。もっともプレイとしては成功したと思っていますが……。

フォト(3)の緊縛は、(2)

編集部だより

○読者からの編集部に対しての通信が益々多くなり編集上大いに参考にさせて頂いているが、便箋八枚に亘って細かい文字で批評感想を寄せられた人に返事を書こうしても住所も氏名も書いてないのがあるかと思うと、僅か便箋一枚に数行の文章で「読後感」や堂々と銘うったのがあり、明らかに贈呈の写真目当てのものもある。そんなのは別としても、多くの方々からの真摯な通信には心から感謝している次第である。

○北海道の弟子屈温泉で芸者に出ている一読者からモデル志願の便りがあった。手紙と電話で連絡の結果、編集部員派遣ときまった矢先、彼女は急性虫様突起炎で手術することとなり残念ながら撮影は延期になった。嘗て彼女はミス阿寒湖に入選したこともあるとのことなので大いに期待している。

○由利美千子さんの「被虐の旅」は八月号の第四回を以て一応区切りをつけ、今月号からは「被虐の旅シリーズ」として読切の告白小説を書いて頂くことにした。女性



のプレイ後に縛りなおしたものです、私としては完全な乳房責めになっていると思うているものです。乳房上下の縄を腹に回してから乳房の上に返し、一まわりして肩にかけ、上下の縄を締めあげて、二の腕から背後に回して縄止めしたものです、結び目が多く出来た関係で、知らぬ間に絞りが強くなったらしく肌の色が少し変わるほどでした。私のS心は満足したものの、それほど意識して絞り上げようとしたわけではなかったのですが……。

フォト(4)も、やはり乳房中

妊婦マニアの皆さんへ

千部好夫

はらみめの、はだかをみればおさまらじ。すぐしほりべの、ポインぐるぐる。

わかるかね、どうだい？

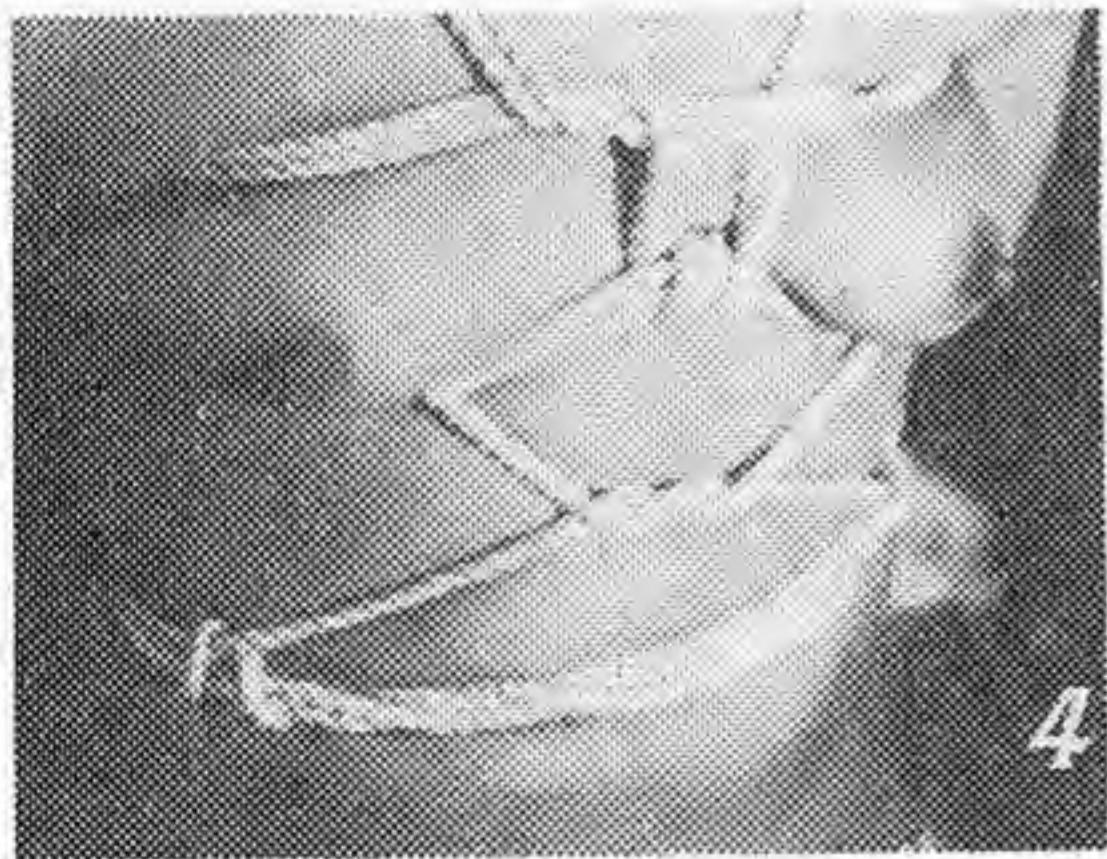


心に縛ったものです。前記(3)の場合に予想以上に緊縛度が強まったのに、意外なほど文句が少なかった妻のおとなしさにつけこみ思いきって十数メートルもある縄を二重にして強烈に締め上げてやったのです。私の希望通り、縄のくいこみは深く、乳房の強調は出来たようですが、今度は妻がさかんに苦痛を訴えたものですから、わずか数分で解かねばならなくなりました。私としてはせっかくの緊縛ですから、プレイを続けたかったのですが……。

私は完全なSを自認しています、妻は、まだまだMにはなりきれないようです。こうして幾分私の願望を理解して協力はしてくれ

るものの、縛りについては痛みのみが先ばしるようで、縄のかけ方や、締め方に、あれこれと文句が多くて、縛られることを楽しむ様子は、いまのところ少しもみえません。

夫婦プレイを謳歌なさっている先輩の皆様がたのご意見やご指導をお願いしたい気持ちでいっぱいですが、いろいろ条件も違い、急に妻をMに仕上げることは難しいかも知れません。しかし、根気よくプレイは続けるつもりですので、また次の機会に発表させていただきます。よろしくお願いいたします。



でなくては書けない異常な性の機微を表現したいと張切っておられるので味読願いたいものである。

○最近読者通信の原稿に金銭を同封される方がありますが読者通信は広告ではなくて、あくまで読者相互間の共通の広場としての語らいの場であり無料掲載が立て前なのでお含みおき願いたい。

○待望の団鬼六作長篇傑作S小説「花と蛇」決定版が愈々完成。これにて「花と蛇」の発端から現在掲載中までを一気に読破することが出来るわけだ。Sファン座右の宝典として一本をお備えの上御愛読下さるよう、お願いする。

○懸賞応募原稿、読者原稿、告白手記体験原稿を通じて多くの投稿を寄せられ大いに意を強くしているが、中には折角の執筆に際してわざわざ横書きにしているため掲載出来なかったり書き直しを必要とするのは残念である。

○投稿原稿に呼応するかのように読者からの写真投稿も夥しい数に達している。誌上紹介可能のものは努めて掲載するようにしているが室内撮影のものではピンボケやカメラブレの写真も少なくない。そんなのは批評の上お返事しているが早く上達してほしいものだ。



&lt;読者投稿&gt; 石田好司

## 覆面のなかの痴態



私はいつも同好の女性と気兼ねなく心ゆくまでプレイしたいと願っていました。

といっても薄給のサラリーマンの身ではキャバレーやアルサロ、バーなどの女を口説くわけにもゆかず、いつも欲求不満でいららしていましたが、はからずも偶然の機会で取引先の会社に勤めている一女性と知り合うことが出来ました。

勿論SMプレイの話など、とても出来なかったのですが、それでも半年ばかり交際している間には冗談もとばせるようになり、いつとはなしに話題をその方面に持ってきて、反応を見る余裕も出来てきたのです。

彼女はどちらかといえば内気な

方で、積極的に意志を表示するような性格ではないため、はっきりと拒否もしないし、また共感も示さなかったのですが、全然見込みがないという気持にはなれなかったのです。

それから更に半年ばかり、私は自制に自制を重ねて、辛抱強い話し合いを続けました。

結局知り合ってから丁度一年経って、私は初めて彼女を恐る恐る縛ったのですが、恥かしがり屋の彼女は、とても堪えられない程の羞恥心を示すため、私の考えていた心ゆくまでSMプレイをしたいという希望は、到底かなえられずともありませんでした。

ところが、ふと私が、プロレスで外人レスラーがよくかぶる覆面

アア、またも失敗……

## 『口説き』

青井松造

「ネエきみ。『縄』っていう言葉から、きみなら何を連想する？」

「そうねえ……俵」

「ほかに？」

「……ワラ……お百姓さん……」

「駄目だナア。じゃロープは？」

「山登り……綱引き……ええと」

「もういい。じゃあ『縛る』っていうことから？」

「……荷物……歌謡曲」

「それぞれ。その歌謡曲はどう思

## 最近の縛り映画

最近の緊縛映画となると、東宝日活作品などにも見られ、非常に楽しい。

まず第一は、三船プロの勝新太郎、中村錦之助ら五大スター顔合わせの「待ち伏せ」で、天下の美女浅丘ルリ子が、肌襦袢一枚に剥かれ、両手を縛られて吊るされ、夫にムチ打たれる。「折檻されて身体中、生傷だらけ……」というセリフも入る。その吊るされていく縄を三船が切って助ける。浅丘

う？ あの唄の意味をサ」

「すばらしいと思うわよ」

「男に縛られるってことが？」

「ウン、あんな情熱的な恋が出来たらいいナって思うの」

「でも、あれはガンジガラメに縛られたっていうことだろ？」

「そうかしら。アタシは、恋のとりこになりたいってことだと思っ

ただけだねえ」

「形の上でも、とりこになれば余計にいいと思わない？」

「でも身動き出来ないじゃナイ」

「それがいいんだ。一度、体験してみる気があれば、ボクが……」

「イヤヨッ！ サヨナラ」

## 嵯峨美也子

はバツタリと倒れる。

日活の「女番長牝猫」で、和田

あき子の子分の女が敵に捕えられ

椅子の上で乳房の上下を緊縛され

る。そして、バーベキューにして

やると、剥き出しにされた乳房を

ガスバーナーで焼かれる。一寸、

凄惨な感じがした。

東映の「三匹の牝蜂」では三人

の女が吊るされて折檻されるが、

数でこいというところか。大映日活の「怪談・昇り竜」で



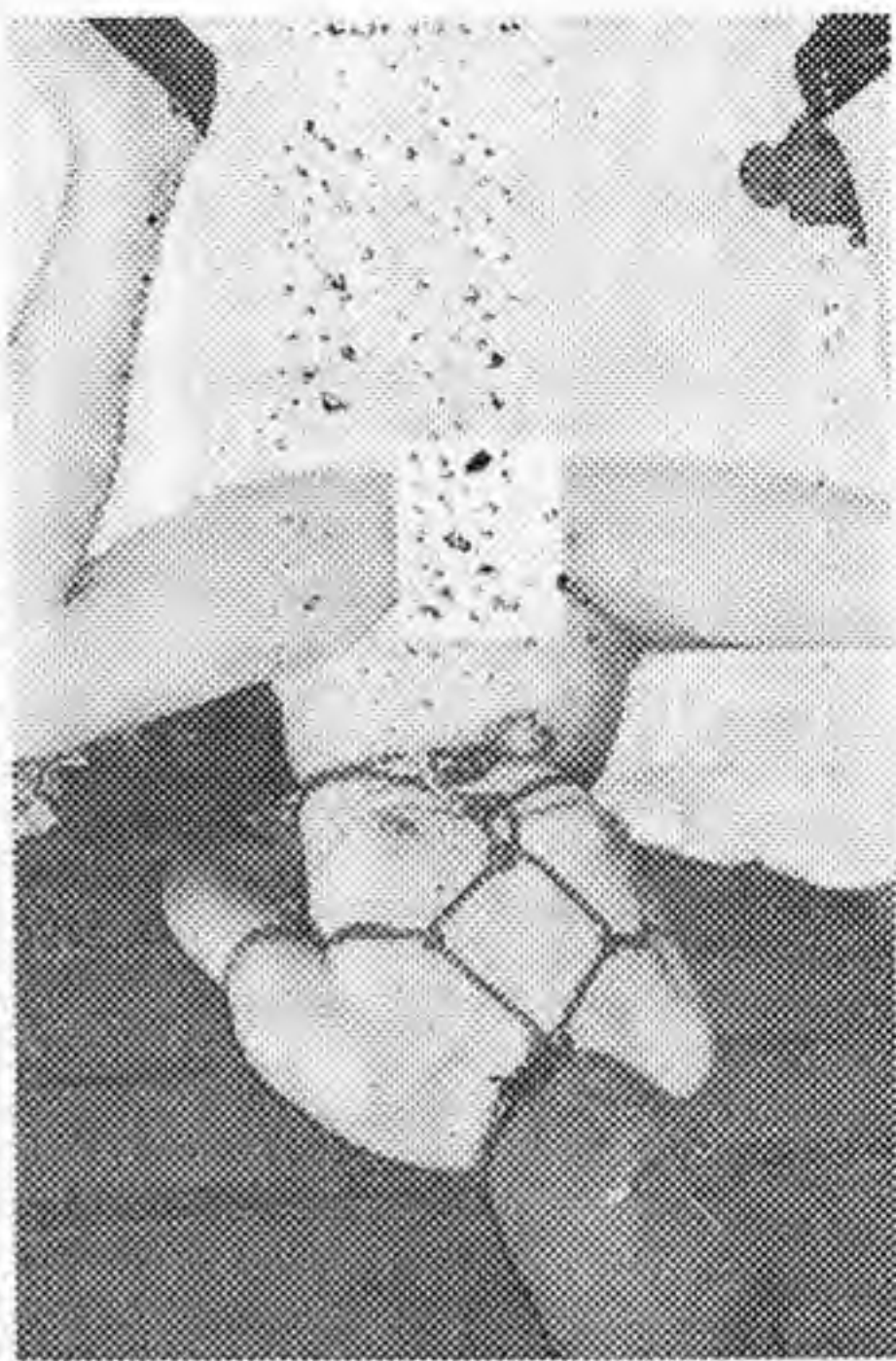
からヒントを得て、彼女に覆面をさせてみたら——と考  
え出したこと  
とから、事  
情は一変し  
てしまった  
のです。

リング上  
で悪役の本  
領を発揮す

る外人覆面レスラーも、一たび覆面を取り去られると借りてきた猫のようになることは、よくテレビで見えています。案外、悪態の限りをつくす覆面レスラーも本来は内気な男ではないかと、考えたりするのです。

彼女も一旦覆面さえしてしまふと、この私が驚く位の痴態を示しますし、どんなポーズ写真でも厭がらずに撮らしてくれるようになったのです。

それをよいことに私も大いにハッスルして、彼女を縛りまくり写真を撮りまくりました。同封しました写真はその中の一部ですが、若し発表出来るものがありましたら掲載して下さい。



## 妊婦腹を晒したい私

佐野みさ子

この写真は、S男性の彼にSMプレイのすぐ後で写してもらったもので、まだプレイ時の感覚が残っていて、うっとり目をつぶっ



生首が出たり、井戸で男女の吊るし責めをやったり、エログロ横溢で楽しい。

独立プロでは「女の武器で勝負しろ」で松島みゆきが土蔵の中で長襦袢一枚に剥かれ両手を万才型に縛られ「男の住所を白状せよ」と拷問を受ける。また、港雄一の「好色王将一代、松葉くずし」で昭和の三吉の女房の清水世津が、夫が勝負に出る金をこしらえるために責め絵画家のモデルになる。後手に緊縛され、その縄尻で両足

てしまいました。

ところで私は今妊娠しております。十二月が出産予定です。

主人との週一回の夫婦生活ではものたりなく、いけないことと知りながら、SMプレイの相手をして下さる男性とも二、三回関係を持ちました。もちろん主人には内緒です。主人は私の妊娠を喜んでいます。

しかし私の子供である事には変わりなく、おなかの子供は生むつもりです。

私はSMプレイとセックスとは切っても切れないと思います

を縛られ中腰になる。そしてローソク責めにあうが、伊藤晴雨のムードを出していた。また「残酷絵図」で冬木喬三の責め絵の日本画家のモデルに珠瑠美がなり縛られムチ打たれた。本格的な伊藤晴雨伝が欲しいところである。

団鬼六企画の「白い乳房の戦慄」で辰巳典子が捕えられ、サルグツワを口にくわえさせられ、両手を後手に緊縛され、スタンドの電球責めにあうが、さすがに彼女は責められる演技がうまい。

し、事実、プレイの最中に縛られたまま喜びに悶えました。今は大切な時期なのでプレイをひかえておりますが、いずれ九カ月のまゐるまゐるとした妊婦腹になりましたら、再びS男性と妊婦縛りプレイを実施したいと思っています。

そして私の全裸妊婦羞恥態をフオトでみなさんに見ていただきたいと思います。それが奇クファン風俗研究の参考になったら、私としてもうれしいかぎりです。どうか、私の全裸妊婦フオト発表の日には、金原さんの妊婦フオトとくらべて下さい。きっと金原さんにまけないくらいまるまるしたおなかをお見せ出来ると思います。



# 我が主観

## 縛りの美学 (三)

………ロマン派生………

### 3、縛り方

縛りの美学の最も基本的な要素は、緊縛感、あるいは拘束感であることは云うまでもなからう。縛られる側からすれば、自分の身体が自分の自由にならない感じ。縛る側からすれば、自分の思いのままに出来る感じが両方の心のつながりを深め、そこから美が生まれると思うし、女という弾力に富んだ柔らかい存在を責め手の腕の延長ともいふべき縄できつく抱きしめる感じが緊縛感といえると思っ

ている。ここではあまり心理的な面は避けて形式的な面に重点を置いて話をすすめたい。

緊縛感は縄がゆるみなくしっかりと締まっていなくては生じて来ないことは当然であろう。そのためには強く縛ることがまず要請されるが、それだけではなく、縛るのに最も適した場所、いわば「ツボ」を縛らなくては、私の望む緊縛感は出ないようだ。例えば足首を縛らないでおいで膝などを幾ら強く縛ってみてもナンセンスであ

る。「ツボ」とは、縛って一番ゆるみがない所で、しかも自由を奪うに最も有効な場所と考えている。これは縛る場所に必然性があるかどうかという点とも関連する。縛りには、必然性がなければ美しくない。例えば、両手を高く挙げ、吊るしたように縛った女の胸のあたりを幾ら強く縛っても、そこには何の必然性もないように思う。それは女の自由をなにも奪っていないからである。この場合に女の後に柱があつて、胸を縛った縄が女を柱に固定する役目を果たしていれば、これは必然性があると頷ける。この例では、いわば力学的必然性だが、心理的必然性という点とも一応考えられる。例えば股間縛りなどはあまり力学的必然性はないかも知れない。しかし力学的必然性を広く考えれば、美には常に力学的必然性を伴うとい

ってよからう。

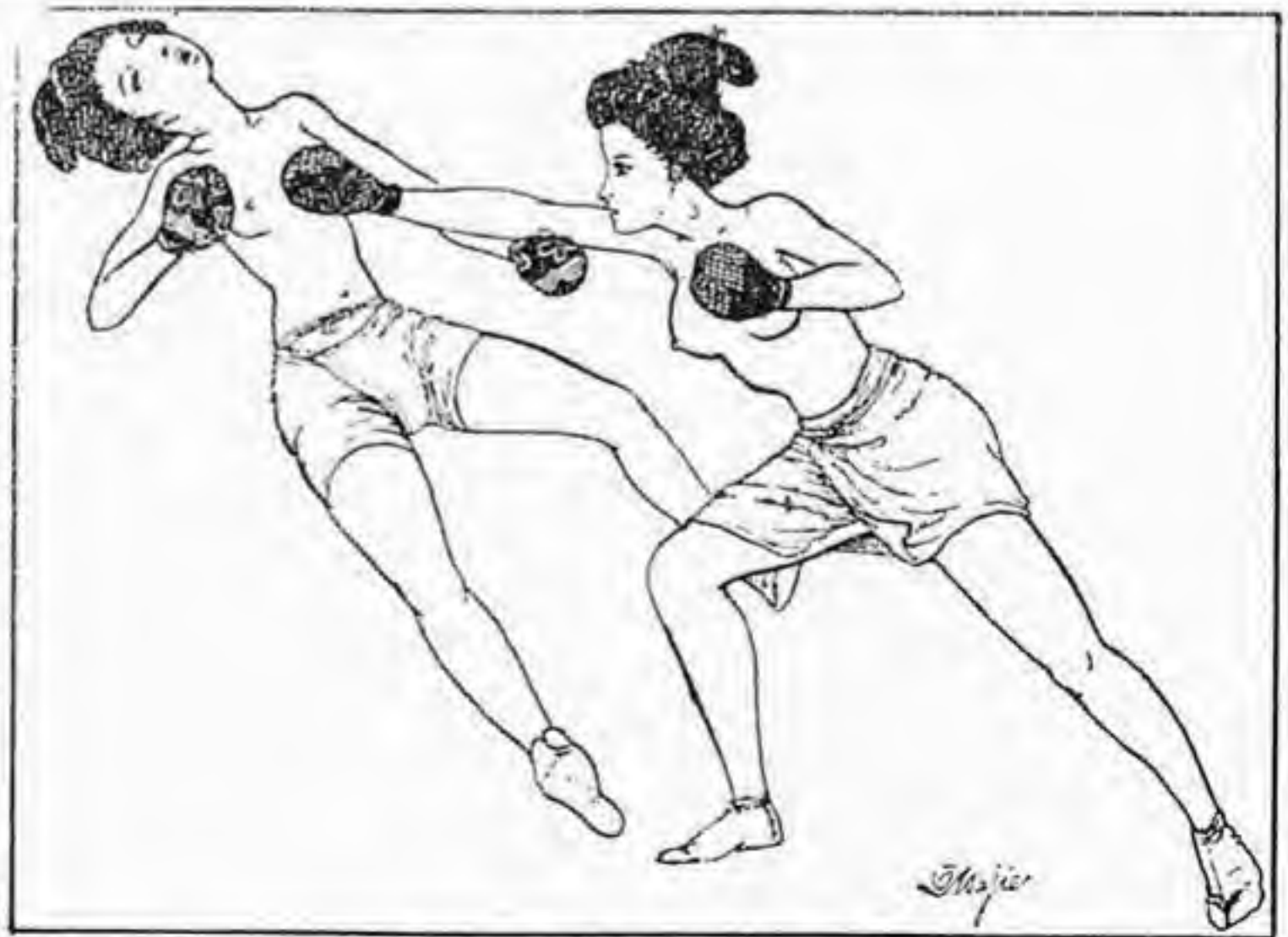
縄の量は、ゆるみさえなければ多いほどよいが、多量の縄をゆるみなく用いることはなかなかむづかしく、太さにも関係し、私は細いものほど沢山かけたい。ただし女の全身にバランスよく配分されていないと納得出来ない。すなわち、胸なら胸にだけ集中的に沢山

縄掛けして胴が全くお留守では気に入らない。

ただし、バランスよくとは、必ずしも等間隔に縛るということでなく、強調すべき所はやや密に、そうでない所は粗に、アクセントをつけたということである。

縄は原則としてシンメトリーにかけるべきでシンメトリーはゆるまない感じと安定感とを与えてくれる。しかし僅かな非シンメトリーは時としてアクセントとしての効果があるようだ。

縛りが美を生み出す秘密の一つとして、縛りが女体を細かく分割することが考えられる。縄がとり囲む多角形が女体の美しさを盛り上げてくれるが、私にはこの多角形の面積は、強調すべき所ほど小さくなるのが好ましい。またこの



—僕のイメージ画集—

『お座敷リングのライバル』 室井亜砂路

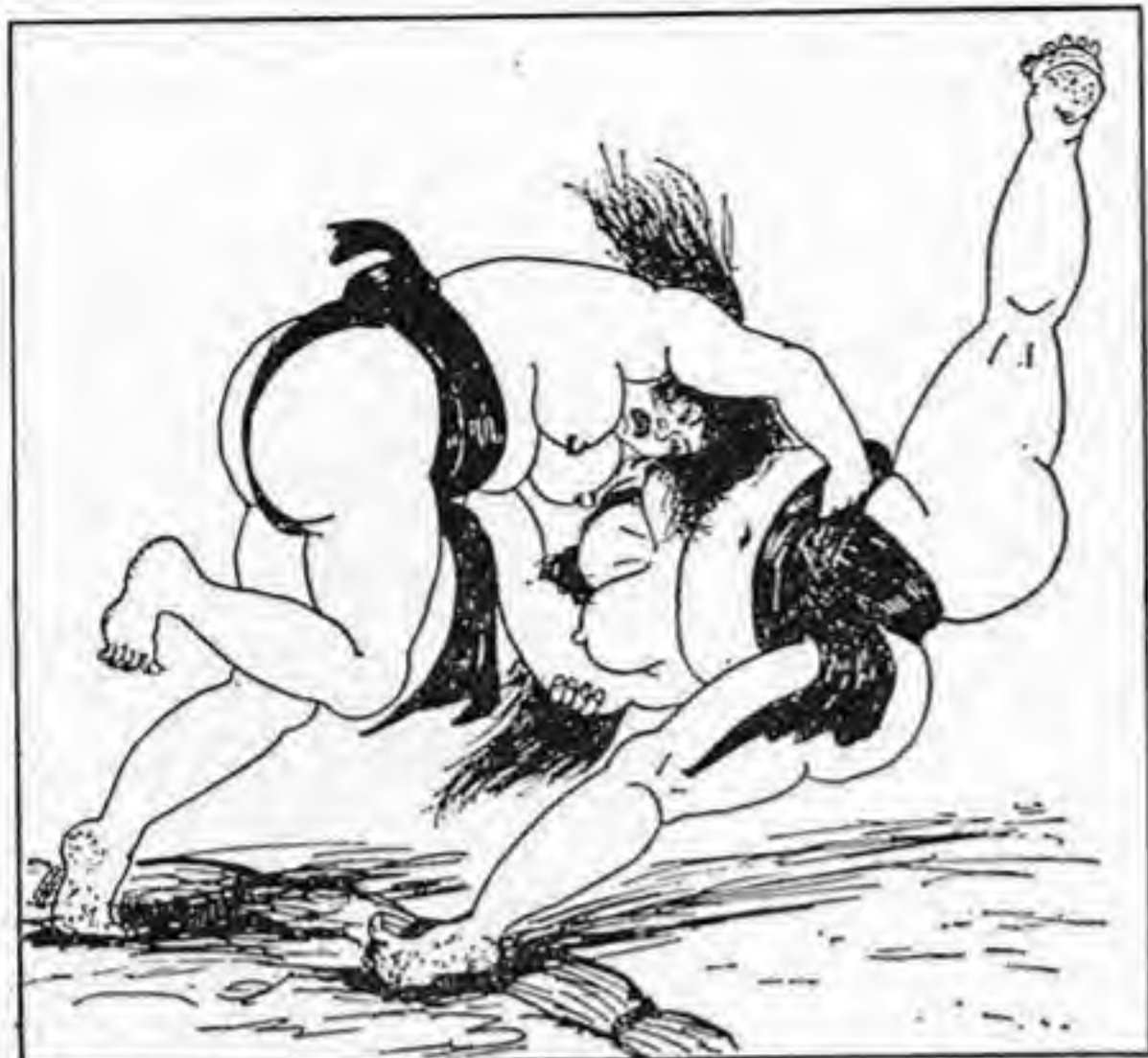
多角形は四角でもよいが、それより菱形とか亀甲形の方が更に好きだ。それは、縄の線が斜に走る方が視覚的に目立つからだろう。菱形、亀甲形以外でも、ゆるまな縛り方での斜の線を活用したいと思う。

手首、足首その他の場所でも、縄を幾重にもかける場合、縄と縄が重なってしまつては緊縛感をそ



## 『女肌の激突』

椿 寿郎



こねるように思えてならない。重ならないようにキチンと並べて縛りたい。私は更に、並べて巻いた縄と直角に一巻きしておくようにしているが、これはゆるまないようにするためだ。

キ型、菱縄、亀甲型、等に縛った際は、縄の交点は、いちいちキチンと結んでおきたいのも私の好みだし、顔に縄をかけるのはよくないが、口に一筋猿轡としてかけ

るのは好きだ。首縄は賛成。これは先にのべた斜の線という意味に加えて、背面と側面のたての連結という意味でもよいものである。手首は当然きちんと縛るべきものだが、上腕も是非縛りたい。上腕に縄をかけずに胸だけ縛るのは味気ないものに思えてならない。乳房は下から上向きにせり出させるように縛りたい。小さな菱形

を乳房の上部に作り、その下にやや大きな菱形を連結し、横縄で乳房をはさみあげるのは最も好ましい形である。腹部は一番細い所をきつく締め上げるし、股間のたて縄だけは斜めでなく、真直ぐにおろすようにしている。足は足首、ヒザの上下等を強く縛りたい。それは両足を揃える場合も開かせる場合も同じである。

前面をきれいに縛ると背面がおろそかになりがちだが、私はいつもなるべく背面の縄もきちんと、必然性を失わぬよう処理を心掛けるし、出来るだけ背面にも菱縄をとり入れている。最後に縄尻の処理だが、長い縄尻が妙な位置からだらりと下がっているのは興醒めである。引き廻し等のため、縄尻を長くとる必要がある時には、たて縄から尻尾のようにとっている。

## 女すもう小信

高島 大井子

「花の女斗美たち」もめでたく大尾となりましたが、最近の出版物の中から女すもうファンに關係のありそうなものを拾ってみますので、他にもありましたら同好の方どうかおしらせ下さい。

異様な幼児性とグロテスクで特色のある画家、佐伯俊男氏の画集（アグレマン社刊）の中に男女力士の取組む図は不思議な魅力があり、一見に値しま

す。なお、この画家の作は女すもうファン以外にも、注目されるものと思います。菊川英昌氏はしばしばよく女すもうを描かれますが「漫画エース」三月二十日号にも出ています。最近号には盲の座頭と女の取組の図をのせられています。「漫画Q」四月二十九日号には歌川大雅氏の作と思われる女すもうの図があります。女禪の方では「真実日本残酷選書」の「女プロレス」に白サランの六尺をしめるところがあり口絵もあります。これは少々おかしい図です。女禪ではありませんが「話の特集」三月号に高橋睦郎氏の「禪の美学」

があります。すもう全般のエロテイズムについては、昔からいろいろ書かれています。最近では「デザイン」六月号に草森紳一氏の「角力」があり、これは徹底して江戸時代のすもうをエロチックに見たてたものです。女禪には御存知、団鬼六氏の「花と蛇」の単行本のさし絵に六尺禪のシバリがあります。女禪、女斗の方の連中は「花と蛇」は全然読まない、（私もその一人）人間が多いので念のためお知らせしておきます。ロープの方の友人がおしえてくれたものです。「ユーモア・グラフ」に「娘相撲特集」発行希望の投書が出ていましたが、実現しないようで、残念です。



# ゴムマントの舞

梅川幸子

日毎にむし暑い初夏になりました。今年の梅雨は雨が多いそうでした。雨中のゴムプレイが出来ると、胸をときめかせています。さて、最近新しいゴムマントとゴムブーツを買いました。お知らせしましょう。ゴムマントは、私が何着も持っているのと同じ男物の黒いゴム引（裏は茶色の木綿地）のもので、あるゴム合羽の専門店で買い求めました。傘を買いに行った店に、たぐさんのゴム合羽やゴム長が並んでいるのを見て、このお店ならあるだろうと思いましたが、思い切ったもので、奥の方から出して来て貰ったものです。お値段は千八百円。着丈は普通サイズで、一メートル十センチ。



チ。最近の製品らしく、古いゴムマントですと内ボタンで前を閉めるようになっていますのに、この新しいゴムマントは大きなホックが五つ並んでいます。今どきこんな男物の黒いゴムマントの新品が手に入るなんて夢のようじゃございませんか。それからゴムブーツ。これは北日本ゴム製のニーブーツ（ニー：ひざ）といひざまで届く婦人用ゴム長で、今までに買い求めたアサヒゴムのハイレインより遙かに長く、

（床からの高さは三八センチ）形がスマートで、つま先はほっそりと、踵は高く、出来ています。このブーツの特色は、



多くの婦人用皮ブーツ同様に、内側にファスナーがついていて、脱いだり履いたりする時便利に出来ています。でも、ファスナーがついているため、足首より深く水に入るとチョロチョロと水が入ってくるのが欠点ですけれど、現在の婦人用ゴム長ではスマートさと長さの点で、これに勝るものはございません。文数は一番大きな二十五センチの買い求めました。こ



のサイズは婦人靴の場合十・七文でございます。色は黒、赤、白の三種を一足ずつ、計三足です。デパートか大きな靴屋さんでないと一寸見当たりません。お値段は千四百円です。同封の写真は、新しいゴムマントにくるまって黒いニーブーツを履いた私です。ゴムマントの中は素肌に婦人用ゴム引レインコートをもとい、その上から男物の総ゴム合羽を重ね着して顔にゴムマスク、手には大きなゴム手袋といった、いつものスタイルでございます。如何でしょう黒一色のゴムマントにニーブーツがよく似合いませんか？ そしてアクセサリに持ったホームサイズのコーラのあきピンは何を意味するのでしょうか。



## 注腸の記録

間 長 太

胃の具合が、よくなったと思っ  
たら、こんどは大腸の具合が、悪  
くなった。下痢をしたり、下腹部  
にいやな圧痛があったり、ゴロゴ  
ロ腹が鳴ったりする。また病院通  
いをはじめた。医者は、慢性の大  
腸カタルだから、心配はないが、  
一度レントゲンで大腸を調べた方  
がよいという。

胃のレントゲン透視は以前にも  
やったことがあり、バリウムを  
飲んで調べたから知っているが、  
大腸はどうやって調べるのか不安  
になり医者に訊いてみた。医者は  
「なに簡単ですよ。下からバリウ  
ムの溶液を入れるんですよ」

と、こともなげに答える。  
それから、四、五日して、いよ  
いよ意を決して病院を訪れ、それ  
では、大腸の透視をお願いしま  
すと、医者に告げた。医者は若い  
看護婦に、

「バリウム溶液の用意を……」  
と命じる。やがて、看護婦は、  
千CCくらいはいる、イルリガー  
トルに、白いドロツとした液体を  
いれて、

「レントゲン室の方へどうぞ」  
というので、あとに従う。

看護婦は二人で、二十二、三歳  
くらいのまゆの細いアイシャドウ  
した目がパツチリした美人と、も  
う一人はまだ見習いのような、十  
七、八歳の、化粧もあまり濃くな  
い、可愛い感じの女性だった。若  
い方の看護婦がイルリを持ち、年  
上の方が、オリブ油をしみこま  
せたガーゼを手にとって持っている。

レントゲン室にはいると、ズボ  
ンや下着をとって、水平になった  
板の上に横になって寝るようにと  
指示を受ける。パンツ一枚になっ  
て冷たい板の上にゴロリと横にな  
る。医者がでかいサンングラスのよ  
うな眼鏡をかけて入って来た。  
「では用意して」

医者の指示で、年上の方の看護  
婦が、無雑作に、私のパンツをく  
るつとむくようにして尻を出す。  
若い方が、懐中電灯で照らしてい  
る。「若い二人の女性にのぞき込  
まれている」と思ったとたん、被  
虐本能が頭をもたげてくる。

年上の方が、オリブ油でイル  
リの嘴管を拭いていたが、アヌス  
もヒヤリとした。同じように拭い  
たらしい。いよいよ始まると思  
う間もなくグクツときた。かすか

閉め切ったお部屋の中で、ゴム  
装束をまとい、ゴム独特の匂いと  
擦れる音、肩にのしかかる重みを  
楽しみながら自分の姿を三面鏡に  
写し、いろいろなポーズをとりな  
がら「ゴムマンの舞」に身も心  
も天国に遊びながら、やがて黒い  
に痛い。感じでは十糶ぐらいかと  
思われた。

これで準備は完了したらしい。  
アヌスにゴム管を意識しながら、  
指示に従ってこんどは上向きにな  
る。電灯が消され、レントゲンの  
機械のスイッチが入られる。

「すこしずつ入れて」  
という医者の指示で、若い方が  
イルリを持って、台の上にあがつ  
たらしい。冷たい感触が急速に伝  
わってくる。  
「ホラ、入ってゆくのが見えるだ  
ろう」

医者が透視状況を、二人の看護  
婦に説明しているらしい。「腹の  
中まで見通しとはこのことだ」と  
私は心の中で思う。

最初は猛烈な排便感に苦しめら  
れる。医者は時々、苦しいかと訊  
くが、私は、いや我慢できます、  
と苦しいのを我慢して答える。か  
なり注入されたらしいが、排便感

花が咲いたように、黒いゴムマン  
トの裾を畳いっぱいに拡げてへな  
へなと坐り、そして伏せていくの  
です。

(同封のフィルムには「ゴムマン  
トの舞」が写っています。現像し  
て下さいませ)

はそのうちに消えてしまう。

「ハイ、動かないで、そのまま」  
といいながら、二、三枚写真を  
撮ったようだ。

「癒着もないし、潰瘍もないです  
ね。ただ大腸管が、普通の人より  
やや細い感じで、そのため、大腸  
の機能が少し弱いようで下痢をし  
易いのです。まあこれは体質的な  
ものですから、薬をのんで、少し  
ずつよくしてゆくことですね」

と説明してくれた。

撮影が終わると、年上の方が、  
アヌスにガーゼをあてながら、す  
っと嘴管を引き抜いてくれた。

「トイレは、突きあたりの右側に  
ありますから……」

という看護婦の声も上の空に、  
ズボンのバンドをはめるのもど  
かしく、トイレにかけ込んだ、牛  
乳のような白い液体が、次から次  
へと、トイレの白い陶器を一杯に  
満たしていった。



## 拷問場面の思い出

早 木 夢 二

柴利好氏の「無声映画に想う」

ある。

を読んで私も又、なつかしい遠い昔のベストセラー「砂絵呪縛」を思い出すこと頻りであった。

「映画百年史」に載っていた、伊藤みはると川上弥生の菱縄縛りの場面は、菱縄マニアの私にとって心楽しいものだったことは勿論で

ある。阪妻が主人公の勝浦孫之丞の役を嫌って、いわば悪役で、今でい

えば眠狂四郎の元祖とでもいえそうなるニヒルな浪人者の森尾重四郎に扮して話題をまいたそうだ。

この映画では、森静子が露路に扮して、前手縛りの哀愁溢れる姿



イメージ画 『垂涎の獲物』

岡 たかし

を見せていた。

本が手許にないので記憶を辿って書いているのだが、露路が敵方に捕えられ、お酉という姐御に拷問される。

お酉は露路の指の間に煙管をはさんで、じわじわとしめあげる。戦前の特高の思想犯への拷問を思わせるものがあつた。

露路が味方のありかを明かさないうちに業を煮やしたお酉が、手下の岡っ引に命じて露路の両手を後ろで縛り、ぐいぐい吊り上げて、お酉がネチネチと責め言葉を浴びせながら、可憐な美女を責めいたぶる場面がある。

ついにお酉は露路を素っ裸にして「女の恥」をかかせてやろうとする。そして一糸まとわぬ全裸にされた露路を菱縄縛りにして羞恥責めにかける。……となると堪まらないのだが、そうは行かない。危機一髪という所で侍女の干浪が白状して、露路は「女の恥」を辛くも免れる。

もう随分、以前に読んだのに、こんな情景を、はっきり思い出することが出来る。

この作者の土師清二のものは、ねっとりとした美女の責め場面が外の作品にもある。

「破魔弓伝奇」では、女を猿の檻の中に入れて責める珍しい場面があつた。

戦後の「おんな牢」は、有名な大阪屋花鳥の女牢生活を描いたものだ。お白洲に引出された花鳥が石抱き責めの拷問にかけられる。

石を二枚、三枚と剥き出しの膝の上に積まれた花鳥は、鼻汁を垂らし涎を流して苦悶する。小者が「ええい、穢いわい」と、抱き石の上に薬を敷く。その上に花鳥が口に含んでいた賄賂の小金を落とすと、小者はそれをとって拷問を手加減してやる。

江戸時代の拷問の裏を見せられ興味深いものだった。ただし、この場面では花鳥が菱縄姿でなかったのは残念。

私は常日頃、名作の中の拷問場面を集めてみるのも面白いと思っている。しかし思うだけで未だまとまっていないうが、折にふれ、こんな風に思い出を呼び起こしてくれるときがあるのは、楽しいものである。

待合で美妓を侍らして酒をあふりながら書きなぐったという作家の三上於菟吉の「清川八郎」では妾のお蓮が八郎の行方を問われて牢問い拷問にかけられる場面が、

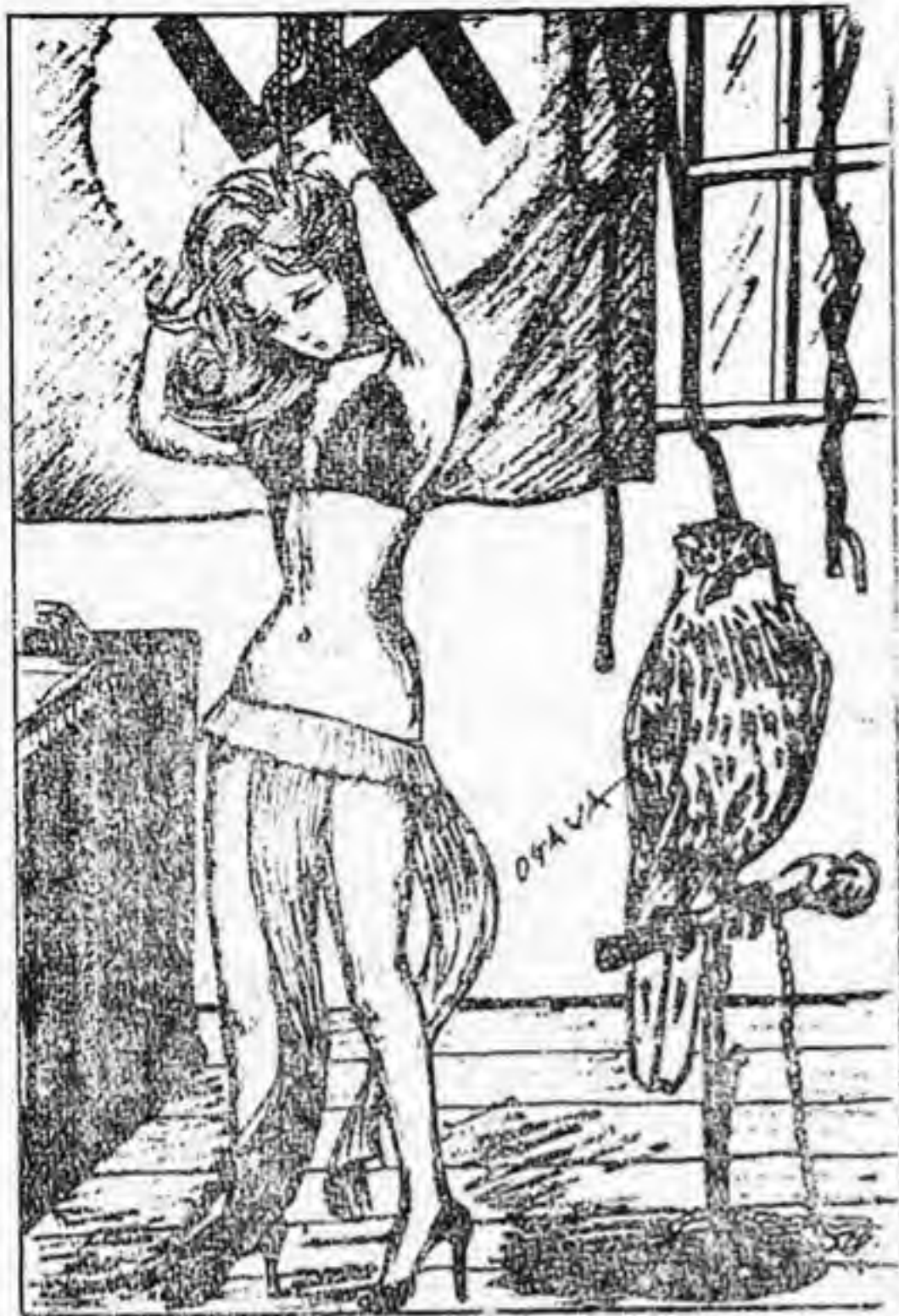


／＼演劇通信／＼和田平助／＼

## 『奴隷』の迫真演技

先日、池袋アートシアターで人間座の「奴隷」を観る。これ迄にも職業上、数々の残酷ショウやSMをふんだんにおり込んだ芝居を観て来たが、満足にセリフもしやべれず、舞台も歩けない連中の段取り芝居にいつも興醒めしながら帰途に、ついたものだ。が、この「奴隷」は見事、私の今迄の鬱憤を晴らしてくれた。

女主人と若い男奴隷、奴隷の妹で白痴の少女、女主人の恋人で白痴の少女を犯す映画スター。この



『初夏の幻想』

小川茂正

登場人物四人による愛憎ドラマだが、その一端を紹介しよう。

幕あきから一人の若い奴隷が、裸のまま天井から垂れ下った鎖で吊られている。(この奴隷になる役者の皮膚がいたるところ黒ずんでみえ醜いと思ったが、舞台が進むにつれ、この謎は解けた) 巾三纏、長さ一米位の皮鞭をもった女主人が登場するや、「奴隷」が女主人の恋人に粗相をしたとの理由で宙吊りのまま、鞭が容赦なく彼の裸体に飛ぶ。「パシッ」と

しつこいまでの筆致で描き出されている。

牢役人がいよいよお蓮を拷問にかけよう。「それ、本繩にせい」と命じる。

私は菱縄を打たれたお蓮の姿を想像して胸おどらせたものだったが、これもそうは行かなかった。

お蓮は罔つ引の手によって吊るし責め、逆さ吊りの拷問にかけら

いう、すごい音と同時に、うたれたその箇所は赤く尾を引き、腫れ上り、みるまに紫色に、変色していく。現実には目前で行なわれる鞭打ちに女性をも含めた50人の満員の観客は生唾を飲み込み、静まりかえっていた。(舞台といっても観客と同じ平面で演じられる故に十纏と離れていない所で、鞭がうなりをあげて「奴隷」の肉体にまつわり、そして離れる)

背中といわず腹といわず、女主人は狂気の如く力一杯、鞭を打ち続けた。この「奴隷」に扮した役者はタフであると同時にマゾの持ち主でなければ一週間の公演は無理だったろう。女主人に扮した役者は逆にS性とみたが、ひがめか？ 最後には、女主人が裸にされ、逃げまどう白い肉体めがけて鞭が

れ、ついに病の身を奮にのせられ浅草の溜りの場に送られてゆく。

お蓮が、くすぐり責めにかかれ、腋の下や乳房をくすぐられるのは珍しいものだった。

あれやこれやの拷問場面を「無声映画に想う」に刺戟されて、とりとめなく書いてみたが、その内に、ぜひ「名作の中の拷問」を集めてみたいと思っている。

とぶ逆転シーンが展開される。これらがなぐる、ける、なんてナマやさしいものでなく、恋人と一緒に裸にひんむき、抱き合せておいての鞭打ち、水責め。あげくは無理矢理に小便を飲ませる。全てリアルに我々観客の目前で……いやそこには芝居のことも、我々のことも忘れて、叫び喚くこの「本気」さ。「演技」を通りこしたものであったが、私は心から彼らに拍手を送った。

幕を閉じて一週間たつが、いまだに四人の役者の肉体には、鞭打たれ変色した傷あとが消えることなく残っていることだろう。

(蛇足ながら、人間座は池袋アートシアターが本拠地であり稽古場でもあるので、電話の問い合わせも可能と思う)



「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚	五〇〇円
十組十枚	一〇〇〇円
二十組二十枚	一八〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

- 1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)  
2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)  
3 襲う影に慄のく (佐々木真弓)  
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)  
5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)  
6 縛られて困るわ (金原奈加子)  
7 私を襲わないで (左近麻里子)  
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)  
9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)  
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)  
11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

- 12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)  
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)  
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)  
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)  
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)  
17 何故私を縛るの (金原奈加子)  
18 感泣する胴縛り (ローズ秋山)  
19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)  
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)  
21 足指はくの字に (佐々木真弓)  
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)  
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)  
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)  
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)  
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)  
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)  
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)  
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)  
30 出臍を晒す縛り (佐々木真弓)  
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)  
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)  
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)  
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)  
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)  
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)  
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

- 38 竹棒責めに悩む (大島 照代)  
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)  
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)  
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)  
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)  
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)  
44 私は縛りが好き (金原奈加子)  
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)  
46 麗身を横たえて (左近麻里子)  
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)  
48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)  
49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)  
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)  
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)  
52 突き出した尻 (中河 恵子)  
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)  
54 首縄股間縛の女 (長井葉津子)  
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)  
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)  
57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)  
58 囁かれる緊縛女 (長井葉津子)  
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)  
60 もう虐めないで (金原奈加子)  
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)  
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)  
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)  
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)  
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)  
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)  
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)  
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

- 69 美体は縄に映る (中河 恵子)  
70 逞ましき臀部晒 (左近麻里子)  
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)  
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)  
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)  
74 捧げられる女体 (中河 恵子)  
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)  
76 麗わしの肌を縄 (佐々木真弓)  
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)  
78 開股の股間縛り (大島 照代)  
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)  
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)  
81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)  
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)  
83 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)  
84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)  
85 投げ出された裸 (金原奈加子)  
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)  
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)  
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)  
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)  
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)  
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)  
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)  
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)  
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)  
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)  
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)  
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)  
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)  
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)  
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)



「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組 百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円  
十組十枚 一〇〇〇円  
二十組二十枚 一八〇〇円  
五十組五十枚 四〇〇〇円  
百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-19)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号  
天星社宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴しい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)  
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)  
3 八の字の開股縛(左近麻里子)  
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)  
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)  
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)  
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)  
8 白肌輝く股間責(山原 清子)  
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)  
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)  
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)  
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)  
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)  
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)  
16 縛の全裸を見て(金原奈加子)  
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)  
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)  
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)  
20 後手縛を見せる(川越美佐子)  
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)  
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)  
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)  
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)  
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)  
26 湯責めにあう女(山原 清子)  
27 変型高手小手縛(川越美佐子)  
28 洋子をいじめて(木村 洋子)  
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)  
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)  
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)  
32 軋涙責めの熱演(ローズ秋山)  
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)  
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)  
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)  
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)  
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)  
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)  
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)  
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)  
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)  
43 全裸の股間縛り(山原 清子)  
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)  
45 パンティを剥く(大塚 啓子)  
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)  
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)  
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)  
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)  
50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)  
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)  
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)  
53 剥がされた布片(金原奈加子)  
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)  
55 髪吊りの擦り責(ローズ秋山)  
56 高手小手の裸女(左近麻里子)  
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)  
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)  
59 悶える全身縛り(一宮百合子)  
60 伸びやかな素足(一宮百合子)  
61 卓上の人身御供(左近麻里子)  
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)  
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)  
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)  
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)  
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)  
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)  
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

59 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)  
60 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)  
61 縄のブラジャー(左近麻里子)  
62 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)  
63 逆エビで責める(ローズ秋山)  
64 美しき緊縛立像(関谷富佐子)  
65 悶える緊縛全裸(金原奈加子)  
66 鞭で責める女体(ローズ秋山)  
67 両手吊りで晒す(金原奈加子)  
68 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)  
69 あどけなき表情(金原奈加子)  
70 激しい縄目の肌(金原奈加子)  
71 白肌にむごき縄(左近麻里子)  
72 両手大の字吊り(関谷富佐子)  
73 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)  
74 美しき全裸肢体(佐々木真弓)  
75 柱に繋がれた女(長井葉津子)  
76 尻拳げ海老縛り(安井喜久子)  
77 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)  
78 荒縄縛りの刺青(山原 清子)  
79 股裂きで責める(ローズ秋山)  
80 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)  
81 後手に縛上げる(ローズ秋山)  
82 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)  
83 若々しき緊縛美(佐々木真弓)  
84 S男がいたぶる(佐々木真弓)  
85 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)  
86 正面全裸柱晒し(長井葉津子)  
87 開股縛りに羞う(左近麻里子)  
88 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)  
89 尻立て股間縛り(木村 洋子)  
90 悦虐に泣く美女(安井喜久子)



〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号 (むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号 (あけ) 四〇〇円

猪 吊り三態

梨花悠紀子 略号 (いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号 (せめ) 四〇〇円

強 烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号 (ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号 (ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

長野 良子 略号 (てい) 四〇〇円

全裸アケラ縛り

大手札三枚一組 略号 (てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

長野 良子 略号 (てほ) 四〇〇円

強 烈エビ責め

松本アサ子 略号 (まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号 (やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号 (ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号 (りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号 (ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

関谷富佐子 略号 (ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号 (ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

長野 良子 略号 (へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フオート

栗本ミチ子 略号 (いな) 四〇〇円

強 烈エビ縛り

関谷富佐子 略号 (もい) 四〇〇円

乳房責めの苦悶

関谷富佐子 略号 (もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号 (もた) 五〇〇円

強 打に泣く裸身

関谷富佐子 略号 (むち) 五〇〇円

裸身の晒し

関谷富佐子 略号 (わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号 (せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

長野 良子 略号 (そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

一塚 啓子 略号 (とう) 四〇〇円

色禪の開股縛り

長野 良子 略号 (いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大塚 啓子 略号 (はす) 四〇〇円

乳房しばり

長野 良子 略号 (うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大塚 啓子 略号 (うい) 六〇〇円

木馬責三態

大塚 啓子 略号 (もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大塚 啓子 略号 (いす) 四〇〇円

檻に入れた女

山原 清子 略号 (もの) 三〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号 (よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

山原 清子 略号 (はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原 鈴木 略号 (はた) 二〇〇円

碧玉裸身緊縛

大塚 典子 略号 (のん) 四〇〇円

くすくす責め地獄

大塚 東浦 略号 (きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大塚 東浦 略号 (きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大塚 東浦 略号 (きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大塚 東浦 略号 (きて) 七〇〇円

凌辱されるマソ女

大塚 東浦 略号 (きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大塚 東浦 略号 (きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大塚 東浦 略号 (なの) 四〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

大塚 東浦 略号 (なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号 (ゆり) 五〇〇円



## ☆浣腸関連資料の部☆

## 只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かみ)

## 強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かく)

## 百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かな)

## 浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かむ)

## 女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (五〇〇円)  
梨花悠紀子 略号 (れち)

## 強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
絹川 文代 略号 (きか)

## イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (五〇〇円)  
梨花悠紀子 略号 (いるり)

## 太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かふ)

## 自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (ゆか)

## 浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
絹川 文代 略号 (ほの)

## エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るい)

## イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るは)

## 女体浣腸ブレイ

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ほは)

## 進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ほい)

## 浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (へき)

## 便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (へか)

## 浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
山原 清子 略号 (かる)

## 浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (一三〇〇円)  
山原 清子 略号 (かへ)

## 浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 (一二〇〇円)  
山原 清子 略号 (かに)

## イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けか)

## オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けひ)

## イルリガートル

大手札十枚一組 略号 (一五〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かも)

## オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けま)

## 浣腸後カバー装置

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けさ)

## 浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (のけ)

## 高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (むい)

## 浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (むは)

## 施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (むろ)

## 浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (ゆか)

## 自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

## 浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ちり)

## 浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ちら)

## 浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かね)

## グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かて)

## シリントナーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かた)

## イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かち)

## アイヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (七〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かの)

## 浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
山原 清子 略号 (うも)

## 浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
山原 清子 略号 (うわ)

## 浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬる)

## 施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬか)

## 挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るて)

## 襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るち)

## 女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ると)





八月号読者通信で広島絵川ルミ様の文章を読んで中々立派な方と思いました。私はヤセで小男（一五八）の貧相な中年男です。SMプレイはまだしたことがありません。興味は前からありましたが、小心者ですから今迄内緒にしています。今度絵川ルミ様の文を見て勇気を出して名乗り出ました。絵川ルミ様を御主人として奉仕したいと思ひます。

（広島・呉務老）

大津勇様、貴男の読者通信を読

んで心強く思っております。私も長年女王様を探しております。梶山先生の『男を飼う』、谷崎先生の『痴人の愛』等この種の本は欠かしたことがありません。くり返し愛読しておりますが、本当に女王様などはいらぬものでしょうか。一生忠実にお仕えしたいと思っておりますが、実は国で酒場の女に頼んで女王様になつてもらい一度はネクタールも飲ませてもらうプレイまでいきましたが、都合で出稼ぎに出ましたのでそれまでになつてしまいました。今は機会ある毎に、女王様を探しに街へ出ております。貴男も探しておられるそうですが、もし幸いにして女王様に逢えましたら、私にもお目見出来ますようお願いします。私は四十三才、身体は人並です。

（東京・津知谷生）

四カ月ぶりに帰国して見た横浜は梅雨間近かとは言いがたも新緑に包まれた街路樹等がすがすがしい気分で長旅の疲れをいやしてくれました。太陽光線を貴重とする北欧の国々のうすら寒さから帰ってみると、公害だの何だのとうるさい事も沢山ありますが、やはり日本は良い国だなあと思つづく

感じます。北欧と言えは例の方で有名な国ですが、コペンハーゲン等は驚く程開放的でカラーの写真集を堂々と駅前売店に並べてあるのさえ見られました。それでもアメリカで感じる様な乱れという様なのを感じないのはどうしてでしょうか。残念だったのは期待を持て行つたのですが、我々の興味を引く様なSMものには、とうとうぶつからなかった事です。

（横浜・佐藤和夫）

初めてお便り致します。私は二十三才の人妻、先日初めて夫に緊縛プレイをしてもらい何とも言えない快感を知りました。この様な御夫婦の方とぜひ御知合になれたらと思つてペンを取りました。また私たちと交換プレイをして下さる方がおられましたらぜひお願い致します。

（大阪府池田市・武田勝子）

小生八月号の『六つの性欲』の原稿を書いた当時はビザの申請や渡航準備やらで忙しく六十三冊の本の中から適当な個所を見つけ出し一応すじ道の通る様にまとめたつもりですが、まさかこの作品が奇巧で取り上げていただけるとは

思っておりませんでしたから、思いがけない驚きで非常にうれしいです。小生、商用で五月初めより香港に来ていますから、奇巧は六月号より読んでおりません。そこで友人に話して購入してもらつておりますので帰国して読むのがなにより楽しみです。所で私は日本を出る時、奇巧を古いのやら最近のやらとりまぜて約三十冊程、持て出しました。それは、この本と物々交換で他の本を手に入れることにあつたのです。今、英国人と交換した非売本で英国で発刊されている物と思われる本が六冊、手に入り読んでいますが、かなり興味ある事柄が掲載されています。一方、中国において色々な拷問やらサディスティックな事柄について資料を集めています。こちらの方は思つた様にならず困つています。白人に奇巧を見せてやると大変、驚いています。それは日本でこの様な本が月刊誌として出ている事と、多種多様な方法でもってサディスティックな絵や写真が掲載されていること、そして西洋とは異つた方法、つまり一本の縄でもって女体を自由にする事、そして緊縛してゆく状態やらその縄掛け技術とかに非常に興味を示します。



彼等は日本字が読めませんので私の所にやってきては何が書かれてあるのか興味深く聞き、私もこれ等の事について夜の更けるのも忘れて解説しています。日本に帰って落着きましたら、手に入れた本に付いて原稿を書きたく思っています。

(在香港・三木京助)

私は六月号から読み始めた初心者です。永年、私の心の中にうずまいていた倒錯とMの世界が極めて良心的な編集により、かくも立派な本として発刊されていることに、喜びと共に敬意を表します。さて読者通信の万年学生氏の投稿について一言。アヌス責めに興味をもたれ、ガラス棒代わりに体温計をK子様に挿入されるとか。そして、どれぐらい拡張できるかといったお尋ねですが、通常の場合拡張度は健康時の排便の直径だけ

### 〓御送金についてお願い〓

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願致します。他に、振替等の方法もあります。で、ご利用下さる方も、便宜上「切手代用」にても結構ですが、必ず一割増にお願い致します。

は拡張するものです。私にはガラス棒にこだわる気持が全く不可解です。大体、本誌の愛読者にしてこの幼稚さ加減は、むしろ本誌自体にあるのではないのでしょうか。すなわち、余りSMのみに、特に縛りに重点をおいているため、他のアブ・セクシャルが影をひそめ、肛門拡張器……などと頭でっかち

になつてしまふのだと思います。また縛りにしても、単に縄をかけているというだけのこと、縛られた本人には痛くも痒くもなく、ケロツとした表情をしているのが私には不満です。緊縛というからには、女の柔肌にキリリと食い込み、それだけで苦痛を感じるくらいであつてこそ、苦悶の表情を、そして苦しめられていくことから感じる陶酔、すなわち喜びがあるのです。ケロツとしているのでは何のためのSMプレーかと疑問をもつのは私一人ではないと思ひます。少々経験あるM女性なら、余りの頼りなさに馬鹿々々しくさえ思うのではないのでしょうか。清水民子様は全くお気の毒。でも、そんな人とは別れてよかったと思ひます。毛の有無は、貴女の人格に全く関係のないことです。如何なる場合にも迷惑や不便をかけ

ることもないのに、それを理由に……というのでは、貴女の前夫は貴女の人格を全く認めていない人だったのです。今度は貴女自体の価値を正しく評価する人を見つけ下さい。左海敏江様。ぜひ、お友達になりたいと思います。

(京都・阿那立志)

井風呂秋於さま、お便りありがとうございます。つまらない私へのご提案、とてもうれしく、できれば是非、実現したいものです。私は、あなたがご想像なさっているほど若々しさはございません。でも、できるだけ若々しくなりたいと心掛けているつもりですが、なかなかむずかしいものですね。「女装同士の責め」思っただけでも、すばらしい。きっと変わった責めが生まれることでしょうね。女装の同好者の少ない奇巧誌で、しかも同じ大阪の空の下に、あなたがいらっしゃったことは、とても、うれしいかぎりです。しかも誌上を通じてお話ができ、なんとなく教養の深い、立派な方と、失礼ながらご想像させていただいており、心と心が通じたような気がいたします。つたない私ですが、どうかよろしくお導きください。

(大阪・中村 純)

佐野みさ子様。私は貴女とのプレイを是非、実現したいと望み、お便りを出しましたが、この度、金沢の方に転勤になり、貴女とのプレイができなくなるのではないかと心配しております。なかなか遠出は無理でしょうが、「被虐の旅」を地で行くようなプレイ旅行をしてみるのも一考ではないでしょうか。金沢など北陸の美しい自然の中でのプレイは、また格別なものがあると思います。私は、貴女がこの二、三カ月間、連続して出されているフォトを、いつも素晴らしいものと感心して拝見しています。豊満な乳房、決して崩れていない、ゆるやかな張りを見せている腹部の線、羞恥にうごめく表情。私は開股縛り、海老縛りなどの羞恥責めのほかに、ローソク浣腸、パイプなど使ったプレイもぜひやってみたいと思います。貴女を陶酔と悦楽の世界に誘い、きつと満足させることができると思ひます。ぜひ一念奮起され、金沢でのプレイが実現できるよう期待します。

(高岡市・山田 剛)

左海敏江様。貴女の呼びかけを



拝見して十日余り、毎日のように記事を読みかえし、幾度かお返事のペンをとりながら、思うように筆が進まず破り捨てて来ました。奇クの存在を知ったのが、つい一年ほど前。辻村さんや塚本さんのハント記事に読みふけりました。そして、そこに実在する女性の細にしたいげられた姿体の美しさ。また夫婦がSMプレイを通じて、より深く人間的な理解と愛情のきずなで固く結ばれる世界があることを知りました。未知の世界にもまた新しい心のふれあいのある事実を知り、今日まで無意識の中で眠っていたSMの世界へ夢と憧憬を抱いております。こんな未熟な男ですが、心のふれあいが許されましたら、いろいろお互いの夢を話し合いたいと思います。

(吹田・新庄 一)

山口県萩市の田尻様。七月号の貴方の投稿は、数年来、半ばあきらめていた旧知の友に巡り会えた思いにも似た気持と喜びで拝見。早速ペンをとりました。「奇ク愛読の経歴」「信頼できる人」「お互い秘密を守ること」「私達はムード派のようでありつつ責めは好みません」「県内、近県の友を

求めます」これらは、すべてご期待に添えるものと思っております。なお最後の「親戚以上の気持で交際したい」と結ばれた言葉に至っては、思わずバンザイと叫びたくなる気持でした。親戚以上のおつき合い、県内近県、ムード派。いずれをとってみましても、私たちの望み祈ってきたところで、私は今まで感想文や画、そして読者通信にも投稿しましたが、容易に意に叶った方々が見つかるものではありません。その点、今月の奇クには感謝したい。こんな素晴らしい方々の投稿を掲載して下さいました。私は写真にも趣味を持っています。そして下手ですが画もかきます。この喜びを共にわかち合い、このチャンスを与えてくださった奇クに対しても、大いに語り合いたいと思います。必ずご期待にも添えるような気がします。お互いムード派同志のようです。 (鳥取・松井 寛)

西宮の左海敏江様。あなたの同好者への呼びかけを嬉しく読みました。小生は二十九才の男性ですが、あなたとせひ喜びを共にしたいと思ひます。小生は羞恥責めを好みますが、あなたを強く優しく

安井・中川・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フोट

開股羞恥責めの姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しう

髪吊りで強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八した

片足首引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しち

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しつ

柔肌に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八して

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しと

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しや

痛打にもかく美女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しゆ

あぐら縛りの羞恥責

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しよ

片脚挙げで晒す裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とは

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とに

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とほ

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とへ

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とち

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とり

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とぬ

菱縄縛りで床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とる

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とか

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とま

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とみ

浣腸責めの美態開陳

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とめ

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八とも



いたぶってみたいと思います。また、その他の女性読者の方々、プレイ・メイトになって下さい。

(東京・丸井 博)

清水民子様。貴女のお便り、私は大変うれしく拝見しました。私は一介のサラリーマンです。二十八才になりましたが、未だ独身です。結婚生活に失敗された貴女はさぞ傷心のことと思います。私は写真の方は少々自信があります。貴女は本誌を初めてご覧になられて何もご存知ないとのこと。私は本誌を愛読して十一年ぐらいになります故、色々と指導して差し上げます。SMプレイによって貴女の美しさを倍にすることも可能だと考えております。貴女のように剃毛をしなくてもよい方なら、すぐにプレイを始めることができ、また貴女の羞恥心に火がつき楽しいプレイの連続になることと思います。

(大阪市・野津敏生)

皆様、初めまして。私は浣腸を愛する二十一才の女子大生です。現在、両親の元を離れて一人でアパート住いなので、思う存分、プレイにふけることができます。持っています器具は三〇CC浣腸

器一本きりですが、これだけでも十分、楽しむことができます。注入後は、いつもオムツかオマルのお世話になっています。以前、注入するときは体がガタガタふるえるほどの興奮を感じましたが、最近では余り刺激を感じなくなりました。私に残されたものは一人プレイではない複数プレイかもしれません。浣腸責めとA責めのマニアの方のお便りをお待ちしています。

(東京・仲山知子)

清水民子様は、ぼくが夢にまで見た人。ぼくは剃毛をされた人より、生まれながら無毛の人に異常なほど興奮し陶酔するのです。あなたにぼくも剃毛をしてもらい、あなたがコンプレックスを感じないようにし、SMどちらでも、あなたのよい方法でプレイをしたいと思っています。でも、お互いの気心がわからないのでは、おつき合いもできませんので、一度若葉の息吹もなやましい山にでもドライブして、相互に理解を深めましょう。また西宮の左海敏江様やM女性の方、静子夫人のように調教したいと思っています。

(大阪市・三木利清)

可憐表情の全裸縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆめV	立縛り正面裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆえV	両手吊り全裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆひV	雁字搦目後手縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆあV	股間縛り柔肌責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆもV	猿ぐつわ開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆにV	豊満な臀部強烈責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆほV	強制全裸開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆみV	股間縛り悶える 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆるV	全裸縛りに羞らう 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆへV	私の妊娠腹を見てね 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆわV	縛られた妊婦横臥す 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆよV
被虐に燃える全裸妊婦 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆぬV	尚も見せたい妊婦腹 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆるV	股間縛り首縄正面 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よれV	両手吊り正面晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よそV	全裸高小手の麗身 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よのV	全裸股間縛りの媚態 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よやV	強烈な変型エビ縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よいV	正座猿ぐつわの仕置 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よふV	凄絶海老責め地獄 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よえV	女体二つ折り縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よぬV	あぐら縛り全裸晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よあV	イルリの浣腸責め 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よたV



志摩の橘京子さん。七月号にて貴女のお便りに憑かれました。学生時代より奇クを耽読。以来、十年余。奇ク掲載のイメージ画やストーリーを独りで創作し、心をおどらせています。現在、SMプレイのパートナーは二年がかりで調教した一人のみですが、前々よりもう一人ぐらいパートナーをほしいと望んでいた処、「志摩」という地名にハッとしました。かねてより私は志摩を私の第二の故郷と自ら心に決めていたのです。一時志摩でも生活をした時期もあり、あの澄んだ入江の水に写る岸辺の緑の美しい風景は、私の心に灼きついていきます。その素晴らしい志摩で貴女と共にプレイできると思いますがと望外の喜びです。貴女とプレイするのが、私の夢となりました。(静岡・浜名)

第二処女地の開拓。結婚後、何年か、あるいは何十年も経っているご夫婦が、ある日、奥さんの第二の処女地を開く儀式を行なう。今まで愛されなかった部分。奥さんは、甘美な期待に胸を打ちふるわせることでしょう。また時として第二の処女地は第一の処女地にとって代わることもあり得るでし

よう。それは決して、結婚までは処女でいたいから、今の恋人には……という打算からくるものではない。私はA感覚が男同志の世界にのみ成り立つ快楽とは思えないのです。広くA感覚の世界を見つめていらいっしやる皆さん、それが単なる男女間のアヌエロティークであっても、浣腸やアヌス責めを伴ったものだとしても、A感覚の拡大には大差ないでしょう。底知れない内蔵快楽とでも表現したいA感覚。皆さん、独自のA感覚を、どしどし投書して下さい。女性にとってのA感覚の素晴らしさを語りましょう。

(東京・西条 夏)

西宮の左海敏江様。七月号のお便り楽しく拝見いたしました。私は国宝姫路城の麓に住まいする三十八才の男です。奇クの愛読を始めて既に十二年になりますが、まだ異性による本格的プレイは行なった経験がありません。そこで誌上でもって貴女を責めてみた、思いきって投稿しました。私は女性の豊かな腰臀に対し特に関心を抱いております。まず全裸、鉄砲縛りで俯伏せし、開股縛りの末、操り責めからはじまり、A責

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もろ▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はひ▽



め、鞭責め、鍼灸責めと、あくなき加虐に痛痒は將に骨髓に徹し叫号大声、恥を忘れて前屈反身、眉間を寄せ曲直回旋豊稜を揺する。

呻吟哀訴は恰も熱患の煩悶する如し。鞭責更に止まざるも、躍身次第に納まりて、哀訴の声低く、終に頭を垂れて正気逸す。魂魄既に形骸を離れて何処にか行けり。仰臥に返せば、胸丘豊稜として柔肌に光るは、随喜の涙か、歓悶の汗か。山麓の薄苗木茂らざるも、金溝の縫合既にはなびらを開き、かん沸として花蜜溢れ滴りて幽溪の菊花を濡らす。上下俱に相開く花二輪、何処にか已没せんぞ、雄蜂独之に迷う。刻移りて枕頭の窓外既に曙光。楽しき哉、画く脳裏一刻の夢想に酔う。左海さん、姫路城内には吊し斬りて名高い播州皿屋敷の物語を生んだお菊井戸や、切腹場の跡があり、また城下には近松文学を飾ったお夏清十郎の墓や、平安王朝の女流歌人和泉式部の墓等、数多くの史蹟が良く保存されております。もし播州地方へお遊びの節はご案内いたします。

(姫路・蜂巢草夢酔)

○大阪の清水民子様へ。こんなことで悩んでおられる貴女を救って

あげたいと思い、ペンをとりました。貴女と同じ悩みを持っている人は沢山いるはず。私も、まあまあの方です。最も全然、悩んではないのですけど。男性だから女性とは神経も違うせいでしょうか。まあ生きてゆくためには必要ない代物ですね。第一、用を足すときに、わずらわしいんじゃないかと思ってます。どうか気を落とされしないで再び良き伴侶を見つけて下さい。この通信欄には関東の方のお便りが少ないようです。もっと多くの方が御意見や呼びかけを發表して下さい。

(茨城・水戸平太郎)

○山口県萩の田尻様。ぜひ私達夫婦とプレイして下さい。ただ少し心配なのは貴男方より私達の方が大分、年上だということです。プレイ歴は割と古いのですが、貴男達と同様、私達もどちらかといえばムード派です。でも妻は一応、相当の緊縛、鞭打ち、浣腸、剃毛ローソク責めの経験はありますので、貴男さえ望まれるのなら、どうぞ遊んでやって下さい。妻もこの頃では、一度で良いから秘密さえ保てるなら、他の男性とプレイして見たいと言っています。私が

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はわ

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八はふ

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八はほ

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はあ

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八はう

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はさ

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はめ

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はし

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はも

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はむ

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はめ

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はも

ムチ打ちの陶醉境

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はさ

両手吊りて痛める女身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はし

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はす

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大島 照代 略号 八はせ

両手吊りてあえぐ女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はゆ

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大島 照代 略号 八はた

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はち

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はつ

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はて

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はと



DPEができないので、貴男のよ  
うにプレイの記録はありません。  
もし貴男にDPEをして頂けるの  
でしたら、フィルムをお送りしま  
す。私は経済的なゆとりはありま  
せんが一応、公務員ですので、社  
会的には信頼されている方ですし  
秘密は守らねばならないのです。  
貴男達御夫婦とプレイする日を夢  
みています。良きお便りあるよう  
祈っています。

(大牟田市・野村 忠)

三重県の橋様、西宮市の左海様  
大阪市の清水様。貴女達と、ぜひ  
とも交際、プレイねがえればと思  
っています。当方、三十三才の公  
務員で、一七五センチ、六五キロ  
のS的男性です。まだ初心者です  
のでお互いに色々と勉強しながら  
SMの世界へ入って行きたいと念  
願しています。淋しい、もんもん  
の日日を過ごさず楽しい一時を、  
快楽の一時を思い切り楽しませ  
よう。軽い縛りに羞恥も次第に薄  
れて、やがて鞭打ち、バイブぜめ  
などを要求する貴女の進展に、小  
生もとまどいながらも応ずる――  
思っただけでも、Sの血がたぎり  
ます。自分一人で要求の型を考え  
ても、二人での経験は、また格別

と思います。室内も色々良いで  
すが、山中、海、草原などの、野  
外プレイも色々やってみたいと思  
います。ぜひ、交友、プレイねが  
えることを熱望しています。また  
妊婦の方にも非常にあこがれを持  
っています。関西地方の妊婦の方  
貴女のすばらしい太鼓腹を見せて  
下さい。

(京都・S初歩生)

清水民子様。七月号の貴女の通  
信、拝見しました。しかし貴女が  
どの程度のSMプレイを希望して  
おられるのか、また、どのような  
嗜好を持っておられるのかも私に  
は分かりません。そこで私は一度  
貴女とお逢いした上で、いろいろ  
とお互いの意志を話し合ってみる  
ことを提言します。初めて奇クを  
御覧になったとか、できれば貴女  
を未知の世界へ誘惑したい気持を  
強く持っています。

(大阪市・小橋好生)

橘京子様。私は二十二才になり  
ます。本誌を読んで半年になりま  
すが、まだSMプレイの経験はあ  
りません。私は現在、アパートの  
一人住いのです。どの気がねもい  
りません。どうかこんな私でもよ  
いのでしたら一度プレイしたいと

最新撮影総天然色  
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てこ

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てむ

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八ても

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てん

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てる

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
東浦・大塚 略号八うて

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るま

羞らしいの真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るけ

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るふ

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るや

股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れよ

羞らしいの股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れに



思います。

(名古屋・岸本)

清水民子様。モデル御希望の由私と御契約下さい。貴女の離婚の原因が無毛によると告白されておりました。S M マニヤなら私ならずとも殆どの者が最高品として珍重する貴女を嫌った前夫殿は馬鹿の骨頂です。二十五才の身をアパートで一人暮らしとか。そのように引込み思案にならず、どんなお見合をなさいます。私のモデルになって下さる間に、私なら貴女を心から喜んで迎える良き伴侶を深し出してあげられると思います。が如何なものでしょうか。可愛い民子様を色々なポーズで何千枚も写したいと思っております。ぜひ、お願いいたします。

(神戸市・乃美対造)

本誌を愛読し始めて二十年近く休刊になったり、白表紙になったり、幾多の変遷を経ながらも今尚建在であることに大きな喜びを感じます。読みはじめた頃は大学を卒業したばかりの私も、今は三代にわかれを告げようとしています。本誌は私の青春と共にあったわけです。Sである私は二、三の女性と軽いプレイをしたことはあ

りますが、とかく若い頃は衝動にかられ、中途半端なプレイになっってしまったことを悔んでいます。先日、ヨーロッパを旅行した際、北欧で強烈なS M雑誌を入手しましたので、M女性の方にお目にかけ、プレイの小道具として用いたかと思っております。横浜の佐野様藤田様はじめ全国のM女性の方、お便りお待ちしております。

(横浜・S読者)

初めてお便りします。私が貴誌を愛読しましてから、もう五年以上になります。いつも楽しく読ませていただいております。だいが迷いましたが、思いきって便りを書きました。佐野みさ子様、私は結婚二年目の二十五才の男性ですが、妻にS Mプレイの話をしても一向にその気になりませんので、未だに実行できません。そこで、ここ二、三カ月の間、佐野様の便りが記載されたのを興味深く読ませていただきました。私は佐野様を全裸にして開股縛りで気を失いそうな恥かしい想いをさせたいと思います。ぜひ私とプレイして下さい。

(東京・大門高)

左海敏江様。七月号の貴女の呼

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れや

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れゆ

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れえ

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
中河恵子 略号八れぬ

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れね

開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れの

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れむ

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やか

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やき

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やく

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やも

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やし

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やみ

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号八なる

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 一〇〇〇円  
中河恵子 略号八ぬめ

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 一〇〇〇円  
中河恵子 略号八ぬね

八の字の開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しい

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しみ

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しけ

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しこ

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しら

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しれ

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しわ

お申込みは大阪阿倍野局私書箱

第14号天星社宛へ願います。



びかけに多大のシンパシーを感じている中年の男です。直ぐに御便りを本誌を通じて差上げたたく存じて居りましたが、金融会社勤務の關係上、六月は大変忙しくて遂々延引してしまいました。卒直に申上げて私にとってプレイの経験は殆どありません。しかし本誌を通じて色んなことを見聞し、それだけに貴女好みの初々しいプレイが行えるかも知れないと思っています。私としてはプロでない以上パートナーを変えてプレイを試みる勇氣もなく、ひそかに二人だけの赤裸々な人間的悦楽として、より生々しく、或は時として、より激しく貴女を苛み、場によっては絶望のどん底に陥らせ、反転して狂喜の世界に彷徨さすようなプレイを通じて、お互いの心をふれ合ひ、あらゆる面にいたわりと信頼を共有して喜びも悲しみも分かち合っ行って行きたいと思うのです。幸い貴女は距離的にも近からず遠からずの処にお住居の様ですし、当初極くフランクな気持で是非お近付きになれたらと存じて居ります。

(豊中・ムードマン)

私30才、妻28才の夫婦です。倦怠と情性に陥りがちな結婚生活を

新鮮なものにしたいと、いろいろ工夫してまいりましたが、二人だけのセックスには限界があり、次元の異なったセックスの悦楽を追求するためには三人プレイ、夫婦交換までにいきついてしまうようです。からだを傷つけたり、ムチを使う責めはいやです。福岡近郊の20代の健康に自信ある青年の方、私達と同じ思いをお持ちの御夫婦の方、おたより下さい。共に新しい喜び、刺激のある生活を、エンジョイしようではありませんか。七月号に投稿された山口県萩市の田尻長州様、これが目にとまりましたらおたより下さい。

(福岡・中西生)

いよいよ、静子夫人のアヌ感度も完成して来た様です。こんな女性居たらすばらしいですね、縛ったままで最低三人と一緒にプレイが出来るとなると。宮城昌子さんの「美しき入荷物」身体の線がやわらかく出ていて美しく画けています。今度は、もっとアップで画いて下さい。この画の女の人には妊娠して居るのかな。私は余り縛りはやらないのですが、菱縄縛りは良いと思います。ただ、どう云う風にしたら良いのか分かり

編集部特写緊縛女体資料

逆さ吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号△さめ△ 五〇〇円

両手吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号△さも△ 四〇〇円

若妻初妊娠の哀歎

大手札三枚一組 略号△さい△ 四〇〇円

妊婦の全裸縛り全身

大手札三枚一組 略号△さに△ 四〇〇円

妊婦腹の緊縛側面

大手札三枚一組 略号△さみ△ 四〇〇円

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚一組 略号△さろ△ 四〇〇円

若妻の緊縛妊孕美

大手札三枚一組 略号△さま△ 四〇〇円

膨満の妊婦乳房責め

大手札三枚一組 略号△さむ△ 四〇〇円

臨月腹の全裸晒し

大手札三枚一組 略号△さち△ 四〇〇円

躍動する妊婦の裸像

大手札三枚一組 略号△さほ△ 四〇〇円

妊娠という異常美の女体

大手札三枚一組 略号△さへ△ 四〇〇円

見てほしい臨月腹

大手札三枚一組 略号△さと△ 四〇〇円

妊婦全裸の全身肢体

大手札三枚一組 略号△ささ△ 四〇〇円

全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 略号△れる△ 四〇〇円

柔肌の高手小手縛り

大手札三枚一組 略号△れほ△ 四〇〇円

後手首を縛られた少女

大手札三枚一組 略号△れへ△ 四〇〇円

飼育された美少女縛り

大手札三枚一組 略号△れと△ 四〇〇円

縛られた美女二人

大手札三枚一組 略号△とそ△ 四〇〇円

全裸の美女を連縛する

大手札三枚一組 略号△とれ△ 四〇〇円

白肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号△とわ△ 四〇〇円

一糸まとわぬ柔肌縛り

大手札三枚一組 略号△とら△ 四〇〇円

開陳した華麗縛り肢体

大手札三枚一組 略号△とゆ△ 四〇〇円

縄に喘ぐ諦観の相

大手札三枚一組 略号△とえ△ 四〇〇円

松山真樹子



ません。その時にもたもたしていは興が覚めてしまいます。そこで、早木夢二さん、縄の長さ、どの様に縛って行くのか、写真付き解説をして下さい。大川恵子さんがグリセリンの粘っこさが何となく嫌らしくなる季節だという夏。まったく、その通り。べとべとして気持ちが良いありません。家でやる時は、そのまま、お湯で洗います。こうするとさっぱりして良いです。それにしても、大川恵子さんは、だいぶ前から浣腸をやっていたられる様ですね。最近あまり奇クサロンに出ませんが又、書いて下さい。川崎の笹尾美子さん。がんばって、浣腸に専念して下さい。だんだん、浣腸ファンの女性が出来るので楽しいです。分娩経験のある読者なら良く知って居る事だろうけれど、先日、友人の奥さんの出産見舞いに産婦人科へ行きまして、分娩室に入る前の妊婦が看護婦から浣腸されていた。その人は初めてだと見えて、大きな腹をかかえてすぐトイレに行きました。不幸にして、とうにか幸いにしてとういか、トイレが近くだったため、異音、怪音、快音が聞こえて来ました。何かその妊婦を責めて居る様で良い気持ち

でした。(群馬県・高崎エネマ)

○ 佐野みさ子様。八月号の投稿を拝見しました。貴女は全裸にされ身動きできぬぐらい縛り上げられ強烈な責めを受けたという事でしたが、私が貴女のそのM性の欲望を満たして差し上げたいと思います。浣腸、バイブレーター、ムチ打ち、ローソク責めなどで、つぎつぎに貴女の肉体を責めて上げましょう。その他、カラシ責めアヌスプレーなども加えて、貴女を幸福の絶頂に到達させて差し上げられれば幸いです。

(東京・武田常夫)

○ 八月号の広告に出ていた家畜人ヤプーの件について一言。初版はすでに入手。改訂限定版も予約しました。秋には続編が出版されるとのこと、Mファンとしては全くすばらしいことです。今から楽しみです。しかし本誌に載っていた、かかる名作が他社から出版されたことは一寸残念です。Sの名作「花と蛇」は何回も版を改めて発行されているのに……と、Mファンとしては不服に思います。版權のことなどあると思いますが、かつて奇クの黄金時代に載ってい

SとMの甘い一瞬

大手札三枚一組 略号△とさ▽ 四〇〇円

松山・小池二嬢 略号△とさ▽ 四〇〇円

縄に通う愛情の焰 略号△とけ▽ 四〇〇円

マキとミキ 略号△とけ▽ 四〇〇円

相愛の極致を描く二女 略号△とな▽ 四〇〇円

マキとミキ 略号△とな▽ 四〇〇円

鞭に狂う悦虐表情 略号△とな▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△とな▽ 四〇〇円

鞭打ちにうねる肢体 略号△とな▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△とな▽ 四〇〇円

足吊りの被虐肢体 略号△とな▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△とな▽ 四〇〇円

美しきマゾの境地 略号△とな▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△とな▽ 四〇〇円

裸後手柔肌縛り 略号△とな▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 四〇〇円

乳房強烈膨隆責め 略号△とな▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 四〇〇円

海老責めに苦悶する 略号△とな▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 四〇〇円

全裸の緊縛全身晒し 略号△とな▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 四〇〇円

煙草責めに喘ぐ女 略号△とな▽ 三〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 三〇〇円

大手札三枚一組 略号△とな▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△とな▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△とな▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 四〇〇円

抱擁する美女二人

大手札三枚一組 略号△とな▽ 四〇〇円

ミキとマキ 略号△とな▽ 四〇〇円

柔肌と柔肌のレズ狂態 略号△とな▽ 四〇〇円

ミキとマキ 略号△とな▽ 四〇〇円

緊縛麗姿に映えるライト 略号△とな▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 四〇〇円

臀部強調後手縛り 略号△とな▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 四〇〇円

羞恥に悶える全裸緊縛 略号△とな▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 四〇〇円

ホステスの緊縛姿態 略号△とな▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△とな▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 四〇〇円

二つ折り責める女体 略号△とな▽ 四〇〇円

佐々木真弓 略号△とな▽ 四〇〇円

脈打つ全裸の臨月腹 略号△とな▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△とな▽ 四〇〇円

中河恵子 略号△とな▽ 四〇〇円

臨月腹の革紐股間縛り 略号△とな▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△とな▽ 四〇〇円

中河恵子 略号△とな▽ 四〇〇円

猿轡の臨月妊婦腹縛り 略号△とな▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△とな▽ 四〇〇円

中河恵子 略号△とな▽ 四〇〇円

卓上の股間縛り狂態 略号△とな▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△とな▽ 四〇〇円

長井葉津子 略号△とな▽ 四〇〇円

羞恥の足挙げ責め 略号△とな▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△とな▽ 四〇〇円

長井葉津子 略号△とな▽ 四〇〇円



## 次号（十月号）は八月二十五日に発売いたします

たMの名作「マゾヒストの手帖」  
「夢想家の手帖」または創作、フ  
イクションなど出版されるよう望  
みます。世は正に復刻版ブーム。  
奇クにおいても、かつて出版され  
たM特集号などの再版ができない  
ものでしょうか。強く望みます。  
最近号は、ちょっとクリープのな  
いコーヒーのように感じます。M  
読物など特に八月号はイラストま  
で思わせぶりの感じがしました。  
本誌は全く倫理規定を忠実に守ら  
れている感じがします。最近の子供  
マンガの方がエスカレートしてハ  
レンチ度が大きいと思います。し  
かし編集部は努力はしています。あ  
くまでも本誌を当局の弾圧から守  
るため多少のソフトムードで押さ  
えて編集される点は認めます。現  
在の法規内のギリギリで、よりよ  
いM読物を掲載下さるようお願い  
いたします。  
(Mファン)

○

カメラハント「むら子恋狂い」  
の川路叢子さんは、辻村先生もお  
っしゃっているとおり、前回と比  
べて大変な変わりようです。叢子さ  
んの縛りに対するあこがれが前回

より強く出されているのが分か  
ります。辻村、塚本両先生に縛られ  
ては、叢子さんとしても、どうし  
ても最高の悦びを表わさないわけ  
にはいきませんまい。このハント写  
真を拝見すれば、なみのモデルで  
は到底つとまらぬ緊縛の極限に至  
る素晴らしいものです。これは叢子  
さんのM性が表面に出た縛りのポ  
ーズなのでしょう。ただ欲をいう  
と、本文の写真の写りが悪いこと  
で残念でなりません。叢子さん、  
これから、あらゆる姿を読者の  
皆様に見せていただくよう、おね  
がいたします。また宝塚二三夫氏の  
写真は、足を中心にした縛りが多  
いことは文中にも述べております  
が、この発表写真の中の十六ペー  
ジの写真は、およそ、宝塚氏の写  
真とは思えない写真です。Sとい  
う人間である以上、このような写  
真を……と感心して拝見しまし  
た。奇クサロンは、ますます盛況  
で、女性ファンも、かなり多く発  
表されてきました。ハントも大変  
ですが、つとめて多くの女性緊縛  
を誌上に載せて下さい。倉島辰子  
さんの乳房はまことに見事です。

この乳房を乳房責めにおねがいし  
ます。  
(埼玉・阪東太郎)

○

M女性の方、ぼくとプレイして  
みるつもりはありませんか。ぼく  
は二十三才のSであります。ま  
だプレイの経験はありません。で  
すから、最初のうちは貴女を満足  
させることができぬかもしれませ  
んが、努力をして満足させるよう  
にするつもりです。では、ぼくの  
行なうプレイを書いてみます。ま  
ず貴女には全裸、もしくはストッ  
キングだけになってもらいます。  
そして股間縛り、後手乳房縛りに  
してその上からコートを着ただけ  
の姿で散歩したり映画を見たりし  
ます。なるべく人通りの激しい道  
路を通り、貴女の二三メートル後  
方を歩いて貴女の様子を見れば、  
貴女も興奮するでしょう。その他  
海老責め、あぐら縛り、開股縛り  
や、仰臥で足を強く屈曲させて頭  
上の両手をまとめて縛り、浣腸し  
てあげましょう。数分間は我慢さ  
せます。この他、剃毛も行いたい  
と思います。剃毛も完全ならば、  
かえって清潔感があらわれると思  
います。この他、いろいろと行い  
たいと考えていますが、ぼくの考  
えに同調してくれるM女性の出現

を待っています。プレイバシーは  
固く守り、プレイ以外のことは何  
も要求しないことを約束します。

(神奈川・川田邦雄)

○

小生は結婚後三年の二十九才の  
者です。毎月、読者通信を楽しく  
読んでいます。私達夫婦は皆様方  
と違った趣向で楽しんでるので  
お知らせいたします。骨折の時に  
用いる石膏ギブス包帯で妻の腰か  
ら足の指先まで固定し、数日間、  
寝たままでの生活をしています。先  
日は肩から指先までL字型にギブ  
ス固定し、首より大きな三角巾で  
吊るし、二人でデパートなど買物  
に行きました。ギブスで固定しま  
すと身体が自由がきかず悶える姿  
や真白く太く重く固定した姿は痛  
々しくて最高です。皆様も一度、  
どうですか。ギブス包帯は、つぎ  
のところ安く売っています。東  
京都文京区湯島二二オカダ医材  
品名、マジック・ギブス。東京都  
墨田区京島一―二、東京衛材KK  
品名、スピード・ギブス。

(東京都台東区・野村一)

○

佐野みさ子様。よいプレイ相手  
が見つかりましたでしょうか。あ  
なたの希望通りの方に巡り合えた



既刊雜誌在庫案内

御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりましたが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は△小包▽にて発送申し上げます。

[illegible]

着ているものを剥いでゆき、パン  
ティ一枚にしたあなたを後手に縛  
り上げ、身の自由を奪ってから最  
後のものを、ずり下ろしてしまう  
といった、やり方のほうがスリル  
もムードもあって、いいと思いま  
す。ロープも少し短いようです。  
もっと、ふんだんに使って、がん  
じがらめにしたほうがいいでしょ  
う。場所も室内より、本当は誰も  
人の来ない海岸の白砂、ごつごつ  
した岩の上、新緑のしたたる山中  
で木から吊るしたりしたほうが趣  
きがあるでしょう。あなたの一番  
恥かしいポーズをミラージュレン

ズで六重に写したり、ブルーやピンクの巾広のビニールテープで股間縛りをすれば、丁度ふんどしをして見えるように見えるでしょう。できれば、それをカラーで写してみたい。あなたが余りプレイずれない新鮮なうちに、一度ためてみたい。お互いのプライバシーの厳守と、あなたの肌に傷をつけるようなことはしないという堅い約束のもとに。よろしかったら、お便り下さい。

（東京世田谷・竹田）

小生は白足袋マニヤです。白足

袋をはいた女性を見ると、それだけで体中がうずうずして来ます。私自身も殆ど和服ばかりで白足袋を愛用しています。そして、白足袋をはいた女性を責めるのも好きです。白足袋に関する写真をお持ちの方、ぜひお譲り下さい。又白足袋を好む女性の方とも交際を望んで居ります。小生は社会的地位もあり、迷惑をかけるような事は致しません。美田富士男様も、白足袋マニヤとのこと、お便りを  
おねがいします。

(東京・逆井敏仁)



# 編集後記

○今月のカメラ・ハントは百枚を越すルポル  
タージュで辻村先生のご苦勞ぶりが眼に浮か  
ぶようです。先生の健筆を以てしても、長期  
に亘った事実を纏めるといふことは容易では  
なかったことと思います。きつとタフ？　な  
マゾ肌をもて余されたように、ペンも投げ出  
したくなられたのでは……？　と思うのはオ  
マエだけで、この稀代のM女のことは書き尽  
し難い、百枚で抑えるほうに苦勞した……と  
叱られるかも知れない気もしますが、いづれ  
にしても、ネッコロガッテTVのCMにニヤ  
ツイているようなわけにはゆかない事。いや  
どうも、お疲れさまでございました。  
○それにしても、谷山久美子なるマゾヒステ

インは、まことに不幸な女性と同情のほかは  
ありません。かくもSMに関する深い理解と  
実行力を兼ね備えたハンターたちの、愛戯と  
してのプレイ規範内では物足りないサガとな  
れば、いわゆる「プレイ」などはほんの軽い  
お茶漬けの味で、彼女が賞味するに足るお膳  
を賄い得る料理人となると、憎悪によるか、  
狂気じみた暴力者以外には稀有の存在といえ  
るのではないのでしょうか。いうところの「サ  
ディスト」と「S的遊戯愛好者」は「マゾヒ  
スト」と「被虐願望者」とは、似て非どころ  
か根本的に違うことをみせつけられた思い。  
彼女のために「稀有なるS男」氏の出現を祈  
っているものかどうかはわかりませんが、マ  
ゾ女にネを挙げさせられるというSM転倒現  
象も、また楽しというところでしょうか。

## 懸賞原稿募集

### 体験、告白、手記

読者の皆さまが自分で親し  
く体験されたことや、かくさ  
れた性癖や性向について語っ  
てみたいと思われたこと、或  
はこれだけ、どうしても書  
き残しておきたいと考えられ  
た事を大胆にお寄せ下さい。  
採用しました原稿には三千円  
以上の賞金を贈呈します。

### 創作、小説、物語

本誌の編集内容に適した特  
異な素材を駆使した力作をお  
待ちします。すべて自作の未

### 感想、論評、批判

本誌に関連したものでした  
ら話題の内容は問いません。  
忌憚なき皆さまの御意見を  
待ちします。採用篇には二  
千円以上の賞金を呈します。

### 映画、雑誌、通信

映画、雑誌、演劇、新聞、  
単行本或はその他見聞などで  
特に興味をお持ちになった事  
項の通信をお待ちします。出

発表作品に限りません。これは  
と思う作品は必ず誌上に取り  
上げます。腕試しの意味で奮  
って御投稿願います。採用篇  
には賞金十万円迄贈呈。

処は詳しく明記願います。採  
用篇には本誌三月分以上又は  
二千元以上の賞金贈呈。  
◎御送付下さいました原稿は  
原則として返却の求めに応じ  
ないことになっております故  
悪しからず御諒承願います。  
◎本文記事中に各種の「懸賞  
原稿募集」を致してあります  
故、御応募の方は項目を御明  
記の上御送稿下さい。

### 読者通信原稿

巻末の読者通信欄は読者の  
皆さま方のための公共の広場  
として開放してあります。御遠  
慮なくお寄せ下さい。

## ☆本誌御購読の榮☆

予約に限り  
一月分(1冊)三五〇円(送20円)  
三月分(3冊)一〇五〇円(送共)  
半年分(6冊)二一〇〇円(送共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書  
店にて一斉に発売いたしますが、入手困難  
の方は直接代金御送付の上、御予約下され  
ば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳  
重包装して確実に発送申し上げます。局留  
の方々は二十五日頃受領して下さい。

## 奇譚クラブ 定価 三五〇円

九月号 (第二十四巻第十号)  
(通刊第二百七十号)

昭和四十五年八月二十日 印刷  
昭和四十五年九月一日 発行

編集人 杉原虹児  
発行人 吉田稔  
印刷人 北村俊夫  
大阪住吉郵便局私書函第四十一号  
発行所 暁出版株式会社  
振替口座大阪四二七八三番  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(昭和四二年四月二一日)  
国鉄大局特別扱承認証第二二〇号

郵便番号558

## ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵  
の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の  
健全なる育成に努める各条例に指定されな  
いよう充分に注意して編集いたしました。ま  
すが、本来成人向として発行を企図してお  
り、下す関係上、十八才未満の方には絶対販  
売下さないよう、特にくれぐれもお願  
い申し上げます。